

公益財団法人鹿児島県文化振興財団
埋蔵文化財調査センター発掘調査報告書(27)

東九州自動車道(志布志IC～鹿屋串良JCT)建設に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

なが よし てん じん だん
永吉天神段遺跡 5
第2地点-3

(曾於郡大崎町)

縄文晩期・弥生・古墳時代編

第2分冊

2020年2月

鹿児島県教育委員会
公益財団法人鹿児島県文化振興財団
埋蔵文化財調査センター

総目次

【第1分冊】

巻頭図版（カラー）

序文

報告書抄録

例言

目次

第1章 発掘調査の経過

第1節 調査に至るまでの経緯

第2節 確認調査

第3節 本調査

第4節 調査の経過

第5節 整理・報告書作成

第2章 遺跡の位置と環境

第1節 地理・地質的環境

第2節 歴史的環境

第3節 志布志IC～鹿屋串良JCT間の遺跡

第3章 調査の方法と層序

第1節 調査の方法

第2節 層序

第4章 調査の成果

第1節 縄文時代晩期の調査

第2節 弥生時代の調査（～竪穴住居跡）

【第2分冊】

第2節 弥生時代の調査（土坑～）

第3節 古墳時代の調査

第4節 時期不明の掘立柱建物跡の調査

第5章 自然科学分析

第1節 自然科学分析の種類と目的

第2節 テフラ分析

第3節 放射性炭素年代測定（AMS測定）

第4節 種実同定

第5節 植物珪酸体分析

第6節 樹種同定

第7節 土器圧痕調査

第6章 総括

第1節 縄文時代晩期の調査

第2節 弥生時代の調査

第3節 古墳時代の調査

【第3分冊】

図版目次

図版

本文目次

【第2分冊】

第4章 調査の成果

第2節 弥生時代の調査（土坑～）… 1

第3節 古墳時代の調査… 146

第4節 時期不明の掘立柱建物跡の調査… 188

第5章 自然科学分析… 200

第1節 自然科学分析の種類と目的… 200

第2節 テフラ分析… 200

第3節 放射性炭素年代測定（AMS測定）… 209

第4節 種実同定… 215

第5節 植物珪酸体分析… 216

第6節 樹種同定… 220

第7節 土器圧痕調査… 223

第6章 総括… 230

第1節 縄文時代晩期の調査… 230

第2節 弥生時代の調査… 230

第3節 古墳時代の調査… 234

插图目次

【第1分册】

第1图	遺跡位置図		
第2图	周辺遺跡位置図	12	
第3图	東九州自動車道開通遺跡位置図	19	
第4图	基本土層図	23	
第5图	土層断面図(1)	23	
第6图	土層断面図(2)	24	
第7图	土層断面図(3)	25	
第8图	縄文時代晩期遺構配置図	26	
第9图	縄文時代晩期西部遺構配置図	27	
第10图	縄文時代晩期東部遺構配置図	28	
第11图	縄文時代晩期竪穴住居跡(1)	29	
第12图	縄文時代晩期竪穴住居跡(2)	30	
第13图	縄文時代晩期竪穴住居跡(3)	31	
第14图	縄文時代晩期竪穴住居跡(4)	32	
第15图	縄文時代晩期竪穴住居跡(5)	33	
第16图	縄文時代晩期土坑(1)	34	
第17图	縄文時代晩期土坑(2)	35	
第18图	縄文時代晩期～弥生時代前期 西部出土土器分布図	36	
第19图	縄文時代晩期～弥生時代前期 東部出土土器分布図	37	
第20图	縄文時代晩期土器(1)入佐式	38	
第21图	縄文時代晩期土器(2)入佐式	39	
第22图	縄文時代晩期土器(3)入佐式	40	
第23图	縄文時代晩期土器(4)入佐式	41	
第24图	縄文時代晩期土器(5)入佐式	42	
第25图	縄文時代晩期土器(6)入佐式	43	
第26图	縄文時代晩期土器(7)黒川式	44	
第27图	縄文時代晩期土器(8)黒川式	45	
第28图	縄文時代晩期土器(9)黒川式	46	
第29图	縄文時代晩期土器(10)黒川式	47	
第30图	縄文時代晩期土器(11)黒川式	48	
第31图	縄文時代晩期土器(12)黒川式	49	
第32图	縄文時代晩期土器(13)黒川式	50	
第33图	縄文時代晩期土器(14)黒川式	51	
第34图	突帯文土器(1)	57	
第35图	突帯文土器(2)	58	
第36图	突帯文土器(3)	59	
第37图	突帯文土器(4)	60	
第38图	突帯文土器(5)	61	
第39图	突帯文土器(6)	62	
第40图	突帯文土器(7)	63	
第41图	突帯文土器(8)	64	
第42图	突帯文土器(9)	65	
第43图	突帯文土器(10)	66	
第44图	突帯文土器(11)	67	
第45图	突帯文土器(12)	68	
第46图	突帯文土器(13)	69	
第47图	突帯文土器(14)	70	
第48图	突帯文土器(15)	71	
第49图	突帯文土器(16)	72	
第50图	突帯文土器(17)	73	
第51图	突帯文土器(18)	74	
第52图	突帯文土器(19)	75	
第53图	突帯文土器(20)	76	
第54图	突帯文土器(21)	77	
第55图	突帯文土器(22)	78	
第56图	突帯文土器(23)	79	
第57图	突帯文土器(24)	80	
第58图	突帯文土器(25)	81	
第59图	突帯文土器(26)	82	
第60图	突帯文土器(27)	83	
第61图	突帯文土器(28)	84	
第62图	弥生時代前期土器	85	
第63图	弥生時代東部遺構配置図	94	
第64图	弥生時代西部遺構配置図	95	
第65图	弥生時代竪穴住居跡1号	96	
第66图	弥生時代竪穴住居跡2号(1)	97	
第67图	弥生時代竪穴住居跡2号(2)	98	
第68图	弥生時代竪穴住居跡2号(3)	99	
第69图	弥生時代竪穴住居跡2号(4)	100	
第70图	弥生時代竪穴住居跡2号(5)	101	
第71图	弥生時代竪穴住居跡2号(6)	102	

第 72 图	弥生时代聚穴住居跡 2 号 (7).....	103	第 111 图	弥生时代聚穴住居跡 16 号 (3).....	143
第 73 图	弥生时代聚穴住居跡 3 号 (1).....	104	第 112 图	弥生时代聚穴住居跡 17 号 (1).....	144
第 74 图	弥生时代聚穴住居跡 3 号 (2).....	105	第 113 图	弥生时代聚穴住居跡 17 号 (2).....	145
第 75 图	弥生时代聚穴住居跡 3 号 (3).....	106	第 114 图	弥生时代聚穴住居跡 17 号 (3).....	146
第 76 图	弥生时代聚穴住居跡 4 号 (1).....	107	第 115 图	弥生时代聚穴住居跡 18 号 (1).....	147
第 77 图	弥生时代聚穴住居跡 4 号 (2).....	108	第 116 图	弥生时代聚穴住居跡 18 号 (2).....	148
第 78 图	弥生时代聚穴住居跡 5 号 (1).....	109	第 117 图	弥生时代聚穴住居跡 19 号 (1).....	149
第 79 图	弥生时代聚穴住居跡 5 号 (2).....	110	第 118 图	弥生时代聚穴住居跡 19 号 (2).....	150
第 80 图	弥生时代聚穴住居跡 5 号 (3).....	111	第 119 图	弥生时代聚穴住居跡 19 号 (3).....	151
第 81 图	弥生时代聚穴住居跡 6 号 (1).....	112	第 120 图	弥生时代聚穴住居跡 19 号 (4).....	152
第 82 图	弥生时代聚穴住居跡 6 号 (2).....	113	第 121 图	弥生时代聚穴住居跡 19 号 (5).....	153
第 83 图	弥生时代聚穴住居跡 6 号 (3).....	114	第 122 图	弥生时代聚穴住居跡 19 号 (6).....	154
第 84 图	弥生时代聚穴住居跡 7 号 (1).....	115	第 123 图	弥生时代聚穴住居跡 19 号 (7).....	155
第 85 图	弥生时代聚穴住居跡 7 号 (2).....	116	第 124 图	弥生时代聚穴住居跡 19 号 (8).....	157
第 86 图	弥生时代聚穴住居跡 7 号 (3).....	117	第 125 图	弥生时代聚穴住居跡 19 号 (9).....	158
第 87 图	弥生时代聚穴住居跡 8 号 (1).....	118	第 126 图	弥生时代聚穴住居跡 19 号 (10).....	159
第 88 图	弥生时代聚穴住居跡 8 号 (2).....	119	第 127 图	弥生时代聚穴住居跡 19 号 (11).....	160
第 89 图	弥生时代聚穴住居跡 8 号 (3).....	120	第 128 图	弥生时代聚穴住居跡 19 号 (12).....	162
第 90 图	弥生时代聚穴住居跡 9 号 (1).....	121	第 129 图	弥生时代聚穴住居跡 20 号 (1).....	163
第 91 图	弥生时代聚穴住居跡 9 号 (2).....	122	第 130 图	弥生时代聚穴住居跡 20 号 (2).....	164
第 92 图	弥生时代聚穴住居跡 9 号 (3).....	123	第 131 图	弥生时代聚穴住居跡 21 号 (1).....	165
第 93 图	弥生时代聚穴住居跡 10 号 (1).....	124	第 132 图	弥生时代聚穴住居跡 21 号 (2).....	166
第 94 图	弥生时代聚穴住居跡 10 号 (2).....	125	第 133 图	弥生时代聚穴住居跡 21 号 (3).....	167
第 95 图	弥生时代聚穴住居跡 10 号 (3).....	126	第 134 图	弥生时代聚穴住居跡 21 号 (4).....	168
第 96 图	弥生时代聚穴住居跡 10 号 (4).....	127	第 135 图	弥生时代聚穴住居跡 21 号 (5).....	169
第 97 图	弥生时代聚穴住居跡 10 号 (5).....	128	第 136 图	弥生时代聚穴住居跡 22 号.....	170
第 98 图	弥生时代聚穴住居跡 11 号.....	129	第 137 图	弥生时代聚穴住居跡 23 号.....	171
第 99 图	弥生时代聚穴住居跡 12 号 (1).....	130	第 138 图	弥生时代聚穴住居跡 24 号.....	172
第 100 图	弥生时代聚穴住居跡 12 号 (2).....	131	第 139 图	弥生时代聚穴住居跡 25 号 (1).....	173
第 101 图	弥生时代聚穴住居跡 12 号 (3).....	132	第 140 图	弥生时代聚穴住居跡 25 号 (2).....	174
第 102 图	弥生时代聚穴住居跡 13 号 (1).....	134	第 141 图	弥生时代聚穴住居跡 26 号 (1).....	176
第 103 图	弥生时代聚穴住居跡 13 号 (2).....	135	第 142 图	弥生时代聚穴住居跡 26 号 (2).....	177
第 104 图	弥生时代聚穴住居跡 14 号 (1).....	136	第 143 图	弥生时代聚穴住居跡 26 号 (3).....	178
第 105 图	弥生时代聚穴住居跡 14 号 (2).....	137	第 144 图	弥生时代聚穴住居跡 26 号 (4).....	179
第 106 图	弥生时代聚穴住居跡 14 号 (3).....	138	第 145 图	弥生时代聚穴住居跡 26 号 (5).....	181
第 107 图	弥生时代聚穴住居跡 15 号 (1).....	139	第 146 图	弥生时代聚穴住居跡 26 号 (6).....	182
第 108 图	弥生时代聚穴住居跡 15 号 (2).....	140	第 147 图	弥生时代聚穴住居跡 26 号 (7).....	184
第 109 图	弥生时代聚穴住居跡 16 号 (1).....	141	第 148 图	弥生时代聚穴住居跡 27 号.....	185
第 110 图	弥生时代聚穴住居跡 16 号 (2).....	142	第 149 图	弥生时代聚穴住居跡 28 号 (1).....	186

第 150 图	弥生時代堅穴住居跡 28 号 (2)……………	187
第 151 图	弥生時代堅穴住居跡 29 号 (1)……………	188
第 152 图	弥生時代堅穴住居跡 29 号 (2)……………	189
第 153 图	弥生時代堅穴住居跡 30 号 (1)……………	190
第 154 图	弥生時代堅穴住居跡 30 号 (2)……………	192
第 155 图	弥生時代堅穴住居跡 30 号 (3)……………	193
第 156 图	弥生時代堅穴住居跡 31 号 (1)……………	194
第 157 图	弥生時代堅穴住居跡 31 号 (2)……………	195
第 158 图	弥生時代堅穴住居跡 31 号 (3)……………	196
第 159 图	弥生時代堅穴住居跡 32 号……………	197
第 160 图	弥生時代堅穴住居跡 33 号 (1)……………	199
第 161 图	弥生時代堅穴住居跡 33 号 (2)……………	200
第 162 图	弥生時代堅穴住居跡 33 号 (3)……………	201
第 163 图	弥生時代堅穴住居跡 33 号 (4)……………	202
第 164 图	弥生時代堅穴住居跡 33 号 (5)……………	203
第 165 图	弥生時代堅穴住居跡 33 号 (6)……………	204
第 166 图	弥生時代堅穴住居跡 33 号 (7)……………	205
第 167 图	弥生時代堅穴住居跡 33 号 (8)……………	207
第 168 图	弥生時代堅穴住居跡 33 号 (9)……………	209
第 169 图	弥生時代堅穴住居跡 34 号……………	210
第 170 图	弥生時代堅穴住居跡 35 号……………	211
第 171 图	弥生時代堅穴住居跡 36 号……………	212
第 172 图	弥生時代堅穴住居跡 37 号……………	213
第 173 图	弥生時代堅穴住居跡 38 号 (1)……………	215
第 174 图	弥生時代堅穴住居跡 38 号 (2)……………	216
第 175 图	弥生時代堅穴住居跡 39 号 (1)……………	217
第 176 图	弥生時代堅穴住居跡 39 号 (2)……………	218
第 177 图	弥生時代堅穴住居跡 40 号 (1)……………	219
第 178 图	弥生時代堅穴住居跡 40 号 (2)……………	220
第 179 图	弥生時代堅穴住居跡 40 号 (3)……………	221
第 180 图	弥生時代堅穴住居跡 41 号 (1)……………	223
第 181 图	弥生時代堅穴住居跡 41 号 (2)……………	224
第 182 图	弥生時代堅穴住居跡 41 号 (3)……………	225
第 183 图	弥生時代堅穴住居跡 42 号 (1)……………	226
第 184 图	弥生時代堅穴住居跡 42 号 (2)……………	227
第 185 图	弥生時代堅穴住居跡 43 号 (1)……………	228
第 186 图	弥生時代堅穴住居跡 43 号 (2)……………	229
第 187 图	弥生時代堅穴住居跡 43 号 (3)……………	230
第 188 图	弥生時代堅穴住居跡 43 号 (4)……………	231

第 189 图	弥生時代堅穴住居跡 44 号 (1)……………	232
第 190 图	弥生時代堅穴住居跡 44 号 (2)……………	233
第 191 图	弥生時代堅穴住居跡 45 号 (1)……………	235
第 192 图	弥生時代堅穴住居跡 45 号 (2)……………	236
第 193 图	弥生時代堅穴住居跡 45 号 (3)……………	237
第 194 图	弥生時代堅穴住居跡 45 号 (4)……………	238

【第 2 分冊】

第 195 图	弥生時代土坑 1 号……………	1
第 196 图	弥生時代土坑 2 ~ 4 号……………	2
第 197 图	弥生時代土坑 5 ~ 8 号……………	3
第 198 图	弥生時代土坑 9 ~ 13 号……………	4
第 199 图	弥生時代土坑 14 ~ 19 号……………	5
第 200 图	弥生時代土坑 20 ~ 24 号……………	6
第 201 图	弥生時代土坑 25 ~ 29 号……………	7
第 202 图	弥生時代土坑 30 ~ 34 号……………	8
第 203 图	弥生時代土坑 35 ~ 40 号……………	9
第 204 图	弥生時代土坑 41 · 42 号……………	10
第 205 图	弥生時代土坑 43 ~ 47 号……………	11
第 206 图	弥生時代土坑 48 ~ 50 号 · 溝状遺構……………	12
第 207 图	弥生時代周溝墓 1 号……………	13
第 208 图	弥生時代周溝墓 2 号……………	14
第 209 图	弥生時代周溝墓 3 号 (1)……………	15
第 210 图	弥生時代周溝墓 3 号 (2)……………	16
第 211 图	弥生時代周溝墓 3 号 (3)……………	18
第 212 图	弥生時代周溝墓 4 号 (1)……………	19
第 213 图	弥生時代周溝墓 4 号 (2)……………	20
第 214 图	弥生時代周溝墓 4 号 (3)……………	22
第 215 图	弥生時代周溝墓 5 号……………	23
第 216 图	F-27 区土器集中国……………	24
第 217 图	F-27 区周辺遺物出土分布图……………	25
第 218 图	F-27 区周辺出土土器 (1)……………	26
第 219 图	F-27 区周辺出土土器 (2)……………	28
第 220 图	F-27 区周辺出土土器 (3)……………	29
第 221 图	F-27 区周辺出土土器 (4)……………	30
第 222 图	F-27 区周辺出土土器 (5)……………	31
第 223 图	弥生時代土坑墓 1 号……………	32
第 224 图	弥生時代土坑墓 2 · 3 号……………	33
第 225 图	弥生時代土坑墓 4 ~ 6 号……………	35

第 226 图	弥生時代土坑墓 7·8 号	36	第 265 图	弥生時代中期 東部出土土器 (12)	76
第 227 图	弥生時代土坑墓 9 号 (1)	37	第 266 图	弥生時代中期 東部出土土器 (13)	77
第 228 图	弥生時代土坑墓 9 号 (2)	38	第 267 图	弥生時代中期 東部出土土器 (14)	78
第 229 图	弥生時代土坑墓 10~13 号	39	第 268 图	西部出土土器分布图	80
第 230 图	弥生時代土坑墓 14·15 号	40	第 269 图	西部出土土器 (1)	81
第 231 图	弥生時代土坑墓 16~18 号	41	第 270 图	西部出土土器 (2)	83
第 232 图	弥生時代土坑墓 19 号 (1)	43	第 271 图	西部出土土器 (3)	84
第 233 图	弥生時代土坑墓 19 号 (2)	44	第 272 图	西部出土土器 (4)	85
第 234 图	弥生時代土坑墓 20 号 (1)	45	第 273 图	西部出土土器 (5)	86
第 235 图	弥生時代土坑墓 20 号 (2)	46	第 274 图	西部出土土器 (6)	88
第 236 图	弥生時代中期 西部出土土器 (1)	47	第 275 图	西部出土土器 (7)	89
第 237 图	弥生時代中期 西部出土土器分布图	48	第 276 图	西部出土土器 (8)	91
第 238 图	弥生時代中期 西部出土土器 (2)	49	第 277 图	西部出土土器 (9)	92
第 239 图	弥生時代中期 西部出土土器 (3)	50	第 278 图	西部出土土器 (10)	93
第 240 图	弥生時代中期 西部出土土器 (4)	51	第 279 图	西部出土土器 (11)	94
第 241 图	弥生時代中期 西部出土土器 (5)	52	第 280 图	西部出土土器 (12)	95
第 242 图	弥生時代中期 西部出土土器 (6)	53	第 281 图	西部出土土器 (13)	96
第 243 图	弥生時代中期 西部出土土器 (7)	54	第 282 图	西部出土土器 (14)	97
第 244 图	弥生時代中期 西部出土土器 (8)	55	第 283 图	西部出土土器 (15)	98
第 245 图	弥生時代中期 西部出土土器 (9)	56	第 284 图	西部出土土器 (16)	99
第 246 图	弥生時代中期 西部出土土器 (10)	57	第 285 图	西部出土土器 (17)	101
第 247 图	弥生時代中期 西部出土土器 (11)	58	第 286 图	西部出土土器 (18)	102
第 248 图	弥生時代中期 西部出土土器 (12)	59	第 287 图	西部出土土器 (19)	103
第 249 图	弥生時代中期 西部出土土器 (13)	60	第 288 图	西部出土土器 (20)	104
第 250 图	弥生時代中期 西部出土土器 (14)	61	第 289 图	西部出土土器 (21)	105
第 251 图	弥生時代中期 西部出土土器 (15)	62	第 290 图	東部出土土器分布图	107
第 252 图	弥生時代中期 西部出土土器 (16)	63	第 291 图	東部出土土器 (1)	108
第 253 图	弥生時代中期 東部出土土器 (1)	64	第 292 图	東部出土土器 (2)	109
第 254 图	弥生時代中期 東部出土土器分布图	65	第 293 图	東部出土土器 (3)	111
第 255 图	弥生時代中期 東部出土土器 (2)	66	第 294 图	東部出土土器 (4)	112
第 256 图	弥生時代中期 東部出土土器 (3)	67	第 295 图	東部出土土器 (5)	113
第 257 图	弥生時代中期 東部出土土器 (4)	68	第 296 图	東部出土土器 (6)	114
第 258 图	弥生時代中期 東部出土土器 (5)	69	第 297 图	東部出土土器 (7)	116
第 259 图	弥生時代中期 東部出土土器 (6)	70	第 298 图	東部出土土器 (8)	117
第 260 图	弥生時代中期 東部出土土器 (7)	71	第 299 图	東部出土土器 (9)	118
第 261 图	弥生時代中期 東部出土土器 (8)	72	第 300 图	東部出土土器 (10)	119
第 262 图	弥生時代中期 東部出土土器 (9)	73	第 301 图	東部出土土器 (11)	120
第 263 图	弥生時代中期 東部出土土器 (10)	74	第 302 图	古墳時代遺構配置图	146
第 264 图	弥生時代中期 東部出土土器 (11)	75	第 303 图	古墳時代堅穴住居跡 1 号 (1)	147

第 304 図	古墳時代堅穴住居跡 1 号 (2) ……………	148	第 343 図	掘立柱建物跡 5 号 ……………	193
第 305 図	古墳時代堅穴住居跡 1 号 (3) ……………	149	第 344 図	掘立柱建物跡 6 号 ……………	194
第 306 図	古墳時代堅穴住居跡 1 号 (4) ……………	150	第 345 図	掘立柱建物跡 7 号 ……………	195
第 307 図	古墳時代堅穴住居跡 2 号 (1) ……………	151	第 346 図	掘立柱建物跡 8 号 ……………	196
第 308 図	古墳時代堅穴住居跡 2 号 (2) ……………	152	第 347 図	掘立柱建物跡 9 号 ……………	197
第 309 図	古墳時代堅穴住居跡 3 号 (1) ……………	153	第 348 図	掘立柱建物跡 10 号 ……………	198
第 310 図	古墳時代堅穴住居跡 3 号 (2) ……………	154	第 349 図	掘立柱建物跡 11 号 ……………	199
第 311 図	古墳時代堅穴住居跡 3 号 (3) ……………	156	第 350 図	重鉱物組成および火山ガラス比 ……………	201
第 312 図	古墳時代堅穴住居跡 3 号 (4) ……………	157	第 351 図	火山ガラスの屈折率 ……………	203
第 313 図	古墳時代堅穴住居跡 4 号 (1) ……………	158	第 352 図	斜方輝石の屈折率 ……………	203
第 314 図	古墳時代堅穴住居跡 4 号 (2) ……………	159	第 353 図	重鉱物 ……………	203
第 315 図	古墳時代堅穴住居跡 4 号 (3) ……………	160	第 354 図	軽鉱物 ……………	203
第 316 図	古墳時代堅穴住居跡 4 号 (4) ……………	161	第 355 図	重鉱物組成および火山ガラス比 ……………	208
第 317 図	古墳時代堅穴住居跡 5 号 (1) ……………	163	第 356 図	火山ガラス屈折率 ……………	208
第 318 図	古墳時代堅穴住居跡 5 号 (2) ……………	164	第 357 図	斜方輝石の屈折率 ……………	208
第 319 図	古墳時代堅穴住居跡 5 号 (3) ……………	165	第 358 図	重鉱物 ……………	209
第 320 図	古墳時代堅穴住居跡 5 号 (4) ……………	166	第 359 図	軽鉱物 ……………	209
第 321 図	古墳時代堅穴住居跡 5 号 (5) ……………	167	第 360 図	暦年較正年代 ……………	210
第 322 図	古墳時代土坑 1 号 ……………	168	第 361 図	マルチプロット図 ……………	212
第 323 図	古墳時代土坑 2 ～ 4 号 ……………	169	第 362 図	暦年較正年代 ……………	213
第 324 図	古墳時代土坑 5 ・ 6 号 ……………	170	第 363 図	暦年較正結果 ……………	215
第 325 図	古墳時代土坑 7 ・ 8 号 ……………	171	第 364 図	種実実体 ……………	216
第 326 図	古墳時代土坑 9 ・ 10 号 ……………	172	第 365 図	F-44 地点における植物珪酸体分析結果 ……………	220
第 327 図	古墳時代西部出土土器分布図 ……………	173	第 366 図	SI-22・26・27・28 における植物珪酸体分析結果 ……………	220
第 328 図	古墳時代西部出土土器 (1) ……………	174	第 367 図	永吉天神段遺跡の植物珪酸体 (プラント・オーバー) ……………	220
第 329 図	古墳時代西部出土土器 (2) ……………	175	第 368 図	石包丁 (拡大写真) ……………	220
第 330 図	古墳時代西部出土土器 (3) ……………	176	第 369 図	永吉天神段遺跡出土炭化材の走査型電子顕微鏡 写真 ……………	222
第 331 図	古墳時代西部出土土器 (4) ……………	177	第 370 図	永吉天神段遺跡の土器瓦痕 (1) ～ (6) ……………	226
第 332 図	古墳時代東部出土土器 (1) ……………	178	第 371 図	永吉天神段遺跡の土器瓦痕 (7) ～ (15) ……………	227
第 333 図	古墳時代東部出土土器分布図 ……………	179	第 372 図	永吉天神段遺跡の土器瓦痕 (16) ～ (24) ……………	228
第 334 図	古墳時代東部出土土器 (2) ……………	180	第 373 図	永吉天神段遺跡の土器瓦痕 (25) ～ (29) ……………	229
第 335 図	古墳時代東部出土土器 (3) ……………	181			
第 336 図	古墳時代東部出土土器 (4) ……………	182			
第 337 図	古墳時代須恵器 ……………	183			
第 338 図	掘立柱建物跡配置図 ……………	188			
第 339 図	掘立柱建物跡 1 号 ……………	189			
第 340 図	掘立柱建物跡 2 号 ……………	190			
第 341 図	掘立柱建物跡 3 号 ……………	191			
第 342 図	掘立柱建物跡 4 号 ……………	192			

表目次

【第1分冊】

第1表	周辺遺跡一覧表	13	第31表	放射性炭素年代測定結果 ($\sigma^{13}\text{C}$ 未補正值, 暦年較正用 ^{14}C 年代, 較正年代)	210
第2表	志布志IC~鹿屋串良JCT間の遺跡	15	第32表	測定試料および処理	212
第3表	縄文晩期遺構内出土石器観察表	52	第33表	放射性炭素年代測定および暦年較正の結果	212
第4表	縄文晩期遺構出土石器観察表	52	第34表	放射性炭素年代測定・暦年較正結果	215
第5表	入佐式土器観察表	52	第35表	種実同定結果	216
第6表	黒川式土器観察表	53	第36表	永吉天神段遺跡における植物珪酸体分析結果	219
第7表	突帯土器観察表	86	第37表	永吉天神段遺跡出土炭化材の樹種同定結果	221
第8表	弥生時代前期土器観察表	92	第38表	土器瓦痕同定結果	226
第9表	縄文時代晩期遺構番号新旧比較表	93	第39表	土器瓦痕調査結果	229
第10表	弥生時代遺構番号新旧比較表	93			
第11表	古墳時代遺構番号新旧比較表	93			
第12表	掘立柱建物跡番号新旧比較表	93			

【第2分冊】

第13表	弥生時代住居跡・土坑・周溝墓出土石器観察表	121
第14表	弥生時代住居跡・土坑・周溝墓出土石器観察表	131
第15表	F-27区周辺出土石器観察表	133
第16表	弥生時代土坑墓出土石器観察表	134
第17表	弥生時代土坑墓出土石器観察表	134
第18表	弥生時代土坑墓出土鉄製品観察表	135
第19表	弥生時代中期西部出土石器観察表	135
第20表	弥生時代中期東部出土石器観察表	138
第21表	縄文時代晩期~弥生時代西部石器観察表	141
第22表	縄文時代晩期~弥生時代東部出土石器観察表	144
第23表	古墳時代住居跡・土坑出土石器観察表	184
第24表	古墳時代住居跡・土坑出土石器観察表	185
第25表	古墳時代西部土器観察表	186
第26表	古墳時代東部土器観察表	186
第27表	古墳時代須恵器観察表	187
第28表	テフラ組成分析結果	201
第29表	重鉱物・火山ガラス比分析結果	208
第30表	放射性炭素年代測定結果 ($\sigma^{13}\text{C}$ 補正值)	210

②土坑

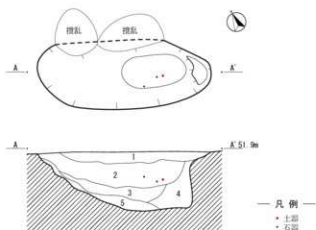
調査区内で多様な土坑が50基検出された。東側丘陵では、北側の斜面に1基、南西下がりの緩斜面に5基、南側の斜面に1基のあわせて7基がある。中央丘陵では、稜線付近に2基、南東側の斜面に5基ある。谷部では、北から南にかけて4基、西側斜面の削平部に1基のあわせて5基がある。西側丘陵では、頂部付近の周溝墓4号から南西にかけて緩斜面に広がる土坑墓群の中に9基、北側の緩斜面に竪穴住居跡43・44・45号にはさまれる形で23基のあわせて32基ある。

形状・規模など様々であるが、特に平面形が楕円形を呈するものには、長軸方向の一端の床面にピット状の狭い掘り込みを伴う特徴的な構造をもつ例が多かった。

帰属時期については、埋土中を含めて出土遺物が少なく判断に苦慮したが、その少ない出土例では弥生時代中期以前の遺物しかなかったことから、遺物が出土した土坑と特徴が類似する土坑を弥生時代中期頃とした。

土坑1号 (第195図 1135~1142)

F-49区のⅢ層で検出された。N 64°Wに軸をもち、平面形は楕円形を呈するが、一部攪乱を受けている。長径186cm、短径は想定で75cmほど、検出面からの深さは64cmである。底面は東側へ偏って掘られ、東壁には1段テラスがある。埋土は5層に分かれる。最下層は埋土4とアカホヤの混ざった黄褐色土だが、他は黒色砂質土を主とする。遺物は、埋土2・3から土器片が1点ずつ出土し、他は埋土1で出土している。土器は小破片のみで、甕(1135・1136)は口縁部上面が凹むものと肩部に3条の三角突帯のあるものがある。壺(1137~1140)は口縁端が幅広く、口唇部に浅い凹縁のあるものと、外反度の強い薄い口縁のものがある。胴部は丸みを帯びている。1141は小さい軽石製品で、表面中央に縦方向の溝状の凹みがある。1142は基部近くに抉りのあるホルンフェルス製の打製石斧である。刃部は摩耗している。



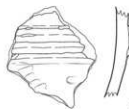
- 1 黄褐色砂質土
2 黒色砂質土 しまり強。池田降下軽石含む。
3 黒色砂質土
4 黒色砂質土
5 黄褐色土 4層とアカホヤの混土。

凡例
● 土器
○ 石器

0 1m
(1:40)



1135



1136



1137



1138



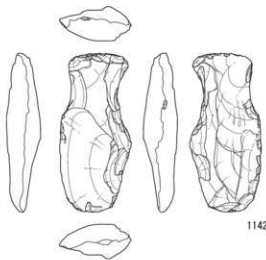
1139



1140



1141



1142

0 5cm
(1:3)

第195図 弥生時代土坑1号

土坑2号 (第196図 1143・1144)

F-50区のⅢ層で検出された。N 82° Eに軸をもち、平面形は不整形円形を呈する。長径113cm、短径88cm、検出面からの深さは21cmである。埋土は3層に分かれ、埋土2から土器片が出土している。1143は口縁部のやや下に無刻目突帯のある、波状口縁の突帯文土器の甕形土器である。1144は口縁端部に台形状の貼付突帯のある蓋形土器である。端部が広く欠損し、外にススが付着している。

土坑3号 (第196図)

F-50区のⅢ層で検出された。N 86° Wに軸をもち、平面形は不定形だが、略円形を呈する。径は約92cm、検出面からの深さは26cmである。遺物は、埋土1・2から弥生土器小破片が2点、埋土1から石器が1点出土しているが、流れ込みと考えられる。

土坑4号 (第196図)

E・F-49区のⅢ層で検出された。N 70° Eに軸をもち、平面形は隅丸長方形を呈すると推測されるが、東側の攪乱により判断できない。長軸は残っている部分で103cm、短軸73cm、検出面からの深さは19cmである。埋土は3層に分かれるが、主として黒褐色砂質土である。

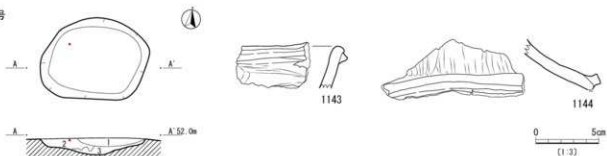
土坑5号 (第197図 1145・1146)

E-49区のⅢ層で検出された。N 2° Eに軸をもち、平面形はおおよそ隅丸方形を呈するが、北側はやや丸みを帯びている。長軸178cm、短軸90cm、検出面からの深さは40cmである。底面は凸凹しながら最深部の南側に至る。埋土は4層に分かれ、自然堆積である。土坑内からは多くの弥生土器や石片が出土したが、ほとんど小片であり、流れ込みである。図化できたのはいずれも甕形土器である。1145は口縁直径が24.5cm、口縁端部は水平で、内側にも張り出している。口唇部は内外とも丸みを帯びている。器面調整は内外ともハケナデで、内面は横方向、外面は斜方向である。外面のちにヘラでもナデている。1146も内外に水平に張り出す口縁部だが、口唇部外端には凹線が巡る。

土坑6号 (第197図)

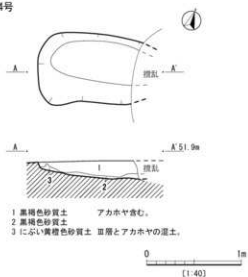
D-48・49区のⅢ層で検出された。N 81° Eに軸をもち、平面形はおおよそ隅丸長方形を呈する。長軸164cm、短軸104cm、検出面からの深さは32cmである。埋土は2層に分かれ、上層の埋土から土器の小片が2点出土しているが、流れ込みと考えられる。

土坑2号



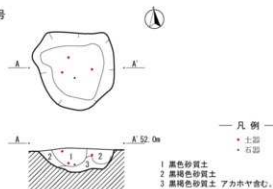
- 1 黒色砂質土
- 2 黒褐色砂質土
- 3 褐色土 アカホヤ火山灰。

土坑4号



- 1 黒褐色砂質土 アカホヤ含む。
- 2 黒褐色砂質土
- 3 にぶい黄褐色砂質土 Ⅲ層とアカホヤの混土。

土坑3号



- 凡例 —
- 土器
- 石器
- 1 黒色砂質土
- 2 黒褐色砂質土
- 3 黒褐色砂質土 アカホヤ含む。

第196図 弥生時代土坑2～4号

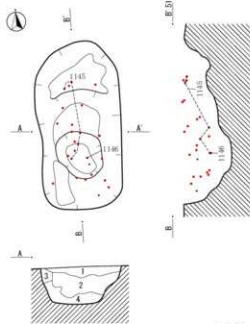
土坑7号 (第197図)

K-37区のⅢb層で検出された。N 38° Wに軸をもち、平面形は楕円形と推測されるが、中世の溝状遺構に切られているため確証はない。長径136cm、残存短軸約70cm、検出面からの深さは23cmである。底面には凹凸があるが傾斜はしていない。埋土は単一層である。遺物は出土しなかった。

土坑8号 (第197図)

J-38区のⅢb層で検出された。N 41° Wに軸をもち、平面形は略楕円形である。長径240cm、短径90~135cm、検出面からの深さは15~20cmである。底面は緩やかに波打ち、埋土は黒褐色土の単一層である。埋土中から胎土に雲母を含む弥生土器と考えられる小片が4点出土している。

土坑5号



- 1 黒褐色砂質土
2 黒色砂質土 しまり強。
3 褐色砂質土
4 黒色砂質土 アカホヤを含む。

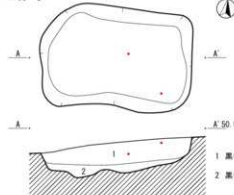
— 凡例 —

● 土器

○ 石部

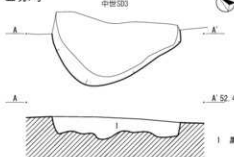
[1:40]

土坑6号

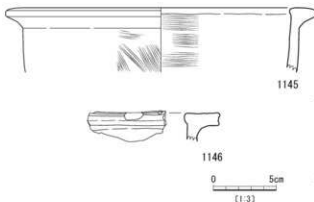


- 1 黒色砂質土 しまり強。
アカホヤ少量含む。
2 黒色砂質土 しまり弱。
アカホヤ少量含む。

土坑7号

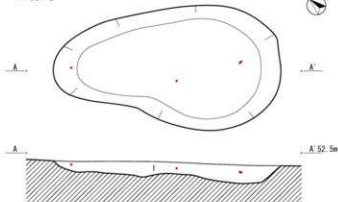


- 1 黒褐色土 しまりやや弱い、粘性なし。



[1:3]

土坑8号



- 1 黒褐色土 しまりやや強い、粘性普通。

— 凡例 —

● 土器

[1:40]

第197図 弥生時代土坑5~8号

土坑9号 (第198図)

J-38区のⅢb層で検出された。平面形は、おおよそ円形を呈する。径は112×105cm、検出面からの深さは10cmである。土坑中央部の床面から安山岩製の自然礫が出土しているが、流れ込みと判断される。

土坑10号 (第198図)

J-38区のⅢb層で検出された。平面形は円形を呈する。径は約110cm、検出面からの深さは41cmである。埋土は3層に分けられ、出土遺物はない。

土坑11号 (第198図1147・1148)

K-37区のⅢb層で検出された。N52°Wに軸をもち、平面形は隅丸長方形を呈する。長軸156cm、短軸79cm、検出面からの深さは54cmである。底面はほぼ平坦で断面は逆台形を呈する。埋土は黒褐色を主体とし、東西交互に埋められ、6層に分かれる。遺物は、弥生土器

と自然礫1点が出土している。土器は金雲母を含み、口縁部が「く」の字に屈曲し2条の三角突帯をもつことから、山ノ口Ⅱ式土器と思われる。

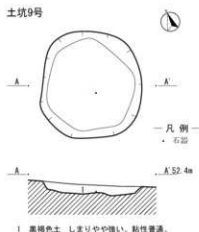
土坑12号 (第198図)

I-33区のⅣ層で検出された。平面形は円形を呈する。径は約80cmで、検出面からの深さは7cmである。埋土は黒色土の単層で、遺物は出土していない。

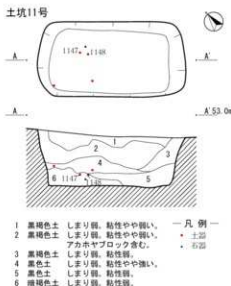
土坑13号 (第198図149)

L-32区のⅣa層で検出された。N45°Wに軸をもち、一部ゴボウ耕作による攪乱を受けているが、平面形は長さ110cm、幅80cmの隅丸長方形と想定される。底面はほぼ平坦で壁面は弯曲しつづつほぼ直立する。検出面からの深さは32cmである。1層は硬化面で、埋土は4層に分かれる。1149は口縁部が長く伸び反転する壺形土器で、内面に三角突帯が貼り付けられている。

土坑9号



土坑11号



1147

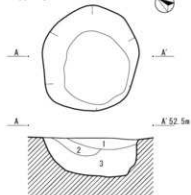
1148

0 5cm

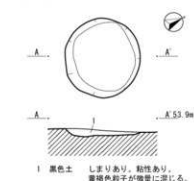
(1:33)

1149

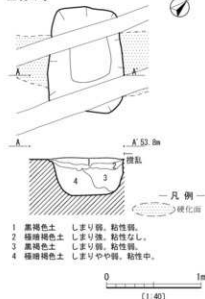
土坑10号



土坑12号



土坑13号



0 1m

(1:40)

第198図 弥生時代土坑9～13号

土坑14号 (第199図)

J-30区のⅢb層で検出された。平面形はおおよそ円形を呈する。長径65cm, 短径58cm, 検出面からの深さは23cmである。断面「U」字形に掘り込まれ、類似する15~17号に比べて立ち上がりがしっかりしている。遺物は出土していない。

土坑15号 (第199図)

J-30区のⅢb層で検出された。N44°Eに軸をもち、平面形は楕円形を呈する。長径70cm, 短径55cm, 検出面からの深さは15cmである。遺物は出土していない。

土坑16号 (第199図)

H-30区のⅢb層で検出された。平面形は楕円形を呈する。長径80cm, 短径75cm, 検出面からの深さは28cmである。逆台形の断面を呈し、埋土は黒色土と黒褐色土に分かれる。遺物は出土していない。

土坑17号 (第199図)

J-29区のⅢb層で検出された。平面形は円形を呈する。径は69×65cm, 検出面からの深さは11cmである。遺物は出土していない。

土坑18号 (第199図)

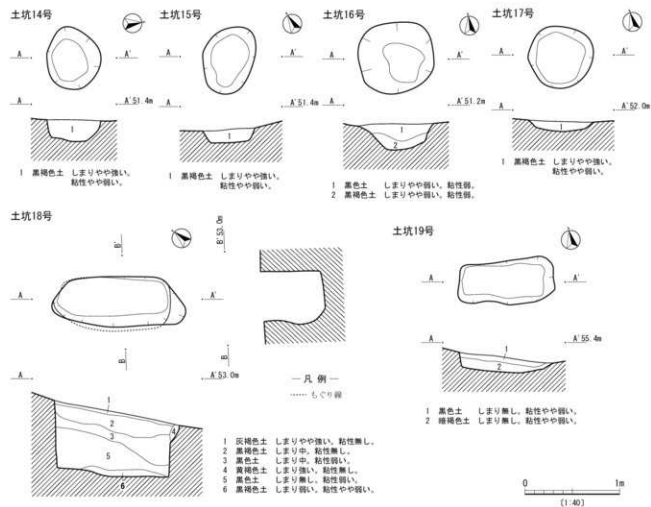
J-27区のⅢb層で検出された。N49°Wに軸をもち、平面形は楕円形を呈する。長径132cm, 短径54cm, 検出面からの深さは68cmである。壁面は北側から南西側にかけてオーバーハングしているが、ほぼ垂直に掘り込んでいる。埋土は、1層の灰褐色土に暗紫コラと推測される堆積物がみられた。埋土4は壁面が崩れたものと考えられる。遺物は出土していない。

土坑19号 (第199図)

J-26区のⅢb層で検出された。N78°Wに軸をもち、平面形は隅丸長方形を呈する。長軸100cm, 短軸47cm, 検出面からの深さは16cmである。埋土は2層に分かれ、上層が黒色土、下層が暗褐色土である。遺物は出土していない。

土坑20号 (第200図)

J-25区のⅢb層で検出された。N72°Wに軸をもち、平面形は楕円形を呈する。長径306cm, 短径122cm, 検出面からの深さは32cmである。遺構の東側に径81×74cmのピットがあり、底面からの深さは26cmである。埋



第199図 弥生時代土坑14~19号

土5はしまりが強くアカホヤ火山灰が不均等だが多量に混じっており、人為的に床面を形成したものと考えられる。埋土1~4はレンズ状の堆積状況を呈することから自然に流れ込んだものと考えられる。ピットに柱痕跡は確認されなかった。遺物は出土していない。

土坑 21号 (第200図)

I-25区のⅢb層で検出された。中世の溝状遺構1号によって切られている。N 67° Wに軸をもち、平面形は楕円形で断面形は逆台形を呈する。長径 122cm、短径 76cm、検出面からの深さは 38cmである。埋土は水平な堆積状況を呈し、黒褐色土と褐色土の2層に分かれる。遺物は出土していない。

土坑 22号 (第200図)

H-25・26区のⅢb層で検出された。N 73° Wに軸をもち、中世の溝状遺構10号に1/4ほど切られているが、平面形は楕円形と想定される。長軸は残存部で 105cm、短軸 54cm、検出面からの深さは 13cmである。埋土は暗褐色土で、微量にアカホヤの細かい粒を含む。遺物は出

土していない。

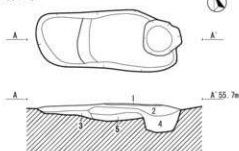
土坑 23号 (第200図)

H-26区のⅢb層で検出された。N 68° Eに軸をもち、平面形は楕円形を呈する。長径 108cm、短径 40cm、検出面からの深さは 16cmである。西端に径 32 × 25cmのピットがあり、底面からの深さは 28cmである。ピットが埋まってから土坑本体が埋まっている。遺物は出土していない。

土坑 24号 (第200図)

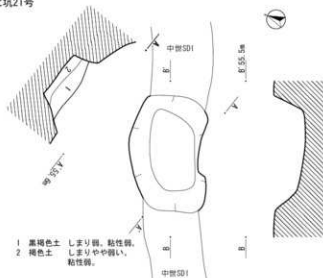
H-25区のⅢb層で検出された。軸はN 76° Eに軸をもち、平面形は楕円形を呈する。長径 139cm、短径 64cm、検出面からの深さは 24cmである。土坑の東端には径 48 × 38cmのピットがあり、底面からの深さは 46cmである。埋土は黒褐色土が大部分を占め、レンズ状に堆積していた。埋土3は、しまりが弱くアカホヤの混入が他の埋土と比べて多くみられ、柱痕跡はみられない。遺物は埋土1から土器片が1点出土している。

土坑20号



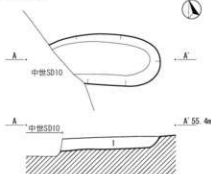
- 1 暗褐色土 しまり中、粘性やや弱い、
- 2 黒褐色土 しまり中、粘性普通、
- 3 暗褐色土 しまり中、粘性普通、
- 4 黒褐色土 しまりやや強い、粘性普通、
- 5 にふい黄褐色土 しまり強、粘性なし。

土坑21号



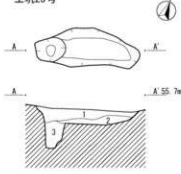
- 1 黒褐色土 しまり弱、粘性弱、
- 2 褐色土 しまりやや弱い、粘性弱、

土坑22号



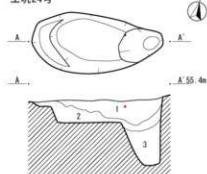
- 1 暗褐色土 しまり強い、粘性なし。

土坑23号



- 1 黒色土 しまり弱、粘性なし、
- 2 暗褐色土 しまり弱、粘性なし、
- 3 黒褐色土 しまり弱、粘性なし、

土坑24号



- 1 黒褐色土 しまり中、粘性弱、
 - 2 黒褐色土 しまり弱、粘性なし、
 - 3 暗褐色土 しまり弱、粘性なし、
- 一凡例一
● 土器

0 1m
(1/40)

第200図 弥生時代土坑20~24号

土坑 25号 (第201図)

G-26区のⅢb層で検出された。N 68° Wに軸をもち、平面形は楕円形を呈する。長径 111cm, 短径 54cm, 検出面からの深さは 25cmである。底面は地形の傾斜と異なりほぼ水平である。埋土は黒褐色土で、埋土3は遺構の側面が崩れたときに入ったものと考えられる。埋土1・2はしまりが強い。

土坑 26号 (第201図)

G-25区のⅢb層で検出された。N 74° Eに軸をもち、平面形は隅丸方形を呈する。長軸 111cm, 短軸 51cm, 検出面からの深さは 23cmである。南壁際に径 35 × 23cmのピットがあり、底面からの深さは 37cmである。土坑底面は、西端のみ一段高いが全体的にピットに向かって緩やかに傾斜している。埋土は黒褐色土の単層で、遺物は出土していない。

土坑 27号 (第201図)

G-25区のⅢb層で検出された。N 54° Wに軸をもち、平面形は楕円形を呈する。長径 92cm, 短径 43cm, 検出面からの深さは 20cmである。北東隅に径 44 × 29cmの

ピットがあり、底面からの深さは 64cmである。埋土は黒色土の単層で、遺物は出土していない。

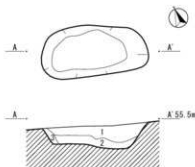
土坑 28号 (第201図)

F-25区のⅢb層で検出された。N 74° Wに軸をもち、平面形は楕円形を呈する。長径 132cm, 短径 47cm, 検出面からの深さは 12cmである。遺構の東側に径 49 × 39cmのピットがあり、底面からの深さは 39cmである。ピット下部の埋土2はアカホヤが多量にあることから、ピット上部側面が崩れたものと考えられ、本来の径は若干小さかった可能性がある。遺物は出土していない。

土坑 29号 (第201図)

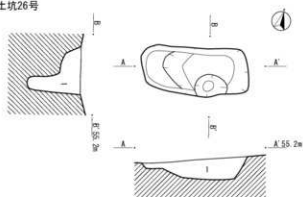
F-23区のⅢb層で検出された。N 39° Wに軸をもち、平面形は楕円形を呈する。長径 132cm, 短径 51cm, 検出面からの深さは 32cmである。遺構の南側には径 36 × 24cmのピットがあり、底面からの深さは 30cmである。堆積状況から想定すると、埋土2・3と埋土1では堆積時期が異なっていた可能性もある。遺物は出土しなかった。

土坑25号



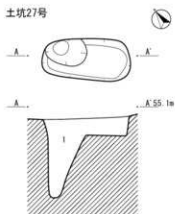
- 1 黒色土 しまり強、粘性なし。
- 2 暗褐色土 しまりやや強い、粘性なし。
- 3 黒褐色土 しまりやや弱い、粘性なし。

土坑26号



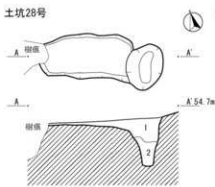
- 1 黒褐色土 しまりやや弱い、粘性やや弱い。

土坑27号



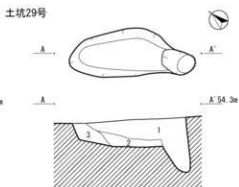
- 1 黒色土 しまりやや弱い、粘性弱。

土坑28号

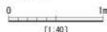


- 1 黒褐色土 しまり中、粘性やや弱い。
- 2 暗褐色土 しまりなし、粘性なし。

土坑29号



- 1 黒色土 しまり弱、粘性弱。
- 2 黒色土 しまりなし、粘性強。
- 3 暗褐色土 しまりなし、粘性なし。



第201図 弥生時代土坑 25～29号

土坑 30号 (第202図)

E-24・25区のⅢb層で検出された。ほぼ東西に軸をもち、平面形は楕円形を呈する。長径145cm、短径61cm、検出面からの深さは35cmである。東端に径30cmのビットがあり、底面からの深さは28cmである。このビットは、土坑中央に向かってやや斜めに掘られていた。遺物は出土しなかった。

土坑 31号 (第202図)

E-25区のⅢb層で検出された。N43°Wに軸をもち、平面形は楕円形を呈する。長径136cm、短径44cm、検出面からの深さは約10cmである。遺構の北東側に径27×25cmのビットがあり、底面からの深さは55cmである。埋土は黒褐色土で、遺物は出土しなかった。

土坑 32号 (第202図)

E-25区のⅢb層で検出された。ほぼ東西に軸をもち、平面形は楕円形を呈する。長径160cm、短径58cm、検出面からの深さは16~30cmで、底面は東へ向かって下降している。遺構の東側に径75×59cmのビットがあ

り、底面からの深さは35cmである。他のビット付土坑と比較してビットの径が大きい。遺物は出土しなかった。

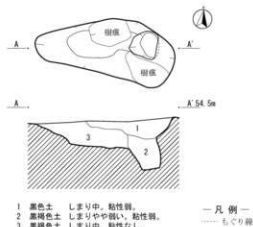
土坑 33号 (第202図)

E-25区のⅢb層で検出された。N54°Wに軸をもち、平面形は楕円形を呈する。長径100cm、短径52cm、検出面からの深さは12cmである。遺構の南側に径38×35cmのビットがあり、底面からの深さは50cmである。切り合いから土坑34号より新しい。埋土は黒色土の単層で、遺物は出土しなかった。

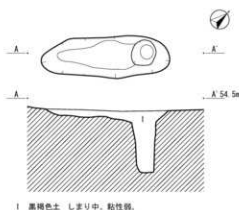
土坑 34号 (第202図)

E-25区のⅢb層で検出された。N49°Eに軸をもち、平面形は楕円形を呈する。長径141cm、短径39cm、検出面からの深さは10cmである。遺構の東側に径32×25cmのビットがあり、底面からの深さは51cmである。33号により中央部を破壊されている。33号と比較して、長径がやや異なる以外は、付属するビットを含めて平面・断面形状や深さがほぼ同じである。遺物は出土しなかった。

土坑30号



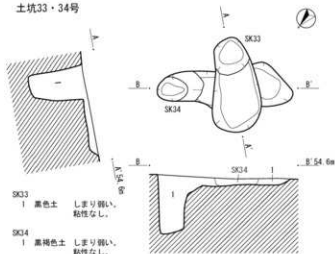
土坑31号



土坑32号



土坑33・34号



第202図 弥生時代土坑30~34号

土坑 35号 (第203図)

E-25区のⅢb層で検出された。N 44° Wに軸をもち、平面形は整った楕円形を呈する。長径 115cm、短径 62cm、検出面からの深さは 24cmである。遺構の南東側に径 38 × 36cmのピットがあり、底面からの深さは 58cmである。底面は、わずかに凸凹しながらピットに向けて下降している。遺物は出土していない。

土坑 36号 (第203図)

E-25区のⅢb層で検出された。N 12° Wに軸をもち、平面形は隅丸方形を呈する。長軸想定 109cm、短軸 53cm、検出面からの深さは 40cmである。遺構の南側に径 45 × 33cmのピットがあり、底面からの深さは 37cmである。遺物は、胎土に黒雲母を含む弥生土器の小片が数点出土している。

土坑 37号 (第203図)

D-25区のⅢb層で検出された。N 86° Eに軸をもち、

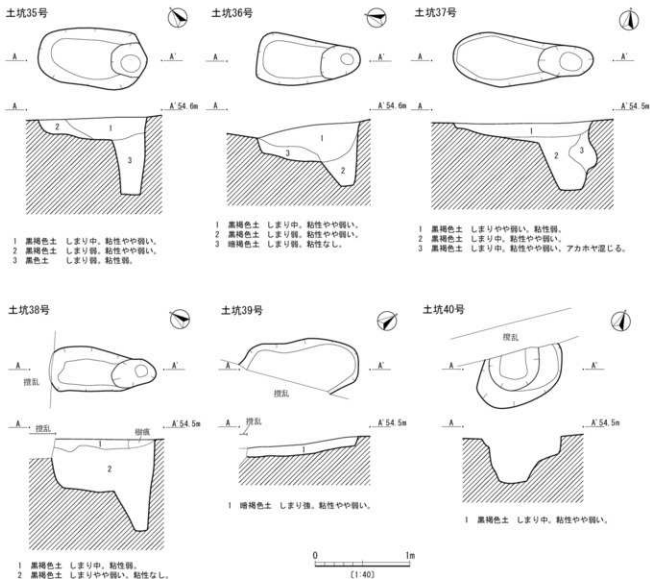
平面形は楕円形を呈する。長径 150cm、短径 56cm、検出面からの深さは 21cmである。遺構の東側に径 58 × 32cmのピットがあり、底面からの深さは 50cmである。土坑とピットは、長軸方向が一致する。柱穴内にアカホヤの堆積層があったが、樹痕の影響と考えられる。遺物は出土しなかった。

土坑 38号 (第203図)

D-25区のⅢb層で検出された。N 33° Wに軸をもち、平面形は隅丸方形を呈する。長軸 110cm、短軸 47cm、検出面からの深さは 56cmである。遺構の南側に径 47 × 29cmのピットがあり、底面からの深さは 41cmである。他の同型の土坑と比べて著しく深い。遺物は出土しなかった。

土坑 39号 (第203図)

D-25区のⅢb層で検出された。N 21° Eに軸をもち、平面形は楕円形が想定されるが、遺構の南側が現代の溝で削平を受けているため判断できない。残存部分に



第203図 弥生時代土坑 35~40号

おける長径は127cm、短径46cm、検出面からの深さは17cmである。埋土は暗褐色土の単一層で、遺物は出土していない。

土坑40号(第203図)

D-25区のⅢb層で検出された。N45°Eに軸をもち、平面形は円形が想定されるが、遺構の北西側がゴボウ耕作による攪乱を受けているため判断できない。残存部分における長径は98cm、短径55cm、検出面からの深さは25cmであるが、底面は、西半がさらに20cmほど掘り込まれている。このような形状は40号のみである。埋土は黒褐色土の単一層である。遺物は出土していない。

土坑41号(第204図)

D-24区のⅢb層で検出された。N76°Eに軸をもち、平面形は楕円形を呈する。長径136cm、短径51cm、検出面からの深さは34cmである。遺構の東側に径51×32cmのピットがあり、底面からの深さは41cmである。遺物は出土しなかった。

土坑42号(第204図)

D-24区のⅢb層で検出された。N24°Wに軸をもち、平面形は楕円形を呈する。長径131cm、短径50cm、検出面からの深さは38cmである。遺構の東側に径39×37cmのピットがあり、底面からの深さは39cmである。この土坑も、38号ほどではないが比較的深い。

土坑43号(第250図)

E-24区のⅢb層で検出された。N58°Eに軸をもち、平面形は楕円形を呈する。長径101cm、短径62cm、検出面からの深さは33cmである。遺構の東側に径48×41cmのピットがあり、底面からの深さは40cmである。土坑44号と切り合っているが、前後関係は把握できなかつた。

た。遺物は出土しなかった。

土坑44号(第250図)

E-24区のⅢb層で検出された。N63°Wに軸をもち、平面形は楕円形を呈する。長径96cm、短径42cm、検出面からの深さは15cmである。遺構の東側にピットをもつが、攪乱により下端のみ検出した。土坑43号と切り合っており、遺物は出土しなかった。

土坑45号(第250図)

E-25区のⅢb層で検出された。N29°Eに軸をもち、平面形は楕円形を呈する。長径120cm、短径55cm、検出面からの深さは38cmである。西側が土坑46号により1/4程度切られている。遺構の北側にピットがあるが、現代の攪乱による削平を受けており1/3程度しか残っていない。残存部の径は29cm、底面からの深さは18cmである。遺物は出土しなかった。

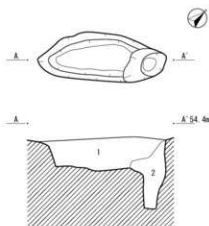
土坑46号(第250図)

E-24区のⅢb層で検出された。遺構北西部上端を現代の溝に切られている。N56°Eに軸をもち、平面形は楕円形を呈する。長径121cm、短径50cm、検出面からの深さは30cmである。遺構の西側に径45×36cmのピットがあり、底面からの深さは40cmである。遺物は出土しなかった。

土坑47号(第250図)

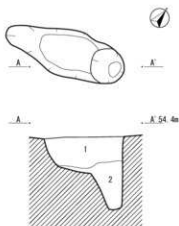
E-25区のⅢb層で検出された。N82°Eに軸をもち、遺構の北側は現代の攪乱による削平を受けているが、平面形は楕円形状を呈していると想定される。長径87cm、短径45cm、検出面からの深さは22cmである。土坑の両端にピットがある特徴的な構造をしており、西側の径は残存部で30×24cm、底面からの深さは30cmであり、

土坑41号



1 黒褐色土 しまりやや弱い、粘性弱。
2 暗褐色土 しまり弱、粘性弱。

土坑42号



1 黒褐色土 しまり中、粘性やや弱い。
2 黒褐色土 しまり弱、粘性やや弱い。

0 1m
(1:40)

第204図 弥生時代土坑41・42号

東側は径が35×26cm、底面からの深さは46cmである。遺物は出土しなかった。

土坑48号(第251図)

E-25区のⅢb層で検出された。N27°Eに軸をもち、平面形は楕円形を呈する。長径159cm、短径58cm、検出面からの深さは26cmである。南側に径62×50cmのビットがあり、底面からの深さは70cmである。他のビット付土坑と比べて、柱穴の大きさや深さが大きいのが特徴で、さらに北端には浅いが明瞭な段も設ける。柱穴の埋土は土坑の埋土より新しい。

遺物は、埋土1上部から胎土に黒雲母を含む弥生土器と考えられる土器片が1点出土している。

土坑49号(第251図)

E-24区のⅢb層で検出された。N65°Eに軸をもち、平面形は楕円形を呈する。長径122cm、短径48cm、検出面からの深さは約21cmである。遺構の東側に径45cmのビットがあり、底面からの深さは19cmである。床面は凸凹している。遺物は出土しなかった。

土坑50号(第251図)

E-24区のⅢb層で検出された。N9°Wに軸をもち、平面形は隅丸方形を呈する。長軸109cm、短軸46cm、検出面からの深さは16cmである。遺構の南側に径22×15cmのビットがあり、底面からの深さは25cmである。他のビット付土坑と比べてビットが小さい。埋土は4層に分かれるが、遺物は出土しなかった。

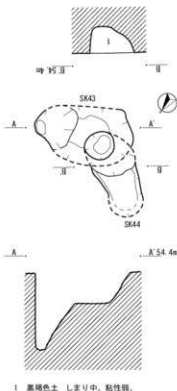
③溝状遺構(第206図)

H-44区のⅢa層で検出された。

規模は、検出範囲で長さ約4.8m、幅約0.5m、検出面からの深さは約17cmである。中央丘陵東側の弥生の集落跡から傾斜面を南東方向に走り、調査区外へと下っている。上端のライン全体に1枚目の硬化面がみられ、面を剥いだところ埋土があり、それを10~15cm程度掘り下げたところで2枚目の硬化面が検出された。2枚目硬化面の範囲は、平面図下端ラインがほぼ符合する。埋土は黒褐色土単層で、しまりが強い。

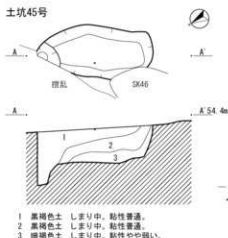
遺物は、1枚目の硬化面から弥生土器片が2点出土し

土坑43・44号



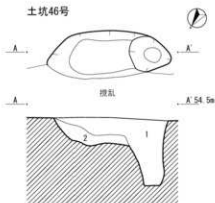
1 黒褐色土 しまり中、粘性弱。

土坑45号



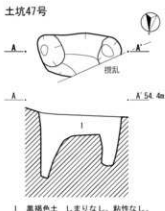
1 黒褐色土 しまり中、粘性普通。
2 黒褐色土 しまり中、粘性普通。
3 暗褐色土 しまり中、粘性やや弱い。

土坑46号



1 黒褐色土 しまり強、粘性弱。
2 暗褐色土 しまり弱、粘性弱。

土坑47号



1 黒褐色土 しまりなし、粘性なし。



第205図 弥生時代土坑43~47号

たが、小片のため図化できなかった。

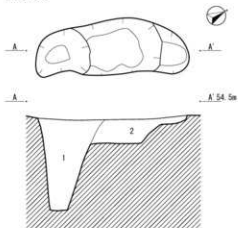
④周溝墓

周溝墓1号(第207図1050)

H-53区IV層で検出された。南東に下る緩傾斜面に立地しており、周溝の南端部分は攪乱により消失している。堅穴住居跡2号が隣接している。

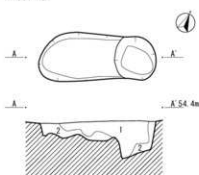
周溝の外径は長径4.5m(推定)、短径4.0mほどで、検出面での溝幅は0.4m弱である。平面形状は、北半が隅丸方形、南半が楕円形を呈する。周溝の内側で、遺構や遺物集中域などは発見されなかった。

土坑48号



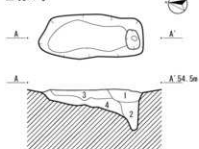
- 1 黒褐色土 しまり中、粘性やや弱い。
2 黒褐色土 しまり弱、粘性弱。

土坑49号



- 1 黒褐色土 しまり中、粘性やや弱い。
2 黄褐色土 しまりやや弱い、粘性やや弱い。

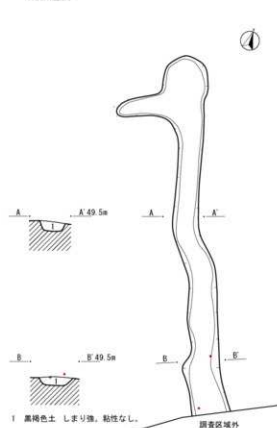
土坑50号



- 1 黒褐色土 しまり中、粘性弱。
2 黒褐色土 しまり中、粘性弱。
3 黄褐色土 しまりやや弱い、粘性やや弱い。
4 黒褐色土 しまり弱、粘性弱。



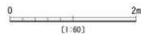
溝状遺構



- 1 黒褐色土 しまり強、粘性なし。

調査区域外

— 凡例 —
* 土器



第206図 弥生時代土坑48~50号・溝状遺構

溝の断面は、残存状況の良好な西側でみると、逆台形状あるいは「箱掘」に近い形状をしている。周溝の残存状況は、傾斜の上方にある西側及び北側が良好で東側は悪い。

埋土は、残存状況の良好な範囲では2枚に分層できた。いずれも周溝内側からの土砂流入を示している。

遺物は、周溝西側の埋土1から土器片が出土している。

1150は、山ノ口式土器の甕の口縁部と考えられる。口径36cmで、胴部の丸味が強い器形と想定される。口縁端部は、「V」字状の凹みが巡っている。肩部には、三角突帯が貼付されている。

周溝墓2号 (第208図 1151~1153)

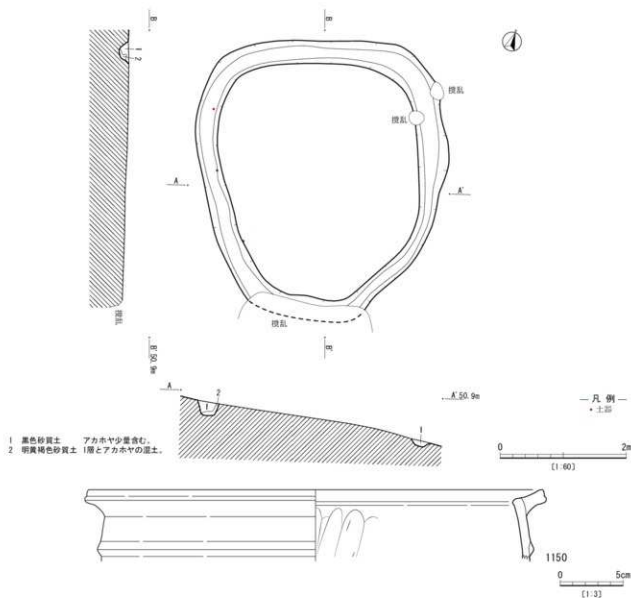
J-42区のⅢb層で検出された。長さ4.9m、検出面での溝幅は0.3m程度で、弧状の平面形状を呈する。断面は逆台形の形状である。環状の周溝を想定して周辺

を精査したが、地層の残存状況に特段問題はみられず、切り合う他の遺構も検出されなかったため、当初からこの形状であったと考えられる。

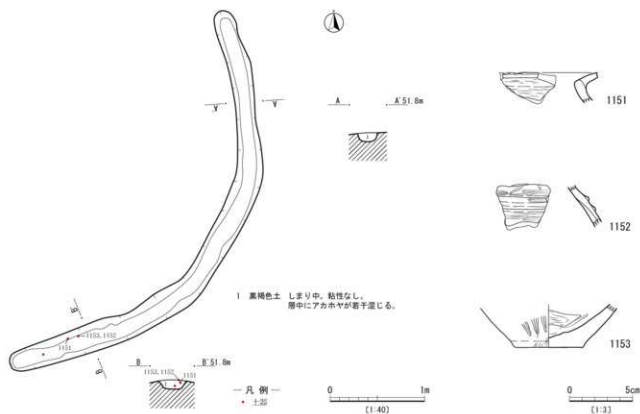
埋土は単層だが、遺物は埋土の中位～上位にかけて、弧の中心に近い側から出土した。

1151は小型壺の口縁部と考えられる。口縁部は、端部付近でわずかながら水平方向に角度を変えている。口縁端部は薄いが、凹線状の凹みが明瞭に施される。1152は小型壺の頸～肩部と考えられる。外面は、突帯まで含めて横位のミガキ調整で仕上げられる。内面は布状の工具による横ナデが施されている。1153は小型壺の底部である。底径5.5cmで、外面は縦位のミガキ調整が施されるが、暗文のような仕上げの部分が散見される。内面はヘラナデである。

なお、1151~1153は、出土地点が近接していること、



第207図 弥生時代周溝墓1号



第208図 弥生時代周溝墓2号

個々の胎土、焼成や色調が似通っていることから同一個体の可能性もある。

周溝墓3号 (第209~211図 1154~1164)

J-42区のⅢb層上面で検出された。周溝の外径で6.0~6.3m、検出面での溝幅は0.8m程度で、全体的には環状の平面形を呈するが、北端のみ角張っている。断面は逆台形あるいは「箱型」に近い形状であるが、場所によって差異があり統一されていない。

Ⅱb層掘り下げ中に、斜長石を含む土(分析の結果、間間岳起源の暗紫コラ)が5~10cm程度の厚さで環状にまわるような状況を見つけた。そのため、周溝墓の可能性を想定して環状の中心部一帯を精査したが、土坑や遺物集中域などは発見できなかった。また、当初確認した斜長石を含む土だけでは周溝の平面形の特定には至らず、やむなくⅢa層(池田降下軽石を含む)まで掘り下げたところ、プランを明確に捉えることができた。地形の現状はほぼ平坦だが、検出面からの溝の深さは、西側が東側よりも浅い傾向が看取された。

埋土は、斜長石を含む土を埋土1として最大3枚に分層できた。おおむねレンズ状の堆積状況を示していること、埋土1の残存状況が安定したものでなかったことから自然堆積により埋没したものと考えられるが(埋土1は、周溝が埋まる過程で生じた断続的な窪地部分に堆積したか)、土砂の流入方向などで推定することはできな

かった。

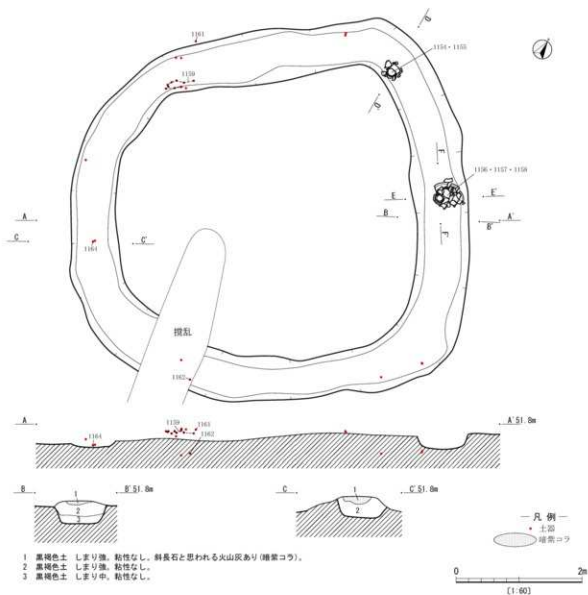
周溝内から多くの土器片が出土したが、周溝北東部で、土器集中箇所を2か所検出した。

北側のものは、周溝が角張る部分の底面近くで、大小1つずつの二又状口縁の鉢形土器が合わせ口(または入れ子)が外れたような状態で重なり合っていた(第210図上)。大きい鉢形土器は、割れていたが下側で周溝中心に向けて傾いており、小さい鉢形土器は、割れずに大きい方の内部で周溝外側に向けて傾いていた。大きい鉢形土器が割れた原因は不明である。

南側の集中箇所は、上記の集中箇所から2mほど離れた位置で検出され、周溝内の検出面から(埋土上位から)、割れていない短頸壺、割れた壺下半部、割れた変形土器の順に入れ子のようにきれいに重なっていた(第210図下)。こちらの割れた土器は放射状に割れ、部位の位置関係を保っていることから、意図的に割られた可能性が高い。

なお、周溝周辺で柱穴を検出したが、主に配置状況から周溝墓3号に関連するものとは判断できなかった。

1154は、1155とともに北側の土器集中箇所から出土した二又状口縁の鉢形土器である。口径15cm、底径7cm、器高11.5cmの完形品で、円盤状に整形した平底から直線的に開いて、胴部は張らずそのまま口縁部に至る器形である。口縁部は、胴部からの角度を変化させずに納めて

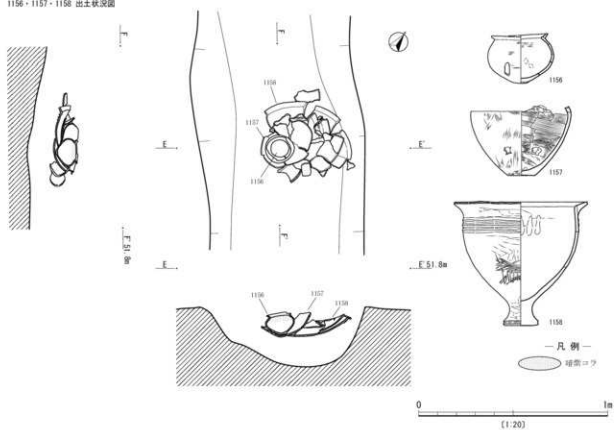
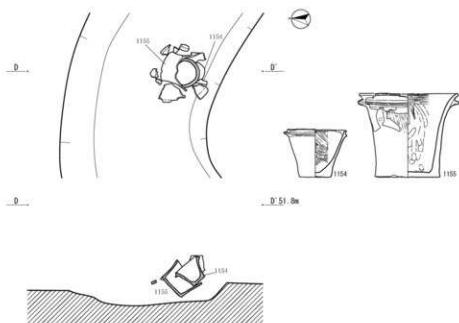


第209図 弥生時代周溝墓3号(1)

いるが、内面端部にヘラを強く当てて横ナデして外反しているような仕上げとし、やや下位に突出の強い三角突帯を貼付している。従って、二又状口縁とはいえ直口口縁に三角突帯を貼付した口縁部形状である。法量に比して胴部下端の器壁が厚い一方で、胴部から口縁部までは薄い。外面は、突帯下面から底部接地面まで含めて広く薄く剥落しており、調整の詳細が不明である。わずかに残る部分では縦位のハケナデが明瞭に見え、スガが付着している。突帯上面から口唇部にかけては剥落していない。内面は、底部は指頭押圧、胴部から口縁部下までは斜位のハケナデを明瞭に施す。この内面調整の工具は、法量の割に規格が大きいように見える。口縁端部は、器壁に合わせて細いが、凹線状の凹みを観察できる。上記した口縁内面の強い横ナデのあとに施されている。三角突帯は波打っており、全体の仕上げが具合と比べやや粗

い整形である。また、口縁上端が欠けている箇所が2か所あるが、ちょうど向かい合わせの位置にあり、欠損の程度も似通っている上、欠損部の形状からどちらも外面側からの加撃によって欠けている。意図的に欠いた可能性が想定される。

1155は、1154の下側にあった二又状口縁の鉢形土器である。口径23.5cm、底径16cm、器高20cmの完形品だが、口縁部の破片が少なかった。端部がやや張る平底から一旦軽く窄まって、口縁部に向けて緩く曲線的に外反していく器形である。胴部がわずかに張る場所もあるが、全体的には大型の二又状口縁壺の頭部から口縁部の形状を想起させる形状である。口縁部はラッパ状に外反し、その下位に水平に長く伸びる三角突帯が貼付される。器壁は、胴部下端が分厚く口縁部に向けて緩やかに薄くなっているが、厚さの変化の度合いは1154よりも穏や



第210図 弥生時代周溝墓3号(2)

かである。ただし、見た目の割に持ち重りがする土器である。器面は、二又状口縁部付近は横位のミガキ調整が施され、それより下位は外面が縦位のヘラナデで(部分的にミガキの様になっている)、内面が指オサエと外面と同じ工具による縦位のヘラナデで仕上げている。また、外面は突帯下部と胴部下半に表面が薄く剥落している範囲がみられるが、1154ほど著しくはない。口縁部は、断面略方形に整形して細沈線を施し、突帯部には、凹線状の凹みが浅く巡る。両者同じモチーフながら見た目を違えている。なお、残っている口縁部には、1154にあったような欠損部は確認されなかった。

1156は、1157・1158とともに南側の土器集中箇所出土した短頸壺である。3点のうちもとも上位にあった。経年変化によって器形にひずみが生じており、完全に接合しない。口径13.5cm、底径3cm、胴径16cm、器高12cmで、底部から胴部に向けて丸く張り出し、頸部に向けて張りを保ちながら窄まり、口縁部は断面三角形を呈し、わずかにしゃくれながら斜め上方に伸びる器形である。端部は薄く断面舌状に整えている。器壁は全体的に薄い。底部は、粘土を貼り足して平底となるよう整形している。外面は、横基調のミガキ調整を全体に施す。なお、胴部最大径辺りから頸部付近(上方から見て口縁部によって隠れる部分を除く)までは、器面の風化がそれ以外の部分より進んでいる。内面は、横方向のナデ調整であるが、下半は指頭押圧の痕跡をわずかに残す。胴部下半に、平面長楕円形の穿孔が1か所ある。内面に破損部が拡大していることから、焼成後に外側からの加撃により穿たれたものとわかる。また、内面の色調が口縁部上面まで黒色を呈している。色調にほぼ変化がみられないことから、意図的に着色した可能性が想定される。

1157は、壺の下半部である。3点のうち中位にあった。胴部最大径部分の接合面が破断面を揃えており、意図的に現状に加工している。胴径24cm、底径6.5cm、現器高16.5cmで、やや上げ底の底部からわずかに外張りをしつつ胴部に至る。胴部の張りは丸くというより緩く屈曲するという表現のほうが当てはまるような形状と想定される。底部は胴部よりも薄く、細長く突出させるような整形はない。器面は、外面が丁寧なナデ調整で、その上に縦位のミガキを不規則に(暗文風に?)加えており、内面は底部近辺に指オサエで他は斜位のハケナデを丁寧に施している。胴部下半に、平面略円形の穿孔が1か所ある。内面に破損部が拡大していることから、焼成後に外側からの加撃により穿たれたものとわかる。また、胴部最大径部分にはススの付着範囲があるが、破断面には付着が確認されない。

1158は甕である。最も下位にあった。口径31.5cm、底径8cm、器高29.5cm、脚高6cmの完形品である。器高に比してやや低めの脚部からわずかに張りつつ丸みの強い胴

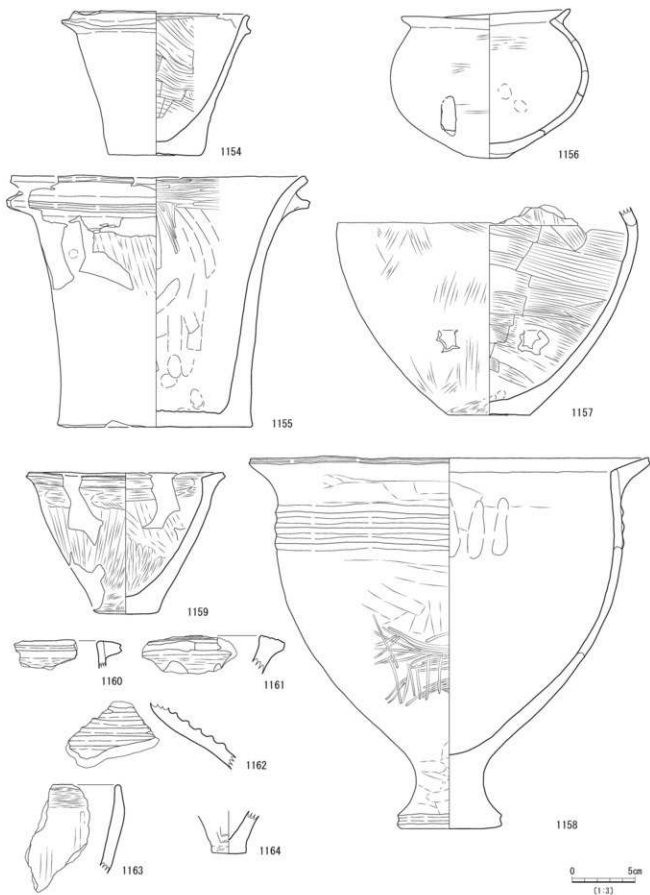
部に向かい、わずかに内傾して口縁部にいたる、全体的に丸みの強い印象を受ける器形である。口縁部は斜め上方に長く伸びる。屈曲部は、内面の稜が丸みを帯び、外面は曲線的に整形される。器壁は比較的薄く、底部から口縁部まではほぼ均一の厚さである。底部接地面は、わずかに丸みを帯びる。外面は、横位のナデ調整を主体に、胴部下半には横位のミガキ調整を加え、さらに部分的に縦位のミガキ調整も加える。内面は、横位のナデ調整を丁寧に施しているが、接合面付近は指オサエの痕跡が残る。口縁部並びに脚端部には、断面「V」字状の凹みがそれぞれ1条施されている(脚端部の方はやや粗い)。口縁部下に貼付される三角突帯は、貼り付けた粘土紐の接合部を均すための整形で終了しており、そのためあまり隆起せず頂部も丸みを帯びている。また、2条目と3条目の突帯は、頂部がやや下向きである。外面は胴部から口縁部にかけてススの付着が観察される。

1159は、北側土器集中箇所から南西に3mほど離れた溝内埋土2上位で、割れていたがまとまって(大半は周溝内壁沿いで、数点が周溝外壁近くから)出土した。口径15.5cm、底径5cm、器高11cmで、底部に脚があれば小型の甕形土器と言える器形である。「九平底」的な底部から胴部に向けて直線的に開き、口縁部下位でやや上向きに角度を変えて口縁部に至る。口縁部は内面のみわずかに内湾してから稜を形成して屈曲し斜め上方に短く伸びる。外面は曲線的に開いて端部にいたる。口縁上面は軽く凸レンズ状に整形され、端部は幅いっぽいに凹線状の凹みが浅く巡る。器壁は、法量に比して分厚いがほぼ一定で、胴部下端のみ厚みが増す。器面は、口縁部周辺のみ丁寧な横ナデで調整される。口縁部外面には、横ナデ調整の際についた工具の段差が残る。口縁部より下位は、外面が縦位のやや軽いヘラナデで、内面は底部付近が縦位のヘラナデが放射状に施され、胴部～口縁部下位付近は斜位のハケナデを丁寧に施す。内面の方が丁寧に調整されている。また、内面のハケナデに用いた工具は、法量と比べて規格が大きい。なお、口縁部に1154と類似した欠損部はみられなかったが、1156や1157にみられた穿孔の有無については、胴部に接合資料がなかった部分があり、不明である。

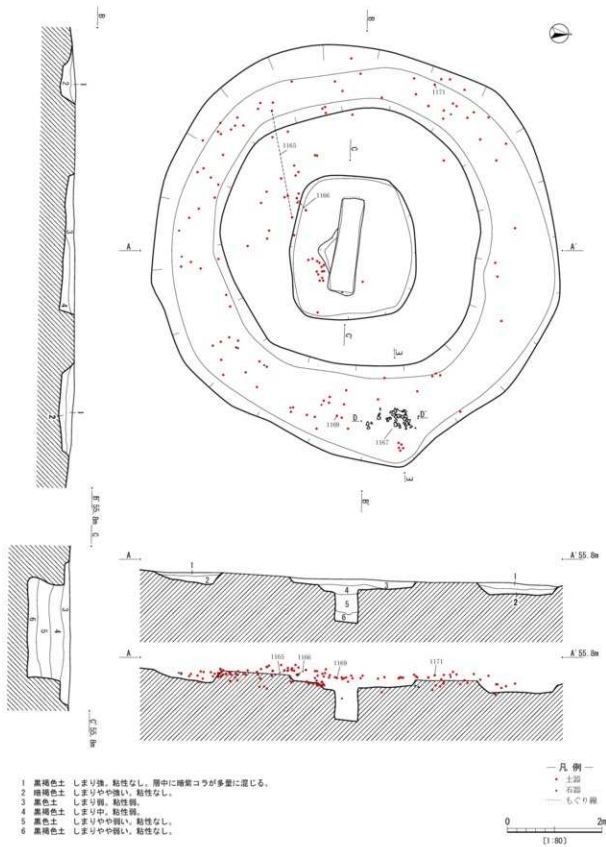
1160は入来Ⅱ式土器の甕と想定される。口縁部は水平に伸び、端部に凹線状の凹みを施す。

1161は壺の口縁部と想定される。上面に4条の平行する細沈線が施文されている。1159の近くで出土した。1162は壺の肩部で、明瞭に突出する三角突帯が6条残っている。溝内側の底面近くで出土した。

1163は鉢形土器の口縁部である。口縁部をヨコナデし、それより下位は内外ともにナデ調整のあと縦位のミガキを不規則に施す。胎土に雲母が見られない。1164は鉢形土器の底部と想定される。底径3cmで、想定され



第211图 弥生时代周满墓3号(3)



第 212 図 弥生時代周溝墓 4 号 (1)

る器形に比して器壁が厚いが、残存部の器面調整は内外面ともに丁寧である。外面の半分ほどの面積に黒斑が広がる。溝南西部の底面付近で出土した。

周溝墓4号(第212~214図1165~1173)

F・G-26・27区のⅢa層上面で検出された。調査区内における微高地(E~J-25~27区一帯)のほぼ頂部に位置しており、4号から南西の方向に土坑墓群がおおむね列状に連なっている。また、周辺には、Ⅱb層中で山ノ口式土器の集中出土箇所(第216・217図)があった。

Ⅲa層(黒色土)の掘り下げ中、アカホヤ混じりの土(主体部の埋土3)の広がりを発見するとともに、その周辺に包含層が乾燥した時にのみ、灰白色の暗紫コラと考えられる土(周溝の埋土1)が環状に巡っているのを発見した。この状況を踏まえて、一帯の掘り下げを精査に切り替え、色調の変化等をもとに掘り進めたところ、灰白色の土の部分については周溝状の遺構となった。アカホヤ混じりの土については、除去したところ浅い掘り込みとなったが、その掘り込みの床面中央に、Ⅱb層に類似するしまりの弱い土が長方形に残る部分(主体部の埋土4)を新たに確認した。この土を除去した結果、断面長方形の深い土坑を検出し、最終的に2段掘り構造を持った主体部であることが判明した。

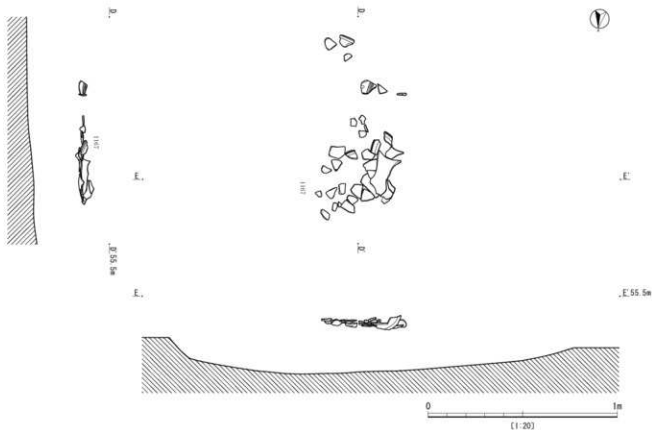
周溝は、外径で約8.5m、検出面での溝幅1.2~2.0m、検出面からの深さは約0.3mであり、平面形は環状で断面は逆台形状を呈する。規模の割には浅く、Ⅲb層中の池田降下軽石層を若干掘り込む程度だった。

2段掘り構造である主体部の規模は、浅くて広い1段目が長軸約3m、短軸約2.5m、検出面からの深さ約0.3mの平面隅丸長方形で断面皿状を呈し、狭くて深い2段目は長軸約2m、短軸約0.5m、検出面からの深さ約0.9mの、平面が長方形で断面は長軸面が略袋状と短軸面が長方形を呈する。

また、周溝と主体部の間にはⅢ層に該当する黒色土が堆積していた。墳丘等の検出も視野に精査したが、暗紫コラの検出といった不自然な土の堆積状況、硬化面の検出や遺物の一括出土状況など墳丘等の証明につながる発見には至らなかった。

周溝内の埋土は2枚に分層できた。上位の埋土1は、上部に暗紫コラが見える。埋土2は、Ⅱb層該当層と考ええる。おおむねレンズ状に堆積していた。

主体部の埋土は4枚に分層できた。そのうち、埋土4は1段目の一部にも堆積している。その下位の埋土5、6は分層されているが、特徴はほぼ同じで、各埋土ともおおよそ水平に堆積している。



第213図 弥生時代周溝墓4号(2)

遺物は、周溝東側で埋土1上位から横倒しになった二又状口縁壺を中心とする一括出土域が検出された(第213図)ほかは、主体部を含めて、特殊な遺物や個体復元可能な遺物などは出土せず、図化した破片資料についても、上位からの出土で包含層出土遺物と接合する例もあるといった状況であった。全体として、遺構の時期特定や遺構の構造から想定される用途を補強するような出土状況には恵まれなかった。ただし、おおまかな傾向として下位では入来Ⅱ式土器が多く、上位では山ノ口Ⅱ式土器が多い点をあげることができる。また、周溝内から朝鮮半島系無文土器との関連を想起させる口縁部(第214図1170)の口縁部も出土した。

1167は、周溝東側で1層上位から倒れた状態で割れていた壺である。口径22cm、胴径32.5cmで、底部は欠損しており不明である。胴部は最大径付近を境に下半は丸く張り、上半はやや直線的に頸部に向けて窄まる。頸部は伸びずすぐに口縁部に向けて外反する入来Ⅱ式土器の壺に一般的な器形である。一方、口縁部はやや特徴的な形状で、頸部の曲線を維持してさらにはほぼ水平に伸びて、端部のみやや下向する。器壁は頸部～口縁部がわずかに厚みを増すものの全体的に一定で、法量に比して薄い。外面は全体に縦位のミガキ調整で仕上げられ、内面は胴部下半が斜位のヘラナデで上半は指オサエで調整している。口縁部はヨコナデである。口縁端部には凹線状の凹みが浅く広く施されるほか、口縁部上端(端部が下向き始める辺り)に三角突帯が横位に1条貼付される。そのため、口縁部を横からみると凹線状の凹みが上下に2条巡っているかのように見える。胴部外面には、下半に黒斑がある。

1166は、1167の近隣で出土した、入来Ⅱ式土器の壺と考えられる。口径19cmで、器壁はやや厚い。器面は摩耗しており不明瞭だが、ナデ調整は施されているようである。口縁部は短くて丸みが強く、上面は平坦に整形するが下面は接合部の隙間を消し切れていない。1170も、1167の近隣で出土した。器壁は薄く、小型の壺と想定される。内外面ともヨコナデで調整しているが、器面各所に成形時の凹凸が残る。口縁部は、頸部粘土帯の端部を外側に折り曲げて断面三角形に整形しているが、下面は接合部が明瞭に残っておりナデ消し等の作業をしていない。また、色調にはぶい黄褐色を呈し、胎土に雲母を含まない。朝鮮系無文土器の製作情報が入り込んでいる可能性を想像させる。1171は入来Ⅱ式土器の壺の脚台と考えられる。周溝西側の埋土2で出土した。底径8cm、脚台高5cmで、低めである。接地面は、平底に整える意図があったようだがわずかに凸レンズ状を呈し、脚端部は面取り整形で仕上げている。

1165は、壺の口縁部と考えられる。周溝埋土の他、土坑墓2号の埋土や周溝墓4号周辺に散乱していた。口径

は50cm程度に及ぶと想定され、大型である。口縁内面は鋭く屈曲し、下向する口縁部上面は平坦に整えている。器面は内外ともに横基調のナデ調整だが、一部ミガキ状になっている部分もある。口縁端部には凹線状の凹みが巡るほか、口縁部上面には、整形のやや雑な縦位の短い三角突帯が3条1組で貼付されている箇所がある。1168は小振りの壺の口縁部と考えられる。主体部1段目南西角付近の埋土1及び4から出土した。口径20cmで、器壁は口縁部が頸部より厚い。器面は、口縁部及び頸部内面はヨコナデ、頸部外面は縦位のハケナデで調整されているが、口縁部上面にはケズリ状の仕上げで終わっている部分がある。色調に特徴があり、口縁部上面から頸部外面は特徴的な濃茶褐色、頸部内面は橙色を呈しており、双方の色調は屈曲部内面で漸移的に変化している。1169は壺の底部である。1167の出土域から1mほど南に離れた埋土2から出土した(包含層出土資料と接合)。底径6cmだが、漏斗状に広がる器形と厚さ約4cmに及ぶ底部の厚さから、ある程度の法量がある壺の底部と想定される。器面は内外ともに剥落が著しく詳細不明である。接地面も平底と考えられるが、剥落のため現状は凸凹している。

1172は打製石織である。周溝埋土1層から出土した。緻密な安山岩を素材とし、両方の脚端部を欠損する。長さ2.5cm、幅2cm、厚さ0.5cmである。

1173は打製石斧の基部である。埋土上層で出土した。ホルンフェルス製で、両側辺は浅く挟りが入る。再利用されたような痕跡はみられない。長さ6cm、幅7cm、厚さ2.5cm、重さ92.5gである。

周溝墓5号(第215図1174)

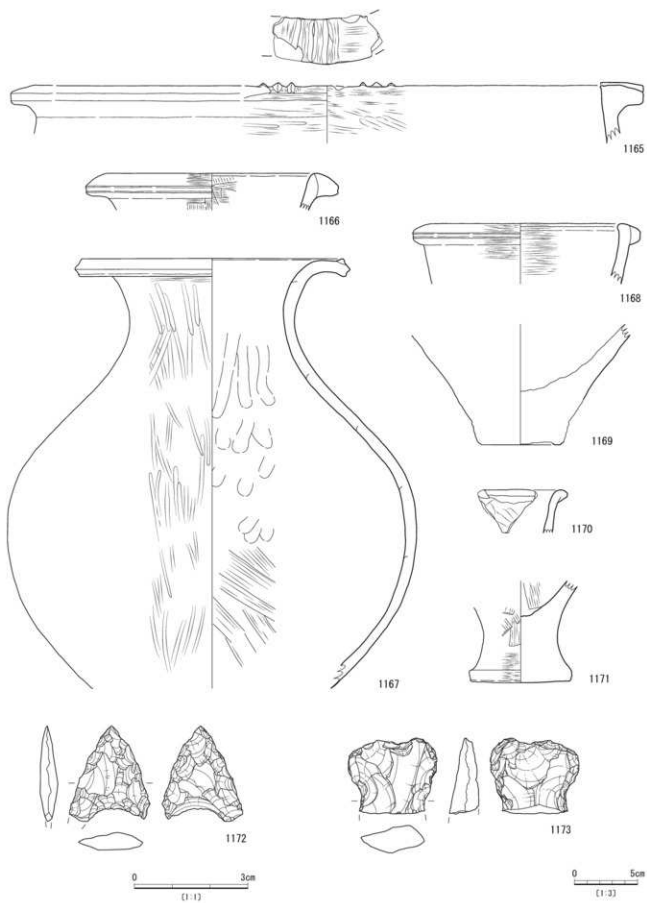
F-22・23区のⅢb層上面で検出された。一部が近世の溝で削平されているほか、中心部で検出した土坑も樹痕で覆乱されているが、かろうじて全形の把握だけはすることができた遺構である。

周溝は、規模が外形で長軸約4.5m、短軸約4m、検出面(削平部除く)からの深さ0.2mで、平面形は方形である。断面は「U」字状を呈する。

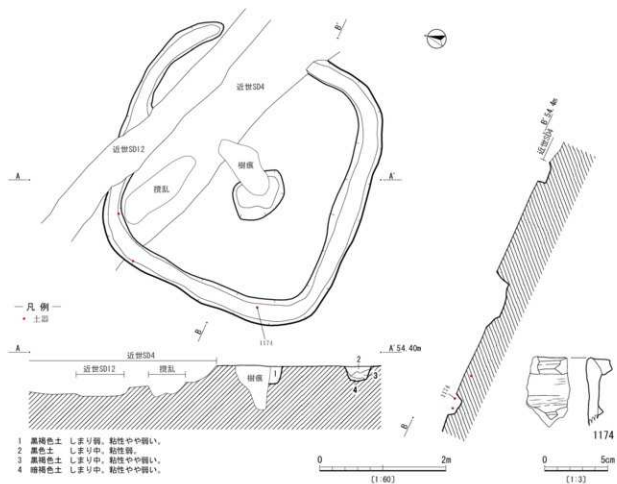
埋土は、3層に分けることができた。各層は斜交葉理状の堆積状況を示していることから、自然堆積により埋没したものと想定される。ただし、堆積方向の推定ができないため、墳丘の存在等も想定できない。

遺物は、埋土中から土器片(1174)が出土した。中心の土坑は、残存部で長径1.0m、短径0.7m、検出面(削平部除く)からの深さ0.3mである。

埋土は単層で、遺物は出土しなかった。以上の状況から、周溝墓3号や4号のような暗室コラは確認されていないが、近世の遺構に削平されていること、全体的な埋土の特徴が、他の周溝墓や弥生時代中期と比定できた遺構の埋土と類似することから、この遺構



第214图 弥生时代周满墓4号(3)



第215図 弥生時代周溝墓5号

も同時期のものと想定している。

1174は、入来Ⅱ式土器の甕の口縁部と考えられる。水平に屈曲する口縁部はごく短く、端部に凹線状の凹みが施される。1条残っている三角突帯は、口縁部寄りに貼

付され小振りである。小片のため詳細は不明だが、全形も小振りとなる可能性があるほか、焼成も他の甕よりかなり良好である。

⑤土器集中

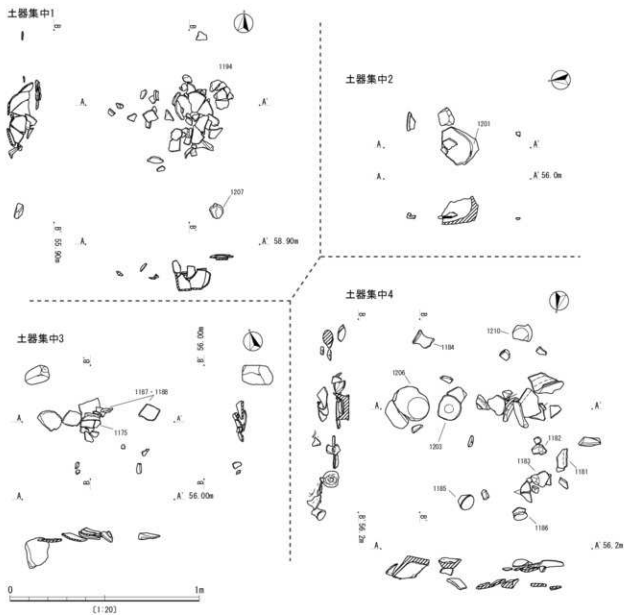
F・G-27区周辺では完形品や大型の破片が集中して出土した。当該区周辺は周溝墓、土坑墓などが多く立地し壺形土器が目立つことから、発掘調査時も慎重に調査を進め、残存状況が良い遺物については出土の状態を図化記録した。その結果、整理作業の段階で、土器の出土状態と周辺遺構との関連性について考慮すべき点が多いと判断し、出土した遺物に関連する明確な掘り込みなどは検出されなかったが土器集中として扱い、出土状況等を記載することとした。これらの遺物については準遺構扱いの遺物とし、同時にこれらと関連性が疑われるF・G-27区出土の遺物も合わせてここで掲載することとした。遺物の概要については、器種組成が明確となるように壺形土器、大型壺形土器、壺形土器の順に記載

する。

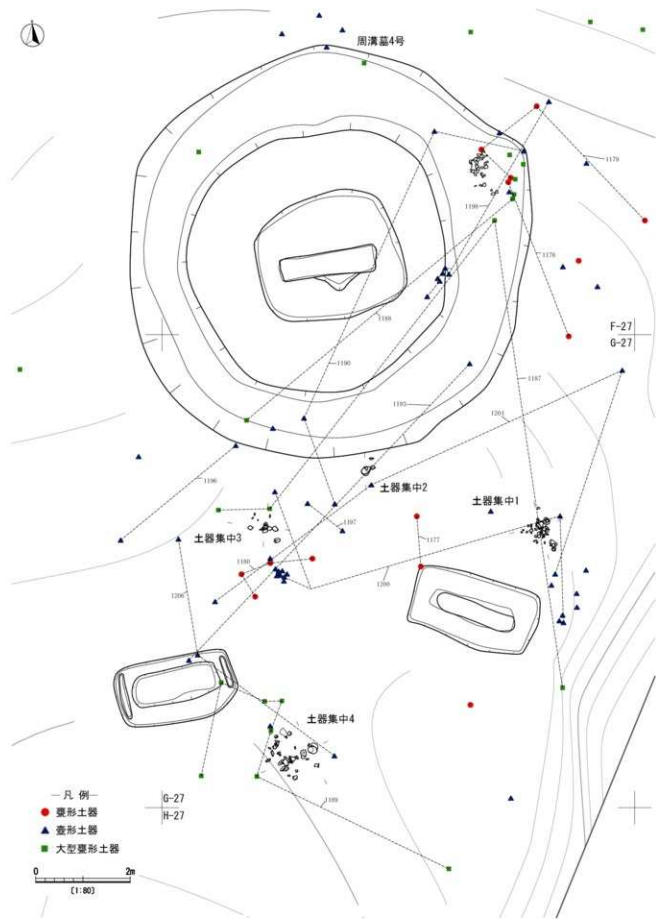
土器集中1は円形周溝墓4号と土坑墓1号の間で検出された。範囲はおおよそ径0.5mに収まる形であった。本集中域からは壺形土器の1194・1207が出土した。1194はほぼ完形に近い形で復元されたことや底部が接地した状態だったことから、意図的に安置された土器と推察される。

土器集中2は周溝墓4号の南側で検出された。土器集中1に比べて構成される土器数が少なく、範囲も径0.4mと小規模であるが、壺形土器の底部は残存状況が良かったため、土器集中として扱った。土器は壺形土器の口縁部及び底部で、特に底部資料は残存度合いが良好であった。

土器集中3は土器集中2から南西に1.2mの地点で検



第216図 F-27区土器集中図

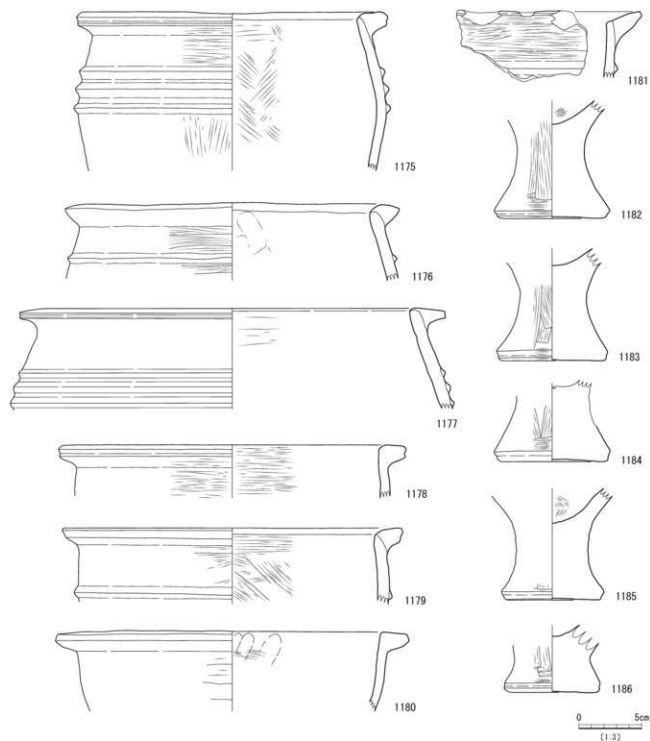


第 217 图 F-27 区周边遗物出土分布图

出された。土器 19 点で構成され、大型甕形土器、甕形土器が出土している。大型甕形土器は口縁部と胴部が出土しているが、底部はなく接合はできなかった。大型甕形土器は、本遺跡では出土数が少なく、土器集中が検出されている 27 区ライン周辺で見られたのが特徴的である。

土器集中 4 は土坑墓 2 号の南東約 1 m 地点で検出された。1.3 m × 1.0 m の径に収まる範囲で、甕形土器、壺

形土器で構成される。特に底部が多く、狭い範囲に甕形土器の底部 5 点、壺形土器の底部 2 点が見られることから、人為的な配置が示唆される状況である。また、近接して台石が 1 点出土している。当初、立石なども想定して調査を行ったが、検出レベルに差があることなどから包含層出土の石器として扱った（第 285 図 1733）。



第 218 図 F-27 区周辺出土土器 (1)

壺形土器 (第 218 図 1175~1186)

壺形土器は口縁部から底部までの 12 点を掲載する。口縁部の長さが短いものが主体である。

1175~1177 は胴部から口縁部に向かって内湾する器形で、胴部には三角突帯が巡る。

1175 は口径が 24.6cm で、胴部最大径付近に 3 条の三角突帯を貼り付ける。口唇には幅広の凹線が巡る。外面は突帯より上位は横方向のナデ、下位は縦方向ナデとなるが、磨耗による影響で判然としない。1176 は口径が 26.4cm である。口縁部は上面が丸みを帯び、全体に歪みが見られる。三角突帯は 1 条で、貼り付け後に横方向のハケナデ調整で器面を整えているため、突帯上にもハケ目が残る。1177 は 1175・1176 に比べ大きい土器で、口径が 27cm である。口縁部断面形は三角形を呈し、口唇部には凹線が巡る。胴部には 3 条以上の三角突帯が貼り付けられており、全体的に磨耗が激しい。

1178 は口縁部上面も含めてナデ調整が丁寧で端整である。口径は 27.6cm である。

1179 は口径 27cm で、口唇部をナデによって調整することで面取りされ、口縁部断面が三角形となる。1177 と類似する調整である。

1180 は突帯のない土器で、口径は 28cm である。口唇部は面取りされて直線的な稜が作出される。外面は丁寧な横ナデ調整が施されるが、内面は指頭痕が残る。

1181 は口縁が上向きに長くのびる。口縁部下はケズリ様のナデによって、膨らみをもつように稜が生まれ口唇部は細くなる。口縁部に近い位置に三角突帯が 1 条見られる。

1182~1186 は底部で、端部には凹線が見られる。底径は 6.9~8.5cm で、最も小さい 1186 を除いてほとんど同じ大きさである。

1182・1183 は底部を横方向にナデ調整した後、縦方向のハケナデ調整を施す。ともに被熱による影響が、内底部はやや黒色がかかる。1184・1185 は比熱による影響で外面が剥落している。1185 は特に剥落がひどく、粘土帯の接合箇所から薄皮上に器面が剝離し、調整は不明瞭である。1184 は部分的にハケナデ調整及びナデ調整が確認できる。1186 は他の底部に比べ底から内底部までの高さが低く、径も小さい。端部はやや丸みを帯びる。

大型壺形土器 (第 219 図 1187~1189)

3 点出土しており、1187・1188 は土器集中 3 から出土した。

1187 は口径が 54.4cm で、口縁部がやや内湾する器形である。胴部には 5 条の三角突帯が巡る。口縁部の形状は通常の壺形土器と変化がない。外面調整は突帯部下位が斜め方向のハケナデ調整なのに対して、上位は縦方向のハケナデ調整である。

1188 は 1187 に比べて器形が直線的に立ち上がる。突

帯の数は同数であるが、突帯上位の調整が横ナデとなる点が異なる。

1189 は口縁が細長く上向きにのびる。口径は 54.4cm で、胴部から口縁部に向かってゆるやかに広がり、胴部最大径からはほぼまっすぐ立ち上がる。突帯は断面三角形を呈し、口縁部径の位置まで張り出す。その下位には墨汁風の茶褐色の変色部分が認められるが、規則性がなく人為的な塗色の可能性は低い。外面はハケナデ調整の後、横ナデを施し、内面は横方向のハケナデ調整主体だが、一部ヘラナデがミガキ様となって光沢を帯びる。

壺形土器 (第 220~222 図 1190~1211)

1190~1211 は口縁部が逆「L」字状を呈すもの、無頸壺、長頸壺、広口口縁壺などがみられる。

1190~1193 は口縁部断面形が逆「L」字状となる。

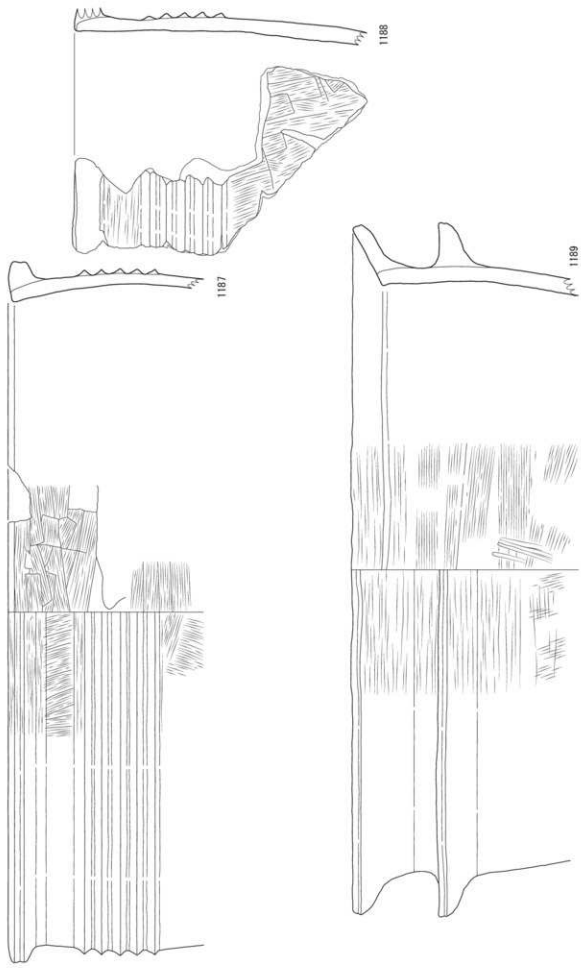
1190 は口径が 20.9cm の、口縁から肩部までの資料である。口縁は下がり気味の逆「L」字状を呈し、端部には凹線が巡る。肩部には 3 条の三角突帯が巡っていたと見られるが、1 条は完全に欠損し貼付痕のみが確認される。調整は外面がミガキ主体で、内面は工具ナデである。焼成が若干あまく、軟質のためミガキによる光沢がにぶい。1191 も口径 18.4cm の逆「L」字状の口縁で、肩部付近には 2 条の沈線が巡る。内外面ともにミガキ主体の調整だが、内面の頸部下位は斜めの工具ナデである。1192 は口縁部が欠損しているが、1190・1191 と同様な口縁部を有していたと考えられる。上記 2 点に比べ磨耗が激しく調整も不明瞭である。1193 は口縁部から胴部にかけて残存する。肩部から胴部にかけてはさほど張り出さない。口縁部は丸まり口唇部には凹線が巡る。口径は 15.2cm である。調整は内面、外面ともハケナデによって調整し、外面は横ナデとミガキによって最終調整することで精緻な器面を呈す。一方、内面は剥落によって不明瞭な部分が多い。

1194 は定形の壺形土器である。口径 14.8cm、器高 34cm、底径 5.4cm で、口縁部は厚手の断面三角形の粘土帯を貼り付けることで二又状となる。貼り付けた粘土帯と体部との接合部はナデつけられず隙間がみられる。胴部最大径はほぼ中央にあり、胴部の器形は球形に近い。底部は中央部を削り、上げ底とする。器面は磨耗して調整は判然としないが、外面は斜め方向のヘラナデ、内面は縦方向のヘラナデが若干確認できる。口縁部と体部の接合箇所調整がないことから、振刷系土器の製作技法の影響を受けた可能性が指摘できるものである。

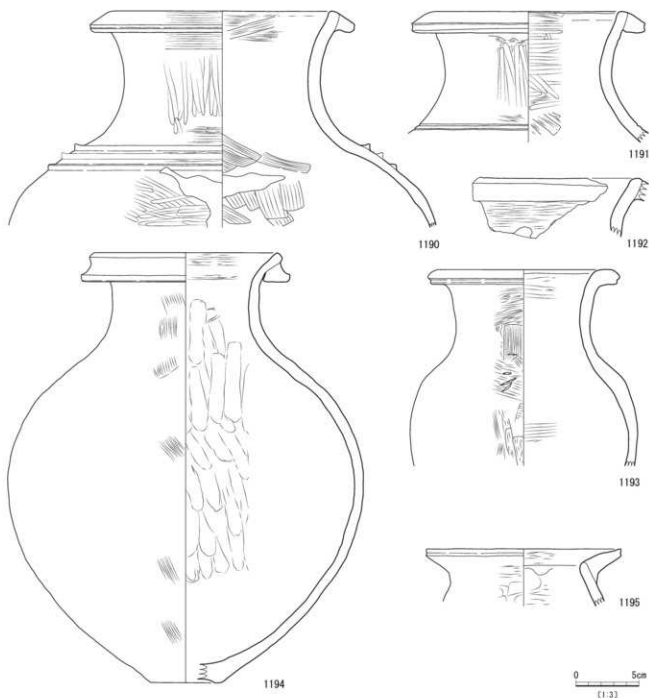
1195 は無頸の壺形土器で、口径は 16cm である。口縁部は細長くのびて、口唇部には凹線が巡る。横ナデ主体の調整である。

1196~1199 は長頸壺である。

1196 は胴部上半で 5 条の三角突帯が確認できる。内面の調整は縦方向のナデである。1197 は復元した胴部



第 219 图 F—27 区周边出土器物 (2)



第220図 F-27区周辺出土土器(3)

最大径が11cmで、同箇所には3条の三角突帯が貼り付けられ、さらに2cm上部に1条同種の突帯が確認できる。突帯間には、外からの打撃によって空けられた孔が見られる。1198は底部付近から頸部にかけての資料で、復元した胴部最大径が19cmである。いわゆる算盤珠状の形で胴部最大径および頸部付近に2条と6条の突帯が貼り付けられる。最下位にある突帯は、端部が面取りされ平坦になる。1199も1198同様胴部最大径の箇所突帯が貼り付けられる。突帯は2条で断面形状は「M」字状とな

る。2条の突帯という点と、幅広ではあるが、断面「M」字状突帯を意識した製作意図が見受けられる。胎土はきめ細やかで、横方向のミガキ調整が施される。

1200は広口縁の壺形土器である。土器自体では接合ができなかったため図上復元を行った。口縁部は大きく開いた形で、口径は36cmである。頸部は「く」の字状に屈曲して、胴部に向かって再度大きく張り出す。器厚は概して薄手で、焼成も良い。胴部最大径の箇所と頸部に三角突帯が1条ずつ貼り付けられる。胴部下半には頸

3cmほどの穿孔が2か所で確認できる。外面は横方向のナデ、内面はヘラナデ調整である。胎土中に石英と黒石を含み、明黄褐色の色調を呈すことや器形などから、搬入された土器と考えられる。

1201～1211は底部である。

1201～1204は底から内底部に厚みがあるもので上げ底となる。外面調整はヘラナデによるが、内面は剥離により観察できないものが多く1202・1204はかろうじて縦方向のヘラナデが確認できる。

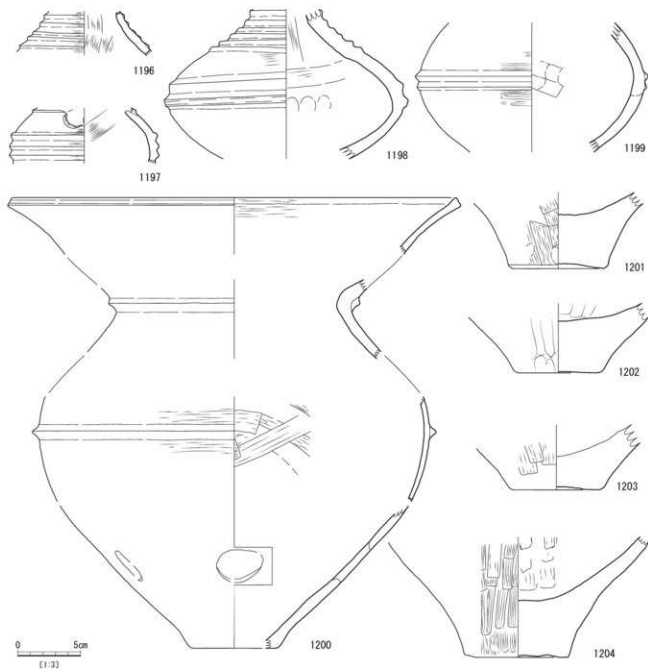
1205は底部から胴部にかけて残存する。胴部は張り出すため球形の器形と推察される。内外面ともヘラナデ

調整で、外面は一部光沢が見られるが、摩滅による影響が大きい。

1206は底径が11cmと最も大きい。底の端部は外にやや張り出す。内外面とも摩滅が激しく凸凹し、調整は不明瞭であるが、内面で部分的に横方向のヘラナデが観察できる。内底部は器面が剥離したことにより、凹形粘土盤と体部の粘土帯接合箇所に残り生じる。

1207は底端部がやや丸みをもつ。調整は摩滅により不明瞭である。胎土中に含まれる雲母が少なく石英が目立つ。

1208は上げ底となる。胎土がきめ細かく、外面に混和



第221図 F-27区周辺出土土器(4)

材が露出しにくい。外面は斜め方向のヘラナデ調整で、内面は剝離が多く判然としにくい。

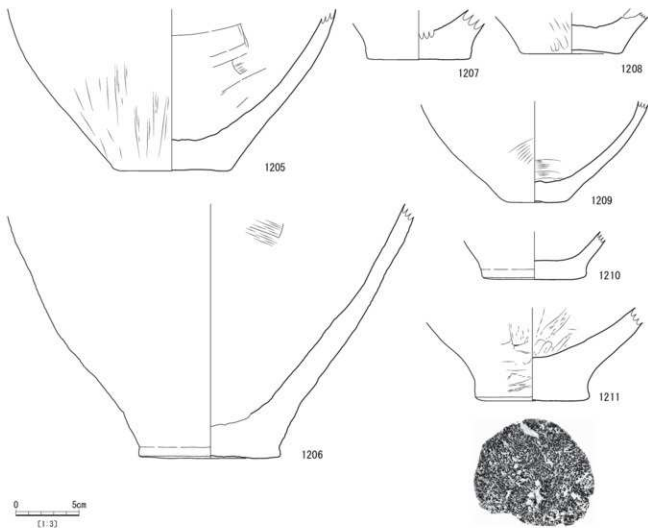
1209は1205に比べ小さいが、器形が類似する。胎土はキメが細かいが、摩滅により露胎し、鉍物粒が目立つ。内底部の粘土帯接合箇所は横ナデが見られる。

1210・1211は大きさが異なるが端部形状が類似する。1210は残存部位での観察では内底部が平坦で、直線的に外反する器形である。調整は摩滅により不明瞭である。1211はやや弯曲しながら外反する器形である。摩滅はあるものの、ヘラナデ調整が確認できる。底には不明瞭ながら布圧痕様の痕跡が確認できる。

⑥土坑墓

住居が集中する東区から谷を隔てた台地奥側（調査区西側）に位置する25～27区列付近の、丘陵のゆるやかな南西下りの稜線上に15基、西側の緩斜面に5基ある。

なお、ここに紹介する遺構は、一部を除き、個別の状況としては土坑墓と積極的に認定するには情報に乏しい遺構も多いが、個々の総体的な特徴や調査区内での分布状況（土坑相互、また他の遺構を含めた）等を踏まえ、土坑墓と判断した。



第222図 F-27区周辺出土土器(5)

土坑墓 1号 (第 223 図)

G-27 区のⅢa層で検出された。当初、アカホヤ火山灰の集中域が近接して2か所(北側:約1.4m×約0.3m,厚さ約1cm,南側:約1.6m×約0.3m,厚さ約3cm)検出されたため、付近を確認したところ、周辺の土も包含層より黒かったため、一帯を遺構調査に切り替えた。黒色土を除去した結果、アカホヤ火山灰集中域を含む、長軸2.7m,短軸1.5m,検出面からの深さ0.2mの平面形が隅丸長方形、断面略方形を呈する土坑となった。さらに、底面中央部(2か所のアカホヤ火山灰集中域の間)で、長軸1.7m,短軸0.4m,1段目底面からの深さ0.5mの平面形が長楕円形、断面略台形を呈する土坑を新たに検出した。1段目と2段目の主軸は、N62°Wではほぼ一致する。こうした状況を踏まえ、2段目の土坑を主体部とする木棺墓と想定して遺構内の精査を実施したが、主体部には副板の痕跡等、木棺の推定に繋がる構造や遺物は発見されなかった。

埋土は、4層に分層できた。各埋土とも基本的には粘性の弱い黒褐色土であるが、埋土3のみアカホヤ火山灰を含んでいなかった。また、冒頭のアカホヤ火山灰集中

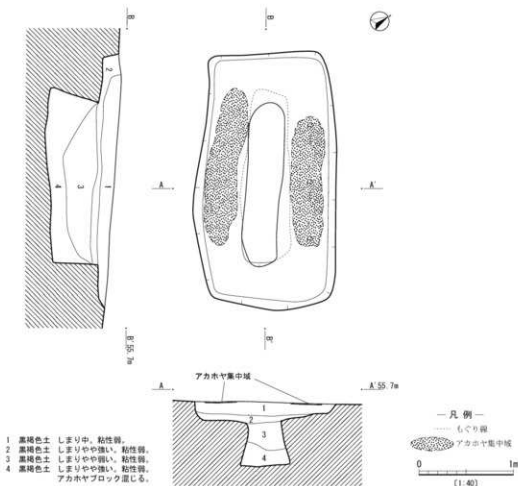
域と関連するような層は確認されなかった。おおむねレンズ状の堆積状況を示しているが、この状況からでは少なくとも墓坑2段目が完全に埋まるまで開口していたことになり、埋没過程における何らかの意図的行為の想定が必要となる。

遺物は、埋土1から土器小片が出土したのみだった。また、主体部床面から10cm程度上面までの埋土をフローテーションにかけたが、遺物等は出土しなかった。

土坑墓 2号 (第 224 図左)

G-26・27 区のⅢb層で検出された。N86°Wを主軸とした、長軸2.5m,短軸1.4m,検出面からの深さ0.3mの隅丸長方形の平面形を呈する。床面の中央には、主軸をほぼ同じくする長軸1.9m,短軸0.15m,床面からの深さ0.1mほどの掘り込みを伴うほか、土坑短辺にあたる西壁と東壁の際には溝状の掘り込みも1条ずつ(東壁:長さ96cm,幅14cm,床からの深さ8cm,西壁:長さ98cm,幅16cm,床からの深さ12cm)検出した。この溝状掘り込みについては、小口板の痕跡の可能性もある。

埋土は、床面の掘り込み等を含めて黒色土の単層だった。遺物は、埋土中から入来Ⅱ式~山ノ口式土器と想定さ



第 223 図 弥生時代土坑墓 1号

れる破片が出土しているが、いずれも小片であり流れ込んだものと判断した。フローテーションも実施したが、遺物は出土しなかった。

土坑墓3号 (第224図右 1212)

G-26区のⅢa層で検出された。Ⅲa層(黒色土)掘り下げ中にアカホヤ火山灰腐植土層が集中する範囲を発見し、それをもとに平面形を想定して土坑と認定し調査に着手した。その結果、N 81°Wを主軸とした、2段の掘り込みを呈する土坑墓であることが判明した。

1段目は、長軸2.5m、短軸1.2mの平面隅丸長方形を呈し、検出面からの深さは0.2mである。2段目は、長軸1.7m、短軸0.6m、1段目床面からの深さ1.0mで主軸が1段目からわずかに南西にずれる。断面形が台形で上端がオーバーハングしている。また、平面形は隅丸長方形だが長辺の東側上端は掘り広げられていたり、壁面には所々に段が設けられているなど、やや複雑な形状をしている。なお、木棺墓を想定して床面の精査等を実施したが、2号で検出した溝状の掘り込みなどは検出されなかった。

埋土はおおむね黒褐色土で、検出面ではアカホヤ火山

灰腐植土が多い傾向にあったが、1号のように面の抽出や分層ができるようなものではなかった。

1212は、入来Ⅱ式土器の甕の口縁部と考えられる。口縁部上面は指頭押圧のためややしゃくれ、端部には凹線状の凹みが巡る。口縁部下面にスガが付着する。埋土上位から出土しており、厳密には墓坑に伴う可能性は低い。

その他、床面から10cm程度上面までの埋土をフローテーションにかけたが、遺物は出土しなかった。

土坑墓4号 (第225図)

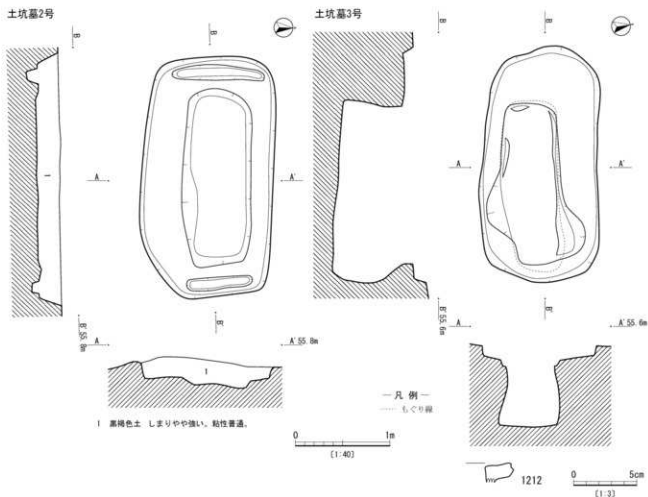
H-26区のⅢb層上面で検出された。N 77°Wを主軸とした、長軸1.9m、短軸0.5m、検出面からの深さ0.5mの平面が長楕円形、断面はやや袋状を呈する墓坑である。床面は東西端がやや深くなっている。

埋土は2層に分層できたが、主には埋土1(黒色土)で埋土2は壁面の小規模な崩壊によるものとみられる。

遺物は出土していない。

土坑墓5号 (第225図)

H-26区のⅢb層上面で検出された。N 86°Wを主軸とした、長軸1.8m、短軸1.0m、検出面からの深さ0.5mの隅丸長方形を呈する。床面が、東西両端部(両



第224図 弥生時代土坑墓2・3号

短辺側)で浅く凹んでいた。また、南壁が地山ではなく5~10cm大のアカホヤブロックと池田降下軽石が多量に混じったことから、これを除去したところ、長軸1.9m、奥行0.6m、床面からの高さ0.4mの横穴状の構造物が検出された。当初検出した墓坑の南側に掘り込まれていたものと想定されるが、埋土2の状況等から天井部分崩落したものと考えられ、本来の構造は不明である。

埋土は、横穴部を含めて2層に分けられた。横穴部の床面には埋土1がごく薄く堆積していたことから、ある程度空間が維持されていたものと想定されるが、埋土4からは閉塞を向かわせるような状況を見いだせなかった。遺物は出土しなかった。

土坑墓6号(第225図1213)

H-26区のⅢb層上面で検出された。土坑墓10号と同じく中世の溝状遺構に切られているがN75°Wを主軸とした、長軸1.7m(現状)、短軸0.9m、検出面からの深さ0.5mの平面隅丸長方形と想定される土坑墓である。

南壁にはⅢb・Ⅳa層を天井とした平面形が不整な長楕円形の横穴(長軸2.1m、奥行0.9m、開口部の高さ0.4m、最奥部の高さ0.1m)が掘り込まれている。埋土2・4の堆積状況から、この横穴が主体部と想定される。

埋土は、5層に分層できた。全体的におおよそ水平堆積をしている。埋土1は3~5cm大のアカホヤブロックとⅡ層の黒色土が混じっており、埋土2・3はしまりが弱い。埋土5は横穴の主な埋土で暗褐色を呈し、しまりがやや強い。埋土4は5~10cm大のアカホヤブロックが不均等が多量に混じる。この状況は、土塊閉塞の可能性を想起させる。ただし、6号以外の横穴式土坑墓からは、閉塞状況を想定させるような痕跡は確認できない。

遺物は入来Ⅱ式~山ノ口Ⅱ式土器と考えられる甕の脚台が埋土4の土坑側(横穴の開口部)付近から出土している。1213は、底径7.5cm、脚台高6.0cmで、接地面は平底である。外面は縦位のヘラナデを丁寧に施している。端部は板状工具で面取りしているが、工具の端を接地面まで下ろさないことで端部下端にわずかな胎土の盛り上がり形成させ、凹線状の凹みのような外観に仕上げている。内面にはコゲが付着している。

土坑墓7号(第226図1214)

H-25区のⅢb層上面で検出された。N79°Eを主軸とした長軸1.8m、短軸0.9m、検出面からの深さ0.3mの平面小判形、断面略長方形を呈する土坑墓である。床面は短軸方向ではほぼ水平だが、長軸方向では西側へ漸層的に浅くなっている。また、床面中央には径0.6m、床面からの深さ0.1mのほぼ円形の掘り込みが確認された。

なお、木棺墓を想定して床面の精査を実施したが、痕跡等は発見できなかった。

埋土は3層確認できた。水平堆積ともレンズ状堆積とも受け取れる堆積状況を呈しており、埋没過程の想定は容易でない。ただ、埋土1及び2についてはアカホヤ火山灰腐植土をほとんど含んでいない。

遺物は、墓坑西端の埋土1下位から管玉が1点(1214)出土した。埋土中の出土で欠損品でもあることから、副葬品と断定したい。管玉出土後、床面までの埋土をフローテーションにかけたが、他に遺物は出土しなかった。

1214は碧玉製管玉で下部を破損しており、現状で長さ7mm、外径3.6mm、上面孔径1.8mmである。孔は、上下両面からの回転軸で開けられている。

土坑墓8号(第226図)

H-25区のⅢb層上面で検出された。N81°Wを主軸とした、長軸1.9m(推定)、短軸0.5m、検出面からの深さ0.6mの平面長楕円形の土坑墓である。断面がフラスコ状を呈するのが特徴で、同形の土坑墓には3号と4号があり、うち3号は2段掘り構造であることから、8号並びに4号も本来は同じ構造だった可能性もある。なお、木棺墓を想定して床面等の精査を実施したが、板材や痕跡の発見には至らなかった。

埋土は7層に分けられた。下部になるほど黒色の度合いが濃くなる傾向がある。アカホヤを多く含む層とあまり含まない層が交互に堆積している状況が観察された。

遺物は、床面から10cm程度上面までの埋土に実施したフローテーションの結果も含め、出土しなかった。

土坑墓9号(第227・228図1215~1221)

H-25区のⅢb層上面で検出された。後世の削平をかなり受けており、上部構造は不明である。

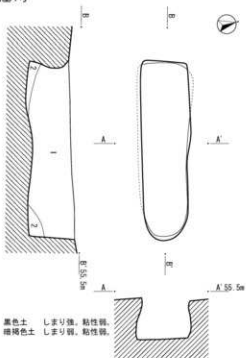
墓坑は、N55°Wを主軸とした、長軸2.3m、短軸1.0m、検出面からの深さ0.3mの隅丸長方形を呈する。床面は細かい凹凸が目立ったが、木棺を想定できるような状況は取られなかった。

埋土は2層に分けられた。床面直上の埋土2の堆積状況がおおむね水平であることから、人為的に埋められた可能性も想定されるが、この層から遺物が出土していることを踏まえると、埋没過程の復元には慎重にならざるを得ない。

磨製石鏃が5点出土している。いずれも床面直上で出土していることから埋葬時に近い時期のものと考えられる。しかし、4点はまとまって出土しているものの、出土位置や個々の向きなど配置状況には規則性が見られない。また、各石鏃の形態は様々であるが、厚さが薄く、側縁が鋭利であり、2点(1220、1221)を除き目立った破損が見られない。

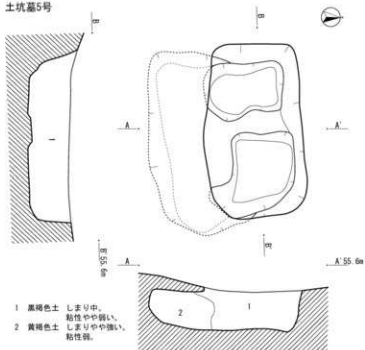
1215は埋土1で出土した。入来Ⅱ式土器の甕の口縁部と考えられる。口縁内面を明瞭に屈曲させていないため、断面形が「如意状口縁」のように見える。口縁部下面の整形が粗い。口縁端部には凹線状の凹みが浅く施さ

土坑墓4号



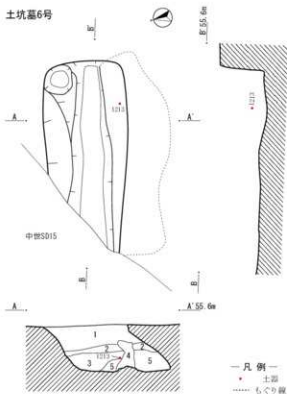
- 1 黒色土 しまり強、粘性弱。
2 暗褐色土 しまり弱、粘性弱。

土坑墓5号



- 1 黒褐色土 しまり中、粘性やや弱い。
2 黄褐色土 しまりやや強い、粘性弱。

土坑墓6号



- 1 黒褐色土 しまり中、粘性なし。
2 黒褐色土 しまりやや弱い、粘性なし。
3 黒褐色土 しまり弱、粘性なし。
4 暗褐色土 しまり中、粘性弱。
5 暗褐色土 しまりやや強い、粘性普通。

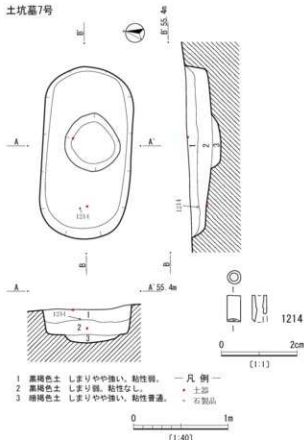
— 凡 例 —
● 土器
--- もぐり線

0 1m
(1:40)

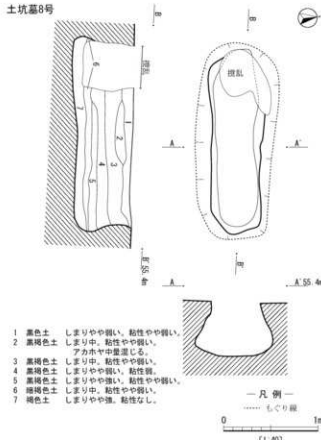
0 5cm
(1:3)

第 225 図 弥生時代土坑墓 4～6 号

土坑墓7号



土坑墓8号



第226図 弥生時代土坑墓7・8号

れる。

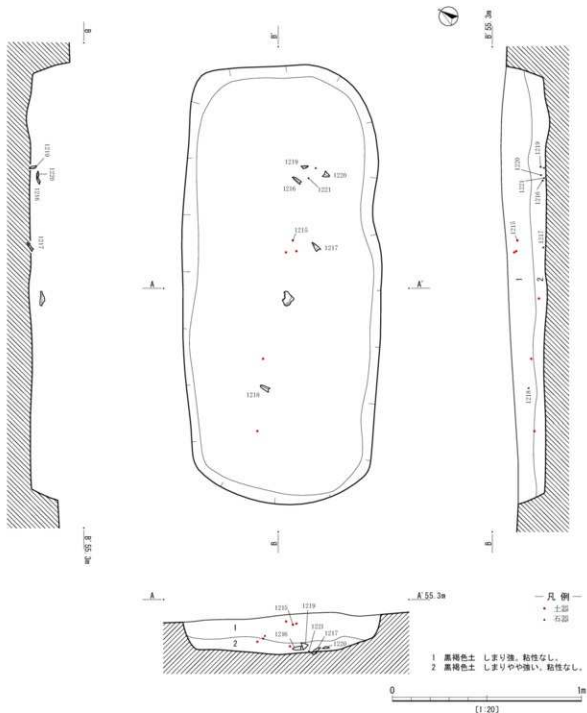
1216～1221は、磨製石鏃である。いずれも埋土2の床面近くから出土しているが、1218のみ墓坑西側で埋土1から出土している。1216は、長さ4.5cm、幅1.5cm、厚さ0.3cm、重さ2.5g、緑色片岩製で形状が特徴的である。鏃がないため断面は扁平なレンズ状を呈する。基部も研磨により鋭利に整形されている。1217は長さ4.0cm、幅2.0cm、厚さ0.2cm、重さ2.0g、頁岩製である。側縁には、全体に細かい凹凸が観察される。先端部のみわずかに鏃がみえる。基部は表・裏面に対し垂直に研磨されているが、平面形は弧状ではなく台形状を呈する。先端部のヒビは節理面によるものである。1218は頁岩製で、基部両端をわずかに欠損する。現状長さ4.0cm、幅2.0cm、厚さ0.3cm、重さ2.5gで、中央に鏃があり形状は1217に類似するが、両側辺が先端近くで角度を変えている点と基部の整形がやや粗い点が異なる。1217同様、刃部は全体に微細な凹凸がある。1219は、長さ3.5cm、幅2.0cm、厚さ0.3cm、重さ2.0g、頁岩製で平面形は二等辺三角形形状を呈し、先端部に鏃を研ぎ出すが、身部は平坦で素材剥離面が残る。左側辺は1217や1218の刃部と類似する特徴だが、右側辺の凹凸は調査時に生じたキズである。

基部は表・裏面に対し垂直に研磨される。1220は頁岩製で接合資料である（先端部は未発見）。5cmほど離れて出土した。接合部分と先端の欠損部分は節理面とおおむね符合するため、破損が人為的な行為によるものか特定できない。基部の整形は1217に類似し、残存部の側縁に凹凸は見られない。1221は先端部だけの資料である。頁岩製で鏃は研ぎ出されておらず、断面形状はレンズ状を呈する。1220と出土地点が近く、肉眼観察ではあるが石材の特徴も類似することから、接合しなかったが同一個体の可能性もある（第229図）。

土坑墓10号（第29図）

I-25区のⅢb層上面で検出された。中世の溝状遺構に切られているが、N64°Eを主軸とした、長軸1.5m、短軸0.8m、検出面からの深さ0.5mの隅丸方形土坑墓と考えられる。墓坑南壁際には浅い溝も検出された。さらに、南壁には長軸1.5m（現状）、奥行0.6m、床面からの高さ0.7m（開口部）～0.1m（最奥部）の横穴が掘り込まれていた。

埋土は、5層確認できた。埋土2はアカホヤの小ブロックとⅡ層土塊が混在した土である。埋土4のみ砂質で、垂直方向に堆積する。側板の痕跡である可能性もある。



第 227 図 弥生時代土坑墓 9 号 (1)

遺物は出土しなかった。

土坑墓 11 号 (第 229 図)

I - 25 区のⅢ b 層上面で検出された。中世の溝状遺構に切られているが、N 64°W を主軸とした、長軸 1.2 m (現状)、短軸 0.6 m、検出面からの深さ 0.3 m の平面隅丸長方形の土坑墓と想定される。床面で、壁面に沿って巡る幅 3.0~5.0cm の浅い溝を検出した。

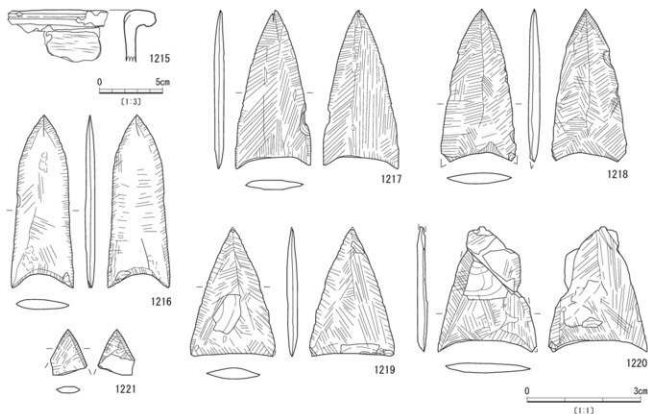
埋土は、4 層確認できた。特に壁沿いの埋土 1 は、他

の埋土と異なる砂質土で、上記の浅い溝と対応するように堆積している。小口板と側板の痕跡の可能性はある。埋土 3 は他の埋土より硬いため、貼床の可能性もある。

遺物は出土しなかった。

土坑墓 12 号 (第 229 図)

J - 25 区のⅢ b 層上面で検出された。遺構の東南端を中世の溝状遺構に切られているが、N 56°W を主軸とした、長軸 2.0 m (推定)、短軸 0.6 m、検出面からの深



第228図 弥生時代土坑墓9号(2)

さ0.4mの平面長楕円形の土坑墓と考えられる。浅いが、断面は全体的に袋状を呈している。

埋土は2層確認できたが、アカホヤや池田降下軽石の混入度合いを除き、差異は確認されなかった。

遺物は出土していない。

土坑墓13号(第229図)

J-24区のⅢb層上面で検出された。N70°Eを主軸とした、長軸1.8m、短軸0.5m、検出面からの深さ0.3mの平面形が不整形長方形を呈する土坑墓である。

埋土は、2層確認された。レンズ状の堆積状況を示しており、埋土2は1よりアカホヤ火山灰が多く混じる。

遺物は、埋土1から弥生土器と考えられる小片が4点出土したが、流れ込みと考えられ図化もできなかった。

土坑墓14号(第230図)

K-24区のⅢb層上面で検出された。墓坑西側上端のおよそ1/3を中世の溝状遺構及び土坑に切られているが、N81°Wを主軸とした、長軸1.8m、短軸0.7m、検出面からの深さ0.6mの平面隅丸長方形の土坑墓と想定される。墓坑北壁には、長軸1.9m(推定)、奥行0.5m、床面からの高さ0.5m(開口部)~0.06m(最奥部)の横穴が掘り込まれている。天井部はⅢb~Ⅳa層である。

埋土は、3層確認できた。堆積状況からは、横穴入口

が閉塞されていた可能性を想定しにくい。他方、埋土3は、近辺の地層にはみられない色調や粘性を有している。

遺物は、埋土1上部から打製石斧片が出土しているが、流れ込みと判断した。

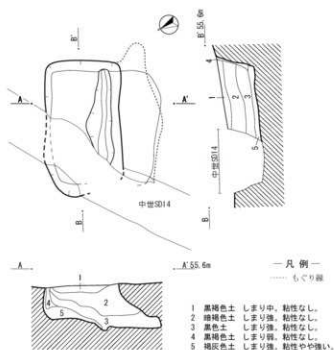
土坑墓15号(第230図)

K-24区のⅢb層上面で検出された。N70°Wを主軸とする、長軸1.6m、短軸0.4m、検出面からの深さ0.5mの平面形が不整形丸長方形を呈する土坑墓である。床面西半分には、南壁沿いに浅い掘り込みを伴っていた。さらに、南壁には、軸をやや西向きにとる、長軸1.5m、奥行0.5m、床面からの高さ0.4m(開口部)~0.1m(最奥部)の横穴が掘り込まれていた。天井はⅢb~Ⅳa層である。

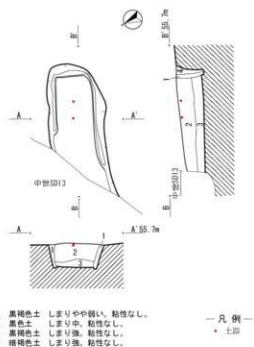
埋土は、3層確認できた。そのうち埋土1及び2にはアカホヤ腐植土が多く混入していることから、人為的に埋め戻された可能性がある。なお、横穴の閉塞を想定させるような状況は観察できなかった。また、上記した床面西側の掘り込みには中位層である埋土2が堆積しており、最下位層の埋土3は見られない。このことは、埋土3と2の堆積過程が同一でない可能性を示唆している。

遺物は、埋土1上位から、弥生土器の小片と黒曜石の剥片が出土しているが、流れ込みと判断した。

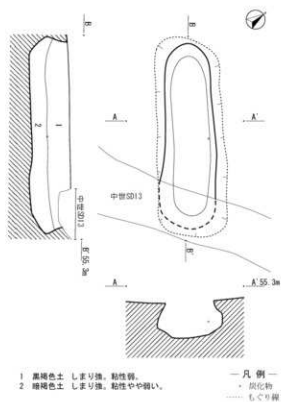
土坑墓10号



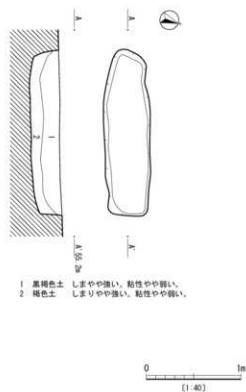
土坑墓11号



土坑墓12号

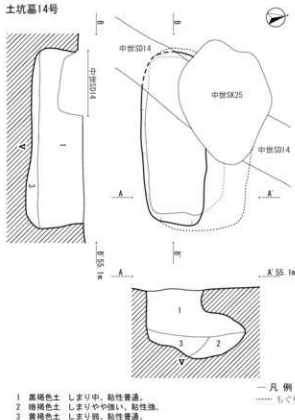


土坑墓13号

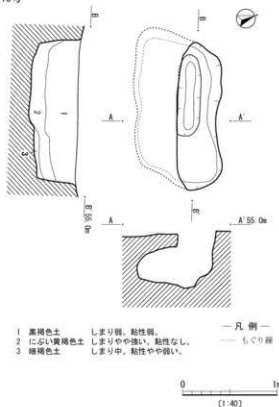


第 229 図 弥生時代土坑墓 10~13 号

土坑墓14号



土坑墓15号



第230図 弥生時代土坑墓14・15号

土坑墓16号(第231図)

F-24区のⅢb層上面で検出された。N79°Eを主軸とする、長軸1.7m、短軸0.6m、検出面からの深さ0.2mの平面長楕円形の土坑墓である。墓坑東側の壁面には、幅の狭い段が巡っている。また、西壁は他の壁と比して、傾斜がかなり緩やかになっている。

埋土は、残存状況の問題もあると考えられるが、黒褐色土の単層である。

遺物は出土していない。

土坑墓17号(第231図1222)

F-23~24区のⅢb層上面で検出された。N85°Eを主軸とする、長軸1.7m、短軸0.9m、検出面からの深さ0.2mの平面長方形の土坑墓である。西壁のみ段が設けられ、傾斜も緩やかである。

埋土は、残存状況の問題もあると考えられるが、黒褐色土の単層である。

検出面で、土器片が2点出土した。1222は入来Ⅱ式～山ノ口式土器の壺の肩部と考えられる。残存部の器壁の厚さや重量から、比較的大型の壺だったと想定される。内外面とも斜位基調のミガキ調整が施されているが、外面がより丁寧である。横位に巡る三角突帯は2条残っているが、胴部側に剥離痕が観察されることから、本来は3条以上あったことになる。突帯の貼付と整形は丁家で

ある。また、各突帯の下側と突帯剥離面にススが付着している。他の1点は小片のため詳細不明である。

土坑墓18号(第231図)

E-23区のⅢb層上面で検出された。N89°Wを主軸とする、長軸1.5m、短軸0.7m、検出面からの深さ0.3mの平面長方形の土坑墓である。床面は、中央部付近が浅くレンズ状に凹む。また、墓坑北西隅には、長軸1.1m、奥行0.4m、床面からの高さ0.2m(開口部)~0.1m(最奥部)の横穴が、墓坑床面から1段低く掘り込まれている。横穴の位置や規模は、本道跡で検出された他の同型墓坑と異なっている。

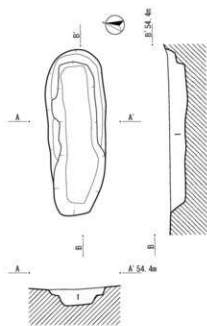
埋土は2層確認されたが、攪乱が激しく詳細な観察が困難だった。

遺物は出土しなかった。

土坑墓19号(第232・233図1223~1230)

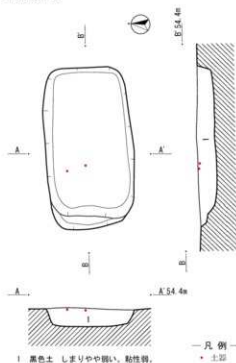
F-24区のⅢb層上面で20号に近接して検出された。上面全体及び南東端を攪乱により失っているが、N82°Eを主軸とする、長軸2.6m、短軸1.6m、検出面からの深さ0.4mの平面隅丸長方形の土坑墓である。壁面は各面とも立ち上がりが緩やかで、床面中央には、長軸と同じくする平面形が不整長楕円形の浅い掘り込みを伴う。木棺墓を想定して床面や埋土を精査したが、痕跡等の発見には至らなかった。

土坑墓16号



1 黒褐色土 しまり強、粘性なし。

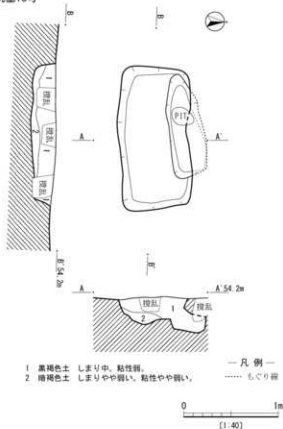
土坑墓17号



1 黒色土 しまりやや弱い、粘性弱。

— 凡例 —
● 土器

土坑墓18号



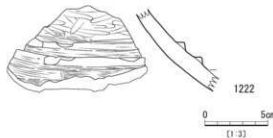
1 黒褐色土 しまり中、粘性弱。

2 黒褐色土 しまりやや弱い、粘性やや弱い。

— 凡例 —
--- もぐり痕

0 1m
(1:40)

第 231 図 弥生時代土坑墓 16~18 号



埋土は3層確認したが、埋土3はアカホヤ混じりの土であり、木棺の痕跡を発見できなかったことも踏まえると、埋没後に掘り込み面の土が混ざりあった部分である(堆積土ではない)可能性がある。

床面中央の掘り込み内で磨製石鏃が7点、鉄鏃が2点出土した。これらは、掘り込みの西側(磨製石鏃4点:1223~1227)と東側(磨製石鏃2点:1228と1229、鉄鏃2点:1230と1231)にまともだったが、個々の向きや角度など配置状況は不揃いであった。このことから、副葬品ではなかった可能性も考えられる。

1223は1段目の床面直上で出土した。現状で長さ3.5cm、幅1.5cm、厚さ0.2cm、重さ1.5gの淡緑色の頁岩製で、先端部と左右の脚端部を欠く。鏃はみられず、基部は1217のような台形だったと考えられる。先端部の欠損は、衝撃による剥離の可能性がある。1224は接合資料で、西側のまとまり内で20cmほど離れて出土した(基部側が東寄り、先端部側が西寄りの地点)。先端部は未発見である。頁岩製で、上半部に鏃が見られるが正面

及び裏面に主要剥離面を残している。両側縁には細かい凹凸が観察される。先端部の欠損は、1223と同様衝撃による剥離の可能性がある。1225は完形品で、長さ3.5cm、幅2.0cm、厚さ0.3cm、重さ2.5gの淡緑色の頁岩製である。平基式で切り落としたかのように断面方形に整形しており、先端部にのみ短い鑄がある。大きさの割に厚い。1226は現状で長さ3.0cm、幅2.5cm、厚さ0.3cm、重さ約2.5gの頁岩製で、先端部を欠く。鑄があり、わずかに脚部を研ぎ出している。先端の欠損は衝撃による剥離の可能性があるほか、左側縁下部には刃毀れ状の剥離が観察される。1227は現状で長さ3.5cm、幅2.0cm、厚さ0.3cm、重さ2.0gの頁岩製で、先端部と両脚部を欠く。先端近くで側辺の角度を変える形状が特徴的で、鑄はなく基部の平面形状は1217と類似すると想定される。先端部の欠損は衝撃による剥離の可能性があるが、欠損部の状況が1226と似通っている。両側縁には他の磨製石鏃にも観察された細かい凹凸がわずかに観察される。

1228は、長さ3.5cm、幅2.0cm、厚さ0.25cm、重さ2.0gの頁岩製で、両脚部を欠く。弧状に研ぎ出された両側辺が特徴である。正面のみ先端部に鑄がみられる。基部は浅い凹基で断面方形に整形する。両側辺下半には刃毀れが観察される。1229は、長さ4.0cm、幅2.0cm、厚さ0.4cm、重さ3.0gの頁岩製で、先端部並びに右脚部を欠損するほか、右側辺が刃毀れ状の剥離が観察される。鑄があり、基部は浅い凹基で断面方形に整形する。先端部の欠損は衝撃による剥離の可能性があるが、その状況は1226、1227と似通っている。

1230は、長さ4.5cm、幅2.0cm、厚さ2.5cm、重さ6.0gの無茎三角式鉄鏃で、完形品である。両側縁は鋭利に研ぎ出す。全体的に皮革のようにみえる有機質の物質が付着している。1231は、長さ4.0cm、幅2.0cm、厚さ0.3cm、重さ7.5gの無茎三角式鉄鏃で、完形品である。両側縁は鋭利に研ぎ出す。基部は、中央が弧状であるが端部が直線的に整形されており、「タガネ切り」の手法が用いられている可能性がある。

土坑墓 20号 (第 234・235 図 1232~1241)

E~F-24区のⅢb層上面で19号に近接して検出された。墓坑の上面全体及び南西部の一部を攪乱により失っているが、N 67°Eを主軸とする、長軸2.5m、短軸1.5m(現状)、検出面からの深さ0.4mの平面隅丸長方形の土坑墓と想定される。壁面の立ち上がりは比較的垂直に近いが、西壁は他面よりやや緩やかである。床面はわずかに波打っており平坦ではないが、19号のような掘り込み等は見当たらなかった。

埋土は4層確認できた。いずれも黒褐色土を主体としてアカホヤの混ざりが少なかった。おおむねレンズ状の堆積状況を示している。

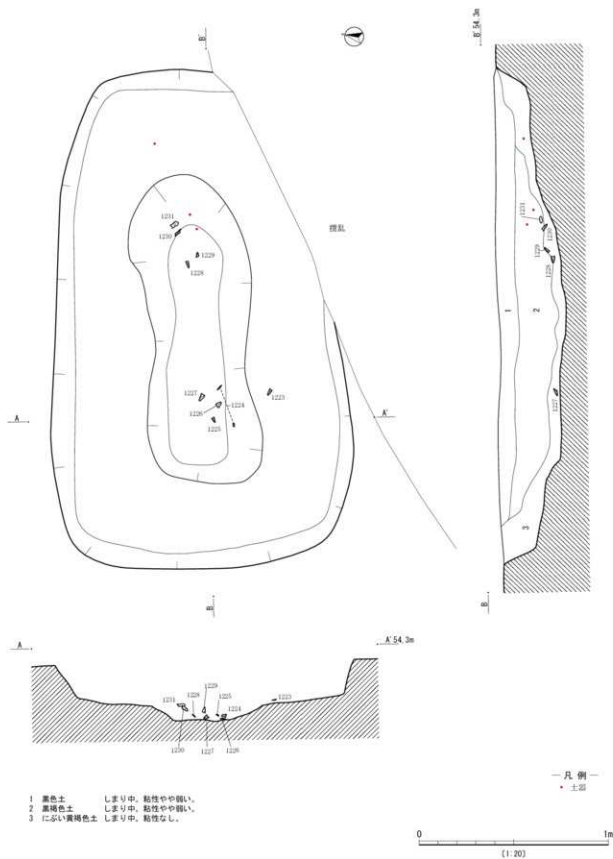
遺物は墓坑中央西寄りの床面近くから鉄鏃が3点、磨

製石鏃が4点、管玉が1点出土した。19号と同様、個々の向き等は不揃いであったことから、鏃については副葬品ではない可能性も考えられるが、管玉については1点のみが完全品であることから副葬品であるとと考えられ、原位置を保っている可能性も想定される。土器片については、小片であることや出土状況から、上記の鏃や管玉とは埋没経緯がそもそも異なる可能性が高いが、管玉などと出土位置が近いものについては、時期比定等の参考になると考えられるため掲載した。

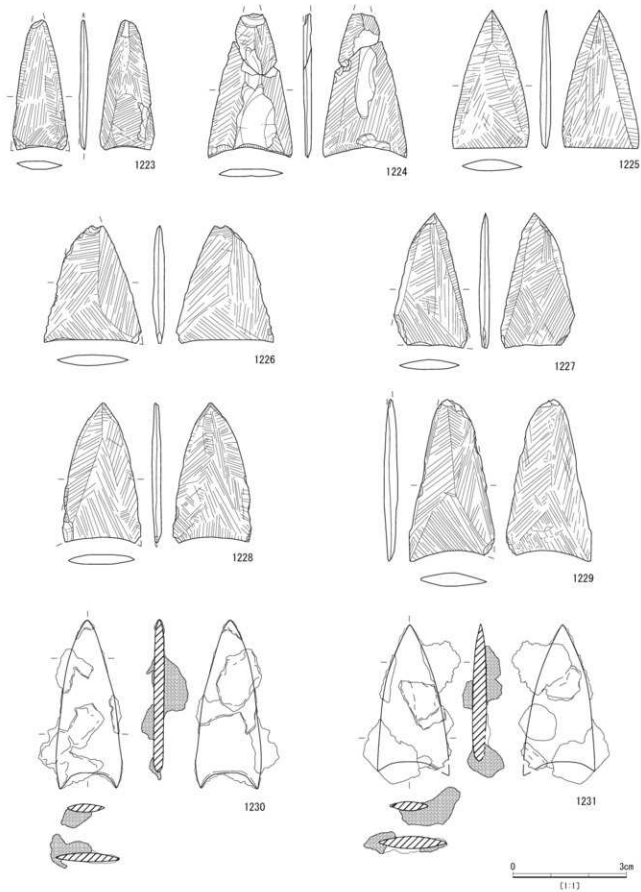
1232・1233はどちらも小片のため詳細は不明だが、来Ⅱ式土器の裏の口縁部と想定される。1233は口縁部が短く、端部に施されている凹みは沈線状に細くやや深い。

1234~1237は、磨製石鏃である。いずれも墓坑床面直上で出土しているが、平面的には、1238と1240の周辺、1239周辺にわかれ、1235のみ東寄りに離れている。1234は現状で長さ3.5cm、幅2.0cm、厚さ0.3cm、重さ2.0gの頁岩製で、先端部と基部を欠く。正面並びに裏面に鑄を形成する。側辺には細かい凹凸が観察される。先端部と基部の欠損は、どちらも衝撃による剥離と考えられることから、本来は長身の鏃だったとみられる。1235~1237は破損品である。1235と1236は、破断面の状況からどちらも折れたものと考えられる。石材の特徴から同一個体の可能性があるが接合しない。墓坑内で0.8mほど離れていた。1237は石材の色調がやや青みがかっており、1235、1236とは別個体である。

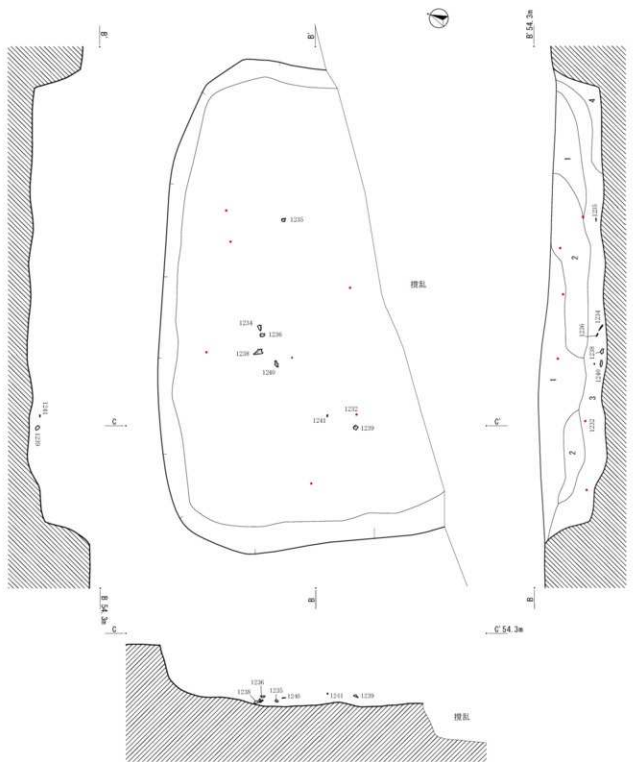
1238~1240は、鉄鏃である。墓坑内西側寄りで磨製石鏃同様床面直上から出土した。また、上記したように、1238・1240と1239は、0.6mほど離れている。1238は、長さ5.0cm、幅1.5cm、厚さ0.3cm、重さ6.0gの無茎三角式鉄鏃で、完形品である。両側縁には刃部を研ぎ出す。1230と同様に、有機質の物質が付着している。1239は、長さ4.0cm(推定)、幅2.0cm、厚さ0.3cm、重さ6.0gの無茎三角式鉄鏃である。先端部やや下は酸化して失われており、錆で繋がっている状態である。酸化は身部側に進行しており、身部内も中空になりつつある。1240は矢柄が遺存しているために、装着状況を確認できる。本県では貴重な例である。鏃部は、長さ2.0cm、幅2.0cm、厚さ0.2cmの無茎三角式鉄鏃である。平基で、両側縁には刃部を研ぎ出す。他の資料より小型であること(特に長さ短い)、先端が中心軸から右にずれている、左右非対称の平面形状であることから、再利用している可能性がある。1238と同質の物質も付着している。矢柄部は肉眼観察では木製で、長さ3.0cm、径1.0cmで丁寧に整形されているほか、有機質と思われる口巻きも残っている。口巻きは矢筈側から巻き付けていき、端を巻き込んで止めていると想定される。資料全体の重さは3.0gである。



第 232 図 弥生時代土坑墓 19 号 (1)



第233图 弥生时代土坑墓19号(2)

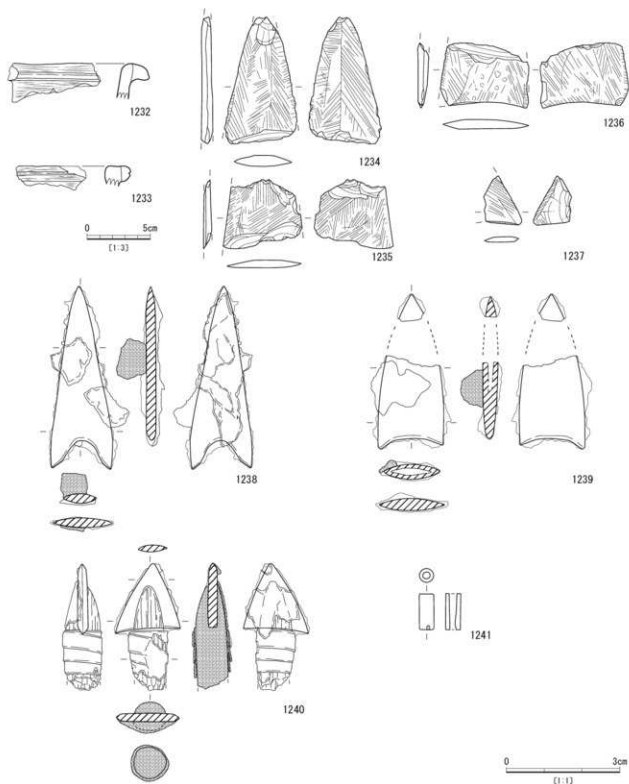


- 1 黒褐色土 しまり中、粘性やや弱い。
 2 黒褐色土 しまり中、粘性やや弱い。
 3 黒褐色土 しまりやや強い、粘性やや弱い。
 4 黒褐色土 しまり弱、粘性やや弱い。

— 凡例 —
 ● 土器
 ○ 石器

0 1m
 (1:20)

第 234 図 弥生時代土坑墓 20 号 (1)



第235図 弥生時代土坑墓20号(2)

1241は管玉である。墓坑中央やや西寄りの床面直上から出土した。碧玉製の完形品で、長さ10mm、外径4mm、上面孔径1.6mm、下面孔径1.3mmである。孔は、上下両面からの穿孔で、下面側から2mm程度のところで貫通している。

(2) 土器

①概要

この時期の土器は遺跡全体で出土している。出土傾向としては地形の落ち込みに流れ込んだ土器が出土した状況であり、特に29区から31区で多く出土している。

出土土器は菱形土器で判断すると南九州の弥生時代中

期を代表する入来Ⅱ式土器。山ノ口式土器が主体を成しているが、王子遺跡や中ノ原遺跡（鹿屋市）等でこれまで確認されてきた口縁部が長くのびるタイプだけではなく、先行する時期に該当する土器群も見られることが特徴的である。

掲載にあたってはまず器種ごとに大別し、その中で個体ごとに口縁部形態、端部の向きや文様の有無等を考慮してグルーピングした。掲載順は、36区ラインから西側を調査区西部、東側を調査区東部と便宜上呼称して調査区西部から記載する。

②調査区西部（第237図）

西部出土土器として144点を図化掲載する。出土した器種は甕形土器、蓋形土器、鍋形土器、大型甕形土器、壺形土器、鉢形土器、土製品がある。中でも、鍋形土器は当該期での器種組成ではあまり類例のないものであり、特筆される。

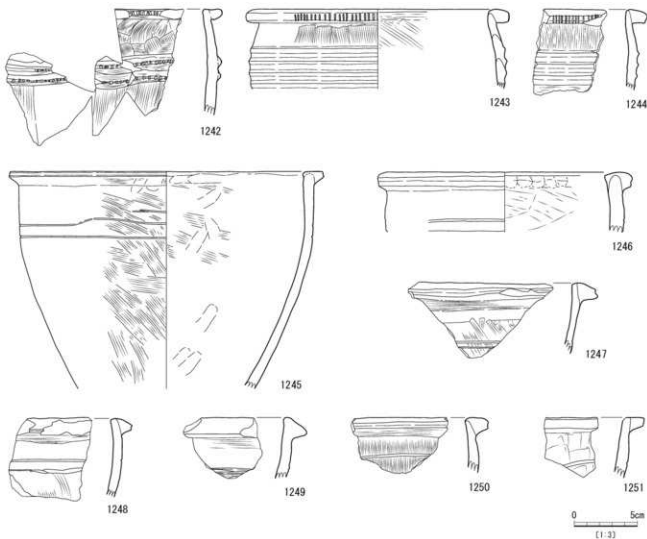
出土分布を見ると30・31区ラインの南北方向に走る谷間に多くの出土が認められ、東西平坦面からの流れ込

みが想定される。

甕形土器（第236・238図1242～1329）

1242～1244は口唇、突帯状に刻目を有する土器である。1242は、胴部から口縁にかけてほぼ垂直に立ち上がり、やや丸みを帯びた逆「L」字状の口縁で、胴部に断面三角形の突帯が2条貼り付けられる。突帯の間隔は狭く、断面が「M」字状となる。口唇、突帯状にヘラ押圧による刻目が施される。調整は縦方向のハケナデ調整である。色調は橙色および黒褐色を呈し特徴的である。1243は、口径が20.8cmで口縁がやや窄まる器形を呈す。口唇部にはヘラ押圧による縦刻目が施される。胴部には、3条の突帯が貼り付けられるが、起伏にとほしい。調整は口縁から突帯間は縦方向のハケナデ調整である。1244も外面調整は縦方向にハケナデ調整が施される。断面形や調整などから1243と同一固体と考えられる。

1245～1251は胴部に1条もしくは2条の沈線が施される土器群である。1245～1249は口唇に凹線が見られるものと見られないものがあり、調整もハケナデが縦



第236図 弥生時代中期 西部出土土器（1）

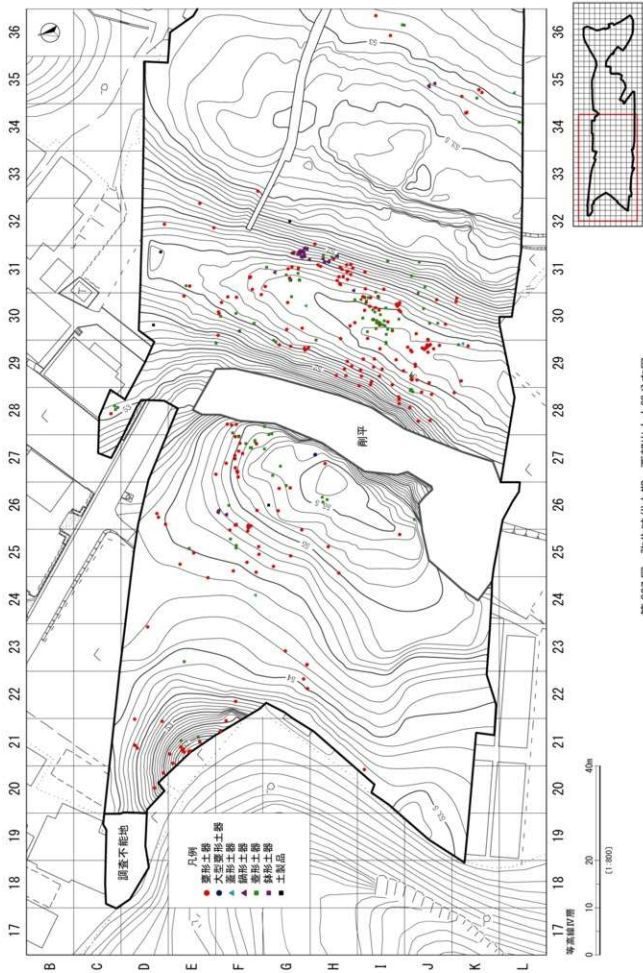


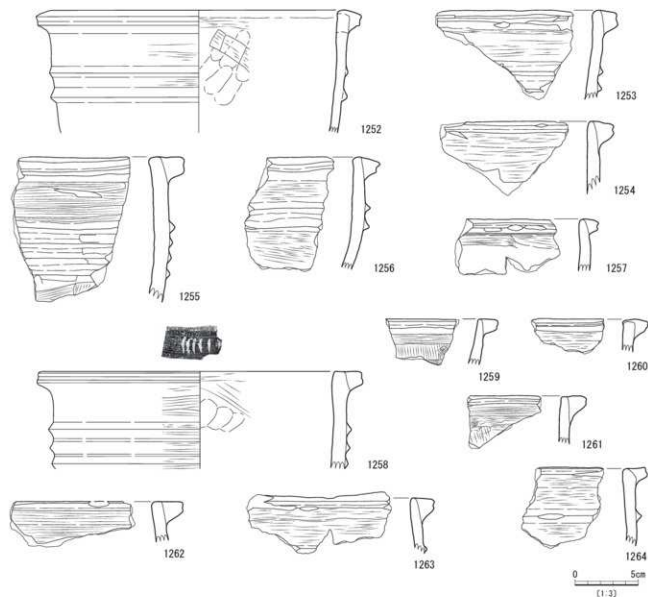
图 237 新石器时代中期 西部出土石器分布图

斜めに施されるなど様ではない。1245は口径が25cmで、胴部下半から上半に向かって緩やかに開き、胴部に施文される2条の沈線文付近からほぼ垂直に口縁に立ち上がる。外面の調整はハケナデが明瞭に確認できる。1246はやや内弯する器形で、口縁は短くまとまり、口唇には凹線が見られる。1247は口唇部の整形が粗く、不整である。2条見られる沈線は、0.3cm程度の幅で狭い。1248と1249は口縁部の断面形が三角形であるが、1248は口唇部に凹線が入るのに対し、1249は入らない。1250は、口縁下の調整痕が顕著で縦方向のハケナデ調整が明瞭に確認できる。内面は横方向のハケナデ調整である。1251は口唇に凹線を有さないが、胴部の沈線文および調整は1248と類似する。

1252～1276は口縁から胴部にかけての資料で、口縁が短い土器群である。断面が三角形を呈すものと、四角形

となるものが見られる。口縁の整形や文様等で若干の差異が見られるほか、口縁に厚みがあるのも特徴である。これら土器群は本遺跡の弥生時代中期を特徴づける土器群である。

1252～1257は口縁がやや下がり気味となる土器群である。1252は口径25.8cmで、胴部から口縁に向かってわずかに外反する器形である。口縁部は短くまとまり、口唇部は凹線となる凹みを有す。2条の三角突帯が貼り付けられ、横方向のナデ調整が見られる。1253は口縁部に歪みが見られるが、調整は比較的丁寧である。口縁部上面は丁寧なナデ調整により光沢を帯びる。1254は口唇部の凹みが深く明瞭な凹線となる。外面にはススが附着する。1255は残存する部分の弯曲具合から比較的大型の菱形土器になると推察される。突帯付近の器厚も1cm以上で厚い。胴部には4条の三角突帯が貼り付けられ



第238図 弥生時代中期 西部出土土器(2)

る。1256 は口縁部断面が三角形を呈し、胴部には2条の三角突帯が貼り付けられる。突帯自体に歪みが目立つ。1257 はやや小振りて、口縁を短くまとめ、内面も角がなく丸みを帯びる。

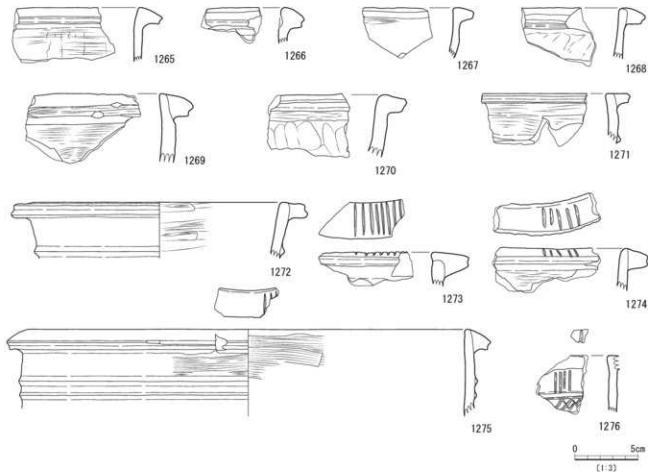
1258～1264 は口縁部上面がほぼ水平となる。1258 は口径 25.8cm である。口縁上面が水平で爪形文様の刻みが5つ見られる。体部の器厚が約1cmと厚くなり、重厚な感を受ける。1259 は断面台形状の口縁部を有し、口唇部は若干凹む。外面は縦方向のハケナデ調整でススが付着する。1260 は口縁部上面がやや丸みを帯び、口唇に凹線となる凹みが2条見られるのが特徴である。凹線の上位のものは幅狭で、下位は幅が広い。1261 は口唇部の凹線が明瞭で外面に多量のススが付着する。1262 は1261 に似た口縁部である。内面は丁寧なナデ調整により器面が整っている。1263 は比較的口縁部に近い位置に三角突帯が1条確認できる。口唇部の凹線は凹みが深い。1264 は三角突帯が1条残存する。突帯は貼り付け後の調整が丁寧で、断面形状も均整のとれた三角形を呈す。調整はナデによる。

1265～1272 は口縁がやや下がり気味もしくは水平となる。1265 は口唇の凹線部の稜が明瞭で丁寧な調整が丁寧で、断面形状も均整のとれた三角形を呈す。調整はナデによる。

が明瞭である。全体に丸みを帯びた形状である。1267 は小ぶりな甕形土器と考えられる破片である。使用時の被熱のためか、器面全体が剥離している。口唇部の凹線が判然としない。1268 は口縁下部が凹み、全体に口縁が下がる形となる。上面は丸みを帯び、口唇部の凹線は明瞭である。調整は斜方向のヘラナデが若干確認できる。1269 は厚手で、体部と口縁の接合箇所が凹む。凹み部分と口縁上面にススが付着する。上面部分は蓋の利用を想定させる痕跡である。1270 は口唇に凹線を有すが、凹みは浅く不明瞭となる。体部と口縁の接合部付近は調整のため、凹みが生じる。外面調整は不明瞭だが指オサエによる整形痕が確認できる。1271 は1272 に類似した口縁部で、口縁部と突帯部間が外側に膨らみを持つ。内面は斜め方向のハケナデ調整が明瞭に確認できる。

1272 は口縁貼付後の調整時の指圧により、上面に凹みが見られる。胴部には1条の突帯が確認できる。口径は23cm である。

1273・1274 は口縁部もしくは胴部に沈線文や刻目が施される。1273 は口縁上面に8条の沈線が施される。沈線部の断面は「V」字状となる。断面形は整った三角形で、調整も丁寧なナデにより器面もきれいだである。1274 は1273 同様、口縁部上面に文様が施される。施文はへ



第239図 弥生時代中期 西部出土土器(3)

ラ状工具の押し当てによると思われる刻目で5本見られる。1275は口径38.4cmで、口縁部は下がり気味である。胴部には3条の三角突帯が確認できるが、最下位の突帯は部分的な残存状況である。口縁部上面には刻目が3本確認できるが欠損しているため、本来はもう数本あった可能性が考えられる。1276は小振りな土器で胴部外面に2つの文様帯を有す。横位の沈線2条を境にして上位には縦方向の沈線を4条施し、下位には鋸歯文が2段みられる。いずれも、棒状工具が使用されていると考えられる。また、口縁部上面にも2条の沈線が施されるなど特異な文様を持つ土器であるが、胎土や器形などから在地の土器であることに疑いはないためここで掲載する。

1277と1278は口唇部の凹縁がはっきりとし、口径が復元できた土器である。1277は、体部と口縁貼付付近に沈線が確認できるが、正面からは確認できないため、文様ではなく口縁部調整時に意図せず残った調整痕の可能性が高い。口径は29.8cm。1278は口径が27.6cmで1277等と比べて口縁がやや丸みを帯びる。調整は残存している部位では横方向のナデが確認できる。

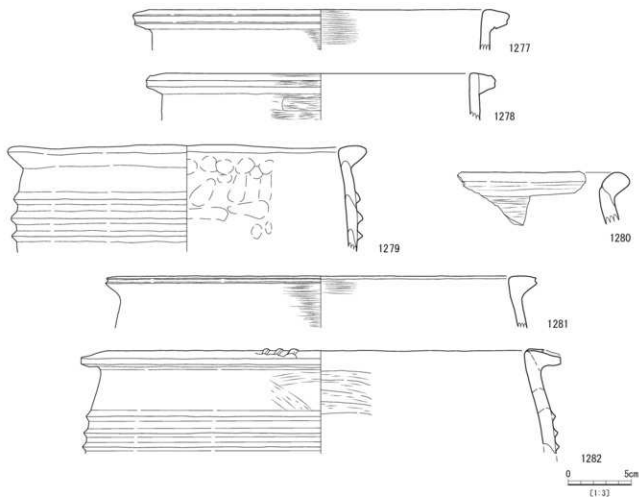
1279と1280は口縁部断面形が丸くなり、角がないの

が特徴の土器である。1279は歪みの目立つ器形である。胴部には3条の三角突帯が回り、突帯・口縁ともに丸みを帯びる。外面は被熱により器面剥離が著しく、調整は確認できない。内面には指頭圧痕が残る。口径は28.2cmである。1280は、器体に円形粘土帯を巻きつけて、口縁を作出する。丁寧な横ナデで玉縁状の口縁とする、やや特殊な形状である。

1281と1282は胴部が外側に張り出し、口縁部に向かって窄まる器形である。1281は口径が34.2cmで、整形は丁寧である。口縁部上面は若干の丸みを残す。口唇部には凹縁が回り、同箇所付近までススが附着する。

1282は、胴部最大径が上半部に復元できる資料である。口縁部は口唇に向かって先細りとなり、上面には長さの短い3つの三角突帯が貼り付けられる。胴部にも三角突帯が3条走る。口径は38cmである。

1283~1289は胴部に三角突帯がない、またはないと想定できる口縁から胴部にかけての資料である。成形の調整が丁寧なもの、そうでないものがある。1283は口径35.2cm。口縁は逆「L」字状となるが、全体に丸みを帯び、やや内側に張り出す。また器面全体が磨減して調整

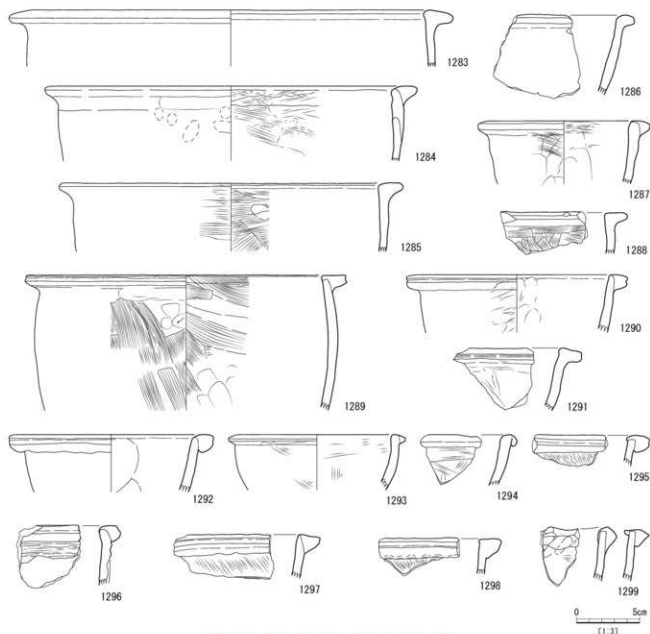


第240図 弥生時代中期 西部出土土器(4)

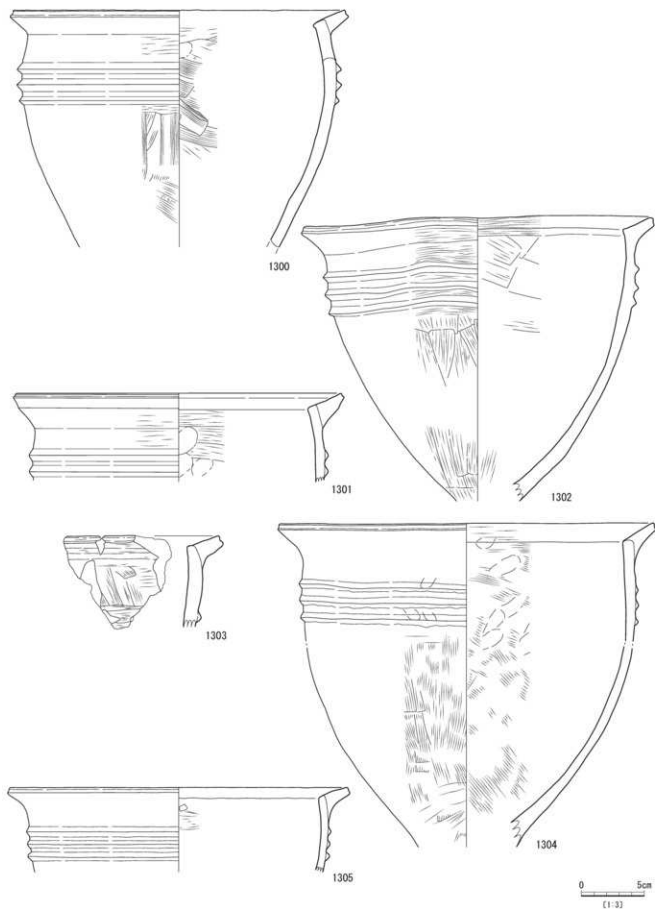
は判然としなない。1284は断面三角形の口縁を有すが、口唇等の整形はあまく、丸みを帯びる。外面は丁寧な横ナデが見られるが、指頭圧痕が顕著に残る。口径は29.6cmである。1285は口径27.2cmで、1284と器形は類似する。胎土に雲母が含まれるが、焼成の状況による影響で白っぽくなる。外面はハケナデ調整である。1286は口縁から胴部に向かって内傾する。口縁は指オサエによる整形の影響で凸凹が目立つ。1287は口径13.6cmと小型である。外器面の剥落が多く調整が不明瞭な部分もあるが、斜め方向のナデと指頭圧痕が確認できる。1288は口縁部の破片資料であるが、端部の整形や外面調整が1285と類似することから掲載した。口縁部は端部に向かって先細りとなる。外面の調整も1285と同様、斜め方向のハケナデ調整主体である。1289～1291は口唇部

に凹線を有す土器である。1289は口径25.6cm。やや胴部が張る器形で、口縁部断面が三角形となる。外面調整は1285と類似する。1290はやや小ぶりの土器で、口径が17.5cmとなる。内外面の調整はヘラナデである。1291は全体的に凹凸が目立つ土器であるが、口縁部の調整は丁寧で、口唇部の凹線も明瞭に施される。

1292～1299は口縁部形態、貼付技法から振興系土器との関連が推察される土器である。しかし、その産地については胎土中に雲母を含み、色調も典型的な大隅半島所産の土器と考えられるため、在地で製作された土器の可能性が高い。概して小型のものが多い。1292は口径16.2cmで円形粘土帯を貼り付ける。その際、外面の接合部調整がないため隙間が生じる。口唇には凹みの浅い凹線が見られる。調整はナデ主体である。1293は口径



第 241 図 弥生時代中期 西部出土土器 (5)



第 242 图 弥生时代中期 西部出土土器 (6)

14cmで1292と大きさは類似するが、口縁が小さく貼付接合部調整が多少施される点が異なる。内外面ともに丁寧なナデ調整で器面はなめらかである。1294は器体に断面円形の粘土帯を巻き付け、その上に器体の上端をかぶせた後、ナデ調整をおこなっている。口縁は玉縁状となり、器体と貼り付けた粘土帯との接合部には隙間が生じている。1295と1296は口縁部断面が丸みを帯びる。器体部に円形粘土帯をかぶせるように貼り付けて口縁部を作出する様子が観察できる。1296は被熱のため、全体が赤褐色を呈し、外面の剥落が大きい。1297は断面三角形の口縁部だが、やはり器体との接合部の調整があまく隙間を有す。1298は1297と色調、口縁部の形が類似する。1297に比べ口縁貼り付け部に残る指頭圧痕が明瞭である。1299は薄手の器体に上端部から覆うように断面三角形の粘土帯を貼り付ける。貼付後の調整は粗雑で凹凸が激しい。調整は内外面とも横ナデで、口縁粘土帯を貼り付ける前に施されている。

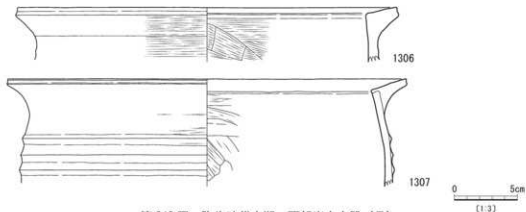
1300~1307は口縁が上向きにのび、口唇に凹縁が巡る土器である。その中で1300・1301は口縁が厚くなる土器である。1300は口径26.8cmで口縁から胴部下半まで残存し、3条の三角突帯が確認できる。外面のハケナデ調整が明瞭で器面は比較的整っている。1301は口径が26.2cmで、胴部突帯が2条まで確認できる。口縁部下面にはケズリ様の整形を施した結果、稜が作出され断面三角形の口縁となっている。1302は歪みのある土器で、安定した数値が割り出せないが、口径は最大値で29.4cmとなる。口縁部から底部に向かって緩やかに窄まる器形である。胴部には3条の三角突帯が貼り付けられる。外面の調整は突帯より下位は縦方向のハケナデ調整で、内面は口縁部上位から胴部にかけて横方向のハケナデ調整が顕著に確認できる。1303は口縁が厚くなり、かろうじて1条の突帯が残存する。器面調整は丁寧できれいだ。1304は口縁から胴部下半まで残存する。口径30cmで胴部には3条の三角突帯が確認できる。貼付部下側は総じてナデ調整が弱く、隙間が目立つ。外面調整は縦方

向のハケナデ調整とナデ調整である。1305は口径26.6cmで、口縁直下に3条の三角突帯を有す。口縁上面がやや盛り上がる。器面は磨滅し、外面調整は不明瞭である。1306は口径30.4cmで口縁部は上向きとなるが1307に比べ長さが短い。外面は丁寧な横ナデ調整だが、内面は斜め方向のハケナデ調整である。1307は口径31.6cmである。3条の三角突帯が確認できるが、突帯は高さがなく、丸みを帯びる。外面は横方向に丁寧なナデ調整が施される。

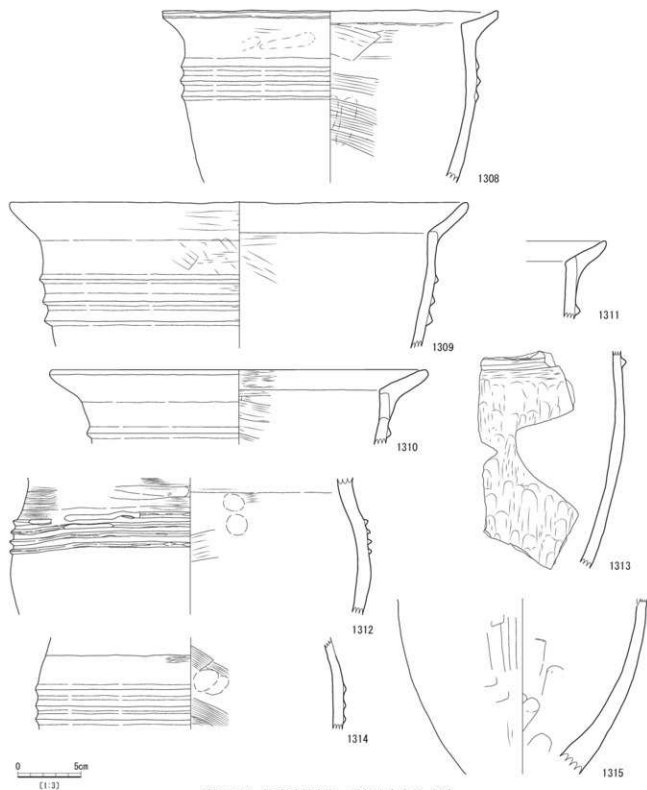
1308~1311は口縁が上向きに長くのびる土器である。口唇が丸くなり、凹縁もないことから弥生時代中期末に位置づけられると考えられる。1308は口径26.6cmで口縁上面が若干凹む。口縁と体部接合は指で強く指オサエがなされる。3条の三角突帯が確認でき、貼付位置が口縁に近い。1309は口径が36.4cmで、胴部から口縁に向かってゆるやかに外反し、胴部と口縁部接合箇所不明瞭な屈曲を有す。口唇は丁寧な調整によって丸くまとめる。胴部には3条の三角突帯が貼り付けられる。1310は口径30cmで、口唇の特徴や調整なども1309と類似する。胴部下半が欠損しているため、現状は1条だけ三角突帯が確認できるが、多条突帯と推察される。1311は1310と断面形が類似するが、突帯の貼り付け位置が1310より下位となる。

1312~1315は壺形土器の胴部である。1312は胴部最大径付近に4条の貼付突帯を巡らせる。突帯は貼り付け後の調整が雑で、歪な形である。外面調整は横方向のハケナデ調整で、比較的丁寧であるため、部分的にミガキ様となり光沢をおびる。1313は胴から底部近くまで残存する。厚さが0.6cm程度で薄手のつくりである。縦方向のヘラナデにより丁寧に調整される。1314は胴部の資料であるが、接合部で口縁が剥離して欠損している。3条の突帯部付近は被熱による影響が、器面剥離が著しい。1315は胴から底部にかけてである。内外面ともにヘラによる縦ナデで丁寧な調整が施される。

1316~1329は土器の胴から底部、脚台にかけてであ



第243図 弥生時代中期 西部出土土器(7)

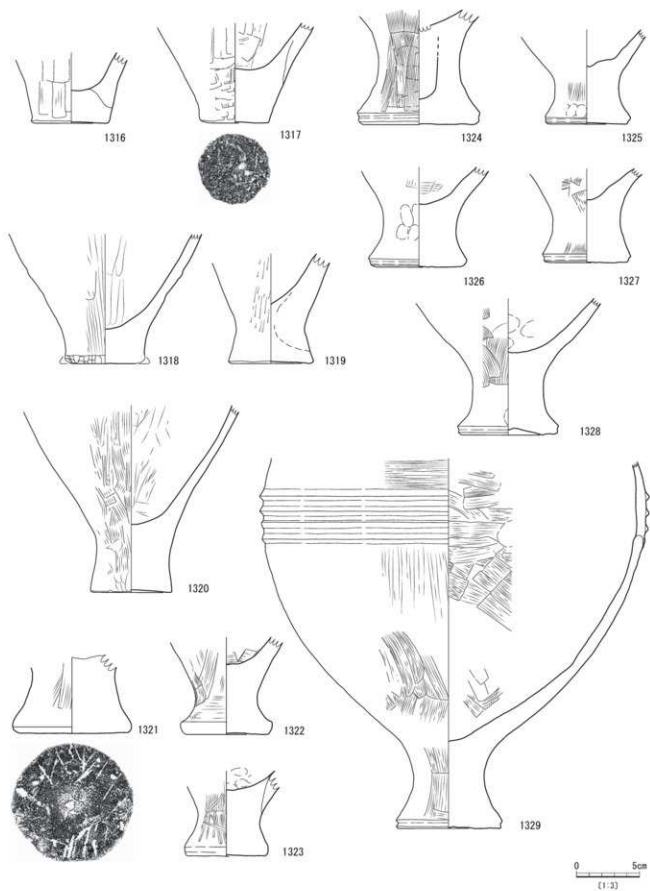


第244図 弥生時代中期 西部出土土器(8)

る。弥生時代中期を代表する充実した脚台が基本となるが、その中でも端部に凹線を有すものとそうでないものや、丸みをもつものなどバリエーションが見られた。

1316~1318は厚手の平底となる。1316は、縦方向のヘラナデ調整が明瞭である。調整時のかき上げのためか、脚台端部に粘土が残り外側に張り出して小さな影ら

みをもつ。1317は径5.4cmと小さく、胴部への立ち上がりも、他の脚台部資料に比べて外反度が弱い。外面はケズリ様の縦方向のヘラナデで調整される。底には組織痕と思われる圧痕が残存するが、風化による磨滅で判然としない。1318は縦方向のヘラナデ調整である。端部は若干磨滅するが、欠損状況から小さな粘土帯を貼り付け、



第 245 图 弥生时代中期 西部出土土器 (9)

安定性を高めていた可能性も考えられる。

1319・1320は胴部から底部にかけてのくびれが少なく、端部も外側へ張り出さない器形のものである。1319は1320に比べ、脚台の高さが低い。外面はその他同様ハケナデ調整だが工具押し当てが強かったためか、胎土中の鉱物移動が明瞭に観察できる。脚台下半にのみススの付着が認められる。また、欠損部にて整形時の粘土利用が観察でき、粘土塊を中心に脚台を整形した状況が観察できる。1320は胴部に比して脚台径が6.4cmと狭いため、不安定さを感じる。内外面ともに縦方向のハケナデ調整が丁寧に施される。外面にはススが付着する。

1321・1322は端部に凹線を有さない脚台で、端部が丸みを帯びる。1321は1322より大型の端部となるが、より外への張り出しが弱くなると推察される。底には木業圧痕が遺存するが樹種などは不明である。1322は内外面ともに丁寧にハケナデ調整で若干底の中央部が凹む。接地面は平らで安定感がある。

1323～1329は脚台端部が丁寧に整形され凹線が巡る。1323は端部の整形が、凹線の巡るその他の脚台に比べてあまく、丸みを残す。端部には不明瞭な凹線が施され、外面調整はミガキ様で光沢がある。1324は縦方向のハケナデ調整が明瞭で内底部には使用時の炭化物が付着する。1325も調整は1324同様だが器面の状態が悪く不明瞭である。1326・1327は内底部に段差を有す。有段箇所は体部と脚台の接合箇所と推察される。調整は1326がナデなのに対して1327はハケナデ調整である。1328は脚台中央から上方へのハケナデ調整が施される。端部より上位は横ナデである。底部接地面は中央部が凹む。念入りにナデ調整が施されているため光沢がある。1329はまとめて出土した。谷間に堆積する黒色土層から出土したため、当初遺構の可能性を想定して調査したが、明確な掘り込みを検出するには至らなかったため、包含層扱いとした。胴部に4本の三角突帯が巡る。さらに、ゆるやかな曲線を描きながら窄まり脚台に至る器形で、脚台端部には凹線が巡る。調整は脚台から胴部が縦方向の調整で、突帯上部は横方向へと変化する。

蓋形土器 (第246図 1330～1333)

1330～1333は破片資料であるが、西部では4点を図化掲載する。端部からつまみ部にあたる器形と内面に付着するススの有無などから、甕形土器と壺形土器の2器種に用いられたものと判断した。

1330～1332は甕形土器の蓋と考えられる土器である。1330は頂部で径5cmと大きめのつまみを有す。丁寧に縦方向に向かって大きく開く器形と考えられる。外面は丁寧にナデ調整である。1331は端部から頂部に向かって反りが強くなる。内面にはススが付着する。1332は端部の破片資料である。内面にススが付着する。器形は端部から頂部にかけて窄まる。竅穴住居跡7号で出土した596と類似する器形と推定される。端部上面には三角突帯が巡り、内外面ともに縦方向のミガキ調整が施される。

1333は壺形土器の蓋と考えられるものである。1331に比べて直線的な器形で、残存部の径から推定する全形は小さい。内面から穿孔された穴が見られることから壺形土器の蓋と判断した。

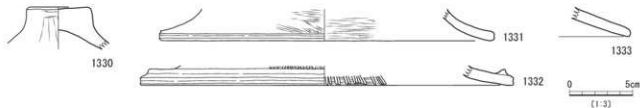
鍋形土器 (第247・248図 1334～1340)

1334～1340は口縁が大きく開き、器高が低くなる器形である。いずれも底部が欠落しているため、全体の形状は不明である。胎土は雲母を多く含み、粒径の大きい鉱物粒が入る。器形は中世の土師質鍋形土器を彷彿とさせるが、本遺跡で出土した中世土器とは胎土が大きく異なることや、土器全体の発色などは在地の弥生土器そのものであることなどから、弥生時代中期の土器として扱うこととした。

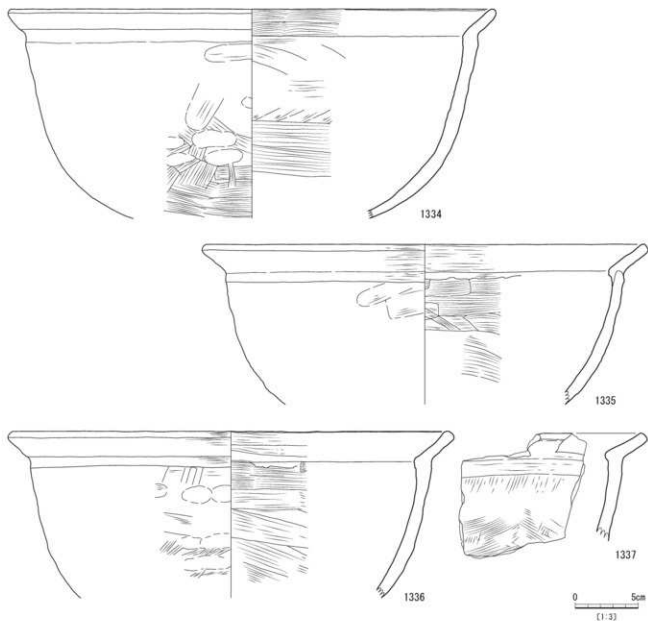
1334は、口径38.7cmで、口縁から底部付近まで残存する資料である。底付近から腰部にかけて、外に開きながら広がりを見せ、胴部から口縁にかけては外反の度合いを幾分かゆるめる。口縁は上向きで、体部との接合部と推定される箇所、押しつぶしたために凹みが見られる。内外面ともにヘラナデ調整主体であるが、外面胴部下半はハケナデ調整が明瞭であるのに対し、上半はナデである。口縁内面もハケナデ調整痕が顕著に確認できる。

1335～1337は口唇部を1334に比べて平らにまとめ、長い口縁となる。口縁内側は、体部接合箇所内側に突出し明瞭な稜線が見られる。胎土、内面調整は1334とほぼ同様である。1335は被熱による器面剥離の影響で判然としない。1336は、胴部下半まで残存していると考えられるが、1334のような激しい工具調整痕は見られない。1337は胴部上半から口縁にかけての資料だが、外面には粗い指オサエ調整後に斜位のハケナデ調整が明瞭である。

1338は口径39cmで、口縁から胴部にかけての資料である。口縁内側にかすかな凹みを有す。外面は被熱によ



第246図 弥生時代中期 西部出土土器 (10)



第247図 弥生時代中期 西部出土土器 (11)

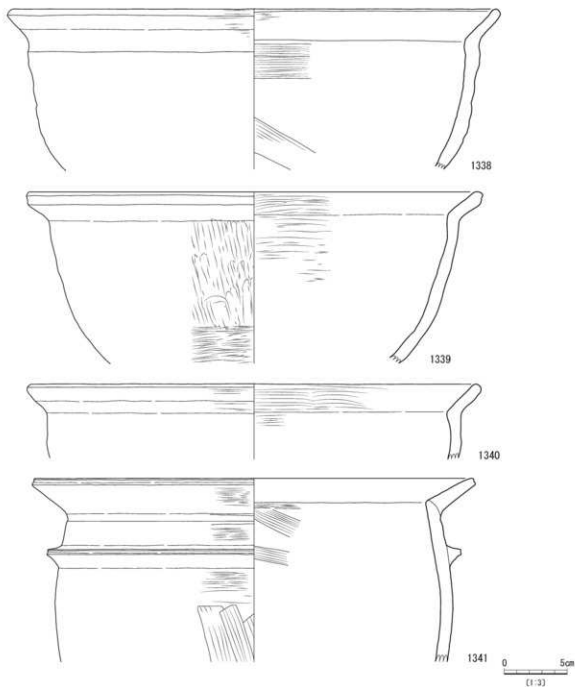
りほぼ剥落し露胎する。内面も同様だが、一部ナデ調整の痕が確認できる。

1339・1340は、口径がそれぞれ36cm、32.2cmで口縁外面に稜を持ち、整形、調整が他の銅形土器に比べ丁寧である。1339は口縁から腰部付近までの資料である。口唇はやや丸みを帯び、丁寧に整形される。外面は腰部より下位で明瞭な横方向のハケナデが見られるほか、内面も同様である。1340は1339に比べてやや口唇が平坦だが、整形、調整ともに丁寧である。調整は内面もハケナデ調整後に指ナデが施されており、端整な感を受ける。
大型壺形土器 (第248図 1341)

包含層遺物として出土した大型の壺形土器は少量であった。1341は出土地点が本調査区で最も高い位置と

なることや墓域という点から、用途に関しては注意を要する土器である。1341は口径34cmで、大型壺形土器としては小振りである。胴部にやや膨らみをもち、口縁に向かって窄まる。口縁は上向きで、体部から長くのびる。口縁下5cmで断面台形状の突帯が1条貼り付けられる。外面調整は突帯付近では横ナデだが、そこより下位は縦方向にハケナデ調整される。胴部下半にはスガが付着する。
壺形土器 (第249～251図 1342～1375)

1342～1353は壺形土器の口縁から胴部にかけての資料である。口縁が逆「L」字状を呈すものと二又状となるものなどが見られた。1342は口径14cmと小さい。口縁上面が丸くなり玉縁状で、口唇には凹線が巡る。内外面とも丁寧なナデ調整である。1343は口縁の破片資料



第 248 図 弥生時代中期 西部出土土器 (12)

である。下がり気味の逆「L」字状口縁で、全体に丸みがかかる。外面は横ナデで、右から左方向へ胎土中の砂粒の動きが確認できる。1344 は口縁部から頸部にかけて残存する。口唇には凹線が巡る。調整は丁寧で内外面ともに光沢がある。口径は 22cm である。1345 は口径が 20.8cm で頸部から口縁部に向かって外反する器形で、口縁部内面に突出部を有す。口唇部は欠損するが、おおよそ断面三角形の口縁部と推察される。外面は斜め方向のナデ調整が主体で、内面は横ナデとなる。1346 は 1345 に比べて外反度が小さい器形である。口縁部上面

には 3 本の沈線文が施される。調整は内外面ともにミガキである。口径は 22.2cm である。

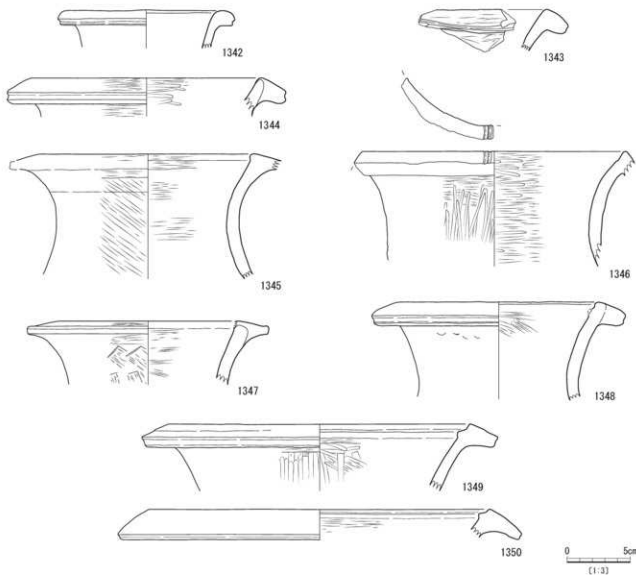
1347 は口径 19.2cm で、先細りの口縁となるため、断面三角形の形が際立つ。口縁部内側には貼り付け時の内側への突出部が見られる。口唇は丁寧な調整は認められるものの、凹線にはならない。外面調整も丁寧なヘラナデで、ミガキ調整は見られない。

1348～1350 は口縁内側に三角突帯が貼り付けられる。口縁はいずれも下がり気味の逆「L」字状口縁である。1348 は 1349 に比べ、口縁に厚みがある。内側の突帯は、

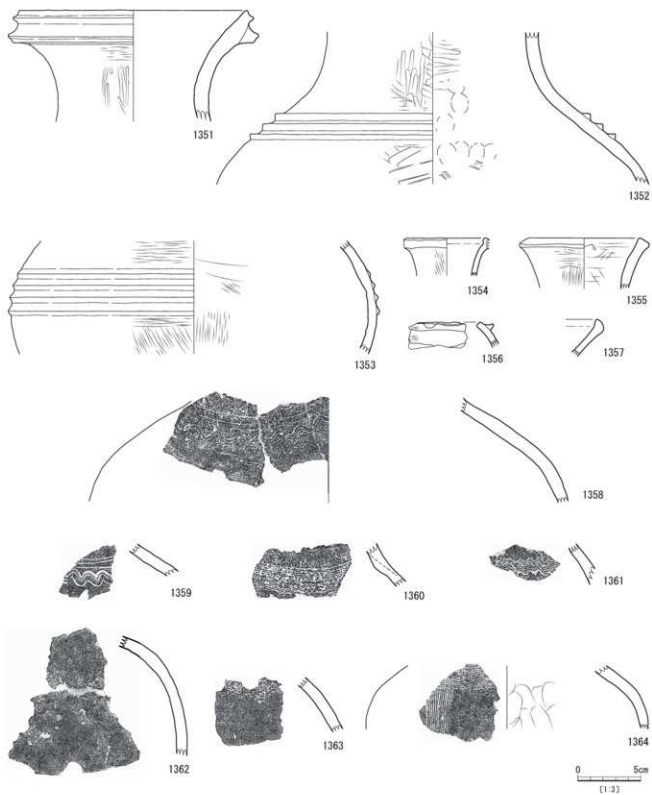
大部分が欠損している。1349は全体にミガキ調整が施され、光沢がある。口径は25cm。1350は下がり気味の口縁が長くのびる。口径は32cmで比較的大型である。口唇に凹線を有し、口縁部上面がやや膨らむような断面形である。焼成が良く、硬質である。1351は頸部から口縁に向かって強く外反して開き、その下に断面台形状の貼付突帯が巡ることで二又状口縁となる。外面は縦方向のミガキ調整が施され、口縁端には凹線が確認できる。土器の素地は白色だが外面は黒色となるため、黒塗り土器の可能性もある。1352は頸から肩部にかけての資料である。肩部には3条の三角突帯が巡る。突帯より上位はミガキが施され、下位は斜めのヘラナデである。内面は調整が粗く指頭痕が明瞭に確認できる。1353は胴部である。4条の三角突帯が巡る。胴部最大径は29cmに復元される。外面は黒塗りで丁寧な調整によって光沢がある。

1354～1357は小型壺形土器の口縁部である。1354は小型の壺と考えられるが、口縁は欠落している。口径は6.8cmに復元される。斜方向のヘラナデが一部確認できる。1355は口径9.2cmである。頸部から口縁部に向かって外反する器形で口唇部は平らに整形される。調整はヘラナデである。1356は無頸の小型壺の口縁部で、三角突帯が貼り付けられる。大きく内湾する器形である。1357は小ぶりの袋状口縁壺である。断面形状は逆「く」の字状となる。屈曲部から口唇部に至る長さが短く丸みをもつのが特徴である。

1358～1364は沈線文及び柳描文を有する壺形土器の肩から胴部にかけての資料である。1358は3条の沈線文を施し、下位に柳描波状文を巡らせる。沈線文は、棒状工具による単沈線を上下に連続して施文している。波状文の凹線は一定ではないため、目の粗い工具と考えられる。外面は丁寧にヘラナデ調整が施され光沢がある。



第249図 弥生時代中期 西部出土土器 (13)



第 250 図 弥生時代中期 西部出土土器 (14)

る。1359 は頭部と肩部の間となる。3条の沈線文と柳描波状文の文様は1358と同様であるが、文様の凹線が深くはっきりしている。1360は頭部にあたる資料である。上位に7条の沈線が施され、その下に波状文が描かれる。いずれも7条の凹線で構成されることから、同じ柳状工具による施文と考えられる。1361～1363は肩部資料である。全て横位の柳描波状文が施される。1364も肩部であるが、上から縦位沈線、柳描波状文、縦位沈線文と施文される。3つの文様帯に使用される工具は同じ柳状工具と考えられる。

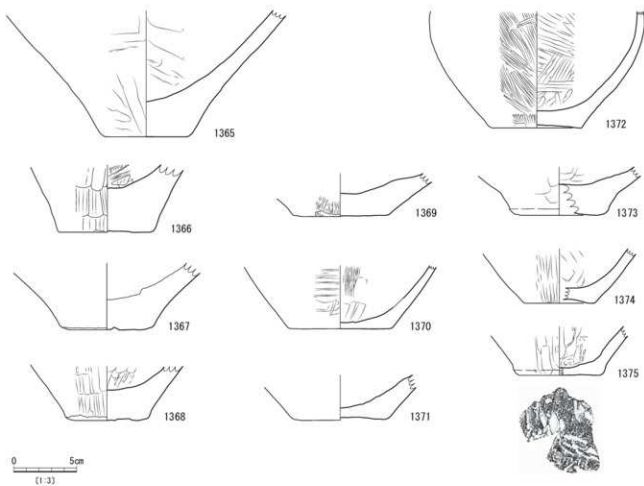
1365～1375は胴部と底部である。1365は底径6.4cmで底が厚い。胴部に向かって大きく外反する。外面は斜位のヘラナデでなめらかな器面である。1366は底径7.6cm、外面は縦方向のヘラナデ調整だが剥離が目立つ。1367・1368はほぼ同じ底径である。1367は内外面とも、器面が荒れており調整が確認できない。特に内面は薄皮状に剥離する。1368はヘラによる細かな縦ナデにより、光沢がある。底端部は整形時の指オサエが若干ながら確認できる。1369は底径6.8cmで、底部から胴部に向かって大きく外傾する器形である。内面は剥落が大きく、露胎する。1370・1371は底部厚が比較的薄い資料である。

1370は底径8cmで器壁が薄く、横ミガキ調整による器面できれいである。1371は底部より体部が厚くなり、上げ底である。

1372～1375は若干、上げ底となる土器である。1372は底部から胴部の資料で、復元底径7cmである。残存部で胴部最大径に達する位置が見られ、形状は球形に近い。外面は斜位のミガキ調整が施され光沢が生じる。全体的に黒色で、黒塗り土器の可能性が考えられる。また内面も黒色である。底部から胴部にかけて、精緻な調整が施される。1373は復元底径7cmで、内外面とも器面の磨減が著しい。底部中央がやや凹む。1374は端部から胴部にかけて膨らみをもちながら立ち上がる。外面はミガキ調整でなめらかな器面である。1375は底部端が外側に張り出す。外面は縦方向のミガキ調整が見られ、精緻なつくりだが内面は底部円形粘土盤と胴部接着時の工具調整が明瞭に観察できる。また胎土もチャート、石英などの鉱物が目立ち、特異である。

鉢形土器 (第252図 1376～1380)

1376～1380は特殊器形の鉢形土器である。1376は口径30.4cmで、胴部から口縁に向かってゆるやかに外反し、胴部最大径付近からはほぼ垂直に立ち上がる。口唇は



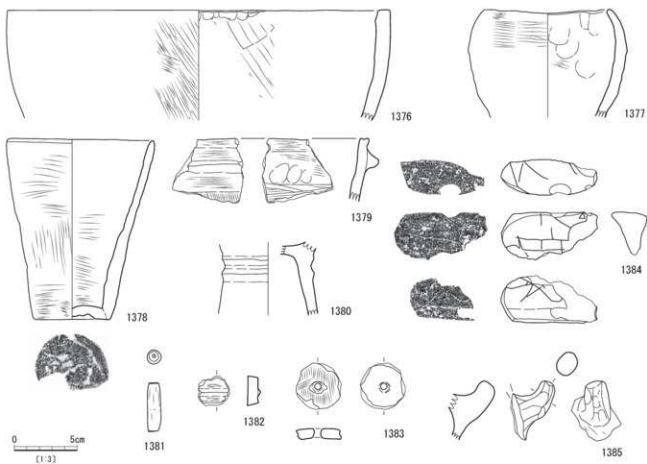
第251図 弥生時代中期 西部出土土器 (15)

平坦に整形され、口縁内面上部には指オサエの痕跡が確認できる。調整は内外面ともに斜位のハケナデ調整である。1377は口径10cmで、胴部から口縁に向かって内湾する。外面は横方向のハケナデ調整だが、指頭圧痕が明瞭で手捏ね風である。口唇もナデ調整はされるが、整形があまく不整である。外面は胴部最大径より下位に被熱の影響が大きく、剥落が激しい。1378はコップ状の器形で完形に近い。底部から口縁に向かってゆるやかに開きながら立ち上がり、口唇は先細りである。底は円盤状粘土塊ではなく、不整形なものを利用して凸凹している。調整は器面が磨減しているため不明瞭だが、上位から横、縦、横のナデ調整が確認できる。器面の色調は橙色を呈し、胎土も雲母を含まず、石英、黑色鉱物が目立つ。器形も含めて、注意を要する資料である。1379は口縁下部に三角突帯を有し、口唇は凹線が見られる。胴部はハケナデ調整で、突帯付近が横ナデとなる。内面は指頭圧痕が見られるほか、横方向のハケナデ調整も施される。

1380は鉢形土器の中空脚部である。屈曲部に2条の三角突帯が貼り付けられる。胎土は黄白色を呈し、他の土器とは異なる。やや軟質で器面が磨減しているため、調整は不明である。搬入土器と考えられる。

土製品 (第252図 1381~1385)

1381は土製の錘の完形品である。長さ3.9cm、径1.1cmで孔の径は0.3cmである。中央部に整形時の指圧痕と考えられる凹みがある。両端とも比較的丁寧に整形されている。1382は甕の胴部片を打ち欠き、円形に成形した円盤状土製品である。径は約2cmと小さい。1383は有孔円盤状土製品である。甕の胴部片を円形に打ち欠いて整形し、中央部を穿孔する。孔は土器内面から摺ってあげられたと考えられる。1384は甕突帯部の転用土製品である。背面には体部と突帯の接合線が確認できるが、全体的に磨ることで各面をなめらかに整えている。三面に単沈線による文様、絵画が施される。沈線断面は鋭角な凹みとなっており、正面および背面の線刻の一部に朱と思われる顔料が確認できる。正面は直線的な線刻の組み合わせから絵画と考えられ、抽象的に描かれたシカを連想させる。絵画上部には三角形が描かれる。頭部と考えられる箇所にも顔料が残存している。背面及び上面は直線と曲線が線刻される。1385は一見すると組合牛角形把手だが、器体部の湾曲から牛角状の突起端部が上方向へ向く器形と考えられる。そのため器種は判然としない。円柱状の粘土塊を湾曲させながら貼り付けた後、ナデ調整となっている。



第252図 弥生時代中期 西部出土土器 (16)

③調査区東部（第254図）

東部出土の土器として142点を図化掲載する。東部の地形は先述してきたとおり、44・45区ライン付近を南北方向に走る谷を境に東西に幾分傾斜はもちながらも安定した地形が見られる。東部とした範囲で最も標高の高い35・36ラインを最高地にして、東に向かって緩やかに傾斜し谷筋に至るが、その谷間の41～44区ライン付近に、遺物の出土域の一つを認めることができる。そのほかには北からD-48区、F-53区、K-51区周辺に出土域の集中が見られるが、いずれも傾斜地である。これは分布図上の空白箇所が後世の削平を受けている影響と考えられる。

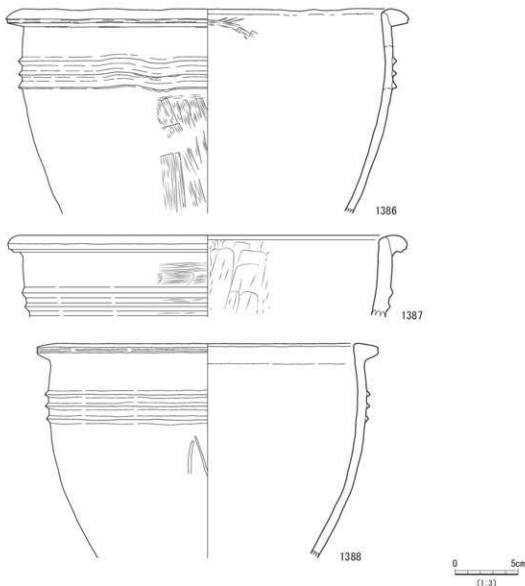
出土土器の器種組成は西部と大きな差異は見られないが、甕形土器及び壺形土器の口縁部形状に変化が看取されるため、型式的な変化が存在すると考えられる。また、

特筆される出土土器として、西部では出土していない凹線文土器がみられることが挙げられる。

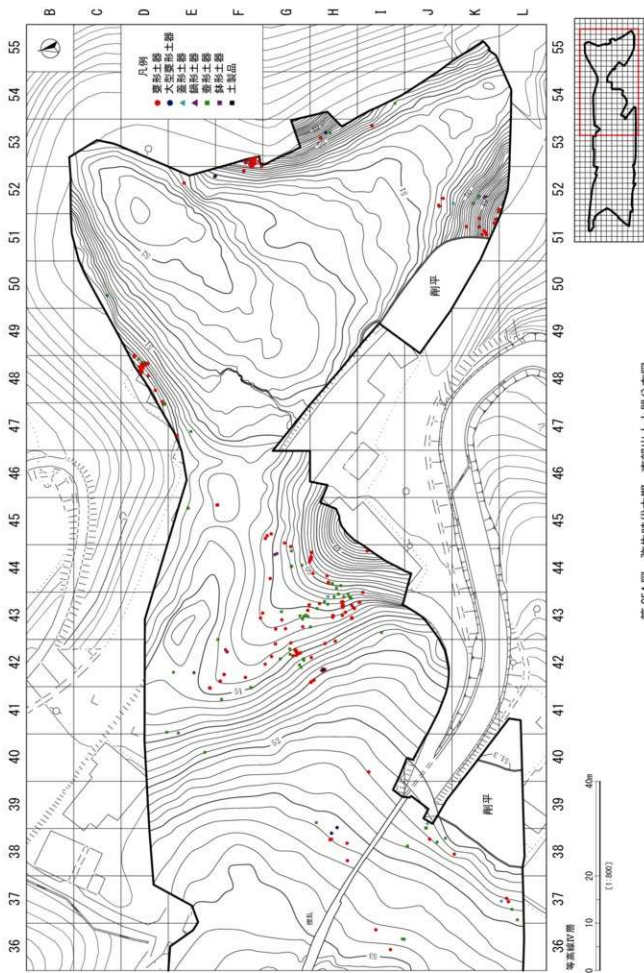
甕形土器（第253～261図 1386～1466）

1386～1466は甕形土器である。口縁部、胴部、底部の順に掲載する。

1386～1388は口縁部が短く、端部が下に向く土器群である。1386は口径32cmで口縁上面が丸くなる。胴部には3条の三角突帯が巡る。外面の突帯下位は縦方向のハケナデ調整でススが付着する。1387は口径31.6cmで、口縁は玉縁状となる。凹線は端部でなく下面に施され、3条の三角突帯が確認できる。1388は口径27cmで3条の三角突帯を有す。口唇部には凹線が巡り、ナデ調整も丁寧である。突帯下位も丁寧なヘラナデ調整が主体だが、被熱による器面剝離とススの付着で一部不明瞭である。1389は口径が38.4cmで、胴部から口縁部に向かっ



第253図 弥生時代中期 東部出土土器（1）



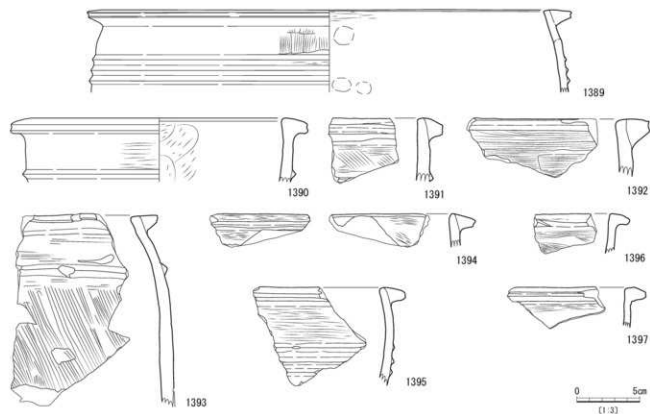
第 254 図 弥生時代中期 東部出土土器分布図

て窄まる器形である。3条の三角突帯が胴部に巡る。最大の特徴は口縁部と突帯部間の調整が縦方向の丁寧なハケナデ調整であることである。時期差を示すものか注意が必要である。1390は口径20cmである。残存部の調整は、外面は横方向のヘラナデで、内面は斜めのヘラナデであるが、いずれも丁寧である。突帯から口唇部までススが付着する。1391は破片資料である。口唇部が幅広く断面台形状である。残存部外面は横、斜めのハケナデ調整である。1392は口縁断面形が三角形となり、横ナデ調整である。口縁下面にススが付着する。1393は口縁から胴部までの資料である。突帯は1条で、突帯を境にして上位が横ナデ、下位が斜めのハケナデ調整となる。1394は口縁部断面が三角形となり、口唇には浅い凹みの凹線が見られる。1395は内湾する器形で3条の三角突帯を有す。突帯の幅は狭く、土器本来の大きさにわりに貧弱である。口唇部には凹線が見られない。1396・1397はやや小ぶりの甕の口縁部片である。1396は外面に横斜ハケナデ調整が明瞭で器面が整っている。1397は口縁部下面までススが付着し、黒色の器面を呈す。

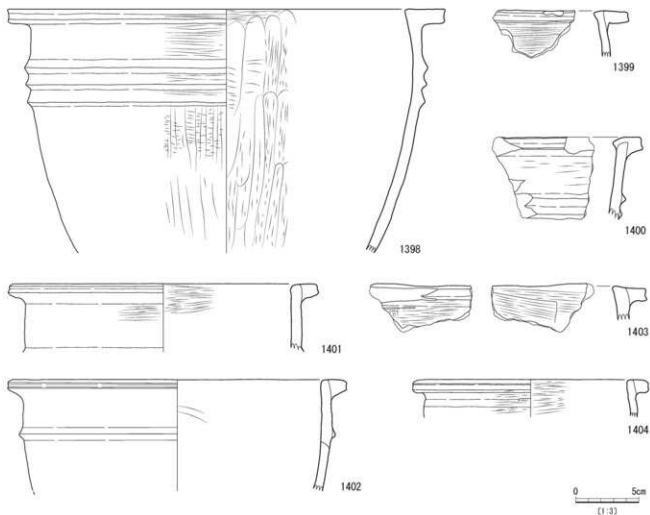
1398～1404は口縁部が水平となる甕形土器である。1398は口径34.8cmで、口縁部が逆「L」字状となる。口縁部から胴部にかけて残存し、胴部最大径となる箇所には3条の三角突帯が巡る。内外面ともにヘラナデで丁寧に調整される。1399も1398同様、外面調整が丁寧である。

口縁部はやや内湾し、口縁部内面が内側に若干突出する器形である。1400は口唇の幅が広く、口縁内側に突起部が見られる。胴部から口縁部に向かってまっすぐ立ち上がる器形と推察される。1401は口径が24.3cmで、胴部から口縁部に向かってまっすぐ立ち上がる器形である。胴部には1条の突帯が確認できる。口縁部の断面は四角形である。口縁部上面から胴部外面にかけてはススが付着するため、蓋を使用した利用が想定される。内外面ともに横ナデ調整である。1402は口径26.8cmで突帯は1条である。内外面ともに器面の磨滅が激しく、調整は不明瞭である。1403は口縁部上面が若干凹む。口唇部には凹線が施される。内面は横方向のハケナデが明瞭に確認できる。1404は小型の甕形土器で、口径は18.6cmである。口唇部には大きさにわりに幅広い凹線が巡る。口縁部下位には調整時に押圧したために凹みが生じて、縁がついている。

1405～1414は胴部に三角突帯を有さない土器である。1405は口径26.8cmで底部から口縁部に向かって外反する。口縁は歪みを有し、上向きにのびる。内外面とも斜めのハケナデ調整だが、内面はナデ調整が最終的に施される。胴部下半から口縁部にかけてススが付着する。1406は口径24.8cmで、口縁部から胴部下半までが残存する。口縁部は歪みが認められるが、ナデ調整は丁寧である。外面は胴部下半から中央にかけては縦、斜め方向



第255図 弥生時代中期 東部出土土器(2)

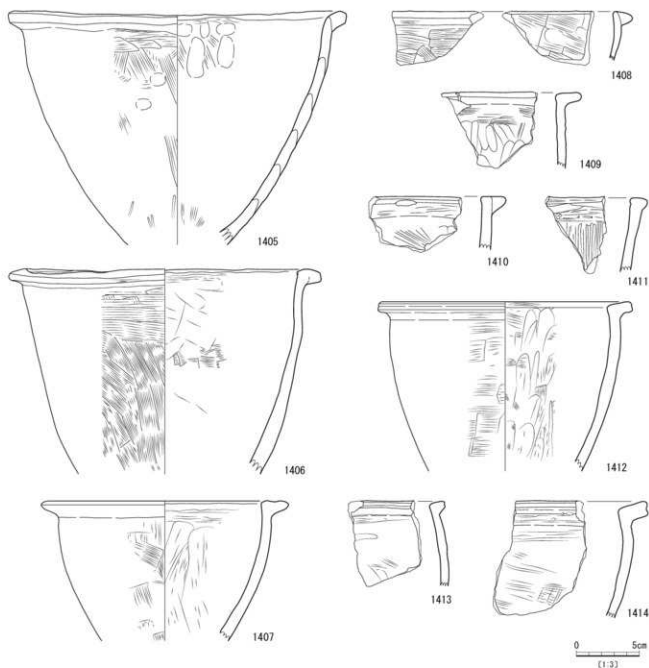


第 256 図 弥生時代中期 東部出土土器 (3)

のハケナデ調整で、上半は最終調整として横方向のナデ、ハケ目が確認できる。1407 は口径 19.6cm である。口縁部は断面三角形で、内面胴体部接合箇所が明瞭に観察できる。外面はおおむね縦、横方向のナデ調整が主体である。内面はヘラナデで、スガが付着する。1408 は端整な断面三角形の口縁で、内外面ともにハケナデ調整である。1409 は口縁が逆「L」字状になるが、胴部の厚さと変化がなく細長い。色調はにぶい橙色で、外面にスガが付着する。1410 は断面三角形の口縁である。胴部は残存部の観察では、斜めのハケナデ調整で口縁直下は横ナデである。色調はにぶい橙色で、雲母を含まない。外面にはスガが付着する。1411 は口縁が小さく、歪み大きい。外面は縦方向のハケナデ調整で口縁部と体部の接合箇所は横ナデで調整される。1412 は口径 19.4cm。口縁部は断面形が四角形となり、口唇はわずかながら凹みが認められる。外面は横ヘラナデ、内面は縦ヘラナデ調整である。色調はにぶい橙色で特徴的である。1413 は断面三角形の口縁で口唇には凹線が巡る。胴部から口縁部にかけて、スガが付着する。1414 は口縁部断面が四角形

を呈し、上方向に傾く。口唇には凹線が確認できる。外面にスガが付着する。

1415～1422 は、口縁部形態に特徴のあるものと有文の資料である。胎土中に雲母を含有する土器群のため在地のものと考えられるが、他地域の文化的影響を想定させるものである。1415 は口縁が断面三角形で口唇部には凹線が見られる。胴部の通常三角突帯が見られる箇所に櫛描きによる波状文が施される。1416 は口縁の下に櫛描きの糜状文が施される。櫛の単位は 6 条で胴部が欠損しているため判然としないが、2 段の文様帯があったと考えられる。1417 は口唇部に凹線が巡り、口縁部上面には 4 本の沈線で構成される文様帯が連続して施される。内外面ともヘラナデ調整である。1418 は胴部破片である。棒状工具による 3 条の沈線によって波状文が施される。1419 は口縁が断面四角形を呈し、端部が丸みをもつ。内外面ともに横方向のヘラナデ調整で丁寧に仕上げられ、スガが付着する。1420 は口縁断面が二等辺三角形となり、長辺部となる口縁部下面が横方向に念入りにナデ調整される。1421 は比較的薄い器厚で、胴部から口



第257図 弥生時代中期 東部出土土器（4）

縁部に向かって急激に外へ屈曲する器形である。口縁部は粘土を引きのばすかたちで整形される。調整は丁寧なヘラナデ調整で、外面はさらに縦のミガキ調整が施されて光沢がある。1422は1421と器厚や調整が類似するが、口縁部が下向きとなる点が異なる。屈曲部と体部の厚さがほとんど変わらず、薄手のつくりである。

1423～1429は口縁部形態、貼付技法から擬朝鮮系との関連が推察される小型の土器である。1423は口径16.6cmで、丸みを帯びた断面三角形の口縁である。内外面調整はハケナデで外面全体を調整した後、口縁部に粘土帯を貼り付けた痕跡が確認できる。口縁部はやや歪みが見

られる。1424は口縁部破片である。下がり気味の口縁で端部は丸みがある。1425は口縁の歪みが顕著で体部上端に直行して口縁粘土帯を貼り付けているため、部分的段差が生じている。外面は横方向のヘラナデ調整でススが付着する。

1426・1427は口縁が整形時の指オサエの影響が強く残り、歪な形である。1426の口縁は体部に粘土帯が貼り付けられた後、上面に再度粘土を重ねて整形される。全体にナデ調整が施される。1427は胴部が外に膨らむ器形である。内面には調整時に出た粘土塊がそのまま焼成される等、粗さが目立つ。外面はナデ調整である。1428は

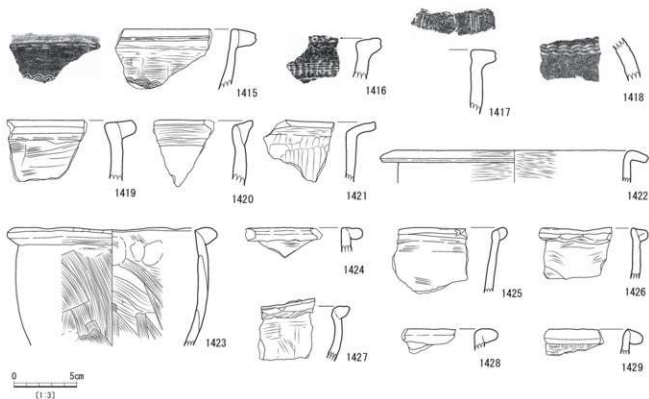
口縁部内側が丸みを帯びる。内外面ともに器面の剥落が多いが、断面では粘土帯の貼り付けの弱さが観察できる。1429は体部に断面円形状の粘土帯を貼り付けて口縁部を作出している。口縁部下には横方向のハケナデ調整が施されるが、接合部付近のみ調整が至らない状況が見られる。

1430~1442は口縁が上向きに長くのびる資料で、その中で1430~1436は胴部三角突帯の貼付位置が口縁から離れる土器である。1430は口径が32cmで、口縁端部に向かって先細りに仕上げる。胴部には幅広の三角突帯を3条巡らせ、外面は横ヘラナデ調整で器面を整える。1431は口縁部の厚さが胴部より厚くなり、やや内傾する器形である。口径31cm、2条の三角突帯が残存し、口縁部下位まで部分的にススが附着する。外面は横方向のヘラナデ調整である。1432は口縁部が窄まる器形で口径27.1cmに復元される。胴部には3条の三角突帯が貼り付けられ、突帯の上位は横ナデ、下位は縦のハケナデ調整となる。1433は口径27cmで口縁部上面がやや凹む。3条の三角突帯が胴部に巡り、縦のハケナデ調整後に横ナデで最終調整される。1434は口径25.5cmで、胴部から口縁部に向かってやや大きめに開く器形である。口縁部器厚が胴部より厚い。3条の三角突帯が貼り付けられ、外面は横ナデ調整される。1435は胴部から口縁部までススが附着する。口径は20cmで口縁上面が反るような形である。外面調整は磨滅による影響で不明瞭である。

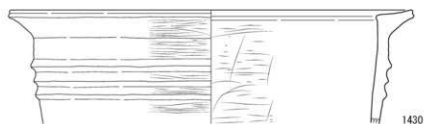
1436は口径31.2cmで、胴部残存部に2条の三角突帯が確認できる。横ヘラナデ調整で、ススが口縁部から突帯部まで附着する。

1437~1441は三角突帯の貼付位置が口縁部に近くなる土器である。1437は胴部から口縁部に向かってほぼまっすぐに立ち上がる。口径29.2cmで、口縁部と胴部接合箇所に稜がなく、緩やかに外反しながら端部に至る。内面の横方向ハケナデ調整が明瞭である。1438は口縁部が薄く整形される。口径は24cmで口縁部上面はやや凹む。胴部には三角突帯が2条巡り、ススが附着する。外面はヘラナデ調整主体である。1439は口径が20.6cmで、やや小ぶりである。口縁部器厚が薄く、上面が凹む。また、口縁部内側が突出する。胴部には2条の三角突帯が巡り、外面はススが附着する。外面突帯下位と内面は、ハケナデ調整である。1440は口径29.2cmで、口縁部上面が若干膨らみをもつ。口縁部直下に起伏の少ない1条の三角突帯が確認できる。1441は口縁部から胴部下半まで残存する。口径26.6cmの資料である。口縁部はやや厚みをもって整形され、直下に3条の三角突帯が巡る。外面突帯の下位は縦方向のハケナデ調整である。

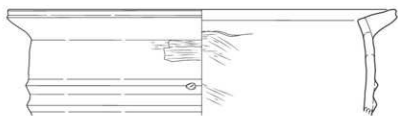
1442は口径20.5cm、器高31cmの平底土器である。厚みのある底部から緩やかに外傾し、底から24cm付近で口縁部に向かって窄まる長胴の器形である。口縁部は上向きで、端部は丸みをもつ。胴部最大径より若干上位に断面台形状の突帯が1条巡る。外面は底部から突帯までは



第258図 弥生時代中期 東部出土土器(5)



1430



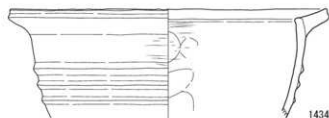
1431



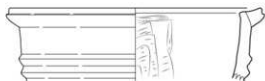
1432



1433



1434



1435



1436



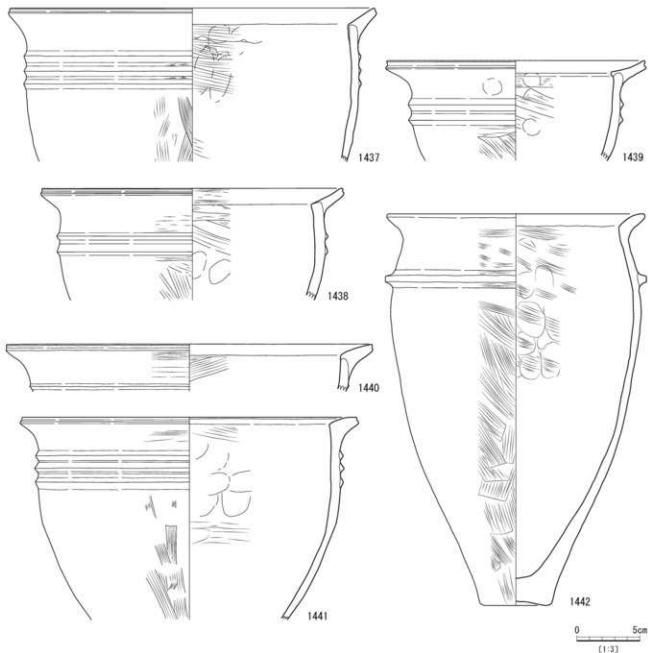
第 259 図 弥生時代中期 東部出土土器 (6)

斜方向のハケナデ調整が施され、突帯上位は横、斜方向のナデとなる。内面は胴部上半がハケナデ調整だが、下半は磨減によって不明瞭である。長胴の器形と口縁部、底部の特徴から東九州系の文化的影響を受けた在土器と推定される。

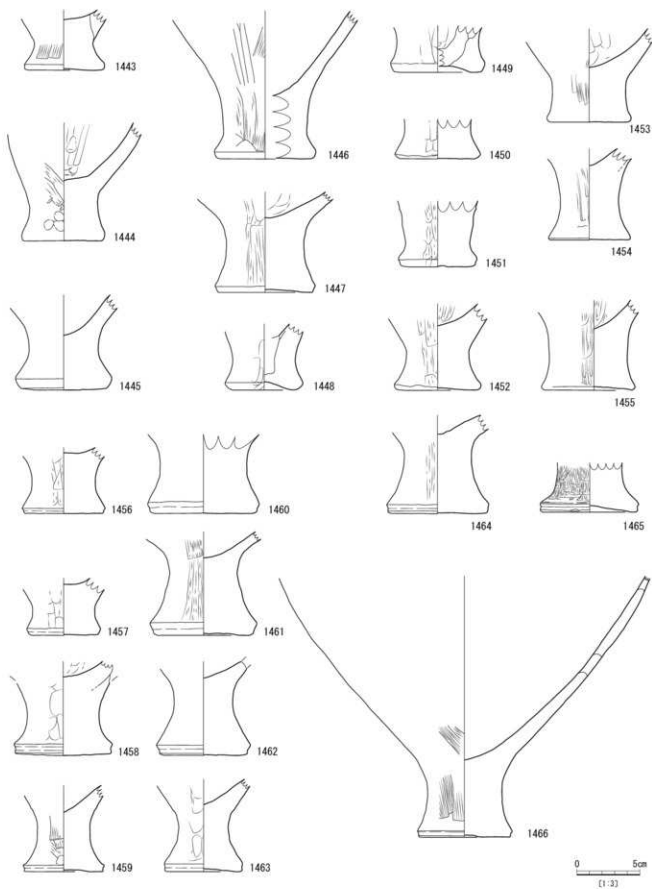
1443~1466は脚台である。西部同様、端部に丸みをもつもの、凹線をもつものが見られたが、くびれないものは東部では見られなかった。端部に凹線がなく丸みをもつが面取りされる。

1443は脚台端から内底部までの高さが4cm程と低くなる。外面は丁寧なハケナデ調整である。1444は脚台から胴部に至るくびれが弱い。内外面ともヘラナデ調整

で、特に内面は工具の押しあて痕が目立つ。1445は脚台端部の調整が粗く凸凹している。外面はハケナデ調整であるが、胎土の鉱物が大きいため剥落して隙間穴が目立つ。1446はハケナデ調整で、脚台端部は丸みをもつ。1447は端部を丁寧にナデ調整して整っている。1448・1449は明確に上げ底となる底部で、中心に粘土の剥離痕が明瞭に観察できる。1450は外面をヘラナデ調整で整えるが、端部は整形が粗いため凸凹している。1451は底面形状が楕円形を呈す。端部から胴部に向かって内側にくびれた後、ほぼまっすぐ立ち上がる器形である。1452は器面に凹凸が目立ち、手捏ね風である。器面は明褐色を呈し、ほかの脚台に比べ明るい色調である。1453は脚



第260図 弥生時代中期 東部出土土器（7）



第 261 图 弥生时代中期 东部出土土器 (B)

台端部の張り出しが弱く、くびれが目立たないため平底風となる。ハケナデ調整が確認できる。1454・1455は端部の張り出しが弱く、比較的まっすぐ胴部に至る。いずれも端部の丸みが少なく、接地面からすぐに内側にくびれる。

1456~1466は端部に凹線を有すものである。1456は高さが低い脚台で、器面は縦のヘラナデ調整が施される。底も丁寧な調整である。1457は1456と類似する脚台端径と調整であるが、調整に用いた工具痕がより明瞭である。1458は脚台端部の凹線の凹みが深く明瞭で、内底部のヘラナデ調整が丁寧である。欠損部の観察から脚台部と体部の接合箇所が確認できる。1459は底中央が凹み、外面はハケナデ調整である。1460は脚台端径が8cmで比較的大型である。被熱による影響で、外面は剥離が目立ち調整も判然としない。1461は上げ底気味の底部である。まだらに器面が剥離するが、一部分でハケナデ調整が確認できる。1462は端部凹線が明瞭であるが内外面とも剥離が著しい。1463は接地面がやや小ぶりで上げ底である。くびれ部にススが細い帯状に付着する。1464は端部の凹線が明瞭である。器面が磨滅するが、縦方向のナデ調整がかるうじて観察できる。1465は目の細かなハケナデ調整を主体に、丁寧に器面が整えられる。底面は中央部が押圧によって凹む。1466は胴部から底部にかけて残存する。脚台端径7.2cmで胴残存部の最大径が約29cmとなり、胴部へ向かって大きく開く器形である。脚台端には凹線が巡る。外面は被熱により剥落が目立つほか、ススの付着も認められる。また、底中央に若干の凹みが見られる。

蓋形土器 (第262図 1467~1476)

西部に比べ東部での出土がより多く、10点を掲載する。端部に断面三角形の突帯を貼り付けるが、位置が端

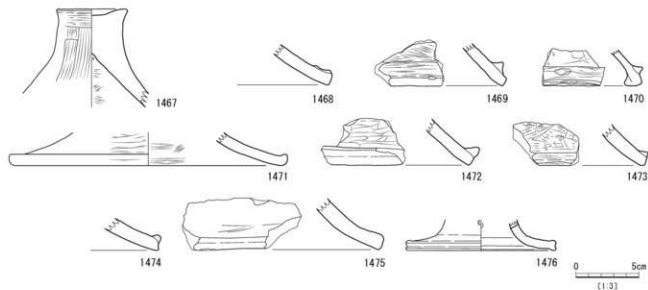
になるものとやや頂部に寄るものが見られる。また、復元した径や穿孔の有無などから甕形土器用と壺形土器用の2種を確認した。

1467~1475は甕形土器の蓋である。1467はつまみ部である。「ハ」の字状の末広がりとなる器形で、頂部が凹む。外面は縦方向のハケナデによってしっかりと調整される。1468は端部に幅広の粘土帯を貼り付け、中央部を凹ませることで断面形上、突帯が2条となるように整形される。内面は黒褐色の色調を呈す。1469と1470は断面三角形の突帯位置が頂部側に寄る。1469は横ナデで丁寧に調整される。1470は外面のほか、内面にも突帯があり断面三角形を呈す。端部に明瞭な突帯をもち、内面には幅3.5cmでススが付着する。1471は口径22cmで突帯の背は低くなる。内外面とも横ナデ調整で、内面にはススが付着する。1472は断面三角形の突帯を端部に貼り付ける。横方向のミガキ調整により光沢がある。内面は端部ほど黒褐色の色調を呈す。1473は全体的にざらざらとした器面だが、調整は丁寧である。貼り付けられる三角突帯の高さが低い。1474は背の低い突帯を貼り付けることで、口唇が凹むようになり広く口縁部の口縁に類似する断面形となる。内外面ともハケナデ調整主体だが、外面は端部付近が横ナデとなる。1475は三角突帯がない蓋形土器である。厚さが1cm以上あり、厚手である。調整は内外面とも横方向のヘラナデである。

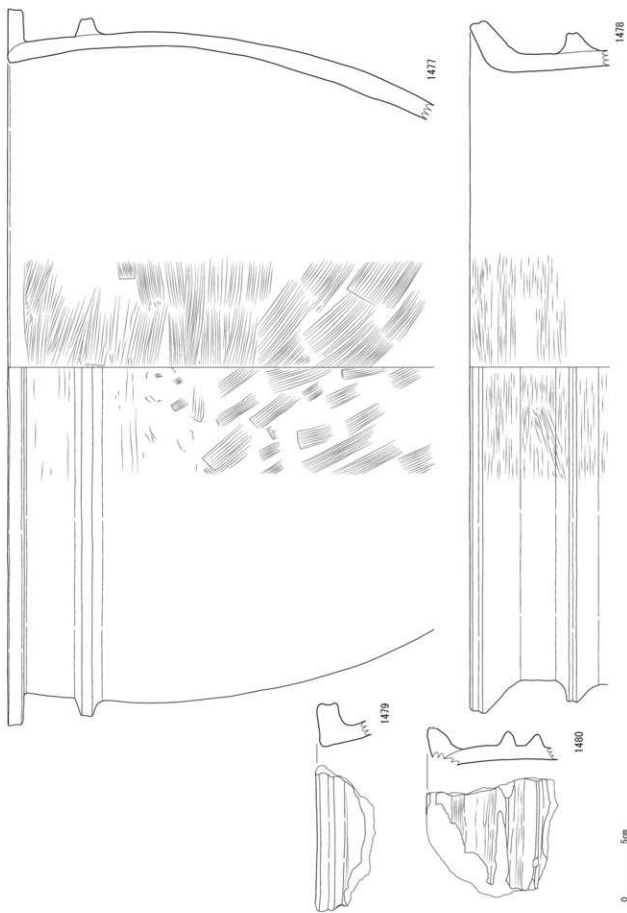
1476は小ぶりの壺形土器の蓋である。端部には凹線が巡り、急激に頂部へ向かって立ち上がる。また、直径0.3cm程の穿孔が見られる。

大型甕形土器 (第263図 1477~1480)

西部同様出土量は少ないが4点を掲載する。1477は口径56.8cmで口縁から胴部が残存する。胴残りの器形で、断面台形状の突帯が1条巡る。口縁は長くほぼ水平



第262図 弥生時代中期 東部出土土器 (9)



第 263 图 弥生时代中期 东部出土器 (10)

にのびる。外面下位にススが附着する。1478は口径54.8cmで口縁は上向きである。口唇には幅広い凹線が巡る。口縁部下位には断面台形状の突帯が巡る。1479は1480に比べ口縁が短くなり、口唇に明瞭な凹みが見られる。1480は口縁端がやや丸みを帯び、胴部に2条の三角突帯が確認できる。上位の突帯は接合部が未調整で隙間が見られる。

壺形土器 (第264~266図 1481~1523)

東部でも西部同様、口縁が逆「L」字状を呈すものが主体的に見られた他、無頸壺、広口口縁壺といった器種も確認できた。口縁部、底部に大別して掲載する。

1481は口径15cmで下がり気味の口縁を有す。口唇部は欠損している。頸部は口縁部に向かってほぼまっすぐに立ち上がり、口縁はやや外傾する。肩部付近には2条の沈線が巡る。1482は口径19cmで頸部から口縁部へ向かって外傾し、口縁が開く形状である。口唇には凹線が巡る。外面の頸部にはススが附着する。1483は1482に類似した器形で、口径は17.5cmである。内外面ともに横方向のヘラナデ調整である。縦方向にススが附着するが、廃棄後に附着したものと考えられる。

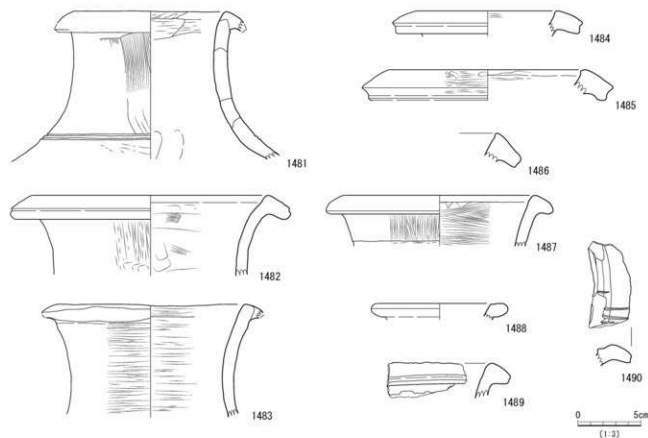
1484は口径15cmで部分的に頸部まで残存する。断面長方形で口唇に凹線が巡る。1485は頸部以下が欠損する。口径19.8cmである。断面長方形の形状で口唇に

幅広い凹線が見られる。1486は断面三角形を呈し、丁寧なナデ調整である。1487は口縁端が丸みを帯び、下がり気味の形態である。口径18cmで外面は縦、内面は横方向のハケナデ調整である。1488も1487同様、口縁端が丸くなる。口径18cmとやや小型で、整形時の指オサエにより若干凸凹し、手捏ね風である。1489は全体が磨滅し、調整などが不明瞭である。口唇部には浅いながら凹みが見られる。1490は比較的薄手のつくりで、口縁上面に3条の沈線が施される。内面は断面三角形に突き出す。

1491~1493はいわゆる二又状口縁となる資料である。1491は口縁から肩部までが残存する。口径は20.1cmで、頸部で窄まり口縁に向かって大きく開く器形である。口縁下に下向きに突帯を貼り付ける。1492は口径22cmで、口縁部から若干ながら頸部まで残存する。口唇には凹線が巡り、口縁と同様の形状にした突帯が口縁下に貼り付けられる。内面は横方向にミガキ調整され光沢がある。1493は1492に比べ器厚が厚い。口唇および口縁下の突帯に、それぞれ二段の縦方向刻みを施す。

1494は頸部から口縁に向かって大きく反し、朝顔状に開く器形で口径は18.4cmである。外面頸部は縦方向ミガキで光沢が出る。口唇には凹線が巡る。

1495~1498は無頸壺である。総じて壺形土器と類似する口縁形状で、上向きに貼り付けられる。1495は細長



第264図 弥生時代中期 東部出土土器 (11)

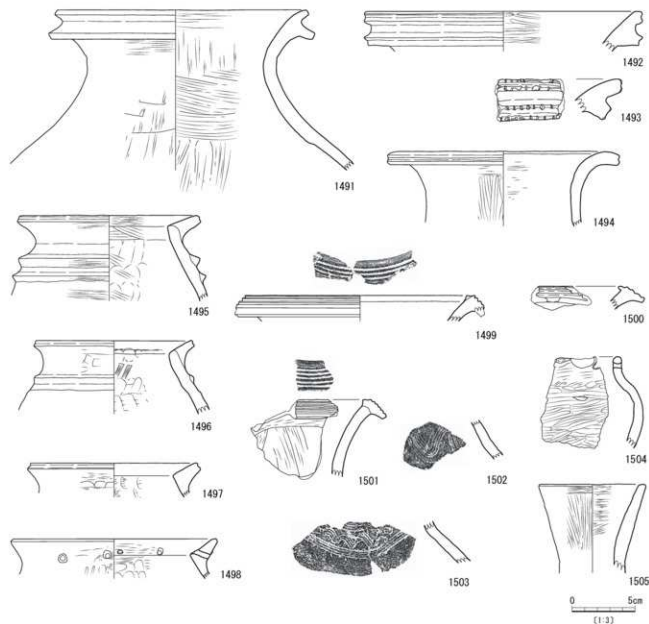
口縁を有し、口唇には凹線が巡る。口縁部下位には2条の三角突帯が貼り付けられ、突帯下位は横方向のミガキ調整で上位はナデである。内面はハケナデ調整が若干残る。口径は6.9cmである。1496は口径12.4cmで1条の三角突帯が確認できる。口縁内面は横ナデ調整が丁寧で光沢感がある。1497は口縁部の資料で口径13.2cmである。整形が丁寧で稜線が明瞭である。口唇には凹線が巡る。1498は口唇部が丸みを帯びる。口縁には穿孔が2か所確認できる。いずれも焼成前に内側から棒状工具を用いて穿っている。口径は16.4cmである。

1499～1501は口縁部に4～5条の沈線が横方向に巡る。内面側に突き出た部位を有し、いずれも口縁は下がりが気味で、正対した時に沈線が目立つ。

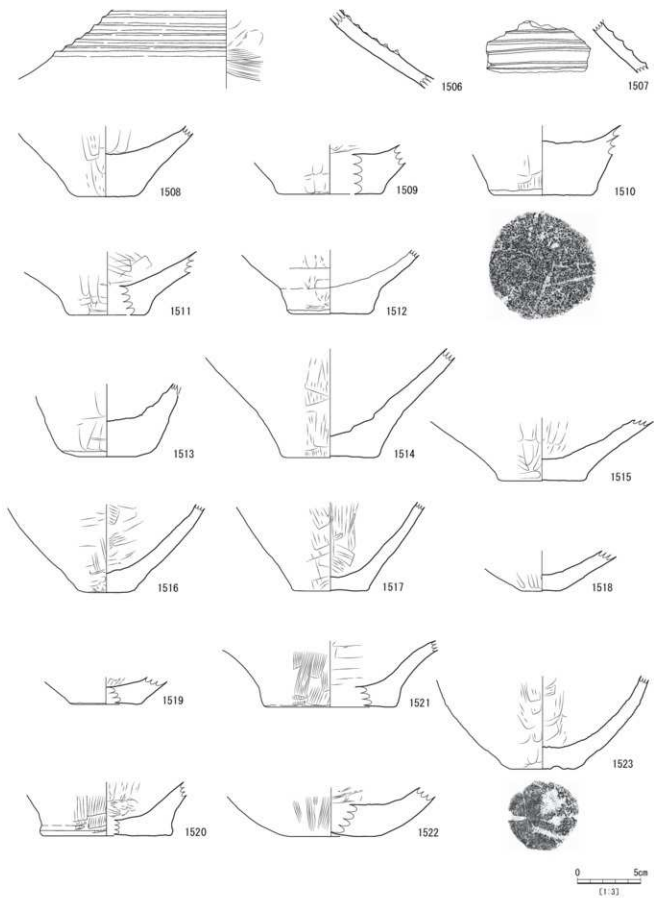
1502・1503は櫛描きによる施文を行うもので、波状文を描く。1503はその下に4条の弧状沈線が巡っている。

1504は胴部が外に大きく張り出し、口縁に向かって窄まりながらまっすぐ立ち上がる器形である。口縁部には径0.3cm程度の穿孔が見られ、粘土が内側から外へ盛り上がることから、焼成前に内側から穿ったことが推察される。外面は横方向に念入りにミガキ調整が施されているが、内面はナデ調整が目立つ。1505はいわゆる長頸壺の口縁部から頸部にかけてのものであるが、器厚が厚く一般的なものに比べ長さも短い。口縁部端に向かってゆるやかに外反する器形で、口径は8.4cmである。

1506・1507は肩部である。1506は7条の三角突帯が巡る。復元した径は33cmで、最大径はそれ以上と推察さ



第265図 弥生時代中期 東部出土土器 (12)



第 266 図 弥生時代中期 東部出土土器 (13)

れ、大型の壺と考えられる。内外面とも丁寧なナデ調整である。1507は現存で4条の三角突帯が確認できる。突帯部も横ナデできれいに仕上げられ、突帯の後も明瞭である。

1508～1523は底部である。その中で1508～1513は器厚が厚く、3.5cmから4.5cm程度の厚みを有す。そのため、内底部は平坦となる傾向が見られる。1508はヘラナデが若干確認できるが、器面の磨減が激しい。1509は底部端から胴部に向けての立ち上がりにくびれが見られる。1510は外面にハケナデ調整がある。底は磨減しているものの、木葉痕が一部確認できる。1511は底部のくびれが明瞭な器形で、外面にはスガが付着する。1512も1511同様の器形で胎土中の石英粒が大きい。1513は底部端から胴部に向かってまっすぐに立ち上がる。内面はほぼ剥落し露胎している。

1514～1521は底部の厚さが器体部と大きく変わらないものである。1514はやや上げ底である。外面はヘラナデ調整で黒塗りとなる。1515は底径が6.7cmであるが、胴部に向かって大きく開く器形となることから安定性を欠く印象を受ける。外面調整は丁寧である。1516は底径約4cmと小さく、胴部に向かって膨らみをもって立ち上がる。外面はミガキ様のヘラナデで光沢がある。1517はやや上げ底で1516より大きくないものの、胴部に向かって膨らみをもって立ち上がる器形である。内外面ともヘラナデ調整である。1518は1516のように底径

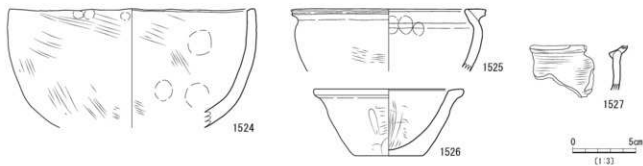
に比して胴部に向かって大きく開いて立ち上がる器形で、内外面の剥落が著しい。外面に一部ミガキ調整の痕跡が確認できる。1519は若干上げ底気味となる。1520・1521は底径が比較的大きい底部である。1520は復元底径が10.2cmで、外面にハケナデ調整が明瞭に残る。1521も1520と類似した調整が施されている。

1522と1523は底部から胴部にかけて丸みを帯びた器形である。調整はナデであるが、1522に比して1523が丁寧である。1523は底に圧痕が見られるが、原体は判然としな。

鉢形土器 (第267図 1524～1527)

口縁部がまっすぐ立ち上がるものと断面三角形となるものが見られる。

1524は胴部から口縁部に向かってまっすぐ立ち上がるサラダボウル状の器形で、外面の口縁端と内面に指オサエの痕跡が見られる。口唇は比較的丁寧に調整され平坦になる。口径は19.4cmである。1525は口縁上面が水平となる。口縁は断面三角形で口径は15.4cmである。胴部最大径もほぼ同じで、胴部が張り出す器形である。1526は完形品である。口径が11.8cm、器高5.1cm、底径5.6cmで口唇部は丸みを帯びる。口縁部から底部に向かって緩やかに窄まる器形である。調整はヘラナデによるもので、内底部は若干粗い調整となる。1527は口縁内側に突出部を有し、上面がやや凹む。調整はナデでその他の鉢形土器と比べると薄手のつくりである。



第267図 弥生時代中期 東部出土土器 (14)

(3) 石器

①概要

当該期の遺構外出土石器は総数1,631点である。その出土層位と時期は、Ⅱ・Ⅲa層を主体として大多数を占めるが、出土状況は全体的に混在して層位に基づく時期区分が明確にできないため、ここでは縄文時代晩期から弥生時代前期、及び弥生時代中期に属する可能性のある石器類を一括して報告する。ただし、其中で磨製石鏃や石包丁等の器種については、弥生時代に属すると認識するところである。

石器類の分布状況は遺構の占地性と土器の分布域を考慮し、調査区の西部、東部の各分布を示し内訳を述べる。また、剥片・砕片の大多数を除き、原形を留める石器および石製品を中心に、355点を図示した。なお、石材は肉眼観察により判別した。

②調査区西部(第268図)

C-L-19-36区を一括する。出土石器類は合計1,250点である。器種別の内訳は、打製石鏃42点、磨製石鏃9点、石匙7点、削器・搔器類4点、二次加工剥片23点、石鏃10点、楔形石器9点、石核3点、横刃形石器6点、石包丁2点、磨製石斧30点、打製石斧152点、敲石17点、磨石・敲石類56点、石皿・台石類18点、砥石50点、紡錘車1点、玉類2点、異形石器3点、軽石製品16点、剥片・砕片類790点である。

分布状況は、剥片・砕片類を除いた集中傾向として、D-E-21-22区の谷戸頭付近、D-I-25-27区の微高地周辺、D-L-28-33区の谷間一帯、D-L-34-36区の緩斜面の各地点において比較的広い織りみが見られている。その中で、磨製石斧や打製石斧、磨石・敲石類や石皿・台石類は万遍なくみられ、器種別による分布傾向は特には見いだせないものの、もっとも遺物量の多い谷間部において、石鏃、石匙、石鏃等の出土がやみどりに見られる。また、打製石斧1654・1662がF-29区Ⅲa層より2点並んで出土しており、埋納された可能性がある。その他では、紡錘車1760がH-29区Ⅲa層よりから、更に、管玉1761がF-32区Ⅱ層、棗玉1762がF-31区Ⅲa層から、2点の異形石器1764(E-30区Ⅲa層)及び1765(F-31区Ⅲa層)が、至近距離から出土しており注目される。なお、剥片・砕片類については、黒曜石等の小片や打製石斧の調整剥片等が大半を占め、E-30-31区に集中が見られている。

以下、石器個々の特徴について述べる。実測図の並びは出土区での分布状況に関係なく、順不同である。

打製石鏃(第269・270図1528~1567)

40点図化した。類型は基部形状から、いわゆる平基(I類)と凹基(II類)に大別され、その三角形の長幅比や特徴的な形状等において分類できる。

平基の石鏃は1528-1539の12点である。そのうち

1528-1534はIa類である。長幅比がほぼ等しく正三角形形状を呈するもので、1529・1532・1533は周縁のみの調整で素材面を多く残す。1530・1531は粗雑な二次加工による不整形にある。次に1535-1539はIb類である。長幅比がやや縦長の二等辺三角形形状を呈するもので、1536・1538・1339は一部に素材面を留めている。

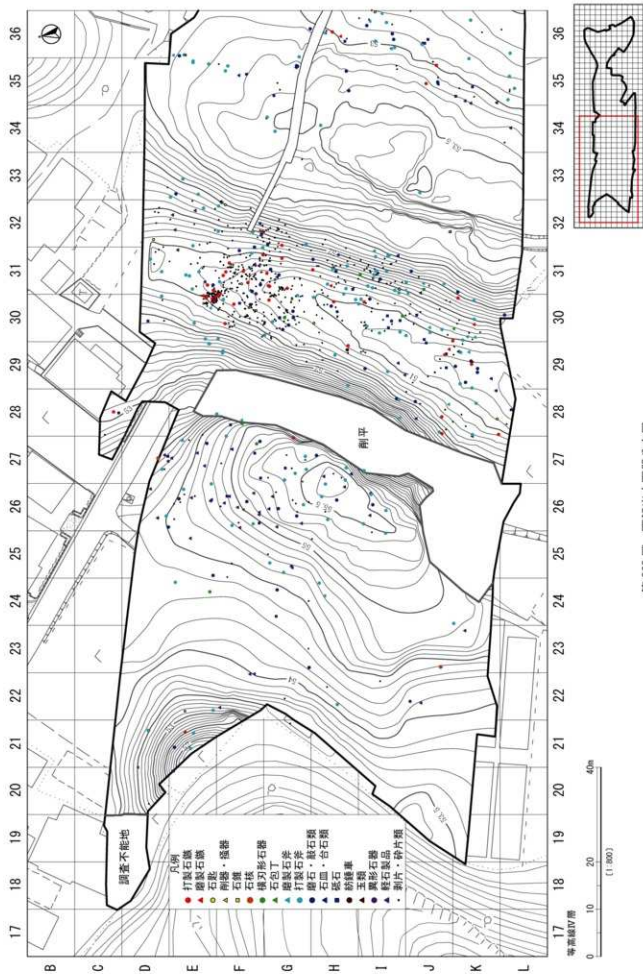
凹基の石鏃は1540-1563の24点である。そのうち1540-1549はIIa類である。長幅比がほぼ等しく正三角形形状を呈し、素材の改善度が高いものが多い。1549は「V」字状のやや深い抉りをもつが、他の多くは内湾気味の浅い凹基の石鏃である。1550-1557はIIb類である。長幅比1.5:1程の縦長の二等辺三角形形状を呈する。IIa類と同様に抉入の浅い基部をもつ。1558はIIc類とした。やや幅広で、側縁を外湾させ、先端部が突出する。1559-1563はIId類である。長幅比が縦長で、平面形は五角形状を呈し、基部は抉りを挟んで基部が左右に斜行する。基部の抉入が比較的深く施されたものもある。1559は大形品であり、残存長2.7cm、幅2.1cm、厚さ0.4cmを有する。また、1562・1563では側縁の上半に明確な肩部の作出がみられる。

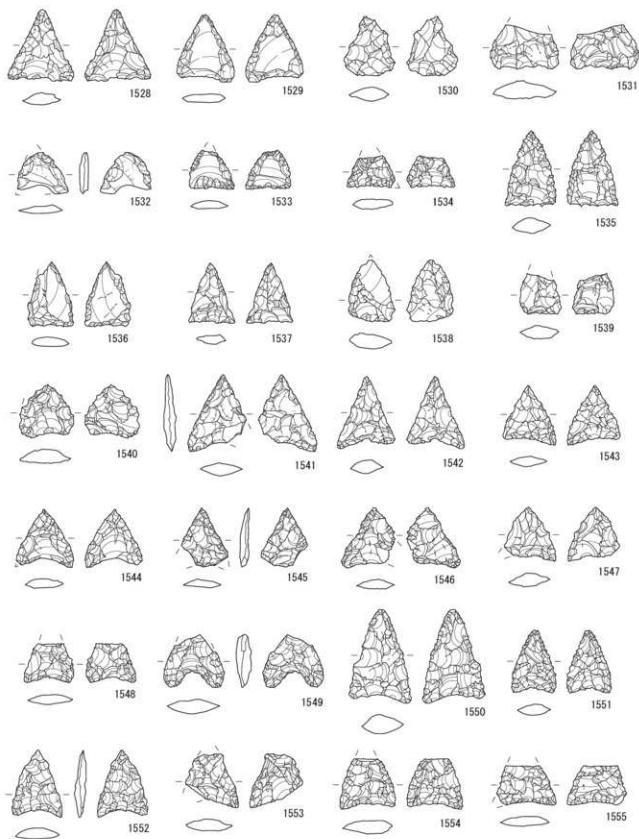
欠損については、40点中25点と割合多く認められる。1564-1566は上半部を、1567は脚部を残す欠損品である。また、1531・1533・1534・1536・1539・1540・1548・1549・1554・1556・1557・1559・1560は上半部あるいは先端部を欠き、1541・1545-1547は脚部を欠く。さらに1532は先端部と基部の、1553・1555・1561は上半部と脚部の両方の欠損品である。なお、使用痕として、1533・1536・1540・1549・1553・1559・1560の欠損では先端から砕けた破損が生じており、特に1559の表面には先端方向からの衝撃による剥離痕がある。

石材は、緻密な安山岩製と、腰岳産に類似する良質な黒曜石製がほぼ大半を占めるが、その他の石材もある。具体的には、緻密な安山岩製が18点(1528-1530-1532・1536-1538・1541-1544・1547・1549・1551・1553・1558・1560・1564)、黒曜石製が16点(1533・1534・1540・1545・1546・1552・1554-1557・1559・1561・1563・1565-1567)、チャート製が3点(1535・1539・1550)、玉髄製が2点(1548・1562)、ホルンフェルス製が1点(1529)である。石材と形態はさほど相関しないものの、Ib類(二等辺三角形形状)については、やや非黒曜石製に偏る傾向が見受けられる。

磨製石鏃(第270図1568~1575)

8点図化した。1568は砕片を素材とした細身で左右非対称の形状であり、やや雑な研磨で側縁の整形を行っている。石材はオリーブ色を呈する頁岩である。1569-1575は黒色頁岩を石材とする。平面形は1569が正三角形形状を、1570-1574が縦長の二等辺三角形形状を呈する。いずれも基部が内湾する凹基の石鏃で、平坦な研磨によ





0 3cm
(1:1)

第 269 图 西部出土石器 (1)

り薄手に仕上げられており、表裏とも錆はない。刃部は側縁に沿って研磨面の角度を変え、鋭利に整形している。なお、やや大形の1574は研磨が弱く、中軸に大きく素材面を留めている。欠損は1570が先端部、1571が脚部、1572が基部を欠き、1573は上半部から一方の脚部にかけて大きく破損している。1575は下半部を欠損するが、他の製品と特徴が大きく異なる。比較的厚みがあり、外弯する両側縁に沿って研磨角を変えて刃部を研ぎ出す中、全体的に丁寧な研磨で仕上げられている。また、欠損部にかかって、中軸の左右2か所に表裏から穿孔が施されている。装着のための紐穴の可能性もある。

石匙 (第271図 1576~1579)

4点図化した。1576は緻密な安山岩製で、上辺中央付近につまみ部を作り、体部は横長木葉形の整った形状を呈する。二次加工は改変度が高くほぼ全体に調整剥離を施すが、刃縁の作出はやや粗い。また、表裏面中央付近には、剥離面後縁に研磨を加えている。1577~1579はホルンフェルス製である。1577は打製石斧の調整剥離片が素材と考えられる小型品であり、下縁に調整は加えられず、側縁からつまみ部にかけて浅い調整剥離を施して形状を整えている。上端は折れ面で、下縁同様加工していない。1578・1579は中軸につまみ部をもつ横型の粗製の石匙と想定される。どちらも表裏に大きく素材面を残し、二次加工は部分的な周縁調整で済ませている。1578は下縁の刃部を直線状に仕上げる。1578はつまみ部と体部右側を、1579は体部左側下半及び刃部を欠く。

削器・掻器類 (第271・272図 1580~1582)

3点図化した。いずれも削器とみられる。1580は緻密な安山岩製のやや大形の剥離片で、上辺に打面を残す。背腹両面から細かく交互剥離を施した鋭い尖頭状の刃部をもつ。また、縁辺の一部に微小剥離痕がみられる。1581は尖頭器の加工性も検討したが、撮形を呈し、側縁に粗い刃部調整を施していることから、粗製の削器とした。素材は頁岩の横長剥離片で、打製石斧の調整剥離片と見られる。1582は玉壺製の剥離片の一端に背腹両面からやや粗い調整が施される。石匙の欠損部を転用した可能性もある。

二次加工剥片 (第272図 1583)

1583は腰岳産とみられる黒曜石製の剥離片断片で、右側縁から表裏面に粗い剥離を加える。残核の可能性も想定される。

石錐 (第272図 1584~1592)

9点図化した。1584・1585は石錐様の両面加工を施し、下端に短く突出する錐先部を有する。1584の錐先の端部には微小剥離が生じ、1585は欠損する。1586は周縁調整が加えられた逆三角形形状を呈し、比較的鋭い錐部が作り出される。

1587は不定形剥離片を素材とし、折れ面を錐先の側縁に

取り込んでいる。右側縁の腹面側に部分的な調整剥離を加えている。1588は剥離片を素材としてやや粗雑な周縁調整を行って、逆三角形に整えている。錐先の端部に微小剥離が生じている。1589は、右側縁は背面から、左側縁は腹面から表裏に急斜度の調整剥離を施しており、鈍い錐先部を有する。1590は三角錐状の厚みのある剥離片断片を素材とし、浅い後上調整を加えたものである。上端は折れ面を残置している。錐先の端部に微小剥離が生じている。1591は右側縁に素材剥離の折れ面を取り込み、左側縁に粗い調整を加え、比較的鋭い錐部をもつ。1592は三角柱状を呈し、全面に急斜度の調整剥離を施す。珪石部から錐先側の下半部を欠損しており、加工時に破損したものかとみられる。

石材は緻密な安山岩製が多く5点(1584・1586・1589~1591)、黒曜石製が3点(1585・1588・1592)、チャート製が1点(1587)である。

楔形石器 (第272図 1593・1594)

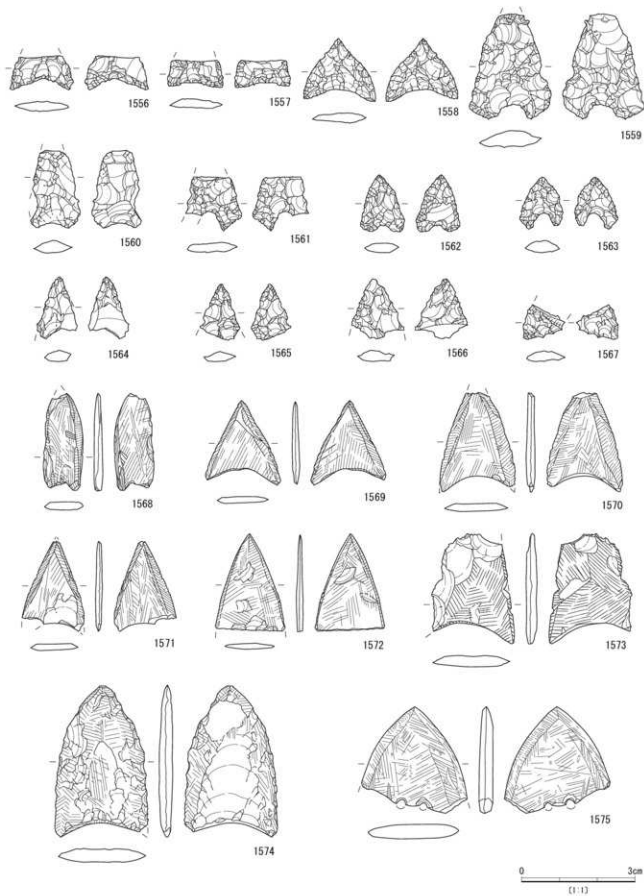
2点図化した。1593・1594は腰岳産とみられる黒曜石製で、小形の剥離片断片を素材とし、下辺に不規則な小剥離が生じている。

石核 (第273図 1595~1597)

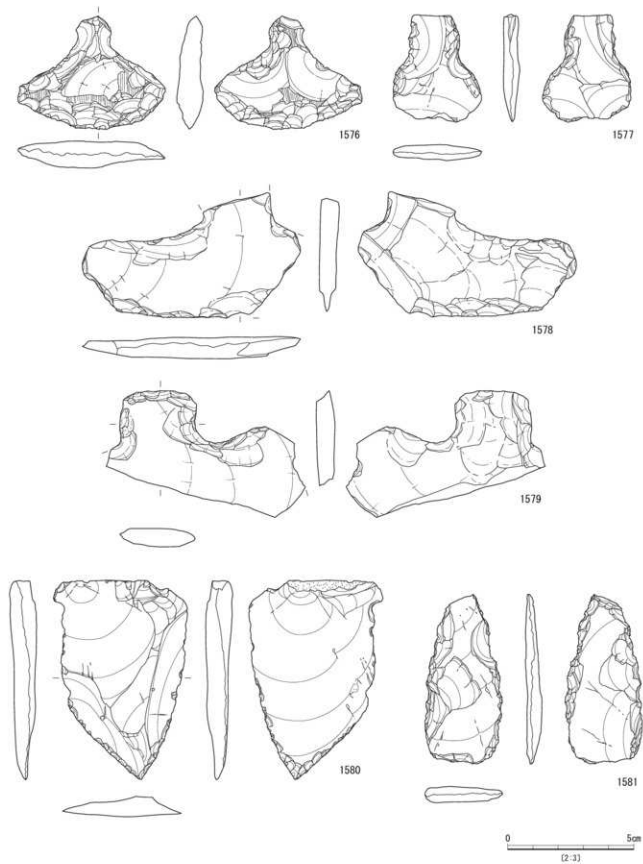
3点図化した。1595はガラス質安山岩製で、自然面を打面として剥離された分厚い横長剥離片を石核としたものである。剥離剥離はその剥離を縦位に用いて背面側で行われ、腹面を打面として上端から1枚、また自然面を打面として下端から1枚の、計2枚の不定形剥離片が剥離されている。なお、背面中央の1枚は素材面の先行する剥離である。1596は三船産とみられる黒曜石製の残核で、自然面を分割して、その分割面を作業面としたものである。正面の作業面は、若干の打面調整を加えた後、上端を打面とした1枚、次いで横位から剥離された1枚の、計2枚の不定形剥離片が剥離されている。また、左側面には割れ面が残る。1597は鉄石英製で、頻繁に打面転移を行い、不定形な小剥離片を限界まで剥離した、多面体を呈する残核である。

横刃形石器 (第274図 1598~1603)

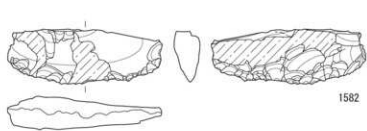
6点図化した。1598は砂岩製の分厚い横長の剥離片であり、その打面側を背縁部として、特段整形を行うことなく用いている。下縁の刃部に幾らかの剥離痕が生じている。1599~1601はホルンフェルス製を素材とする。1599は鎌状を呈し、背縁部と下縁の内弯した刃部に浅く二次加工を施している。1600は半身を欠損するが、右側縁に粗い剥離の二次加工を施して整形しており、直線状の下縁に鋭い刃部をもつ。1601は下縁の刃部に整形加工とみられる粗い急斜度の調整剥離を加えており、弧状の刃部をもつ。また、長軸の両端に挟り部の作出が認められる。1602・1603は頁岩を素材とする。1602は大部分を欠損するが、背縁部に浅く二次加工を施しており、刃部



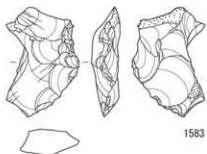
第 270 图 西部出土石器 (2)



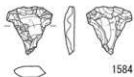
第 271 图 西部出土石器 (3)



1582



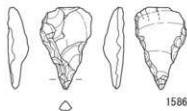
1583



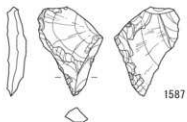
1584



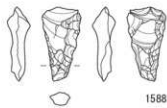
1585



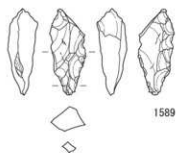
1586



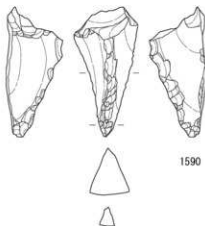
1587



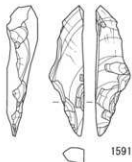
1588



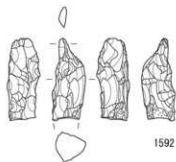
1589



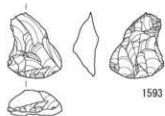
1590



1591



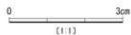
1592



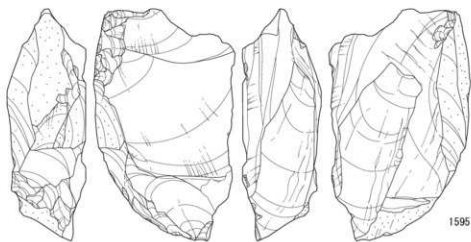
1593



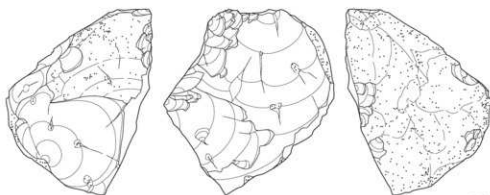
1594



第 272 图 西部出土石器 (4)



1595



1596



1597



第 273 图 西部出土石器 (5)

に部分的な研磨がみられる。1603は上端から左側縁を折れ面として、右側縁に周縁加工を施し、併せて挟り部を作出する。右縁の直線状の刃部に磨減がみられる。

石包丁 (第274図 1604)

1点図化した。1604は頁岩製の石包丁の断片である。研磨は比較的丁寧で下端に刃部を留めるものの、その他の側縁は表裏からの粗い調整剥離によって損なわれており、小形ながら再生品とみられる。

磨製石斧 (第275・276図 1605~1625)

21点図化した。形態は乳棒状、定角式、打製石斧様など多様である。なお、いわゆる柱状片刃石斧と分類できるようなものは出土しなかった。

1605~1609は横断面形が楕円ないし扁平楕円形を呈する乳棒状石斧である。石材は1605・1607・1608がホルンフェルス製、1606が頁岩製、1609が硬砂岩製である。1605は打製石斧のような扁平な刃部をもつもの、胴部から基部を敲打調整により乳棒状に整えたものである。研磨は全体に弱く、刃部は成形剥離を残し、左隅を欠損している。1606は刃部を欠く欠損品である。加工は表面で中軸の一部に研磨面がみられるが、大部分は敲打のみの調整で仕上げる。使用により破損した可能性がある。1607は身部片である。縦割れた裏面に調整剥離を加えて、再度研ぎ直しており、やや扁平な形状を呈する。形態は不明である。1608は刃部片である。裏面の剥離は、使用による衝撃剥離とみられる。刃部はよく研磨され給刃状を呈するが、刃部以外の研磨は弱く、敲打調整痕を留めている。1609は刃部のみ欠損品で、給刃の形状を呈する。

1610はホルンフェルス製の定角式である。加工は比較的丁寧で左右対称の整った形状であるが、研磨面は凸凹を留める。刃部左側を大きく欠損し、右端に若干残る刃縁は鈍く磨減している。1611は頁岩製で、基部及び刃部右側を欠く欠損品である。全面に研磨を施して扁平に形作られており、刃部は主に表面側を研いで片刃気味に作出されている。

1612は扁平な磨製石斧の刃部片である。丁寧な研磨により横断面形がごく薄い凸レンズ形に整えられ、刃部は円刃で身部側縁近くまで及ぶ鋭い刃縁をつくるという、特徴的な形態を有する。樹木の伐採などとは異なる用途をもつと考えられる。石材はホルンフェルスである。1613は基部の欠損品としたが、刃先の窄まった刃部片である可能性もある。側縁に研磨を加えて面取りをしたうえ、表裏面にごく弱く研磨を施しており、所々に調整剥離面を残している。石材はホルンフェルスである。

1614~1622は打製石斧にもみられる剥離整形を器面に留めたもので、部分的に研磨を加えた局部磨製石斧である。短冊形あるいは撥形など、形状を有する。石材は1614・1617・1618・1621・1622がホルンフェルス製、1615・

1616・1619・1620が頁岩製である。1614は細身の短冊形で整状を呈し、基部を欠損している。研磨は刃部を主として中軸に広く施されており、側縁の面取りも幾らかなされている。1615・1616は主として刃部から身部にかけて研磨を施しており、刃部右側を欠損している。1617は左側縁に素材面を残置するが、刃部には丁寧な研磨を加えている。1618・1619も主に刃部に研磨を加えており、1618は基部を、1619は刃部右側と基部を欠損している。1620は身部から基部を残す欠損品であり、中軸の凸部に研磨を加えている。1621・1622は基部側を欠く刃部片であり、刃部には研磨がみられる。

1623は小型品の基部片である。素材の形状を生かし、側縁に研磨を認める。頁岩製である。

1624・1625は使用により破損したとみられる磨製石斧の刃部の一部を含む剥片である。石材は1624が頁岩製、1625はホルンフェルス製である。

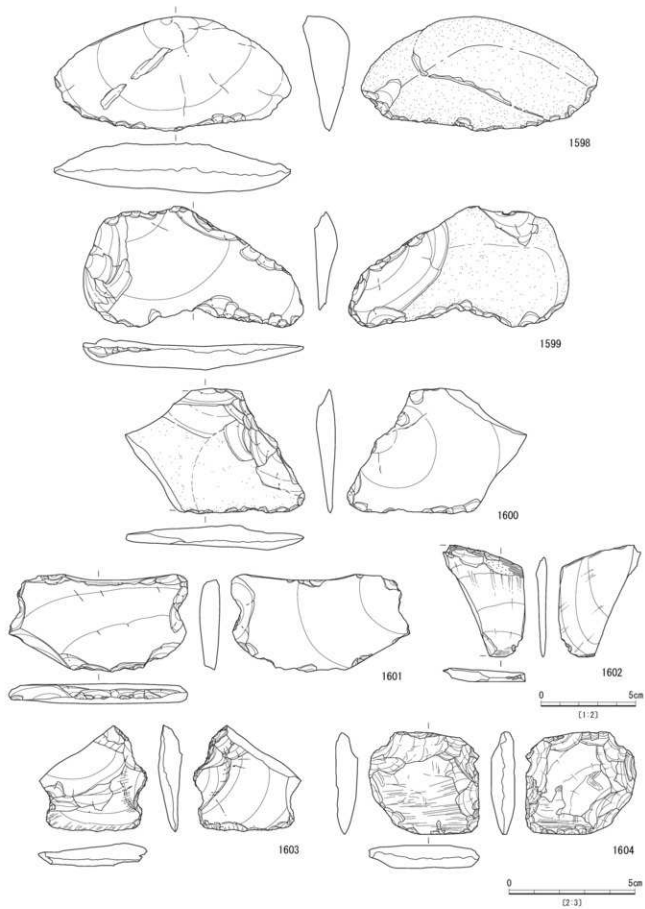
打製石斧 (第276~282図 1626~1701)

76点図化した。出土した定形石器の中でもっとも点数が多く、形態的にもバラエティーに富んでいる。二次加工は、器体に素材面を残して周縁加工を行ったものが目立つほか、欠損品を再加工している例も散見された。これらについて、主に平面形態からⅠ~Ⅳ類に分類を行った。石材はホルンフェルスと頁岩に限られ、ホルンフェルス製のものが割合多くみられる。なお、頁岩との区分は風化の度合による大別であり、ホルンフェルスは黄褐色を帯びる。なお、破片資料も多いことから、分類の詳細については意見が分かれるところもある。

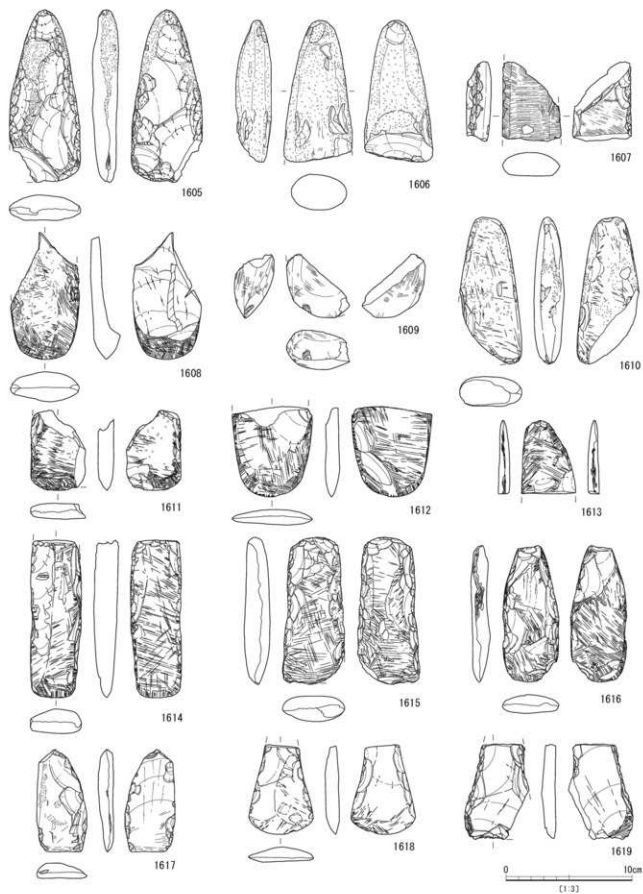
Ⅰ類 1626~1634は略短冊形を呈し、刃部幅がやや広く、直線状に基部に至るものである。1626は完形品で、細身に整った形状を呈する。長さ15.0cm、幅4.8cm、厚さ1.7cmである。1629~1631は基部から身部にかけての欠損品である。1632は裏面に使用による衝撃剥離痕がみられる。1633・1634は基部を欠く胴部から刃部にかけての欠損品である。石材は1626・1628・1629・1631・1633がホルンフェルス製、1627・1630・1632・1634が頁岩製である。

Ⅱ類 1635~1640は撥形を呈して、基部が窄まり、刃部が直線状あるいは丸みを帯びるものである。1636は完形品で、Ⅱ類の典型である。このうち1635・1638は刃先を、1639は刃部を欠損する。1640はやや楕状を呈する大形品で、刃部右半から基部にかけて欠損している。また、刃部を主として、側縁と中軸の剥離面稜線上が使用により著しく磨減している。石材は1635・1638・1639がホルンフェルス製、1634・1637・1640が頁岩製である。

Ⅲ類 1641~1649は挟りをもつ有肩形または両耳形を呈し、比較的細身である。特に刃部先端は鋭角だが、左右非対称になっている。使用痕がみられるものも多い。このうち1645は刃部を、1648は基部を欠損し、



第 274 图 西部出土石器 (6)



第 275 图 西部出土石器 (7)

1649は刃部を残す欠損品である。石材は1641・1643～1649がホルンフェルス製、1642が頁岩製である。

IV類 1650～1661も挟りをもつ有肩形または両耳形だが、基部に比べ胴部があまり広がらず、刃部がⅢ類より尖らないものである。ただし、刃部が非対称になる点は共通する。欠損品が割合多く、1653～1655は刃部を欠き、1658～1661は基部を欠く。石材は1650～1652・1654～1658・1661がホルンフェルス製、1653・1659・1660が頁岩製である。

V類 1662～1672は挟りもち、刃部が比較的幅広く円形を呈する、いわゆるラケット形状のものである。この類も欠損品が割合多くみられる。1662は大型の完形品であり、長さ18.1cm、幅11.7cm、厚さ2.1cmを有する。また、1664は使用による破損か、胴部が大きく剥離している。1665は基部端と身部を欠くが、身部の一部が接合したものである。また、1666～1670は、基部のみないし基部の一部までを欠いた欠損品であり、1671・1672は身部から刃部ないし刃部のみの欠損品である。石材は1662～1667・1669・1671・1672がホルンフェルス製、1668・1670が頁岩製である。

他：Ⅲ～V類の欠損品 1673～1691は基部のみの欠損品であり、1692は身部のみ、1693～1696は刃部のみの欠損品である。比較的ⅡもしくはⅢ類に帰属すると想定されるものが多い。石材は1673・1674・1676・1677・1679～1686・1688・1690・1692・1693・1695・1696がホルンフェルス製、1675・1678・1687・1689・1691・1694が頁岩製である。

VI類 1697～1701は不定形なものを一括した。1697は刃部が右側縁に片寄っており、本来は撥型の形状であったものを刃部再生した可能性がある。1698・1699は断片を素材として不整形を呈し、未成品とみられるものである。1700・1701は打製石斧の薄手の素材剥片とみられ、若干の二次加工を觀察できる。石材はホルンフェルス製が1698～1701、頁岩製が1697である。

敲石(第282図1702～1709)

7点図化した。敲石としてだけでなく、磨石や砥石としても用いたものがある。

1702は、凝灰岩製定角式磨製石斧の欠損品を転用したものである。基部の末端(下面)を主として、反対側の折れ面、側面のそれぞれに顕著な敲打痕が形成されているなか、表面にもわずかながら敲打痕がみられる。1703は方柱状の形状をした頁岩の拳大の礫を用いたもので、長軸の下端部を主として、そのほか部分的に顕著な敲打痕が形成されている。1704は上端に折れ面がある砂岩の扁平な棒状礫を用いたもので、下端、両側縁を主として、部分的に敲打痕が集中してみられる。敲打に伴う剥離面もみられる。1705は上半部を欠損したホルンフェルスの棒状礫で、下端に幾らかの敲打痕が形成されてい

るほか、全面に弱い研磨がみられ、擦痕もある。1706は上端の割れた砂岩の楕円礫を用いたもので、下端と上面に敲打痕が形成されているほか、正面、裏面、左側面に磨り面を有する。石材は被熱し赤化している。1707は上端が窄まる砂岩の棒状礫の上下両端に敲打痕が生じたもので、敲打部を除く全面に砥面を有する。1708は下端と側面の稜上に敲打痕が生じており、敲打作業によって破損した敲石の欠損品である。石材は砂岩である。1709は上半部を欠損した砂岩の棒状礫で、下端から側縁の稜線上にかけて顕著な敲打痕が生じている。

磨石・敲石類(第283～285図1710～1731)

22点図化した。これらには、磨り面・敲打痕・凹みなど複数の機能を併せもったものが存在することから、磨石・敲石・凹石類として一括して扱い分類した。

I類 磨り面のみのものである。1710～1712・1714は全面に、1713は表裏に磨り面を有する。1714は上半部を欠損する。

II類 磨り面と敲打痕をもつものである。1715～1719は側面のほぼ全周に敲打痕が形成されており、1720～1725は側面に断続的あるいは部分的に敲打痕がみられる。これらのうち、1715・1718・1720・1724・1725は欠損品である。

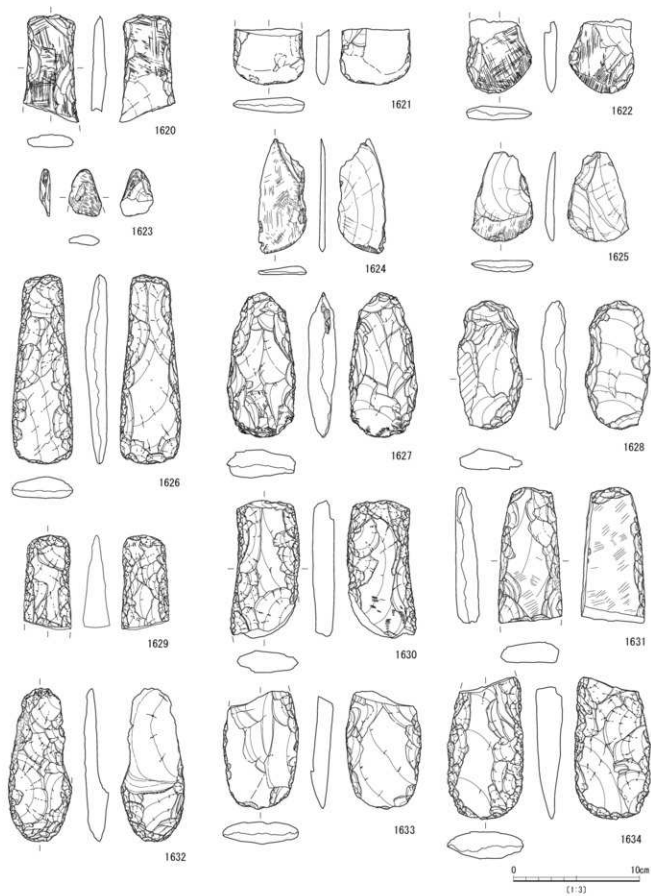
III類 磨り面と敲打痕に加え、表裏中央に凹みをもつものである。凹みは、1726・1728・1730は両面、1727・1730は片面に形成されている。また、1726には側面に顕著な敲打痕がある。1729では敲打により破損した大きな剥離面に磨り面が形成されており、破損後も磨り面として利用を継続したことがわかる。1727・1728・1730は欠損品である。

IV類 素材を加工して形状を整えたものである。1点出土した。1731は敲打と研磨によって、全体を杵状に整形している。作業面としては、下面にわずかな磨り面が形成されているのみである。

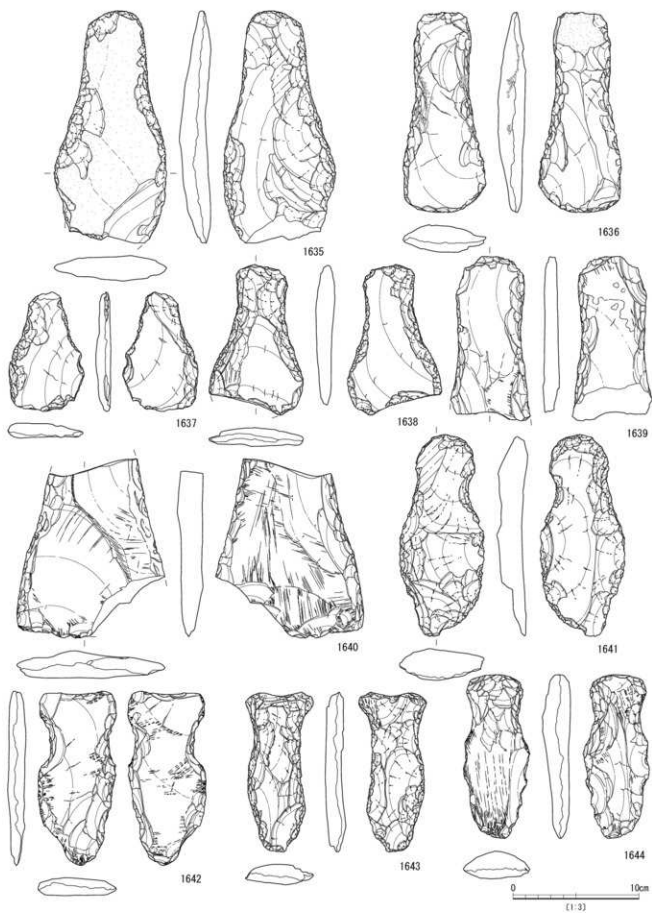
石材は安山岩製が8点(1710～1712・1718・1723・1724・1727・1728)、花崗岩製が4点(1713・1714・1719・1726)、砂岩製8点(1715・1717・1720～1722・1725・1729・1730)、凝灰岩製が1点(1716)、斑れい岩製が1点(1731)で、安山岩製と砂岩製のものが多い。石材による利用状況に特に偏りはみられない。また、1715・1718・1725・1726の4点には、被熱による赤化及びブスの付着がみられる。

石皿・台石類(第285・286図1732～1739)

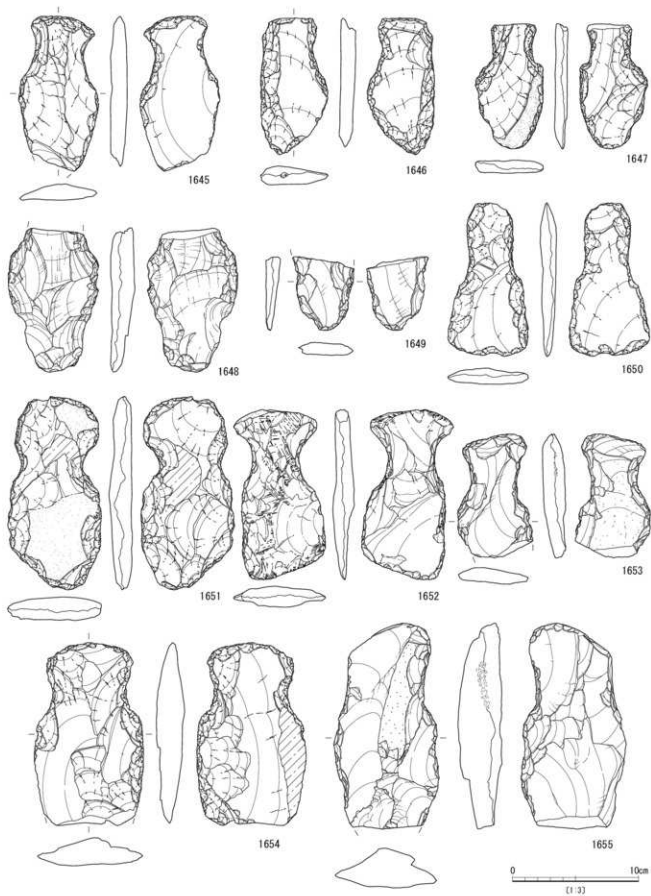
8点図化した。1732は断面形が逆三角形形状を呈する厚みのある石皿である。表面中央は使用によるすり減りと敲打痕を留め、また、上面にもわずかな凸部磨り痕がみられる。1733～1739は石皿ないし台石の欠損品である。このうち1733は表裏に磨り面があり、わずかに凹む。1736は扁平な石皿で、左側面は敲打によって整形し、表裏を平坦にしている。石材は、砂岩製4点(1732・



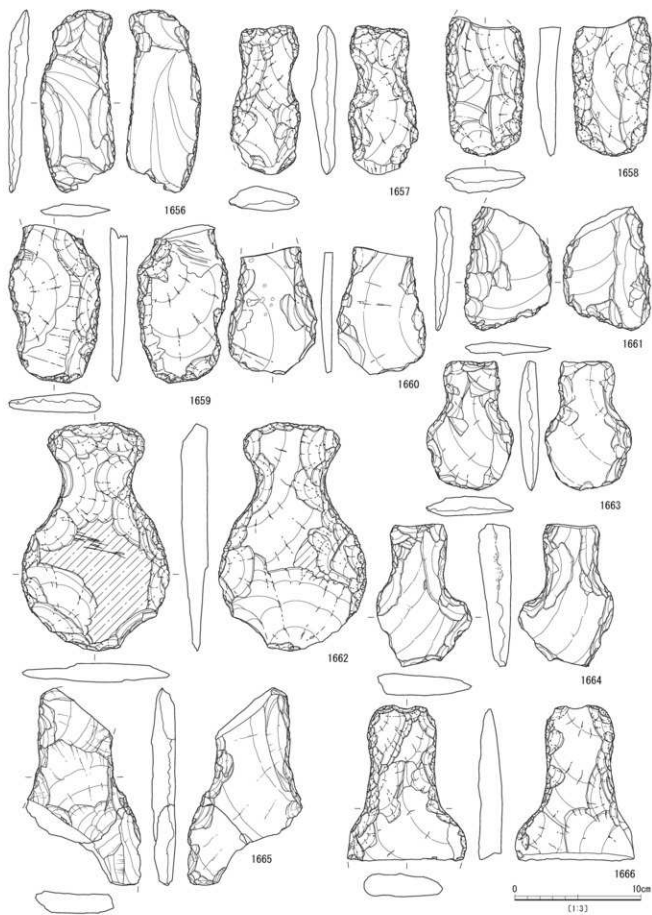
第 276 图 西部出土石器 (8)



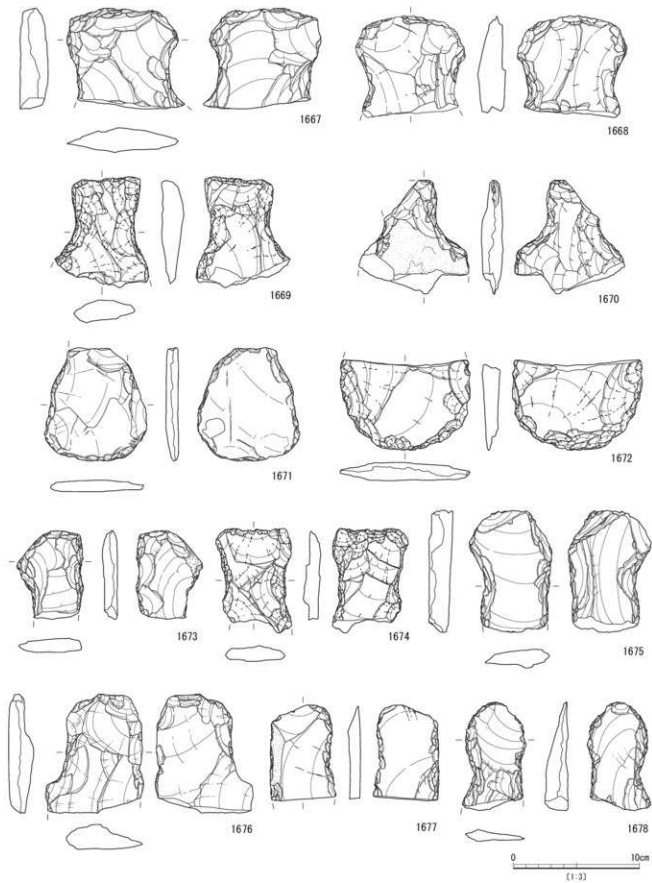
第 277 图 西部出土石器 (9)



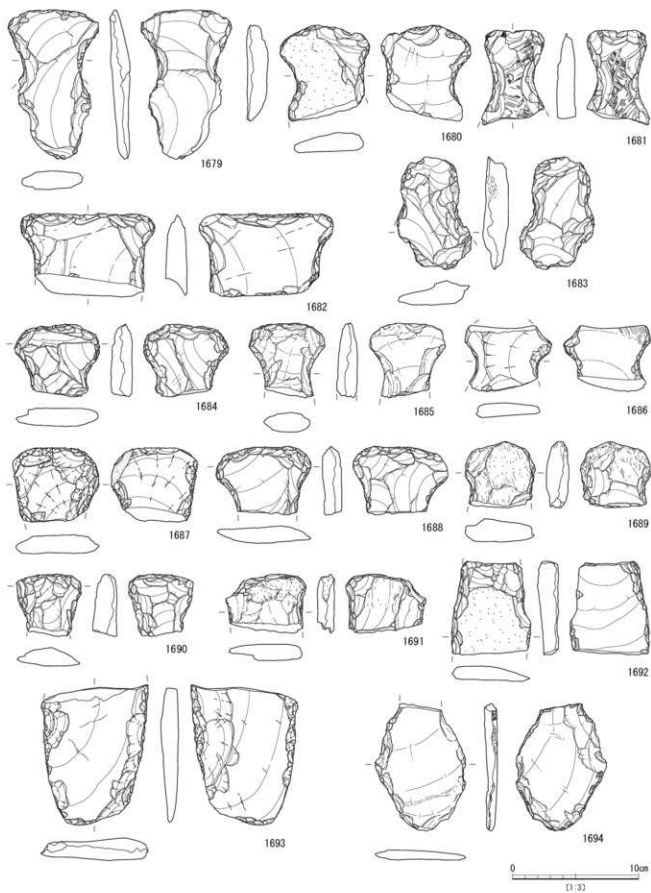
第 278 图 西部出土石器 (10)



第 279 图 西部出土石器 (11)



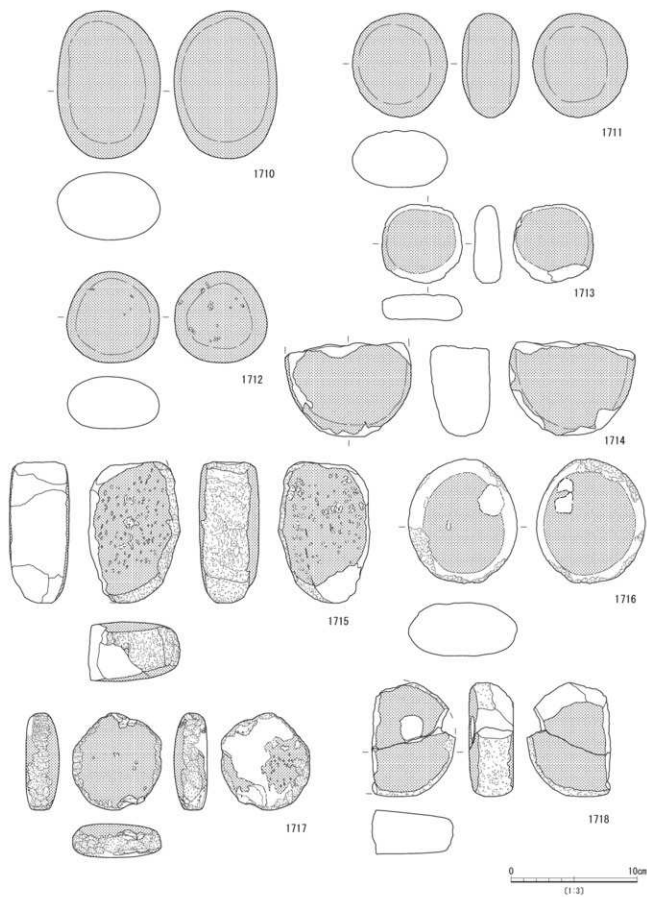
第 280 图 西部出土石器 (12)



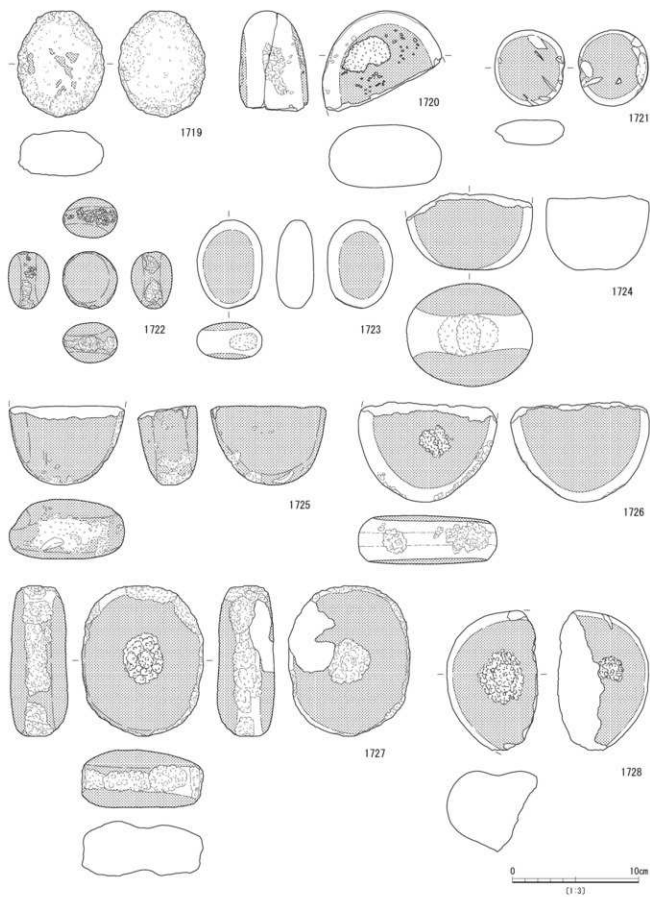
第 281 图 西部出土石器 (13)



第 282 图 西部出土石器 (14)



第 283 图 西部出土石器 (15)



第 284 图 西部出土石器 (16)

1734・1735・1737)、花崗岩製3点(1733・1736・1738)、斑れい岩製1点(1739)である。

砥石(第286・287図1740~1759)

19点図化した。大きさ・形態は様々で、素材となった礫の形状を残すものも多い。1740・1741は不整な角礫を面取りしたものである。1740は上面、表面、右側面の平坦面を、1741は主に表裏面を砥面として利用しており、それぞれに幅広い浅い砥ぎ溝が残っている。1742は表面の平坦面を砥面とする。1743・1744は素材礫の原形を留め、砥面には擦痕がみられる。1745・1746は扁平な長方形に整形した砥石の欠損品である。1745は調査区東部出土の砥石1865と接合する。1746は表面に欠損後も使用した痕跡がみられる。1747・1748は扁平礫を用いており、表裏に砥面があり、1748は下端に敲打痕も形成されている。1749はほぼ全面が使用され、さらに右側面には多数の擦痕もみられる。

1750~1755は剥片や礫片を利用した薄手の砥石である。1754は接合資料で、砥面に1条の断面「V」字状の溝がみられる。1755は表裏を砥面とし、縦方向の擦痕が多数みられる。1756は長方形の扁平な礫を用い、砥面は光沢がある。

1757~1759は小型の角柱状の砥石である。1759は、表裏両面からの切り込み溝を留めており切断には至っていないもの、「施溝分割」がうかがわれる砥石である。溝は5mm程の深さがある「V」字形の断面形を呈する。1757も大きさ並びに形状から1759と同様の「施溝分割」によって作られた可能性がある。長さ5.1cm、幅2.3cm、厚さ2.0cmである。

石材は1752が頁岩製、1755が片岩製、その他はすべて砂岩製である。1740~1743・1746・1747・1756・1758には被熱による赤化・黒色付着物等がみられる。

紡錘車(第288図1760)

1点図化した。1760は結晶片岩製の紡錘車の欠損品である。ほぼ半分を欠損しており、周縁側面は丸みを帯びるように研磨されている。中心部の穿孔(径0.7cm)は両面から穿たれている。復元直径5.8cm、厚さ0.5cmである。

玉類(第288図1761・1762)

2点図化した。1761は暗緑色の滑石製管玉であり、研磨はやや粗く、多角柱状で素材の稜線を若干留めており、胴中央部に最大幅をもつ。穿孔は両面から行われており、中央付近で貫通している。長さ2.8cm、幅0.8cmである。1762は丸みを帯びた素玉の形状を呈する。研磨は非常に丁寧であり、表面は滑らかに仕上げられている。穿孔は両面から行われており、中央付近で貫通している。石材は含クロム白雲母とみられ、白地に入る緑斑が美しい。長さ2.0cm、幅1.3cmである。

異形石器(第288図1763~1765)

3点図化した。1763は下辺を鋸歯縁とし、上辺をつまみ状に整形したもので、小型の石匙あるいは石鎌の可能性も検討したが、異形石器に含めた。石材は針尾産とみられる黒曜石である。1764・1765は表裏面とも丁寧な調整剥離が施され、左右非対称の木葉形に仕上げている。いわゆる異形石器とは異なるが、通常の利器とも言い難いため、ここに分類した。石材はいずれも腰産とみられる良質の黒曜石である。

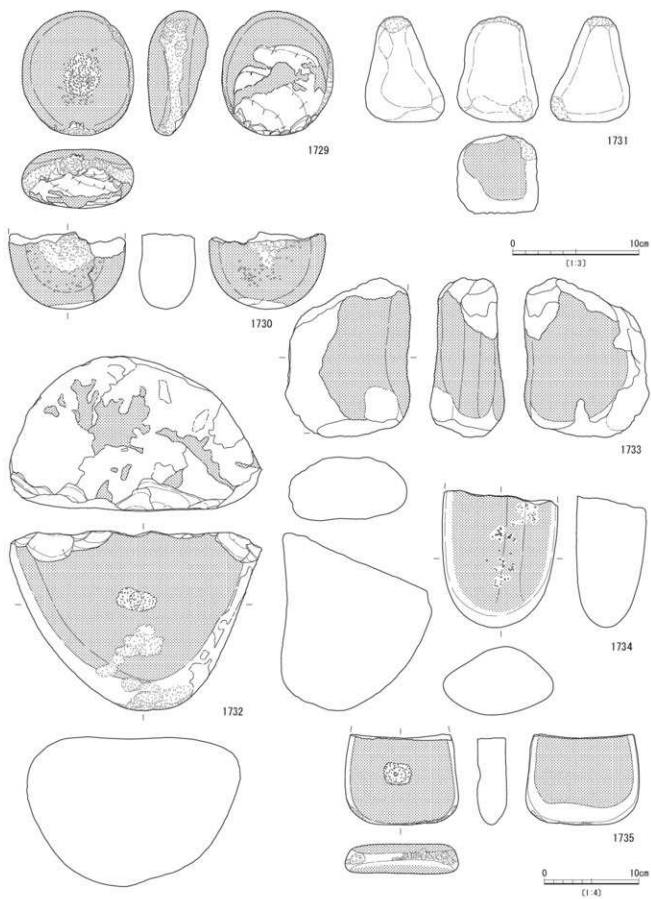
軽石製品(第288・289図1766~1775)

10点図化した。1766は平面形がやや丸みを帯びた不整な三角形を呈し、表裏の中央部と下面の3か所に凹みが認められる。特に表面の凹みは深い。1767は全形が上下面に丸みをもつ略三角錐状を呈し、各側面の中央部に大きな凹みがある。また、所々に切削痕を留める。正面観はさながら人面を思わせる。長さ17.1cm、幅11.9cm、厚さ10.3cmである。なお、1766と1767の凹み部は面が整えられていないことから、凹みは結果的に形成されたものの可能性がある。1768・1769は軽石片を面取りして扁平に整えられており、所々に切削痕を留める。1770は不定形であるが、正面のみ石皿状のなだらかな凹面が形成されている。1771は円筒形状を呈すると想定される製品の欠損品である。破断面以外の各面は比較的丁寧に整形されており、特に下面は平坦である。1772はやや歪ながら円盤状に整形されたものである。1773も扁平に整形し右側縁は曲面に仕上げるが、左側縁は刃状に薄くなっている。1774は扁平な長方形を呈すると推測される製品の欠損品である。残存する各面とも比較的丁寧に面取りがみられる。1775は平面が略方形で、縦断面が略くさび形を呈する小型の製品である。

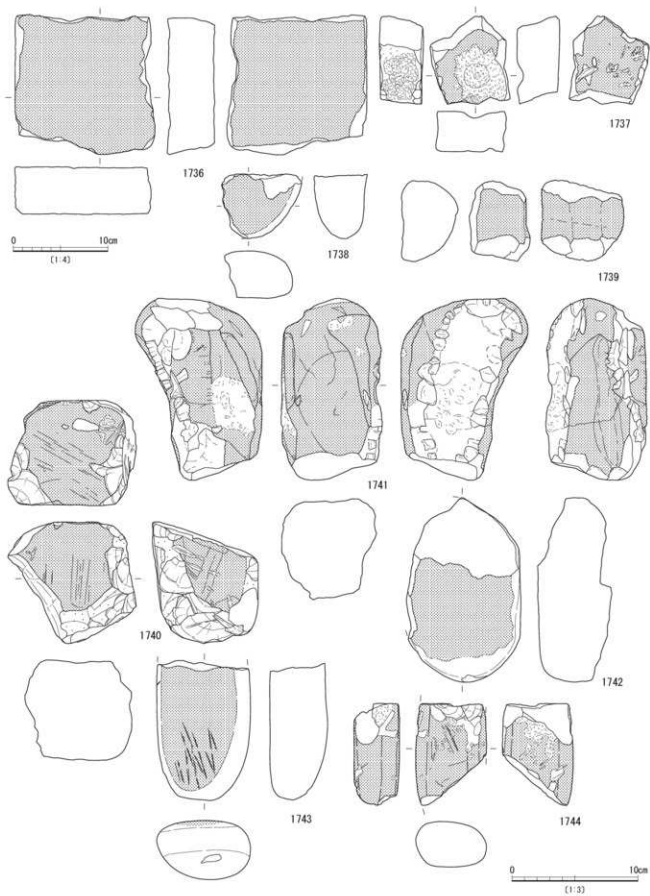
③調査区東部(第290図)

B~L-37~55区を一括する。出土石器類は合計381点である。器種別の内訳は、打製石鎌26点、磨製石鎌5点、石匙2点、使用痕のある剥片4点、石錐2点、楔形石器3点、横刃形石器1点、石包丁1点、磨製石斧9点、打製石斧56点、敲石4点、磨石・敲石類16点、石皿・台石類14点、砥石29点、軽石製品8点、剥片・砕片類201点である。

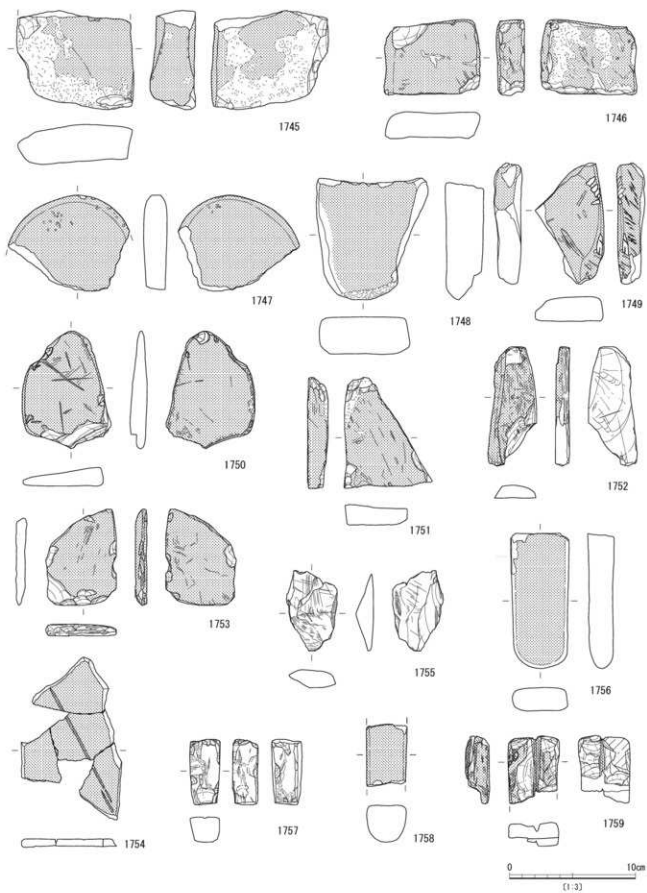
分布状況は、剥片・砕片類を除いた集中傾向として、H~L-37~39区の緩斜面、D~J-40~43区の谷戸頭付近において纏まりをみせ、その他の区域では疎らである。なお、47区から東側一帯には空白部分があるが、遺物包含層の欠如によるものである。器種別の分布傾向は特に見出せないものの、谷戸頭のF-41・G-43区付近において石鎌の分布がやや目立っている。その他では、大型の磨製石鎌未成品1802がH-43区Ⅱ層から、石皿・台石類の完形品1859がH-42区Ⅱ層から、環状軽石製品の1882がI-42区Ⅱ層からそれぞれ出土して



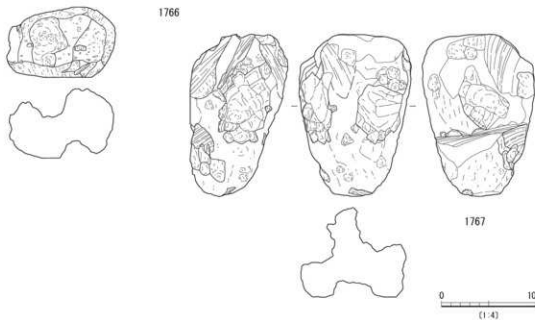
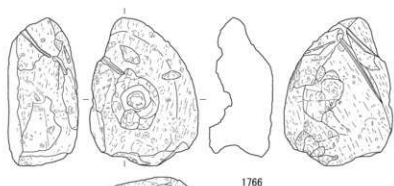
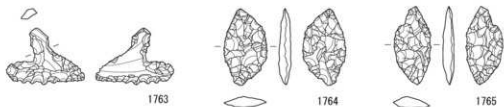
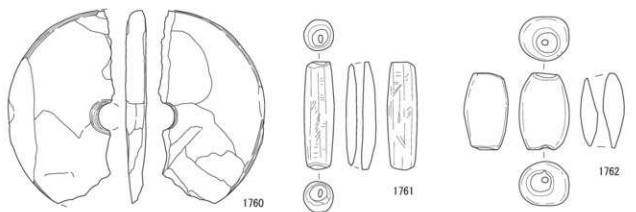
第 285 图 西部出土石器 (17)



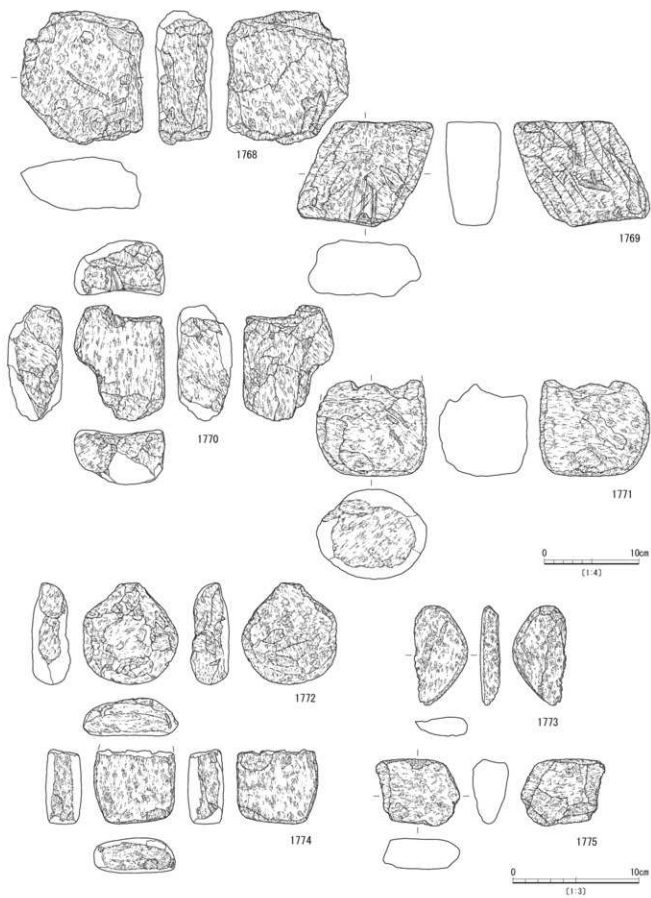
第 286 图 西部出土石器 (18)



第 287 图 西部出土石器 (19)



第 288 图 西部出土石器 (20)



第 289 图 西部出土石器 (21)

いる。また、砥石はG-43区Ⅱ層から出土した1865と、調査区西部のH-31区Ⅱ層から出土した1745が接合した。なお、剥片・碎片類については、黒曜石等の小片や打製石斧の調整剥片等が大半を占めている。

以下、石器個々の特徴について述べる。実測図の並びについては、西部と同じく分布状況に関係なく順不同である。

打製石鏃 (第291・292図 1776~1798)

23点図化した。類型は基部形状から平基(I類)と凹基(Ⅱ類)に大別され、その三角形の長幅比や特徴的な形状等において分類できる。

平基の石鏃は1776~1780の5点で、I a類である。長幅比がほぼ等しく正三角形を呈するもので、全体にやや粗い整形が目立つ。1779は両隅を突出させる特徴的な整形をしている。

凹基の石鏃は1781~1798の18点である。そのうち1781~1789はⅡ a類である。長幅比がほぼ等しく正三角形を呈し、多くは挟りが比較的浅い。その中には、1788は基部の挟りがやや深い。1790~1796はⅡ b類で、長幅比1.5:1程の縦長の二等辺三角形を呈する。1790・1796は大形品で、1790は長さ3.5cm、幅1.8cm、厚さ0.5cmである。また、1793~1796は基部の挟りが深い。1797・1798はⅡ d類で、やや縦長で平面形が五角形状を呈する。基部の挟りは比較的深く、側縁の上半に肩部の作出がみられる。1798は側縁を鋸歯状としている。

欠損については、23点中13点と割合多く認められる。これらのうち1777・1779・1780・1786・1791・1796は先端部あるいは上半部を欠き、1778・1785・1787・1788・1789は脚部を欠いている。なお、使用痕として、1780・1786・1796では、先端からの「砕け」が生じており、特に1796の表面には先端方向からの顕著な衝撃剥離痕が見受けられる。

石材は、緻密な安山岩製のものが多いが、次いで黒曜石製のものも多く、その他の石材もある。その中で緻密な安山岩製が12点(1776・1778・1779・1781~1784・1788・1791・1793~1795)、黒曜石製が5点(1780・1785・1786・1792・1798)、玉髓製が3点(1777・1789・1790)、チャート製が2点(1796・1797)、水晶製が1点(1787)である。石材と形態はこれといった傾向はみられない。

磨製石鏃 (第292図 1799~1803)

5点図化した。1799は整った二等辺三角形を呈する平基の磨製石鏃である。研磨は、表裏面とも先端部から中軸に後縁を設けて左右に分けており、両側縁は極めて鋭く仕上げている。石材は黒色頁岩製である。1800も黒色頁岩製であり、上半部と脚端を欠く。研磨により側縁付近にわずかに後縁が形成されている。1801は未成品である。両側縁と下縁を垂直に研磨して、外形を三角形に整えているが、表裏に素材面を残している。

灰色の頁岩製である。1802は二等辺三角形を呈する大形の未成品である。表裏面に研磨を施して厚さをおおまかに整えた段階にあり、両側縁は面取りをした状態で、基部の下縁も表裏からの調整剥離面が残る。灰白色の頁岩製である。長さ6.1cm、幅3.5cm、厚さ0.4cmである。1803も1802とほぼ同じ大きさ・形を呈する未成品である。まだ粗い調整整形段階のもので、分厚く、研磨は殆ど施されていない。先端部を欠損している。黒色頁岩製である。

石鏃 (第292図 1804)

1点図化した。1804は水晶製の縦長薄片を素材とし、主に背面側に、両側縁から鋒先部にかけて粗い調整剥離を施している。上端の折れ面は使用によるものではない。

使用痕のある剥片 (第292図 1805・1806)

2点図化した。1805は小さく整った形状の水晶製の剥片である。背面側の下縁に直線状の微小剥離痕が生じており、使用痕である可能性がある。1806はチャート製で石匙の不定形剥片であり、二次加工はないが、直線状の下縁と突き出した先端部に不規則な微小剥離痕がみられる。

石匙 (第293図 1807・1808)

2点図化した。1807は中軸につまみをもつ横型の石匙である。薄手横長剥片という素材形状を生かして、部分的な周縁調整で、直線状の鋭い刃部を作出している。刃部の大部分を欠く。1808は尖頭部を呈する縦型の側刃の石匙である。部分的な調整でつまみ部を作り、刃部にもわずかに剥離がみられるが、左側縁は素材の折れ面を残置する。石材は1807・1808ともにホルンフェルスである。

横刃形石器 (第293図 1809)

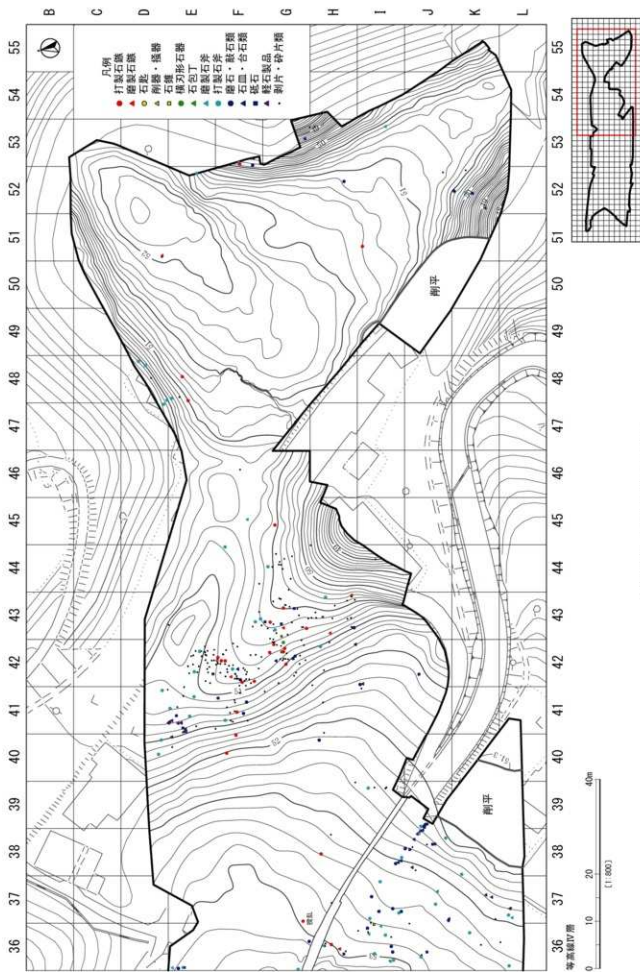
1点図化した。1809は打製石斧の調整剥片を用いた横刃形石器である。腹面に若干の調整を加えている。上縁の剥離面は既存のものとみられる。直線状の下縁に顕著な微小剥離痕が生じている。石材は頁岩である。

石包丁 (第293図 1810・1811)

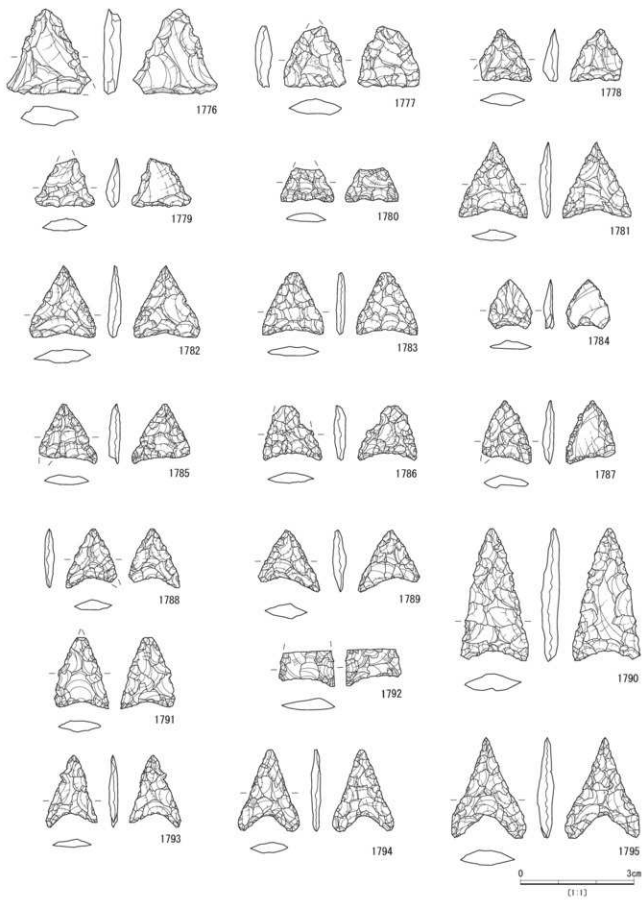
2点図化した。1810は大部分を欠損するが、やや丸みを帯びた逆勾形状を呈していたと考えられ、全体に丁寧な研磨を施している。紐穴の一方が残っており、両面より穿孔されているのを観察できる。石材はホルンフェルスである。1811も大部分を欠損した破片である。研磨は雑であり行き届いておらず、刃部には調整とみられる剥離を留めている。石材は黒色頁岩製である。

磨製石斧 (第294図 1812~1818)

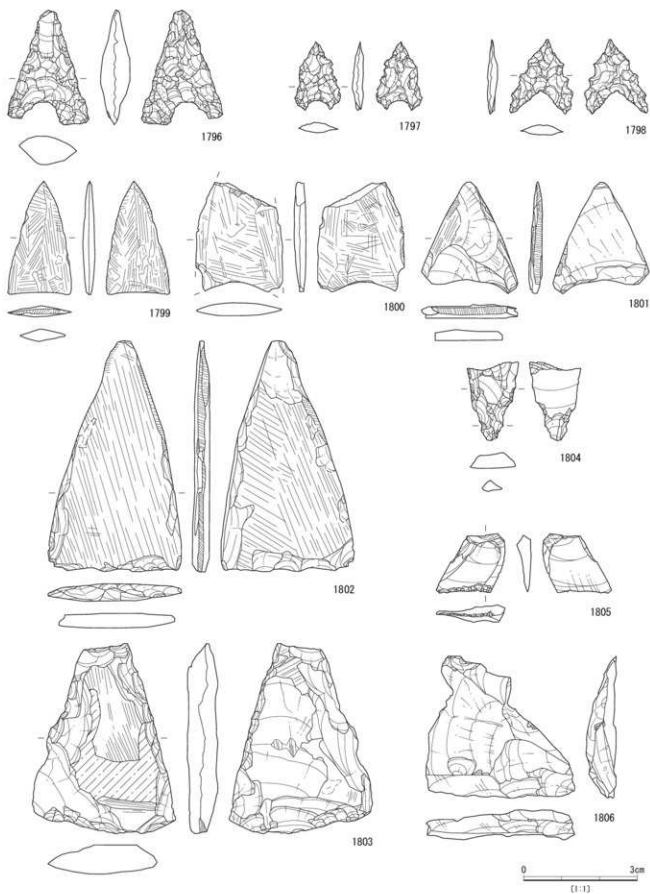
7点図化した。1812は横断面が楕円形をなす乳棒状石斧で、身体で折れた刃部側の欠損品である。刃部は整った両凸刃でよく研磨されているが、刃部以外の研磨は弱く、敲打調整痕を留めている。石材は硬砂岩である。



第290圖 東部出土石器分布圖



第 291 図 東部出土石器 (1)



第 292 図 東部出土石器 (2)

1813は欠損した乳棒状石斧の再生品とみられる。裏側の破損面を扁平に研ぎ直し、長軸の一方に片刃となる鑿状の刃部を研ぎ出している。なお、片方の側縁中間に数本の縦溝が刻まれており、着柄に関わる加工の可能性がある。石材はホルンフェルスである。1814は使用によって欠損したとみられる刃部の破片で、石材は硬砂岩である。

1815～1818は部分的に研磨を加えた局部磨製石斧である。石材は1815・1816・1818がホルンフェルス製、1817が頁岩製である。1815は剥離整形が粗く、身部がやや膨らんだ撥形を呈し、基部を欠損する。研磨は刃部に施され、比較的薄い弱凸強凸片刃である。1816は基部が突った撥形を呈する。研磨は側縁に面取り状に施した上、表裏面に弱く施されている。1817は身部から基部側を欠損する。研磨は刃部の表裏面にのみ施されている。1818は短冊形を呈するが、基部及び刃部が窄まる変則的な平面形態である。研磨は側縁に面取り状に施して刃部幅を狭めた上で刃部の表裏面に施されている。

打製石斧 (第294～296図 1819～1841)

23点図化した。調査区西部の打製石斧に準拠し、凡その形態分類を行った。主にI・III～V類がみられており、周縁加工により仕上げられているものが目立つ。石材はホルンフェルスと頁岩に限られ、西部同様にホルンフェルス製のものが比較的多くみられる。

I類 1819はやや丸みを帯びた短冊形を呈するもので、1点のみ出土した。基部に若干の抉りを有する。石材は頁岩である。

III類 1820・1821は抉りをもつ両耳形を呈し、細身で、刃部先端が鋭角になり軸線から左右どちらかに片寄るものである。石材は1820がホルンフェルス、1821が頁岩である。

IV類 1822～1827は抉りをもつ肩形を呈すると想定されるが、刃部に比べ胴部があまり広がらず、刃部が尖らないものである。いずれも欠損品であり、胴部から刃部ないし刃部である。石材は1822～1826がホルンフェルス製、1827が頁岩製である。

V類 1828・1829も抉りをもつ肩形を呈すると想定されるが、刃部が比較的幅広く、いわゆるラケット形状のものである。どちらも基部を欠く、胴部から刃部にかけての欠損品である。顕著な使用痕が認められ、刃部のほか、側縁及び中軸の剥離面後縁上にも磨滅が生じている。石材は1828がホルンフェルス、1829が頁岩である。

VI類 1839～1841は不定形のものである。1839は胴部、1840は基部の可能性があり、1841は打製石斧の刃部が残る剥片である。石材はいずれもホルンフェルス製である。

他・III～V類の欠損品 1830～1838は基部の欠損品である。両耳形が多いが、撥形または有肩形と想定できる

ものもある。石材はホルンフェルス製が1830～1833・1835～1838、頁岩製が1834。

敲石 (第296図 1842～1845)

4点図化した。1842・1843は磨製石斧の基部の欠損品を転用したものである。1842は下面の破損に伴う剥離の後縁上に敲打痕が生じているほか、上端の基部末端にも転用後に生じたと考えられる敲打痕が見られる。1843は下面とした基部末端に敲打痕が集中し、平坦な面ができている。石材はどちらも硬砂岩である。1844・1845は棒状礫を用いたものである。1844は上下両端に敲打痕が生じており、1845は上半部を欠損して、下端に敲打痕が生じている。石材はどちらも砂岩製である。

磨石・敲石類 (第297・298図 1846～1856)

11点図化した。調査区西部での分類に準拠する。

I類 1846～1850で磨り面のみのものである。1846は筋理から割れたもので、4点接合した。推定径15cmを超える大型品である。1847は表裏に弱い磨り面をもつ。1848・1849は径7cmの小型品で、磨り面が全面に及ぶ。1850は断面が半球状を呈する礫の平坦な表面を磨り面とする。磨り面には光沢が生じている。

II類 磨り面と敲打痕をもつものである。1851・1852は表裏に平坦な磨り面をもち、側縁周りに敲打痕がみられる。1853～1855は側面に部分的な敲打面がみられる。1852～1855は欠損品である。

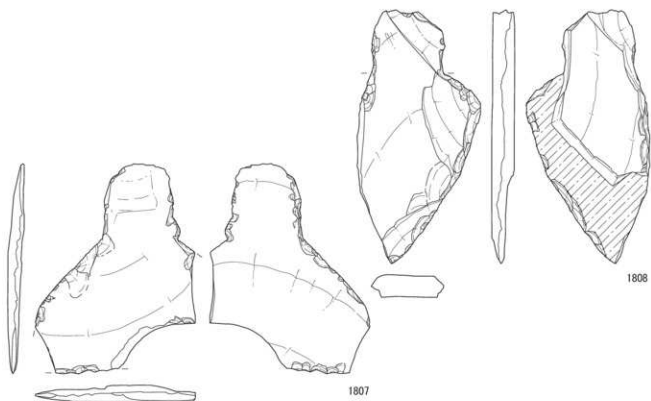
III類 磨り面と敲打痕、表裏中央に凹みをもつものである。1856は側面の敲打痕が全周し、中央に径3.5cmの比較的大きな凹み痕をもつ。

石材は砂岩製が4点(1846・1849・1851・1854)、花崗岩製3点(1847・1853・1855)、安山岩製3点(1848・1852・1856)、頁岩製1点(1850)である。なお、1853・1854には被熱による赤化がみられる。

石皿・台石類 (第298・299図 1857～1862)

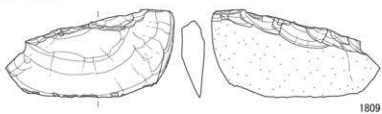
6点図化した。1857は周縁部に自然面を残して、中央部に縦長の磨り面をもつもので、磨り面と敲打痕がみられる。下半部を欠損する。1858は盤状の礫を用いた石皿で、表面の中央が緩く凹む形状を呈し、所々に敲打痕がみられる。下半部を欠損している。1859は平板な円礫を用いた径23cmの石皿である。表面は中央がやや丸く高まる凸面の磨り面を有し、敲打による凹みが3か所形成されている。一方、裏面は中央部に顕著な敲打痕があり、凹面を形成し、その周縁部には磨り面を残す。1861は欠損品で、表面を使用しており、緩やかに凹む形状を呈している。1860・1862は凹みを有する台石である。1860は面取りした方形礫の表裏面に敲打による凹みがある。1862は欠損品で、礫の表面に敲打による凹みがみられる。

石材は花崗岩製が2点(1857・1858)、安山岩製が2点(1859・1861)、砂岩製が1点(1860)、斑れい岩製が1点

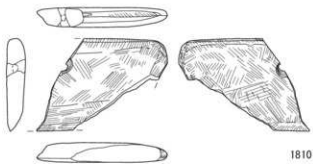


1807

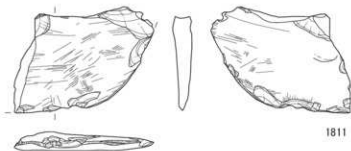
1808



1809



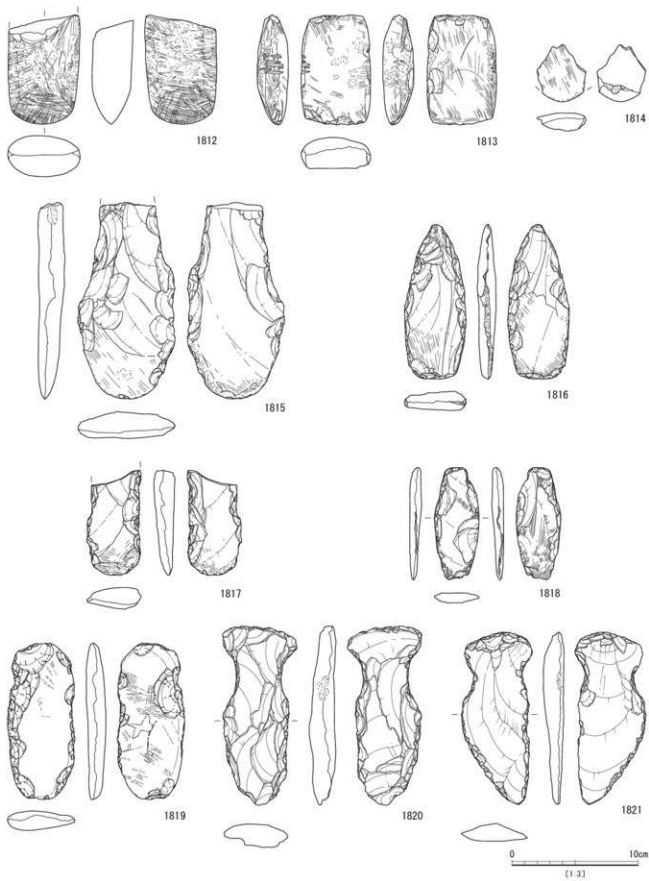
1810



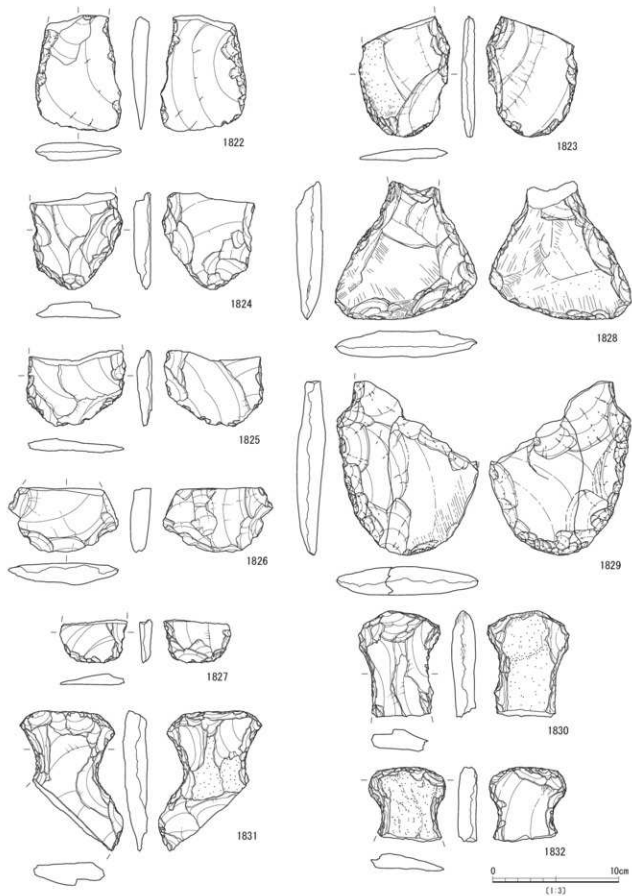
1811



第 293 図 東部出土石器 (3)



第 294 図 東部出土石器 (4)



第 295 図 東部出土石器 (5)



第 296 図 東部出土石器 (6)

(1862)である。また、1858には被熱による赤化がみられる。

砥石 (第299・300図 1863~1875)

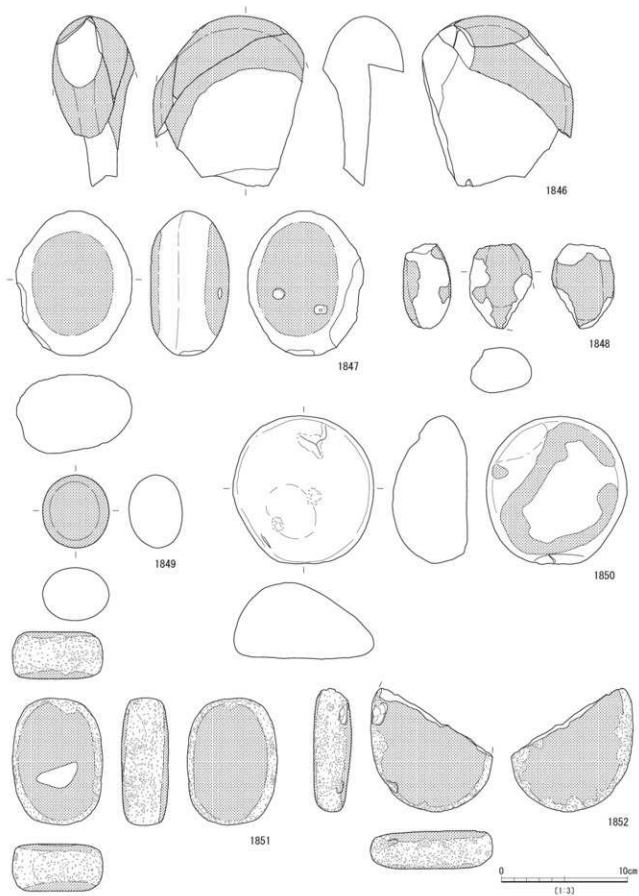
12点図化した。1863は角柱状を呈する砥石である。主に表面と右側面を砥面として用いており、両面とも中央がやや砥ぎ減りしている。1864は有溝砥石であり、上半部と右側面の一部を欠損している。砥ぎ溝は表裏面でそれぞれ縦に2条みられ、表面中央の溝は深く、断面は幅の広い「V」字状を呈し、幅1.5cm、深さ1.0cmである。1865は、調査区西部出土の1745と接合した。全体の大きさは長さ15.9cm、幅9.7cm、厚さ3.5cmの長方形状を呈する。主に表面を砥面とし、中央が緩く砥ぎ減りしている。1866は角柱状を呈し、上下面を除く全面を砥面としている。同一面上に砥面を離れた稜線がみられる中、裏面の一部に浅い溝がみられる。1867は比較的大きな砥石の欠損品とみられる。表裏と左側面を砥面とする他、割れた右側面も砥面として利用しており、砥ぎ痕が浅い溝状に残っている。部分的に敲打痕もみられる。1868は扁平な方形を呈する砥石の欠損品とみられ、上面に整形痕を残す。砥面は正面のみである。1869も欠損した砥石の破片である。表裏と右側面に平坦な砥面が残る。また、裏面中央には横方向の線状の敲打痕がみられる。1870は礫片を利用した砥石である。表面のみを砥面とし、上下方向の砥ぎ作業によって、中央部が凹んでいる。1871~1874は手持ちで使用した小型の砥石である。1871は礫片の割れ面を主な砥面としたもので、光沢があり、裏面は自然面を留めている。1872は角柱状の棒状礫を用いたもので、下半部を欠損している。各面を長

軸方向に使用している。1873は横断面を蒲葺状に整形した砥石である。表裏の縁辺の角に面取りを施している。裏面は自然面のままである。1874は半円形に欠損したもので、残存径4.5cmを有する。扁平な表裏を砥面とするが、両側面の中間部に欠損後とみられる3本程の横方向の刻みがみられる。1875は「施溝分割」の痕跡を残す不整形扁平な砥石の破片であり、右側面は表裏両面から深さ5mm程の擦り切溝を施した後折り取られている。また、節理面である表裏の一部分を砥面とするが、分割溝と平行した数条の鋭い砥ぎ溝が残されている。

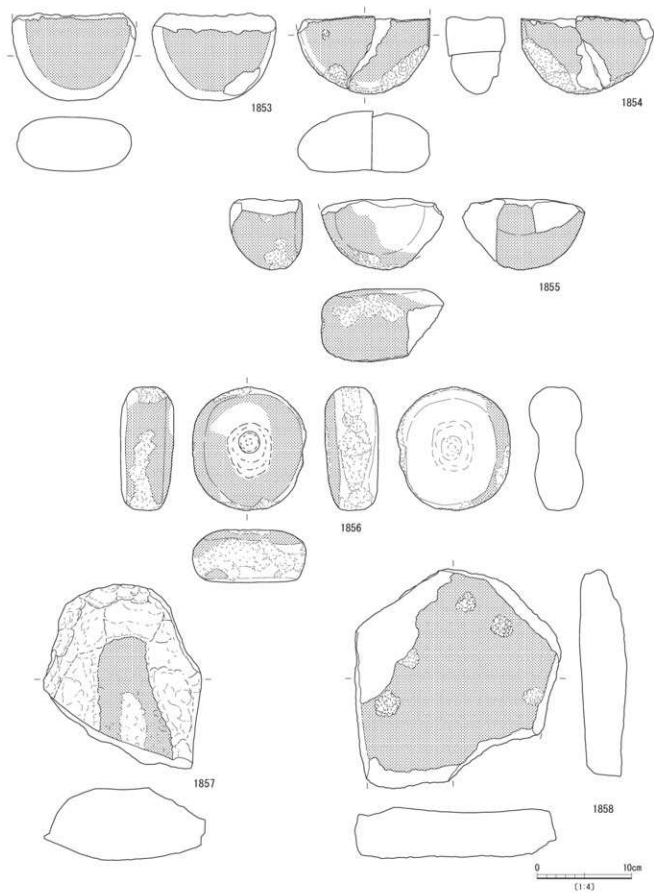
石材は1875が頁岩製である他、全て砂岩製である。また、1863・1869・1870・1874には被熱による赤化、スズ等がみられる。

軽石製品 (第301図 1876~1882)

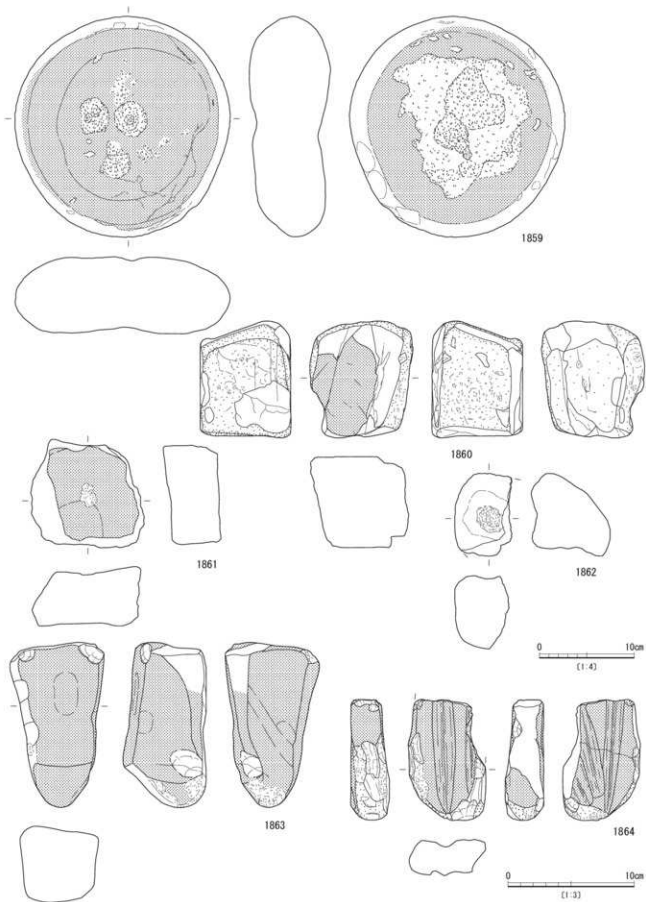
7点図化した。1876は整った扁平楕円形を呈するもので、表裏面を加工して平坦にしている。下半の一部を欠損している。1877・1878は大きさや形状が類似する鏝節形を呈する軽石製品で、全面に面取り加工がなされている。また1878は表面の中央部に不整形な凹みを有する。どちらも質の粗い軽石を用いている。1879は丸みを帯びた不整形な形状に面取りされており、右側面には弧状に挟られた部分を有する。1880は表面に1条の溝痕をもつ不整形な破片で、溝は深さ2.5cm程を有する。1881は角柱状を呈する製品で、丸みを帯びるように面取りがなされている。下半部を欠損している。1882はリング状を呈する製品であり、比較的丁寧に整形されている。直径6.9cm、厚さ2.3cmで、穿孔は両面から行われ、穿孔部は直径1.1cmである。



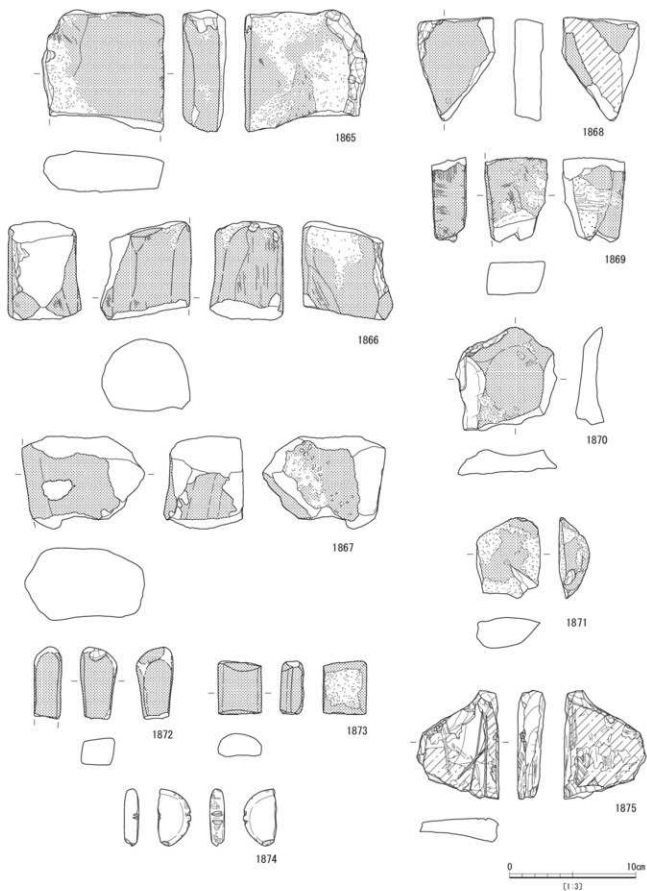
第 297 図 東部出土石器 (7)



第 298 図 東部出土石器 (8)



第 299 図 東部出土石器 (9)



第 300 図 東部出土石器 (10)



第 301 図 東部出土石器 (11)

第13表 弥生時代住居跡・土坑・周溝墓出土土器観察表

出土番号	図面番号	出土位置	方位	取上番号	器種	部位	口径 (cm)	底径 (cm)	器 型		文 様	色澤 内 外	土 質					備 考	
									外 面	内 面			横紋	白 石	黄 石	赤 土	灰 石		重 石
65-321	弥S11	②	-	要	1口縁	29.0	-	-	ハラナデ	-	-	にぶい・黒	良好	○	○	○	○	○	西四石
65-322	弥S11	②上	2316	要	1口縁	-	-	-	ハラナデ	ハラナデ	四縁	黒灰	良好	○	○	○	○	○	スス
65-323	弥S11	②上	2315	要	胴	-	-	-	ハラナデ	ハラナデ	3条突帯	明赤色	普通	○	○	○	○	○	-
66-325	弥S12	①(2)中道	5836	要	完形	32.0-33.0	8.0	-	ハラナデ	ハラナデ	突帯、四縁	橙	普通	○	○	○	○	○	摩耗 スス、器高35
66-326	弥S12	①(2)上道	5908	要	大型	1口縁	41.2	-	ハラナデ	ハラナデ、ナデ	杵形突帯	にぶい・橙	良好	○	○	○	○	○	西四石
66-327	弥S12	①	6006	要	1口縁	25.4	-	-	ハラナデ	ハラナデ	四縁	-	普通	○	○	○	○	○	-
66-328	弥S12	①	-	要	1口縁	15.0	-	-	ハラナデ	ハラナデ	-	にぶい・黒	普通	○	○	○	○	○	摩耗
69-329	弥S12	-	-	要	1口縁	33.0	-	-	ハラナデ	ナデ	突帯	にぶい・黒	普通	○	○	○	○	○	-
69-330	弥S12	①	5977	要	1口縁-胴	28.0	-	-	ハラナデ・ハラナデ	-	4条突帯	橙、暗黒	普通	○	○	○	○	○	摩耗
69-331	弥S12	①	5770	要	1口縁-胴	33.6	-	-	ハラナデ	丁寧なハラナデ	3条突帯、四縁	明赤、黒、にぶい・橙、黒	良好	○	○	○	○	○	摩耗
69-332	弥S12	①	5793	要	1口縁	16.0	-	-	ナデ	-	-	-	普通	○	○	○	○	○	摩耗
69-333	弥S12	①(2)中道	5946	要	1口縁	-	-	-	ハラナデ	ナデ	-	-	普通	○	○	○	○	○	-
69-334	弥S12	①	5851	要	1口縁	-	-	-	ハラナデ	ハラナデ	-	にぶい・黒	良好	○	○	○	○	○	-
69-335	弥S12	①	-	要	胴-脚	-	6.7	-	丁寧なハラナデ	ハラナデ	四縁	にぶい・橙、黒	良好	○	○	○	○	○	成・種子付
69-336	弥S12	①	5761	要	脚	-	7.6	-	ハラナデ・ナデ	ナデ	-	にぶい・橙、黒	良好	○	○	○	○	○	-
69-337	弥S12	①	6099	要	胴-脚	-	7.5	-	ハラナデ・ナデ	ハラナデ	-	にぶい・橙、黒	良好	○	○	○	○	○	コゴ
69-338	弥S12	①	6177	要	脚	-	5.8	-	ハラナデ	-	-	灰黒、にぶい・橙	良好	○	○	○	○	○	摩耗
69-339	弥S12	①(2)中道	5781	要	胴-脚	-	7.8	-	ハラナデ	ハラナデ	-	にぶい・橙、黒	普通	○	○	○	○	○	-
70-340	弥S12	①	5853	要	1口縁	27.4	-	-	ハラナデ・ハラナデ	ナデ	四縁	黒、にぶい・橙	良好	○	○	○	○	○	網落
70-341	弥S12	-	-	要	1口縁	-	-	-	ハラナデ・ハラナデ	ハラナデ・ハラナデ	-	黒、要黒	良好	○	○	○	○	○	-
70-342	弥S12	①	5834	要	1口縁	-	-	-	ハラナデ	ハラナデ	四縁	にぶい・橙	普通	○	○	○	○	○	-
70-343	弥S12	①	5820	要	1口縁	-	-	-	ハラナデ	ハラナデ	四縁	にぶい・黒	良好	○	○	○	○	○	-
70-344	弥S12	①	5864	要	1口縁	-	-	-	ハラナデ	ハラナデ	四縁	黒	普通	○	○	○	○	○	-
70-345	弥S12	①	5985	要	胴	-	-	-	ナデ	ナデ	突帯	赤	普通	○	○	○	○	○	摩耗 例：19.6
70-346	弥S12	①(2)中道	5944	要	底	-	5.9	-	ハラナデ	網落	-	黒	普通	○	○	○	○	○	網落、コゴ
70-347	弥S12	①	5783	要	底	-	6.9	-	ナデ	ナデ	-	明赤色	普通	○	○	○	○	○	摩耗
70-348	弥S12	①	5760	要	底	-	7.5	-	丁寧なハラナデ	丁寧なハラナデ	3条突帯	黒、赤	良好	○	○	○	○	○	-
71-361	弥S13	①	5885	要	1口縁-胴	24.2	-	-	ハラナデ	ハラナデ	3条突帯、四縁	橙	普通	○	○	○	○	○	摩耗 スス
71-362	弥S13	①(2)中道	5908	要	1口縁-胴	22.6	-	-	ハラナデ	ハラナデ	3条突帯	赤	普通	○	○	○	○	○	-
71-363	弥S13	①	5927	要	1口縁	-	-	-	丁寧なハラナデ	丁寧なハラナデ	四縁	にぶい・黒	良好	○	○	○	○	○	-
71-364	弥S13	①	5914	要	1口縁	-	-	-	ハラナデ	ハラナデ	四縁	にぶい・橙、黒	良好	○	○	○	○	○	-
71-365	弥S13	①	5919	要	1口縁	-	-	-	ハラナデ	ハラナデ	四縁	にぶい・橙、黒	良好	○	○	○	○	○	-
71-366	弥S13	①	5895	要	胴	-	-	-	ハラナデ	ハラナデ	2条突帯	黒、明赤	普通	○	○	○	○	○	-
71-367	弥S13	①(2)中道	-	要	1口縁	-	-	-	ハラナデ	ハラナデ	-	明赤色	普通	○	○	○	○	○	-
71-368	弥S13	①	5905	要	1口縁	-	-	-	ハラナデ	ハラナデ	-	明赤色	良好	○	○	○	○	○	-
71-369	弥S13	①(2)中道	5801	要	脚	-	7.4	-	ハラナデ	ナデ	面取り	橙、黒	普通	○	○	○	○	○	-
71-370	弥S13	①	5913	要	脚	-	6.6	-	ナデ	ナデ	-	明赤	普通	○	○	○	○	○	-
71-371	弥S13	①	5869	要	無形	1口縁	-	-	ハラナデ	ハラナデ	四縁	明赤	良好	○	○	○	○	○	-
71-372	弥S13	SX1	5922	要	胴-底	-	8.6	-	丁寧なハラナデ	ハラナデ	-	明赤	良好	○	○	○	○	○	-
71-373	弥S13	①	5915	要	胴-底	-	7.8	-	ハラナデ	ハラナデ	新文	にぶい・橙	普通	○	○	○	○	○	摩耗
71-374	弥S13	①	5910	要	小型付	底	-	-	ナデ	ナデ	-	橙	普通	○	○	○	○	○	-
71-375	弥S14	①	-	要	1口縁	-	-	-	ハラナデ	ハラナデ	四縁	にぶい・橙、黒	良好	○	○	○	○	○	-
80-381	弥S15	①(2)中道	-	要	1口縁	-	-	-	ハラナデ	ハラナデ	四縁	黒	良好	○	○	○	○	○	摩耗
80-382	弥S15	①(2)中道	-	要	1口縁	-	-	-	ハラナデ	ハラナデ	沈線	黒、灰白	良好	○	○	○	○	○	スス、赤石
80-383	弥S15	①(2)中道	6203	要	脚	-	8.2	-	ハラナデ	ハラナデ	-	にぶい・橙	良好	○	○	○	○	○	-
80-384	弥S15	①(2)中道	-	要	大型	胴	-	-	ハラナデ	ハラナデ	1条突帯	黒	普通	○	○	○	○	○	網落
80-385	弥S15	①(2)中道	6199	要	脚	底	-	6.5	ハラナデ	ハラナデ	-	黒、灰、にぶい・橙	良好	○	○	○	○	○	成・丁寧なナデ
80-386	弥S15	①(2)中道	-	要	つまみ	-	-	-	ハラナデ	ハラナデ	-	にぶい・橙	良好	○	○	○	○	○	-
80-388	弥S16	①(2)中道	6213	要	1口縁	-	-	-	ハラナデ	ハラナデ	四縁	にぶい・黒	良好	○	○	○	○	○	-
80-389	弥S16	①(2)中道	6215	要	脚	-	7.2	-	ハラナデ	ハラナデ	-	にぶい・橙	良好	○	○	○	○	○	摩耗
80-390	弥S16	①(2)中道	6214	要	胴-脚	-	-	-	丁寧なハラナデ	ハラナデ	3条沈線	黒	良好	○	○	○	○	○	-
85-393	弥S17	①(2)中道	6330	要	1口縁	-	-	-	ハラナデ	ハラナデ	突帯	暗黒	良好	○	○	○	○	○	-
85-394	弥S17	①(2)中道	-	要	1口縁	-	-	-	ハラナデ	ハラナデ	-	赤	普通	○	○	○	○	○	-

林道番号	田舎番号	出土位置	部位	取上番号	器種	部位	口径(cm)	底径(cm)	器		文様	出雲 内外	構成	土					備考		
									外面	内面				白	赤	黒	灰	黒		石	石
85	595	赤S17	①	595	甕	胴	-	6.6	短いヘラコナナデ	ヘラコナナデ	-	赤黒	良好	○	○	○	○	○	○	-	
86	596	赤S17	①	6188	甕	胎定形	30.3	7.0	丁寧なヘラコナナデ	丁寧なヘラコナナデ	変形	明赤黒	良好	○	○	○	○	○	○	スス、器高17.0	
88	598	赤S18	①	598	甕	口縁	28.5	-	ヘラコナナデ	ヘラコナナデ	四角	明赤黒	良好	○	○	○	○	○	○	-	
88	599	赤S18	①	2231	甕	口縁	25.6	-	ヘラコナナデ	ヘラコナナデ	-	明赤黒	良好	○	○	○	○	○	○	-	
88	600	赤S18	①	3353	甕	口縁-胴	23.0	-	ハケコナナデ	ヘラコナナデ	-	に白い赤黒 灰黒	良好	○	○	○	○	○	○	-	
88	601	赤S18	①	598	甕	口縁	-	-	ヘラコナナデ	ヘラコナナデ	四角	明赤黒	普通	○	○	○	○	○	○	-	
88	602	赤S18	①	598	甕	口縁	-	-	ヘラコナナデ	ヘラコナナデ	四角	に白い赤黒	良好	○	○	○	○	○	○	-	
88	603	赤S18	①	598	甕	口縁	-	-	ヘラコナナデ	ヘラコナナデ	-	明赤黒	良好	○	○	○	○	○	○	-	
88	604	赤S18	①	598	甕	口縁	-	-	ヘラコナナデ	ヘラコナナデ	-	に白い赤黒	普通	○	○	○	○	○	○	-	
88	605	赤S18	①	598	甕	口縁	-	-	ヘラコナナデ	ヘラコナナデ	四角	明赤黒	普通	○	○	○	○	○	○	-	
88	606	赤S18	①	598	甕	口縁	-	-	ヘラコナナデ	ヘラコナナデ	-	明赤黒	普通	○	○	○	○	○	○	摩耗、肩高、踵石	
88	607	赤S18	①	598	甕	口縁	-	-	ヘラコナナデ	ヘラコナナデ	-	明赤黒	普通	○	○	○	○	○	○	-	
89	608	赤S18	①	598	甕	口縁	25.6	-	ヘラコナナデ	ヘラコナナデ	四角	明赤、赤灰 明赤黒	良好	○	○	○	○	○	○	-	
89	609	赤S18	①	723	甕	口縁	-	-	ヘラコナナデ	ヘラコナナデ	-	に白い赤黒	良好	○	○	○	○	○	○	-	
89	610	赤S18	①	598	甕	口縁	-	-	丁寧なヘラコナナデ	丁寧なヘラコナナデ	-	赤黒	良好	○	○	○	○	○	○	-	
89	611	赤S18	①	598	甕	口縁	-	-	ヘラコナナデ	ヘラコナナデ	-	灰赤	良好	○	○	○	○	○	○	-	
89	612	赤S18	①	SK1	甕	口縁	-	-	丁寧なヘラコナナデ	丁寧なヘラコナナデ	-	に白い赤黒	普通	○	○	○	○	○	○	-	
89	613	赤S18	①	5916	甕	胎定形	17.8	9.0	ヘラコナナデ	丁寧なヘラコナナデ	-	に白い赤黒 明赤黒	普通	○	○	○	○	○	○	両肩、スス、器高12.5	
89	614	赤S18	①	598	甕	口縁	-	-	ヘラコナナデ	ヘラコナナデ	変形	赤黒	良好	○	○	○	○	○	○	-	
89	615	赤S18	①	6231	甕	口縁	-	-	ヘラコナナデ	ヘラコナナデ	変形	暗赤黒	普通	○	○	○	○	○	○	-	
89	616	赤S18	①	598	甕	口縁	-	-	ヘラコナナデ	ヘラコナナデ	変形	に白い赤黒	良好	○	○	○	○	○	○	-	
89	617	赤S18	①	598	甕	口縁	-	-	ヘラコナナデ	ヘラコナナデ	変形、四角	に白い赤黒	普通	○	○	○	○	○	○	-	
92	622	赤S19	①	622	甕	口縁	-	-	ヘラコナナデ	ヘラコナナデ	四角	明赤黒	普通	○	○	○	○	○	○	-	
92	623	赤S19	①	6220	甕	口縁	-	-	ヘラコナナデ	ヘラコナナデ	四角	に白い赤黒	良好	○	○	○	○	○	○	-	
92	624	赤S19	①	622	甕	口縁	-	-	ヘラコナナデ	ヘラコナナデ	四角	に白い赤黒	良好	○	○	○	○	○	○	-	
92	625	赤S19	①	6232	甕	口縁	-	-	ヘラコナナデ	ヘラコナナデ	四角	明赤黒	普通	○	○	○	○	○	○	-	
92	626	赤S19	①	6224	甕	口縁	-	-	ヘラコナナデ	ヘラコナナデ	四角	明赤黒	普通	○	○	○	○	○	○	-	
92	627	赤S19	①	6231	甕	口縁	-	-	ヘラコナナデ	ヘラコナナデ	四角	に白い赤黒	普通	○	○	○	○	○	○	-	
92	628	赤S19	①	6235	甕	口縁	-	-	ヘラコナナデ	ヘラコナナデ	変形	明赤黒	普通	○	○	○	○	○	○	-	
95	632	赤S110	①	6047	甕	口縁-胴	26.4	-	丁寧なヘラコナナデ	丁寧なヘラコナナデ	2条変形、四角	に白い赤黒	良好	○	○	○	○	○	○	-	
95	633	赤S110	①	6024	甕	口縁-胴	27.0	-	ヘラコナナデ	ヘラコナナデ	1条変形、四角、踵石	に白い赤黒 赤黒	良好	○	○	○	○	○	○	-	
95	634	赤S110	①	6064	甕	口縁	-	-	ハケコナナデ	ヘラコナナデ	-	灰赤	普通	○	○	○	○	○	○	-	
95	635	赤S110	①	6101	甕	口縁	-	-	ヘラコナナデ	ヘラコナナデ	四角	に白い赤黒 赤黒	良好	○	○	○	○	○	○	-	
95	636	赤S110	①	6476	甕	口縁	-	-	ヘラコナナデ	ヘラコナナデ	変形、四角	明赤黒	良好	○	○	○	○	○	○	-	
95	637	赤S110	①	6551	甕	口縁	26.2	-	ヘラコナナデ	ヘラコナナデ	1条変形、四角	に白い赤黒	良好	○	○	○	○	○	○	-	
95	638	赤S110	①	6023	甕	口縁-胴下	22.5	-	ハケコナナデ	ヘラコナナデ	四角	に白い赤黒 明赤黒	良好	○	○	○	○	○	○	両肩、スス、器高21.1	
95	639	赤S110	①	6049	甕	口縁-胴	23.4	-	ヘラコナナデ	ヘラコナナデ	四角	に白い赤黒	良好	○	○	○	○	○	○	-	
95	640	赤S110	①	6407	甕	口縁-胴	26.0	-	丁寧なヘラコナナデ	丁寧なヘラコナナデ	2条変形	に白い赤黒	良好	○	○	○	○	○	○	-	
95	641	赤S110	①	6413	甕	口縁	-	-	ヘラコナナデ	ヘラコナナデ	-	明赤黒	普通	○	○	○	○	○	○	-	
95	642	赤S110	①	6541	甕	胴-底	-	8.2	丁寧なヘラコナナデ	ヘラコナナデ	無紋	明赤黒	普通	○	○	○	○	○	○	摩耗	
95	643	赤S110	①	6013	甕	胴-底	-	7.6	ハケコナナデ	ヘラコナナデ	-	明赤黒 に白い赤黒	普通	○	○	○	○	○	○	摩耗	
95	644	赤S110	①	6112	甕	底	-	7.2	丁寧なヘラコナナデ	ナデ	-	に白い赤黒 灰黒	普通	○	○	○	○	○	○	底、面取り	
95	645	赤S110	①	6110	大型甕	口縁	-	-	丁寧なヘラコナナデ	丁寧なヘラコナナデ	1条変形	明赤、に白い赤黒 に白い赤黒	良好	○	○	○	○	○	○	スス	
95	646	赤S110	①	6142	甕	底	-	-	丁寧なヘラコナナデ	丁寧なヘラコナナデ	-	灰白	普通	○	○	○	○	○	○	輝石	
95	647	赤S110	①	6080	甕	胴	-	-	ヘラコナナデ	-	M字変形	に白い赤黒	良好	○	○	○	○	○	○	両肩、片盛り踵石、器高21.2	
95	648	赤S110	①	6180	甕	胴-底	-	5.8	ミダキ	ヘラコナナデ	無紋	明赤黒	良好	○	○	○	○	○	○	摩耗、両肩、底、丁寧なナデ	
95	649	赤S110	①	6403	甕	底	-	-	ミダキ	ミダキ	1条変形	灰赤黒 明赤黒	良好	○	○	○	○	○	○	-	
95	650	赤S110	①	6385	甕	底	-	7.2	丁寧なヘラコナナデ	ヘラコナナデ	-	に白い赤黒	良好	○	○	○	○	○	○	角四石	
95	651	赤S110	①	6063	甕	底	-	-	ヘラコナナデ	ヘラコナナデ	-	に白い赤黒 灰赤	普通	○	○	○	○	○	○	角四石	
95	652	赤S110	①	6161	甕	つまみ	-	8.0	ヘラコナナデ	ヘラコナナデ	-	明赤黒	良好	○	○	○	○	○	○	-	
95	653	赤S110	①	6104	甕	口縁	29.0	-	ヘラコナナデ、面取り	ヘラコナナデ	-	明赤黒	普通	○	○	○	○	○	○	両肩、摩耗、スス	
95	654	赤S110	①	6090	甕	口縁	-	-	ヘラコナナデ	ヘラコナナデ	変形	に白い赤黒	普通	○	○	○	○	○	○	輪除石	
95	655	赤S110	①	6030	甕	口縁	-	-	ヘラコナナデ	ヘラコナナデ	-	明赤黒	良好	○	○	○	○	○	○	-	
95	656	赤S110	①	6410	甕	口縁	-	-	丁寧なヘラコナナデ	ヘラコナナデ	1条変形	暗赤黒	良好	○	○	○	○	○	○	-	
98	660	赤S111	①	6111	甕	口縁	-	-	ヘラコナナデ	ヘラコナナデ	四角	に白い赤黒	良好	○	○	○	○	○	○	-	
98	661	赤S111	①	6301	甕	口縁	-	-	ヘラコナナデ	ヘラコナナデ	-	明赤黒	普通	○	○	○	○	○	○	角四石	
98	662	赤S111	①	6310	甕	口縁	-	-	ヘラコナナデ	ヘラコナナデ	-	赤黒	良好	○	○	○	○	○	○	-	

採出 番号	採 取 地 名	出 土 位置	層位	取上 番号	器種	部位	口径 (cm)	底径 (cm)	面		文 様	出 土 外 内	焼成	土				備 考
									外	内				白 土	赤 土	黒 土	灰 土	
98	663	佛S11	①	6200	甕	口縁	-	-	ヘラノナデ	ヘラノナデ	-	暗赤黒 肌灰	良好	○	○	○	○	-
98	664	佛S11	-	-	甕	胴	-	-	ヘラノナデ	ヘラノナデ	3条交番	にぶい 肌	普通	○	○	○	○	-
98	665	佛S11	-	-	甕	肩	-	-	ヘラノナデ	ヘラノナデ	3条交番	にぶい 肌	普通	○	○	○	○	角四石
100	666	佛S12	①	6272	甕	口縁-胴	-	-	ヘラノナデ	ヘラノナデ	四條, 3条交 番	にぶい 肌	良好	○	○	○	○	-
100	667	佛S12	P2	-	甕	口縁	-	-	ヘラノナデ	ヘラノナデ	四條	にぶい 肌	普通	○	○	○	○	-
100	668	佛S12	山, SK1 ①	6403	甕	口縁	24.0	-	ヘラノナデ	ヘラノナデ	黒目	黒 明肌灰	良好	○	○	○	○	輝石
100	669	佛S12	①	6280	甕	口縁	-	-	ヘラノナデ	ヘラノナデ	交番	にぶい赤黒 肌	普通	○	○	○	○	輝石
100	670	佛S12	①	6500	甕	口縁-胴	-	-	粗いノナデ	ヘラノナデ	-	肌 肌灰	良好	○	○	○	○	輝石
100	671	佛S12	SK1 ①	7206	甕	胴	-	6.0	ヘラノナデ	ヘラノナデ	-	肌 肌	普通	○	○	○	○	-
100	672	佛S12	山, 東直	6288	小型鉢	口縁-胴	7.8	-	丁寧なノナデ	ヘラノナデ	-	にぶい 肌	普通	○	○	○	○	-
101	673	佛S12	①	6258	大型甕	口縁-胴	43.8	-	ヘラノナデ	ヘラノナデ	1条交番, 四 條	赤黒, 赤黒 肌	良好	○	○	○	○	又ス
101	674	佛S12	①	6264	甕	口縁	23.0	-	ヘラノナデ	ヘラノナデ	-	明赤黒, 黒 肌	普通	○	○	○	○	-
101	675	佛S12	①	6325	甕	肩	-	-	粗いノナデ	丁寧なヘラノ ナデ	3条直状文	明赤 肌	良好	○	○	○	○	-
101	682	佛S13	-	-	甕	口縁	-	-	ヘラノナデ	ヘラノナデ	-	にぶい 肌	普通	○	○	○	○	-
101	683	佛S13	SK1 ①	7751	甕	胴	-	-	ヘラノナデ	ヘラノナデ	3条交番	にぶい 肌	良好	○	○	○	○	角四石
101	684	佛S13	①	7696	甕	口縁	-	-	ヘラノナデ	ヘラノナデ	3条交番	にぶい 肌	普通	○	○	○	○	-
101	685	佛S13	①	7688	甕	口縁	-	-	丁寧なノナデ	丁寧なノナデ	-	明肌灰	普通	○	○	○	○	角四石
101	686	佛S13	-	-	甕	肩	-	-	ヘラノナデ	ヘラノナデ	2条斜目交番	にぶい 肌	良好	○	○	○	○	角四石
101	687	佛S13	①	6228	甕	肩	-	-	ヘラノナデ	ヘラノナデ	2条斜目交番	にぶい 肌	良好	○	○	○	○	角四石
101	688	佛S13	東直	7646	甕	肩	-	-	ヘラノナデ	ヘラノナデ	交番	にぶい 肌	普通	○	○	○	○	摩耗, 角四石
101	689	佛S13	①	7651	甕	肩	-	-	ヘラノナデ	ヘラノナデ	3条交番	にぶい 肌	普通	○	○	○	○	-
101	693	佛S14	①	6982	甕	口縁	-	-	ヘラノナデ	ヘラノナデ	-	肌	普通	○	○	○	○	-
101	694	佛S14	①	6981	甕	口縁	-	-	ヘラノナデ	ヘラノナデ	四條	肌灰	良好	○	○	○	○	-
101	695	佛S14	①	6711	甕	口縁	-	-	ヘラノナデ	ヘラノナデ	四條	にぶい 肌	良好	○	○	○	○	角四石
101	696	佛S14	①	6676	甕	口縁	-	-	ヘラノナデ	ヘラノナデ	四條	にぶい 肌	良好	○	○	○	○	-
101	697	佛S14	①	6673	甕	口縁	-	-	ヘラノナデ	ヘラノナデ	-	にぶい 肌	良好	○	○	○	○	-
101	698	佛S14	北西	-	甕	口縁	-	-	ヘラノナデ	ヘラノナデ	四條	にぶい 肌	良好	○	○	○	○	-
101	699	佛S14	東直	6724	甕	肩	-	-	ヘラノナデ	ヘラノナデ	3条交番	肌 にぶい 肌	普通	○	○	○	○	-
101	700	佛S14	①	6679	甕	肩	-	-	ヘラノナデ	ヘラノナデ	3条交番	肌, 赤 肌	良好	○	○	○	○	-
101	701	佛S14	-	-	甕	口縁	-	-	丁寧なノナデ	丁寧なノナデ	交番	肌灰 にぶい 肌	良好	○	○	○	○	角四石
101	702	佛S14	①	6668	甕	口縁	-	-	丁寧なノナデ	丁寧なノナデ	交番	肌 にぶい 肌	普通	○	○	○	○	角四石
101	703	佛S14	-	-	甕	口縁	-	-	ヘラノナデ	ヘラノナデ	四條	にぶい赤黒 肌	普通	○	○	○	○	-
101	704	佛S14	東直	7383	甕	胴	-	-	ヘラノナデ	ヘラノナデ	-	肌 にぶい 肌	普通	○	○	○	○	-
101	705	佛S14	①	6672	甕	胴下-底	-	8.4	-	-	-	肌 にぶい 肌	普通	○	○	○	○	-
101	706	佛S14	①	6698	甕	底	-	9.6	ヘラノナデ	ヘラノナデ	-	にぶい 肌	良好	○	○	○	○	-
101	707	佛S14	①	6672	小型甕	口縁	10.0	-	ヘラノナデ	ヘラノナデ	-	にぶい 肌	普通	○	○	○	○	角四石
101	708	佛S14	①	6696	大型甕	口縁	-	-	ヘラノナデ	ヘラノナデ	交番, 四條	肌 肌	良好	○	○	○	○	-
101	711	佛S15	①	7242	甕	口縁-胴	21.6	-	ヘラノナデ	ナデ	2条交番, 四 條	肌 にぶい 肌	良好	○	○	○	○	器高 6.9
101	712	佛S15	①	7244	甕	口縁	-	-	ヘラノナデ	ナデ	四條	肌 にぶい赤黒 肌	普通	○	○	○	○	赤石
108	713	佛S15	山, 東直	7184	甕	胴-胴下	-	-	丁寧なノナデ	丁寧なノナデ	3条交番	肌	普通	○	○	○	○	器高, 又ス, 3 ヶ, 器高 25.2 又ス 2
110	717	佛S16	①	7424	甕	口縁	30.5	-	ヘラノナデ	ヘラノナデ	四條	にぶい赤黒 肌	良好	○	○	○	○	又ス
110	718	佛S16	②	7286	甕	口縁	28.4	-	ヘラノナデ	ヘラノナデ	交番, 四條	にぶい 肌	普通	○	○	○	○	-
110	719	佛S16	①	7408	甕	口縁	24.5	-	ヘラノナデ	ヘラノナデ	四條	にぶい 肌	普通	○	○	○	○	-
110	720	佛S16	②	7338	甕	口縁	-	-	ヘラノナデ	ヘラノナデ	四條	肌	普通	○	○	○	○	-
110	721	佛S16	①	7306	甕	口縁	-	-	ヘラノナデ	ヘラノナデ	-	にぶい赤黒 肌	普通	○	○	○	○	角四石
110	722	佛S16	①②	7412	甕	口縁-胴	32.4	-	丁寧なヘラノ ナデ	ナデ	3条交番	肌 肌	良好	○	○	○	○	-
110	723	佛S16	①	7428	甕	胴	-	9.0	ヘラノナデ	ヘラノナデ	-	明赤黒 肌	良好	○	○	○	○	-
110	724	佛S16	①	-	甕	胴	-	8.8	ヘラノナデ	ヘラノナデ	四條	にぶい赤 肌	普通	○	○	○	○	角四石
110	725	佛S16	SK2(中 基土坑)	-	甕	口縁	-	-	ヘラノナデ	ヘラノナデ	交番	肌 肌	普通	○	○	○	○	摩耗, 角四石
110	726	佛S16	②	-	甕	口縁	-	-	ヘラノナデ	ナデ	-	肌	普通	○	○	○	○	-
110	727	佛S16	②	7540	甕	口縁付直	-	-	ヘラノナデ	ヘラノナデ	交番	にぶい赤黒 肌	普通	○	○	○	○	-
110	728	佛S16	①	7512	甕	肩	-	-	丁寧なノナデ	ナデ	-	暗赤黒 肌	良好	○	○	○	○	器高, 付纏り
110	729	佛S16	①	7418	甕	口縁	-	-	粗いナデ	ヘラノナデ	交番	肌 肌	普通	○	○	○	○	-
110	730	佛S16	①	7392	甕	口縁	-	-	粗いナデ	ナデ	-	暗赤黒 肌	良好	○	○	○	○	-

採出 番号	組 番号	出土 位置	層位	取上 番号	器種	部位	口径 (cm)	底径 (cm)	形		文 様	出雲 外 内	構成 白 磁 石 灰 石	土					備 考		
									面					文 様	出雲 外 内	構成 白 磁 石 灰 石	土	灰 石		瓦 石	備 考
									外 面	内 面											
110	731	佛S116	①	7414	鉢	底	-	8.8	ナデ	-	-	普通	○	○	○	○	-	-			
113	728	佛S117	②	6943	甕	口縁	-	-	ヘラナデ	ヘラナデ	四條	厚縁 黒青磁	良好	○	○	○	○	-	-		
113	729	佛S117	③	6960	甕	口縁	-	-	ヘラナデ	ヘラナデ	四條, 突帯	口縁に 黒青磁	良好	○	○	○	○	-	-		
113	740	佛S117	④	6872	甕	口縁-胴	29.4	-	ヘラ-胴ナデ	ヘラ-胴ナデ	四條, 3条突帯	口縁に 黒青磁	良好	○	○	○	○	-	-		
113	741	佛S117	⑤	6887	甕	口縁	-	-	ヘラナデ	ヘラナデ	四條, 3条突帯	口縁に 黒青磁	良好	○	○	○	○	-	-		
113	742	佛S117	⑥, ⑦	6870	甕	口縁-胴	33.6	-	丁寧なヘラナデ	丁寧なヘラナデ	四條, 1条突帯	厚縁 黒青磁	良好	○	○	○	○	-	-		
113	743	佛S117	⑧	6877	甕	口縁	-	-	ヘラナデ	ヘラナデ	四條	結縁	良好	○	○	○	○	-	-		
113	744	佛S117	⑨	6960	甕	口縁-胴上	34.1	-	ヘラナデ	ヘラナデ	3条突帯, 四 條	口縁に 黒青磁, 赤 黒青磁	普通	○	○	○	○	-	スス		
113	745	佛S117	⑩	6880	甕	胴	-	5.0	ヘラ-胴ナデ	ヘラ-胴ナデ	-	結縁 赤黒 青磁	良好	○	○	○	○	-	-		
113	746	佛S117	⑪	6836	甕	胴	-	6.4	ヘラナデ	ヘラナデ	-	口縁に 赤黒 青磁	良好	○	○	○	○	-	-		
114	747	佛S117	⑫, 底 底底	6851	甕	口縁	28.7	-	ヘラナデ, 1 寸キ	ヘラナデ	四條	結縁 黒青磁	良好	○	○	○	○	-	酒器		
114	748	佛S117	⑬	6863	甕	胴-肩	-	-	ヘラナデ	ヘラナデ	3条突帯	口縁に 黒青磁	普通	○	○	○	○	-	スス, 竹, 笠, 土		
114	749	佛S117	⑭	6589	甕	口縁-胴	-	-	ヘラ-胴ナデ	ヘラ-胴ナデ	-	口縁に 黒青磁	普通	○	○	○	○	-	-		
114	750	佛S117	⑮	6946	甕	口縁	-	-	ヘラナデ	ヘラナデ	-	口縁に 黒青磁	良好	○	○	○	○	-	-		
114	751	佛S117	⑯	6586	甕	口縁	19.0	-	ヘラナデ	ヘラナデ	四條	口縁に 黒青磁	普通	○	○	○	○	-	酒器		
114	752	佛S117	⑰	6597	甕	口縁	-	-	ヘラナデ	ヘラナデ	-	口縁に 黒青磁	普通	○	○	○	○	-	酒器		
114	753	佛S117	⑱	6896	鉢	口縁	11.0	-	ヘラナデ	ヘラナデ	-	口縁に 黒青磁	良好	○	○	○	○	-	-		
114	754	佛S117	⑲	6579	高坏	胴	-	-	丁寧なヘラナデ	ヘラナデ	1条突帯	口縁に 黒青磁, 赤 黒青磁, 黒 青磁	良好	○	○	○	○	-	-		
114	755	佛S117	⑳	6832	壺	つまみ	-	4.6	ヘラナデ	ヘラナデ	-	赤 黒青磁	普通	○	○	○	○	-	コゲ		
116	738	佛S118	①	7375	甕	口縁	25.5	-	丁寧なヘラナデ	丁寧なヘラナデ	3条突帯, 四 條	赤 黒青磁	良好	○	○	○	○	-	スス		
116	739	佛S118	②	7509	甕	胴	-	8.0	ヘラ-胴ナデ	ヘラ-胴ナデ	-	厚縁 結縁 赤黒 青磁	普通	○	○	○	○	-	-		
116	760	佛S118	③	7491	甕	底	-	-	丁寧なナデ	丁寧なナデ	-	厚縁 結縁 赤黒 青磁	普通	○	○	○	○	-	-		
120	768	佛S119	①, ②, ③, ④, ⑤, ⑥, ⑦, ⑧, ⑨, ⑩, ⑪, ⑫, ⑬, ⑭, ⑮, ⑯, ⑰, ⑱, ⑲, ⑳, ㉑, ㉒, ㉓, ㉔, ㉕, ㉖, ㉗, ㉘, ㉙, ㉚, ㉛, ㉜, ㉝, ㉞, ㉟, ㊱, ㊲, ㊳, ㊴, ㊵, ㊶, ㊷, ㊸, ㊹, ㊺, ㊻, ㊼, ㊽, ㊾, ㊿	7823	甕	肩-底	-	9.0	ヘラ-胴ナデ, ナデ	ヘラナデ	2条突帯	口縁に 黒青磁, 赤黒 青磁	普通	○	○	○	○	-	酒器, 煎茶, 粥, 石占		
121	769	佛S119	①, ②, ③, ④, ⑤, ⑥, ⑦, ⑧, ⑨, ⑩, ⑪, ⑫, ⑬, ⑭, ⑮, ⑯, ⑰, ⑱, ⑲, ⑳, ㉑, ㉒, ㉓, ㉔, ㉕, ㉖, ㉗, ㉘, ㉙, ㉚, ㉛, ㉜, ㉝, ㉞, ㉟, ㊱, ㊲, ㊳, ㊴, ㊵, ㊶, ㊷, ㊸, ㊹, ㊺, ㊻, ㊼, ㊽, ㊾, ㊿	6736	甕	口縁-胴	33.4	-	ヘラナデ	ヘラナデ	四條	口縁に 黒青磁	普通	○	○	○	○	-	-		
121	770	佛S119	①	7198	壺	口縁-胴	23.0	-	ヘラ-胴ナデ	ヘラナデ+ヘ ラナデ	3条突帯, 四 條	赤 黒青磁	良好	○	○	○	○	-	輝石		
121	771	佛S119	②下	7835	甕	口縁-胴	19.8	-	ミダキ	ミダキ	-	赤黒 青磁	良好	○	○	○	○	-	内陶石		
122	772	佛S119	③	7861	甕	胴	-	-	-	-	3条突帯	口縁に 黒青磁	普通	○	○	○	○	-	酒器, 煎茶, 粥		
122	773	佛S119	④上 底底	8045	甕	口縁	20.4	-	丁寧なヘラ ナデ	丁寧なヘラ ナデ	四條	厚縁 結縁 赤黒 青磁	良好	○	○	○	○	-	-		
122	774	佛S119	⑤下	7899	甕	口縁	-	-	ヘラナデ	ヘラナデ	四條	口縁に 黒青磁, 厚 縁 結縁 赤黒 青磁	良好	○	○	○	○	-	-		
122	775	佛S119	P1	8192	甕	胴	-	6.8	丁寧なヘラ ナデ	丁寧なヘラ ナデ	四條	厚縁 結縁 赤黒 青磁	良好	○	○	○	○	-	-		
122	776	佛S119	①	7837	甕	胴	-	7.8	丁寧なヘラ ナデ	ヘラナデ	-	口縁に 黒青磁	良好	○	○	○	○	-	-		
123	777	佛S119	②, ③	6979	大型甕	完整	45.0	8.5	丁寧なヘラ ナデ	丁寧なヘラ ナデ	四條, 突帯	赤, 赤 黒青磁, 赤, 赤 黒青磁	良好	○	○	○	○	-	スス, 酒器, 高 砂志		
124	778	佛S119	④, ⑤	6974	甕	口縁-胴	30.0	-	ヘラナデ	ヘラナデ	3条突帯	厚縁	普通	○	○	○	○	-	-		
124	779	佛S119	⑥, ⑦上 底上	6747	甕	口縁-胴	30.0	-	-	-	四條, 3条突 帯	口縁に 黒青磁	普通	○	○	○	○	-	酸化		
124	780	佛S119	⑧上 底上	7800	甕	口縁-胴	33.0	-	丁寧なナ デ	丁寧なナ デ	突帯	口縁に 黒青磁	普通	○	○	○	○	-	-		
124	781	佛S119	⑨	6822	大型甕	口縁	-	-	ヘラナデ	ヘラナデ	四條	口縁に 黒青磁 結縁 赤黒 青磁	普通	○	○	○	○	-	-		
124	782	佛S119	⑩	6760	大型甕	口縁-胴	-	-	ヘラナデ	ナデナデ+ヘ ラナデ	1条突帯, 四 條	口縁に 黒青磁 結縁 赤黒 青磁	良好	○	○	○	○	-	-		
124	783	佛S119	⑪	6753	甕	口縁-胴下	26.8	-	ヘラ-胴ナ デ	ヘラ-胴ナ デ	4条突帯	厚縁 結縁 赤黒 青磁	普通	○	○	○	○	-	摩耗		
124	784	佛S119	⑫	6774	甕	口縁	29.5	-	ヘラナデ	ヘラナデ	-	口縁に 黒青磁	良好	○	○	○	○	-	-		
124	785	佛S119	⑬上	7968	甕	胴	-	7.5	ヘラナデ	ヘラナデ	四條	口縁に 黒青磁	良好	○	○	○	○	-	コゲ		
124	786	佛S119	⑭上 底上	7730	甕	胴	-	8.0	ヘラナデ	ヘラナデ	四條	口縁に 黒青磁	普通	○	○	○	○	-	摩耗		
124	787	佛S119	⑮上 底上	6786	甕	胴	-	7.4	ヘラ-胴ナ デ	ヘラ-胴ナ デ	-	口縁に 黒青磁	普通	○	○	○	○	-	コゲ		
124	788	佛S119	⑯上	6958	甕	胴	-	6.2	ヘラ-胴ナ デ	ヘラ-胴ナ デ	四條	口縁に 黒青磁	良好	○	○	○	○	-	-		
124	789	佛S119	⑰上	7919	甕	胴	-	7.2- 7.5	ヘラ-胴ナ デ	ヘラ-胴ナ デ	四條	厚 縁 結縁 赤黒 青磁	普通	○	○	○	○	-	-		
124	790	佛S119	⑱上	6809	甕	胴	-	6.4	ヘラ-胴ナ デ	ヘラ-胴ナ デ	-	口縁に 黒青磁	普通	○	○	○	○	-	摩耗		
124	791	佛S119	⑲上	6733	甕	胴	-	8.0	丁寧なヘラ ナデ	丁寧なヘラ ナデ	四條	口縁に 黒青磁	良好	○	○	○	○	-	-		
124	792	佛S119	㉑, ㉒上	6813	甕	胴下-胴	-	6.0- 7.6	ヘラ-胴ナ デ	ヘラ-胴ナ デ	-	厚 縁 結縁 赤黒 青磁	普通	○	○	○	○	-	底=赤黒 青磁		
125	793	佛S119	㉓上 底上	6806	甕	口縁-肩	22.8	-	ナゲ-胴ナ デ, 横ナ デ+ナ デ	ナゲ-胴ナ デ	四條, 3条 突帯	厚 縁 結縁 赤黒 青磁	普通	○	○	○	○	-	黒泥, 内陶石		

標 記 号	用 意 号	出 土 位置	層位	取上 番号	器種	部位	口径 (cm)	底径 (cm)	面		文 様	出 土 内 容	焼成 良好	白 石	赤 石	土 質	石 目	石 目	石 目	考 考
									面											
									外 面	内 面										
124	794	佛S219	①上 1層目	6745	壺	肩一側	-	-	へう	へう	3条交差 波 状沈線	燈 雲 唐	○	○	○	○	○	○	○	スス、陶2.8
125	795	佛S219	①	6746	壺	底	-	7.0	へう	へう	-	赤黒 黒 赤	○	○	○	○	○	○	-	
126	796	佛S219	①上	7970	壺	底	-	10.5	へう	へう	-	-	○	○	○	○	○	○	摩訶	
127	797	佛S219	①	6702	壺	底	-	4.8- 5.1	へう	へう	-	-	○	○	○	○	○	○	-	
125	798	佛S219	②	7223	壺	底	-	7.8	へう	へう	-	赤黒 にぶい	○	○	○	○	○	○	-	
126	799	佛S219	②	7739	壺	口径一側	26.0	-	へう	へう	西縁、3条交 差	にぶい	○	○	○	○	○	○	-	
126	800	佛S219	②	6728	壺	肩一側	-	-	へう	へう	2条交差	明赤	○	○	○	○	○	○	陶 48.0	
127	801	佛S219	①上 2層目	6781	大型壺	底	-	9.0	へう	へう	-	にぶい	○	○	○	○	○	○	-	
127	802	佛S219	①上	7802	大型壺	底一側	44.5- 46.0	9.0	-	-	-	赤黒 赤 にぶい	○	○	○	○	○	○	酒流、黒流、角 四石	
127	803	佛S219	①下	8122	大型壺	底	-	9.5	へう	へう	-	にぶい	○	○	○	○	○	○	摩訶	
127	804	佛S219	①②	7305	大型壺	口径一側	30.6	-	へう	へう	1条沈線	にぶい	○	○	○	○	○	○	-	
128	805	佛S219	②	8049	黒面壺	口径一底	14.5	7.1	-	-	西縁、穿孔2 条	にぶい	○	○	○	○	○	○	黒化、器高18.0	
128	806	佛S219	①	6752	鉢	口径	-	-	へう	へう	-	灰黒	○	○	○	○	○	○	-	
128	807	佛S219	①	6966	鉢	底	-	-	へう	へう	沈線	にぶい	○	○	○	○	○	○	角四石	
128	808	佛S219	①② 1層目	7039	鉢	底形	25.5	9.5	へう	へう	二又状11段 筋目交差	赤 にぶい	○	○	○	○	○	○	器高17.6	
128	809	佛S219	①	7933	壺	底	-	11.0	へう	へう	-	-	○	○	○	○	○	○	-	
130	817	佛S220	①	7316	壺	口径一側上	30.0	-	へう	へう	-	にぶい	○	○	○	○	○	○	-	
130	818	佛S220	①	7306	壺	口径一側上	20.5	-	へう	へう	西縁	にぶい	○	○	○	○	○	○	-	
130	819	佛S220	①	7305	壺	口径	-	-	へう	へう	西縁	赤黒	○	○	○	○	○	○	-	
130	820	佛S220	北西	-	壺	口径	-	-	へう	へう	丁字交へう	-	○	○	○	○	○	○	-	
130	821	佛S220	①	7322	壺	口径	-	-	へう	へう	丁字交へう	赤 赤黒	○	○	○	○	○	○	-	
130	822	佛S220	①西	-	壺	口径	-	-	へう	へう	-	赤黒	○	○	○	○	○	○	-	
130	823	佛S220	①底	7329	壺	口径	-	-	へう	へう	西縁	にぶい	○	○	○	○	○	○	-	
130	824	佛S220	①	7324	壺	口径	-	-	へう	へう	西縁	明赤	○	○	○	○	○	○	-	
130	825	佛S220	①	7308	壺	口径	-	-	へう	へう	西縁	にぶい	○	○	○	○	○	○	-	
133	826	佛S221	①	10319	壺	口径	31.1	-	へう	へう	西縁、2条交 差	にぶい	○	○	○	○	○	○	スス	
133	827	佛S221	①	10362	壺	口径	-	-	へう	へう	西縁	燈	○	○	○	○	○	○	スス	
133	828	佛S221	-	-	壺	口径	-	-	へう	へう	-	にぶい	○	○	○	○	○	○	摩訶	
133	829	佛S221	①	-	壺	口径	-	-	へう	へう	西縁	にぶい	○	○	○	○	○	○	スス	
133	830	佛S221	①	10323	壺	口径	-	-	へう	へう	へう	にぶい	○	○	○	○	○	○	-	
133	831	佛S221	-	-	壺	口径	21.0	-	へう	へう	-	にぶい	○	○	○	○	○	○	-	
133	832	佛S221	-	-	壺	口径	-	-	へう	へう	-	にぶい	○	○	○	○	○	○	-	
133	833	佛S221	P1①	-	壺	口径	-	-	へう	へう	-	燈、唐	○	○	○	○	○	○	-	
133	834	佛S221	①	10317	壺	底(脚)	-	7.4	へう	へう	-	にぶい	○	○	○	○	○	○	-	
133	835	佛S221	-	-	大型壺	脚	-	-	へう	へう	灰赤	にぶい	○	○	○	○	○	○	-	
133	836	佛S221	①	10357	壺	口径	-	-	へう	へう	1段、へう	にぶい	○	○	○	○	○	○	-	
136	848	佛S222	P1①	-	壺	口径	-	-	へう	へう	へう	にぶい	○	○	○	○	○	○	-	
127	850	佛S223	①	-	壺	口径	-	-	へう	へう	-	灰黒	○	○	○	○	○	○	-	
137	851	佛S224-31	①	13106	壺	口径一側	25.0	-	へう	へう	西縁	燈	○	○	○	○	○	○	摩訶、赤石	
138	852	佛S224	①	15530	壺	口径	-	-	へう	へう	3条沈線	にぶい	○	○	○	○	○	○	-	
138	853	佛S224	①	15192	壺	脚	-	-	へう	へう	2条沈線	灰赤、黒	○	○	○	○	○	○	-	
140	854	佛S225	①	15793	壺	口径一側	26.9	-	へう	へう	西縁、3条交 差	にぶい	○	○	○	○	○	○	スス	
140	855	佛S225	②	15507	壺	口径一側	-	-	へう	へう	西縁	赤黒 灰黒	○	○	○	○	○	○	-	
140	856	佛S225	②	15534	壺	口径	-	-	へう	へう	-	灰黒	○	○	○	○	○	○	-	
140	857	佛S225	②	15546	壺	底	-	-	へう	へう	3条沈線	にぶい	○	○	○	○	○	○	-	
140	858	佛S225	①②	15548	壺	脚	-	-	へう	へう	-	にぶい	○	○	○	○	○	○	摩訶	
140	859	佛S225	①~②	15536	壺	肩一側	-	-	へう	へう	2条沈線、輪 筋状文	赤黒、黒 赤黒	○	○	○	○	○	○	スス、陶 27.0	
140	860	佛S225	②	15554	壺	口径	-	-	へう	へう	西縁	にぶい	○	○	○	○	○	○	スス	
144	863	佛S226	①	16033	壺	口径一側	28.0	-	へう	へう	西縁、2条交 差	燈、唐	○	○	○	○	○	○	-	
144	864	佛S226	①	16078	壺	口径一側	27.3	-	へう	へう	西縁、3条交 差	燈、にぶい	○	○	○	○	○	○	摩訶、スス	
144	865	佛S226	①	12856	壺	口径一側	29.2	-	へう	へう	西縁、4条交 差	灰黒 にぶい	○	○	○	○	○	○	スス	

棟 号	用 意 号	出 土 位置	層 位	取 上 番 号	形 種	部 位	口 径 (cm)	底 径 (cm)	面		文 様	出 土 内 容		焼 成	白 石	赤 石	黒 石	灰 石	備 考		
									外 面	内 面		内 外	内 外								
																				横	縦
152	921	第 S129	-	-	変	脚	-	-	横ナデ	横ナデ	M字状突起	にぶい・橙	普通	○	○	○	○	○	○	摩耗	
152	925	第 S129	-	-	変	脚	-	-	-	-	刻目	橙	普通	○	○	○	○	○	○	摩耗	
152	927	第 S130	-	-	変	脚	-	-	横ナデ	横ナデ	-	にぶい・橙	普通	○	○	○	○	○	○	-	
152	928	第 S131	①	13773	変	脚	-	-	ミギナ・ナデ	横ナデ	-	にぶい・橙	普通	○	○	○	○	○	○	-	
152	929	第 S132	①	13786	変	脚	-	-	横ナデ	横ナデ	円筒	橙	普通	○	○	○	○	○	○	-	
152	930	第 S133	①	13795	変	脚	36.4	-	ヘラ横ナデ	横ナデ	円筒、2条突起	にぶい・橙	普通	○	○	○	○	○	○	-	
152	931	第 S134	-	13772	変	脚	口縁一段	14.0	6.0	ヘラ横ナデ、 ミズナ	丁家ナデ	-	にぶい・橙 ミズナ・赤緑	普通	○	○	○	○	○	○	西島、スズ、 種子・庄司高直
152	932	第 S129-30	①	13779	変	脚	口縁	13.5	-	縦ミダリ	横ナデ、ヘラ 横ナデ	円筒、5条突起	にぶい・橙	普通	○	○	○	○	○	-	
152	934	第 S131	②	14056	変	脚	口縁	34.7	-	横ナデ	横ナデ	円筒	にぶい・橙	普通	○	○	○	○	○	-	
152	935	第 S131	①、②	14073	変	脚	口縁	35.3	-	ヘラ横ナデ	ヘラナデ	-	にぶい・橙	普通	○	○	○	○	○	-	
152	936	第 S131	①、②	14043	変	脚	口縁	-	-	横ナデ	横ナデ	-	橙	普通	○	○	○	○	○	-	
152	937	第 S131	②	14076	変	脚	口縁	-	-	横ナデ	横ナデ	-	にぶい・橙	普通	○	○	○	○	○	-	
152	938	第 S131	②	14080	変	脚	口縁一段	-	-	ヘラ横ナデ→ 横ナデ	ヘラ斜ナデ→ 横ナデ	円筒	にぶい・赤緑、 瓦緑	良好	○	○	○	○	○	-	
152	939	第 S131	②	14061	変	脚	口縁	-	-	横ナデ	横ナデ	円筒	にぶい・橙 にぶい・赤緑	普通	○	○	○	○	○	-	
152	940	第 S131	①	14029	変	脚	口縁	47.6	-	横ナデ	横ナデ	-	橙	普通	○	○	○	○	○	-	
152	941	第 S131	①	14014	変	脚	口縁	-	-	横ナデ	横ナデ	円筒	にぶい・橙 にぶい・赤緑	普通	○	○	○	○	○	赤石	
152	942	第 S131	①	14028	変	脚	口縁	-	-	横ナデ	横ナデ	円筒	にぶい・橙	普通	○	○	○	○	○	-	
152	943	第 S131	①	14042	変	脚	口縁	-	-	ナデ	ナデ	2条突起	にぶい・橙	普通	○	○	○	○	○	-	
152	944	第 S131	②	14062	変	脚	口縁	8.3	-	ヘラ横ナデ→ 横ナデ	ナデ	-	にぶい・橙	普通	○	○	○	○	○	-	
152	945	第 S131	②	15151	変	脚	口縁	-	-	ヘラ横ナデ→ 横ナデ	ヘラ横ナデ	-	にぶい・赤緑	普通	○	○	○	○	○	-	
152	946	第 S131	-	-	変	脚	口縁	-	-	横ナデ	横ナデ	沈線	瓦緑 黒瓦	普通	○	○	○	○	○	-	
152	947	第 S131	-	-	変	底	口縁	5.0	-	ヘラナデ	ヘラナデ、ナ デ	-	にぶい・赤緑 黒瓦	普通	○	○	○	○	○	摩耗	
152	948	第 S131	②	14072	変	脚	口縁	-	-	ヘラ横ナデ、 横ナデ	横ナデ	円筒、1条突起	にぶい・赤緑	普通	○	○	○	○	○	-	
152	949	第 S131	①	15302	円筒状土製品	変の脚	口縁	-	-	横ナデ	ナデ	2条突起	瓦緑 にぶい・橙	良好	○	○	○	○	○	1段×3段× 厚4.5×4.6 ×0.8	
152	954	第 S132	①	13171	変	脚	口縁	-	-	ナデ	ナデ	円筒	にぶい・橙	普通	○	○	○	○	○	-	
152	955	第 S132	①	13175	変	脚	口縁	7.8	-	ヘラ横ナデ、 横ナデ	ヘラナデ	円筒	にぶい・橙 瓦緑	普通	○	○	○	○	○	-	
152	956	第 S132	①	13170	変	脚	口縁	-	-	ナデ	ミダリ	3条突起	にぶい・橙	普通	○	○	○	○	○	-	
152	957	第 S132	①	-	変	底	口縁	-	-	ナデ	ナデ	-	にぶい・橙	普通	○	○	○	○	○	黒泥	
162	958	第 S133	①、③、④	16632	変	脚	口縁一段 (突形)	29.7	8.3	ヘラ横ナデ	ヘラ横ナデ、 ヘラ横ナデ	円筒、3条突起	赤	普通	○	○	○	○	○	西島、スズ、底、 丁家ナデ、器 高25.1	
162	959	第 S133	①	16079	変	脚	口縁	-	-	横ナデ	-	-	橙	普通	○	○	○	○	○	-	
162	960	第 S133	①	16078	変	脚	口縁	7.8	-	横ナデ→ヘラ 横ナデ	ヘラナデ→ナ デ	円筒	にぶい・橙 瓦緑	普通	○	○	○	○	○	磨耗	
162	961	第 S133	②	15425	変	脚	口縁	30.8	-	横ナデ	指ササ、横 ナデ	円筒	にぶい・橙 瓦緑	普通	○	○	○	○	○	-	
162	962	第 S133	①、②	16432	変	脚	口縁一段下	16.7	-	横ナデ、ヘラ 横ナデ	ヘラ横ナデ	-	にぶい・橙	普通	○	○	○	○	○	スズ	
162	963	第 S133	②	16628	変	脚	口縁	-	-	横ナデ	横ナデ	円筒	瓦 にぶい・橙	普通	○	○	○	○	○	-	
162	964	第 S133	②	15317	変	脚	口縁	-	-	ナデ	横ナデ	円筒	にぶい・橙	普通	○	○	○	○	○	-	
162	965	第 S133	①、②	13197	変	脚	口縁一段	30.2	-	横ナデ、ヘラ 横ナデ	横ナデ	円筒、3条突起	瓦緑 にぶい・赤緑	普通	○	○	○	○	○	スズ、赤石	
162	966	第 S133	-	15276	変	脚	口縁一段	26.0	-	ヘラナデ	ヘラ横ナデ	円筒、3条突起	明赤瓦	良好	○	○	○	○	○	-	
162	967	第 S133	①、②	15270	変	脚	口縁一段	18.8	-	-	-	円筒	にぶい・橙	普通	○	○	○	○	○	摩耗、赤石	
162	968	第 S133	①、②	15449	変	脚	口縁	8.5	-	ヘラ横ナデ	-	円筒	にぶい・橙 瓦緑	普通	○	○	○	○	○	摩耗	
162	969	第 S133	②	15383	変	脚	口縁	7.4	-	横ナデ→ヘラ 横ナデ	ナデ	-	にぶい・橙	普通	○	○	○	○	○	底、ミダリ	
162	970	第 S133	②	16395	変	脚	口縁	9.0	-	横ナデ	-	-	にぶい・橙	普通	○	○	○	○	○	-	
162	971	第 S133	①	16583	変	脚	口縁一段	33.3	8.0	ヘラ横ナデ、 横ナデ	ヘラ横ナデ	円筒、3条突起	明赤瓦	普通	○	○	○	○	○	摩耗、スズ、器 高28.8	
162	972	第 S133	①	15477	変	脚	口縁	-	-	横ナデ	ヘラ横ナデ	-	瓦	普通	○	○	○	○	○	-	
162	973	第 S133	①	-	変	脚	口縁一段	30.8	-	ヘラ横ナデ→ 横ナデ	ヘラ横ナデ	円筒、沈線	瓦 にぶい・橙	普通	○	○	○	○	○	-	
162	974	第 S133	①	16290	変	脚	口縁	33.0	-	ヘラ横ナデ	ヘラ横ナデ	円筒、3条突起	橙、瓦 瓦緑	普通	○	○	○	○	○	スズ	
162	975	第 S133	①	16494	変	脚	口縁	30.4	-	横ナデ	斜ナデ	円筒、1条突起	瓦 にぶい・橙	普通	○	○	○	○	○	-	
162	976	第 S133	①	16406	変	脚	口縁一段	-	-	横ナデ	横ナデ、ヘラ 斜ナデ	円筒、2条突起	瓦 瓦緑	普通	○	○	○	○	○	スズ、赤石	
162	977	第 S133	①	13198	変	脚	口縁	37.6	-	横ナデ	横ナデ	円筒、2条突起	にぶい・赤緑 にぶい・橙	普通	○	○	○	○	○	スズ、赤石	
162	978	第 S133	①	16415	変	脚	口縁	-	-	横ナデ	横ナデ	円筒	にぶい・橙	普通	○	○	○	○	○	-	
162	979	第 S133	①	13240	変	脚	口縁	-	-	横ナデ	横ナデ	円筒	瓦 瓦緑	普通	○	○	○	○	○	-	
162	980	第 S133	①	16798	変	脚	口縁	-	-	横ナデ	横ナデ	円筒	橙 瓦緑	普通	○	○	○	○	○	-	

抽出 番号	組 数	出土 位置	層位	取上 番号	器種	部位	口径 (cm)	底径 (cm)	面		文 様	色 澤	外 形	焼成	新 上					備 考	
									外 面	内 面					白 石	黄 白 石	雷 石	黒 石	灰 石		黒 石
160	981	佛 S133	①	16591	壺	口縁	-	-	横ナデ	横ナデ	四線	横	普通	○	○	○	○	-			
160	982	佛 S133	①	16590	壺	口縁	23.8	-	横ナデ	横ナデ	四線、2条突帯	横	普通	○	○	○	○	-			
160	983	佛 S133	①	13100	瓶	口縁	25.8	-	ヘラ履ナデ・斜ナデ、 指ナデ	横ナデ、ヘラ 履ナデ	1条突帯	にぶい・横 足	普通	○	○	○	○	-			
160	984	佛 S133	①	15285	壺	脚	-	8.7	ヘラ履ナデ、 面取	ヘラナデ	-	にぶい・横 足	普通	○	○	○	○	-			
160	985	佛 S133	①	13241	壺	脚	-	8.6	ヘラ履ナデ、 横ナデ、面取	ヘラナデ	-	にぶい・横 足	普通	○	○	○	○	摩訶 赤石			
160	986	佛 S133	①	16417	壺	脚	-	7.5	履ナデ	ヘラナデ	四線	にぶい・横 足	普通	○	○	○	○	酒落、底ナデ			
160	987	佛 S133	①	16392	大型壺	胴	-	-	ハケ履ナデ、 履ミガキ	ハケ履ナデ、 履ミガキ	突帯	にぶい・横 足	普通	○	○	○	○	スス			
160	988	佛 S133	①・②・ 床点	13242	大型壺	口縁一胴	32.0	-	ミガキ、ハケ 履ナデ	ミガキ、ナデ	四線、突帯	赤、赤黒	良好	○	○	○	○	酒落			
160	989	佛 S133	①・②・ 床点	13242	大型壺	底	-	8.0	ナデ	-	-	赤、赤黒	良好	○	○	○	○	-			
160	990	佛 S133	②	15331	壺	口縁	22.0	-	丁寧な横ナデ	ヘラ履ナデ	四線	横	普通	○	○	○	○	-			
160	991	佛 S133	②	15495	壺	口縁	-	-	横ナデ、ハケ 履ナデ	横ナデ	四線	横	普通	○	○	○	○	赤石			
160	992	佛 S133	-	16088	壺	面一肩	-	-	横ナデ、ヘラ 履ナデ	斜ナデ	1条突帯	横 足	普通	○	○	○	○	-			
160	993	佛 S133	①	16419	壺	口縁	22.2	-	横ナデ	横ナデ	-	横	普通	○	○	○	○	-			
160	994	佛 S133	①	16726	壺	口縁	9.2	-	横ナデ	横ナデ	-	横	普通	○	○	○	○	-			
160	995	佛 S133	①、②	16395	壺	口縁	33.8	-	ヘラ履ナデ	横ナデ	四線	横	普通	○	○	○	○	-			
160	996	佛 S133	①	16286	壺	口縁	14.0	-	横ナデ	ヘラ履ナデ	四線	横 足	普通	○	○	○	○	-			
160	997	佛 S133	-	-	壺	肩	-	-	横ナデ	横ナデ	2条突帯	横 足	普通	○	○	○	○	-			
160	998	佛 S133	①	13253	壺	肩	-	-	ヘラ履ナデ	ヘラ履ナデ	4条突帯	横 足	普通	○	○	○	○	赤石			
160	999	佛 S133	①	13271	壺	口縁	18.0	-	ヘラ履ナデ	ヘラ履ナデ	波流、結文	横	普通	○	○	○	○	角閃石			
160	1000	佛 S133	①	16380	壺	肩	-	-	丁寧な斜ナデ	丁寧な横ナデ、 斜ナデ	横	横 足	普通	○	○	○	○	赤石			
160	1001	佛 S133	①	15360	壺	底	-	11.0	ヘラ履ナデ	丁寧なミガキ	-	横 足	普通	○	○	○	○	摩訶			
160	1002	佛 S133	①	15297	壺	底	-	12.0	ヘラ履ナデ	指ナデ、横 ナデ	-	横 足	普通	○	○	○	○	赤石			
160	1003	佛 S133	①	16394	壺	つまみ	-	5.0	ヘラ履ナデ、 横ナデ	-	-	にぶい・横 足	普通	○	○	○	○	-			
160	1004	佛 S133	①	16420	壺	つまみ	-	4.1	斜ナデ	ナデ	-	にぶい・横 足	普通	○	○	○	○	-			
160	1005	佛 S133	①	16425	壺	つまみ	-	-	ヘラ履ナデ	ヘラ履ナデ	-	にぶい・横 足	普通	○	○	○	○	-			
160	1006	佛 S133	①	16912	壺	口縁	-	-	横ナデ、ハケ 履ナデ	横ナデ	四線、1条突帯	横 足	普通	○	○	○	○	赤石			
160	1007	佛 S133	①	15298	壺	口縁	-	-	横ナデ→ハケ 履ナデ	ヘラ履ナデ	四線	横	普通	○	○	○	○	-			
160	1008	佛 S133	①	15398	鉢	口縁	-	-	横ナデ	-	四線	横	普通	○	○	○	○	-			
160	1009	佛 S133	①	16389	鉢	口縁一底	11.2	7.5	ハケ履ナデ、 履ミガキ、斜 ナデ、面取	ナデ、ヘラ履 ナデ	四線、斜目	にぶい・赤 黒	普通	○	○	○	○	スス、底ナデ、 指ナデ、器高 12.2			
160	1010	佛 S133	①	13252	高杯	脚	-	-	ヘラ履ナデ	-	-	横 足	普通	○	○	○	○	酒落			
160	1011	佛 S133	①	15475	土製 勾玉	-	-	-	ミガキ	-	波流、穿孔	明治期 にぶい・横 足	普通	○	○	○	○	(底×幅× 厚) 3.7×2.3×1.4			
160	1012	佛 S133	①	15304	土製 勾玉	-	-	-	ミガキ	-	穿孔	にぶい・横 足	普通	○	○	○	○	(底×幅× 厚) 2.7×2.4×1.4			
160	1013	佛 S133	②	15418	土製 勾玉	-	-	-	ミガキ	-	-	赤黒灰	普通	○	○	○	○	片盛り、厚さ 1.0			
160	1030	佛 S134	-	-	壺	口縁	-	-	丁寧な横ナデ	丁寧な横ナデ	四線	横 足	普通	○	○	○	○	-			
170	1031	佛 S135	①	13165	壺	脚	-	-	横ナデ	-	突帯	横 足	普通	○	○	○	○	スス			
170	1032	佛 S135	①	14574	壺	底	-	5.8	履ミガキ、横 ナデ	ナデ	-	にぶい・横 足	普通	○	○	○	○	-			
171	1033	佛 S136	①	29410	壺	口縁	21.0	-	丁寧な横ナデ	丁寧な横ナデ	四線、3条突帯	横	良好	○	○	○	○	スス			
171	1034	佛 S136	①	29473	壺	口縁	-	-	ハケ履ナデ、 横ナデ	ヘラ履ナデ、 斜ナデ	四線、2条突帯	横、にぶい・横 足	普通	○	○	○	○	-			
171	1035	佛 S136	①	29412	壺	口縁	-	-	横ナデ、ハケ 履ナデ	横ナデ	四線	横	普通	○	○	○	○	スス			
172	1036	佛 S137	①	29409	壺	口縁	-	-	横ナデ	-	-	にぶい・横 足	普通	○	○	○	○	-			
172	1037	佛 S137	①	29492	壺	口縁	-	-	横ナデ	-	四線	にぶい・横 足	普通	○	○	○	○	-			
172	1038	佛 S137	①	29489	壺	口縁	-	-	横ナデ	-	四線	黒、黒	普通	○	○	○	○	-			
172	1039	佛 S137	①	29491	壺	脚	-	-	横ナデ	横ナデ	3条突帯	にぶい・横 足	普通	○	○	○	○	-			
172	1040	佛 S137	①	-	壺	肩	-	-	履ミガキ、斜 ナデ	-	2条突帯	にぶい・横 足	普通	○	○	○	○	-			
174	1042	佛 S138	①、②	25440	壺	口縁一底	30.4	8.6	ハケ履ナデ、 履ミガキ	ヘラ履ナデ、 横ナデ、指 ナデ	四線、3条突帯	明治期	普通	○	○	○	○	スス、コデ、器 高33.4			
174	1043	佛 S138	①	25437	壺	口縁一胴	16.5	-	ハケ履ナデ、 横ナデ	丁寧な横ナデ、 斜ナデ	-	にぶい・横 足	普通	○	○	○	○	スス			

採出 番号	採出 位置	品位	取上 番号	岩種	部位	口径 (cm)	直径 (cm)	調 整		文 様	出 産 外 国	焼成 色	新 上					備 考
								外 面	内 面				白 石	黄 白 石	赤 石	灰 石	黒 石	
174	1044	佛S128	①	2946	変	13線	-	-	横ナテ	横ナテ	四線	燈	○	○	○	○	○	-
174	1045	佛S128	②	25414	変	13線	41.0	-	横ナテ	横ナテ	四線	広ふい焼 燈	普通	○	○	○	○	-
176	1046	佛S129	①	-	小型変	13線	-	-	横ナテ	横ナテ	四線	広ふい焼 燈灰	普通	○	○	○	○	-
176	1047	佛S129 138	①、②	2303	変	13線	22.5	-	丁寧な横ナテ	丁寧な横ナテ	-	-	普通	○	○	○	○	-
176	1048	佛S129	①	29821	変	屑	-	-	-	-	3条突帯	燈	普通	○	○	○	○	摩耗
179	1049	佛S140	①	3329	小型変	定形	32.4	5.0	横ナテ、ハケ 脱ナテ	横ナテ、燈オ サエ	四線、1条突 帯	暗赤灰	良好	○	○	○	○	器底 12.7
179	1050	佛S140	②	31428	変	13線一直	24.0	9.5	丁寧な縦ミガ キ	丁寧な縦ミガ キ	四線、1条突 帯	浅緑色、広ふい 焼灰、黒 茶濁	良好	○	○	○	○	スス、器底 12.7
179	1051	佛S140	③	33032	変	13線	-	-	横ナテ	横ナテ	四線、1条突 帯	茶濁	普通	○	○	○	○	-
179	1052	佛S140	④	33036	変	13線	-	-	横ナテ	ヘラ斜ナテ	四線	広ふい焼 燈	普通	○	○	○	○	-
179	1053	佛S140	⑤	33290	変	13線	22.6	-	横ナテ	ヘラ斜ナテ→ 横ナテ	四線、2条突 帯	灰青焼 燈灰	普通	○	○	○	○	赤石
179	1054	佛S140	⑥	33019	変	13線	-	-	横ミガキ	-	-	浅青燈	普通	○	○	○	○	赤石
179	1055	佛S140	⑦	-	変	調	-	-	横ナテ	横ナテ	四線、浅沈文	茶濁	普通	○	○	○	○	-
179	1056	佛S140	⑧	33049	変	調	-	7.8	不明	-	沈線	広ふい赤焼 燈	普通	○	○	○	○	潤落
179	1057	佛S140	⑨	32094	変	13線	24.6	-	燈オサエ、横 ナテ	-	四線	広ふい焼 燈	普通	○	○	○	○	赤石
179	1058	佛S140 134	⑩、⑪	31500	変	調	-	7.5	ヘラ脱ナテ、 横ナテ	-	四線	広ふい焼 燈	普通	○	○	○	○	-
179	1059	佛S140	①	31091	変	調	-	8.0	-	-	-	広ふい焼 燈	普通	○	○	○	○	潤落
179	1060	佛S140	②	33224	変	13線	26.5	-	横ナテ、縦ミ ガキ	横ナテ	突帯	灰濁 燈	普通	○	○	○	○	-
179	1061	佛S140	③	33046	変	調	-	-	横ミガキ	横ナテ	3条突帯	茶濁 燈	普通	○	○	○	○	-
179	1062	佛S140	④	32376	変	13線	32.4	-	ミガキ、横ナ テ	ミガキ、横ナ テ	-	広ふい焼 燈	普通	○	○	○	○	-
179	1063	佛S140	⑤	31223	変	13線	-	-	横ナテ	横ナテ	四線	広ふい焼 燈	普通	○	○	○	○	-
179	1064	佛S140	⑥	-	変	13線	-	-	横ナテ→縦ミ ガキ	横ナテ→縦ミ ガキ	1条突帯	広ふい焼 燈	普通	○	○	○	○	スス
179	1065	佛S140	⑦	33220	変	13線	-	-	横ナテ→縦ミ ガキ	横ナテ→縦ミ ガキ	1条突帯	広ふい焼 燈	普通	○	○	○	○	-
179	1066	佛S140	⑧	32497	鉢	13線一調	-	-	丁寧な横ナテ	丁寧な横ナテ	1条突帯	灰青焼 燈灰	普通	○	○	○	○	赤石
179	1067	佛S140	⑨	33013	鉢	調	-	3.2	燈オサエ	-	-	調	普通	○	○	○	○	-
179	1068	佛S140	⑩	33035	鉢	調	-	2.1	燈オサエ	-	-	調	普通	○	○	○	○	-
179	1069	佛S140	-	-	鉢	13線	-	-	横ナテ	横ナテ	-	茶濁	普通	○	○	○	○	-
179	1070	佛S140	①	31333	鉢	底	-	-	横ナテ	横ナテ	-	広ふい焼 燈	普通	○	○	○	○	-
181	1073	佛S141	①、②	30046	変	13線	-	-	横ナテ	-	四線	広ふい焼 燈	普通	○	○	○	○	-
181	1074	佛S141	③	36281	変	調	-	-	ハケ脱ナテ、 横ナテ	斜ナテ	-	広ふい焼 茶濁 広ふい赤焼 燈灰	普通	○	○	○	○	-
181	1075	佛S141	④	36346	上製 写	-	-	-	ミガキ	-	沈線、穿孔	燈	普通	○	○	○	○	-
184	1078	佛S142	①	22388	変	13線一調	32.6	-	横ミガキ	燈オサエ、横 ナテ	四線	調、有赤焼 燈、広ふい焼 燈	普通	○	○	○	○	スス、コサ
184	1079	佛S142	②	22323	変	13線	31.8	-	丁寧な縦ミガ キ	丁寧な横ミガ キ	四線、3条突 帯	広ふい焼 若 広ふい赤焼 燈	普通	○	○	○	○	-
184	1080	佛S142	③、④	22241	変	13線	-	-	横ナテ	燈オサエ、ヘ ラナテ	四線、3条突 帯	広ふい焼 燈	普通	○	○	○	○	-
184	1081	佛S142	⑤	22294	変	13線	-	-	横ナテ	横ナテ	四線	灰濁 広ふい焼 燈	普通	○	○	○	○	-
184	1082	佛S142	⑥	21306	変	13線	-	-	横ナテ	横ナテ	四線	広ふい赤焼 広ふい焼 燈	普通	○	○	○	○	-
184	1083	佛S142	-	-	変	調	-	6.2	ヘラ脱ナテ、 斜ナテ、面取 自	-	-	広ふい赤焼 燈	普通	○	○	○	○	-
188	1084	佛S143	①、②	22621	変	13線一調	24.0	-	ハケ斜ナテ、 横ナテ	横ナテ、燈オ サエ	四線、2条突 帯	広ふい赤焼 燈	普通	○	○	○	○	-
188	1085	佛S143	③、④	22619	変	13線一調	18.0	-	横ナテ、ハケ 脱ナテ	横ナテ、ハケ 脱ナテ	-	広ふい焼 燈灰 広ふい赤 焼	普通	○	○	○	○	摩耗、スス
188	1086	佛S143	⑤	23652	変	13線	-	-	横ナテ	横ナテ	-	広ふい焼 燈	普通	○	○	○	○	-
188	1087	佛S143	⑥	23653	変	13線	-	-	横ナテ	横ナテ	四線	広ふい赤焼 燈灰	普通	○	○	○	○	-
188	1088	佛S143	⑦	22800	変	調	-	5.6	ヘラ脱ナテ、 横ナテ	-	-	-	普通	○	○	○	○	潤落、底ミガ キ
188	1089	佛S143	⑧	21362	変	調	-	6.2	ヘラ脱ナテ、 横ナテ	ヘラ脱ナテ	四線	広ふい焼 燈灰	普通	○	○	○	○	-
188	1090	佛S143	⑨	21367	変	底	-	5.6	ヘラ脱ナテ	ヘラ脱ナテ	四線	茶濁 有赤焼 燈	普通	○	○	○	○	-
188	1091	佛S143	⑩	22624	変	調	-	5.0	横ナテ	横ナテ	-	広ふい赤焼、有赤 焼	普通	○	○	○	○	底ナテ
188	1092	佛S143	⑪	22962	変	調	-	8.0	ヘラ脱ナテ	-	四線	広ふい赤焼 燈	普通	○	○	○	○	-
188	1093	佛S143	⑫	-	変	13線	-	-	ハケナテ	横ナテ	-	広ふい焼 燈	普通	○	○	○	○	-

採石場番号	採石場名	出石位置	採石場	取上番号	岩種	部位	口径 (cm)	直径 (cm)	形状		文様	色澤 肌理	機械	加工					備考		
									外 面	内 面				白	黒	赤	石	黒		石	黒
188-1094	佛S143	①	2309	巻	底	-	6.6	ハナ鏡ナデ	ナデ	-	にぶい・肌 肌理	普通	○	○	○	○	○	○	○	西高	
188-1095	佛S143	①, ②	2309	巻	底	-	8.4	ハナ鏡ナデ, ミギサ	-	-	肌理 肌理	普通	○	○	○	○	○	○	○	-	
188-1096	佛S143- 45-129	①, ②, ③	1716	巻	底	-	7.2	ハナ鏡ナデ, ミギサ	ハナ鏡ナデ, ミギサ	-	にぶい・肌 肌理	普通	○	○	○	○	○	○	○	-	
188-1097	佛S143	②	2303	巻	1階	-	-	ハナ鏡ナデ, 鏡ナデ	鏡ナデ	-	にぶい・肌 肌理	普通	○	○	○	○	○	○	○	スス	
188-1098	佛S143	②	2307	巻	底	-	3.5	ハナ鏡ナデ	指オサエ	-	肌理	普通	○	○	○	○	○	○	西高		
188-1099	佛S143	②	2307	西製以上製品	巻の頂	-	-	ハナ鏡ナデ	ナデ	-	肌理 肌理, 肌理	普通	○	○	○	○	○	○	-		
190-1102	佛S144	①	2305	巻	1階	-	-	鏡ナデ	鏡ナデ	西製・花線	にぶい・肌 にぶい・肌	良好	○	○	○	○	○	○	-		
190-1103	佛S144	①	2304	巻	1階・1階	-	-	ハナ鏡ナデ→ 鏡ナデ	ハナ鏡ナデ	西製, 3条突 帯	にぶい・肌 肌理	普通	○	○	○	○	○	○	-		
190-1104	佛S144	①	2309	巻	1階	-	-	鏡ナデ	鏡ナデ	西製	肌理	普通	○	○	○	○	○	○	-		
190-1105	佛S144	②	2190	巻	1階	-	-	鏡ナデ	鏡ナデ	西製	肌理, にぶい・肌	普通	○	○	○	○	○	○	-		
190-1106	佛S144	①	2206	巻	1階	-	-	鏡ナデ	鏡ナデ	1条突帯	にぶい・肌 にぶい・肌	普通	○	○	○	○	○	○	-		
190-1107	佛S144	①	2202	巻	胴	-	-	鏡ナデ	-	1条突帯	肌理	普通	○	○	○	○	○	○	摩耗		
190-1111	佛S145	①	2673	巻	1階	-	-	鏡ナデ	鏡ナデ	西製	肌理	普通	○	○	○	○	○	○	-		
190-1112	佛S145	①	2678	巻	1階	-	-	鏡ナデ	-	-	にぶい・肌 にぶい・肌	普通	○	○	○	○	○	○	摩耗		
190-1113	佛S145	①	2287	巻	1階	-	-	鏡ナデ, ナデ	ハナ鏡ナデ	-	にぶい・肌 肌理	普通	○	○	○	○	○	○	-		
190-1114	佛S145	①	2247	巻	1階・1階	20.0	-	ハナ鏡ナデ, 鏡ナデ	ハナ鏡ナデ, 鏡ナデ	-	にぶい・肌 にぶい・肌	普通	○	○	○	○	○	○	スス		
190-1115	佛S145	①	2280	巻	1階	-	-	鏡ナデ	鏡ナデ	西製, 3条突 帯	にぶい・肌 にぶい・肌	普通	○	○	○	○	○	○	-		
190-1116	佛S145	①	2265	巻	1階	-	-	鏡ナデ	鏡ナデ	西製, 2条突 帯	肌理 にぶい・肌	普通	○	○	○	○	○	○	-		
190-1117	佛S145	①	2265	巻	1階	-	-	鏡ナデ	鏡ナデ	西製	にぶい・肌	普通	○	○	○	○	○	○	-		
190-1118	佛S145	①	2241	巻	1階	-	-	鏡ナデ	鏡ナデ	西製	にぶい・肌	普通	○	○	○	○	○	○	-		
190-1119	佛S145	①, ②	2190	巻	1階	-	-	ハナ鏡ナデ→ 鏡ナデ	鏡ナデ	西製	にぶい・肌 にぶい・肌	普通	○	○	○	○	○	○	-		
190-1120	佛S145	①	2287	巻	1階	-	-	鏡ナデ, ハナ 鏡ナデ	鏡ナデ, ナデ	西製	にぶい・肌	普通	○	○	○	○	○	○	-		
190-1121	佛S145	①	2283	巻	1階	-	-	鏡ナデ	鏡ナデ	西製	にぶい・肌 にぶい・肌	普通	○	○	○	○	○	○	-		
190-1122	佛S145	①	-	巻	1階	-	-	-	鏡ナデ	-	にぶい・肌	普通	○	○	○	○	○	○	摩耗		
190-1123	佛S145	②	2194	巻	1階・1階	-	-	ハナ鏡ナデ	鏡ナデ	西製, 2条突 帯	肌理	普通	○	○	○	○	○	○	-		
190-1124	佛S145	②	2259	巻	1階	-	-	ミギサ	丁家ナデ	顔目	肌理 肌理	良好	○	○	○	○	○	○	-		
190-1125	佛S145	①	2243	巻	胴	-	-	ハナ鏡ナデ, 鏡ナデ	鏡ナデ	顔目或状況	にぶい・肌 にぶい・肌	良好	○	○	○	○	○	○	-		
190-1126	佛S145	①	2670	巻	1階	-	-	ハナ鏡ナデ→ 鏡ナデ	-	顔目常態, 顔 目	肌理 にぶい・肌	普通	○	○	○	○	○	○	-		
190-1127	佛S145- D09	①, ②, ③	2194	巻	つまみ・1階	-	7.0	鏡ミギサ, ナ デ	ナデ, ハナ鏡 ナデ	西製	にぶい・肌 にぶい・肌	普通	○	○	○	○	○	○	-		
190-1135	佛SK1	①	-	巻	1階	-	-	ハナ鏡ナデ	ハナ鏡ナデ	西製	にぶい・肌 肌理	普通	○	○	○	○	○	○	-		
190-1136	佛SK1	②	-	巻	胴	-	-	ハナ鏡ナデ	ハナ鏡ナデ	3条突帯	肌理 にぶい・肌	普通	○	○	○	○	○	○	-		
190-1137	佛SK1	①	-	巻	1階	20.5	-	ハナ鏡ナデ	ハナ鏡ナデ	西製	肌理	普通	○	○	○	○	○	○	-		
190-1138	佛SK1	①	-	巻	1階	-	-	ハナ鏡ナデ	ハナ鏡ナデ	西製	肌理	良好	○	○	○	○	○	○	-		
190-1139	佛SK1	①	-	巻	1階	-	-	ハナ鏡ナデ	ハナ鏡ナデ	-	にぶい・肌	良好	○	○	○	○	○	○	-		
190-1140	佛SK1	②	-	巻	胴	-	-	丁家ナデ	ハナナデ	-	にぶい・肌	良好	○	○	○	○	○	○	-		
190-1143	佛SK2	①	7373	巻	1階	-	-	丁家ナデ	鏡ナデ	1条突帯	肌理	普通	○	○	○	○	○	○	状況1階		
190-1144	佛SK2	①	7373	巻	1階	-	-	丁家ナデ	丁家ナデ	巻帯	肌理 肌理	普通	○	○	○	○	○	○	スス, 内角石		
190-1145	佛SK5	①, ②	6654	巻	1階	24.5	-	ハナ鏡ナデ	ハナ鏡ナデ	-	にぶい・肌	普通	○	○	○	○	○	○	-		
190-1146	佛SK5	①	6720	巻	1階	-	-	ハナナデ	ハナナデ	西製	にぶい・肌	良好	○	○	○	○	○	○	-		
190-1147	佛SK11	②	2390	巻	1階	-	-	鏡ナデ	鏡ナデ	-	肌理	普通	○	○	○	○	○	○	-		
190-1148	佛SK11	②	2391	巻	胴	-	-	-	-	2条突帯	肌理 にぶい・肌	普通	○	○	○	○	○	○	-		
190-1149	佛SK13	①	-	巻	1階	-	-	鏡ナデ	鏡ナデ	巻帯	肌理	普通	○	○	○	○	○	○	-		
200-1150	福清第1	①, ②, ③	5823	巻	1階	36.0	-	ハナナデ	ハナナデ	西製, 1条突 帯	にぶい・肌	普通	○	○	○	○	○	○	-		
208-1151	福清第2	①	13152	小型巻	1階	-	-	鏡ナデ	鏡ナデ	西製	肌理	普通	○	○	○	○	○	○	-		
208-1152	福清第2	①	13151	小型巻	胴	-	-	鏡ミギサ	鏡ナデ	2条突帯	肌理	普通	○	○	○	○	○	○	-		
208-1153	福清第2	①	13151	小型巻	底	-	5.4	鏡ミギサ	ハナ鏡ナデ	-	肌理	普通	○	○	○	○	○	○	赤石		
211-1154	福清第3 SG1	②	-	巻	定形	15.0	7.0	ハナ鏡ナデ	ハナ鏡ナデ, 鏡ナデ	西製 1条突 帯, 二又状11	肌理	普通	○	○	○	○	○	○	西高, スス, 器 高11.4		
211-1155	福清第3 SG1	①	-	巻	定形	23.5	16.0	鏡ミギサ, ハ ナ鏡ナデ	鏡ミギサ, ハ ナ鏡ナデ, 鏡 ミギサ	西製, 1条突 帯, 二又状11	肌理 肌理	良好	○	○	○	○	○	○	西高, 器高20.0		
211-1156	福清第3 SG2	①	-	短巻帯	定形	13.4	3.0	鏡ミギサ	鏡ミギサ, 鏡 ナデ	穿孔	にぶい・肌	普通	○	○	○	○	○	○	赤石, 器高11.8		
211-1157	福清第3 SG2	②, ③	-	巻	胴・底	-	6.4	丁家ナデ, 鏡ミギサ	ハナ鏡ナデ, 指オサエ	穿孔	にぶい・肌 にぶい・肌	普通	○	○	○	○	○	○	スス, 底・鏡い ケース, 器高 16.3		

採掘番号	調査年度	出土位置	層位	取上番号	器種	部位	口径 (cm)	底径 (cm)	器 形			文 様	出溝 内外	焼成	土 質					備 考	
									外 面	内 面	面				白	赤	黒	灰	黒		石
211-1158	周溝墓3 SG2	②	-	莖	定形	31.6	8.2	横ナデ、縦ミガキ	横ナデ、器オサエ	凹線、3条突帯	内	良好								スス、器高29.7	
211-1159	周溝墓3	②	1542	莖	ほぼ定形	15.4	5.2	丁字単女横ナデ、ヘラ横ナデ	ヘラ横ナデ、ヘラ斜ナデ	-	内	普通								器高11.2	
211-1160	周溝墓3 SG1	①	-	莖	口縁	-	-	横ナデ	横ナデ	凹線	内	普通								-	
211-1161	周溝墓3	②	1544	莖	口縁	-	-	横ナデ	横ナデ、ナズリ帯	4条突帯	周	普通								-	
211-1162	周溝墓3	②	1544	莖	斜	-	-	横ナデ	横ナデ	6条突帯	内	普通								赤石	
211-1163	周溝墓3 J41	-	-	莖	口縁	-	-	横ナデ、縦ミガキ	横ナデ、縦ミガキ	-	内	普通								-	
211-1164	周溝墓3	②	1604	莖	胴一底	-	2.7	横ナデ、ヘラ横ナデ	-	-	内	普通								黒炭	
214-1165	周溝墓5 G17、R22、J29	①、②、③、④	2103	大形莖	口縁	30.0	-	横ナデ	横ナデ	凹線、突帯	内	普通								-	
214-1166	周溝墓4	①、②	2216	莖	口縁	20.0	-	ヘラ横ナデ	ヘラ横ナデ	凹線	内	普通								-	
214-1167	周溝墓4 F27	①、②、③、④、⑤	162	莖	ほぼ定形	21.8	-	縦ミガキ	横ナデ、器オサエ	凹線、突帯	内	良好								黒炭	
214-1168	周溝墓4 R25	1 b	18019	莖	口縁	19.0	-	横ナデ	横ナデ	凹線	内	普通								摩耗	
214-1169	周溝墓4 F27	②、③	1890	莖	底	-	6.2	ミガキ	-	-	内	普通								黒炭	
214-1170	周溝墓4	①	23148	莖	口縁	-	-	横ナデ	横ナデ	-	内	普通								-	
214-1171	周溝墓4	Ⅲ上	23063	莖	脚	-	8.0	ヘラ横ナデ、横ナデ、面取	ヘラ横ナデ	-	内	普通								-	
215-1174	周溝墓5	①	2360	莖	口縁	-	-	横ナデ、ミガキ	器オサエ、横ナデ、ミガキ	凹線、1条突帯	内	良好								-	

第14表 弥生時代住居跡・土坑・周溝墓出土石器観察表

採掘番号	調査年度	出土位置	層位	取上番号	器種	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	石 材	備 考
65-524	弥生3	周溝内	2312	-	縦石	10.5	6.7	2.1	243.4	砂岩	
71-549	弥生2	P4	-	-	磨製石器	1.7	(1.3)	0.1	(0.2)	頁岩	
71-550	弥生2	①	5808	-	磨製石器	2.2	1.2	0.3	1.1	頁岩	
71-551	弥生2	①	5839	-	磨製石器	(2.6)	(2.4)	0.2	(1.7)	頁岩	
71-552	弥生2	①	5803	-	磨製石器	(2.9)	(2.3)	(0.3)	(3.0)	頁岩	
71-553	弥生2	①	5857	-	磨製石器	(5.1)	(4.0)	(0.4)	(10.4)	頁岩	
71-554	弥生2	①	5809	-	磨製石器	7.8	4.7	1.4	63.4	ホクシツェルス	
71-555	弥生2	①	5796	-	磨製石器	(7.5)	(5.2)	(1.5)	96.8	ホクシツェルス	
71-556	弥生2	①	5801	-	磨製石器	(2.7)	(2.3)	(1.1)	(21.3)	ホクシツェルス	
71-557	弥生2	Ⅲ底	6006	-	縦石	11.8	4.5	3.8	266.2	安山岩	
71-558	弥生2	①	5855	-	縦石	(8.7)	5.5	3.5	(273.0)	砂岩	
71-559	弥生2	①	5861	-	縦石	5.0	4.8	4.1	135.0	石英	
72-560	弥生2	①	5858	-	磨石・凹石類	10.0	9.0	5.3	764.3	安山岩	
72-575	弥生3	②	5929	-	磨石類品	(10.2)	9.0	3.9	(70.3)	砂岩	
77-577	弥生4	Ⅲ底	5906	-	縦石	(6.6)	(2.1)	(0.7)	(15.9)	砂岩	
77-578	弥生4	Ⅲ底西	-	-	縦石	(6.1)	(0.7)	(0.7)	(20.3)	砂岩	
77-579	弥生4	①	-	-	磨石類	8.3	7.8	(4.5)	(482.4)	安山岩	
77-580	弥生4 弥生2	①	-	-	石皿・凹石類	(11.5)	(11.7)	(5.5)	(647.5)	砂岩	
80-587	弥生3	Ⅲ底	6206	-	磨石・縦石類	(7.6)	(5.1)	(3.0)	(176.4)	砂岩	
83-591	弥生6	Ⅲ底	6211	-	磨製石器	1.2	2.0	0.2	0.6	頁岩	集成品
83-592	弥生6	Ⅲ底	6220	-	磨石・縦石類	(11.2)	9.1	6.4	968.8	砂岩	
86-597	弥生7	①	-	-	縦石	15.0	4.5	2.9	311.4	砂岩	
89-618	弥生8 P3	-	-	-	縦石	(6.1)	(8.9)	(3.8)	(271.7)	砂岩	
89-619	弥生8	Ⅲ底	6461	-	縦石	(6.4)	6.4	(3.9)	(174.9)	砂岩	
89-620	弥生8	②	-	-	縦石	(5.3)	(5.4)	(2.5)	(90.8)	砂岩	
89-621	弥生8	②	-	-	縦石	(6.6)	(5.8)	(1.9)	(91.9)	砂岩	
92-629	弥生9	Ⅲ底	6310	-	磨製石器	(2.2)	2.0	0.2	(1.2)	頁岩	
92-630	弥生9	①	6250	-	打製石器	(6.8)	6.7	1.6	(69.0)	頁岩	
92-631	弥生9 SK1	①	6615	-	縦石	12.0	4.6	2.8	224.7	砂岩	
97-657	弥生10	②	6070	-	打製石器	8.7	5.2	0.8	56.5	ホクシツェルス	
97-658	弥生10 PW	①	6600	-	縦石	5.6	5.0	4.2	149.4	砂岩	
97-659	弥生10	②	6133	-	磨石・縦石類	5.3	4.8	4.8	187.0	砂岩	
103-676	弥生12	①	6525	-	打製石器	2.5	1.6	0.4	1.3	磨石類	
103-677	弥生12	Ⅲ底	6631	-	磨製石器	(4.1)	2.5	0.4	(4.2)	頁岩	
103-678	弥生12	Ⅲ底	6635	-	縦石	19.9	3.1	(2.7)	(89.7)	砂岩	

採石場番号	出立位置	採出	取上番号	品名	長さ(m)	幅(m)	厚さ(m)	重量(t)	石材	備考
101	679	採S12 SK1	①	7300	凝石	(6.6)	(5.9)	3.2	(172.5)	砕石
101	680	採S12	②	-	凝石	5.3	5.3	1.2	31.9	砕石
101	681	採S12 SK1	③	7309	凝石	(7.9)	(5.0)	(2.8)	109.6	砕石
103	690	採S13	②	7.02	磨製石屑	(8.1)	3.0	0.7	(19.2)	良質
103	691	採S13	③	7660	凝石	7.4	4.7	1.7	96.4	良質
103	692	採S13	④	7661	軽石製品	14.3	11.2	4.7	130.7	軽石
106	709	採S14	①	6706	凝石	9.0	7.3	5.5	287.9	砕石
106	710	採S14 SK1	②	6726	石屑・白石類	(16.9)	(13.2)	(6.1)	(1914.0)	砕石
108	714	SK15	-	-	打製石屑	1.4	1.0	0.2	0.3	調整山石屑
108	715	SK15 SK2	①	-	打製石屑	2.2	1.4	0.3	0.6	調整山石屑
108	716	採S15	②	7284	軽石製品	7.9	9.5	4.9	66.2	軽石
111	732	採S16	①	7335	磨製石屑	(3.2)	(3.6)	(1.0)	(10.9)	砕石
111	733	採S16	②	7514	凝石・凝石	17.0	4.7	3.2	486.8	砕石
111	734	採S16	③	7562	凝石・凝石	7.7	5.5	3.2	212.4	砕石
111	735	採S16 SK2	-	-	凝石	(5.3)	(3.0)	1.9	(45.3)	砕石
111	736	採S16	④	7563	凝石	(3.3)	(7.9)	2.1	64.9	砕石
111	737	採S16	⑤	8178	凝石	(11.2)	6.6	5.9	(536.6)	砕石
114	736	採S17	①	7371	打製石屑	(8.6)	6.0	2.5	(136.5)	ホルンフェルス
114	757	採S17	②	7372	磨石・凝石類	(4.1)	(6.4)	(3.4)	(94.5)	石屑
114	761	採S18	①	6932	打製石屑	1.1	1.4	0.35	0.4	準原石
114	762	採S18	②	6931	打製石屑	3.5	2.1	0.5	1.5	水産
114	763	採S18	③	7500	打製石屑	2.0	1.8	0.7	1.7	水産
114	764	採S18	④	6912	打製石屑	1.6	1.4	0.4	0.6	調整山石屑
114	765	採S18	⑤	7408	磨製石屑	14.9	3.9	2.5	282.2	良質
114	766	採S18	⑥	7567	凝石	(7.4)	(6.7)	(1.5)	(116.1)	砕石
114	767	採S18	⑦	7372	軽石製品	8.7	8.9	3.7	69.4	軽石
128	810	採S19	①	6978	磨製石屑	1.6	(1.7)	0.3	(0.8)	良質
128	811	採S19	②	8126	磨製石屑	(2.1)	(3.3)	0.3	(0.7)	良質
128	812	採S19	③	8161	磨製石屑	(4.2)	2.3	0.5	(5.0)	良質
128	813	採S19	④	7235	磨製石屑	(4.2)	1.6	0.5	(4.1)	良質
128	814	採S19	⑤	7940	凝石	(6.3)	2.8	2.3	(76.0)	砕石
128	815	採S19	⑥	7824	凝石	9.2	6.0	3.8	350.0	砕石
128	816	採S19	⑦	6902	凝石	(14.2)	5.3	(5.2)	(445.6)	砕石
131	837	採S21	①	16803	石屑	31.5	22.0	6.8	6980.0	砕石
131	838	採S21	②	10309	磨製石屑	(1.9)	(2.3)	0.3	(1.6)	良質
131	839	採S21	③	10302	凝石	9.4	6.4	5.0	377.9	砕石
134	840	採S21	④	10308	凝石	8.3	7.1	2.6	219.7	石屑
135	841	採S21	⑤	10309	磨石類	6.0	4.6	3.0	120.3	良質
135	842	採S21	⑥	10305	磨石類	66.0	(3.3)	(0.9)	(23.9)	良質
135	843	採S21	⑦	10321	軽石製品	8.6	6.4	3.2	33.6	軽石
135	844	採S21	⑧	10306	軽石製品	13.1	7.3	3.9	95.5	軽石
135	845	採S21	⑨	10307	軽石製品	10.5	11.2	4.7	116.9	良質
135	846	採S21	⑩	10306	軽石製品	6.8	6.3	3.9	33.5	軽石
135	847	採S21	⑪	10334	軽石製品	8.5	4.4	3.2	25.9	軽石
136	849	採S22	①	10263	凝石	(12.7)	5.6	3.3	(341.0)	砕石
140	861	採S25	①	15963	磨製石屑	1.5	1.7	0.4	0.5	準原石
140	862	採S25	②	12801	凝石	19.1	8.3	0.8	109.3	砕石
147	902	採S26	①	16076	軽石製品	12.3	11.2	5.7	155.2	軽石
147	903	採S26	②	16220	磨製石屑	2.1	1.5	0.7	1.9	良質
147	904	採S26	③	12089	石屑丁	9.5	(9.7)	0.8	(89.9)	良質
147	905	採S26	④	12671	打製石屑	(6.9)	(7.5)	(1.6)	(82.5)	ホルンフェルス
147	906	採S26	⑤	16072	凝石	10.7	3.9	2.9	173.7	砕石
147	907	採S26 P14	①	-	軽石製品	4.2	3.4	2.1	8.5	軽石
147	908	採S26 P14	②	-	軽石製品	3.7	1.7	1.1	2.1	軽石
149	919	採S28	①	13517	打製石屑	1.5	1.2	0.3	0.4	調整山石屑
149	920	採S28	②	13514	打製石屑	1.7	1.1	0.3	0.5	準原石
149	921	採S28	③	13457	凝石	(5.8)	(6.8)	(2.0)	(83.0)	砕石
149	922	採S28	④	13511	軽石製品	14.8	12.9	6.4	260.3	良質
152	906	採S29 +2	①	15624	石屑	51.1	35.8	13.1	18500.0	花崗岩
153	933	採S30	①	13799	軽石製品	6.3	4.1	1.6	12.9	軽石
153	950	採S31	①	15160	磨製石屑	2.6	2.5	0.4	2.9	良質
158	951	採S31	②	14646	磨製石屑	5.2	3.7	0.6	13.3	良質
158	952	採S31	③	14712	磨製石屑	8.8	6.8	3.7	42.5	軽石
158	953	採S31	-	-	軽石製品	7.5	2.8	3.4	19.2	軽石
167	1014	採S33 SR-1	①	16984	磨製石屑	2.3	2.0	0.1	0.7	良質
167	1015	採S33	②	15377	磨製石屑	(2.2)	1.4	0.1	(0.5)	良質
167	1016	採S33	③	15333	磨製石屑	(2.3)	(2.3)	0.4	(2.2)	良質
167	1017	採S33	④	14399	磨製石屑	3.3	1.9	0.3	0.7	良質
167	1018	採S33	⑤	15306	磨製石屑	4.0	3.4	0.3	3.5	良質
167	1019	採S33	⑥	13275	磨製石屑	(4.8)	3.7	0.5	(9.7)	良質
168	1020	採S33	⑦	16426	打製石屑	(7.6)	(11.0)	(1.3)	(118.6)	ホルンフェルス
168	1021	採S33	⑧	15384	凝石	(4.5)	(1.9)	(1.4)	(7.1)	ホルンフェルス
168	1022	採S33	⑨	13274	凝石	7.7	2.8	1.9	64.9	砕石

図録 番号	出土 位置	部位	取上 番号	器種	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	石 材	備 考
168	1023	Ⅱ-S133	②	15332	磁石	3.5	4	1.60	21.8	頁岩
168	1024	Ⅱ-S133	②	16061	磁石	9.8	1.6	0.81	5	砂岩
168	1025	Ⅱ-S133	①	16413	磁石	9.7	8.0	1.30	125.3	砂岩
168	1026	Ⅱ-S133	①	17041	石皿	28.5	28.5	8.2	8320.8	砂岩
168	1027	Ⅱ-S133	②	13244	磁石製品	15.1	14.5	8.0	292.4	磁石
168	1028	Ⅱ-S133	②	15209	磁石製品	12.4	7.8	13.0	92.9	磁石
168	1029	Ⅱ-S133	①	16880	磁石製品	11.5	4.3	4.1	66.7	磁石
172	1041	Ⅱ-S137	①	-	磁石	15.2	13.6	12.3	159.5	砂岩
172	1071	Ⅱ-S139	②	32289	磁石	9.8	7.0	1.5	158.3	砂岩
179	1072	Ⅱ-S140	①	31513	磨刀形石盤	6.3	7.3	1.3	63.6	ホルンフェルス
182	1076	Ⅱ-S141	①	36365	磨石 磁石類	11.3	8.1	4.5	563.7	砂岩
182	1077	Ⅱ-S141	③	36369	磁石	19.1	7.6	6.4	1115.7	砂岩
188	1100	Ⅱ-S143	床直	22847	磨製石皿	26	21.9	2.3	1.24	頁岩
188	1101	Ⅱ-S143	床直	22965	磨製石皿	10.1	20.6	2.4	0.6	頁岩
190	1108	Ⅱ-S144	①	22009	打製石皿	20.6	18.2	3.4	0.9	磨製火山岩
190	1109	Ⅱ-S144	①	22610	磁石製品	44.1	29.2	12.7	6.0	磁石
190	1110	Ⅱ-S144	②	21943	磨石 磁石類	122.0	93	54.5	798	砂岩
194	1128	Ⅱ-S145	床直	22449	磨製石皿	6.6	3.5	0.6	13	頁岩
194	1129	Ⅱ-S145	床直	25091	磨製石皿	2.5	21.2	2.9	1.69	頁岩
194	1130	Ⅱ-S145	①	-	打製石皿	15.2	12.5	2.7	0.4	チャート
194	1131	Ⅱ-S145	床直	25290	石皿・石形類	12.1	13.5	6.9	1451.3	砂岩
194	1132	Ⅱ-S145	②	25288	磁石	147.5	65.5	30.5	616	砂岩
194	1133	Ⅱ-S145	②	25289	磁石	163.0	75.5	17.5	141.1	頁岩
194	1134	Ⅱ-S145	①	22206	磁石	103.0	90.5	29.5	544.0	砂岩
196	1141	Ⅱ-SK1	①	7130	磁石製品	6.6	5.4	2.8	17.8	磁石
196	1142	Ⅱ-SK1	①	7151	打製石斧	12.6	5.7	2.7	180.8	ホルンフェルス
214	1172	期溝基4	埋藏土	22565	打製石皿	12.4	12.1	0.5	1.30	磨製火山岩
214	1173	期溝基4	覆土上	22360	打製石斧	66.1	17.0	12.3	92.5	ホルンフェルス

第 15 表 F-27 区周辺出土土器観察表

図録 番号	出土 位置	部位	取上 番号	器種	形状	口径 (cm)	底径 (cm)	調 整		文 様	色調 外 内	影 土						備 考		
								外 面	内 面			横 溝	白 土	黄 土	赤 土	黒 土	灰 土		石 土	
218	1175	SG5	-	SG5 No.10	壺	口径一胴	24.6	-	横ナテ、ヘウ 羅ナテ	横ナテナテ	西腔、3条突	にぶい・黄 にぶい・赤	普通	○	○	○	○	○	○	-
218	1176	F・GZ	Ⅱ・B	23025	壺	口径	26.4	-	ヘウ羅ナテ	横ナテ	1条突	にぶい・黒 にぶい・黄	普通	○	○	○	○	○	○	-
218	1177	G・PZ	Ⅱ・B	19036	壺	口径一胴	27.0	-	ヘウ羅ナテ	ヘウ羅ナテ	西腔、3条突	にぶい・黄	普通	○	○	○	○	○	○	磨製
218	1178	FZ	Ⅱ・B	18898	壺	口径	27.6	-	横ナテ	横ナテ	西腔	にぶい・黄	普通	○	○	○	○	○	○	-
218	1179	FZ・28	I・B Ⅱ・B	18347	壺	口径	27.0	-	ヘウ羅ナテ	ヘウ羅・斜ナ テ	西腔、1条突	にぶい・赤	普通	○	○	○	○	○	○	-
218	1180	GZ	I・B Ⅱ・B	18311	壺	口径	28.0	-	丁寧な横ナテ	横ナテ、磨ナ テ	-	磨 にぶい・黄	良好							磁石
218	1181	SG4	Ⅱ・B	SG4 No.21	壺	口径	-	-	横ナテ	横ナテ	西腔、1条突	にぶい・黄	普通	○	○	○	○	○	○	-
218	1182	SG4	Ⅱ・B	SG4 No.15	壺	脚	-	8.0	ヘウ羅ナテ、 横ナテ	ナテ	西腔	にぶい・黄 泥灰	普通	○	○	○	○	○	○	-
218	1183	SG4	Ⅱ・B	SG4 No.19	壺	脚	-	8.2	ヘウ羅ナテ、 横ナテ	-	西腔	にぶい・黄 泥灰	普通							磨製
218	1184	SG4	Ⅱ・B	SG4 No.26	壺	脚	-	8.5	ヘウ羅ナテ、 横ナテ	-	西腔	にぶい・黄	普通	○	○	○	○	○	○	酒器
218	1185	SG4	Ⅱ・B	SG4 No.4	壺	脚	-	7.2	-	-	西腔	にぶい・赤 泥一差	普通	○	○	○	○	○	○	酒器
218	1186	SG4	Ⅱ・B	SG4 No.24	壺	脚	-	6.9	ヘウ羅ナテ、 横ナテ	ナテ	西腔	にぶい・黄	普通	○	○	○	○	○	○	磨製
219	1187	SG5	-	17900	大型壺	口径一胴上	54.4	-	ヘウ羅・斜ナ テ、横ナテ	ヘウ羅ナテ	西腔、5条突	にぶい・黄・黒 にぶい・赤	普通	○	○	○	○	○	○	-
219	1188	SG5	-	18785	大型壺	口径一胴上	-	-	横ナテ、ヘウ 羅ナテ	ヘウ羅・斜ナ テ	西腔、5条突	磨 にぶい・黄	普通	○	○	○	○	○	○	-
219	1189	SG4	Ⅱ・B Ⅱ・B	16196	大型壺	口径一胴上	54.4	-	丁寧な横ナ テ、ヘウ羅 ナテ	横ナテ、ヘウ 羅ナテ	-	磨 にぶい・赤	普通	○	○	○	○	○	○	-
220	1190	F・GZ	Ⅱ・B Ⅱ・B	19028	壺	口径一胴	20.9	-	ヘウ羅ナテ、 横ナテ	横ナテ、ヘウ 羅ナテ	西腔、3条突	にぶい・黄	普通	○	○	○	○	○	○	-
220	1191	FZ・29	Ⅱ・B	20715、 22510	壺	口径一胴	18.4	-	横ナテ、ヘウ 羅ナテ、磨 ナテ	横ナテ→磨 ナテ	西腔、泥腔	にぶい・黄	普通	○	○	○	○	○	○	-
220	1192	SG3	Ⅱ・B	765	壺	口径	-	-	横ナテ	横ナテ	-	にぶい・黄	普通	○	○	○	○	○	○	磨製
220	1193	F30・GZ	Ⅱ・B	20101	壺	口径一胴	15.2	-	ヘウ羅ナテ、 横ナテ、磨 ナテ	ヘウ羅ナテ	西腔	にぶい・黄・赤 明赤	普通	○	○	○	○	○	○	酒器、長石
220	1194	SG6	Ⅱ・B	18319	壺	定形	14.8	5.6	ヘウ羅ナテ	ヘウ羅ナテ	二又H1脚	明赤	普通	○	○	○	○	○	○	磨製、器高1 3.0
220	1195	GZ	Ⅱ・B	20500	壺	口径	36.0	-	横ナテ、丁寧 なヘウ羅ナ テ	横ナテ	西腔	にぶい・赤	良好	○	○	○	○	○	○	磨製瓦土
221	1196	GZ・27	Ⅱ・B	19009	壺	脚	-	-	横ナテ	横ナテ	5条突	磨 にぶい・黄	普通	○	○	○	○	○	○	-

探検 番号	図録 番号	出土 位置	層位	取上 番号	器種	部位	口径 (cm)	底径 (cm)	胴		文 様	色調 外 内	焼成	胎 土					備 考	
									外 面	内 面				白 石	赤 石	黒 石	灰 石	黒 石		備 考
22	1197	G27	I	1836B Ⅱ	壺	胴	-	-	横ナデ	ナデ	1条突起、3 条突起、穿孔	普通	○	○	○	○	○	○	-	
22	1198	F27	Ⅱ・Ⅲ	1940C Ⅱ	壺	胴-胴	-	-	横ナデ	縦-横ナデ	6条突起、2 条突起	普通	○	○	○	○	○	○	-	
22	1199	J29	Ⅱb	2056 Ⅱ	壺	胴	-	-	横ナデ	斜ナデ	2条突起	普通	○	○	○	○	○	○	長石	
22	1200	G27	I Ⅱ	1831Z Ⅱ	壺	口縁-底	36.0	-	横ナデ	ヘラナデ	突起、穿孔	普通	○	○	○	○	○	○	-	
22	1201	SG3	Ⅱb	SG3No4	壺	底	-	7.2	ヘラ横ナデ 胎ナデ	-	-	普通	○	○	○	○	○	○	摩耗、底：ナデ	
22	1202	F27	Ⅱ	1800Z	壺	底	-	6.4	ヘラ横ナデ	ヘラ横ナデ	-	普通	○	○	○	○	○	○	長石	
22	1203	SG4	Ⅱb	SG4No5	壺	底	-	7.0	ヘラ横ナデ	-	-	普通	○	○	○	○	○	○	潤滑	
22	1204	G27	I・II	1790B Ⅱ	壺	底	-	8.2	ヘラ横ナデ	ヘラ横ナデ	-	普通	○	○	○	○	○	○	○	潤滑、底：底、 胎ナデ
22	1205	SG3	Ⅱb	SG3No5	壺	底	-	9.6	ヘラ横ナデ	ヘラ横ナデ	-	普通	○	○	○	○	○	○	○	潤滑、摩耗
22	1206	SG1・G27 29	Ⅱb・Ⅱ	2016 Ⅱ	壺	胴-底	-	11.0	-	ヘラ横ナデ	-	普通	○	○	○	○	○	○	○	摩耗
22	1207	SG6	Ⅱa	SG6No10	壺	底	-	8.2	-	-	-	普通	○	○	○	○	○	○	○	摩耗
22	1208	G27	Ⅱ	1808B	壺	底	-	8.0	丁寧なヘラ斜 ナデ	-	-	普通	○	○	○	○	○	○	○	潤滑、底：丁寧 なヘラナデ
22	1209	F27	Ⅱ	1809B	壺	底	-	4.8	ナデ	横ナデ	-	普通	○	○	○	○	○	○	○	摩耗
22	1210	SG4	Ⅱb	SG4No8	壺	底	-	8.2	-	-	-	普通	○	○	○	○	○	○	○	摩耗
22	1211	F27	I	1838B	壺	底	-	9.0	ヘラナデ	ヘラナデ	-	普通	○	○	○	○	○	○	○	摩耗、底：底、 胎ナデ

第 16 表 弥生時代土坑墓出土土器観察表

探検 番号	図録 番号	出土 位置	層位	取上 番号	器種	部位	口径 (cm)	底径 (cm)	胴		文 様	色調 外 内	焼成	胎 土					備 考	
									外 面	内 面				白 石	赤 石	黒 石	灰 石	黒 石		備 考
22	1212	SK80	②	-	壺	口縁	-	-	横ナデ	-	-	普通	○	○	○	○	○	○	○	-
22	1213	SK68	-	2818B	壺	脚	-	7.0	ヘラ横ナデ	ナデ	-	普通	○	○	○	○	○	○	○	-
22	1215	SK65	①	2117S	壺	脚	-	-	横ナデ	横ナデ	-	普通	○	○	○	○	○	○	○	-
22	1222	SK104	①	2241Z	壺	胴	-	-	横ナデ・ミナ コ	-	-	普通	○	○	○	○	○	○	○	-
22	1232	SK109	①	2230 Ⅱ	壺	口縁	-	-	横ナデ	横ナデ	-	普通	○	○	○	○	○	○	○	-
22	1233	SK109	-	-	壺	口縁	-	-	横ナデ	-	-	普通	○	○	○	○	○	○	○	-

第 17 表 弥生時代土坑墓出土土器観察表

探検 番号	図録 番号	出土 位置	層位	取上 番号	器種	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	石 材	備 考
22	1214	Ⅱ-ST7	①	22006	碧玉	0.7	横0.36	-	0.1	碧玉	-
22	1216	Ⅱ-ST9	下	21963	磨製石皿	4.51	1.62	0.27	2.6	緑色片岩	-
22	1217	Ⅱ-ST9	下	21962	磨製石皿	4.15	2.00	0.25	2.3	頁岩	-
22	1218	Ⅱ-ST9	下	21964	磨製石皿	(4.02)	2.00	0.25	(2.5)	頁岩	-
22	1219	Ⅱ-ST9	下	21960	磨製石皿	(3.54)	2.22	0.3	(2.2)	頁岩	-
22	1220	Ⅱ-ST9	下	21969	磨製石皿	(3.30)	2.60	0.25	(2.5)	頁岩	-
22	1221	Ⅱ-ST9	下	21966	磨製石皿	(1.2)	(0.95)	(0.17)	(0.2)	頁岩	-
22	1223	Ⅱ-ST19	床直	22849	磨製石皿	(3.4)	(1.43)	0.22	(1.3)	頁岩	-
22	1224	Ⅱ-ST19	床直	22853	磨製石皿	(3.78)	2.20	0.2	(1.8)	頁岩	-
22	1225	Ⅱ-ST19	床直	22851	磨製石皿	3.63	2.00	0.29	2.3	頁岩	-
22	1226	Ⅱ-ST19	床直	22852	磨製石皿	3.10	2.54	0.3	2.4	頁岩	-
22	1227	Ⅱ-ST19	床直	22854	磨製石皿	(3.53)	(1.94)	0.25	(1.9)	頁岩	-
22	1228	Ⅱ-ST19	床直	22855	磨製石皿	(3.67)	(2.04)	0.25	(2.0)	頁岩	-
22	1229	Ⅱ-ST19	床直	22856	磨製石皿	(4.23)	2.26	0.36	(3.2)	頁岩	-
22	1234	Ⅱ-ST30	床直	22718	磨製石皿	(3.3)	(1.9)	(0.3)	(2.1)	頁岩	-
22	1235	Ⅱ-ST30	床直	22719	磨製石皿	(1.8)	(2.1)	(0.2)	(0.9)	頁岩	-
22	1236	Ⅱ-ST30	床直	22717	磨製石皿	(1.7)	(2.3)	0.3	(1.4)	頁岩	-

図号 番号	出土 位置	層位	取上 番号	器種	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	石材	備考	
225	1237	糸ST30	床底	-	磨製石楯	1.30	1.0	0.2	0.1	頁岩	
226	1241	糸ST30	床底	2238	碧玉	1.0	径0.4	-	0.2	碧玉	

第18表 弥生時代土坑墓出土鉄製品観察表

図号 番号	出土 位置	層位	取上 番号	器種	長さ (cm)	幅 (cm)	重量 (g)	土					備考		
223	1203	糸ST19	床底	2267	鉄鏃	4.4	1.7	2.7							
223	1231	糸ST19	床底	2268	鉄鏃	3.9	1.9	6.2							
225	1238	糸ST30	床底	2274	鉄鏃	4.8	1.6	5.8							
225	1239	糸ST30	床底	2239	鉄鏃	(4.0)	1.75	7.5							
225	1240	糸ST30	床底	2275	鉄鏃	1.8	1.7	5.7							

第19表 弥生時代中期西部出土土器観察表

図号 番号	出土 位置	層位	取上 番号	器種	部位	口径 (cm)	底径 (cm)	胴		文様	色調	焼成	白 磁	新 白 磁	雲 母	石 末	風 土	備考	
								外 面	内 面										
236	1242	F30	Ⅱ a-b Ⅱ a	3733	甕	口縁-胴	-	-	ハケ模ナデ	ナデ	2条刻目突帯	普通	○						
236	1243	G29	Ⅱ a-b	3069	甕	口縁-胴	20.8	-	模ナデ、ハケ 模ナデ	ナデ、筒サ サエ	肩目、3条突 帯	良好			○				-
236	1244	G29	Ⅱ b	3042	甕	口縁-胴	-	-	ハケ模ナデ	-	肩目、3条突 帯	普通	○						-
236	1245	1238-29 I31	Ⅱ a Ⅱ a Ⅱ a	2340	甕	口縁-胴	25.0	-	ハケナデ	縦・横ナデ→ ナデ→ハケナ デ→ハケナデ	2条沈線	良好	○						-
236	1246	G22	Ⅱ	3090	甕	口縁-胴	20.2	-	丁寧ナデ	丁寧ナデ	2条沈線	良好				○			-
236	1247	D30	Ⅱ	2108	甕	口縁	-	-	ナデ→ハケナ デ→ハケナデ	ナデ→ハケナ デ→ハケナデ	2条沈線	普通	○						-
236	1248	I36	Ⅱ a	2923	甕	口縁	-	-	ナデ、ヘラナ デ	ナデ、ヘラナ デ	沈線、凹線	普通	○						-
236	1249	E21	Ⅱ	2140	甕	口縁	-	-	横・斜ナデ	横・斜ナデ	沈線	普通	○						-
236	1250	I36	Ⅱ a	2932	甕	口縁	-	-	模ナデ、ハケ 模ナデ	ハケ模ナデ	沈線	普通	○						-
236	1251	D23	I	-	甕	口縁	-	-	ヘラ模ナデ	沈線	凹線	普通	○						スス
238	1252	H-129	Ⅱ、Ⅱ b	2360	甕	口縁-胴	25.8	-	模ナデ	横ナデ、ヘラ 斜ナデ	2条突帯	普通	○						-
238	1253	D23	Ⅱ a	2084	甕	口縁	-	-	ヘラ模ナデ	ヘラ模ナデ	凹線、2条突 帯	普通	○						-
238	1254	E25	I	1849	甕	口縁	-	-	模ナデ	模ナデ	凹線	普通	○						スス
238	1255	I30	Ⅱ	2180	甕	口縁	-	-	ヘラ模ナデ	ヘラ模・斜ナ デ	4条突帯	普通	○						跡蒸
238	1256	E25	Ⅱ b	2042	甕	口縁	-	-	模ナデ	模ナデ	2条突帯	普通	○						-
238	1257	H24-25	I	1817	甕	口縁	-	-	ナデ	ナデ	-	普通	○						-
238	1258	E24	-	-	甕	口縁	25.8	-	模ナデ	斜ナデ、筒サ サエ	3条突帯、刺 突文	普通	○						-
238	1259	D26	Ⅱ	1910	甕	口縁	-	-	ハケ模・横ナ デ	横・斜ナデ	凹線	普通	○						スス
238	1260	H21	Ⅱ	2102	甕	口縁	-	-	模ナデ	模ナデ	凹線	普通	○						-
238	1261	E21	Ⅱ	1914	甕	口縁	-	-	ハケ・斜ナ デ	ハケ模ナデ	凹線	普通	○						スス
238	1262	G31	Ⅱ b	3119	甕	口縁	-	-	丁寧模ナデ	丁寧模ナデ	凹線	普通	○						-
238	1263	G21、I25	Ⅱ、Ⅱ b	1902	甕	口縁	-	-	模ナデ	模ナデ	凹線、突帯	普通	○						-
238	1264	D21	Ⅱ	1971	甕	口縁	-	-	模ナデ	模ナデ	凹線、突帯	普通	○						-
239	1265	F26	Ⅱ b	2092	甕	口縁-胴上	21.0	-	ヘラ模ナデ	ヘラ模ナデ	凹線	良好	○						-
239	1266	F22	Ⅱ	2123	甕	口縁	-	-	ヘラナデ	ヘラナデ	凹線	良好	○						スス
239	1267	G23	Ⅱ a	2221	甕	口縁	-	-	ナデ	ナデ	-	普通	○						-
239	1268	E32	Ⅱ b	1678	甕	口縁	-	-	ヘラ斜ナデ	ヘラ模ナデ	凹線	良好	○						スス
239	1269	E20	Ⅱ	-	甕	口縁-胴	-	-	模ナデ	横・模ナデ	凹線	普通	○						スス、赤石
239	1270	F21	Ⅱ	1801	甕	口縁	-	-	ヘラ模ナデ、 筒ササエ	ヘラ模ナデ	凹線	普通	○						-
239	1271	G22-23	Ⅱ、Ⅱ b	2096	甕	口縁	-	-	ヘラ模ナデ	ハケ斜ナデ	凹線	普通	○						-
239	1272	E21	Ⅱ	2126	甕	口縁	23.0	-	ヘラ模ナデ	ヘラ模ナデ	凹線、1条突 帯	普通	○						-
239	1273	D21	Ⅱ	1767	甕	口縁	-	-	丁寧ナデ	模ナデ	8条沈線、凹 線	良好	○						-
239	1274	D21	Ⅱ	1986	甕	口縁	-	-	模ナデ	模ナデ	凹線、肩目	普通	○						-
239	1275	G30、H-129	Ⅱ a-b	30130	甕	口縁	38.4	-	ヘラ模ナデ	ヘラ模ナデ	凹線、3条突 帯	普通	○						-
239	1276	H29	Ⅱ	2684	甕	口縁	-	-	模ナデ	模ナデ	沈線、流紋文	普通	○						-

順 号	図 号	出 土 位置	層位	瓦 上 号	器 種	部 位	口 径 (cm)	底 径 (cm)	面		文 様	出 土 内 容	焼 成	土					備 考		
									外	内				白 磁	赤 磁	青 磁	石 磁	瓦 石		灰 石	
																					外
240	1277	F28	I	1859J	甕	口縁	29.8	-	横ナテ	横ナテ	-	にぶい	普通	○	○	○	○	○	○	-	
240	1278	F25-26	I, II, III	1877J	甕	口縁	27.6	-	横ナテ	-	四線	にぶい	黄緑	良好	○	○	○	○	○	-	
240	1279	F20	II, III	2056J	甕	口縁-胴	28.2	-	ナテ	横ナテ→指オサエ	3条突帯	黒	良好	○	○	○	○	○	西原		
240	1280	G25-26	II, III	1923J	甕	口縁	-	-	丁家女横ナテ	丁家女横ナテ	-	にぶい	普通	○	○	○	○	○	-		
240	1281	I21	II	1920J	甕	口縁	34.2	-	横ナテ	横ナテ	四線	にぶい	普通	○	○	○	○	○	スス		
240	1282	F29, G26	II	1933J	甕	口縁	38.0	-	横ナテ→斜ナテ	横ナテ	3条突帯	暗 黒赤	普通	○	○	○	○	○	-		
241	1283	F27	I, II, III	1836J	甕	口縁	35.2	-	横ナテ	横ナテ	-	にぶい	暗-緑	普通	○	○	○	○	○	摩耗	
241	1284	G-129	II a, b	3007J	甕	口縁	29.6	-	丁家女横ナテ, 指オサエ	横いハナナテ	沈線	にぶい	暗	良好	○	○	○	○	○	-	
241	1285	I28-29-31	II, III	2343J	甕	口縁	27.2	-	ハナナテ, 指オサエ	ハナナテ, 指オサエ	-	にぶい	暗	普通	○	○	○	○	○	-	
241	1286	F27	I, II, III	1850J	甕	口縁	-	-	ナテ	ナテ	-	暗	良好	○	○	○	○	○	-		
241	1287	C28	II b	1718J	甕	口縁	13.6	-	斜ナテ, 指オサエ	横ナテ	-	暗	良好	○	○	○	○	○	西原, スス		
241	1288	F25	II a	2181J	甕	口縁	-	-	ハナナテ, 斜ナテ	横ナテ	-	灰黄	普通	○	○	○	○	○	-		
241	1289	E21	II	2141J	甕	口縁-胴	25.6	-	横ナテ→ハナナテ	ハナナテ, ハナナテ	-	明赤	普通	○	○	○	○	○	-		
241	1290	F21	II	1805J	甕	口縁	17.5	-	ハナナテ	ハナナテ	四線	明赤	良好	○	○	○	○	○	スス		
241	1291	E21	II	2112J	甕	口縁	-	-	ハナナテ	ハナナテ	四線	にぶい	暗	良好	○	○	○	○	○	磨耗瓦上	
241	1292	F25	II b	2037J	甕	口縁	16.2	-	ナテ, 指オサエ	ナテ, 指オサエ	四線	にぶい	暗	普通	○	○	○	○	○	解明系	
241	1293	J29	II b	2752J	甕	口縁	14.0	-	丁家女ナテ	丁家女ナテ	-	灰黄	にぶい	暗	○	○	○	○	○	解明系	
241	1294	F26	II	1937J	甕	口縁	-	-	ハナナテ	ハナナテ	-	暗	普通	○	○	○	○	○	解明系		
241	1295	F25	II b	2041J	甕	口縁	-	-	横ナテ, ハナナテ	横ナテ	-	にぶい	暗	普通	○	○	○	○	○	解明系	
241	1296	D26	II	1910J	甕	口縁	-	-	横ナテ	横ナテ	-	明赤	普通	○	○	○	○	○	西原, 解明系		
241	1297	F25	II b	2049J	甕	口縁	24.4	-	横ナテ	横ナテ, 横ナテ	-	にぶい	暗	普通	○	○	○	○	○	スス, 解明系	
241	1298	E27	II b	2008J	甕	口縁	-	-	横ナテ, 斜ナテ, 指オサエ	横ナテ, 斜ナテ	-	にぶい	暗	普通	○	○	○	○	○	解明系	
241	1299	G31	II	3121J	甕	口縁	-	-	横ナテ	横ナテ	-	にぶい	暗	普通	○	○	○	○	○	解明系	
242	1300	J29-31	II, III	2540J	甕	口縁-胴	26.8	-	ハナナテ, 横ナテ	ハナナテ	四線, 3条突帯	にぶい	赤黒-にぶい	普通	○	○	○	○	○	-	
242	1301	H31	II a	3104J	甕	口縁-胴	26.2	-	横ナテ	横ナテ	四線, 2条突帯	にぶい	暗	良好	○	○	○	○	○	-	
242	1302	G30, H31	I, II, III	2858J	甕	口縁-胴	27.9-29.4	-	ハナナテ, 横ナテ	ハナナテ, 斜ナテ, 横ナテ	3条突帯	にぶい	赤黒-にぶい	普通	○	○	○	○	○	-	
242	1303	G31	II	3032J	甕	口縁	26.4	-	丁家女横ナテ	丁家女横ナテ	1条突帯	灰黄	にぶい	普通	○	○	○	○	○	-	
242	1304	I30	II a, b	2887J	甕	口縁-胴	30.0	-	ハナナテ, ナテ	ハナナテ→横ナテ	3条突帯	にぶい	暗	普通	○	○	○	○	○	スス	
242	1305	G33	II	3634J	甕	口縁	26.6	-	横ナテ	横ナテ	3条突帯	にぶい	暗	良好	○	○	○	○	○	摩耗, 赤石	
242	1306	G28, I-130	II, III	2514J	甕	口縁	30.4	-	丁家女横ナテ	横ナテ	四線	にぶい	暗	普通	○	○	○	○	○	スス	
242	1307	G31	II	2701J	甕	口縁	31.6	-	丁家女横ナテ	横ナテ, 斜ナテ	3条突帯	暗	にぶい	暗	良好	○	○	○	○	○	-
244	1308	K35	II a	3495J	甕	口縁-胴	26.6	-	ナテ, 指オサエ	ナテ	3条突帯	灰赤 黒, 上ぶ	暗	普通	○	○	○	○	○	スス, 灰白石	
244	1309	F27-29	I, II	1859J	甕	口縁-胴	36.4	-	ハナナテ, ナテ	ハナナテ, ナテ	3条突帯	にぶい	暗	良好	○	○	○	○	○	赤石	
244	1310	F27	II b	2082J	甕	口縁	30.0	-	横ナテ	ハナナテ	1条突帯	にぶい	暗	良好	○	○	○	○	○	磨耗	
244	1311	F27	II b	1857J	甕	口縁	-	-	横ナテ	ハナナテ	1条突帯	にぶい	暗	良好	○	○	○	○	○	-	
244	1312	第3-5, 10, 12, 15, 18, 20, 23	I, II, III	1913J	甕	胴	-	-	ハナナテ	ハナナテ→指オサエ	4条突帯	黒黒-にぶい	暗	普通	○	○	○	○	○	-	
244	1313	F26	II a, II b	2024J	甕	胴-脚台	-	-	横ナテ	横ナテ	突帯	赤, 黒 にぶい	暗	良好	○	○	○	○	○	-	
244	1314	K30	I	2431J	甕	口縁-胴	-	-	ハナナテ	横ナテ	3条突帯	にぶい	暗	良好	○	○	○	○	○	西原, スス	
244	1315	E30, I29-31, 29-30, 32	II a, b, III	1600J	甕	胴	-	-	丁家女横ナテ	丁家女横ナテ	-	にぶい	暗	普通	○	○	○	○	○	長石	
245	1316	D20	II	1979J	甕	脚台	-	-	5.9 横ナテ	横ナテ	-	にぶい	赤黒	良好	○	○	○	○	○	-	
245	1317	F25	II b	2048J	甕	脚台	-	-	5.9 横ナテ	横ナテ	-	にぶい	暗	○	○	○	○	○	○	成田庄直	
245	1318	J29	II	2560J	甕	胴-脚台	-	-	6.0 横ナテ	横ナテ	-	にぶい	暗	良好	○	○	○	○	○	長石, 成田庄直	
245	1319	E25	II a	2160J	甕	脚台	-	-	6.7 横ナテ	横ナテ	-	にぶい	赤黒 にぶい	暗	良好	○	○	○	○	○	スス
245	1320	F30-31	II b, III	3742J	甕	胴-脚台	-	-	6.4 横ナテ	横ナテ	-	にぶい	暗	良好	○	○	○	○	○	スス, 長石, 成田庄直, ハナナテ	
245	1321	G25	I	1703J	甕	脚台	-	-	6.4 横ナテ	-	-	にぶい	暗	普通	○	○	○	○	○	成田庄直	
245	1322	K34	II b, III	3160J	甕	脚台	-	-	9.4 横ナテ	丁家女横ナテ	-	にぶい	暗	良好	○	○	○	○	○	-	
245	1323	H25	I	1818J	甕	脚台	-	-	6.2 横ナテ	丁家女横ナテ→指オサエ	ナテ, 指オサエ	四線	明赤	良好	○	○	○	○	○	ゴケ	
245	1324	K35	II b	3144J	甕	脚台	-	-	8.9 横ナテ	-	四線	にぶい	暗	良好	○	○	○	○	○	ゴケ, 灰石	
245	1325	K29	II a	2837J	甕	脚台	-	-	6.4 横ナテ	-	四線	にぶい	暗	良好	○	○	○	○	○	赤石	

洞坑 番号	洞坑 位置	層位	取上 番号	器種	部位	口径 (cm)	底径 (cm)	器 形		文 様	色調 外 内	焼成	胎 土					備 考		
								外 面	内 面				白 石	赤 石	黒 石	灰 石	黒 石			
																			良	○
251	1375	E25	Ⅱ	21956	壺	底	-	6.6	縦ノゴキ	縦ナデ	-	にぶい-橙 褐色	良好	○	○	○	○	○	○	底ノ丁字ナデ
252	1376	F27	Ⅱ b, Ⅱ	18895	鉢	口縁-胴	30.4	-	ハナ斜ナデ	ハナ斜ナデ, 胎ナデ	-	にぶい-橙	良好	○	○	○	○	○	○	長石
253	1377	I-136	Ⅱ b, Ⅱ a	29549	鉢	口縁-胴	10	-	ハナ横ナデ	ナデ, 胎ナデ	-	にぶい-赤	普通	○	○	○	○	○	○	網落
252	1378	J28-29	Ⅱ	23382	鉢	口縁	11.7	5.9	縦-横ナデ	-	-	にぶい-赤	普通	○	○	○	○	○	○	網落, 砂高1.3
252	1379	G30	Ⅱ b	31575	鉢	口縁	-	-	ハナ横ナデ	胎ナデ	凹線, 突帯	にぶい-赤紫	普通	○	○	○	○	○	○	赤石
252	1380	J30	Ⅱ a	28955	鉢	胴	-	-	-	-	2条突帯	にぶい-青橙	普通	○	○	○	○	○	○	網落
252	1381	E31	Ⅱ a	15970	土師	口縁	-	-	-	-	-	にぶい-青橙	普通							3.5部×1.1×1.1
252	1382	G26	Ⅱ b	20294	阿波土師	壺の胴	-	-	横ナデ	横ナデ	-	にぶい-赤紫	普通							-
252	1383	G32	Ⅱ b	30695	阿波土師	壺の胴	-	-	ヘラナデ	不明	-	にぶい-赤紫 灰褐色	普通	○	○	○	○	○	○	-
252	1384	D30	Ⅱ b	16322	土製品	不明	-	-	ナデ	ナデ	草孔	にぶい-青橙	普通	○	○	○	○	○	○	朱
252	1385	F24	I	5027	不明	把手	-	-	ナデ	ナデ	丸線, 筋面	にぶい-赤	普通	○	○	○	○	○	○	-

第 20 表 弥生時代中期東部出土土器観察表

洞坑 番号	洞坑 位置	層位	取上 番号	器種	部位	口径 (cm)	底径 (cm)	器 形		文 様	色調 外 内	焼成	胎 土					備 考				
								外 面	内 面				白 石	赤 石	黒 石	灰 石	黒 石					
																			良	○	○	○
253	1386	E41	Ⅱ b	11040	壺	口縁-胴	32.0	-	ハナ横-縦ナ デ	ハナ横ナデ	凹線, 3条突 帯, 赤紫	普通	○	○	○	○	○	○	○	スス		
253	1387	G83	I	-	壺	口縁-胴	31.6	-	ヘラ横ナデ	ヘラ横ナデ	凹線, 3条突 帯	にぶい-赤紫	普通	○	○	○	○	○	○	○	スス	
253	1388	G44-45	Ⅱ	14212	壺	口縁-胴	27.0	-	丁家ヘラナ デ	-	3条突帯	にぶい-赤紫	普通	○	○	○	○	○	○	○	網落, スス	
253	1389	G42	Ⅱ b	11672	壺	口縁-胴	38.4	-	ハナ横ナデ, 横ナデ	横ナデ	凹線, 3条突 帯	にぶい-赤紫	良好	○	○	○	○	○	○	○	-	
253	1390	D48	Ⅱ	7288	壺	口縁	20.0	-	ヘラ横ナデ	ヘラ斜ナデ	突帯	にぶい-赤紫	良好	○	○	○	○	○	○	○	スス	
253	1391	H42	Ⅱ a	8817	壺	口縁	-	-	ハナ横-斜ナ デ	-	凹線	にぶい-橙	普通	○	○	○	○	○	○	○	-	
253	1392	S40	①	15221	壺	口縁	-	-	ヘラ横ナデ→ 横ナデ	横ナデ	凹線	にぶい-赤青 橙-にぶい-赤	普通	○	○	○	○	○	○	○	スス	
253	1393	K31	Ⅱ a-c	2309	壺	口縁-胴	-	-	横ナデ, ハナ 斜ナデ	ヘラナデ	凹線, 突帯	赤紫	良好	○	○	○	○	○	○	○	-	
253	1394	G43	Ⅱ b	12104	壺	口縁	-	-	ナデ	ナデ	凹線	灰褐色 にぶい-赤紫	普通	○	○	○	○	○	○	○	-	
253	1395	G42	Ⅱ b	10799	壺	口縁	-	-	横ナデ	横ナデ	3条突帯	にぶい-赤紫 にぶい-赤紫	普通	○	○	○	○	○	○	○	-	
253	1396	E47	Ⅱ b	15513	壺	口縁	-	-	ハナ横-斜ナ デ	ハナ横ナデ	-	赤紫	普通	○	○	○	○	○	○	○	-	
253	1397	S40	①	15220	壺	口縁	-	-	横ナデ	横ナデ	凹線	橙	普通	○	○	○	○	○	○	○	スス	
256	1398	D48	Ⅱ	6984	壺	口縁-胴	34.8	-	ヘラ横ナデ	ヘラ横ナデ	3条突帯	にぶい-赤	良好	○	○	○	○	○	○	○	輝石	
256	1399	S40	①	15222	壺	口縁	-	-	ヘラ横ナデ	丁家横ナデ	-	にぶい-赤紫-灰 褐色	普通	○	○	○	○	○	○	○	-	
256	1400	H44	Ⅱ b	14390	壺	口縁	-	-	横ナデ	横ナデ	2条突帯	橙	良好	○	○	○	○	○	○	○	-	
256	1401	H43-44	Ⅱ b	12328	壺	口縁	24.3	-	横ナデ	横ナデ	凹線, 突帯	灰褐色 にぶい-赤	普通	○	○	○	○	○	○	○	スス	
256	1402	G45	Ⅱ b, Ⅱ	14003	壺	口縁-胴	26.8	-	-	-	凹線, 1条突 帯	にぶい-橙	普通	○	○	○	○	○	○	○	網落	
256	1403	K38	Ⅱ b	23021	壺	口縁	-	-	ヘラ横ナデ→ 横ナデ	ハナ横ナデ	凹線	にぶい-橙	普通	○	○	○	○	○	○	○	-	
256	1404	F43, G43	Ⅱ b	12425	壺	口縁	18.6	-	ヘラ横ナデ→ 横ナデ	横ナデ	凹線	赤褐色, 灰 褐色	普通	○	○	○	○	○	○	○	スス	
257	1405	I44	Ⅱ	17426	壺	口縁-胴	26.8	-	ハナ斜ナデ, ナデ	ハナ斜ナデ, ナデ	-	にぶい-黒	良好	○	○	○	○	○	○	○	スス, 灰白石	
257	1406	H42-43	Ⅱ a-b	8841	壺	口縁-胴	24.8	-	ハナナデ, 横 ナデ	ハナナデ, ナ デ	-	にぶい-赤紫 褐色	普通	○	○	○	○	○	○	○	-	
257	1407	K31	Ⅱ c	2292	壺	口縁-胴上	19.6	-	縦-横ナデ	ヘラナデ	-	にぶい-赤	良好	○	○	○	○	○	○	○	スス, 角閃石	
257	1408	D41	Ⅱ a	-	壺	口縁	-	-	ハナナデ	ハナナデ	-	赤	普通	○	○	○	○	○	○	○	-	
257	1409	D48	Ⅱ	7717	壺	口縁-胴	-	-	ヘラ横ナデ	ヘラ横ナデ	-	にぶい-赤	普通	○	○	○	○	○	○	○	スス	
257	1410	D48	Ⅱ	7294	壺	口縁	-	-	ハナ斜ナデ, 横ナデ	ハナ斜ナデ→ 横ナデ	-	にぶい-橙	普通	○	○	○	○	○	○	○	スス, 輝石	
257	1411	F53	Ⅱ	15879	壺	口縁	-	-	ハナ横ナデ, 横ナデ	ヘラナデ	-	暗赤紫	普通	○	○	○	○	○	○	○	-	
257	1412	D48	Ⅱ	7725	壺	口縁-胴	19.4	-	ヘラ横ナデ	ヘラ横ナデ	凹線	灰白, にぶい-赤 灰白	普通	○	○	○	○	○	○	○	○	輝石
257	1413	D47	Ⅱ	7298	壺	口縁-胴	-	-	ヘラ横ナデ	ヘラ横-縦ナ デ	凹線	赤紫	普通	○	○	○	○	○	○	○	○	スス
257	1414	I52	Ⅱ	2229	壺	口縁-胴	-	-	ヘラ横ナデ	ヘラ横ナデ	凹線	赤紫 にぶい-橙	良好	○	○	○	○	○	○	○	○	スス
258	1415	H38	Ⅱ a	13543	壺	口縁-胴	-	-	ハナ横ナデ	ヘラ横ナデ	凹線, 磨 蝕痕, 灰文	赤	良好	○	○	○	○	○	○	○	○	-
258	1416	S13	①	-	壺	口縁	-	-	ヘラ横ナデ	-	凹線, 磨 蝕痕, 灰文	にぶい-赤紫	普通	○	○	○	○	○	○	○	○	-
258	1417	K51	Ⅱ c	3775	壺	口縁	-	-	ヘラ横ナデ	ヘラ横ナデ	凹線, 洗 滌	にぶい-赤	普通	○	○	○	○	○	○	○	○	スス
258	1418	I50	Ⅱ	-	壺	柄	-	-	丁家ヘラナ デ	丁家ヘラナ デ	流紋文	灰褐色 にぶい-橙	普通	○	○	○	○	○	○	○	○	-

順 番	図 号	出 土 位置	部位	取上 番号	器 種	部 位	口 径 (cm)	底 径 (cm)	面		文 様	出 土 内 容	焼 成	胎 土				備 考			
									外	内				白 石	赤 石	黒 石	灰 石				
																			外	内	
256	1419	E52	Ⅱ	9402	甕	口縁	-	-	へら様ナデ	へら様ナデ	-	江ふい	普通	○	○	○	○	○	○	スス	
258	1420	J52	Ⅱ	-	甕	口縁	-	-	へら様ナデ	へら様ナデ	-	江ふい	普通	○	○	○	○	○	○	-	
258	1421	K51	Ⅱ	674	甕	口縁	-	-	丁寧なへら様ナデ	丁寧なへら様ナデ	-	灰赤 明赤	良好	○	○	○	○	○	○	輝石	
258	1422	G43	Ⅱ b	12629	甕	口縁	-	-	様ナデ	様ナデ	四條	灰黒	普通	○	○	○	○	○	○	-	
258	1425	E42, H42	Ⅱ a, Ⅱ a	8862	甕	口縁-胴	36.6	-	ハナナデ	ハナナデ	-	黒	普通	○	○	○	○	○	○	縦割断面	
258	1424	H42	Ⅱ a	8884	甕	口縁	-	-	ナデ	ナデ	-	江ふい	普通	○	○	○	○	○	○	縦割断面	
258	1425	J54	Ⅰ	-	甕	口縁	-	-	へら様ナデ	へら様ナデ	-	江ふい	普通	○	○	○	○	○	○	スス, 縦割断面	
258	1426	G43	Ⅱ b	11809	甕	口縁	-	-	ナデ	ナデ	-	黒	普通	○	○	○	○	○	○	縦割断面	
258	1427	G42	Ⅱ b	10007	甕	口縁	-	-	ナデ	ナデ	-	灰赤黒へ 江ふい	普通	○	○	○	○	○	○	縦割断面	
258	1428	G42	Ⅱ b	-	甕	口縁	-	-	様ナデ	様ナデ	-	江ふい	普通	○	○	○	○	○	○	縦割断面	
258	1429	G44	Ⅱ b	14590	甕	口縁	-	-	ハナ様ナデ	へら様ナデ	-	灰黒 江ふい	普通	○	○	○	○	○	○	縦割断面	
259	1430	D49	Ⅱ	7764	甕	口縁-胴	32.0	-	へら様ナデ	へら様ナデ	四條, 3条突 出	灰灰	普通	○	○	○	○	○	○	輝石	
259	1431	H38	Ⅱ a	13563	甕	口縁-胴	31.0	-	へら様ナデ	様ナデ→斜ナデ	四條, 2条突 出	江ふい	普通	○	○	○	○	○	○	-	
259	1432	I, H43	Ⅱ a-b	13406	甕	口縁-胴	27.1	-	ハナ様ナデ, 様ナデ	様ナデ	四條, 3条突 出	江ふい	普通	○	○	○	○	○	○	-	
259	1433	H43	Ⅱ a	13351	甕	口縁	27.0	-	ハナ様ナデ→ 様ナデ	ハナ様ナデ	四條, 3条突 出	江ふい	普通	○	○	○	○	○	○	-	
259	1434	L37	Ⅱ	23271	甕	口縁	25.5	-	様ナデ	様ナデ	四條, 3条突 出	江ふい	普通	○	○	○	○	○	○	-	
259	1435	D48	Ⅱ	7722	甕	口縁	20.0	-	-	へら様ナデ	四條, 3条突 出	江ふい	良好	○	○	○	○	○	○	磨粒, スス, 輝石	
259	1436	J52	Ⅱ	2236	甕	口縁	31.2	-	へら様ナデ	へら様ナデ	四條, 2条突 出	江ふい	普通	○	○	○	○	○	○	スス	
260	1437	H43	Ⅰ a, Ⅰ b	13282	甕	口縁-胴	29.2	-	ハナ様ナデ, 様ナデ	ハナ様ナデ	四條, 3条突 出	黒	普通	○	○	○	○	○	○	赤石	
260	1438	E-G, H44	Ⅱ, Ⅱ b	14271	甕	口縁-胴	24.0	-	へら様ナデ, 様ナデ	へら様ナデ	四條, 2条突 出	江ふい	普通	○	○	○	○	○	○	スス, 赤石	
260	1439	E44	Ⅱ b	17086	甕	口縁-胴	20.6	-	ハナ様ナデ, 様ナデ	ハナ様ナデ, 様ナデ	四條, 2条突 出	江ふい	良好	○	○	○	○	○	○	スス	
260	1440	G43	Ⅱ b	12188	甕	口縁	29.2	-	へらナデ	ハナ	四條, 1条突 出	江ふい	普通	○	○	○	○	○	○	-	
260	1441	H43	Ⅱ a-b	13333	甕	口縁-胴	26.6	-	ハナ様ナデ→ へらナデ	へら様ナデ	四條, 3条突 出	暗赤	普通	○	○	○	○	○	○	長石	
260	1442	F53	Ⅱ	9383	甕	完形	20.5	5-5.2	ハナナデ, 様 斜ナデ	ハナナデ	1条突出	赤, 灰赤	普通	○	○	○	○	○	○	コゲ, スス, 灰赤 磨粒, 珪石	
263	1443	I40	Ⅱ a	9190	甕	脚台	-	6.3	ハナ様ナデ	ナデ	-	江ふい	普通	○	○	○	○	○	○	-	
263	1444	G41, H42	Ⅱ, Ⅱ b	12007	甕	脚台	-	6.6	ハナナデ, 脚 オケ	ハナナデ	-	黒	普通	○	○	○	○	○	○	-	
263	1445	I53	Ⅱ	5747	甕	脚台	-	7.0	ハナナデ	ハナナデ	-	江ふい	普通	○	○	○	○	○	○	-	
263	1446	F42	Ⅱ b	11106	甕	脚台	-	8.0	ハナ様ナデ	-	-	江ふい	普通	○	○	○	○	○	○	摩粒	
263	1447	K51	Ⅱ c	3372	甕	脚台	-	7.5	へら様ナデ	へらナデ	-	灰黒 灰灰	普通	○	○	○	○	○	○	○	-
263	1448	H43	Ⅱ a	13374	甕	脚台	-	6.2	様ナデ	ナデ	-	灰赤	良好	○	○	○	○	○	○	底ナデ, 白粉	
263	1449	H42	Ⅱ b	10265	甕	脚台	-	7.4	へら様ナデ	-	-	赤	良好	○	○	○	○	○	○	長石	
263	1450	G53	Ⅰ	-	甕	脚台	-	6.7	へら様ナデ	へらナデ	-	赤	良好	○	○	○	○	○	○	-	
263	1451	D48	Ⅱ	7720	甕	脚台	-	5.5-7.5	へらナデ	へらナデ	-	江ふい	良好	○	○	○	○	○	○	-	
263	1452	D50	Ⅰ	-	甕	脚台	-	6.5	へらナデ	へらナデ	-	明灰	普通	○	○	○	○	○	○	コゲ	
263	1453	K52	Ⅱ, Ⅱ c	3308	甕	脚台	-	6.5	ハナ様ナデ	へら様ナデ	-	江ふい	良好	○	○	○	○	○	○	○	磨粒
263	1454	F42	Ⅱ a	13519	甕	脚台	-	6.5	様ナデ	ナデ	-	江ふい	良好	○	○	○	○	○	○	○	-
263	1455	E52	V b	12002	甕	脚台	-	6.0	ハナナデ	ナデ	-	赤 黒	良好	○	○	○	○	○	○	○	-
263	1456	F53	Ⅱ	9214	甕	脚台	-	6.2	へら様ナデ	へら様ナデ	四條	江ふい	普通	○	○	○	○	○	○	○	-
263	1457	D48	Ⅱ	7779	甕	脚台	-	3.5	へらナデ	へらナデ	四條	江ふい	良好	○	○	○	○	○	○	○	角閃石
263	1458	F33	Ⅱ	14885	甕	脚台	-	7.6	へら様ナデ	へら様ナデ	四條	江ふい	良好	○	○	○	○	○	○	○	角閃石
263	1459	G45	Ⅱ b	14792	甕	脚台	-	6.4	ハナ様ナデ	ナデ	四條	江ふい	普通	○	○	○	○	○	○	○	-
263	1460	-	灰土	-	甕	脚台	-	8.0	-	ナデ	四條	江ふい	普通	○	○	○	○	○	○	○	磨粒
263	1461	D48	Ⅱ	7732	甕	脚台	-	7.8	ハナナデ	へらナデ	四條	江ふい	普通	○	○	○	○	○	○	○	磨粒
263	1462	J38	Ⅱ b	23003	甕	脚台	-	7.4	-	-	四條	江ふい	良好	○	○	○	○	○	○	○	磨粒, 赤石
263	1463	D48	Ⅱ	7780	甕	脚台	-	6.2	へら様ナデ	へら様ナデ	四條	赤 黒	普通	○	○	○	○	○	○	○	磨粒
263	1464	I43	Ⅱ b	10925	甕	脚台	-	7.5	へら様ナデ	-	四條	江ふい	普通	○	○	○	○	○	○	○	-
263	1465	F42	Ⅱ a	9606	甕	脚台	-	7.3	ハナ様ナデ	へら様ナデ	四條	江ふい	普通	○	○	○	○	○	○	○	-
263	1466	G42	Ⅱ b	10802	甕	胴-脚台	-	7.2	ハナ様ナデ	-	四條	明赤 明灰	良好	○	○	○	○	○	○	○	磨粒, スス
262	1467	○-S37	①	28110	蓋	つまみ-胴	5.4	-	ハナ様ナデ, 様ナデ	ナデ	-	江ふい	普通	○	○	○	○	○	○	○	-
262	1468	F33	Ⅱ	9421	甕	口縁	22.0	-	丁寧な様ナデ	丁寧な様ナデ	突出	灰黒	良好	○	○	○	○	○	○	○	スス, 輝石
262	1469	D50	Ⅰ	-	甕	口縁	-	-	へら様ナデ	へら様ナデ	M字突出	江ふい	普通	○	○	○	○	○	○	○	輝石

順 号	図 号	出 土 位置	層 位	取 上 番号	器 種	部 位	口 径 (cm)	底 径 (cm)	面		文 様	出 土 内 容	焼 成 色	土					備 考		
									外	内				白 石	赤 石	黒 石	灰 石	黒 石		灰 石	黒 石
202	1470	H42	Ⅱ b	14172	蓋	13線	-	-	横ナテ	横ナテ	-	にぶい	○	○	○	○	○	○	-		
202	1471	H50	I	-	蓋	13線	-	-	横ナテ	横ナテ	突起	にぶい	○	○	○	○	○	○	スス、輝石		
202	1472	D49	Ⅱ	-	蓋	13線	-	-	丁家なへウナテ、横ミギ	丁家なへウナテ	突起	赤、 明赤	○	○	○	○	○	○	輝石		
202	1473	K52	Ⅱ	2199	蓋	13線	-	-	横ナテ	横ナテ	突起	赤	○	○	○	○	○	○	-		
202	1474	C50	Ⅱ a	-	蓋	13線	-	-	ハケナテ	ハケナテ	突起	赤	○	○	○	○	○	○	-		
202	1475	K52	Ⅱ a	2272	蓋	13線	-	-	横ナテ	横ナテ	-	にぶい	○	○	○	○	○	○	輝石		
202	1476	L37	Ⅱ a	22670	蓋	13線	11.8	-	横ナテ	横ナテ	凹線、凹孔	灰	○	○	○	○	○	○	細砂質土		
203	1477	F43-53、 H42	Ⅱ、Ⅱ b	9307 他	大型蓋	13線-1線	56.8	-	ハケナテ、 横ナテ	ハケナテ、 横ナテ	凹線、M字突起	赤	○	○	○	○	○	○	スス		
203	1478	Ⅱ S13、 H38-20	Ⅱ a	13629 他	大型蓋	13線	54.8	-	横ナテ	横ナテ	凹線、突起	赤	○	○	○	○	○	○	-		
203	1479	C50	Ⅱ b	-	大型蓋	13線	-	-	横ナテ	横ナテ	凹線	赤	○	○	○	○	○	○	-		
203	1480	D50	I	-	大型蓋	13線-1線	-	-	横ナテ	横ナテ	2条突起	にぶい	○	○	○	○	○	○	-		
204	1481	F41-43	Ⅱ b	10788 他	蓋	13線-1線	15.0	-	ハケナテ、 横ナテ	ハケナテ	凹線	明赤	○	○	○	○	○	○	-		
204	1482	D47	Ⅱ	7299	蓋	13線-1線	19.0	-	ハケナテ	ハケナテ	凹線	赤	○	○	○	○	○	○	スス、輝石		
204	1483	G44	Ⅱ b、Ⅱ	13068 他	蓋	13線-1線	17.5	-	ハケナテ	ハケナテ	-	にぶい	○	○	○	○	○	○	スス		
204	1484	I54	Ⅱ	3257	蓋	13線	15.0	-	ハケナテ	ハケナテ	凹線	赤	○	○	○	○	○	○	-		
204	1485	F53	Ⅱ	9230	蓋	13線	19.8	-	ハケナテ	ハケナテ	凹線	赤、 明赤	○	○	○	○	○	○	-		
204	1486	K52	Ⅱ c	3316	蓋	13線	-	-	丁家ナテ	丁家ナテ	凹線	赤	○	○	○	○	○	○	-		
204	1487	K32	Ⅱ	2155	蓋	13線	18.0	-	ハケナテ	ハケナテ	突起	にぶい	○	○	○	○	○	○	-		
204	1488	D48	Ⅱ	-	蓋	13線	10.8	-	横ナテ	横ナテ	-	にぶい	○	○	○	○	○	○	-		
204	1489	E47	Ⅱ	7067	蓋	13線	-	-	横ナテ	横ナテ	凹線	赤	○	○	○	○	○	○	摩粒		
204	1490	C50	I	-	蓋	13線	-	-	横ナテ	横ナテ	凹線、3条突起	にぶい	○	○	○	○	○	○	輝石		
205	1491	中SD7、 H39	Ⅱ a、Ⅱ b	-	蓋	13線-1線	20.1	-	ハケナテ、 横ナテ	ハケナテ、 横ナテ	二又状口縁	にぶい	○	○	○	○	○	○	-		
205	1492	E-P41	Ⅱ	11223	蓋	13線	22.0	-	丁家なへウナテ	横ミギ	凹線、二又状口縁	灰	○	○	○	○	○	○	-		
205	1493	C51	I	-	蓋	13線	-	-	横ナテ	横ナテ	二又状口縁、 ハナ折	にぶい	○	○	○	○	○	○	輝石		
205	1494	E42	Ⅱ a	9901	蓋	13線	18.4	-	ハケナテ	横ナテ	凹線	にぶい	○	○	○	○	○	○	潤滑		
205	1495	G44	Ⅱ b	14365	蓋	13線-1線	6.9	-	横ミギ、ナテ	ハケナテ、横ナテ	凹線、2条突起	明赤	○	○	○	○	○	○	長石		
205	1496	E45	Ⅱ b	15620 他	蓋	13線-1線	12.4	-	横ナテ	丁家なへウナテ	凹線、1条突起	赤	○	○	○	○	○	○	細砂質土、長石		
205	1497	G43	Ⅱ a-b	9032 他	蓋	13線	13.2	-	横ナテ	横ナテ	凹線	赤	○	○	○	○	○	○	-		
205	1498	G43	Ⅱ b	11825 他	蓋	13線	16.4	-	丁家なへウナテ	ハケナテ	穿孔2箇所	赤	○	○	○	○	○	○	-		
205	1499	G42	Ⅱ b	10884 他	蓋	13線	18.0	-	横ナテ	横ナテ	4条沈線	明赤	○	○	○	○	○	○	-		
205	1500	H43	Ⅱ b	11862 他	蓋	13線	-	-	横ナテ	横ナテ	4条沈線	にぶい	○	○	○	○	○	○	-		
205	1501	G49	Ⅱ a	8910	蓋	13線	-	-	横ナテ、横ナテ	横ナテ	5条沈線	にぶい	○	○	○	○	○	○	-		
205	1502	I53	Ⅱ	-	蓋	13線	-	-	横ナテ	横ナテ	無底	赤	○	○	○	○	○	○	輝石		
205	1503	中SD7	①	25354 他	蓋	13線	-	-	横ナテ、ナテ	横ナテ、ナテ	無底	にぶい	○	○	○	○	○	○	スス		
205	1504	H43、44	Ⅱ b	14371 他	蓋	13線	-	-	横ミギ	ナテ	穿孔	にぶい	○	○	○	○	○	○	-		
205	1505	中SK3	①	24468 他	蓋	13線-1線	8.4	-	横ナテ、横ナテ	横ナテ	-	にぶい	○	○	○	○	○	○	-		
206	1506	H43	Ⅱ a-b	14128 他	蓋	13線	-	-	丁家なへウナテ	丁家なへウナテ	7条突起	明赤	○	○	○	○	○	○	赤石		
206	1507	F41	Ⅱ b	11235	蓋	13線	-	-	横ナテ	ナテ	4条突起	にぶい	○	○	○	○	○	○	-		
206	1508	D51	I	-	蓋	底	-	4.6、 5.0	横ナテ	横ナテ	-	にぶい	○	○	○	○	○	○	摩粒、角閃石		
206	1509	L37	Ⅱ b	26765 他	蓋	底	-	8.4	横ナテ	-	-	赤	○	○	○	○	○	○	-		
206	1510	D48	Ⅱ	7706	蓋	底	-	8.0	ハケナテ	-	-	にぶい	○	○	○	○	○	○	潤滑、木炭		
206	1511	E40	Ⅱ b	15380	蓋	底	-	6.0	横ナテ	横ナテ	-	赤	○	○	○	○	○	○	スス		
206	1512	H43	Ⅱ b	13616	蓋	底	-	6.0	横ナテ	ナテ	-	赤	○	○	○	○	○	○	潤滑		
206	1513	G51	I	-	蓋	底	-	7.0	横ナテ	横ナテ	-	にぶい	○	○	○	○	○	○	潤滑		
206	1514	G51	I	-	蓋	胴下半一底	-	7.5	横ナテ	横ナテ	-	にぶい	○	○	○	○	○	○	潤滑		
206	1515	D48	Ⅱ	7175 他	蓋	底	-	6.7	丁家なへウナテ	横ナテ	-	明赤	○	○	○	○	○	○	潤滑		
206	1516	H43-44	Ⅱ b	14133 他	蓋	底	-	4.2	横ナテ	丁家なへウナテ	-	赤、 明赤	○	○	○	○	○	○	底、ハケナテ、 ナテ		
206	1517	C50	Ⅱ b	-	蓋	底	-	5.8	丁家なへウナテ	丁家なへウナテ	-	にぶい	○	○	○	○	○	○	-		
206	1518	SD36	①	25365	蓋	底	-	3.5	横ミギ	-	-	にぶい	○	○	○	○	○	○	摩粒		
206	1519	H43	Ⅱ b	12573 他	蓋	底	-	5.6	丁家なへウナテ	丁家なへウナテ	-	明赤	○	○	○	○	○	○	-		
206	1520	F43	Ⅱ b	11093	蓋	底	-	10.2	ハケナテ	横ナテ	-	赤	○	○	○	○	○	○	長石、底、 ナテ		
206	1521	D41	Ⅱ b	12941	蓋	底	-	10.4	ハケナテ	横ナテ	-	赤	○	○	○	○	○	○	底、ハケナテ		
206	1522	F41	Ⅱ b	11296	蓋	底	-	7	横ナテ	横ナテ	-	赤	○	○	○	○	○	○	長石		

国庫 番号	出土地 番号	部位	取上 番号	器種	部位	口径 (cm)	直径 (cm)	厚さ		重量 (g)	出所 内	構成	土					備考	
								外	内				白 土	赤 土	黒 土	灰 土	黒 土		
																			外
306	1523	G31	I	-	帯	底	-	5.7			明治期 に払い出 された	普通	○	○	○	○	○	○	角四角、底：圧
307	1524	G44	II b	13670	鉢	口縁～胴	19.4	-			に払い出 された	普通	○	○	○	○	○	○	ス
307	1525	D-E42	I, II b	11088	鉢	口縁	15.4	-			に払い出 された	普通	○	○	○	○	○	○	-
307	1526	K52	II a	2148	鉢	完形	11.8	5.6			に払い出 された	普通	○	○	○	○	○	○	角四角、底：黒 土、器高：1.1
307	1527	F42	II b	9227	鉢	口縁	-	-			に払い出 された	普通	○	○	○	○	○	○	-

第 21 表 縄文時代晩期～弥生時代西部石器観察表

国庫 番号	出土地 番号	部位	取上 番号	器種	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	出所 内	構成	土					備考					
											石	材									
																				外	内
309	1528	L28	II a	34143	打撃石	1.9	1.7	0.4	0.8	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	角四角、底：圧	
309	1529	F31	II a	40281	打撃石	1.8	1.5	0.2	0.6	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	ス
309	1530	F30	II a	38938	打撃石	1.6	1.3	0.4	0.6	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	-
309	1531	E31	II a	38830	打撃石	1(2)	1.8	0.5	0(9)	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	角四角、底：黒 土、器高：1.1
309	1532	φS208	①	23279	打撃石	1(1)	1(4)	0(2)	0(3)	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	-
309	1533	G31	II a	39671	打撃石	1(0)	1(2)	0(2)	0(2)	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	-
309	1534	G31	II a	-	打撃石	0(8)	1(3)	0(3)	0(3)	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	-
309	1535	F30	II b	37306	打撃石	2.0	1.3	0.4	0.9	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	-
309	1536	G31	II a	29019	打撃石	1(7)	1(2)	0(3)	0(5)	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	-
309	1537	E30	II a	38972	打撃石	1.6	1.2	0.3	0.4	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	-
309	1538	F31	II b	39336	打撃石	1(6)	1(2)	0(4)	0(6)	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	-
309	1539	G31	II a	40575	打撃石	1(1)	1(1)	0(4)	0(5)	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	-
309	1540	E30	II a	38185	打撃石	1(4)	1(4)	0(3)	0(5)	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	-
309	1541	F26	焼瓦	-	打撃石	2(0)	1(5)	0(3)	0(7)	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	-
309	1542	E31	II a	38828	打撃石	1.9	1.5	0.4	0.6	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	-
309	1543	E30	II a	38963	打撃石	1.6	1(4)	0(3)	0(4)	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	-
309	1544	E30	II a	38173	打撃石	1.5	1.5	0(3)	0(5)	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	-
309	1545	C28	II b	17216	打撃石	1(5)	1(2)	0(2)	0(3)	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	-
309	1546	K30	II a	23726	打撃石	1.6	1(4)	0(3)	0(4)	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	-
309	1547	F31	II a	38788	打撃石	1(4)	1(4)	0(4)	0(5)	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	-
309	1548	K28	II a	24403	打撃石	1(0)	1(3)	0(3)	0(4)	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	-
309	1549	G34	-	-	打撃石	1(4)	1.6	0(4)	0(8)	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	-
309	1550	J35	II a	35395	打撃石	2.5	1.6	0.5	1.4	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	-
309	1551	K29	II a	28867	打撃石	1.7	1.1	0(3)	0(5)	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	-
309	1552	G27	II b	20170	打撃石	1.8	1(3)	0(3)	0(4)	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	-
309	1553	F31	II a	40077	打撃石	1(4)	1(4)	0(3)	0(5)	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	-
309	1554	F31	II a	40465	打撃石	1(3)	1(4)	0(4)	0(6)	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	-
309	1555	G30	II b	31067	打撃石	1(0)	1(6)	0(3)	0(4)	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	-
309	1556	E30	II a	38177	打撃石	0(9)	1(7)	0(3)	0(3)	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	-
309	1557	F31	II b	38926	打撃石	0(7)	1(5)	0(3)	0(3)	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	-
309	1558	J30	II a	28914	打撃石	1.6	1.9	0(3)	0(6)	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	-
309	1559	H29	II a	32809	打撃石	2(8)	2(2)	0(5)	2(2)	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	-
309	1560	F30	II a	38241	打撃石	2(1)	1(3)	0(4)	0(9)	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	-
309	1561	J30	II a	31869	打撃石	1(4)	1(4)	0(3)	0(5)	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	-
309	1562	G31	II a	38669	打撃石	1.5	1.2	0(3)	0(4)	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	-
309	1563	G31	II a	30327	打撃石	1.3	1.1	0(3)	0(3)	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	-
309	1564	G32	II b	39519	打撃石	1(6)	1(0)	0(4)	0(4)	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	-
309	1565	H30	II a	32699	打撃石	1(6)	1(4)	0(4)	0(5)	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	-
309	1566	E30	II a	38169	打撃石	1(5)	1(0)	0(3)	0(3)	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	-
309	1567	G31	II b	31131	打撃石	0(9)	1(1)	0(2)	0(2)	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	-
309	1568	E31	II a	19566	磨製石	2(5)	1(4)	0(2)	0(9)	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	-
309	1569	J29	II a	28764	磨製石	2(2)	2(0)	0(2)	0(6)	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	-
309	1570	J29	II b	27212	磨製石	2(6)	2(0)	0(2)	1(3)	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	-
309	1571	J29	II b	27224	磨製石	2(4)	1(7)	0(2)	0(7)	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	-
309	1572	F25	II b	-	磨製石	2(6)	1(8)	0(2)	0(9)	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	-
309	1573	K30	II a	28297	磨製石	2(9)	2(2)	0(3)	1(9)	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	-
309	1574	H31	II a	28437	磨製石	4(0)	2(5)	0(3)	3(8)	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	-
309	1575	H36	IV a	36380	磨製石	2(8)	2(8)	0(4)	1(3)	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	-
309	1576	F31	II b	37119	石	4(5)	5(8)	1(1)	21(1)	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	-
309	1577	H30	II a	24013	石	4(2)	3(5)	0(6)	9(5)	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	-
309	1578	J36	II a	29169	石	4(4)	8(5)	0(9)	40(7)	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	-
309	1579	F32	II b	16467	石	15(0)	17(9)	0(7)	124(9)	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	-
309	1580	F26	II a	19435	磨製石	7(9)	5(3)	1(1)	35(8)	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	-
309	1581	D21	II a	17965	磨製石	6(7)	3(1)	0(7)	14(1)	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	-
309	1582	F31	II a	40499	磨製石	1(5)	4(1)	0(9)	5(3)	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	-
309	1583	J30	II a	28869	二六加工 石	2(9)	2(0)	0(7)	3(3)	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	-
309	1584	φS15	①	37313	石	1(5)	1(2)	0(3)	0(4)	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	-
309	1585	G31	II a	33401	石	1(3)	1(2)	0(4)	0(4)	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	-

採出 番号	出上 位置	採出 位置	取上 番号	品 種	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	石 材	備 考	
272	1586	E30	Ⅱ a	38187	石膏	2.1	1.4	0.5	1.1	御堂山前	
272	1587	I31	Ⅱ a	32240	石膏	2.4	1.7	0.5	1.4	チート	
272	1588	F30	Ⅱ a	38347	石膏	2.0	1.1	0.6	0.7	岩層	
272	1589	F30	Ⅱ a	38350	石膏	2.3	1.0	0.6	1.3	御堂山前	
272	1590	E22	Ⅱ a	19825	石膏	3.4	1.7	1.5	4.8	御堂山前	
272	1591	G31	Ⅱ a	27280	石膏	3.4	0.9	0.8	2.3	御堂山前	
272	1592	H32	Ⅱ a	32965	石膏	12.20	0.9	0.9	11.60	岩層	
272	1593	F31	Ⅱ a	38287	硬石膏	1.8	1.4	0.7	1.2	岩層	
272	1594	F31	Ⅱ a	40079	硬石膏	1.1	1.4	0.6	0.6	岩層	
272	1595	D07	Ⅱ b	20957	石膏	9.2	5.6	3.1	150.0	黒色山前	
272	1596	J23	Ⅱ b	18238	石膏	4.9	4.5	3.8	68.9	岩層	
272	1597	G32	Ⅱ b	-	石膏	1.8	2.3	2.2	6.5	鉄石塊	
272	1598	F27	Ⅱ b	18888	硬方晶石	6.0	12.5	2.6	174.6	砂	
272	1599	G30	Ⅱ a	33354	硬方晶石	6.4	11.6	1.7	102.5	ホルンフェルス	
272	1600	I31	Ⅱ a	33152	硬方晶石	6.7	9.4	1.3	64.3	ホルンフェルス	
272	1601	E24	Ⅱ a	20047	硬方晶石	5.1	9.4	1.1	26.3	ホルンフェルス	
272	1602	J31	Ⅱ a	33094	硬方晶石	5.9	14.4	0.7	14.9	頁岩	
272	1603	I30	Ⅱ a	33193	硬方晶石	5.6	5.6	1.2	32.8	頁岩	
272	1604	F28	I	18811	石膏	4.1	1.4	0.9	19.9	頁岩	
272	1605	K30	Ⅱ b	22968	硬石膏	12.7	5.6	2.1	199.0	ホルンフェルス	
272	1606	φ SD10	Ⅱ	22961	硬石膏	11.27	5.4	2.8	214.1	頁岩	
272	1607	E30	Ⅱ a	38393	硬石膏	16.3	4.6	2.0	71.7	ホルンフェルス	
272	1608	I36	Ⅱ a	29146	硬石膏	10.0	5.4	2.4	110.0	ホルンフェルス	
272	1609	φ SD5	①	17455	硬石膏	5.0	5.0	3.1	52.8	砂	
272	1610	F28	Ⅱ	19349	硬石膏	11.7	4.9	2.4	180.9	ホルンフェルス	
272	1611	J35	I	-	硬石膏	6.3	4.3	1.3	42.9	頁岩	
272	1612	J32	I	-	硬石膏	7.2	6.4	1.2	74.8	ホルンフェルス	
272	1613	L31	Ⅱ a	32270	硬石膏	5.8	4.3	0.9	29.2	ホルンフェルス	
272	1614	F31	Ⅱ b	38413	硬石膏	12.5	4.0	2.0	157.5	ホルンフェルス	
272	1615	F29	Ⅱ	23004	硬石膏	11.7	4.9	2.0	172.5	頁岩	
272	1616	J31	I	-	硬石膏	10.8	4.4	1.5	94.1	頁岩	
272	1617	J33	I	36275	硬石膏	8.1	4.0	1.2	47.8	ホルンフェルス	
272	1618	E26	Ⅱ b	20981	硬石膏	17.1	5.2	1.2	69.4	ホルンフェルス	
272	1619	I28	Ⅱ	23433	硬石膏	7.6	5.1	1.1	57.3	頁岩	
272	1620	L30	Ⅱ	31066	硬石膏	8.5	4.4	1.2	53.2	頁岩	
272	1621	I36	Ⅱ a	29191	硬石膏	14.5	5.6	1.2	142.5	ホルンフェルス	
272	1622	L31	Ⅱ a	32216	硬石膏	5.9	5.1	1.1	41.0	ホルンフェルス	
272	1623	I31	Ⅱ	28307	硬石膏	13.7	2.6	0.8	18.1	頁岩	
272	1624	J31	Ⅱ	30579	硬石膏	9.1	3.8	0.5	21.6	頁岩	
272	1625	K30	Ⅱ	23722	硬石膏	17.1	4.9	0.9	30.3	ホルンフェルス	
272	1626	I27	Ⅱ a	22427	打製石	5.0	4.8	1.7	149.9	ホルンフェルス	
272	1627	J28	Ⅱ	22844	打製石	11.5	5.4	2.2	158.1	頁岩	
272	1628	φ SD13	①	18706	打製石	10.2	5.1	2.0	105.8	ホルンフェルス	
272	1629	K36	Ⅱ a	23300	打製石	7.5	3.8	1.2	66.9	ホルンフェルス	
272	1630	K28	Ⅱ b	27774	打製石	10.9	5.5	1.8	149.6	頁岩	
272	1631	E33	Ⅱ b	16368	打製石	10.8	5.1	1.8	137.4	ホルンフェルス	
272	1632	H27	I	-	打製石	12.2	5.0	2.0	117.2	頁岩	
272	1633	F25	Ⅱ	-	打製石	9.4	6.0	1.8	112.8	ホルンフェルス	
272	1634	I31	Ⅱ	28280	打製石	11.3	6.0	2.2	175.7	頁岩	
272	1635	E22	Ⅱ	19666	打製石	18.3	8.9	2.5	353.0	ホルンフェルス	
272	1636	G25	I	18757	打製石	15.9	6.6	2.2	236.6	頁岩	
272	1637	K32	I	-	打製石	9.4	6.0	1.2	71.6	頁岩	
272	1638	J36	Ⅱ a	29286	打製石	12.0	7.5	1.5	121.4	ホルンフェルス	
272	1639	I26	I	17889	打製石	13.0	6.3	1.4	145.2	ホルンフェルス	
272	1640	F28	I	22011	打製石	14.2	11.7	2.1	388.3	頁岩	
272	1641	E26	Ⅱ a	22105	打製石	16.9	6.7	2.5	219.2	ホルンフェルス	
272	1642	H27	I	17894	打製石	13.8	6.2	1.5	156.1	頁岩	
272	1643	E26	Ⅱ a	19423	打製石	12.7	5.3	1.6	109.3	ホルンフェルス	
272	1644	K27	Ⅱ	24127	打製石	13.0	5.2	2.2	163.5	ホルンフェルス	
272	1645	E26	Ⅱ	20981	打製石	12.3	6.3	1.3	121.8	ホルンフェルス	
272	1646	G26	Ⅱ	21726	打製石	10.9	5.3	1.5	101.9	ホルンフェルス	
272	1647	G22	Ⅱ a	20308	打製石	9.9	3.4	1.0	61.7	ホルンフェルス	
272	1648	F32	Ⅱ a	40496	打製石	11.4	7.1	1.9	157.8	ホルンフェルス	
272	1649	D31	Ⅱ b	16689	打製石	5.9	4.9	1.1	32.4	ホルンフェルス	
272	1650	I36	Ⅱ a	29218	打製石	12.2	6.4	1.3	98.7	ホルンフェルス	
272	1651	G25	Ⅱ a	21066	打製石	15.3	7.4	1.9	255.7	頁岩	
272	1652	D26	Ⅱ a	19482	打製石	13.5	7.3	1.7	151.3	ホルンフェルス	
272	1653	φ SD5	①	17460	打製石	9.8	5.9	1.8	106.8	頁岩	
272	1654	F29	Ⅱ a	36389	打製石	14.5	8.7	2.2	306.1	ホルンフェルス	
272	1655	F32	Ⅱ b	16992	打製石	16.3	8.4	3.5	424.0	ホルンフェルス	
272	1656	φ SD5	①	17461	打製石	14.5	5.9	1.6	125.1	ホルンフェルス	
272	1657	H34	I	36274	打製石	11.8	5.5	2.0	138.4	ホルンフェルス	
272	1658	I31	Ⅱ a	32214	打製石	11.1	6.3	2.0	143.0	ホルンフェルス	
272	1659	H29	Ⅱ a	33384	打製石	12.6	7.2	1.6	177.1	頁岩	
272	1660	I30	Ⅱ a	31008	打製石	10.1	7.0	1.0	98.3	頁岩	
272	1661	φ SD5	②	17456	打製石	9.8	7.0	1.4	95.7	ホルンフェルス	
272	1662	F29	Ⅱ a	36388	打製石	18.1	11.7	2.1	443.0	ホルンフェルス	
272	1663	G27	I	17896	打製石	10.2	6.8	1.6	114.5	ホルンフェルス	
272	1664	F32	Ⅱ b	16468	打製石	11.3	7.5	2.6	183.1	ホルンフェルス	

河川 番号	河 川 名	出 土 位置	編年 記号	取上 番号	器 種	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	石 材	備 考
279	1665	H31	Ⅱ a	29618 他	打製石斧	15(6)	9(1)	1.9	254.6	ホルンフェルス	
280	1666	H30	Ⅱ a	31965	打製石斧	12(3)	9.4	1.9	246.8	ホルンフェルス	
281	1667	中SD5	Ⅱ	17463	打製石斧	9(1)	9(3)	2(2)	209.3	ホルンフェルス	
282	1668	H26	Ⅱ	23343	打製石斧	9(1)	9(7)	2(2)	187.5	ホルンフェルス	
283	1669	H27	Ⅱ	23369	打製石斧	12(4)	10(5)	2(5)	358.0	ホルンフェルス	
284	1670	H26	Ⅱ	21303	打製石斧	9(0)	9(7)	1(7)	110.5	貝類	
285	1671	E21	Ⅱ	19493	打製石斧	9(9)	8.1	1.0	99.2	ホルンフェルス	
286	1672	G26	Ⅱ b	20338	打製石斧	7(2)	10(3)	1(5)	125.8	ホルンフェルス	
287	1673	E31	Ⅱ b	16771	打製石斧	7(0)	5(3)	1(2)	51.4	ホルンフェルス	
288	1674	K29	Ⅱ a	28006	打製石斧	9(3)	9(0)	1(4)	73.4	ホルンフェルス	
289	1675	中SD5	①	17459	打製石斧	9(6)	9(9)	1(9)	129.5	貝類	
290	1676	F26	Ⅱ a	21454	打製石斧	9(4)	7(8)	2(0)	130.6	ホルンフェルス	
291	1677	K28	Ⅱ	23822	打製石斧	7(6)	5(2)	1(3)	57.3	ホルンフェルス	
292	1678	中SD5	①	17497	打製石斧	9(6)	5(1)	1(8)	98.7	貝類	
293	1679	F32	Ⅱ a	11399	打製石斧	11(8)	7(2)	1(6)	112.9	ホルンフェルス	
294	1680	E31	Ⅱ b	16861	打製石斧	7(6)	7(1)	1(7)	93.6	ホルンフェルス	
295	1681	F35	Ⅱ	-	打製石斧	7(5)	4(9)	1(6)	77.0	ホルンフェルス	
296	1682	I26	①	17226	打製石斧	6(6)	10(6)	1(8)	179.8	ホルンフェルス	
297	1683	中SD5	①	17471	打製石斧	9(9)	3(9)	2(0)	112.8	ホルンフェルス	
298	1684	中SD14	①	19451	打製石斧	5(7)	9(7)	1(7)	76.5	ホルンフェルス	
299	1685	古S14	①	37018	打製石斧	5(9)	9(0)	1(6)	60.5	ホルンフェルス	
300	1686	P2698	①	-	打製石斧	5(2)	9(9)	1(2)	54.9	ホルンフェルス	
301	1687	F31	Ⅱ a	40360	打製石斧	5(9)	9(3)	1(5)	99.3	貝類	
302	1688	E32	Ⅱ a	16217	打製石斧	5(4)	7(5)	1(5)	70.2	ホルンフェルス	
303	1689	E32	Ⅱ b	16256	打製石斧	5(3)	5(6)	1(8)	64.9	貝類	
304	1690	D31	Ⅱ b	16967	打製石斧	5(0)	5(1)	1(9)	53.2	ホルンフェルス	
305	1691	E31	Ⅱ b	16959	打製石斧	4(6)	9(4)	1(4)	51.2	貝類	
306	1692	E33	Ⅱ b	13928	打製石斧	7(4)	9(3)	1(7)	97.0	ホルンフェルス	
307	1693	H31	Ⅱ a	33010	打製石斧	11(2)	8.4	1.8	185.6	ホルンフェルス	
308	1694	F26	Ⅱ	19429	打製石斧	10(1)	7.1	1.0	77.7	貝類	
309	1695	中SD5	①	17464	打製石斧	6(9)	6(9)	1(0)	52.4	ホルンフェルス	
310	1696	L36	Ⅱ	23493	打製石斧	10(2)	7.5	1.9	159.1	ホルンフェルス	
311	1697	F30	Ⅱ b	37368	打製石斧	12(9)	5(3)	1(7)	117.5	貝類	
312	1698	I26	Ⅱ	23437	打製石斧	9(4)	5(2)	1(5)	68.4	ホルンフェルス	
313	1699	F31	Ⅱ a	38865	打製石斧	8(0)	6(7)	2(0)	91.5	ホルンフェルス	
314	1700	中SD13	①	19445	打製石斧	7(5)	12(0)	1(2)	101.7	ホルンフェルス	
315	1701	G27	Ⅱ a	22175	打製石斧	5(8)	11(7)	1(3)	77.7	ホルンフェルス	
316	1702	F31	Ⅱ a	40134	磨石	7.4	5.1	2.5	148.5	凝灰岩	
317	1703	D21	Ⅱ	19088	磨石	9.6	5.2	6.1	492.0	貝類	
318	1704	F32	Ⅱ b	39988	磨石	10.2	5.7	3.3	300.8	砂岩	
319	1705	K29	Ⅱ	25035	磨石	11(1)	3.9	2.4	142.4	ホルンフェルス	
320	1706	L30	Ⅱ a	33874	磨石	7(2)	5.7	4.6	263.3	砂岩	
321	1707	F26	I	18157	磨石	8.1	3.6	2.4	77.7	砂岩	
322	1708	中SD5	①	17501	磨石	7(5)	4(2)	2(6)	117.6	砂岩	
323	1709	F31	Ⅱ b	36860	磨石	5(3)	2.3	2.6	51.6	砂岩	
324	1710	H30	Ⅱ a	33457	磨石	11.7	8.2	5.4	818.5	安山岩	
325	1711	I26	Ⅱ	-	磨石・磨石類	8.3	7.5	4.5	379.3	安山岩	
326	1712	中地3	②	22968	磨石・磨石類	7.3	7.4	4.2	311.4	安山岩	
327	1713	I29	Ⅱ	24642	磨石・磨石類	6.3	6.4	2.2	152.9	花崗岩	
328	1714	H1	Ⅱ a	33170	磨石・磨石類	7(0)	9.8	4.5	439.0	花崗岩	
329	1715	G31	Ⅱ a	40577	磨石・磨石類	11.2	7.3	4.7	598.0	砂岩	
330	1716	K25 中地3	①	-	磨石・磨石類	9.9	8.7	4.2	423.0	凝灰岩	
331	1717	I28	Ⅱ	23322	磨石・磨石類	7.7	7.0	2.7	304.0	砂岩	
332	1718	E31・I27	Ⅱ・Ⅱ a	9070 他	磨石・磨石類	9(0)	9(5)	3.5	324.3	安山岩	
333	1719	E26	Ⅱ a	21548	磨石・磨石類	8.4	6.9	3.6	291.5	花崗岩	
334	1720	F27	Ⅱ	18603	磨石・磨石類	9(0)	9(3)	5(5)	473.0	砂岩	
335	1721	K29	Ⅱ	20311	磨石・磨石類	6.9	3(4)	2(0)	90.3	砂岩	
336	1722	I26	Ⅱ	19289	磨石・磨石類	4.5	4.3	3.2	83.9	砂岩	
337	1723	K29	Ⅱ	25908	磨石・磨石類	7(0)	5(2)	2(9)	153.0	安山岩	
338	1724	H26	I	18257	磨石・磨石類	5(2)	10(0)	5(9)	688.0	安山岩	
339	1725	E26	Ⅱ a	21361	磨石・磨石類	6(3)	9(1)	4(7)	304.4	砂岩	
340	1726	G26	Ⅱ	19228	磨石・磨石類	11.9	9.7	4.6	808.0	花崗岩	
341	1727	E21	Ⅱ	21138	磨石・磨石類	7(9)	11(0)	3.9	586.0	安山岩	
342	1728	G26	I	18886	磨石・磨石類	11(1)	7(2)	6.4	604.0	安山岩	
343	1729	G31	Ⅱ	31130	磨石・磨石類	9.9	8.8	4.7	510.0	砂岩	
344	1730	F23	I	-	磨石・磨石類	16(1)	19(2)	4(5)	363.8	砂岩	
345	1731	G30	Ⅱ a	32208	磨石・磨石類	8.4	6.5	6.3	387.0	凝灰岩	
346	1732	J35	Ⅱ b	36088	石皿・石台類	18.9	26.7	16.3	9630.0	砂岩	
347	1733	P27	Ⅱ b	30	石皿・石台類	16(8)	11(3)	7.9	2290.0	花崗岩	
348	1734	I26	Ⅱ	21423	石皿・石台類	14(5)	12(2)	7.3	1190.0	砂岩	
349	1735	I26	Ⅱ	19104	石皿・石台類	19(4)	12(0)	3(2)	680.0	砂岩	
350	1736	I27	Ⅱ	19000	石皿・石台類	14(8)	11(8)	5(0)	2180.0	花崗岩	
351	1737	F32	Ⅱ b	39943	石皿・石台類	9(3)	3(5)	14(7)	1502.0	砂岩	
352	1738	中SD7	①	30943	石皿・石台類	16(8)	3(5)	5(6)	402.7	花崗岩	
353	1739	G26	Ⅱ	21956	石皿・石台類	5(5)	9(7)	9(8)	576.0	凝灰岩	
354	1740	D28	Ⅱ	17132	磨石	9.6	10.2	8.4	903.7	砂岩	
355	1741	H30	Ⅱ a	33452	磨石	14.3	8.0	10.0	1304.9	砂岩	
356	1742	E26	Ⅱ	-	磨石	14(4)	9(3)	5(9)	906.0	砂岩	

探検 番号	出土 位置	層位	取上 番号	器 種	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	石	材	備 考
286	1743	H36	Ⅱ a	29040	磁石	(11.1)	7.4	4.8	(582.0)		砂岩
286	1744	中S105	Ⅰ	17468	磁石	(8.1)	5.6	3.6	(213.8)		砂岩
287	1745	H31	Ⅱ b	30928	磁石	(7.8)	(9.3)	(3.6)	(361.6)		砂岩
287	1746	G24	Ⅱ	21123	磁石	6.0	7.4	2.2	(163.7)		砂岩
287	1747	J22	Ⅱ	20276	磁石	(7.6)	(9.6)	1.9	(189.5)		砂岩
287	1748	L30	Ⅱ a	31874	磁石	9.6	8.4	3.1	(429.0)		砂岩
287	1749	K35	Ⅱ a	31674	磁石	9.6	5.4	2.3	(109.6)		砂岩
287	1750	F28	Ⅱ a	22521	磁石	9.3	7.0	1.5	(115.9)		砂岩
287	1751	H27	Ⅱ a	-	磁石	(8.8)	(7.0)	(1.6)	(104.3)		砂岩
287	1752	J36	Ⅱ a	29039	磁石	(9.5)	3.9	1.1	(47.0)		頁岩
287	1753	E26	Ⅱ	-	磁石	7.6	5.6	0.9	51.3		砂岩
287	1754	L30	Ⅱ	24705 他	磁石	(13.0)	(7.9)	(6.5)	(77.2)		砂岩
287	1755	F25	I	18480	磁石	6.4	4.0	1.4	26.6		片岩
287	1756	J28	I	-	磁石	(10.7)	4.6	2.1	(189.5)		砂岩
287	1757	K35	Ⅱ a	33124	磁石	5.2	2.4	2.0	45.1		砂岩
287	1758	L30	Ⅱ	24708	磁石	(4.9)	3.2	3.0	(79.3)		砂岩
287	1759	F29-G21	I・Ⅱ	23556 他	磁石	(5.4)	4.1	1.9	(51.9)		砂岩
288	1760	H29	Ⅱ a	33514	磁石	(5.1)	2.8	0.6	(10.6)		緑色片岩
288	1761	F32	Ⅱ a	11150	磁石	2.8	0.8	0.8	2.5		流石
288	1762	F31	Ⅱ a	40522	磁石	2.0	1.3	1.1	5.3		クワ石白雲母
288	1763	H34	I	-	磨石片岩	2.0	1.5	0.3	0.5		黒曜石
288	1764	E30	Ⅱ a	39044	磨石片岩	2.0	1.1	0.4	0.7		黒曜石
288	1765	F31	Ⅱ a	38679	磨石片岩	2.0	1.0	0.3	0.5		黒曜石
288	1766	E27	I	18322	磨石製品	15.6	11.5	7.4	(267.9)		磁石
288	1767	L26	I	-	磨石製品	17.1	11.9	10.3	(425.6)		磁石
288	1768	E25	Ⅱ a	21653	磨石製品	14.1	13.0	6.1	(375.7)		磁石
289	1769	F31	Ⅱ b	37111	磨石製品	11.1	11.4	6.0	(260.1)		磁石
289	1770	G31	Ⅱ	29080	磨石製品	12.2	9.6	5.8	(170.0)		磁石
289	1771	K25	Ⅱ	22001	磨石製品	(10.1)	11.6	9.4	(311.6)		磁石
289	1772	D36	Ⅱ b	-	磨石製品	8.1	7.5	3.0	40.4		磁石
289	1773	G31	Ⅱ	-	磨石製品	(7.9)	(4.2)	1.6	(13.0)		磁石
289	1774	F31	Ⅱ b	38422	磨石製品	(5.9)	(6.4)	2.8	(31.4)		磁石
289	1775	G25	I	-	磨石製品	(5.3)	(6.6)	(2.5)	(27.5)		磁石

第 22 表 縄文時代晩期～弥生時代東部出土石器観察表

探検 番号	出土 位置	層位	取上 番号	器 種	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	石	材	備 考
291	1776	G43	Ⅱ a	12669	打製石礫	2.3	(2.2)	0.5	(2.1)		巖密安山岩
291	1777	F42	Ⅱ a	9551	打製石礫	(1.6)	1.6	0.4	(1.0)		木蝋
291	1778	G42	Ⅱ b	12069	打製石礫	1.4	(1.4)	0.4	(0.5)		巖密安山岩
291	1779	F41	Ⅱ b	11260	打製石礫	(1.3)	1.6	0.4	(0.5)		巖密安山岩
291	1780	P573	-	-	打製石礫	(0.9)	1.4	0.2	0.3		黒曜石
291	1781	H38	Ⅱ b	13658	打製石礫	2.0	1.8	0.3	0.8		巖密安山岩
291	1782	H37	Ⅱ a	13309	打製石礫	1.9	1.8	0.3	0.8		巖密安山岩
291	1783	古S11	①	14586	打製石礫	1.6	1.6	0.3	0.5		巖密安山岩
291	1784	G42	Ⅱ b	11763	打製石礫	1.3	(1.2)	0.3	(0.3)		巖密安山岩
291	1785	F42	Ⅱ a	10249	打製石礫	(1.6)	(1.5)	0.3	(0.5)		黒曜石
291	1786	F42	Ⅱ a	9552	打製石礫	(1.5)	1.6	0.3	(0.5)		黒曜石
291	1787	G43	Ⅱ a	9502	打製石礫	(1.7)	(1.3)	0.3	(0.5)		木蝋
291	1788	F40	Ⅱ a	9502	打製石礫	(1.6)	(1.4)	0.3	(0.4)		巖密安山岩
291	1789	F42	Ⅱ b	11191	打製石礫	1.6	1.6	0.4	0.6		木蝋
291	1790	F53	Ⅱ	12889	打製石礫	3.5	1.8	0.5	2.2		木蝋
291	1791	中S107	①	36369	打製石礫	(1.9)	1.4	0.3	0.7		巖密安山岩
291	1792	G43	Ⅱ b	11782	打製石礫	(1.0)	1.5	0.3	0.4		黒曜石
291	1793	E48	Ⅱ	7114	打製石礫	1.9	1.3	0.2	0.4		巖密安山岩
291	1794	F40	Ⅱ	15579	打製石礫	2.2	1.6	0.3	0.6		巖密安山岩
291	1795	G45	Ⅱ b	14048	打製石礫	2.7	1.9	0.4	1.3		巖密安山岩
292	1796	H44	Ⅱ	-	打製石礫	(3.0)	2.1	0.8	(2.9)		チャート
292	1797	E48	Ⅱ	7111	打製石礫	1.8	1.2	0.3	0.5		チャート
292	1798	S1	Ⅱ	6706	打製石礫	1.9	1.7	0.3	0.5		黒曜石
292	1799	F42	Ⅱ b	11269	磨製石礫	3.0	1.7	0.3	1.4		頁岩
292	1800	中S11	①	7137	磨製石礫	(3.9)	(2.3)	0.3	(2.8)		頁岩
292	1801	H43	Ⅱ	9295	磨製石礫	2.9	2.5	0.3	2.4		頁岩
292	1802	H43	Ⅱ a	9509	磨製石礫	6.1	3.5	0.4	11.4		木蝋
292	1803	G43	Ⅱ b	12845	磨製石礫	15.0	3.8	0.8	(15.4)		頁岩
292	1804	G43	Ⅱ b	11786	石礫	2.0	1.3	0.4	0.9		木蝋
292	1805	G42	Ⅱ b	10983	微小網殻状薄片	1.5	1.8	0.4	0.7		木蝋
292	1806	D41	Ⅱ b	11072	微小網殻状薄片	3.7	3.9	0.8	7.1		チャート
292	1807	F42	Ⅱ	11628	石礫	8.3	(6.3)	0.7	(27.7)		ホルンフェルス
292	1808	G42	Ⅱ b	11699	石礫	10.0	4.9	0.9	49.3		ホルンフェルス
292	1809	古S11	①	14547	磨刀形石礫	3.5	6.7	1.0	20.7		頁岩
292	1810	中S107	①	-	石礫丁	3.7	(5.2)	8.1	(18.2)		ホルンフェルス
294	1811	J38	Ⅱ	23663	石礫丁	(5.5)	(4.2)	(0.8)	(18.8)		頁岩
294	1812	J42	I	-	磨製石礫	(8.7)	5.7	3.3	(245.9)		砂岩
294	1813	S3	Ⅱ	5819	磨製石礫	8.7	5.5	2.5	186.9		ホルンフェルス
294	1814	K52	Ⅱ	2184	磨製石礫	(4.5)	(3.9)	(1.4)	(18.1)		砂岩

採出地 番号	出上 位置	採出 層	取上 番号	採 種	長さ (m)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	石 材	備 考
294	1815	中SD7	①	37250	磨製石斧	(15.5)	(7.7)	2.1	(310.4)	ホルスフェルス
294	1816	中SD7	①	27991	磨製石斧	12.2	4.9	1.5	109.8	ホルスフェルス
294	1817	F45	Ⅱ	15870	磨製石斧	8.3	4.3	1.7	66.6	ホルスフェルス
294	1818	D48	Ⅰ	726	磨製石斧	9.9	3.3	1.0	33.2	頁岩
294	1819	G51	Ⅰ	-	打製石斧	12.4	5.3	1.6	139.4	頁岩
294	1820	中SD7	①	20685	打製石斧	14.2	5.9	2.1	173.4	ホルスフェルス
294	1821	H43	Ⅱ	14176	打製石斧	13.6	5.6	1.6	117.3	頁岩
295	1822	C51	Ⅰ	-	打製石斧	9.2	6.7	1.5	96.1	ホルスフェルス
295	1823	E42	Ⅱ	17027	打製石斧	9.6	7.2	1.1	89.6	ホルスフェルス
295	1824	E41	Ⅱ	10280	打製石斧	(7.7)	(7.3)	(1.3)	89.2	ホルスフェルス
295	1825	D40	Ⅱ	12973	打製石斧	6.0	(7.9)	(1.2)	(47.0)	ホルスフェルス
295	1826	D48	Ⅱ	7273	打製石斧	5.1	(8.7)	(1.7)	91.4	ホルスフェルス
295	1827	D40	Ⅱ	12974	打製石斧	(3.4)	(5.3)	(1.0)	(18.2)	頁岩
295	1828	中SD7	①	28010	打製石斧	(10.9)	11.3	2.1	(257.2)	ホルスフェルス
295	1829	J54	Ⅰ	-	打製石斧	(13.7)	(11.2)	2.3	(325.0)	頁岩
295	1830	F43	Ⅱ	12768	打製石斧	8.4	(6.5)	(1.9)	(116.7)	ホルスフェルス
295	1831	G43	Ⅱ	12258	打製石斧	(11.1)	(8.2)	(2.0)	(147.3)	ホルスフェルス
295	1832	中SD7	①	25316	打製石斧	5.9	(6.1)	(1.5)	67.5	ホルスフェルス
296	1833	中SD3	①	21463	打製石斧	9.0	(6.8)	(2.3)	(158.8)	ホルスフェルス
296	1834	J39	Ⅱ	12702	打製石斧	6.9	(6.4)	(1.7)	(81.7)	頁岩
296	1835	C51	Ⅰ	-	打製石斧	6.0	(5.5)	1.2	48.2	ホルスフェルス
296	1836	E53	Ⅱ	15873	打製石斧	(7.0)	(6.9)	(1.4)	(79.0)	ホルスフェルス
296	1837	F48	Ⅱ	7113	打製石斧	(7.1)	(4.5)	1.0	(47.0)	ホルスフェルス
296	1838	F43	Ⅱ	9838	打製石斧	(5.1)	(4.6)	(1.3)	(47.7)	ホルスフェルス
296	1839	F41	Ⅱ	9616	打製石斧	(8.1)	6.1	1.9	(106.9)	ホルスフェルス
296	1840	中SD7	①	-	打製石斧	(6.0)	(6.8)	(1.6)	(82.8)	ホルスフェルス
296	1841	F44	Ⅱ	15871	打製石斧	(11.5)	(5.8)	(1.5)	(91.7)	ホルスフェルス
296	1842	H52	Ⅱ	5817	礫石	10.8	5.7	3.8	342.8	砂岩
296	1843	J38	Ⅰ	-	礫石	8.9	6.3	4.5	367.4	砂岩
296	1844	I40	Ⅰ	-	礫石	10.1	2.7	1.6	70.7	砂岩
296	1845	K52	Ⅱ	-	礫石	5.6	3.4	1.9	56.2	砂岩
297	1846	FU107 K57-102	Ⅱ	11287 他	礫石・礫石類	(13.4)	(11.9)	(6.5)	(813.8)	砂岩
297	1847	F41	Ⅱ	9694	礫石・礫石類	11.4	9.2	6.2	878.3	花崗岩
297	1848	F42	Ⅱ	11184	礫石・礫石類	(6.7)	(4.9)	3.7	(128.2)	安山岩
297	1849	K52	Ⅱ	2206	礫石・礫石類	5.8	5.3	4.3	178.6	砂岩
297	1850	中SD3	①	11761	礫石・礫石類	11.7	11.1	5.9	1160.0	頁岩
297	1851	H43	Ⅱ	8798	礫石・礫石類	10.0	7.1	3.7	456.8	砂岩
297	1852	中SD7	①	25294	礫石・礫石類	(9.8)	(9.7)	(3.0)	(371.7)	安山岩
298	1853	J38	Ⅰ	33170	礫石・礫石類	(6.9)	(9.8)	(4.4)	(439.0)	花崗岩
298	1854	L47 P1072	①	-	礫石・礫石類	(6.2)	(10.5)	4.9	(413.2)	砂岩
298	1855	中SD3	①	13757	礫石・礫石類	(5.6)	(9.7)	(5.7)	(403.8)	花崗岩
298	1856	F53	Ⅱ	9439	礫石・礫石類	9.8	9.0	4.2	555.3	安山岩
298	1857	G53	Ⅱ	9222	石皿・宍石類	(19.2)	(16.7)	7.5	(3462.7)	花崗岩
298	1858	J54	Ⅰ	-	石皿・宍石類	(28.2)	21.8	5.5	(3700.0)	花崗岩
299	1859	H42	Ⅱ	13403	石皿・宍石類	23.3	22.8	8.6	6690.0	安山岩
299	1860	G42	Ⅱ	11657	石皿・宍石類	12.3	10.9	9.6	2099.7	砂岩
299	1861	中SD7	①	25298	石皿・宍石類	(11.4)	(12.0)	6.1	(1313.2)	安山岩
299	1862	F42	Ⅱ	11174	石皿・宍石類	(8.8)	(6.0)	(8.3)	(552.0)	礫石・頁岩
299	1863	E41	Ⅱ	11099	礫石	13.0	7.5	6.6	785.1	砂岩
299	1864	E42	Ⅱ	10064	礫石	(9.5)	(6.1)	3.1	(252.3)	砂岩
300	1865	G43	Ⅱ	12243	礫石	(9.6)	(9.7)	(3.4)	(488.0)	砂岩
300	1866	G43	Ⅱ	12557	礫石	(7.8)	(7.2)	5.8	(448.1)	砂岩
300	1867	C59	Ⅱ	-	礫石	7.4	9.7	6.3	568.0	砂岩
300	1868	E41	Ⅱ	11065	礫石	16.2	16.1	(2.3)	(136.0)	砂岩
300	1869	F41	Ⅱ	11261	礫石	(6.7)	(5.0)	(2.7)	(131.4)	砂岩
300	1870	J42	Ⅱ	15430	礫石	8.2	8.0	2.2	151.9	砂岩
300	1871	G42	Ⅱ	10979	礫石	6.4	5.0	2.4	80.9	砂岩
300	1872	G43	Ⅱ	11001	礫石	(5.7)	2.9	2.2	52.4	砂岩
300	1873	K52	Ⅱ	2363	礫石	4.2	3.4	1.8	43.3	砂岩
300	1874	F47	Ⅱ	-	礫石	4.5	2.6	1.2	18.7	砂岩
300	1875	J38	Ⅰ	-	礫石	8.6	6.3	2.2	95.4	頁岩
301	1876	E41	Ⅱ	11071	礫石製品	(13.2)	9.6	3.7	(108.8)	礫石
301	1877	E41	Ⅱ	15603	礫石製品	14.9	7.1	3.7	82.1	礫石
301	1878	E41	Ⅱ	11067	礫石製品	13.7	6.0	3.8	90.4	礫石
301	1879	E41	Ⅱ	15604	礫石製品	9.9	(8.3)	4.3	(57.2)	礫石
301	1880	J38	Ⅱ	25106	礫石製品	(7.9)	(8.4)	(5.4)	(67.9)	礫石
301	1881	E41	Ⅱ	12947	礫石製品	(6.4)	3.9	4.0	(39.8)	礫石
301	1882	I42	Ⅱ	9106	礫石製品	6.9	6.4	2.3	21.6	礫石

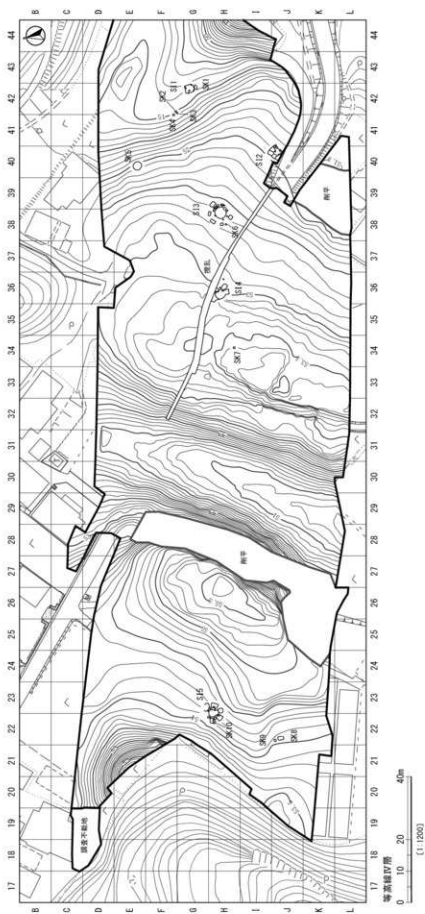
第3節 古墳時代の調査

1 概要 (第302図)

地形に関する概要は、前節のとおりである。

古墳時代に帰属すると判断した遺構は、堅穴住居跡5軒、土坑10基である。住居跡には花弁型住居と考えられるものもあったが、それらを含め、遺構は調査対象区内から散在して検出された。微地形とも関連しないように見受けられる。また、遺物については谷部に集中して出土する傾向にあったが、これは丘陵部が後世の削平を受けているための「見かけ」の分布状況である可能性がある。

遺物では、住居跡から主に東原式土器の特徴を有する資料が出土したが、従来の鹿児島県域で構築・活用されてきた枠組みに収まらない器形や器種構成も散見された。



第302図 古墳時代遺構配置図

2 遺構

(1) 竪穴住居跡 (S1)

竪穴住居跡 1号 (第303図～第306図 1883～1897)

G-42区のⅢb層で検出された。Ⅱb層の人力掘り下げ中に高坏などの成川式土器片が集中して出土しはじめたため、遺構の存在を想定して周辺一帯を精査することとした。しかし、Ⅱb層が黒色土であったことから遺構の検出は難航し、Ⅲb層まで下げて遺構(本住居跡並びに南接する土坑1号)のプランを確定した。

住居はやや小振りで、長軸2.8m、短軸2.4m、検出面からの深さは0.1mで、平面形はほぼ正方形を呈し、南側にわずかな張り出しを設ける。張り出し部と住居本体部分の床面に高低差はない。貼床については、張り出し部を含め確認できなかった。

柱穴は5本検出したが、位置関係が平面形状と若干ずれる状況であった。そのうち、P1並びにP3～4については、平面形の四隅に近い位置にあり間隔がほぼ一定であることと個々の規模や形状が類似することから、これら4本が主柱穴と考えられる。

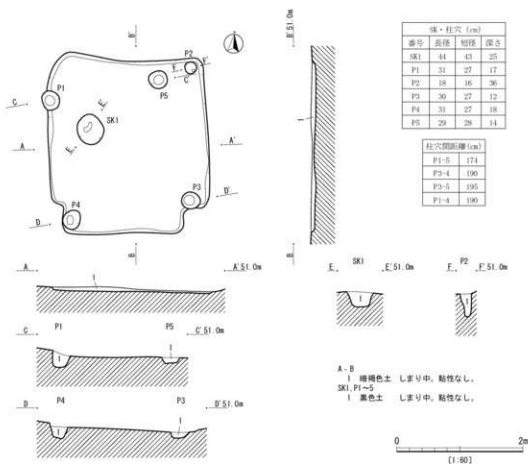
また、住居中央西寄りに、平面円形で断面逆台形の土坑(SK1)が1基検出された。

埋土は黒色土の単層で、ほとんどアカホヤを含まない。遺物は、上記した屋内構築土坑の上面で東原式土器の甕(第305図1883)が一括して出土したほか、住居北東隅では並貫式土器並行と考えられる高坏が出土している(第305図1887)。また、北西隅の主柱穴(P1)底面から、小壺がほぼ完形の状態で出土しており(第305図1885)、住居廃絶時の状況が良好に残っていた。

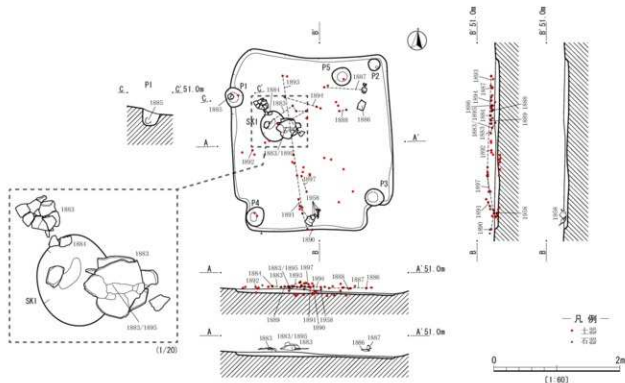
さらに、張り出し部で上記の土器と同レベルで出土した甕の破片が、南側に近接する土坑1号(第322図)中から出土した東原式土器の甕(第322図1958)と接合した。

この土坑1号については、検出面から底面までの深さが異なることから別遺構としたが、相互に関連する可能性もある。

1883は東原式土器の甕である。復元口径27～28.5cm、胴径27cmで、底部から口縁部下まであまり張らずに直線的に立ち上がり、口縁部下(突帯下位)で一旦軽くくびれ、外弯する口縁部に至る器形である。最大径は口縁部下(突帯下位)にある。口縁部は、平面形がややひずむが、口唇部は断面方形に丁寧に仕上げている。器面調整は、口縁部は内外面とも丁寧なヨコナデであるが、口縁



第303図 古墳時代竪穴住居跡1号(1)



第304図 古墳時代堅穴住居跡1号(2)

部下のくびれ付近から下位では、外面は2種類の工具を用いた縦基調のやや粗いナデで、内面は斜位のヘラナデである。なお、内面は調整痕が右上がりになっていることから、当該作業の際、製作者が左手を使っていたことがわかる。口縁部下のくびれ部に貼付された突帯は、断面三角形に整形されるが、波打っていたり接合面が消されていないなど粗い仕上げ部分も見られる。

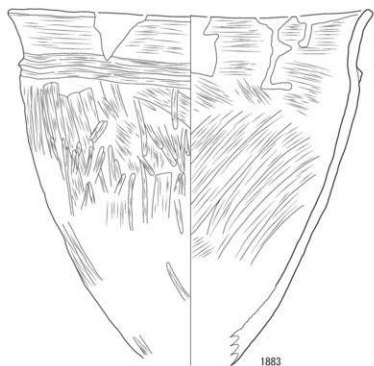
1884は鉢である。1883と同じくSK1上で出土した。口径は、端部が16cmで彎曲部が18cm、底径4.5～6cm、器高11cmである。器形は、平面楕円形で高台状に成形された底部から丸く張りつつ立ち上がり、口縁部で内弯する。器壁は底部から口縁部にかけて漸的に薄くなっている。高台状の底部は形状の割に薄く、胴部下の方が厚みがある。調整は内外面でほぼ一致しており、胴部下が縦位のナデ、胴部上半から口縁部下が斜位基調の粗いハケ目、口縁部が指頭押圧の後に軽い横ナデである。整形に際し、調整や成形は粗いもの、口唇部を薄く仕上げる意識があることは明瞭に看取される。この他、外面は胴部下に黒斑が1か所あるほか、胴部上半にススが広く付着している。

1885は小壺である。口縁部が全体の2/3程度を欠損するが、他に割れやヒビはない。口径7.5cm、器高10cmで、尖り気味の丸底からわずかに丸みを帯びつつ胴部へ立ち上がり、肩部から窄まって軽く内傾する口縁部に至る器形を有する。やや腰高な器形だが、大人の手には取

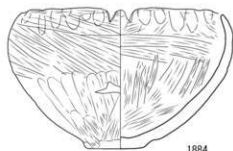
まりの良い形状である。器壁は、底部がやや厚く口唇部が薄い他はほぼ一定の厚みに整えられている。器面は内外面でほぼ一致しており、底部から肩部付近までは縦基調のナデ、肩部は指オサエ、口縁部は横位のナデである。口唇部は薄く仕上げられる。肩部と口縁部の境界には、板状工具の端をずらしながら連続して軽く押し当てて、1条の横位細沈線のようにも見える浅い段を形成している。口縁部外端には、横位の沈線文が浅く1条巡る。この他、内面は特に上半部から口縁部内端にかけてススが広く付着している。

1886は東原式土器の甕である。復元口径32.5cmで、器形の概要は1883と類似するが、口縁部はより直線的に反外する。また、口唇部は断面舌状に整形される。器面は、内外ともやや摩滅して詳細がわかりにくいが丁寧なナデ調整が施されている。突帯は、頂部をやや上向きに整形したあとに連続刻目を施している。刻みに伴う粘土のはみ出しを処理しておらず、工具の動かし方についても、右に動かしている箇所と左に動かしている箇所があるなど、やや大雑把な施文である。

1887は高坏である。形状からは布留式あたりに伴う畿内系の高坏の特徴を有する。1886の近くで出土した。口径12.5cm、脚径14.5cm、器高12cmで、坏部は底部からわずかに張りつつ広がり、直立気味の口縁部に至る器形を呈し、脚部は底部に向けてラッパ状の優美な曲線を描いて広がる。器面は、坏部と脚部の内面には丁寧なナデ



1883



1884



1885



1886



1887



1888



1889



1890



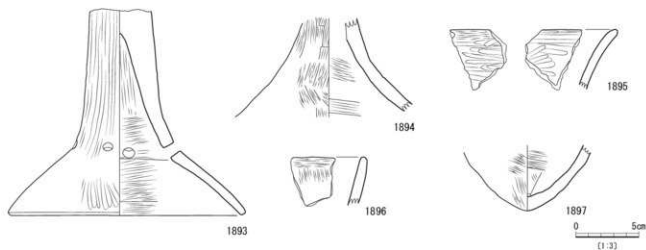
1891



1892

0 5cm
[1:3]

第 305 图 古墳時代竪穴住居跡 1 号 (3)



第306図 古墳時代竪穴住居跡1号(4)

調整が施され、坏部外面は縦位のやや粗いナデ調整のあとに粗いミガキが横位に施され、脚部外面は縦位のヘラナデが器形に合わせて放射状に丁寧に施されている。口縁部は、成形を兼ねた丁寧なヨコナデで薄く仕上げられる。

1888～1890は甕の口縁部である。1888は焼成が特に良好で、想定される法量に比して器壁が薄い。口唇部は断面方形に整形される。突帯は小さい。外面に噴きこぼれの痕跡が観察される。1889は小片のため詳細は不明だが、突帯が貼付されていない可能性がある。1890は口唇部外端に面取り状の整形を施している。

1891は、大型の甕の胴部下半と考えられる。調整は、外面がケズリに近い縦位のナデのあとに縦基調のミガキが軽く加えられており、内面は斜位の丁寧なナデである。外面の色調は、広く黒色化している。

1892は甕の脚部である。1883近くで出土した。底径9cmで、内面の接合面位置から脚高はごく低いとわかる。指オサエで成形したあととナデで整形している。

1893・1894は高坏の脚部である。1893は、底径18.5cmで、円柱状の上部から屈曲して漏斗状の端部に至る器形である。調整は、外面は風化しているため観察が困難だが縦位のミガキが施されているようで、内面は端部が横ナデ、円柱部が粗い縦ナデである。また、器面の風化度合いが、すべての破片で内面よりも外面が進行しているのが目につく。屈曲部には、円形透かしが5か所施されている。間隔はやや不揃いで、いずれも外側から穿孔される。この他、端部の外面端部にはススの痕跡もわずかにうかがえる。1894は1887と同型の器形であるが、器壁が全体的に厚い。また、外面の調整は端部へ向かうにつれて方向が乱れる。内面上端には接合面がある。

1895・1896は、小型丸底壺の口縁部と考えられる。

1895はやや外弯する器形で、内外面ともに横基調のミガキ調整で整形されている。ただし、甕である可能性もある。1896の外面は、ミガキに近いナデ調整が縦位に施される。

1897は小壺の底部である。器形は1885に類似すると考えられる。底部は、極めてわずかな平底となる可能性もある。

竪穴住居跡2号(第307・308図1898～1905)

I・J-40区のⅢb層で検出された。調査区境界の土手部分に位置し樹痕の侵食等が著しかったうえ、中世の掘立柱建物跡や弥生時代の竪穴住居跡等と切り合っていたため、当初は近接する3基の別個の土坑と認識していた。その後、埋土の検討などを経て1軒の竪穴住居と判断したが、本来の構造を把握しきれなかった恐れがある。

現状から、長軸4m、短軸3.5m程度の規模を呈すると想定される。平面的には張り出し部が構築されているように見えるが、床面は、南西の調査区外に延びる部分を除き、微妙な段差はあるもののほぼ同じ深さである。仮に、この微妙な段差を構造とみれば、P1とP2に挟まれた範囲の面積が住居とするには小さくなる。

柱穴は、2本(P1及びP2)検出した。想定する住居の範囲と、位置関係に大きな齟齬を見いだせないこと、柱痕跡はないものの径や深さが一定程度あることから、住居の柱穴と想定している。

埋土は2層確認したが、冒頭に述べた厳しい状況のために判断に苦慮した。埋土2には、アカホヤ火土灰層の土塊が大量に入っていた。

遺物は、中央部竪穴の南西角にまとまっていたが、埋土上位からの出土である。

1898・1899は、甕の突帯部分である。1898の突帯は、

貼付がやや雑であるほか、内面と外面で調整の仕上がりに差がある（内面がやや丁寧）。1899は、突帯上半に接合面ナデ消しと突帯の整形を兼ねた強いヨコナデが施されているため、突帯の上位が沈線状に凹んでいる。

1900は甕の底部である。径約8cmで器壁は厚く、大型の甕と想定される。

1901は高坏の脚部で、ラッパ状に緩やかに開く器形を有する。器壁は端部に向けて漸移的に薄くなるが、端部と基部で厚さはかなり異なる。調整は、内外面とも縦位のヘラナデだが、外面はミガキも加えられ、器形に合わせて略放射状に施されている。

1902は甕である。掲載した遺物のなかでは比較的下位から出土した。口径11cm、胴径9cm、器高6cm（推定）で、器形はかなり変容している。器壁は薄く、内外面ともミガキに近いナデ調整が施される。特に外面調整は、器形に調整方向を合わせており、文様効果を意図していると思定される。胴部外面に黒斑がある。

1903は手捏ねの跡である。他の遺物と異なり、住居北

西端から出土した。口径7cm、器高4cm（推定）で、円錐形の器形と考えられる。底部外面近くに爪跡が残る。

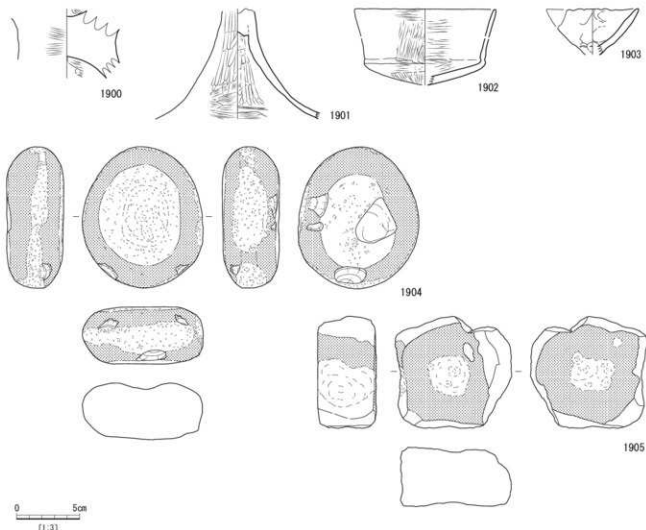
1904は敲石である。長さ11cm、幅9.5cm、厚さ4.5cm、重さ740gの砂岩製で、正面は敲打のために大きく凹んでいるほか、下縁と両側縁は敲打による凹凸まで潰れて面が形成されている。裏面にも中央に敲打部があるほか、被然による剥落がある。

1905は凹み石と考えられる。側面が不整形であるが断続的に磨り面が観察されることから完形品と判断する。長さ・幅9cm、厚さ4.5cm、重さ673gの花崗岩製で、正面と背面の中央が浅く凹み、その周辺は平坦な磨面である。

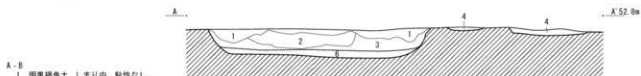
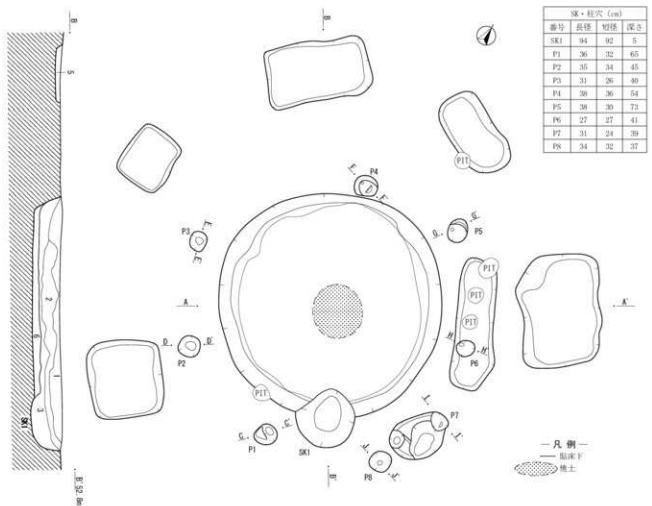
竪穴住居跡3号（第309図～第312図 1906～1928）

H-38・39区のⅢb層上面で、径3.8mの円形の竪穴、並びにその周囲に5基の平面長方形の浅い土坑、2基の平面略楕円形の土坑と7本の柱穴を近接して検出した。

円形の竪穴は、検出面からの深さが0.4mで床面はほぼ平坦、壁は曲線的に開きながらたちあがり、壁際に壁

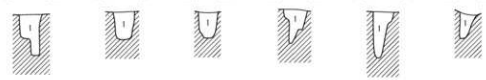


第308図 古墳時代竪穴住居跡2号（2）



- A-B
- 1 明黄褐色土 しまり中、粘性なし。
 - 2 黒褐色土 しまり中、粘性なし。
 - 3 黒褐色土 しまり中、粘性なし。
 - 4 暗褐色土 しまり強、粘性なし。
 - 5 黒褐色土 しまり強、粘性なし。
 - 6 暗褐色土 粘床、しまり強、粘性なし。

C. P1 直径 52.0cm D. P2 直径 52.0cm E. P3 直径 52.0cm F. P4 直径 52.0cm G. P5 直径 52.0cm H. P6 直径 52.0cm

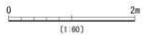


I. P7 直径 52.0cm J. P8 直径 52.0cm

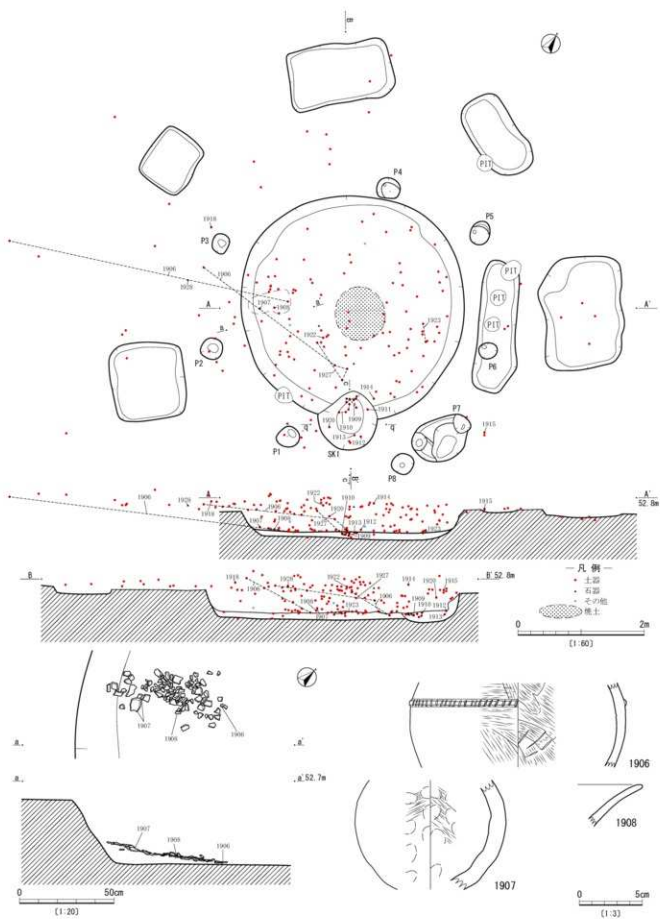


- P1~8
- 1 黒褐色土 しまり中、粘性なし。
 - 2 明黄褐色土 しまり中、粘性なし。

柱穴内深さ (cm)	
P1-2	181
P2-3	168
P3-4	360
P4-5	160
P5-6	187
P6-7	132
P7-8	114
P8-1	187



第 309 図 古墳時代竪穴住居跡 3 号 (1)



第310图 古墳時代竪穴住居跡3号(2)

帯溝などは見当たらなかった。床面中央には、径80cm程度にわたって褐色に変色した範囲が確認された。また、南壁に径90cmの平面円形の土坑（SK1）を伴う。調査当初は別個の土坑（SK44）として扱っていたが、埋土が堅穴の下位の埋土3と一致したこと、円形堅穴の貼床（埋土6）を切って掘られているのを確認したことから、堅穴に伴う土坑として扱うこととした。

5基の浅い土坑は、平面形こそ若干異なるものの全体として規格性がうかがえること、円形堅穴を中心としてそれぞれの外側の壁がほぼ4.2mの距離に位置すること、検出面からの深さが10cm程度で共通することなどから、円形堅穴と一連の施設と考えられる。

南東部で検出された2基の土坑も、上記した5基の土坑の内側に円形堅穴からの距離がほぼ同じであることから、円形堅穴と一連の施設と考えられる。特に南側の平面楕円形の土坑は、土坑長軸線上の両端に小ピットを伴う形状が、弥生時代の堅穴住居に散見された施設と酷似することも、住居関連施設の可能性を補強すると考える。円形堅穴の外側を環状に巡る7本の柱穴は、P1とP5がほぼ同じ深さで他の5本より深い。径は7本ともほぼ同じであり、状況から円形堅穴と一連の柱穴と考えられる。

埋土は、主に円形堅穴で4層確認された。うち埋土6は、上記したように貼床で、床面全体にほぼ均等の厚さで平坦に貼られている。色調は、弥生時代の堅穴住居の貼床に比してアカホヤ火山灰が少ないためか黒っぽい。他の埋土は、おおむねレンズ状の堆積状況を示していることから、埋土の流入方向は不明ながら自然堆積で埋没したものと想定される。なお、貼床を剥いだ掘削面も、比較的平坦で掘り込み等は検出されなかった。

この他、柱穴並びに2基の楕円形土坑の埋土は、円形堅穴の埋土と特徴がほぼ一致している。5基の長方形土坑の埋土は、円形堅穴とやや異なる色調の土が堆積していたが、硬度が貼床と酷似している。

遺物は、円形堅穴に伴う土坑（SK1）から出土した素類（第311図上及び1909～1913）、円形堅穴南西部の貼床上で、複数の壺の破片が堅穴中心から外側へ帯状に出土した壺（第310図下及び1906～1908）の状況が、その違い（破損状況及び分布状況）を含めて人為性を強く感じさせる点で注目される。

その他、埋土中から出土した遺物は、堆積層の違いを超えて接合する資料も散見された。

このような状況から、これらの遺構群は花卉型住居であったと考えられる。床面に小ピットを伴う土坑が弥生時代の堅穴住居と同じ機能を有すると仮定すれば、南東に入口が設けられていたことになる。

また、遺物の接合状況から、あまり削平を受けていない可能性を指摘でき、さらにそのことから、この住居は

当時の形状をある程度残しており、従前の花卉型住居とはやや異なる形状をしていたことがわかる（埋没後ほどなくして削平された可能性も想像できるが、その場合は1906の接合状況を説明できない）。

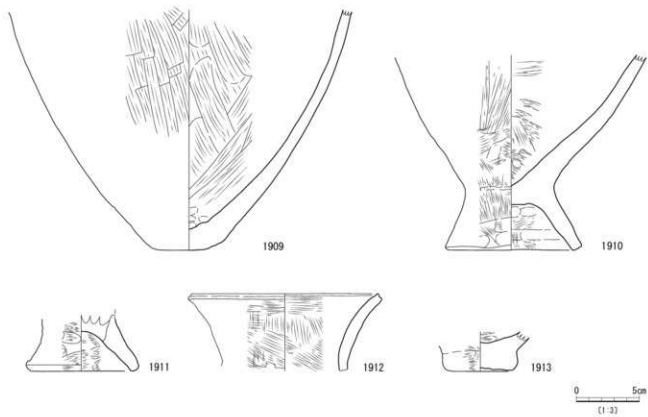
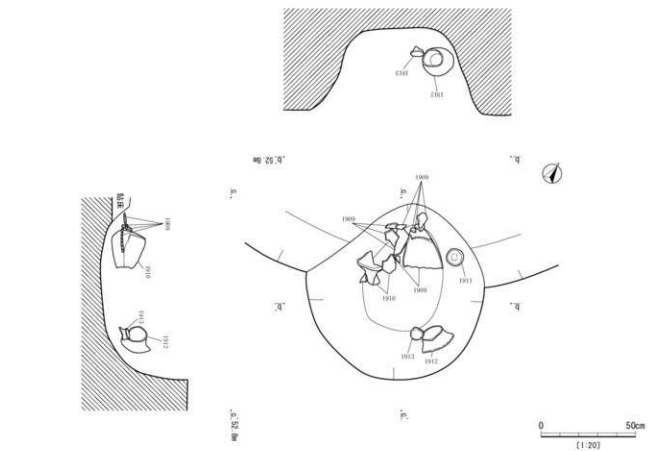
なお、西端の張り出し部近くで、底面から小形壺が出土した土坑6（第324図1966）が検出されている。

1906は胴径17cmの壺である。球状の器形で、器面は内外面とも斜位基調の丁寧なヘラナデが施されているが、外面は突帯周辺のみ斜位のナデの後に横ナデとなっている。最大径部分からやや肩部寄りに1条貼付された突帯は、器形に比して小振りで、刻目を入れてから断面台形にナデで仕上げている。きめの細かい胎土を用いている。1907は手摺ねの小型壺と考えられる。胴径12cmで器厚1.2cm前後と、器形に比して分厚い器壁である。内外面とも指頭押圧の痕跡が残り、器面調整は外面にケズリに近い粗いナデが軽く入る程度である。分厚い器壁だが、色調は内部まで外面とほぼ同色となっている。1908は高環の環部片である。小片だが、体部中央で「く」の字状に屈曲する器形と考えられる。器面が風化しており調整の詳細は不明である。

次に、円形堅穴に伴う土坑（SK1）から出土した1909～1913について概説する。

1909は壺の下半部である。底径4cm、資料上端部で径27cmで、アーモンド状のあまり胴部が丸く張らない器形を呈すると考えられる。器壁は、底部付近がやや厚いが胴部はほぼ一定の厚さに整えられている。器面調整は、外面が縦線調のヘラナデ、内面が斜位のヘラナデで底部のみ指頭押圧である。外面の調整開始点が底部接地面から数cm空けているため、底部が円盤状に付き出し突出しているように見える。1910は、壺の底部である。底径7cm、脚径10cmで、比較的大型の甕だったと想定される。脚部は、外底面を平坦に脚を短く直線的に整形しており、安定性を高くしている。端部も断面台形に丁寧に仕上げられている。底部は内面を漏斗状に尖らせ、胴部へは直線的に広がる器形である。器面調整は、外面は縦線調、内面は斜位だがあまり斉一性がない。内面にコゲの痕跡が認められる。1911は甕の脚部である。脚径8cmで、1910より小形の甕だったと想定される。わずかに「ハ」の字状に弯曲する器形で、全体に指頭押圧の痕跡が残り、器壁は場所によって厚さが異なり、脚端部の整形も大雑把である。

1912は壺の口縁部である。口径15cm、頸部径10cmで、頸部接合面で剥離している。器壁は内外面ともにヘラナデで調整しているが、成形時の指ナデを消し切れていないため細かい凹凸が目立つ。口縁端部は凹線状に凹む。1913は壺の底部と考えられる。底径4.5cmで、外観で1.5cmほど突き出している。色調が明褐色系を呈しており、特徴的である。接地面はやや色調が赤みを帯びて



第 311 图 古墳時代整穴住居跡 3 号 (3)

いることから被熱している可能性がある。都城盆地の壺の特徴と類似する。

この他、埋土中出土の主な遺物は以下のとおりである。

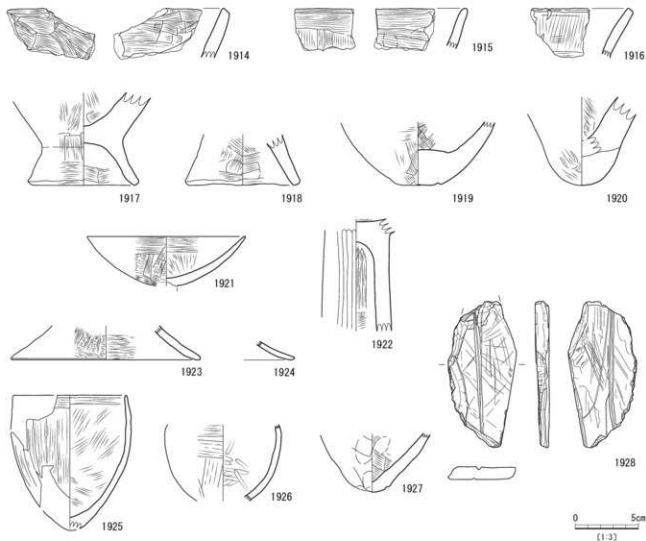
1914は甕の口縁部である。色調が灰白色系を呈しているのが特徴的である。1915・1916も甕の口縁部と考えられる。1916の外周調整は、角度、長さや間隔がほぼ揃っていることから、装飾的效果を意図していたことが想起される。1917・1918は甕の脚部である。1917は底径6.5cm、脚径8cmで、脚部内面の色調が、底面は鈍い赤褐色、他は端部まで黒褐色を呈していることから、火に関わる何らかの道具に再利用された可能性が想定される。なお、脚や胴部の外面に顕著な被熱痕跡は確認されない。1918は脚径9cmで、指頭押圧の痕跡が残る。

1919・1920は壺の底部である。1919は径3cm程度の平底であるが、内面が凸レンズ状に盛り上がるのが特徴的である。また、接地面には植物の茎の圧痕が多く残る。1920は成形が特徴的であるが、粘土を継ぎ足して先端部

を作るなど、製作技法については他の底部に厚みのある壺と共通している。

1921～1924は高坏である。1921は口径12.5cmの坏部で、口縁部は横ナデ、口縁部以下は縦位のヘラナデで内面のみ軽くハケ目も加えられる。1922は脚で径は5cm程度、外面には縦位のミガキが均等に施される。浅黄橙色の色調が目を引く。1923は床面近くから出土した脚部で径は15cm、外面には縦位の放射状のハケ目が丁寧に施されている。1924は器壁が特に薄い。

1925～1927は鉢である。1925は、口径9cm、器高11cm(推定)の碗弾型をした鉢で、底部は鈍い尖底になると想定される。器壁は薄く軽い。調整は、口縁部が横ナデで口縁部以下はヘラナデであるが、外面は縦位に均等に施しており、装飾的效果を意図している可能性がある。外面底部周辺のみ縦位の調整痕が指などでナデ消されている。1926は口径9cm(推定)で、口唇部と底部を欠く。基本的な調整方法は1925と共通するが、外面の調整が



第312図 古墳時代竪穴住居跡3号(4)

やや徹底しない一方、内面はミガキ調整で仕上げる点などに違いが見られる。1927は尖底の鉢と考えられる。1925や1926とは、器壁がより厚く手捏ねの痕跡が残るなど、成形に違いが見える。

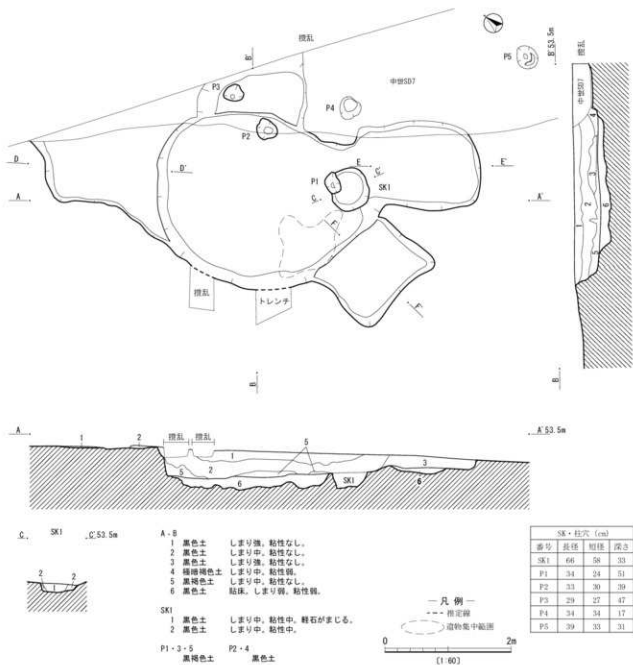
1928は砥石である。長さ11.5cm(推定)、幅5.5cm、厚さ1cm、重さ86gの頁岩製で、正面、裏面及び右側面が砥面で、正面と裏面には断面「V」字の溝が走る。また、裏面は剥落しているが砥石としての利用を継続している。

竪穴住居跡4号(第313~316図 1929~1941)

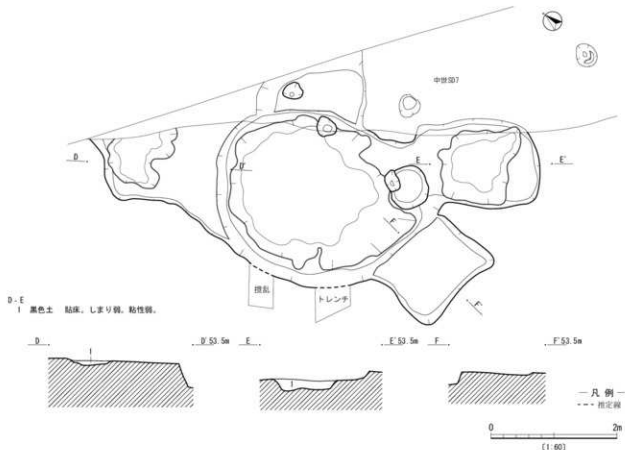
H-36区のⅢa層中で検出された。町道部分にあたり、かつ中世の溝状遺構により一部削平されている。

長径6.9m、短径不詳、中心部での検出面からの深さ0.4mの花弁形住居であるが、張り出し部がおよそ北側と南側にのみ構築されていることもあって、全体の平面形は楕円形となっている。

北側と南側にそれぞれ2基がまともって偏在する張り出し部は、双方東寄りの張り出しが相対的に深くなっている。また、張り出し部の平面形は方形を基本とするが、



第313図 古墳時代竪穴住居跡4号(1)



第314図 古墳時代竪穴住居跡4号(2)

相対的に広い方の張り出し部は、形状が崩れている。

柱穴は、住居東側から竪穴外を含めて5本検出された。径30cm程度で深さも4本が30cmを超えるなど、いずれもしっかりした柱穴であるが、竪穴とは配置がずれることから、これらが主柱穴とは想定しづらい。

中央部竪穴の床面南端から、平面円形で断面逆台形を呈する土坑(SK1)が1基検出された。住居の埋土と土坑の埋土の特徴がおおむね類似することから、住居使用時の土坑と想定して差し支えないと考えられる。

貼床は、中央部竪穴のみに確認された。平均10cm程度と厚く貼っている。なお、貼床を除去して検出した掘り込み面は、全面に細かい凹凸が広がっていた。ちなみに、広い方の張り出しの床面には、他の住居埋土に比して貼床のような硬い埋土で埋まった掘り込みを確認した(第314図)。

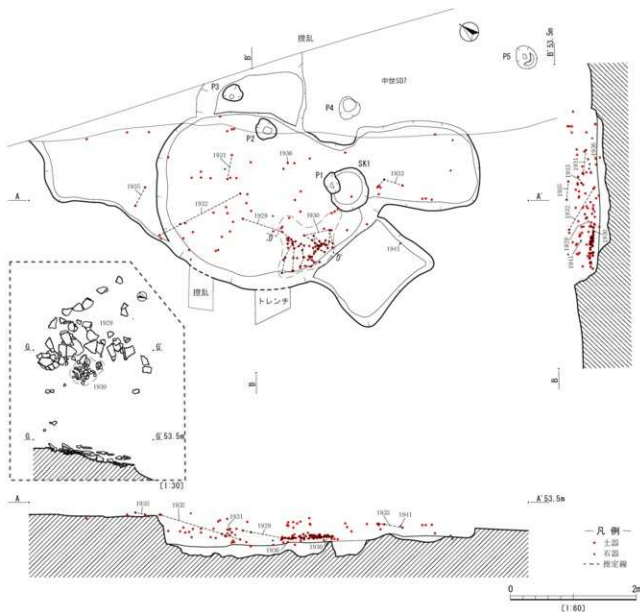
埋土は6層確認した。うち貼床は埋土6である。また、埋土4や5にはアカホヤやV層由来の土塊が混じる。おおむねレンズ状の堆積状況を示すことや埋土5及び3の状況から、複数方向からの土砂の流入による自然堆積で埋没したものと想定される。

遺物は、埋土下位から上位まで出土したが、中央部竪穴貼床面から若干浮いて(埋土5を挟むか)出土してい

る。特に、土坑の南隣からまとまって出土した甕(1929)と壺(1930)は、破片にレベル差がほぼなく破片相互の重なりも少ないという、やや不自然な出土状況を呈している(第315図左)。

1929は、辻堂原式土器並行期と考えられる甕である。口径32cm、胴部上半はわずかに張るものの下半は直線的に底部にいたる器形を呈し、突帯付近で器壁を直立させ、口縁部は直線的に外傾させている。口縁端部は断面舌状に仕上げる。器面は、外面が縦溝調、内面が斜位の軽いハケナデで整えられているが、内面調整は器形の変化に沿っていない部分も見られる。突帯は、法量に比して小振りだが断面三角形に丁寧に整形され、刻目はほぼ等間隔で大きさや深さなど形状を描いている。

1930は、口径8.5cm、頸部径7cm、胴部最大径(突帯上端付近)16cmの壺である。口縁部に比して胴部が大きい器形で、肩部の丸みも強い。器壁を薄くほぼ均一に仕上げており、口縁端部も薄い舌状に整えるなど、埴に似た精緻さを有する。器面は、内面には指オサエの痕跡を残すものの、外面は口縁部～頸部と突帯周辺が横ナデ、肩部は縦ナデの丁寧に調整が施され、特に肩部は放射状に間隔を描いている。胴部に1条巡る刻目突帯も、細やかな作業で貼付されている。また、外面の色調は全体的



第315図 古墳時代竪穴住居跡4号(3)

に赤褐色を呈しているが、顔料は塗布されていないと想定される。

1931～1933は、埋土中から出土した甕である。1931は口径30.5cmで、器形は1929に類似するが突帯を貼付していない。ただ、突帯を貼付する位置に外面調整具の打ち込み痕を付けて(残して)おり(従って器面に残る調整痕の方向も変化しており)、当該位置に何らかの意識が働いていることをうかがわせる。1932も、1929などと同様の器形と想定されるが、口縁端部は断面方形に仕上げる。器面には、ハケ目の痕跡が比較的明瞭に残るほか、突帯の貼付工程に伴う指先の爪の痕跡も残っている。1933は甕の底部である。底径は8.5cmで高さは低く、底部の厚さに比べ脚部の器壁が薄いものの、「八」の

字状に整形されており安定感がある。全体に、繊維質の混和剤の跡が比較的多く散見される。

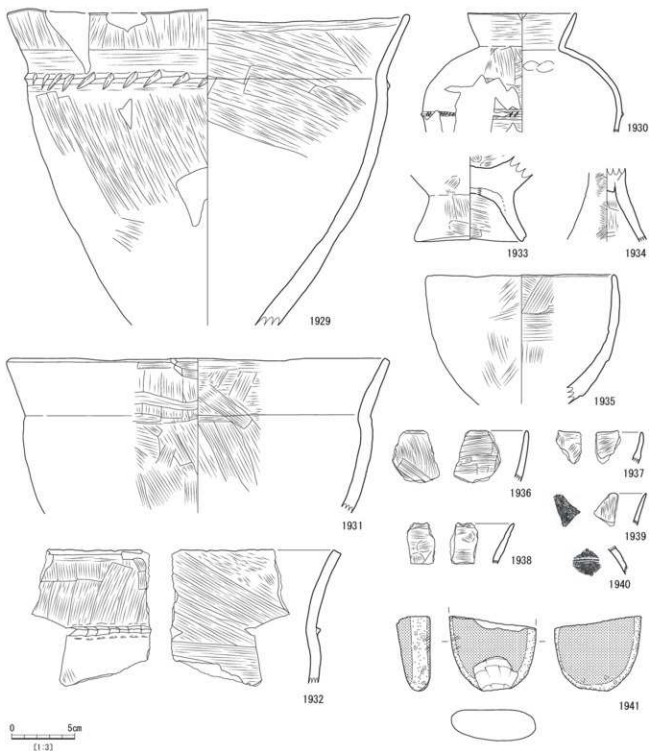
1934は高坏の脚部で、ラップ状に開く器形と想定される。内外面ともナデ調整が施されるが、外面のナデの方向は不規則である。土坑の埋土中から出土した。

1935～1938は、鉢と考えられる。1935は口径15cmで、深めの碗のような器形である。底部を欠くため、脚が付いていた可能性も考えられる。器壁は底部が厚く、口縁部に向かうにつれて漸移的に薄くなる。器面は、内外面とも工具で不規則にナデられており、成形時の凹凸や歪みが残る。胴部下位には、内外面とも黒班が観察されるが、場所が異なる。また、器面にススヤコゲは観察されない。北西の張り出し部床面直上で出土した。1936は

器壁が薄く外面の調整痕も丁寧である。1937・1938は、薄いつくりだが手捏ねの痕跡が残る。

1939・1940は増と考えられる。1939は口縁部、1940は肩部または胴部で同一個体と想定され、どちらも外面には波状文を施している。1940には平行する2条の横位沈線文も施文されている。

1941は磨・敲石である。砂岩のやや扁平な転礫を用いており、破断している。敲打面は主に下端が用いられ、作業に伴うと考えられる大きな剥離がある。磨り面は正面及び表面が用いられているが、特定の向きの擦痕などは観察されない。現存で長さ6cm、幅7cm、厚さ2.5cm、重さ130gである。



第316図 古墳時代竪穴住居跡4号(4)

竪穴住居跡5号（第317～321図 1942～1957）

G～H-22～23区のⅢa～Ⅲb層上面で検出された。遺構の中央に地層観察用バルトを設定していたため、先に遺構東側の張り出し部を検出したがそれぞれ個別の土坑と認識していた。その後、バルトを扶んだ西側でも特徴の類似する土坑を検出したため、これらについて再検討し、1軒の住居と判断した。

長径7.3m（現状）、短径6.4m、中央部竪穴で検出面からの深さ約0.6mの平面略円形を呈する花弁形住居であるが、中央部竪穴と張り出し部が連結しておらず、間仕切りの幅も広い点が特徴である。なお、北西のみ張り出し部がないが、浅い張り出し部もあることを踏まえると検出できなかった可能性もある。

中央部竪穴は、長軸3.1m、短軸2.3mで検出面からの深さは0.5mあり、平面形は南北に長い洋梨状を呈する。床面は南北2か所が浅く凹むほか、突出する南壁は、途中に段を設ける。北側では炭化物の集中域も検出された。

5か所確認した張り出し部は、いずれも平面形はおおむね方形または中央部竪穴から広がる扇形だが、検出面からの深さは0.1～0.2mと差異がある。

柱穴は、中央部竪穴の周囲を巡るように8本検出されたが、径や深さに顕著な規模の違いが見られるため、どれが主柱穴にあたるか判断としない。ただし、そのうち4本（P1～P4）については、柱痕跡こそないものの、径が比較的大きい（50～70cm）こと、遺物が出土していることなどから主柱穴の可能性が想定される。

埋土は4層確認されたが、貼床は確認されなかった。他方、埋土2やP1～4の埋土には、炭化物が他の埋土よりも多量に含まれていた。また、埋土3及び4にはアカホヤ火土灰が多く含まれていた。なお、堆積状況からは、人為的な埋め戻しか自然埋没か判断できなかった。

遺物は、点数こそ多くなが、上記した柱穴4本のほか、中央部竪穴でも特徴的な出土状況が確認された。

P1からは、炭化材6点（試料として採取）、砥石（1955）などのほか、土玉（1954）が出土している。P2の底面では横転した状態の完形の埴が出土した（第319図左上及び1942）。埋土中には炭化物も多く含まれていた。P3並びにP4では、底面中央から安山岩の礫（加工痕、被熱痕跡なし）が出土した。

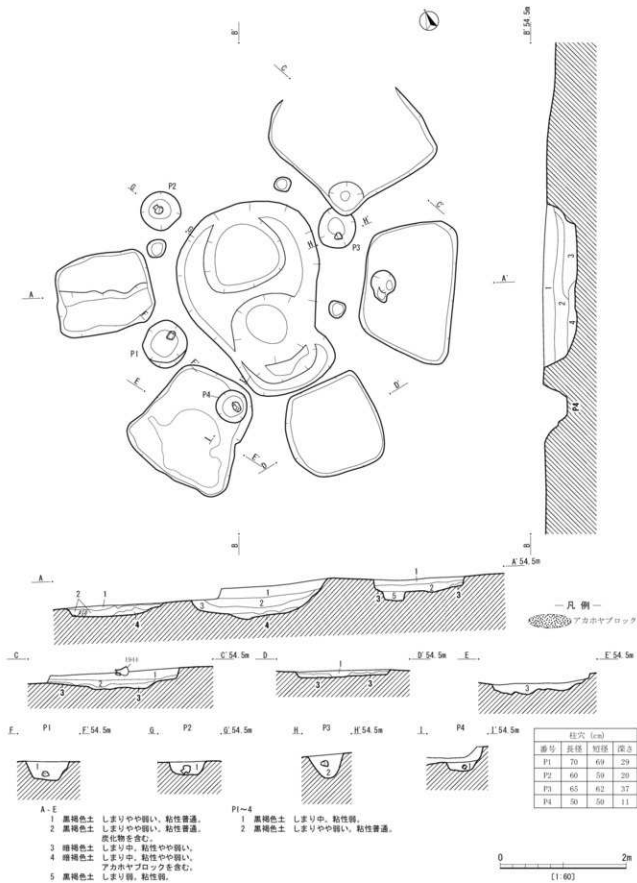
中央部竪穴では、中央部西寄りの埋土4直上から、甕2点（1943、1945）、鉢（1944）、高坏（1946）がレベルはやや異なるものの列状に出土した（第318図下）。なお、鉢は張り出し部出土資料と接合する。

5号の構造、遺物の出土状況並びに遺物個々の形状や埋土中の多量の炭化物などを踏まえると、この建物は、一般的な住居とは異なる機能を付された建物だった可能性もある。

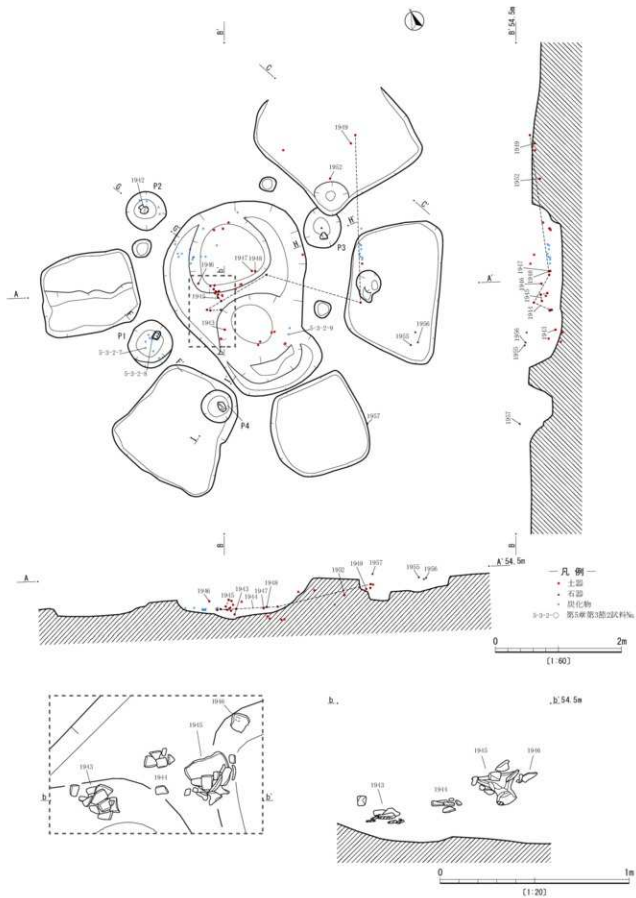
1942は、P2底面から出土した埴である。口縁部の1か所を欠くが、口径9cm、頸部径7cm、胴径14cm、器高15cmの完形品である。底部は、鈍い尖底で先端に小突起（径1cm・厚0.4cm程度）を付け、胴部は最大径を頸部近くを取る腰高形状で、下半には接合面と考えられる段がある。頸部は短く直立させ、わずかに開きながら直線的に口縁部に至る。器壁はほぼ均一で、底部周辺のみわずかに厚みを増す。なお、底部先端の小突起の成形については、内面に突起に対応するような凹みが観察されるが、器面の様子からは内面を突いているようにも、逆に外面から粘土を貼り付けているようにも見受けられ、表面観察だけでは判別できなかった。器面は内外面ともに丁寧な作業がなされており、特に外面は縦起のミガキが器形に合わせて緻密に施されている。内面は横ナデ、口唇部はミガキの後にごく軽く横ナデを加えている。明瞭な文様はないが、口縁部と口唇部に横ナデに伴う細い圏線があり、頸部屈曲部にはミガキ工具の打ち込み痕を描くことで、1条の横位細丸線状の凹みがある。なお、被熱痕跡は確認されなかった。

口縁部の欠損については、断面形状や接合資料が住居内になくことなどから人為的な可能性がある。また、胴部内面には、底端から頸部にかけて、スガ環状に付いている。その角度は、埴を出土状態にまで傾けるとほぼ水平になる。因みに事実関係は、出土時は埴内部まで土が充満していた、P2埋土には炭化物が多量に含まれていた、器面に被熱痕跡等はみられない、である。

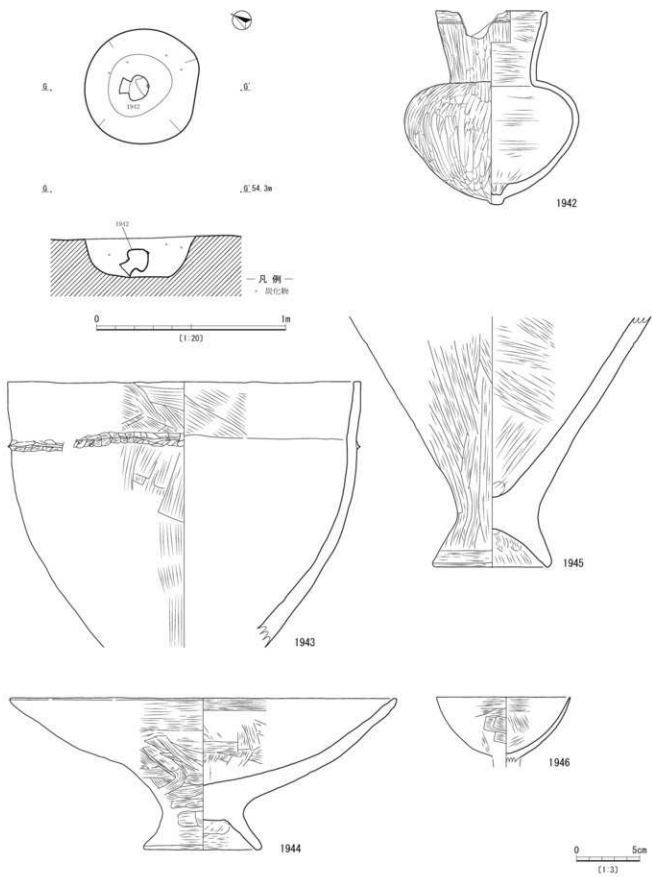
1943～1946は、住居中央やや西寄りの地点でまとまって出土した（第318図下）。1944のみ住居内広範囲に接合資料あり。1943は、笹貫式土器並行期と考えられる甕である。口径28cmで底部を欠くが、口径の割に器高が短い開口部の大きい器形と想定される。胴部は丸みをもつがあまり張らず、突帯付近から角度をほぼ直立させてそのまま口縁部に至る。また、内面の突帯上位付近のみ、器壁が口縁部の外反する甕のようにやや突出している。器面は、内外面ともに丁寧な調整が施され、特に外面は器形と異なり口縁部と胴部で調整方向を変えているのを観察できる。突帯はつまみ上げて仕上げているが、場所によって技法を変えている。1944は鉢と想定しているが、皿のような器形で歪みも目立つ。口径30.5cm、底径9cm、器高12cmで、脚は低い「八」の字状に広がる。底部から大きく開き、やや持ち上げつつもそのまま脚端部に至る。器壁は、底部から口縁部にかけて漸移的に薄くなるが器形に比して厚く、特に底部付近は分厚い。器面は、体部は内外面ともにヘラナデが粗くはないものの不規則に施され、口縁部のみ横ナデが加わる。脚は横ナデだが成形時の手捏ね痕がわずかに残る。文様等は、調整による効果を意識したと想定されるものを含まれていない。口縁部内面や下位には、部分的にスガが付着



第 317 図 古墳時代竪穴住居跡 5 号 (1)



第 318 图 古墳時代整穴住居跡 5 号 (2)



第 319 图 古墳時代整穴住居跡 5 号 (3)

している。器形とススの付着状況から、蓋である可能性もある。1945は壺と考えられる。底径9cm、現状で器高20cmで、底部から胴部にかけてほぼ直線的に開く器形である。脚も基部から端部に向けて漸移的に厚さを減じる整形で、端部も断面舌状に仕上げている。器面は、外面が脚端部を除いて縦位のヘラナデ、内面は底部付近が縦位ヘラナデで胴部は斜位のヘラナデであるが、ケズリのような痕跡や細かいヒビを伴う。また、外面調整について、脚端部から胴部まで一連の動作で（途中の一旦停止はあるものの）ナデ上げている。この他、胎土に白色の細粒を多く含む色調も鈍い褐色を呈するなど、全体的に従来知られている成川式土器と異なる特徴を備えた土器である。1946は高坏の坏部である。口径10.5cmとやや小振りで、脚部との接合部で割れている。器壁は薄く、底部からわずかに弯曲しながら尖り気味に整形された口縁部に至る。胎土はキメが細かく混和剤の粒子もごく小さい。種子か何か爆ぜた痕跡が1か所観察される。内外面にススが付着している。

1947・1948は壺または壺の口縁部である。同一個体の可能性もある。口唇部を断面方形に仕上げ、器面はナデ調整を施す。1947は口径20cmで、端部の同じ箇所を内→外の順に2回打ち欠いている部分が1か所ある。

1949は壺の底部と考えられる。底径5cmで、接地部分を細長く伸ばした器形で、底部はほぼ平底に整形される。外面は縦位のミガキ調整が施される。胎土に雲母を含み、色調は鈍い褐色を呈する。

1950は、小形丸底壺の口縁部と考えられる。口径11.5cmで、器壁はやや厚みがあるものの、内外面ともに丁寧な横ナデで整形されている。胎土のキメも細かい。

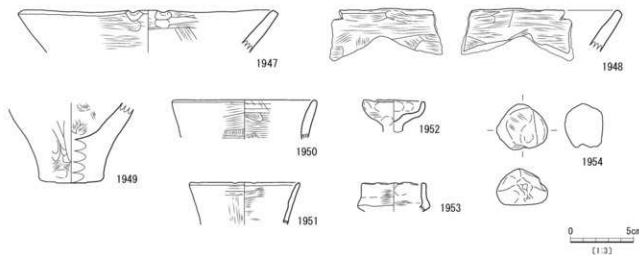
1951は埴の口縁部と考えられる。口径8.5cmで、内外面ともに器表面の剥落が著しく詳細は不明だが、確認できる限りでは丁寧な調整が施されていたようである。

1952は、手捏ねの鉢もしくは高坏と考えられる。北東部の張り出し床面から出土した。口径4.5cmで、下部は接合面で割れている。口縁部平面形はやや楕円にひずむ。器面調整は、外面より内面が丁寧に施されている。1953も手捏ねの土器で、埴のような器形を呈すると想定される。口唇部などは成形時の凹凸を残すが、胴部や屈曲部は横ナデされており、そのためか器壁の厚さも比較的揃っている。口径5cm、屈曲部径6cmである。

1954は、1945・1946の近くから出土した。土玉である。1か所に平坦面を有するが、それ以外に文字化できるような特徴等はなく、凹み部も意図的に穿った様子は看取されない。色調は、全面黒色を呈する。幅4cm、奥行3.5cm、高さ3cmである。

1955は砥石である。南東の張り出し部から出土した。砂岩製で、下半部の正面並びに左右側面を砥面としており、横断面で見ると、正面は凹面、右側面は凸面、左側面は平面となっているのが特徴的である。上半部は敲打痕が各面に観察される。表面の色調が赤みを帯びたり黒変したりしている部分があり、被熱した可能性がある。1956は砂岩製の砥石である。敲打痕は各面の中心部に集中するが、特に正面、裏面、左右側面の敲打部分は顕著に凹む。1954の隣から出土しており、表面の色調から、同様に被熱した可能性がある。

1957は磨石である。ホルンフェルスの転礫を用いており、主に上下端に形成されている敲打部分以外を磨り面としている。敲打部分には平坦面が複数できている。



第320図 古墳時代整穴住居跡5号(4)



第 321 図 古墳時代竪穴住居跡 5 号 (5)

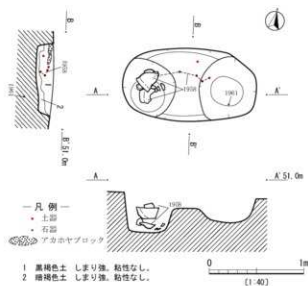
(2) 土坑 (SK)

10基の土坑が検出された。中央丘陵では、東側の斜面の緩やかになる部分に4基、北側の斜面に1基、南東方向に下る緩斜面に1基、南側に1基のあわせて7基がある。西側丘陵では、西側の緩斜面に3基ある。

形状・規模など様々で、そのほとんどが用途不明である。

土坑1号 (第322図 1958~1961)

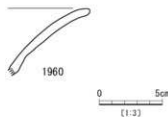
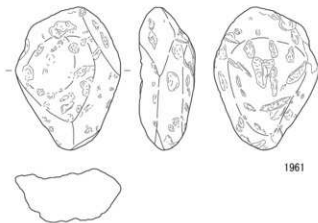
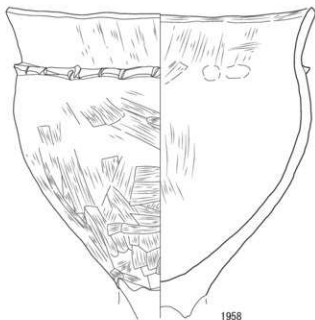
G-42区のⅢb層で検出された。N 84° Eに軸をもち、平面形は長楕円形を呈する。長径145cm、短径79cm、検出面からの深さは19cmである。遺構の東側と西側に床面から一段低くなっている部分があり、それぞれ遺物が出土している。床面からの深さは、東側が15cm、西側が26cmである。埋土は2層に分けられ、埋土1・2ともにしまりが強い。埋土1は黒褐色土に小さなアカホヤの粒が混じっており、埋土2は暗褐色土に池田降下軽石を多く含んでいる。



遺物は、東原式と考えられる土器片数点と軽石製品1点が出土している。

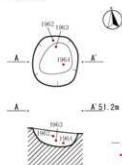
1958と1959は甕である。1958は竪穴住居跡1号と遺構間接合した土器で、刻目突帯をもつ口縁部～胴部で、丸く張る胴部から底部にかけて急に窄まる曲線的な器形である。口縁部は外反するが直線的に整形されており、端部は断面方形に仕上げている。突帯はよく整形されているが、部分的に断面方形を呈する。刻目は広めの間隔で施されているが、1か所近接している部分がある。口径は24.5～25.6cmと歪みが激しい。調整は外面がハケ縦・横ナデ、内面がへら縦・横ナデと指オサエである。口縁部から胴部中程までススの付着がみられる。1959は口縁部で、甕の割に丁寧な調整が施してある。外面は横・縦ナデ、内面は横・斜めナデである。

1960は高坏の口縁部である。内面の口縁付近にススが付着していることから、外蓋として転用されたものと考えられる。調整は内外面とも横ミガキである。



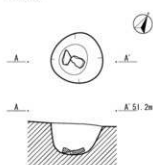
第322図 古墳時代土坑1号

土坑2号



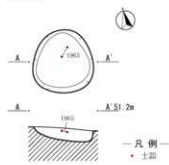
黒褐色土 しまり強。粘性なし。

土坑3号

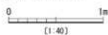


黒色土 しまり中。粘性なし。

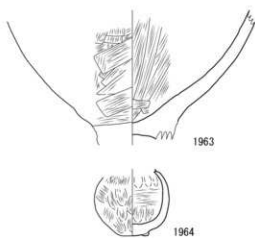
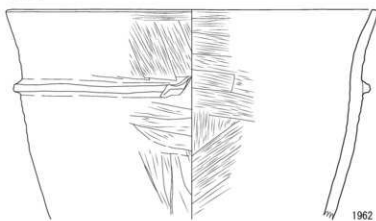
土坑4号



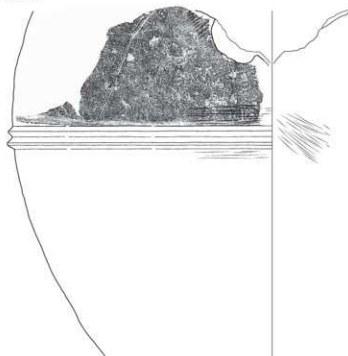
黒色土 しまり弱。粘性やや強い。



土坑2号

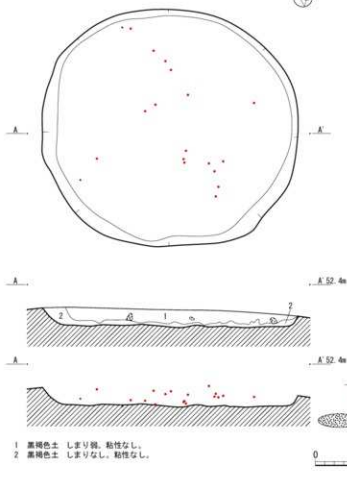


土坑4号



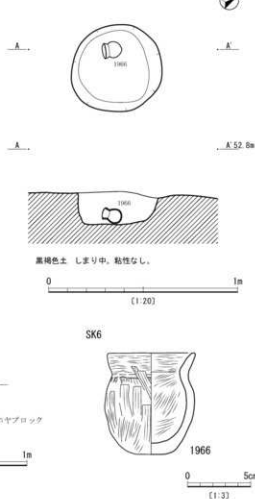
第323図 古墳時代土坑2～4号

土坑5号



1 黒褐色土 しまり強、粘性なし。
2 黒褐色土 しまりなし、粘性なし。

土坑6号



黒褐色土 しまり中、粘性なし。

第324図 古墳時代土坑5・6号

1961は略楕円形の軽石製品である。

土坑2号(第323図1962~1964)

F-42区のⅢb層で検出された。おおよそ円形を呈する。径は50cm、検出面からの深さは15cmである。埋土は2層に分けられ、埋土1・2ともに黒褐色土だが、埋土1には火山灰が多量に混入している。

床面からはほぼ完形に近い小壺1点と、土器片2点が出土している。

1962と1963は甕である。1962は無刻目突帯をもつ口縁部である。調整は内外面ともに横・縦・斜めナデである。1963は胴下半部で、鉢のようにやや開き気味の器形である。器面調整は丁寧だが、調整の痕跡が多く残る資料で、外面が縦・斜めナデ、内面が縦位・横位・斜めナデである。

1964は、手摺ね成形による小型壺の胴部～底部である。底部の一部に粘土が貼り付いており、安定しない。底径は2.3~2.7cmの楕円形を呈する。調整は外面が縦ナデ、内面が横・縦ナデと指オサエである。

土坑3号(第323図)

F・G-42区のⅢb層で検出された。平面形はほぼ円形を呈する。径約50cm、検出面からの深さは40cmである。埋土は単層で、微少なアカホヤ粒が混じる黒色土である。

床面から40cm大の角礫2点が出土している。

土坑4号(第323図1965)

F-41・42区のⅢb層で検出された。平面形はほぼ円形を呈する。径は約60cm、検出面からの深さは15cmである。埋土は単層で、アカホヤが少量混じる黒褐色土である。

成川式の土器片が出土している。

1965は大型壺の胴部である。2条の断面略三角形を呈する突帯を有するが、2条とも下側部分の接合があまい。2条のうち下の突帯は頂部がやや丸みを帯び、断面台形に近い形状を呈している。突帯より上の部分には、雑だが大振りの鋸歯文がみられる。また、人為的に内面から打ち欠いたと思われる部分があり、その周辺の内面

部には赤色顔料を塗布したと思われる痕跡が確認できる。調整については、外面は摩滅およびススの付着により不明瞭、内面は一部斜めナデが確認できるが、全体的に摩滅により不明瞭である。

土坑5号 (第324図)

E-40区のⅢb層で検出された。平面形はおおよそ円形を呈する。長径260cm、短径250cm、検出面からの深さは90cmである。埋土は2層に分かれ、埋土1・2中にアカホヤブロックが混じっている。埋土1は黒褐色土に細かいアカホヤの粒が少量混じっている。埋土2は黒褐色土に埋土1より大きな粒径のアカホヤが少量混じっている。

遺物は土師器片と石器が出土している。

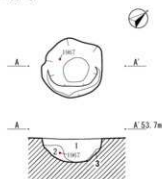
土坑6号 (第324図1966)

H-38区のⅢb層で検出された。平面形はほぼ円形を呈する。径は40cmで、検出面からの深さは17cmである。埋土は単層で、黒褐色土にアカホヤの小さな粒と池田降下軽石が少量混じっている。

床面から完形の小壺が出土している。

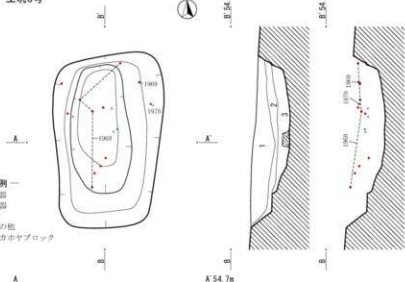
1966は完形の小型壺である。外反する口縁部と丸く張り出す胴部の境に、工具を押し当てて作った段がある。底は平底となる。調整は外面の口縁部が横ナデ、胴部が縦ナデ、内面が横・斜め・縦ナデである。

土坑7号



- 1 黒色土 しまりやや弱い、粘性中。
2 黒色土 しまりやや弱い、粘性中。
3 黒褐色土 しまり弱、粘性中。

土坑8号



- 一凡例—
● 土器
○ 石器
○ 礎
○ その他
□ アカホヤブロック

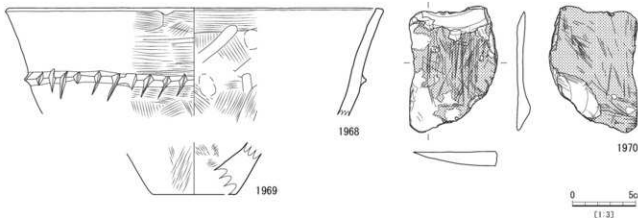
- 1 黒色土 しまりやや弱い、粘性やや弱い。
2 黒褐色土 しまりやや弱い、粘性やや弱い。
3 黒褐色土 しまりやや強い、粘性やや弱い。

0 1m
(1:40)

土坑7号



土坑8号



第325図 古墳時代土坑7・8号

土坑7号 (第325図 1967)

H-34区のIV層で検出された。平面形は不定形だがおおよそ円形を呈する。径65cm、検出面からの深さは27cmである。中央部が深く、遺構の東側が段掘りになっている。埋土は3層に分かれ、しまりが弱い。埋土1・2は黒色土に黄橙色の粒が混じっている。埋土1の方が粒が多く、アカホヤブロックもみられた。埋土3は黒褐色土に黄橙色の粒が微量に混じっている。

成川式の鉢が出土している。

1967は手握ね成形による完形の鉢である。一部残っている口唇部から尖った先端が確認できる。胎土に小礫を多く含み、そのため器面の凹凸が顕著である。調整は内外面ともに斜めナデである。

土坑8号 (第325図 1968~1970)

J-22区のⅢb層で検出された。N4°Eに軸をもち、平面形は隅丸長方形を呈する。長軸182cm、短軸110cm、検出面からの深さは40cmである。深さ30cmのところがテラス状になっており、緩やかな傾斜で一段掘り込まれている。埋土は3層に分かれる。埋土1は黒色土、埋土2は黒褐色土でレンズ状堆積がみられることから、遺構廃棄後の流れ込みと判断する。埋土3は暗褐色土で3cm大のアカホヤブロックが混じっている。しまりも強いことから、床面を平坦にするための人為的なもの可能性がある。遺物は、埋土2から土器が出土しており、口縁部の形状から辻堂原期の成川式と考えられる。赤色顔料3点が出土し、分析の結果パイプ状の粒子がみられ、鉄バクテリアから作られたベンガラと判断された。また、埋土1から未製品だが擦痕のある石器が出土している。

1968は刻目突帯をもつ壺の口縁部である。突帯は断面三角形だが、頂部がやや丸みを帯びる。調整は内外面ともヘラナデ、指オサエである。

1969は壺の底部である。調整は内外面ともに斜位ナデで、外面は特に丁寧でミガキのようにになっている。

1970は頁岩製の砥石である。正面に研いだ痕跡がみられる。

土坑9号 (第326図 1971)

J-22区のⅢb層で検出された。平面形は円形を呈する。径は75×74cm、検出面からの深さは48cmである。深さ30cmのところにテラス状の緩やかな傾斜があり、一段深くになっている。埋土は黒色土の単層で、極小のアカホヤが微量に混じっている。

遺物は、成川式土器の脚台1点と土器片2点が出土している。

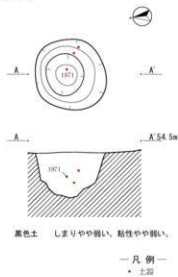
1971は壺の脚台である。脚台の接地面はやや凸凹している。調整は外面が向きの揃わない斜方向ハケナデ、内面が横あるいは斜めのハケナデである。

土坑10号 (第326図)

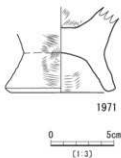
H-22区のⅢb層で検出された。N2°Eに軸をもち、平面形は楕円形を呈する。長径149cm、短径75cmで、検出面からの深さは25cmである。埋土は黒褐色土で、3層に分かれる。埋土1は包含物がなく、埋土2は3~5cm大のアカホヤブロックと粒径1~2cmの池田降下軽石が混じっている。埋土3は粒径の小さいアカホヤの粒と池田降下軽石が少量混じっている。

埋土1上面から被熱痕跡のある礫が3点出土している。

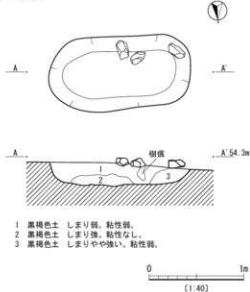
土坑9号



SK9



土坑10号



第326図 古墳時代土坑9・10号

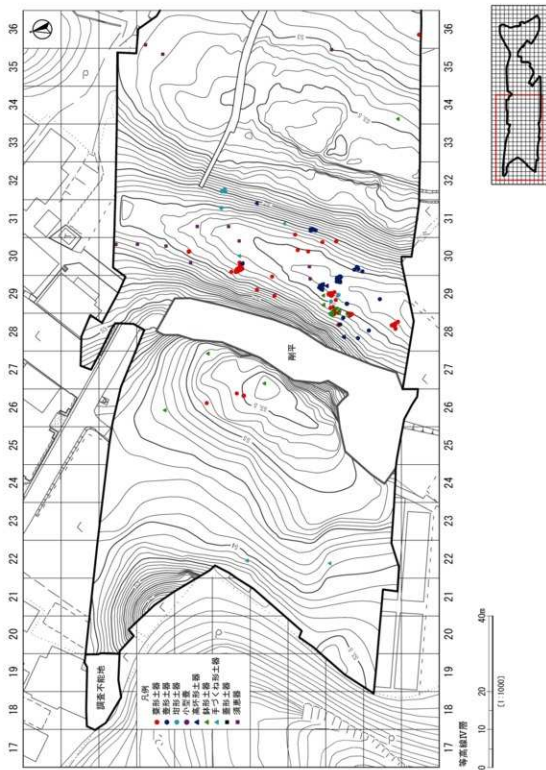
3 土器・須恵器

(1) 調査区西部 (第237図)

当該時期の包含層遺物は少なかったが、そのうち西部の41点、東部の35点を図化した。西部の出土傾向は、I-29区・J-29区に遺物が集中しており、特に高坏

形土器についてはそのほとんどがI-29区で出土している。

甕形土器、壺形土器、埴形土器、高坏形土器、鉢形土器、手捏ね土器が出土している。



第327図 古墳時代 西部出土土器分布図

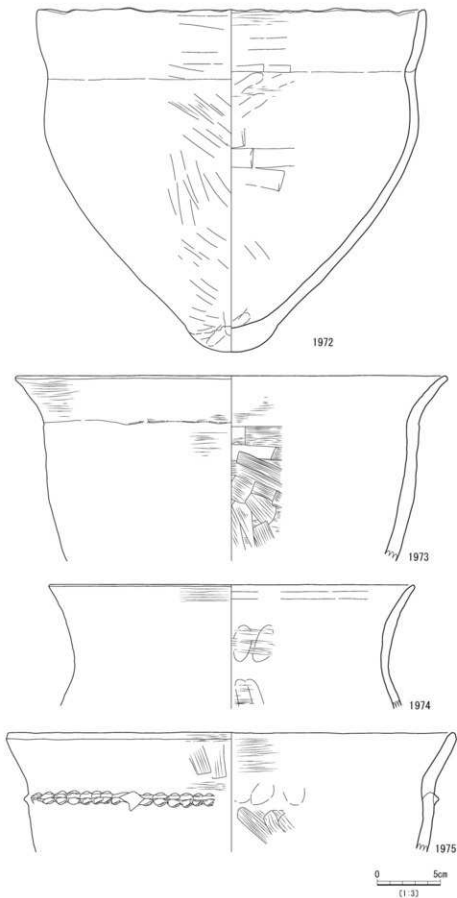
壺形土器 (第 328・329 図 1972~1985)

口縁部は、緩やかに外反し先端付近でわずかに内弯するもの、強く外反するもの、緩やかに外反するもの、頸部に突帯が貼り付けられるものがある。

1972 は緩やかに外反し先端付近でわずかに内弯するもので口縁直径 31.0cm、推定高 27.0cm の丸底甕である。口縁端は凸凹し、肩がやや張る丸みを帯びた器形をしている。底部は粘土が均等に貼り付けられており、凸レンズ状に突出している。胴部にススが附着している。1973 は口縁直径 34.2cm の大型甕で、口縁が強く外反する。外面は口縁へかき上げているため、頸部で段状を呈している。外面はヘラナデ、内面はハケナデである。縦ナデが横ナデにより消されているが、頸部に縦ナデヘラ押し当てを明瞭に残すことにより段状を呈している。1974 は緩やかに外反するもので、内外ともに基本は横ナデであるが、胴部は縦ナデも確認できる。1975 は頸部に突帯を貼り付け、指でつまみ出すようにして稜を作出している。また、つまみ出す際についたと考えられる爪の痕が明瞭に残る。内面に強くヘラを押し当てているため器面が歪んでいる。1976 の外面はヘラ斜ナデ・横ナデ、内面は横ナデである。色調はにぶい褐色である。

1977 は完形品である。口縁直径 17.4cm、高さ 20.6cm の丸底で、長胴で頸部は窄まり、口縁は緩やかに外反する。輪積みの痕が内面頸部近くに明瞭に残り、段状になっている。器形は歪んでおり、器面の凹凸が激しい。また、1974・1976 と口縁部の形態が似ていることから、3 点は同様の器形であるとみられる。

1978 は胴部である。手捏ね風で、内面に指で押した痕が強く残



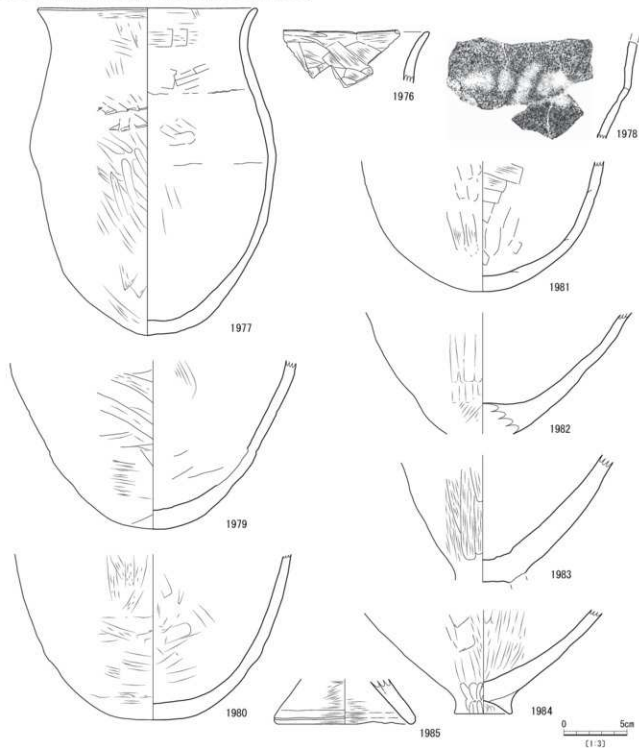
第 328 図 古墳時代 西部出土土器 (1)

るため器面が歪む。

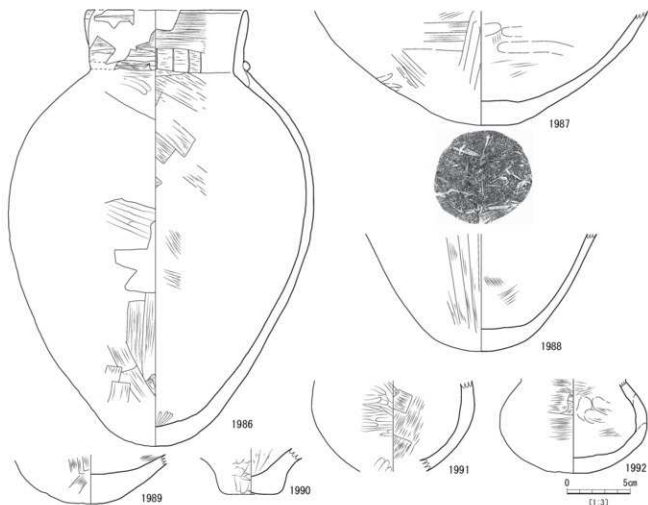
1979～1984は底部で、1979～1982は丸底、1983・1984は脚台付である。1979の外側面はナデ方向が定まっておらず、器面の凹凸が激しい。1980の外側面は調整が雑で、器面の凹凸が残るが、内側の調整は丁寧で器面は滑らかである。1981は外側のヘラ糺ナデが一部光沢を帯びる。胎土は石英を多く含む。1982・1983は胴部から底部で、1982は丸底、1983は脚台付で器形は雑であり、脚台は欠

損している。1984は胴部から脚台である。底に粘土を貼り付け、貼り付け部には指圧痕がみられる。

1985は脚台である。中空で外に開きながら下にのびる。端部の整形が雑である。図面には反映できなかったが、肉眼観察で体部と脚台境には上下から指押しした突帯の貼り付けが確認できた。また、外面端部に1条の凹線が通る。



第329図 古墳時代 西部出土土器(2)



第330図 古墳時代 西出土土器(3)

壺形土器(第330図1986~1990)

1986は完形品で口縁直径12.0cm、高さ34.5cmの丸底である。やや肩の張った長胴の器形を呈し、口縁はわずかに外に開きながらまっすぐ立ち上がる。頸部の突帯は粘土紐を貼り付けているが、ほとんど剥落している。上下の調整は雑である。

1987~1990は底部である。1987~1989は丸底で、底部から胴部にかけて緩やかに立ち上がり底部が肥厚する。1987は底に粘土を貼り付けて分厚くし、底部には木の葉状の線刻みがみられる。1988は調整が丁寧で、器面が滑らかである。1989は特に底部が肥厚し、厚さ2.3cmである。器面が凸凹している。1990は不安定な小さい平底で、内外ともにヘラ斜ナデである。

埴形土器(第330図1991・1992)

1991・1992は埴形土器である。1991は下から緩やかに立ち上がり、胴部中央付近に最大径がある球状の器形を呈する。器壁がやや厚く、平均して0.9cmほどある。1992は底部から緩やかに立ち上がり、胴部中央付近に最大径がある楕円体状の器形を呈する。頸部が窄まって口

縁に縁く形状と考えられる。内面には指オサエの痕が強く残る。外面底部は黒色化している。

高環形土器(第331図1993~1999)

1993~1996は坏部が腹部から屈折し、口縁部が外反する器形である。1993の口縁直径は23.0cmである。深い坏部で脚部端が欠けている。脚部はやや外反しながら下にのびる。坏部と脚部のつなぎ目には脚部内面から粘土塊を充填している。摩滅しているため調整は不明瞭だが縦ナデである。1994~1996は同じような器形の坏部だが、やや浅い。内外ともに横ナデ整形されており、特に外面は丁寧な横ナデが残る。

1997~1999は坏部下半から脚部の破片である。坏部と脚部との外面接合部は丁寧な磨かれている。坏部下に突起がみられる。1998は坏部とのつなぎ目からまっすぐ下に伸び、外に開きながら途中で強く屈折し、段を作って大きく外反する器形を呈する。坏部から脚部にかけてソケット状に押し込み、接合部を成形している。つくりが非常に丁寧で内底部のみが剥離している。接合部は接着しやすいよう掻き目などを施している。1999の脚は

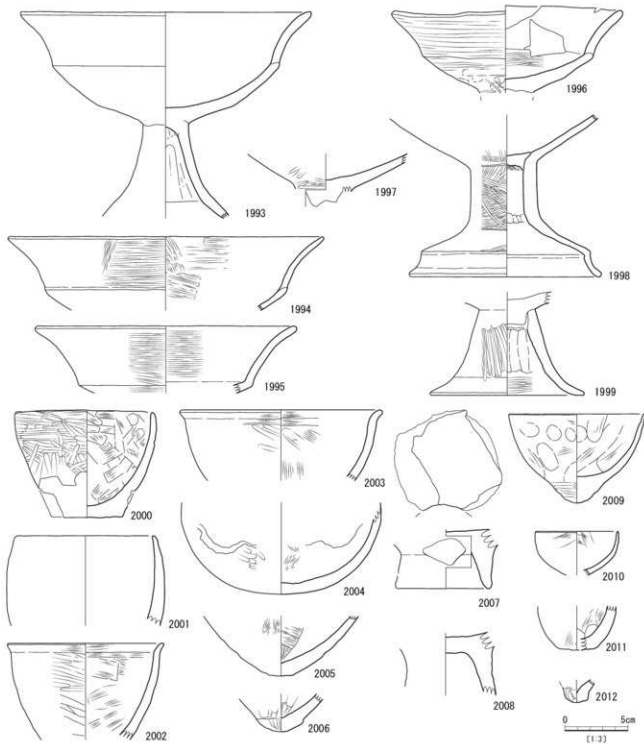
外へ開きながら下にのび、端部付近で強く外反する。1997・1998と同様の技法で接合していると考えられる。坏部下部に脚部内面接合部に向かって粘土を押し込んだ痕が残る。

鉢形土器 (第331図 2000~2008)

2000は口縁付近でわずかに内弯する盃形の器形を呈する。口縁直径10.7cm、高さ8.5cmの完形品だが、外面

底部付近は、底部の中心を残すように広く欠けており、二次焼成時に破裂したと考えられる。内外ともに研磨に近い丁寧なナデだが、底の調整は雑である。

2001~2003は口縁部から胴部である。2001は口縁がやや内弯し、先端は先細る。2002は外にスス、内にコゲが残っている。2003は口縁直径16.0cmで、先端近くで外反する。



第331図 古墳時代 西部出土土器(4)

2004～2006は底部である。2004は内面からの人為的な打ち欠きが確認できる。2005は底部に粘土を貼り付け、突起状平坦面を作出している。2006は凸レンズ状に突出する底部である。外面は雑な縦ナデ、内面は横ナデである。胎土は粗い土を用いている。

2007・2008は脚台である。中空で脚はまっすぐ下へのび、脚部内面上部と内底は平坦である。外面は縦ナデ、内面は横ナデ仕上げである。脚台を残すように内面に残存しているため、意図的に打ち欠いている可能性もある。2007は抉り込みのような痕が確認できる。

手捏ね土器 (第 331 図 2009～2012)

2009は円錐状の器形で、底部は肥厚し丸い尖底である。口縁端部は先細り、焼成によるひび割れが器壁全体に見られる。底部には黒斑が確認でき、内面にも一部黒斑が認められる。

2010は薄手の半球状の器形で、口縁端部は先細る。外面には黒斑が確認できる。

2011・2012は底部である。2011は不安定な平底で、胴部にかけて丸みをもつ。内外ともにナデで、色調はにぶい黄色である。2012は丸い尖底で、内面には絞りの痕が確認できる。内外ともにナデである。色調はにぶい橙色で、胎土は砂質土である。

(2) 調査区東部 (第 333 図)

東部はE-G-40～42区を中心に出土しており、該当するグリッドには11号住居跡や土坑1～4号があるため、包含層として掲載するが遺構出土遺物の可能性も考えられる。

器種は、甕形土器、壺形土器、埴形土器、高坏形土器、

手捏ね土器、鉢形土器、蓋形土器である。

甕形土器 (第 332・334 図 2013～2027)

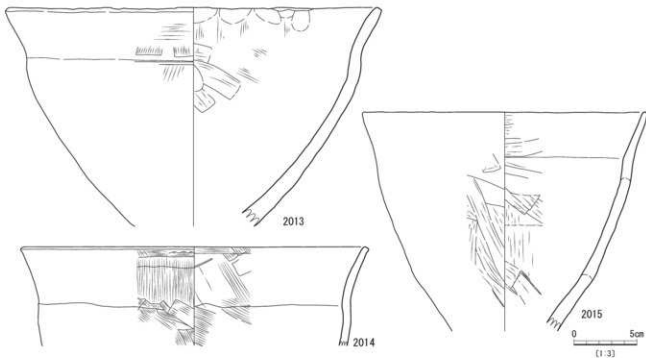
西部と比較すると、東部が多く出土している傾向がある。突帯が無いものもあるもの、大きく二種類に分かれるが、器形に大きな差が見られない。

2013～2020は口縁～胴部である。2013～2015は突帯が無い。口縁部外面はヘラ縦ナデ調整が確認できる。その後、ヘラ横ナデを施しているものもある。

2016～2020は三角突帯貼付がある。2016～2018・2020は刻み目がなく、断面形状は角がしっかりとした三角形を呈する。2019は突帯をつまむ様に整形し、2.0～2.5cmの幅で不規則に刻目を入れる。口縁・突帯とも歪みが激しい。2017は断面形状が丸みを帯びた三角形を呈する。突帯下部がしっかりとナデ付けられていないため、接合部が確認できる。

2013～2016・2018～2020は頸部から口縁端部にかけてはほぼ同じ厚みで、長く緩やかに外反するもので、2017は直線的のびるものである。2013・2015・2016・2018～2020は口縁端部を平らに整形し矩形であるが、2015・2017は丸くおさめている。口径は22.6～34.0cmと幅があり、30.0cm程度の2013・2018・2019と、それ以下の2014～2017・2020に分類ができる。胴部上半が残存しているものに関しては、どれもススが付着しており使用した痕跡が見られる。

2021～2027は胴部～脚台である。上げ底のものと同空のものに分かれる。2021は脚台が剥離した胴部である。胴部上面にススが付着する。2022は上げ底の胴部～脚台である。内湾しながら立ち上がる小型の甕と想

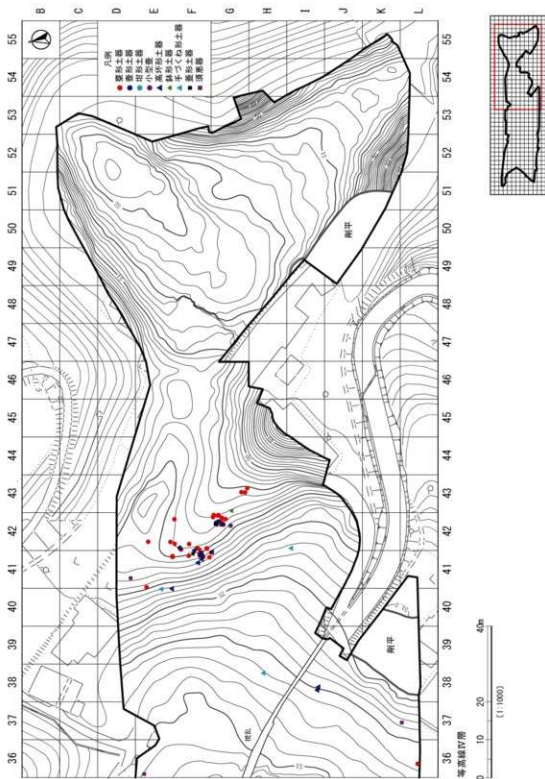


第 332 図 古墳時代 東部出土土器 (1)

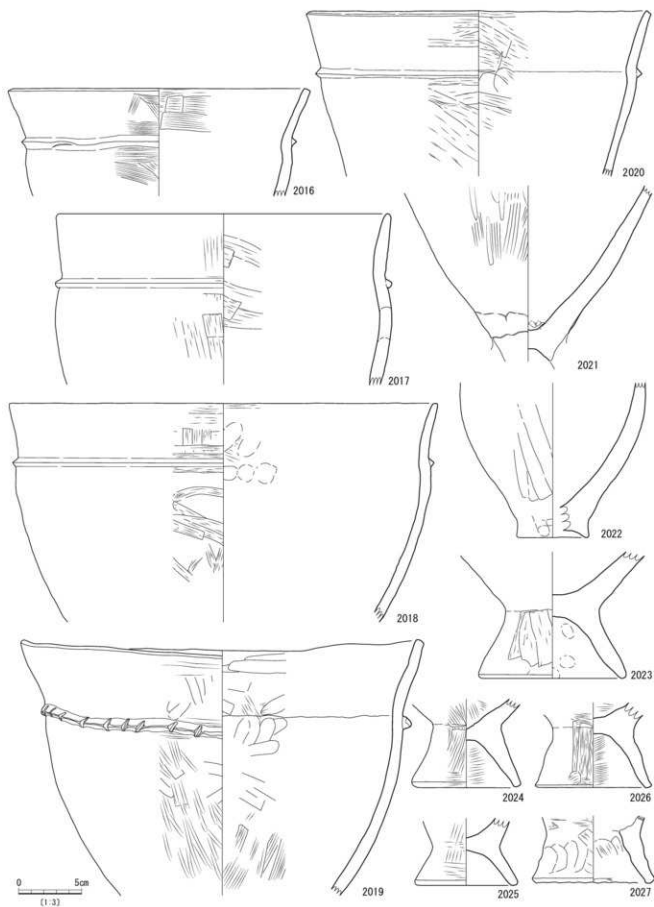
定される。胎土には小石がやや多めに含まれ、焼成は軟質である。

2023～2027 は中空の脚台である。2023～2025 は外面調整にヘラ縦ナデを施している。2023 は、外面調整のヘラ縦ナデが一部ケズリの様に強めに施される。2025 はヘラ縦ナデ後に指ナデをし、器面を滑らかにしている。

また、焼成が良好で硬質である。2026 はヘラ縦ナデの後指オサエを施しているため、器面が凸凹している。2027 も器面に指オサエ、ヘラナデの痕がよく残り2026 より凹凸が激しい。また、胴部からの剥離も確認できる。焼成はやや軟質で、剥離面は橙色を呈している。端径は2023 が大きく11.6cmで、2025 が小さく8.0cmである。



第 333 図 古墳時代 東部出土器分布図



第 334 図 古墳時代 東部出土土器 (2)

壺形土器 (第 335 図 2028~2033)

2028~2031 は底部である。2028・2029 は丸底である。2028 は底部中心が分厚く最大厚は 4.8cm である。底部から直線的に開くように立ち上がる。粘土塊を中心に積み上げるように整形している。外面調整はヘラ縦ナデが施されるが部分的にミガキのようになり、光沢を帯びる。2029 は底部が肥厚せず、全体的に厚みが均一で高さの低い球胴形を呈している。外面調整のヘラナデは方向が定まっておらず、ヘラの痕がよく残る。黄石・灰石など小石がやや多く含まれる。

2030・2031 は平底である。2030 は底部の貼り付けが弱く接着部が明瞭である。内外とも調整が粗く、ヘラナデや粘土がヨレた痕がよく残る。器壁も大きく歪んでいる。2031 も同様に外面調整が粗い。平底だが、丸みをもつため安定はしない。内底部に調整時にできたと考えられる粘土塊がそのまま残り、底面には繊維状圧痕が見られる。2030・2031 ともに胎土に小石をやや多く含む。

2032・2033 は小型壺である。2032 は頸部内面に絞りの痕が見える。頸部が窄まってから口縁に続く形状であると考えられる。器壁がやや厚く、平均して 1.0cm 程ある。胴部外面の上部はナデを丁寧に施しているが、下部はヘラの痕がよく残り、やや雑である。内面には指オサエの痕が残る。2033 は指でつまみ上げるように胴部を整形した短頸の丸底壺である。胴部下半から底部にかけて広く剥落しているが、粘土にしわが見られることから焼成時に暴れて剥落したものと考えられる。胎土に黄石・茶石などが多く含まれ、0.5cm 程の粒の大きい小石も見られる。

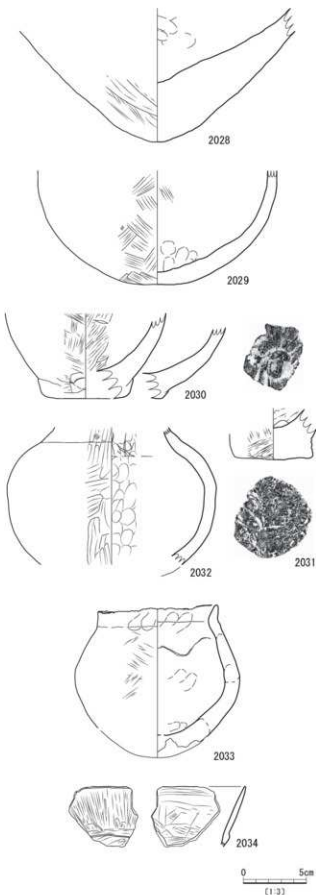
埴形土器 (第 335 図 2034)

口縁端部を先細るように仕上げている。腰部の後は外面調整時のヘラを強く当てることにより作出されている。器壁は 0.5cm 程と薄い。

高坏形土器 (第 336 図 2035~2041)

2035・2036 は坏部である。2035 は内湾しながら広がり腰部から緩やかに外反し、立ち上がる。内外ともに明瞭な後を持つ。ハケナデ調整で、基本は縦方向であるが、内口縁部は横方向に施される。また、内口縁部にスガがみられることから蓋に転用されていた可能性が指摘できる。2036 は盥形で内湾しながら立ち上がり、口縁端部は先細るように仕上げている。西部出土の 1997・1998 等と同様の方法を用いており、坏部から脚部にソケット状に押し込み、接合部を成形している。焼成は良好で硬質である。

2038~2041 は脚部である。2037・2038 は大きく「ハ」の字状に開くもので、2039・2040 は緩やかに円錐状に開くもの、2041 は筒状である。2037 の外面はハケ縦ナデ後ミガキが施され、光沢を持つ。中央よりやや上に穿孔がされている。また、割れ口にもう 1 か所穿孔が確認で



第 335 図 古墳時代 東部出土土器 (3)

きることから2か所以上は穿孔していることがわかる。

2038 はハケ縦ナデを細かく施しており、ハケ目状に残る。坏部は接合面から剥離している。色調は比較的白色で浅黄橙色を呈している。

2039・2040 は円錐形である。2036 と同様の方法で坏部から脚部にソケット状に押し込み、接合部を成形しているものである。2039 は脚台の粘土がほとんど乾燥してから接合されたものと見られ、接着用の粘土から坏部が剥がれたものと考えられる。2040 は接着用の粘土が棒状に残っている。内外とも縦方向の丁寧なナデ調整で、端部は薄い。2041 は筒状で、端部が外に開く器形である。内面は粗いヘラ縦ナデが施されている。外面は縦方向のヘラナデである。

手捏ね土器 (第 336 図 2042~2045)

尖底で、円錐状にほぼまっすぐのびる形状と、やや丸みをもち内湾しながら立ち上がり口縁付近でより内側に屈曲するものがある。

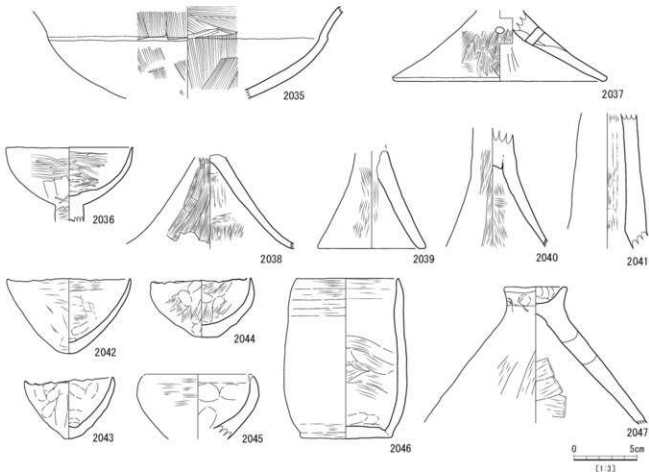
2042・2043 は円錐状で口縁端部が先細るものである。2042 はほぼ完形である。指オサエ後ナデを施しているため、器壁の凹凸がほとんどみられない。丁寧なつくりをしている。2043 は外面に指オサエの痕が残るが、内面は比較的丁寧にナデしており、滑らかである。

2044・2045 はやや丸みをもち内湾しながら立ち上がり、口縁付近で内に屈曲するものである。2044 は完形で、外面は指オサエの痕が残るが、内面はナデで仕上げている。底部は一部平坦な面があるが、全体的に不整形である。口縁端部はつまみ出すようにして薄く整形している。外面にススが附着している。2045 は外面調整の指オサエをナデ消している。また、全体的にやや厚みがある。

2042~2044 は口縁端部を横ナデ、あるいはつまみ出すようにし、先細るように作出している。

鉢形土器 (第 336 図 2046)

2046 は口縁部の一部が欠損しているが、ほぼ完形である。円盤状底部の外面に積み上げていく作り方で、底部は短く垂直に立ち上がり、腰部は少し膨らんで、ほぼそのまま口縁に向かってやや内湾気味に直線的に立ち上がる。底部は平底であるが、中央部が少し膨らんでいるため自立はするが安定感がややない。外面調整のヘラナデが一部ミガキ状になり光沢を帯びている。外面の一部に縦方向の黒斑がみられる。口縁部は横ナデを施し、やや先細るように仕上げている。調整は非常に丁寧である。大型の湯飲み茶碗のような形状をしている。



第 336 図 古墳時代 東部出土土器 (4)

蓋形土器 (第 336 図 2047)

つまみ径が 5.0cm 程で、口縁部に向かって直線的に大きく開く形状を呈する。天井部は指で押さえており、やや凹む。外面調整は比較的丁寧なヘラ縦ナデが施されている。つまみ付近に、調整を施した時についたと考えられる爪痕が見られる。外面欠損部付近にスガが付着している。形状が甕に類似していることから甕の可能性も指摘できる。

(3) 須恵器 (第 337 図)

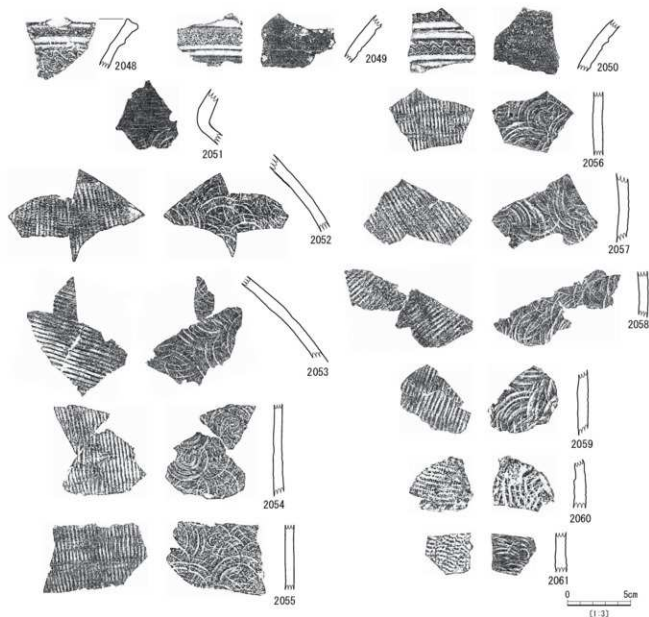
包含層から出土した須恵器の中で、14 点を図化した。そのうち西部側から出土した物が 10 点あり、全体の約 7 割である。グリッド J ~ D - 29 ~ 33 区で西部出土土師器が多く出土した位置とほぼ同じか、やや北側に当たる。土師器と同様に流れ込みと考えられる。遺構内から

の出土は確認されなかった。器種はすべて甕である。

2048~2050 は緩やかに外反しながら立ち上がる口縁部で、端部断面が矩形になる。外面に突帯文と、その下に 7 条ほどの櫛描波状文を挟んで、上下に 1~2 条凹線が 2 段巡る。2048 は黄灰色、2050 は光沢のある黒褐色の自然釉がかかる。

2051 は頸部から肩部、2052・2053 は肩部、2054~2061 は胴部である。外面のタタキ痕は格子状タタキ痕と平行状タタキ痕に分かれる。内面当て具は全て細かい同心円である。2060 は外面に光沢のあるオリーブ灰色でガラス質の自然釉がみられる。2061 は光沢のある黒褐色の自然釉がかかる。

割れ口は赤褐色を呈し、焼成が良く硬質で、胎土が緻密である。



第 337 図 古墳時代 須恵器

第 23 表 古墳時代住居跡・土坑出土土器観察表

昭和 番号	昭和 番号	出土 位置	取上 番号	器種	部位	口径 (cm)	底径 (cm)	溝		文 様	土 質		焼成 色	胎 色	土 質	備 考		
								外 面	内 面		外 面	内 面						
305	1883	古S11	14040	甕	口一胴下	27.3- 28.4	-	丁字女横ナテ 横ナテ	丁字女横ナテ 横ナテ	1条突帯	にぶい橙-に ぶい橙	にぶい橙	普通	○	○	○	○	スス
305	1884	古S11	19114	鉢	口縁~底	15.7	4.5- 6.3	横ナテ, ハウ 横ナテ, 横ナテ 横ナテ, 横ナテ	横ナテ, ハウ 横ナテ, 横ナテ 横ナテ, 横ナテ	-	にぶい橙	橙	普通	○	○	○	○	スス, 黒原 器高 11.0
305	1885	古S11 P1	15826	小型甕	口縁~底	7.3	-	横ナテ, ナテ 横ナテ	横ナテ, ナテ 横ナテ	1条北帯	にぶい橙-灰 色	にぶい橙-灰 色	普通	○	○	○	○	スス 器高 10.6
305	1886	古S11	14947	甕	口縁	32.3	-	丁字女横・横 ナテ	丁字女横・横 ナテ	1条斜目突帯	にぶい橙	にぶい橙	良好	○	○	○	○	-
305	1887	古S11 G2	12042	高坏	完形	12.4	14.5	ヘラ横ナテ 横ナテ	ヘラ横ナテ 横ナテ	-	明黄橙	明黄橙	良好	○	○	○	○	輝石 器高 12.0
305	1888	古S11	14524	甕	口縁	-	-	横ナテ	横ナテ, 斜ナテ	1条突帯	にぶい橙	にぶい橙	普通	○	○	○	○	吹きこぼれ
305	1889	古S11	14925	甕	口縁	-	-	横ナテ, 横ナテ	横ナテ	-	黄橙-灰濁	にぶい橙	普通	○	○	○	○	長石
305	1890	古S11	14537	甕	口縁	-	-	横ミガキ	横ミガキ	-	橙	にぶい橙	普通	○	○	○	○	スス
305	1891	古S11	14532	鉢	胴	-	-	横ナテ, 横ミ ガキ	丁字女横ナテ	-	黒濁, 明黄濁	にぶい橙	普通	○	○	○	○	赤石
305	1892	古S11	14541	甕	胴	-	8.8	横ナテ	ナテ	-	にぶい橙	にぶい橙	普通	○	○	○	○	-
306	1893	古S11 G2	11659	高坏	胴	-	18.6	横ナテ, 横ミ ガキ	横ナテ, 横ミ ガキ	円孔 5個	浅黄橙-橙	灰濁-にぶい 橙	普通	○	○	○	○	赤石
306	1894	古S11 G2	12024	高坏	胴	-	-	ヘラ横ナテ, 横 ナテ	斜ナテ, ヘラ 横ナテ	-	にぶい赤濁	にぶい赤濁	普通	○	○	○	○	-
306	1895	古S11	14941	小型 丸底甕	口縁	-	-	横ナテ, 横ミ ガキ	横ミガキ	-	橙	にぶい橙	普通	○	○	○	○	-
306	1896	古S11	-	小型 丸底甕	口縁	-	-	横・横ナテ	横ナテ	-	明黄濁	明黄濁	良好	○	○	○	○	黒粒, 赤石
306	1897	古S11	14529	甕	底	-	-	横・斜ナテ	横・横ナテ	-	橙-灰濁	にぶい灰濁 横ナテ	普通	○	○	○	○	-
307	1898	古S12	16684	甕	胴	-	-	ヘラナテ, 横 ナテ	ヘラナテ	1条突帯	にぶい橙-灰 色	橙	普通	○	○	○	○	スス
307	1899	古S12	18811	甕	胴	-	-	横ナテ	ヘラナテ, 斜 ナテ	1条斜目突帯	にぶい橙	橙	普通	○	○	○	○	スス
308	1900	古S12	17026	甕	底	-	-	横ナテ	ナテ	-	にぶい橙	灰濁	普通	○	○	○	○	-
308	1901	古S12 J2	14849	高坏	胴	-	-	ヘラ横ナテ, 横 ナテ, 横ミガキ	ヘラ横ナテ, 横 ナテ, 横ミガキ	-	橙-灰濁	にぶい橙	普通	○	○	○	○	-
308	1902	古S12	16813	埴	口縁~底	11.2	-	ヘラ横ナテ, 斜 ナテ, 丁字女ナテ	丁字女ナテ	-	明黄濁-灰濁	にぶい黄濁- 灰濁	普通	○	○	○	○	黒原
308	1903	古S12	15389	鉢 (子役)	口縁~底	7.3	-	横ナテ, ヘラ ナテ	横ナテ, ヘラ ナテ	-	橙-灰濁	橙	普通	○	○	○	○	-
309	1906	古S13	14906	甕	胴	-	-	横ナテ, ヘラ 横ナテ	斜ナテ	1条斜目突帯	橙	にぶい橙	普通	○	○	○	○	-
309	1907	古S13	5-No.6	小型 埴(子役)	胴	-	-	ナテ, 横ナテ	ナテ, 横ナテ	-	にぶい黄橙	灰青濁	良好	○	○	○	○	赤石
309	1908	古S13	5-No.56	高坏	口縁	-	-	-	-	-	にぶい橙	橙	良好	○	○	○	○	-
311	1909	古S13	No.4	甕	胴~底	4.0	-	ヘラ横ナテ	ヘラ斜ナテ, 横ナテ	-	橙-にぶい橙	橙	普通	○	○	○	○	-
311	1910	古S13	No.13	甕	胴~底	9.8	-	ヘラ横ナテ, 斜 ナテ, 横ナテ	ヘラ横ナテ, 斜 ナテ, 横ナテ	-	にぶい黄濁- 灰濁	にぶい黄濁- 灰濁	普通	○	○	○	○	ゴケ
311	1911	古S13	No.3	甕	胴	8.0	-	横ナテ, 横ナテ	横ナテ, 横ナテ	-	にぶい橙	にぶい橙, 黄 濁	普通	○	○	○	○	-
311	1912	古S13	No.1	密 口縁	15.3	-	-	ヘラナテ	ヘラナテ	円縁	橙	橙	普通	○	○	○	○	-
311	1913	古S13	No.2	密 口縁	-	4.5	-	横ナテ	ナテ	-	明黄濁	浅黄濁	普通	○	○	○	○	-
312	1914	古S13	14227	甕	口縁	-	-	ヘラ横ナテ	ヘラ横ナテ	-	灰濁	にぶい黄濁	普通	○	○	○	○	-
312	1915	古S13	14931	甕	口縁	-	-	横・横ナテ	横ナテ	-	灰濁	橙	普通	○	○	○	○	スス
312	1916	古S13	-	甕	口縁	-	-	ヘラ横ナテ, 横 ナテ	横ナテ	-	にぶい赤濁	灰濁	普通	○	○	○	○	-
312	1917	古S13	-	甕	胴	8.2	-	横・横ナテ	横・横ナテ	-	にぶい橙	にぶい赤濁色	普通	○	○	○	○	-
312	1918	古S13	13366	甕	胴	9.1	-	横ナテ, 横ナテ	横ナテ, 横ナテ	-	にぶい黄濁	にぶい黄濁	普通	○	○	○	○	-
312	1919	古S13	14077	甕	底	2.6	-	ヘラナテ	ヘラナテ	-	橙	にぶい橙	普通	○	○	○	○	-
312	1920	古S13	14940	甕	底	-	-	ナテ	斜ナテ	-	にぶい橙, 濁	にぶい橙	普通	○	○	○	○	黒粒
312	1921	古S13	-	高坏	坏	12.5	-	ヘラ横ナテ, 横 ナテ	ヘラ横ナテ, 横ナテ	-	橙	橙-にぶい橙	普通	○	○	○	○	-
312	1922	古S13	14906	高坏	坏	-	-	横ミガキ	横ナテ, ヘラ 横ナテ	-	浅黄橙	浅黄橙	普通	○	○	○	○	-
312	1923	古S13	13174	高坏	坏	15.0	-	横ナテ, ハウ 横ナテ	横ナテ	-	にぶい橙	にぶい橙	普通	○	○	○	○	-
312	1924	古S13	-	高坏	坏	-	-	横ミガキ	横ナテ	-	黄橙	浅黄橙	普通	○	○	○	○	-
312	1925	古S13	-	鉢	完形	9.0	-	横ナテ, ヘラ 横ナテ	横ナテ, ヘラ 横ナテ	-	浅黄橙-にぶ い黄濁	にぶい黄濁	普通	○	○	○	○	-
312	1926	古S13	14738	鉢	口縁~胴	8.8	-	横ナテ, ヘラ 横ナテ	横ナテ, ヘラ 横ナテ	-	橙-にぶい赤 濁	にぶい赤濁	普通	○	○	○	○	-
312	1927	古S13	14951	鉢(子役)	底	-	-	ヘラ横ナテ, 横ナテ	ヘラ斜ナテ, 横ナテ	-	にぶい橙	にぶい橙	普通	○	○	○	○	-
316	1929	古S14	3606	甕	口縁~胴上	31.8	-	ヘラ横ナテ, 横 ナテ	ヘラ斜ナテ, 横ナテ	1条斜目突帯	にぶい橙-に ぶい赤濁	にぶい橙	普通	○	○	○	○	-
316	1930	古S14	3609	甕	口縁~胴	8.6	-	横・横ナテ	横ナテ, 横ナ テ	1条斜目突帯	赤濁色	にぶい赤濁色	普通	○	○	○	○	赤石

図録 番号	出土 位置	取上 番号	器種	部位	口径 (cm)	底径 (cm)	器 形			色 澤		焼成	胎 土				備 考
							外 面	内 面	文 様	外 面	内 面		白 灰石	黄 灰石	石 灰石	黒 石	
316-1901	古S14	37915	甕	口縁	30.4	-	ヘラナデ	ヘラ履・斜ナデ	-	灰褐色～灰青	12.55～12.55	普通	○	○	○	○	-
316-1902	古S14	37302	甕	口縁	-	-	斜ナデ	ヘラ履・斜ナデ	1条夾着	12.55～12.55	12.55	普通	○	○	○	○	-
316-1903	古S14	37296	甕	唇	-	8.4	履・横ナデ	斜ナデ	-	12.55	12.55	普通	○	○	○	○	赤石
316-1904	古S14	-	高坏	底	-	-	ヘラナデ	ナデ	-	12.55	12.55	普通	○	○	○	○	-
316-1905	古S14	37322	鉢	口縁～胴	14.8	-	ヘラナデ	ヘラナデ	-	12.55	12.55	普通	○	○	○	○	スス、黒炭
316-1906	古S14	37500	鉢	口縁	-	-	ヘラ履・斜ナデ	ヘラ履ナデ	-	12.55	12.55	普通	○	○	○	○	-
316-1907	古S14	-	鉢 (手取)	口縁	-	-	履・横ナデ	履・斜ナデ	-	12.55	12.55	普通	○	○	○	○	赤石
316-1908	古S14	-	鉢 (手取)	口縁	-	-	履・横ナデ	横ナデ	-	12.55	12.55	普通	○	○	○	○	赤石
316-1909	古S14	-	埴	口縁	-	-	履ナデ	履ナデ	底文	12.55	12.55	普通	○	○	○	○	-
316-1940	古S14	-	埴	底	-	-	履ナデ	斜ナデ	底文、2条夾着	12.55	12.55	普通	○	○	○	○	-
319-1942	古S15	-	埴	底形	8.8	-	履ナデ、履1ナデ	履・横ナデ	4條	12.55	12.55	普通	○	○	○	○	酒落、黒炭 器高15.3
319-1943	古S15	581 No.3	甕	口縁	28.0	-	ヘラ履・斜ナデ	ヘラ履ナデ	1条夾着	12.55	12.55	普通	○	○	○	○	黒炭
319-1944	古S15 G-1423	22723	鉢	口縁	30.6	9.0	履ナデ、ヘラナデ	ヘラ履ナデ、履ナデ、指オサエ	-	12.55	12.55	普通	○	○	○	○	スス、赤石 器高12.0
319-1945	古S15	581 No.8	甕	胴～底	-	9.0	ヘラ履ナデ、履ナデ	ヘラ履・斜ナデ、履ナデ	-	12.55	12.55	普通	○	○	○	○	-
319-1946	古S15	581 No.18	高坏	底	10.6	-	ナデ	ナデ	-	12.55	12.55	普通	○	○	○	○	スス
320-1947	古S15	22736	甕	口縁	19.8	-	履ナデ	ヘラ履ナデ、履ナデ	-	12.55	12.55	普通	○	○	○	○	-
320-1948	古S15	22735	甕	口縁	-	-	ナデ	履ナデ	-	12.55	12.55	普通	○	○	○	○	-
320-1949	古S15	22817	甕	底	-	5.2	斜ナデ、履1ナデ	ナデ	-	12.55	12.55	普通	○	○	○	○	赤石
320-1950	古S15	-	小型丸底甕	口縁	11.4	-	丁字女履ナデ、ヘラ履ナデ	丁字女履ナデ	-	12.55	12.55	普通	○	○	○	○	-
320-1951	古S15	-	埴	口縁	8.6	-	履ナデ	履ナデ	-	12.55	12.55	普通	○	○	○	○	酒落
320-1952	古S15	22862	甕	口縁	4.6	-	履ナデ	履ナデ	-	12.55	12.55	普通	○	○	○	○	-
320-1953	古S15	-	埴?	口縁	5.2	-	履ナデ	履ナデ	-	12.55	12.55	普通	○	○	○	○	-
320-1954	古S15	No.7	土製品	完整品	-	-	-	-	-	黒	黒	普通	○	○	○	○	4.0 × 3.1 × 3.0
322-1958	古S11 古S13	14900	甕	口縁～胴	24.5～25.6	-	ヘラ履・斜ナデ	ヘラ履・横ナデ、指オサエ	斜目夾着	12.55	12.55	普通	○	○	○	○	スス
322-1959	古S13	17112	甕	口縁	-	-	履・横ナデ	履・斜ナデ	-	12.55	12.55	普通	○	○	○	○	-
322-1960	古S13	17112	高坏	口縁	-	-	履1ガキ	履1ガキ	-	12.55	12.55	普通	○	○	○	○	スス、黒 器高11.0
322-1962	古S12 G43-44	11780	甕	口縁	29.4	-	ナデ	ナデ	斜目夾着	12.55	12.55	普通	○	○	○	○	赤石
323-1963	古S12 P41	12690	甕	胴～下	-	-	履・斜ナデ	ナデ	-	12.55	12.55	普通	○	○	○	○	赤石
323-1964	古S12	16407	小型甕 (手取)	胴～底	-	2.3～2.7	履ナデ	履・横ナデ、指オサエ	-	12.55	12.55	普通	○	○	○	○	-
323-1965	古S14	16435	甕	大形	胴	-	履ナデ	斜ナデ	底文、2条夾着	12.55	12.55	普通	○	○	○	○	摩耗、スス、 赤石
324-1966	古S16	16880	小型甕	口縁～底	7.0	-	履・横ナデ	ナデ	-	12.55	12.55	普通	○	○	○	○	器高8.0
325-1967	古S17	27569	鉢	底形	8.1	-	斜ナデ	斜ナデ	-	12.55	12.55	普通	○	○	○	○	器高4.2
325-1968	古S18	20300	甕	口縁	30.0	-	ヘラ履・斜ナデ	ヘラナデ、指オサエ	斜目夾着	12.55	12.55	普通	○	○	○	○	スス
325-1969	古S18	21256	甕	底	-	6.5	丁字女履ナデ	斜ナデ	-	12.55	12.55	普通	○	○	○	○	赤石
326-1971	古S19	21525	甕	唇	-	8.7	斜ナデ	斜ナデ	-	12.55	12.55	普通	○	○	○	○	-

第 24 表 古墳時代住居跡・土坑出土石器観察表

図録 番号	出土位置	層位	取上 番号	器種	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	石 材	備 考
308-1904	古S12	①	17039	磨石・磨石類	11.2	9.6	4.5	742.1	砂岩	
308-1905	古S12	①	17038	磨石・磨石類	8.9	9.2	4.6	672.7	花崗岩	
312-1928	古S13	①	14908	磨石	(11.60)	5.40	1.10	85.7	頁岩	
316-1941	古S14	①	30080	磨石・磨石類	(5.94)	(6.87)	(2.65)	(129.8)	砂岩	
321-1955	古S15	①	22726	磨石	17.65	10.9	8.7	2003.5	砂岩	
321-1956	古S15	①	22727	磨石・磨石類	17.1	9.15	8.3	1866.8	砂岩	
321-1957	古S15	①	22814	磨石・磨石類	11.8	9.9	6.9	1261.3	ホルンフェルス	
322-1961	古S13	②	14116	磨石製品	11.3	8.3	4.4	80.6	磨石	
323-1970	古S18	①	21257	磨石	10.0	7.0	1.2	87.6	頁岩	

第25表 古墳時代西部土器観察表

墳号 調査 番号	出土位置	層位	取上 番号	器種	部位	口径 (cm)	底径 (cm)	調 整				焼成	胎 土				備 考	
								外 面		内 面			白 磁石	赤 磁石	黒 磁石	灰 石		黒 石
								外 面	内 面	外 面	内 面							
328	1972 F-G30	Ⅱ a-a	23983	甕	口縁-底	31.0	-	ヘラ履ナゲナ ナゲ	ヘラ履ナゲ, 履ナゲ	横	横	普通	○	○	○	○	○	-
328	1973 D6	Ⅱ b	29483	甕	口縁-胴	34.2	-	ヘラナゲ	ハナゲナゲ	横-横底	横-横底	普通	○	○	○	○	○	-
328	1974 J29	Ⅱ	25541	甕	口縁-胴	29.0	-	履ナゲ	履ナゲ	横ナゲ	横ナゲ	普通	○	○	○	○	○	-
328	1975 H29	Ⅱ	26406	甕	口縁-胴	34.8	-	ヘラ履ナゲ, 履ナゲ	ヘラ履ナゲ, 履ナゲ, 指オサエ	横ナゲ	横ナゲ	普通	○	○	○	○	○	-
329	1976 J28-29	Ⅱ	25681	甕	口縁	-	-	ヘラ履ナゲ, 履ナゲ	履ナゲ	横ナゲ	横ナゲ	普通	○	○	○	○	○	-
329	1977 J28-29	Ⅱ	23638	甕	定形	17.4	30.6	ヘラ履ナゲ, 履ナゲ	履ナゲ	横ナゲ	横ナゲ	普通	○	○	○	○	○	胴30.6cm
329	1978 J29	Ⅱ	25543	甕	口縁-胴	29.0	-	横ナゲ	指オサエ	赤	赤	普通	○	○	○	○	○	-
329	1979 J28	Ⅱ	25632	甕	胴-底	-	-	ナゲ, ナズリ	ナゲ, ナズリ	横ナゲ	横ナゲ	普通	○	○	○	○	○	又ス
329	1980 K-L28	Ⅱ	23815	甕	底	-	-	ヘラ履ナゲ	丁家ナゲ	横底	横底	普通	○	○	○	○	○	又ス
329	1981 F26	Ⅱ	19149	甕	底	-	-	ヘラ履ナゲ	ヘラ履ナゲ	横ナゲ	横ナゲ	普通	○	○	○	○	○	石巻多
329	1982 J29	Ⅱ	25564	甕	胴	-	-	ヘラ履ナゲ	ヘラ履ナゲ	横ナゲ	横ナゲ	普通	○	○	○	○	○	又ス
329	1983 L130	Ⅱ a-b	24224	甕	胴	-	-	履ナゲ	履ナゲ	横ナゲ	横ナゲ	普通	○	○	○	○	○	石巻多
329	1984 D0-3	Ⅱ	28476	甕	胴-胴	-	4.6	ヘラ履ナゲ, 履ナゲ	履ナゲ	横ナゲ	横ナゲ	普通	○	○	○	○	○	-
329	1985 G55	Ⅱ	-	甕	胴	-	11.2	履ナゲ	履ナゲ	横ナゲ	横ナゲ	普通	○	○	○	○	○	円盤
330	1986 J29	Ⅱ	25440	甕	定形	12.0	34.5	ミガキ, ヘラ 履ナゲ, 履ナゲ	ミガキ, ヘラ 履ナゲ, 履ナゲ	横ナゲ	横ナゲ	普通	○	○	○	○	○	器高34.5cm
330	1987 J30	Ⅱ	25012	甕	底	-	-	ミガキ, ナゲ	履ナゲ	横ナゲ	横ナゲ	普通	○	○	○	○	○	底1木の意文
330	1988 J31	Ⅱ	28185	甕	底	-	-	ヘラ履ナゲ	履ナゲ	横ナゲ	横ナゲ	普通	○	○	○	○	○	-
330	1989 J29, K28	Ⅱ	25232	甕	底	-	-	ヘラ履ナゲ	履ナゲ	横ナゲ	横ナゲ	普通	○	○	○	○	○	-
330	1990 K29	Ⅱ b	27722	甕	底	-	5.0	ヘラ履ナゲ	ヘラ履ナゲ	履ナゲ	履ナゲ	普通	○	○	○	○	○	-
330	1991 J29	Ⅱ	25567	甕	胴	-	-	丁家履ナゲ, ミガキ	履ナゲ	横ナゲ	横ナゲ	普通	○	○	○	○	○	-
330	1992 G31-32	Ⅱ b	30932	甕	胴	-	-	丁家履ナゲ	履ナゲ	横ナゲ	横ナゲ	普通	○	○	○	○	○	-
330	1993 L129	Ⅱ	26339	高坏	坏-脚	23.0	-	履ナゲ	履ナゲ	横ナゲ	横ナゲ	普通	○	○	○	○	○	-
331	1994 J29	Ⅱ b-b	-	高坏	坏	25.0	-	丁家履ナゲ	履ナゲ	横ナゲ	横ナゲ	普通	○	○	○	○	○	輝石
331	1995 J29	Ⅱ a-b	29943	高坏	坏	-	-	履ナゲ	履ナゲ	横ナゲ	横ナゲ	普通	○	○	○	○	○	-
331	1996 J29	Ⅱ a	34320	高坏	坏	18.3	-	履ナゲ	履ナゲ	横ナゲ	横ナゲ	普通	○	○	○	○	○	-
331	1997 J29	Ⅱ a-b	29964	高坏	坏	-	-	ミガキ	ナゲ	履ナゲ	履ナゲ	普通	○	○	○	○	○	-
331	1998 J29	Ⅱ a-b, Ⅱ a	29730	高坏	坏-脚	-	14.3	履ナゲ	履ナゲ	横ナゲ	横ナゲ	普通	○	○	○	○	○	-
331	1999 J29, J28	Ⅱ	24283	高坏	脚	-	12.2	履ナゲ	履ナゲ	横ナゲ	横ナゲ	普通	○	○	○	○	○	輝石
331	2000 J29	Ⅱ	32612	鉢	定形	10.7	8.5	ミガキ	ヘラナゲ, ナ ゲ, 指オサエ	履ナゲ	履ナゲ	普通	○	○	○	○	○	-
331	2001 D31, E31	Ⅱ b, D	19326	鉢	口縁-胴	12.4	-	履ナゲ	履ナゲ	横ナゲ	横ナゲ	普通	○	○	○	○	○	-
331	2002 J28	Ⅱ	26142	鉢	口縁-胴	12.4	-	丁家履ナゲ, 履ナゲ	履ナゲ	横ナゲ	横ナゲ	普通	○	○	○	○	○	又ス, コダ
331	2003 J28	Ⅱ	24171	鉢	口縁-胴	16.0	-	ミガキ, 履ナ ゲ	履ナゲ	横ナゲ	横ナゲ	普通	○	○	○	○	○	-
331	2004 J28, L129	Ⅱ	25684	鉢	底	-	-	ミガキ	ナゲ	履ナゲ	履ナゲ	普通	○	○	○	○	○	-
331	2005 F27	Ⅱ	18904	鉢	底	-	1.9	履ナゲ	履ナゲ	横ナゲ	横ナゲ	普通	○	○	○	○	○	-
331	2006 K34	Ⅱ b	31476	鉢	胴-底	-	3.7	履ナゲ	履ナゲ	横ナゲ	横ナゲ	普通	○	○	○	○	○	-
331	2007 E25	I a	18422	鉢	脚	-	-	履ナゲ	履ナゲ	横ナゲ	横ナゲ	普通	○	○	○	○	○	-
331	2008 H27	Ⅱ b	20717	鉢	脚	-	-	履ナゲ	履ナゲ	横ナゲ	横ナゲ	普通	○	○	○	○	○	石巻多
331	2009 J22	Ⅱ	18232	子粒石	口縁-底	10.8	-	履ナゲ	履ナゲ	横ナゲ	横ナゲ	普通	○	○	○	○	○	-
331	2010 G22	Ⅱ	20966	子粒石	口縁-胴	6.6	-	ナゲ	ナゲ	履ナゲ	履ナゲ	普通	○	○	○	○	○	-
331	2011 G50	Ⅱ	24007	子粒石	底	-	2.8	ナゲ	ナゲ	履ナゲ	履ナゲ	普通	○	○	○	○	○	-
331	2012 H31	Ⅱ	29865	子粒石	底	-	-	ナゲ	ナゲ	履ナゲ	履ナゲ	普通	○	○	○	○	○	-

第26表 古墳時代東部土器観察表

墳号 調査 番号	出土位置	層位	取上 番号	器種	部位	口径 (cm)	底径 (cm)	調 整				焼成	胎 土				備 考	
								外 面		内 面			白 磁石	赤 磁石	黒 磁石	灰 石		黒 石
								外 面	内 面	外 面	内 面							
332	2013 F41	Ⅱ b, D	11197	甕	口縁-胴	29.8	-	ヘラナゲ, ナ ゲ, 指オサエ	ヘラナゲ, ナ ゲ, 指オサエ	履ナゲ	履ナゲ	普通	○	○	○	○	○	又ス
332	2014 E-F42	Ⅱ a	9641	甕	口縁-胴	27.6	-	ヘラナゲ	履ナゲ	横ナゲ	横ナゲ	普通	○	○	○	○	○	又ス
332	2015 E40	Ⅱ b	-	甕	口縁-胴	22.6	-	ヘラ履ナゲ, 履ナゲ	履ナゲ	横ナゲ	横ナゲ	普通	○	○	○	○	○	又ス
332	2016 F42	Ⅱ b	11126	甕	口縁-胴	24.0	-	ヘラ履ナゲ	履ナゲ	横ナゲ	横ナゲ	普通	○	○	○	○	○	又ス

図録 番号	出上 位置	層位	取上 番号	器種	部位	口径 (cm)	底径 (cm)	調 整				色 調				焼成	備考	
								外 面		内 面		外 面		内 面				
								白	黒	赤	青	白	黒	赤	青			
330	2017	E41-42-G42	Ⅱ a-b	9966	甕	口縁-胴	26.6	-	ハワ羅ナデ	ハワ羅ナデ	橙	橙	普通	○	○	○	○	スス
331	2018	G42	Ⅱ b	10864	甕	口縁-胴	34.0	-	丁家々横ナデ、ハワ羅ナデ	横ナデ、指オサエ	橙	橙	普通	○	○	○	○	スス
334	2019	G42	Ⅱ b	12009	甕	口縁-胴	32.0	-	王冠形、ハワ羅ナデ	ハワ羅ナデ	にぶい橙	にぶい橙	普通	○	○	○	○	砂粒上、スス
334	2020	F41-42	Ⅱ a-b	9634	甕	口縁-胴	27.4	-	丁家々横ナデ、ハワ羅ナデ	ハワ羅ナデ	黄灰	明赤陶	普通	○	○	○	○	スス
334	2021	E41	Ⅱ a-b	10104	甕	胴-底	-	-	ハワ羅ナデ、横ナデ	ナデ	にぶい黄橙	灰青陶	普通	○	○	○	○	スス
334	2022	I38	Ⅱ a	29885	甕	胴-底	-	-	ハワ羅ナデ、横ナデ	-	浅黄橙-にぶい橙	浅黄橙-にぶい橙	普通	○	○	○	○	-
334	2023	G41	Ⅱ b	12884	甕	胴	-	11.6	ハワ羅ナデ	ナデ、指オサエ	橙	黄陶	普通	○	○	○	○	-
334	2024	F41	Ⅱ b	12883	甕	胴	-	8.6	ハワ羅ナデ、横ナデ	横ナデ	にぶい橙	黄陶	普通	○	○	○	○	-
334	2025	G42	Ⅱ b	10968	甕	胴	-	7.4	ハワ羅ナデ	指オサエ	にぶい赤陶	にぶい橙	良好	○	○	○	○	-
334	2026	F42	Ⅱ b	11138	甕	胴	-	9.2	ハワ羅ナデ、指オサエ	ナデ	にぶい赤陶	にぶい橙	普通	○	○	○	○	-
334	2027	F41	Ⅱ b	11288	甕	胴	-	9.1	ハワ羅ナデ、ナデ、指オサエ	ナデ	にぶい黄橙-浅黄橙	にぶい黄橙-浅黄陶	普通	○	○	○	○	-
335	2028	F41	Ⅱ b	11219	甕	底	-	-	ハワ羅ナデ	ハワ羅ナデ、指オサエ	明赤陶	灰青陶	普通	○	○	○	○	-
335	2029	H42	Ⅱ b	11110	甕	底	-	-	ハラナデ	ナデ、指オサエ	にぶい橙	黄陶	普通	○	○	○	○	-
335	2030	G42	Ⅱ b	11662	甕	底	-	4.4	横いハワナデ	横いハワナデ	にぶい黄陶	にぶい橙	良好	○	○	○	○	-
335	2031	G42	Ⅱ b	12037	甕	底	-	5-7-6.4	横いハワナデ	横いハワナデ	赤	赤黒	良好	○	○	○	○	底・縁部は圧痕
335	2032	F42	Ⅱ b	11110	小型甕	胴-胴	-	-	ハラナデ	ハワナデ、指オサエ	赤陶	赤陶	良好	○	○	○	○	-
335	2033	G42	Ⅱ b	11066	小型甕	口縁-底	9.5	-	ナデ	ナデ	にぶい黄-にぶい黄灰	にぶい黄-にぶい黄灰	普通	○	○	○	○	スス
335	2034	D48	Ⅱ	-	埴	口縁	-	-	ハワ羅ナデ	丁家々ハワ羅ナデ	にぶい橙	にぶい橙	普通	○	○	○	○	輝石
336	2035	F41	Ⅱ b	11206	高坏	坏	-	-	ハワ羅ナデ	ハワ羅ナデ	赤	赤	良好	○	○	○	○	スス
336	2036	F41	Ⅱ b	11253	高坏	坏-脚	10.0	-	横ナデ	横ナデ	橙	橙	良好	○	○	○	○	-
336	2037	F41	Ⅱ b	11222	高坏	脚	-	16.9	横ナデ	横ナデ	にぶい赤陶	にぶい赤陶	良好	○	○	○	○	2ヶ所穿孔
336	2038	G41	Ⅱ b	12883	高坏	脚	-	-	ハワ羅ナデ	ハワ羅ナデ、横ナデ	浅黄陶	浅黄陶	良好	○	○	○	○	-
336	2039	SD 7	I	26622	高坏	脚	-	8.6	ハワ羅ナデ	横ナデ	にぶい橙	にぶい橙	普通	○	○	○	○	-
336	2040	F42	Ⅱ b	1112	高坏	脚	-	-	丁家々横ナデ	丁家々横ナデ	にぶい赤陶	にぶい赤陶	普通	○	○	○	○	-
336	2041	E41	Ⅱ b	11283	高坏	脚	-	-	ハワ羅ナデ	横いハワ羅ナデ	橙	橙	普通	○	○	○	○	-
336	2042	G42	Ⅱ b	11064	平埴石	定形	9.8	-	指オサエナデ	指オサエナデ	にぶい橙-浅黄陶	にぶい橙-浅黄陶	普通	○	○	○	○	黒色器底 5.9cm
336	2043	E40	Ⅱ a	10419	平埴石	定形	6.9	-	ナデ、指オサエ	指オサエナデ	橙	橙	普通	○	○	○	○	器底 4.8cm
336	2044	I42	Ⅱ a	1906	平埴石	定形	7.8	2.0	ナデ、指オサエ	指オサエナデ	にぶい黄陶	にぶい黄陶	良好	○	○	○	○	器底 スス器底 4.7cm
336	2045	H38	Ⅱ a	9163	平埴石	口縁-胴	8.8	-	指オサエナデ	ナデ、指オサエ	にぶい橙	浅黄陶	普通	○	○	○	○	-
336	2046	G42	Ⅱ b	11688	鉢	定形	8.0	7.2	丁家々ハワ羅ナデ、横ナデ	丁家々ハワ羅ナデ	にぶい橙-黄陶	にぶい橙-黄陶	普通	○	○	○	○	器底 スス器底 12.7cm
336	2047	F41、G42	Ⅱ	9607	甕	つまみ-胴	-	-	丁家々ハワ羅ナデ	ハワ羅ナデ	橙	にぶい橙	普通	○	○	○	○	スス、つまみ長 5.9cm

第 27 表 古墳時代須恵器観察表

図録 番号	出上 位置	層位	取上 番号	器種	部位	口径 (cm)	底径 (cm)	調 整				色 調				焼成	備考	
								外 面		内 面		外 面		内 面				
								白	黒	赤	青	白	黒	赤	青			
337	2048	F31	I	一括	甕	口縁	-	-	赤黄文、横線流灰文、四角	-	灰 (白-黄白自然釉)	灰 (白-黄白自然釉)	良好	○	○	○	-	
337	2049	E41	Ⅱ a	一括	甕	口縁	-	-	赤黄文、横線流灰文、四角	-	灰	灰 (黄灰自然釉)	良好	○	○	○	-	
337	2050	L37	Ⅱ a	23388	甕	口縁	-	-	赤黄文、横線流灰文、四角	-	灰白 (黒黄-浅黄自然釉)	灰 (浅黄自然釉)	良好	○	○	○	○	-
337	2051	D41	Ⅱ a	10292	甕	胴-脚	-	-	平行タタキ	同心円	灰 (灰白-灰黄自然釉)	灰	良好	○	○	○	○	施釉部に自然釉
337	2052	E30、F31	Ⅱ b	37124	甕	脚	-	-	格子タタキ	同心円	灰	灰	良好	○	○	○	○	-
337	2053	G-130	Ⅱ・Ⅲ a・4505	26542	甕	脚	-	-	平行タタキ	同心円	灰白 (白-黄白自然釉)	灰	良好	○	○	○	○	-
337	2054	E30、L29	I、Ⅱ a	16311	甕	脚	-	-	平行タタキ	同心円	灰	灰 (黄灰自然釉)	良好	○	○	○	○	-
337	2055	F30	Ⅱ b	36055	甕	脚	-	-	平行タタキ	同心円	灰	灰 (黄灰自然釉)	良好	○	○	○	○	-
337	2056	G31	Ⅱ	28601	甕	脚	-	-	平行タタキ	同心円	灰	灰	良好	○	○	○	○	-
337	2057	I29-30	Ⅱ	28675	甕	脚	-	-	平行タタキ	同心円	灰 (灰白-灰黄自然釉)	灰	良好	○	○	○	○	-
337	2058	I30、I35	Ⅱ b、Ⅲ	15865	甕	脚	-	-	平行タタキ	同心円	灰 (灰白-灰黄自然釉)	灰	良好	○	○	○	○	-
337	2059	I29	I	一括	甕	脚	-	-	平行タタキ	同心円	灰 (黄灰自然釉)	灰	良好	○	○	○	○	-
337	2060	F31	I	一括	甕	脚	-	-	格子タタキ	同心円	灰 (灰オレンジ自然釉)	灰	良好	○	○	○	○	自然釉がガラス質
337	2061	SD13	①	17500	甕	脚	-	-	格子タタキ	同心円	灰 (黒黄自然釉)	灰	良好	○	○	○	○	-

第4節 時期不明の掘立柱建物跡の調査

1 概要

時期不明の掘立柱建物跡が11棟検出された。これらは検出された調査区の大部分が削平を受けていたこと、時期を判断できるような遺物が出土しなかったこと、埋土に軟質なものがあったことなどから、建物としてはピット群から抽出できたものの、時期を限定できなかったために時期不明の遺構として扱うこととした。

2 遺構

F・G-49・50区付近で3棟、E-46区で1棟、H-42区で1棟、J・K-35-37区付近で2棟、F~H-23-27区付近で3棟、D-20区で1棟の計11棟が検出された。柱間は1間×1間が3棟、1間×2間が2棟、2間×4間が1棟、3間×4間が1棟、3間×6間が2棟、4間×6間が2棟である。これらは住居のほか高床倉庫、作業小屋、畜舎、物見小屋、幕前建物などの用途として使われた可能性がある。

(1) 掘立柱建物跡 (SB)

掘立柱建物跡1号 (第339図)

G-49・50区のIV層であるアカホヤ火山灰層で検出された。検出区一帯は後世の削平を深く受けているため、下層で検出されたものと思われる。

建物規模は3間×6間で、桁行が約820cm、梁行が約450cmの東西に長い長方形の建物である。主軸方位はN73°Eで、柱間は桁行が115-172cm、梁行が143-158cmとまちまちである。建物の中央に桁行と並行する2本の柱穴(P19・P20)が中央に並んでいるが、支え柱が仕切りの柱穴かは不明である。

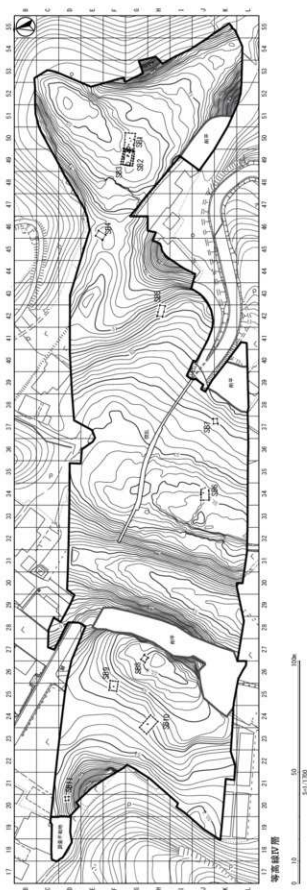
柱穴の形状はおおむね直径20-40cmの円形だが、P6・P8・P9・P10・P12のように、方形あるいは隅丸方形となるものもある。現存の深さは6-9cmの浅いものや、30cmを超す深いものもあるが、大半は15-25cmである。P15-P17は弥生時代の堅穴住居跡16号と重複関係にあり、同住居跡調査後に検出したため、浅くなっている。埋土は黒褐色土あるいは黒色土である。

掘立柱建物跡2号 (第340図)

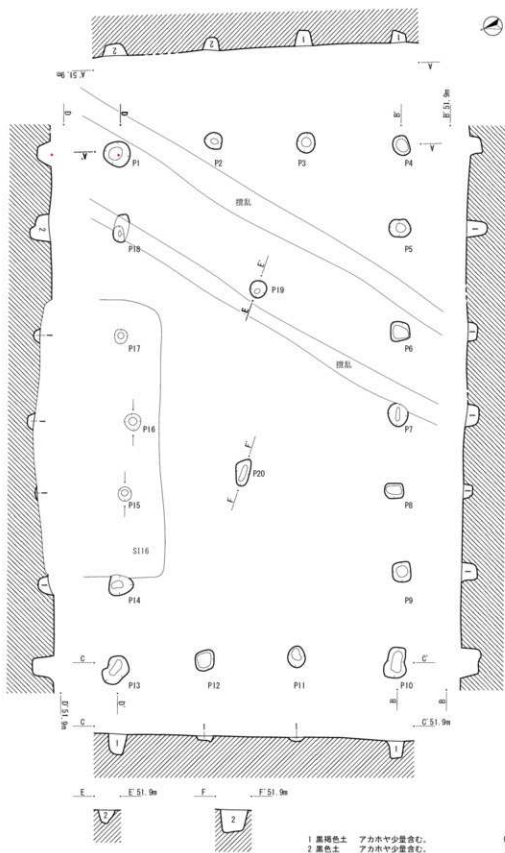
F・G-49・50区のⅢb層で検出された。P11・P14は掘立柱建物跡3号のP11・P14と切り合っており、3号より古い。

建物規模は4間×6間で、桁行が630-650cm、梁行が400-410cmで、東西に長い長方形の建物である。主軸方位はN69°Eである。建物中央東側に桁行と並行して2本の柱穴(P20・P21)がある。建物に付属する小屋のような構造が想定される。

柱穴の形状は丸みを帯びているが、不定形気味である。P6・P8・P9・P13など一部で隅丸方形となるものも見られた。深さは10cm足らずのものから50cmを超す深いものまで様々である。埋土は黒褐色土である。梁行



第338図 掘立柱建物跡配置図



柱穴 (cm)			
番号	直径	外径	深さ
P1	43	39	21
P2	28	26	21
P3	32	29	25
P4	32	25	20
P5	35	27	32
P6	30	31	16
P7	37	32	29
P8	30	24	15
P9	32	29	25
P10	49	36	31
P11	24	28	6
P12	32	30	9
P13	49	36	34
P14	36	33	20
P15	23	22	3
P16	27	26	11
P17	23	21	10
P18	44	(23)	32
P19	28	26	21
P20	44	23	36

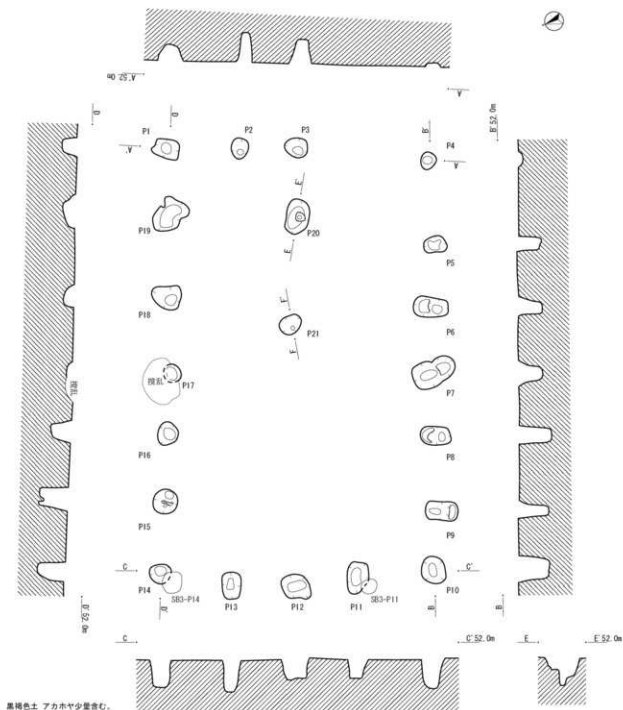
方向	柱穴間距離
	P4-10 821
	P4-5 131
	P5-6 165
	P6-7 132
	P7-8 120
	P8-9 130
	P9-10 144
桁行 (cm)	P13-1 819
	P13-14 125
	P14-15 145
	P15-16 115
	P16-17 137
	P17-18 172
	P18-1 117
	P19-20 201
	P1-4 454
	P1-2 154
梁行 (cm)	P2-3 147
	P3-4 153
	P10-13 417
	P10-11 158
	P11-12 147
P12-13 143	

1 黒褐色土 アカホヤ少量含む。
 2 黒色土 アカホヤ少量含む。

— 凡例 —
 • 土器

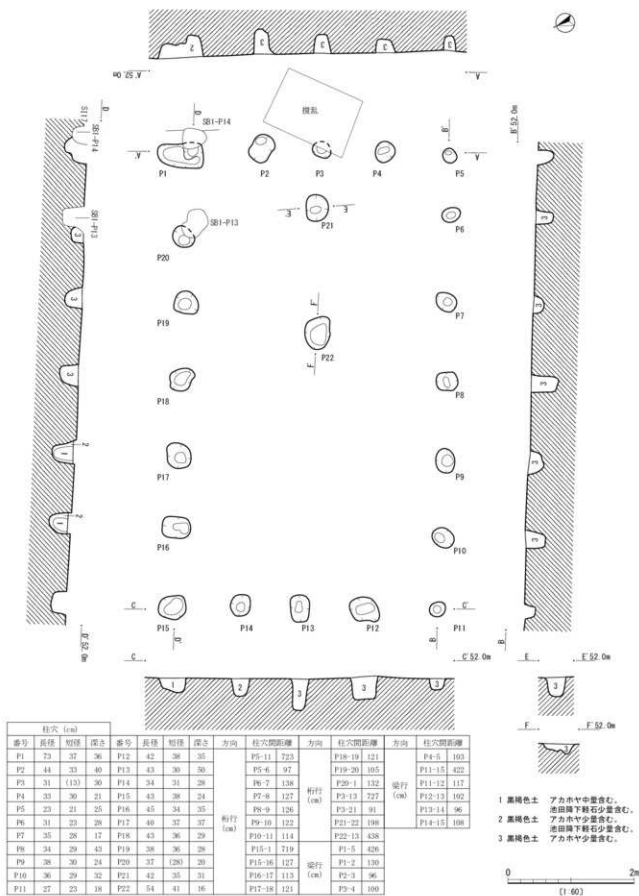


第 339 図 掘立柱建物跡 1 号



番号	柱穴 (cm)	番号	長さ	短径	深さ	方向	柱穴間距離	方向	柱穴間距離	方向	柱穴間距離
番号	長径	短径	深さ								
P1	39	30	26	P11	51	35	29	P4-10	649	P17-18	120
P2	32	28	47	P12	43	38	34	P4-5	134	P18-19	129
P3	37	31	38	P13	43	30	50	P5-6	99	P19-1	107
P4	27	24	7	P14	35	31	44	P6-7	102	P3-12	698
P5	36	25	37	P15	40	39	46	P7-8	101	P3-20	107
P6	56	31	38	P16	37	32	32	P8-9	120	P20-21	175
P7	48	29	51	P17	28	(23)	10	P9-10	95	P21-12	414
P8	70	41	38	P18	47	40	17	P14-1	671	P1-4	415
P9	52	29	46	P19	55	37	53	P14-15	112	P1-2	116
P10	43	36	49	P20	55	37	53	P15-16	107	P2-3	92
				P21	36	29	42	P16-17	97	P3-4	208

第340図 掘立柱建物跡2号



第 341 図 掘立柱建物跡 3 号

の東側と西側では柱穴の数が非対称だが、東側のものが当初からなかったか、浅くて削平されたかは判断できなかった。

掘立柱建物跡3号 (第341図)

掘立柱建物跡2号と同じF・G-49・50区のⅢb層で検出された。掘立柱建物跡2号とほぼ同規模で、北へ1mほどずらしている。P11・P14が2号のP11・P14と切り合っており、ともに新しいことから2号が廃絶されたあと桁全体を北側へずらし、東壁をやや拡張して3号を建てたと考えられる。P12・P13は2号と同じ柱位置にある。また、P1・P20は掘立柱建物跡1号のP13・P14に切られていることから、掘立柱建物跡1号より古い。建物の東側のコンクリート製の肥尿のために、P3が切られている。

建物規模は4間×6間で、桁行が約720cm、梁行が約410cmあり、平面は東西に長い長方形を呈す。東側にある桁行と並行する2本の柱穴(P21・P22)は間仕切りと考えられる。主軸方位は2号と同じN69°Eであることから、さほど時期を経ずして建て替えられたものと思われる。

柱穴の形状はおおむね円形だが、一部隅丸方形や不定形気味のものもみられた。大きさは径25cmほどの小さいものから40×70cm大のものまである。深さは16cm～50cmで、20cm～35cmほどのものが多い。P16・P17で柱痕跡が確認された。埋土は黒褐色土である。

掘立柱建物1～3号は近接した場所にあり、規模・構造なども似ていることから、同じような用途でそれほど離れない時期に少しずつ移動して建て替えられたものと考えられる。切り合い関係から、2号から3号、1号への建て替えである。

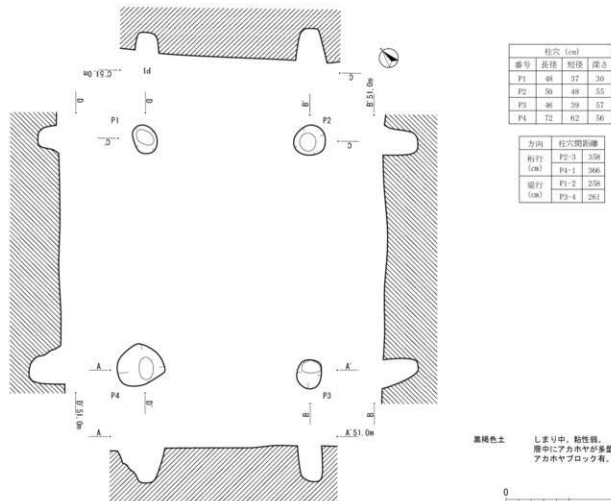
掘立柱建物跡4号 (第342図)

E-46区のⅢb層で検出された。

建物規模は1間×1間で、桁行が360cm、梁行が250cmで、平面は南北に長い長方形を呈する。主軸方位はN42°Wである。

柱穴の形状は丸みを帯びているが、不定形気味である。P3とP4では柱痕跡が確認された。径は40～70cmで、深さは55cm程度である。埋土は黒褐色土である。

中央に土坑等を想定して精査したが、検出されなかった。柱穴の大きさからも高い建物だった可能性が高い。



第342図 掘立柱建物跡4号

掘立柱建物跡5号 (第343図)

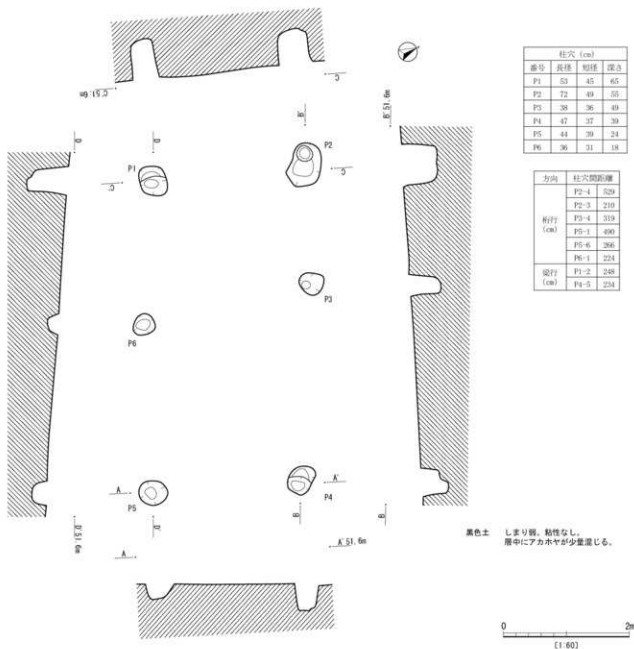
H-42区のⅢb層で検出された。

建物規模は1間×2間で、桁行が500cm、梁行が240cmである。平面はやや歪んだ東西に長い長方形を呈し、主軸方位はN66°Eである。

柱穴の形状は径35~55cmほどでおおむね丸みを帯びているが、不定形のものが多い。深さは18~65cmで、検

出面が傾斜しているためP1・P2が深くP5・P6が浅いが、底面の標高にそれほど差はない。埋土はいずれの柱穴も黒色土である。P1・P2・P4のように柱穴に切り合いが見られるものもあることから、建て替えが想定される。

中央に土坑はなく、比較的高さのある建物が想定される。



第343図 掘立柱建物跡5号

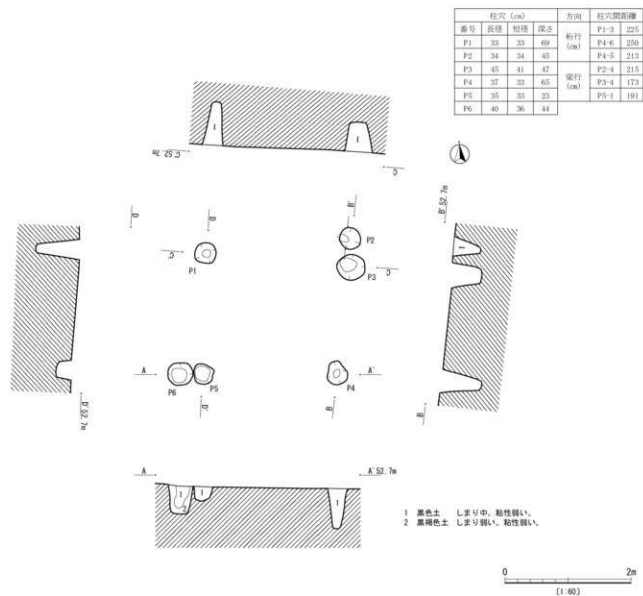
掘立柱建物跡6号（第344図）

J・K-37区のⅢb層で検出された。

建物規模は1間×1間で、桁行が210cm、梁行が190cmである。平面形は東西にやや長いほぼ正方形を呈す。主軸方位はN84°Eである。北東と南西に柱穴が2か所ずつ（P2・P3・P5・P6）検出されており、控え柱

や建て替えの痕跡と推測されるが、特定には至らなかった。

柱穴の形状はおおむね円形だが、一部不定形のものも見られる。深さはP1～P4・P6が44～69cm、P5が23cmである。埋土はP6を除き単一の埋土で、黒色土である。しまりはあまりなかった。



第344図 掘立柱建物跡6号

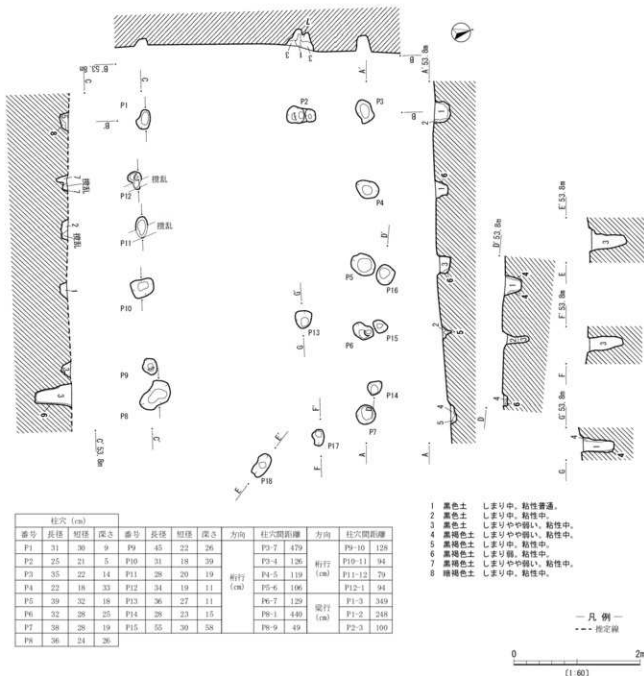
掘立柱建物跡7号 (第345図)

J-35区のⅢb層で検出された。

建物規模は現状2間×4間だが、梁行のほうは中間の柱がはっきりしない。柱間からすれば、3間になる可能性もある。桁行は480cm、梁行が350cmで、平面は東西に長い長方形を呈す。柱間は桁行が120cmの等間隔である可能性がある。主軸方位はN 79° Wである。

柱穴の形状は不定形で、直径は20~40cmである。深さは5~58cmと様々だが、全体的に浅いものが多い。P3やP8などには柱痕跡らしきものもある。埋土は黒褐色土や黒色土である。周辺にいくつかの柱穴があり、このうちのいくつかの柱穴は補強や建て替えの痕跡と推測されるが、機能が判断できないものもある。

建物としての性格も不明である。



第345図 掘立柱建物跡7号

掘立柱建物跡8号（第346図）

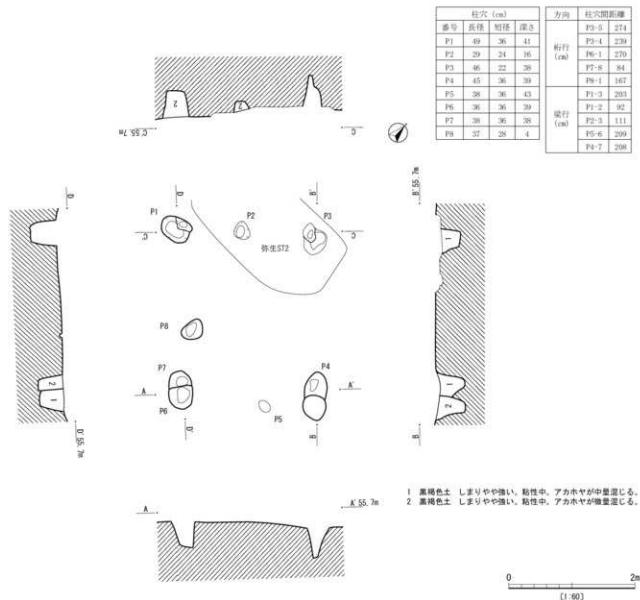
G-26・27区のⅢb層で検出された。

建物規模は1間×2間で、桁行が270cm、梁行が210cmである。平面は南北に長い長方形を呈す。主軸方位はN45°Eである。P4・P5、P6・P7がそれぞれ切り合っており、新旧関係はP5とP6が新しい。軸が揃っており、北側列には中央にP2があることから、本来はP4・P5とP6・P7の間にも柱穴があった可能性もあるが、樹痕による攪乱のため検出できなかった。補強や建て替

えの可能性はあるが、機能としては不明である。P1とP3も切り合いの可能性はあるが、埋土からは判断できなかった。

柱穴の形状は丸みを帯びているが、不定形気味である。直径は25cmほどの小さいものから40cmほどのものがある。深さはP1・P3～P7が40cm前後で、P2が16cm、P8が4cmである。埋土は黒褐色土である。

台地の頂上部にあることから、物見小屋のような建物だったことが推測される。



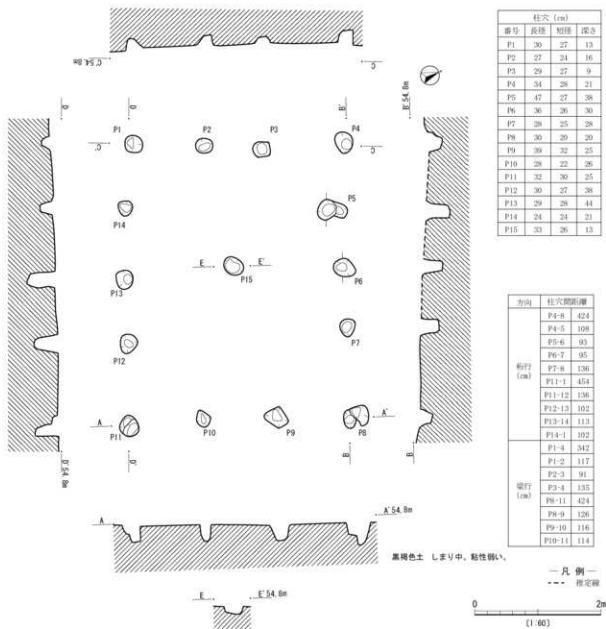
第346図 掘立柱建物跡8号

掘立柱建物跡9号 (第347図)

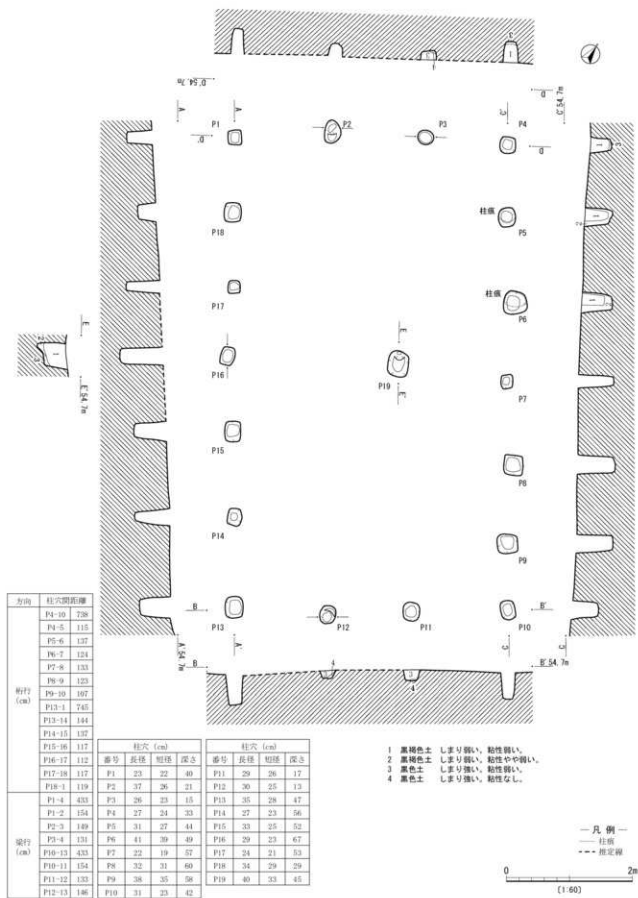
F-25・26区のⅢb層上面で検出された。

建物規模は3間×4間で、桁行は450cm、梁行が350cmである。平面は東西に長い長方形を呈す。中央には棟を支えると思われる柱穴(P15)が見られる。主軸方位はN71°Eである。

柱穴の形状はほとんどが径25~30cmほどの丸みを帯びているが、不定形気味である。深さは桁側が20~44cm、梁側が9~26cm、中央のP15が13cmである。どの柱穴からも明瞭な柱痕跡は確認できなかった。埋土は黒褐色土である。



第347図 掘立柱建物跡9号



第 348 図 掘立柱建物跡 10 号

掘立柱建物跡 10号 (第348図)

G・H-23・24区のⅢb層上面で検出された。

建物規模は3間×6間で、桁行が730cm、梁行が440cmである。平面は南北に長い長方形を呈する。柱列は桁行・梁行ともに整然としており、柱間も桁行が1.2m、梁行が1.5mと等間隔である。中央部に深さ45cmの柱穴(P19)がある。主軸方位はN36°Eである。

柱穴の形状はほとんどが隅丸方形で、一部円形や不定形のものが見られる。深さは桁側が29~67cm、梁側が13~21cmである。中央の棟を支える柱穴(P19)は深さが45cmで、建物跡プラン中央よりやや北側にずれて位置している。P5とP6で柱痕跡が検出されたが、柱穴を断ち割ってからの確認だったため、平面でのプランははっきりしない。埋土は黒褐色土である。

本遺構の東西には弥生時代の墓域が検出されており、

時期が同じなら葬送儀礼等に関わる建物の可能性が考えられるが、埋土等からは炭化材を含め帰属時期を検討できる資料は検出されなかった。また、東側の尾根上に存在する並列している4条の中世溝状遺構と、この建物は長軸が直交している。

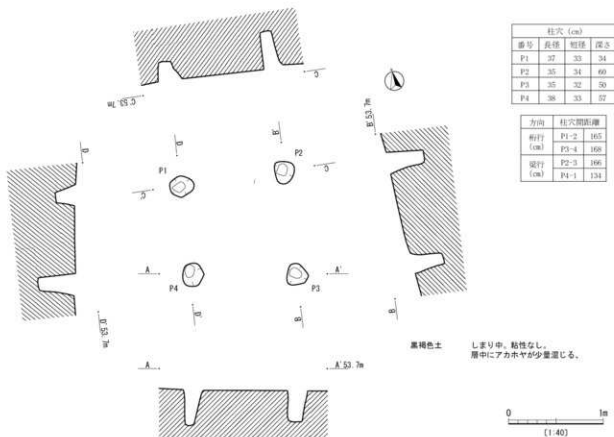
掘立柱建物跡 11号 (第349図)

D-20区のⅢb層上面で検出された。台地の北部に位置し、谷を望む場所に立地している。

建物規模は1間×1間で、桁行が170cm、梁行が140cmと170cmで、台形状を呈している。主軸方位はN6°Wである。

柱穴の形状はやや丸みを帯びているが、不定形である。径30~40cmで、深さはP1のみ34cmとやや浅いが、P2~4は50~60cmである。埋土は黒褐色土である。

立地の状況等から、物見小屋が想定される。



第349図 掘立柱建物跡 11号

第5章 自然科学分析

第1節 自然科学分析の種類と目的

永吉天神段遺跡の2地点における自然科学分析は、平成25年度に「テフラ分析」、「放射性炭素年代測定（AMS測定）」、「種実同定」、「植物珪酸体分析」を、平成26年度に「テフラ分析（火山ガラス屈折率測定、鉱物屈折率およびテフラ組成分析）」と「年代測定、樹種同定」を行った。また、平成30年度は「年代測定」を行った。

平成25年度の「テフラ分析」では、遺構の埋土中や土器付着埋土中に含まれる火山砕屑物を抽出し、その鉱物組成や砕屑物の特徴などを捉えることにより、附着物がテフラであることを確認した。さらに、遺跡周辺で採取されたテフラについても同様の分析を行い、その特性を把握した。それらのテフラの特徴と遺構の埋土中や土器付着埋土中の砕屑物の特徴を比較することにより、含有されるテフラを同定し、遺構および遺物に関わる年代試料を作成した。「種実同定」および「放射性炭素年代測定（AMS測定）」では、竪穴住居跡・竪穴建物跡3軒から採取した4資料の種実同定により当時の植物利用に関する資料を得るとともに、種実同定作業を経て年代測定に適した試料を選定した上で試料の年代を測定することによって、遺構の年代を知る手がかりとした。

平成26年度の「テフラ分析（火山ガラス屈折率測定、鉱物屈折率およびテフラ組成分析）」では、遺構の埋土中の火山砕屑物を抽出し、その鉱物組成や砕屑物の特徴などを捉えることによりテフラであることを確認した。さらに、それらのテフラの特徴を把握し、標準試料との比較を行った。「年代測定、樹種同定」では、竪穴住居跡4軒、土坑1基、溝状遺構1条から検出した炭化物10点について放射性炭素年代測定を行い、遺構の年代を知る手がかりとするとともに、一部の試料は樹種同定を行い、当時の植物利用に関する試料を得た。

平成30年度の「年代測定」では、出土した土器付着炭化物と出土炭化材について放射性炭素年代測定を実施し、時代を検討する基礎資料とした。

注）本報告書では、調査時の遺構番号を整理し直し修正した。分析を依頼した時点では旧番号を示したため、報告では旧番号で記されていたが、ここでは本報告書で使用した修正番号に直して記載してある。

第2節 テフラ分析

1 テフラ分析（テフラ組成分析及び屈折率測定）

パリオ・サーヴェイ株式会社

(1) 試料

試料は、本遺跡第2地点で検出された遺構埋土3点である。それぞれ試料番号1～3までが付されている。

・試料番号1：周溝墓3号埋土

周溝墓3号は、第2地点の南端部付近で検出された遺構であり、遺構内からは周溝床面直上で開口部を上に向けた状態の小壺（1156）とされる弥生土器が出土している。小壺の型式は、弥生時代中期後半の山ノ口式土器と考えられる。

試料は、小壺内を充填する土壌の最上部より採取した。採取した土壌は灰色を呈し、やや固結した砂質シルトであり、径1～2mmの白色粒が多く含まれ、同程度の粒径を呈する橙色粒も散在する。なお、同様の特徴を呈する土壌は、周溝墓3号の埋土中において底面から20cmほど上位の層位中にも認められている。

・試料番号2：弥生時代竪穴住居跡27号埋土

弥生時代竪穴住居跡27号は、第2地点の東部で検出されており、弥生時代竪穴住居跡26号に切られている。

試料は、床面直上にベルト状に残された厚さ約9cmの埋土より採取した。埋土全体は、黒色を呈するシルト質の黒ボク土であるが、試料を採取した部分は周囲の埋土よりも色調が褐色味を帯びてやや明るく、径0.5mmほどの白色粒がやや多く認められる。試料採取部位と周囲との色調の境界は不明瞭である。

・試料番号3：縄文時代晩期土坑2号埋土

第2地点北部で検出された土坑である。平面部の径は約1m、上面から底面までの深さは約1.2mである。縄文時代晩期の遺構であると考えられる。

遺構の埋土は、全体的に黒色を呈する黒ボク土であり、径5～25mmの黄色から橙色を呈する軽石と径0.5～1mmほどの白色粒が散在する。その中で、遺構の底面より約50cm上位の厚さ12cmほどの層位の埋土は、黒褐色を呈しやや粘質であることから、他の層位の埋土とは区別される。試料は、この層位から採取されたものである。

(2) 分析方法

試料は、水を加え、超音波洗浄装置を用いて粒子を分散し、250メッシュの分析篩上で水洗して粒径が1/16mmより小さい粒子を除去する。

水洗・乾燥後に篩別して得られた1/4mm-1/8mmの砂分をポリタングステン酸ナトリウム（比重約2.96に調整）により重液分離し、得られた重鉱物を偏光顕微鏡下に250粒に達するまで同定する。同定の際、不透明な粒については斜め上方からの落射光下で黒色金属光沢を呈するもののみを「不透明鉱物」とする。「不透明鉱物」以外の不透明粒及び変質等で同定の不可能な粒は「その他」とする。

一方、重液分離により得られた軽鉱物分については、火山ガラスとそれ以外の粒子を偏光顕微鏡下に250粒

に達するまで計数し、火山ガラスの量比を求める。火山ガラスは、その形態によりバブル型・中間型・軽石型の3つの型に分類する。各型の形態は、バブル型は薄手平板状あるいは泡のつぎ目をなす部分である「Y」字状の高まりを持つもの、中間型は表面に気泡の少ない厚手平板状あるいは塊状のもの、軽石型は表面に小気泡を非常に多く持つ塊状及び気泡の長く伸びた繊維束状のものとする。ただし、本遺跡においては、火山ガラスを含まずにスコリアを多く含む特徴をもつ開間岳から噴出したテフラが検出される可能性もあると考えられる。そのため、スコリアが認められた場合は、火山ガラスと同様に計数することにした。

屈折率の測定は、処理後に得られた軽鉱物分から抽出した火山ガラスと、重鉱物分から抽出した斜方輝石を対象とする。屈折率の測定は、古澤（1995）のMAIOTを使用した温度変化法を用いる。

(3) 結果

ア テフラ組成分析

結果を第28表、第350図に示す。以下に、各試料の重鉱物組成および火山ガラス比を述べる。

・試料番号1：周溝墓3号埋土

重鉱物組成は、斜方輝石が非常に多く、他にカンラン石と単斜輝石及び不透明鉱物が少量ずつ含まれ、微量の角閃石も含まれる。火山ガラス比では、スコリアが少量含まれ、火山ガラスは軽石型が微量、バブル型も極めて微量含まれる。

なお、分析処理により得られた粒径1/4mm以上の砂分について実体顕微鏡による観察を行ったところ、最大径約1.0mmのスコリアが少量混在していることが確認された。スコリアは、黒色を呈し発泡不良のものが多く、少量の黒色で発泡やや不良なものや赤色を呈し発泡不良のもの、極めて微量の灰褐色を呈し発泡やや不良なものも認められた。

・試料番号2：弥生時代竪穴住居跡27号埋土

重鉱物組成は、斜方輝石が非常に多く、他に単斜輝石と不透明鉱物が少量ずつ含まれ、微量の角閃石と極めて微量のカンラン石も含まれる。火山ガラス比では、バブル型火山ガラスが少量含まれ、軽石型火山ガラスが微量、さらに極めて微量の中間型火山ガラスとスコリアも含まれる。

粒径1/4mm以上の砂分では、少量のバブル型火山ガラスと微量の軽石及びスコリアを認めることができた。バブル型火山ガラスは多くが無色透明であるが、淡褐色や褐色を帯びたものも少量認められた。軽石は、最大径約1.0mmであり、白色を呈し発泡は良好で斜方輝石の斑晶を包有する。スコリアは最大径約0.5mm、黒色を呈し発泡不良のものが多く、少量の黒色で発泡やや不良なものも認められた。

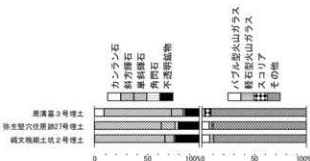
・試料番号3：縄文時代晩期土坑2号埋土

重鉱物組成は、斜方輝石が非常に多く、他に単斜輝石と不透明鉱物が少量ずつ含まれ、微量の角閃石が含まれる。火山ガラス比では、バブル型火山ガラスが少量含まれ、他に軽石型火山ガラスが微量含まれる。

粒径1/4mm以上の砂分では、少量のバブル型火山ガラスと微量の軽石を認めることができた。スコリアは認められなかった。バブル型火山ガラスは多くが無色透明であるが、淡褐色や褐色を帯びたものも少量認められた。軽石は、最大径約1.2mmであり、白色を呈して発泡は良好、斜方輝石の斑晶を包有する。

第28表 テフラ組成分析結果

試料番号	試料の詳	カンラン石	斜方輝石	単斜輝石	角閃石	不透明鉱物	合計	バブル型火山ガラス	軽石型火山ガラス	中間型火山ガラス	スコリア	その他	合計
1	周溝墓3号埋土	33	190	28	4	34	289	3	0	7	10	226	250
2	弥生時代竪穴住居跡27号埋土	1	159	33	7	50	250	18	2	8	3	221	250
3	縄文時代晩期土坑2号埋土	0	168	22	3	57	250	19	0	9	0	222	250



第350図 重鉱物組成および火山ガラス比

イ 屈折率測定

(ア) 火山ガラス (第351図)

試料番号1～3の3点は、ほぼ同様の測定結果を示す。いずれもn1.498からn1.499またはn1.500までの低屈折率のレンジと、n1.508またはn1.510からn1.514またはn1.515までの高屈折率のレンジとに明瞭に分かれる。

(イ) 斜方輝石 (第352図)

試料番号1～3の3点は、低屈折率のレンジは γ 1.708または γ 1.710から γ 1.712または γ 1.714までであり、高屈折率のレンジは γ 1.727～1.729から γ 1.733または γ 1.736までである。

(4) 考察

藤野・小林（1992；1997）などの記載に従えば、開間岳の火山活動はスコリア噴出と溶岩の流出を繰り返したとされている。テフラ層については、約4,000年前の噴火によるKmlから平安時代の噴火によるKml2までを区分しており、噴出物の主体はスコリアと岩片および細

粒火山灰からなるとしている。また、各テフラ層の中で
給源からやや離れた地域に降下堆積し、硬く固結した状
態の火山灰を「コラ」であるとしており、Km1には黄ゴ
ラ、Km4には灰コラ、Km9には暗紫コラ、Km11には青
コラ、Km12には紫コラと呼ばれる火山灰層がそれぞれ
挟まれている。各コラの噴出年代については、奥野
(2002)により暦年代が示されており、黄ゴラは4,400年
前、灰コラは3,400年前、暗紫コラは1,900年前、青コ
ラは7世紀、紫コラはAD874年とされている。

今回の分析で明らかにされた各テフラの分析値による
特徴として、重鉱物組成では、紫コラは青コラと暗紫コ
ラおよび灰コラに比べてカンラン石の量比が低く、斜方
輝石と単斜輝石および不透明鉱物の量比が高い。青コ
ラについては、極めて微量ながらも角閃石を含むことが特
徴となる。青コラに角閃石が含まれることについては、
上述した藤野・小林(1997)にも記載されており、青コ
ラと他のコラの重鉱物組成は角閃石の有無で区別され
る。現時点では、暗紫コラと灰コラの重鉱物組成による
区別は難しい。斜方輝石の屈折率では、レンジの両端の
値とモード付近の値とを比較すると、最も低い値を示す
のは暗紫コラであり、最も高い値を示すのは青コラ、両
者の中間的な値を示すのが紫コラである。灰コラの値は
暗紫コラとはほぼ重複するが、レンジの下限は暗紫コラ
よりもやや高い。

さらに今回の分析では、径1/4mm以上の砂粒観察に
より、各コラに含まれるスコリアの色調や発泡度に違い
があることがわかり、青コラについては斜長石の斑晶を
多く含むという特徴も、他のコラと区別する際の指標と
なる。以上、述べた各コラの特徴から今回の試料番号1
~3までの試料に含まれるテフラについて検討してみる。

試料番号1には、少量のスコリアが認められた。重鉱
物組成でも少量のカンラン石が検出されたことから、開
間岳由来のテフラに由来するスコリアであると考えられ
る。山ノ口式土器を充填する土壌に含まれていること
から、年代からみれば暗紫コラが青コラのいずれかに対
比される。ただし、本試料の重鉱物組成は火山ガラス比
においても火山ガラスがスコリアと同量程度含まれるな
ど、開間岳テフラ以外のテフラが混在しており、分析結
果からの対比は難しい。火山ガラスの形態や色調および
屈折率と斜方輝石の屈折率から、本試料に混在するテ
フラは境界アカホヤ火山灰(K-Ah町田・新井, 1978)とシ
ラスであると考えられる。火山ガラスの低屈折率レンジ
はシラスに、高屈折率のレンジはK-Ahに由来する火山
ガラスである。また、斜方輝石の低屈折率レンジは
K-Ahに、高屈折率レンジはシラスに由来する斜方輝石
である。開間岳テフラに由来する斜方輝石はおそらく割
合としては非常に低いため、屈折率測定では認めると
ができなかったと考えられる。分析値からは開間岳テ

フラの識別はできないが、検出されたスコリアの色調と発
泡度からは、青コラに比較的多く含まれている灰褐色で
発泡がやや不良のスコリアは極めて微量しか認められ
ず、斜長石の斑晶を多く含むという特徴も認められない
ことから、暗紫コラに対比される可能性が高いと考えら
れる。本試料を採取した小窓内と周溝墓3号の埋土中
においてスコリアが濃集し、固結した産状を呈すること
から、検出された暗紫コラは周溝墓3号の埋積中に降下堆
積したものであり、その後若干の攪乱を受けたことによ
りK-Ahやシラスに由来する砕屑物が混在していると思
えられる。したがって、出土した小窓および周溝墓3号
の年代は、暗紫コラの噴出より以前であったことになる。

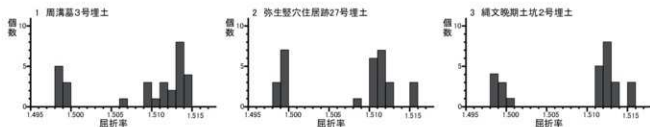
弥生時代堅穴住居跡 27号の埋土からは、微量のスコ
リアが検出され、極めて微量のカンラン石も認められた
ことから、埋土中には開間岳テフラに由来する砕屑物が
含まれていると考えられる。しかし、その分析結果から
は試料番号1と同様にK-Ahとシラスに由来する砕屑
物が確認されるのみで、開間岳テフラの識別はできない。
また、スコリアも微量であるために、認められた色調と
発泡度のスコリアが本来のテフラの特徴を示している
とは限らない。したがって、本試料に含まれるスコリアの
由来する開間岳テフラを特定することはできない。な
お、本試料の1/4mm以上の砂の観察では、径1.0mm程度
の微細な白色軽石も認められた。調査区内の土層では、
池田湖カルデラ起源のテフラである池田湖テフラ(Ik成
尾・小林, 1993)に由来する軽石が散在しているが、試
料番号2の火山ガラスおよび斜方輝石の屈折率からは
Ikに由来する砕屑物は確認できない。したがって、本試
料の微細な軽石はIk以外のテフラに由来する可能性も
ある。本道路周辺地域のテフラ分布と、K-Ahと混在し
ている産状および屈折率測定した火山ガラスや斜方輝石
にも含まれているということも考慮すると、微細な軽石
は5,000年前に噴出した桜島テフラのSz-7(小林・江崎,
1997;奥野, 2002;町田・新井, 2003)に由来する可能
性がある。いずれにしても、本試料に含まれる各テフラ
は、住居跡の埋積時に降下堆積したのではないと考え
られるため、住居跡の構築や廃棄に関わる年代資料とは
ならない。

縄文時代晩期土坑2号埋土については、スコリアもカ
ンラン石も検出されなかったことから、開間岳テフラが
含まれている可能性は低い。分析結果からは、試料番号
1および2と同様にK-Ahとシラスに由来する砕屑物
が混在している状況が推定される。また、1/4mm以上
の砂の観察では、試料番号2と同様の白色軽石が認め
られたことから、Sz-7に由来する砕屑物も混在してい
る可能性があると考えられる。ただし、これらのテフラは
埋積時に降下堆積したとは考えられないため、構築や廃
棄に関わる年代資料とはならない。

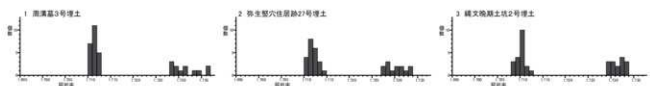
【引用文献】

藤野直樹・小林哲夫, 1992, 間聞岳起源のコラ層の噴火・堆積様式, 鹿児島大学紀要(地学・生物学), 25, 69-83.
 藤野直樹・小林哲夫, 1997, 間聞岳火山の噴火史, 火山, 42, 195-211.
 古澤 明, 1995, 火山ガラスの屈折率測定および形態分類とその統計的な解析に基づくテフラの識別, 地質学雑誌, 101, 123-133.
 小林哲夫・江崎真美子, 1997, 桜島火山, 噴火史の再検討, 月刊地球 19, 227-231.

町田 洋・新井房夫, 1978, 南九州鬼界カルデラから噴出した広域テフラ-アコホヤ火山灰, 第四紀研究, 17, 143-163.
 町田 洋・新井房夫, 2003, 新編 火山灰アトラス, 東京大学出版会, 336p.
 成尾英仁・小林哲夫, 1983, 鹿児島県指宿地域の火山活動史-阿多火砕流遺構について, 地質学会第90年学術大会講演要旨集, 309.
 奥野 光, 2002, 南九州に分布する最近約3万年間のテフラの年代, 第四紀研究, 41, 225-236.



第 351 図 火山ガラスの屈折率



第 352 図 斜方輝石の屈折率



第 353 図 重鉱物



Vg:火山ガラス, Oz:石英, pl:斜長石, Sc:スコリア

第 354 図 軽鉱物

2 テフラ分析 (火山ガラス屈折率測定, 鉱物屈折率およびテフラ組成分析)

パリオ・サーヴェイ株式会社

(1) 試料

試料は, F-27区及びG-25・26区の2地点より採取した計8点である。

F-27 区の円形周溝墓 4 号の周溝内のベルトサンプル土を東側及び西側から、それぞれ①・②層の 2 点ずつを採取した。G-25・26 区からは、表②層からⅢ a 層まで 4 点を採取し、試料番号 1～8 を付してある。

以下、各試料について述べる。

・試料番号 1：円形周溝墓 周溝墓東側埋土①
円形周溝墓 4 号の周溝内、東側のベルトの①層から採取された。遺構における層位から、暗紫コラと推定されている。試料の外観は、黒褐色の砂礫混じりシルトである。礫の最大径は、約 1mm。

・試料番号 2：円形周溝墓 周溝墓東側埋土②
円形周溝墓 4 号の周溝内、東側のベルトの②層から採取された。遺構における層位から、暗紫コラと推定されている。試料の外観は、黒褐色の砂礫混じりシルトである。礫の最大径は、約 4mm。

・試料番号 3：円形周溝墓 周溝墓西側埋土①
円形周溝墓 4 号の周溝内、西側のベルトの①層から採取された。遺構における層位から、暗紫コラと推定されている。試料の外観は、黒褐色の砂礫混じりシルトである。礫の最大径は、約 3mm。まれに橙色を示す礫が散在する。

・試料番号 4：円形周溝墓 周溝墓西側埋土②
円形周溝墓 4 号の周溝内、西側のベルトの②層から採取された。遺構における層位から、暗紫コラと推定されている。試料の外観は、黒褐色の砂礫混じりシルトである。礫の最大径は、約 1mm。まれに橙色を示す礫が散在する。

・試料番号 5：G-25・26 区ベルト テフラサンプル①
G-25・26 区ベルトの表土②層から採取されている。遺構における層位から、紫コラと推定されている。試料の外観は、黒褐色の砂礫混じりシルトである。礫の最大径は、約 2mm。

・試料番号 6：G-25・26 区ベルト テフラサンプル②
G-25・26 区ベルトのⅡ a 層から採取されている。遺構における層位から、紫コラと推定されている。試料の外観は、黒褐色の砂礫混じりシルトである。礫の最大径は、約 1mm。

・試料番号 7：G-25・26 区ベルト テフラサンプル③
G-25・26 区ベルトのⅡ b 層から採取されている。遺構における層位から、暗紫コラと推定されている。試料の外観は、黒褐色の砂礫混じりシルトである。礫の最大径は、約 4mm。

・試料番号 8：G-25・26 区ベルト テフラサンプル④
G-25・26 区ベルトのⅢ b 層から採取されている。遺構における層位から、暗紫コラと推定されている。試料の外観は、黒褐色の砂礫混じりシルトである。礫の最大径は、約 8mm。

(2) 分析方法

試料約 40g に水を加え超音波洗浄装置により分散、250 メッシュの分析篩を用いて水洗し、粒径 1/16mm 以下の粒子を除去する。乾燥後に篩別し、得られた粒径 1/4mm - 1/8mm の砂分をポリタングステン酸ナトリウム(比重約 2.96 に調整)により重液分離、重鉱物を偏光顕微鏡下にて 250 粒に達するまで同定する。重鉱物同定の際、不透明な粒については、斜め上方からの落射光下で黒色金属光沢を呈するもののみを「不透明鉱物」とする。「不透明鉱物」以外の不透明粒および変質等で同定の不可能な粒子は「その他」とする。火山ガラス比は、重液分離した軽鉱物分における砂粒を 250 粒数え、その中の火山ガラスの量比を求める。火山ガラスの形態分類は、その形態によりバブル型・中間型・軽石型の 3 タイプに分類した。各型の形態は、バブル型は薄手平板状、中間型は表面に気泡の少ない厚手平板状あるいは破砕片状などの塊状ガラスであり、軽石型は小気泡を非常に多く持った塊状および気泡の長く伸びた繊維束状のものとす。ただし、本遺跡においては、火山ガラスを含まずにスコリアを多く含む特徴をもつ間開岳から噴出したテフラが検出されると考えられる。そこでスコリアが認められた場合には、火山ガラスと同様に計数することとした。

屈折率の測定は、処理後に得られた軽鉱物分から抽出した火山ガラスと重鉱物分から抽出した斜方輝石を対象とする。屈折率の測定は、古澤 (1995) の MAIOT を使用した温度変化法を用いる。

(3) 結果

ア 重鉱物・火山ガラス比分析

結果を第 29 表・第 355 図に記す。以下に各試料の重鉱物組成及び火山ガラス比を述べる。

・試料番号 1：円形周溝墓 周溝墓東側埋土①

重鉱物組成は、斜方輝石が非常に多く、次いで不透明鉱物が多く、カンラン石が少量、単斜輝石が微量、角閃石が極めて微量含まれる。

火山ガラス比では、スコリアが少量含まれ、次いでバブル型火山ガラス、軽石型火山ガラスが微量、中間型火山ガラスが極めて微量含まれる。

なお、分析処理により得られた粒径 1/4mm 以上の砂分について、実体顕微鏡による観察を行ったところ、バブル型火山ガラスと最大径約 1.0mm のスコリアが少量混在していることが確認された。バブル型火山ガラスは、多くが無色透明であるが、褐色や淡褐色を帯びるものが少量含まれる。スコリアは黒色を呈し発泡不良なものが多く、少量の黒色で発泡やや不良なもの、赤色を呈し発泡不良なもの、及び灰褐色を呈し発泡やや不良なものが微量混在している。

・試料番号 2：円形周溝墓 周溝墓東側埋土②

重鉱物組成は、斜方輝石が非常に多く、中量の不透明

鉱物、微量のカンラン石、単斜輝石、極めて微量の角閃石が含まれる。

火山ガラス比では、軽石型火山ガラスが少量含まれ、次いでスコリアが多く、バブル型火山ガラス、中間型火山ガラスが微量含まれる。

粒径1/4mm以上の砂分では、バブル型火山ガラス、最大径約0.8mmのスコリアが少量混在していることが確認された。バブル型火山ガラスは多くが無色透明であるが、褐色や淡褐色を帯びるものが少量含まれる。スコリアは、黒色を呈し発泡不良のものが多く、少量の黒色で発泡不良のものと、赤色を呈し発泡不良のものが微量混在している。

・試料番号3：円形周溝墓 周溝墓西側埋土①

重鉱物組成は、斜方輝石、カンラン石が多く、次いで中量の不透明鉱物、少量の単斜輝石、微量の角閃石が混在している。

火山ガラス比では、軽石型火山ガラスが多く、次いでスコリアが多く、バブル型火山ガラス、中間型火山ガラスが極めて微量含まれる。

粒径1/4mm以上の砂分では、軽石型火山ガラスが微量、最大径約2.0mmのスコリアが中量混在していることが確認された。火山ガラスは、無色透明の軽石型火山ガラスが多く、極めて微量の無色透明のバブル型火山ガラス、褐色や淡褐色を帯びるバブル型火山ガラスが混在している。スコリアは、黒色を呈し発泡不良のものが多く、次いで黒色を呈し発泡やや不良のもの、他に灰褐色を呈し発泡やや不良のものが比較的多く、赤色を呈し発泡不良のものが少量混在している。

・試料番号4：円形周溝墓 周溝墓西側埋土②

重鉱物組成は、斜方輝石が非常に多く、中量の不透明鉱物、少量のカンラン石、単斜輝石、極めて微量の角閃石が混在している。

火山ガラス比では、少量の軽石型火山ガラスとバブル型火山ガラス、微量のスコリアが混在している。

粒径1/4mm以上の砂分では、火山ガラスが少量、最大径約1.0mmのスコリアが少量混在していることが確認された。火山ガラスでは、無色透明のバブル型火山ガラスが多く、微量の褐色や淡褐色を帯びるバブル型火山ガラスが混在している。スコリアは、黒色を呈する発泡不良のものと、黒色を呈する発泡やや不良のものが多く、灰褐色を呈する発泡不良なもの、赤色を呈する発泡不良のものが少量混在している。

・試料番号5：G-25-26区ベルト テフラサンプル①

重鉱物組成は、斜方輝石が非常に多く、次いで不透明鉱物が中量、カンラン石と単斜輝石が少量、角閃石が微量混在している。

火山ガラス比では、軽石型火山ガラスが多く、スコリアが少量、バブル型火山ガラスが微量、中間型火山ガラス

が極めて微量混在している。

粒径1/4mm以上の砂分では、バブル型火山ガラスが微量、最大径約2.0mmのスコリアが中量混在していることが確認された。バブル型火山ガラスは、無色透明のものが多く、褐色や淡褐色を帯びるバブル型火山ガラスが混在している。スコリアは、黒色を呈し発泡不良のものと黒色を呈し発泡やや不良のものが多く、灰褐色を呈し発泡不良のものと、赤色を呈し発泡不良のものが少量混在している。本試料のスコリアには、粒度の大きい斜長石を包有されるものも微量認められる。

・試料番号6：G-25-26区ベルト テフラサンプル②

重鉱物組成は、斜方輝石が多く、不透明鉱物が中量、カンラン石と単斜輝石が少量、角閃石が微量混在している。

火山ガラス比では、スコリアが多く、軽石型火山ガラスが少量、バブル型火山ガラスと中間型火山ガラスが極めて微量混在している。

粒径1/4mm以上の砂分では、バブル型火山ガラスと軽石型火山ガラスが微量、最大径約2.0mmのスコリアが中量混在している。火山ガラスは、無色透明のバブル型火山ガラスが多く、無色透明の軽石型火山ガラス、褐色や淡褐色を帯びるバブル型火山ガラスが微量混在している。スコリアは、黒色を呈し発泡不良のものと、黒色を呈し発泡やや不良のものが多く、次いで灰褐色を呈し発泡やや不良のものが比較的多く、赤色を呈し発泡不良のものが少量混在している。

・試料番号7：G-25-26区ベルト テフラサンプル③

重鉱物組成は、斜方輝石が非常に多く、不透明鉱物が中量、単斜輝石が少量、カンラン石が微量、角閃石が極めて微量混在している。

火山ガラス比では、軽石型火山ガラスが多く、バブル型火山ガラスとスコリアが微量、中間型火山ガラスが極めて微量混在している。

粒径1/4mm以上の砂分では、火山ガラスが微量、最大径約1.4mmのスコリアが少量混在している。火山ガラスは、無色透明のバブル型火山ガラスが多く、褐色や淡褐色を帯びるバブル型火山ガラスが微量混在している。スコリアは、黒色を呈し発泡不良のものが多く、次いで黒色を呈し発泡やや不良、赤色を呈し発泡不良のものが極めて微量混在している。

・試料番号8：G-25-26区ベルト テフラサンプル④

重鉱物組成は、斜方輝石が非常に多く、不透明鉱物が中量、単斜輝石とカンラン石が微量、角閃石が極めて微量混在している。

火山ガラス比では、バブル型火山ガラスが多く、軽石型火山ガラスが微量、中間型火山ガラスとスコリアが極めて微量混在している。

粒径1/4mm以上の砂分では、火山ガラスが微量、最大

径約1.0mmのスコリアが微量混在している。火山ガラスは、無色透明のバブル型火山ガラスが多く、褐色や淡褐色を帯びるバブル型火山ガラスが混在している。スコリアは、黒色を呈し発泡不良のものが多く、黒色を呈し発泡やや不良、赤色を呈し発泡不良のものが極めて微量混在している。

イ 屈折率測定

火山ガラスおよび斜方輝石については、8点すべてについて測定を行った。以下に、火山ガラスと斜方輝石に分けて結果を述べる。

(ア) 火山ガラス (第356図)

試料番号1～8では、ほぼ同様の測定結果を示す。

n₁.496またはn₁.497からn₁.500またはn₁.501の低屈折率のレンジと、n₁.508またはn₁.509からn₁.514またはn₁.515までの高屈折率のレンジに明確に分かれる。

(イ) 斜方輝石 (第357図)

試料番号1, 3, 7は、ほぼ同様の測定結果を示す。

試料番号1, 3, 7は、 y 1.709から y 1.713または y 1.714までの高いレンジを示す。モードは、 y 1.710前後である。

試料番号2と4は、 y 1.706または y 1.707から y 1.712または y 1.715の広いレンジとなったが、主要なレンジはおそらく y 1.709または y 1.710から y 1.713または y 1.715までのレンジとみられる。試料番号2はモードが y 1.713前後、試料番号4はモードが y 1.710前後にあるとみられる。

試料番号5と6は、ほぼ同様の測定結果を示す。 y 1.698または y 1.699から y 1.701の低屈折率のレンジと、 y 1.707または y 1.709から y 1.711の高屈折率のレンジに明確に分かれる。モードは y 1.698前後と y 1.701前後、 y 1.710 - 1.711前後の3つにあると思われる。

試料番号8は、 y 1.703から y 1.713までの広いレンジとなったが、主要なレンジはおそらく y 1.703から y 1.710付近までのレンジと、 y 1.711から y 1.713までのレンジにあり、モードは y 1.707前後と y 1.712前後にあるとみられる。

(4) 考察

各試料から、開間岳のテフラに由来すると考えられるカンラン石とスコリアが検出された。

藤野・小林 (1992; 1997) などの記載に従えば、開間岳の火山活動はスコリアの噴出と溶岩の流出を繰り返したとされている。テフラ層については、約4,000年前の噴火によるKm1から平安時代の噴火によるKm12までを区分しており、噴出物の主体はスコリアと岩片および細粒火山灰からなるとしている。また、各テフラ層の中で給源からやや離れた地域に降下堆積し、硬く固結した状態の火山灰を「コラ」としており、Km1には黄

コラ、Km4には灰コラ、Km9には暗紫コラ、Km11には青コラ、Km12には紫コラと呼ばれる火山灰層がそれぞれ挟まれている。各コラの噴出年代については、奥野 (2002) により暦年代が示されており、黄コラは4,400年前、灰コラは3,400年前、暗紫コラは1,900年前、青コラは7世紀、紫コラはAD 874年とされている。

当社では開間岳テフラの標準試料を保有しており、各コラの重鉱物組成及び斜方輝石の屈折率、スコリアの形態や色調から対比が可能となっている。以下に特徴を簡単に記載する。

重鉱物組成では、紫コラは青コラと暗紫コラおよび灰コラに比べてカンラン石の量比が低く、斜方輝石と単斜輝石および不透明鉱物の量比の高いことが特徴となり、青コラについては極めて微量ながら角閃石を含むことが特徴となる。青コラに角閃石が含まれることについては、上述した藤野・小林 (1997) にも記載されている。したがって、青コラと他のコラの重鉱物組成は、角閃石の有無で区別される。現時点では、暗紫コラと灰コラの重鉱物組成による区別は難しい。

斜方輝石の屈折率では、4者ともレンジの重なる範囲はあるが、レンジの両端の値とモード付近の値を比較すると、最も低い値を示すのは暗紫コラであり、最も高い値を示すのは青コラ、両者の中間的な値を示すのが紫コラである。灰コラの値は、暗紫コラとほぼ重複するが、レンジの下限は暗紫コラよりやや高い。

さらに、径1/4mm以上の砂粒観察により、各コラに含まれるスコリアの色調や発泡度に違いがあり、青コラについては、斜長石の斑晶を多く含むという特徴も他のコラと区別する際の指標となる。

試料番号1には、少量のスコリアが認められた。カンラン石もわずかながら検出されていることから、開間岳テフラに由来すると考えられる。ただし、火山ガラス比からみて、スコリアと火山ガラスが同程度の量比検出されていることから、開間岳テフラ以外のテフラも混在しており、分析結果からの対比は難しい。

火山ガラスの形態や色調および屈折率と斜方輝石の屈折率から、試料番号1に混在するテフラは境界アカホヤ火山灰 (K-Ah: 町田・新井, 1978) とシラスであると考えられる。

開間岳テフラに由来する斜方輝石は、おそらく割合として非常に低いため、屈折率測定では認めることができなかったと考えられる。分析値からの対比は難しいが、スコリアの色調や発泡度から対比を推定できる。試料番号1のスコリアからは青コラに特徴的な斜長石の斑晶が多く含まれるスコリアは検出されなかったこと、灰褐色を呈し発泡やや不良のスコリアが、黒色を呈し発泡不良のスコリアに次いで多く含まれることから、紫コラが暗紫コラのいずれかに対比できる。山ノ口式土器が確認さ

れている層であることを考慮すれば、暗紫コラに対比される可能性がある。

試料番号3も、試料番号1と同様の組成であり、開間岳テフラに対比されると考えられる。重鉱物組成では、斜方輝石とカンラン石が多く、次いで不透明鉱物が多く含まれるという組成になっている。火山ガラス比では、火山ガラスが多く、スコリアが微量含まれるという組成になっている。

1/4 mm以上の砂分に含まれるスコリアは、中量のスコリアが認められ、灰褐色を呈し発泡や不良のスコリアが比較的多く含まれる。斜方輝石の分析値からは、開間岳テフラに対比される斜方輝石の分析値は認められないが、スコリアの色調や発泡度から、試料番号1と同様、暗紫コラに対比される可能性がある。

試料番号2と4は、スコリアが少量～微量認められた。カンラン石が少量検出されていることを考慮すると、開間岳テフラに由来すると考えられる。ただし、火山ガラス比からみて、スコリアより多くの火山ガラスが検出されていることから、開間岳テフラ以外のテフラも混在しており、分析結果からの対比は難しい。

重鉱物組成からみて、斜方輝石に次いで不透明鉱物がカンラン石よりも多く含まれている。カンラン石が少ないことについては、不透明鉱物が斜方輝石に次いで多いことを考慮すれば、堆積後の風化変質の影響によりカンラン石が溶失し、風化変質に強い不透明鉱物の量比が相対的に高くなった可能性がある。すなわち本来の重鉱物組成を示していない可能性がある。

火山ガラスの形態や色調、屈折率および斜方輝石の屈折率の値からは、K-Ahとシラスに該当するテフラの混在が確認されるものの、斜方輝石の分析値からは開間岳のテフラに該当する値もわずかに認められる。斜方輝石の屈折率からは灰コラに対比される可能性があるが、スコリアの色調や形態を考慮すると、暗紫コラに由来するものである。試料番号2と4は、暗紫コラに灰コラが混入した可能性が指摘できる。

試料番号5と6は、スコリアが中量認められた。重鉱物組成では、試料番号5は斜方輝石が最も多く、次いで不透明鉱物が多く、カンラン石が少量含まれるという組成だが、試料番号6の重鉱物組成は、試料番号5とはほぼ同様であるが、不透明鉱物が試料番号5より多い。

火山ガラス比からみて、試料番号5はスコリアが微量で火山ガラスが多いという組成で、試料番号6はスコリアが全試料中で多く火山ガラスは少量という組成である。火山ガラスの色調、形態および屈折率、斜方輝石の屈折率から、混在しているテフラはK-Ahとシラスである。ただし、斜方輝石の分析値からは、開間岳テフラに由来する斜方輝石の分析値も認められた。暗紫コラに特徴的な低屈折率の斜方輝石の分析値と紫コラの斜方輝石の

屈折率の最低値にほぼ重なる。1/4 mm以上の砂分に含まれるスコリアは、灰褐色を呈し発泡や不良のものが比較的多く含まれる。試料番号5と6は、紫コラと暗紫コラの混入した結果の層であると考えられる可能性が高い。

暗紫コラは、開間岳テフラの中で最大規模であり(藤野・小林, 1997)、初生の降下堆積層の厚層は最も大きいとされることや、テフラの新旧関係を考慮するならば、試料採取層準に暗紫コラが混入した可能性が考えられる。

試料番号7は、スコリアが少量認められた。カンラン石が極めて微量検出されていることから、開間岳テフラに由来すると考えられる。

火山ガラスの色調、形態および屈折率、斜方輝石の屈折率はK-Ahとシラスに由来すると考えられる。火山ガラスの低屈折率レンジはシラスに由来する火山ガラスであり、高屈折率のレンジはK-Ahに由来する火山ガラスである。斜方輝石の屈折率は、K-Ahに由来するレンジである。

1/4 mm以上の砂分に含まれるスコリアからは、灰褐色を呈し発泡や不良のスコリア、もしくは斜長石斑晶を多く含むスコリアが認められないことから、紫コラ、暗紫コラおよび青コラといった開間岳テフラの特徴に合致せず、対比が困難である。

試料番号8は、火山ガラスに含まれるスコリアやカンラン石が極めて微量検出されているが、1/4 mm以上の砂分からは少量のスコリアが検出されていることから、開間岳テフラに由来する。

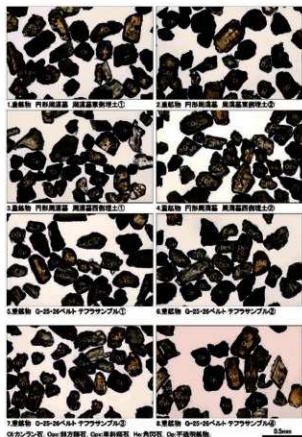
重鉱物組成は、斜方輝石が極めて多く、次いで不透明鉱物が多く含まれるという組成になっている。カンラン石はほとんど含まれないが、本来の重鉱物組成を反映していないと考えられる。

火山ガラスはバブル型火山ガラスが多く、次いで軽石型火山ガラスが含まれ、スコリアは極めて微量の検出となっている。火山ガラスの色調と形態および屈折率、斜方輝石の屈折率からは、K-Ahとシラスに由来する斜方輝石が混在している。火山ガラスの低屈折率レンジはシラスに由来する火山ガラスであり、高屈折率のレンジはK-Ahに由来する火山ガラスである。

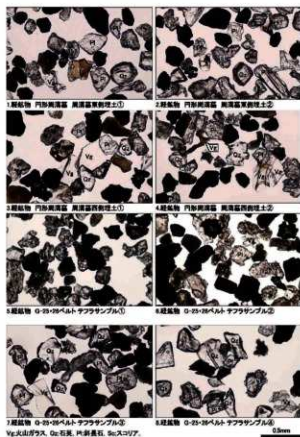
1/4 mm以上の砂分に含まれるスコリアに、灰褐色を呈し発泡や不良のスコリアが比較的多く含まれることと斜方輝石の屈折率の分析値からは暗紫コラと灰コラに対比されることから、テフラの新旧関係を考慮するならば、暗紫コラに灰コラが混入した可能性が指摘できる。

【引用文献】

- 藤野直樹・小林哲夫, 1992, 開間岳起源のコラ層の噴火・堆積様式, 鹿兒島大学紀要(地学・生物学), 25, 69-83.
- 藤野直樹・小林哲夫, 1997, 開間岳火山の噴火史, 火山, 42, 195-211.



第358図 重鉱物



第359図 軽鉱物

第3節 放射性炭素年代測定 (AMS測定)

1 放射性炭素年代測定

(株) 加速器分析研究所

(1) 選定対象試料

選定対象試料は弥生時代竪穴住居跡 8・11・17号から出土した炭化物や炭化種実の合計4点である(第30表)。試料は、調査現場にて採取された土の中からフローテーションにより回収され、種実同定(別稿種実同定報告参照)を行った後、年代測定に適した試料を選定した。しかし、一部は測定に適した種実が検出されなかった。もしくは種実の保存を優先するために、炭化材など種実以外の炭化物を試料とした。

試料が出土した遺構はⅢ層で検出され、弥生時代と推定されている。Ⅱ層は弥生時代、Ⅴ層は縄文時代早期の遺物包含層と捉えられている。

(2) 化学処理工程

ア メス・ピンセットを使い、根・土等の付着物を取り除く。

イ 酸-アルカリ-酸(AAA: Acid Alkali Acid)処理により不純物を化学的に取り除く。その後、超純水で中性になるまで希釈し、乾燥させる。AAA処理における酸処理では、通常 1 mol/l (1 M) の塩酸(HCl)を用いる。アルカリ処理では水酸化ナトリウム

(NaOH)水溶液を用い、0.001Mから1Mまで徐々に濃度を上げながら処理を行う。アルカリ濃度が1Mまで達した時には「AAA」、1M未満の場合は「AaA」と第30表に記載する。

ウ 試料を燃焼させ、二酸化炭素(CO₂)を発生させる。
エ 真空ラインで二酸化炭素を精製する。
オ 精製した二酸化炭素を鉄を触媒として水素で還元し、グラファイト(C)を生成させる。
カ グラファイトを内径1mmのカソードにハンドプレス機で詰め、それをホイールにはめ込み、測定装置に装着する。

(3) 測定方法

加速器をベースとした¹⁴C-AMS専用装置(NEC社製)を使用し、¹⁴Cの計数、¹³C濃度(¹³C/¹²C)、¹⁴C濃度(¹⁴C/¹²C)の測定を行う。測定では、米国国立標準局(NIST)から提供されたシュウ酸(HOX II)を標準試料とする。この標準試料とバックグラウンド試料の測定も同時に実施する。

(4) 算出方法

ア ¹³Cは、試料炭素の¹³C濃度(¹³C/¹²C)を測定し、基準試料からのずれを千分偏差(‰)で表した値である(第30表)。AMS装置による測定値を用い、表中に「AMS」と注記する。

イ ^{14}C 年代 (Libby Age : yrBP) は、過去の大気中 ^{14}C 濃度が一定であったと仮定して測定され、1950 年を基準年 (0yrBP) として遡る年代である。年代値の算出には、Libby の半減期 (5568 年) を使用する (Stuiver and Polach 1977)。 ^{14}C 年代は $\delta^{13}\text{C}$ によって同位体効果を補正する必要がある。補正した値を第 30 表に、補正していない値を参考値として第 31 表に示した。 ^{14}C 年代と誤差は、下 1 桁を丸めて 10 年単位で表示される。また、 ^{14}C 年代の誤差 ($\pm 1\sigma$) は、試料の ^{14}C 年代がその誤差範囲に入る確率が 68.2% であることを意味する。

ウ pMC (percent Modern Carbon) は、標準現代炭素に対する試料炭素 ^{14}C 濃度の割合である。pMC が小さい (^{14}C が少ない) ほど古い年代を示し、pMC が 100 以上 (^{14}C の量が標準現代炭素と同等以上) の場合 Modern とする。この値も $\delta^{13}\text{C}$ によって補正する必要があるため、補正した値を第 30 表に、補正していない値を参考値として第 31 表に示した。

エ 暦年較正年代とは、年代が既知の試料の ^{14}C 濃度を元に描かれた較正曲線と照らし合わせ、過去の ^{14}C 濃度変化などを補正し、実年代に近づけた値である。暦年較正年代は、 ^{14}C 年代に対応する較正曲線上の暦年較正年代範囲であり、1 標準偏差 ($1\sigma = 68.2\%$) あるいは 2 標準偏差 ($2\sigma = 95.4\%$) で表示される。グラフの縦軸が ^{14}C 年代、横軸が暦年較正年代を表す。暦年較正プログラムに入力される値は、 $\delta^{13}\text{C}$ 補正を行い、下 1 桁を丸めない ^{14}C 年代値である。なお、較正曲線及び較正プログラムは、データの蓄積によって更新される。また、プログラムの種類によっても結果が異なるため、年代の活用にあたってはその種類とバージョンを確認する必要がある。ここでは、暦年較正年代の計算に IntCal09 データベース (Reimer et al. 2009) を

用い、OxCalv4.2 較正プログラム (Bronk Ramsey 2009) を使用した。暦年較正プログラムについては、特定のデータベース、プログラムに依存する点を考慮し、プログラムに入力する値とともに参考値として第 31 表に示した。暦年較正年代は、 ^{14}C 年代に基づいて較正 (calibrate) された年代値であることを明示するために「calBC/AD」(または「cal BP」) という単位で表される。

(5) 測定結果

試料の測定結果を第 30・31 表に示す。 ^{14}C 年代は、4 点のうち 3 と 4 の値が誤差 ($\pm 1\sigma$) の範囲で一致し、2 と 3 の値も近接しており、2~4 の 3 点がおおむね近い値と見なされる。これらに対して、試料 1 は明確に異なる年代値を示している。暦年較正年代 (1σ) は、1 が縄文時代後期前葉頃、2~4 が弥生時代中期頃に相当する (小林編 2008, 藤尾 2009)。

試料の炭素含有率はすべて 60% 以上の十分な値で、化学処理、測定上の問題は認められない。

【引用文献】

- Bronk Ramsey C. 2009 Bayesian analysis of radiocarbon dates. Radiocarbon 51(1), 337-360
 藤尾慎一郎 2009 弥生時代の実年代. 西本豊弘編, 新弥生時代のはじまり 第 4 巻 弥生農耕のはじまりとその年代. 雄山閣, 9-54
 小林達雄編 2008 総覧縄文土器, 総覧縄文土器刊行委員会, アム・プロモーション
 Reimer, P. J. et al. 2009 IntCal09 and Marine09 radiocarbon age calibration curves, 0-50,000 years cal BP. Radiocarbon 51(4), 1111-1150
 Stuiver M. and Polach H. A. 1977 Discussion: Reporting of ^{14}C date. Radiocarbon 19(3), 355-363

第 30 表 放射性炭素年代測定結果 ($\delta^{13}\text{C}$ 補正值)

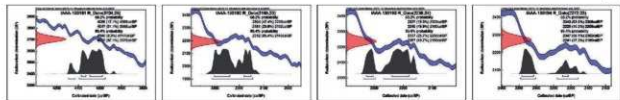
試料番号	検出	試料番号	測定	測定	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	年齢 (yrBP)	年齢 (cal BP)	pMC (‰)
IAAA-1M015	1	弥生時代後期前葉頃 (115)	放射性	AAA	-27.26 ± 0.25	3,790 ± 30	63.06 ± 0.20	
IAAA-1M012	2	弥生時代中期頃 (115)	放射性	AAA	-33.73 ± 0.31	2,390 ± 20	78.09 ± 0.22	
IAAA-1M013	3	弥生時代中期頃 (115)	放射性	AAA	-25.46 ± 0.39	2,510 ± 20	75.68 ± 0.23	
IAAA-1M014	4	弥生時代中期頃 (115)	放射性	AAA	-27.47 ± 0.42	2,370 ± 20	75.36 ± 0.22	

[60506]

第 31 表 放射性炭素年代測定結果 ($\delta^{13}\text{C}$ 未補正值, 暦年較正用 ^{14}C 年代, 較正年代)

試料番号	年代 (yrBP)	年齢 (cal BP)	年齢 (cal BP)	年齢 (cal BP)	年齢 (cal BP)
IAAA-1M015	3,740 ± 30	62.77 ± 0.20	3,760 ± 25	4096calBP - 4066calBP (17.7%)	4146calBP - 4115calBP (3.1%)
IAAA-1M012	2,470 ± 20	76.28 ± 0.22	2,195 ± 23	2094calBP - 2239calBP (47.4%)	2121calBP - 2143calBP (9.4%)
IAAA-1M013	2,250 ± 20	75.61 ± 0.22	2,328 ± 24	2327calBP - 2305calBP (9.9%)	2375calBP - 2360calBP (6.7%)
IAAA-1M014	2,310 ± 20	74.98 ± 0.23	2,272 ± 23	2345calBP - 2336calBP (3.9%)	2345calBP - 2336calBP (3.9%)

[60506]



第 360 図 暦年較正年代

2 放射性炭素年代測定

パレオ・ラボ AMS 年代測定グループ
伊藤 茂・安昭 焜・佐藤正教
廣田正史・山形秀樹・小林絏一
Zaur Lomtadize・Ineza Jorjoliani
・小林克也

(1) はじめに

鹿児島県大崎町に位置する永吉天神段遺跡より検出された試料について、加速器質量分析法 (AMS 法) による放射性年代測定を行った。

(2) 試料と方法 (放射性炭素年代測定)

試料は、弥生時代竪穴住居跡 45 号から炭化材 2 点 (試料 No.1 : PLD-27789, 試料 No.2 : PLD-27790)、弥生時代竪穴住居跡 33 号の床面直上から炭化種実 1 点 (試料 No.3 : PLD-27791)、弥生時代竪穴住居跡 33 号の SK1 から炭化材 1 点 (試料 No.4 : PLD-27792)、弥生時代竪穴住居跡 31 号から炭化材 1 点 (試料 No.5 : PLD-27793)、弥生時代竪穴住居跡 42 号から炭化材 1 点 (試料 No.6 : PLD-27794)、古墳時代 S15 から炭化材 1 点 (試料 No.9 : PKD-27797)、P 1 から炭化材 2 点 (試料 No.7 : PLD-27795, 試料 No.8 : PLD-27796)、SD25 から炭化材 1 点の計 10 点である。

樹種同定の結果、試料 No.1 はツバキ属、試料 No.2 はケンボナシ属であった。また、炭化材のうち試料 No.4, 5, 7, 8 は最終形成年輪が残っていたが、試料 No.1, 2, 6, 9 は最終形成年輪は残っていなかった。測定試料の情報、調整データは第 32 表のとおりである。試料は調整後、加速器質量分析計 (パレオ・ラボ, コンパクト AMS: NEC 製 1.5SDH) を用いて測定した。得られた ^{14}C 濃度について同位体分別効果の補正を行った後、 ^{14}C 年代、暦年代を算出した。

(3) 結果

第 33 表に同位体分別効果の補正に用いる炭素同位体比 ($\delta^{13}\text{C}$)、同位体分別効果の補正を行って暦年代に用いた年代値と校正によって得られた年代範囲、慣用に従って年代値と誤差を丸めて表示した ^{14}C 年代を、第 362 図に暦年代校正結果をそれぞれ示す。暦年代校正に用いた年代値は下 1 桁を丸めていない値であり、今後暦年代校正曲線が更新された際にこの年代値を用いて暦年代校正を行うために記載した。

^{14}C 年代は AD1950 年を基点にして何年前かを示した年代である。 ^{14}C 年代 (yrBP) の算出には、 ^{14}C の半減期として Libby の半減期 5568 年を使用した。また、付記した ^{14}C 年代誤差 ($\pm 1\sigma$) は、測定の統計誤差、標準偏差等に基づいて算出され、試料の ^{14}C 年代がその ^{14}C 年代誤差内に入る確率が 68.2% であることを示す。

なお、暦年代校正の詳細は以下のとおりである。

暦年代校正とは、大気中の ^{14}C 濃度が一定で半減期が

5568 年として算出された ^{14}C 年代に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の ^{14}C 濃度の変動、及び半減期の違い (^{14}C の半減期 5730 ± 40 年) を校正して、より実際の年代値に近いものを算出することである。

^{14}C 年代の暦年代校正には OxCal4.2 (校正曲線データ: IntCal13) を使用した。なお、 1σ 暦年代範囲は、OxCal の確率法を使用して算出された ^{14}C 年代誤差に相当する 68.2% 信頼限界の暦年代範囲であり、同様に 2σ 暦年代範囲は 95.4% 信頼限界の暦年代範囲である。カッコ内の百分率の値は、その範囲内に暦年代が入る確率を意味する。グラフ中の縦軸上の曲線は ^{14}C 年代の確率分布を示し、二重曲線は暦年代校正曲線を示す。

(4) 考察

測定結果をマルチプロット図に示した (第 361 図)。以下、 2σ 暦年代範囲 (確率 95.4%) に着目して結果を整理する。なお、弥生土器編年と ^{14}C 年代の対応関係については、藤尾 (2009) を参照した。

S145 の試料 No.1 (PLD-27789) は 385-346cal BC (20.8%) および 321-206cal BC (74.6%) で、紀元前 4 世紀前半～紀元前 3 世紀末の暦年代を示した。また、同じく S145 出土の試料 No.2 (PLD-27790) は 353 - 295cal BC (24.4%)、230 - 220cal BC (1.5%)、213 - 94cal BC (69.5%) で、紀元前 4 世紀中頃～紀元前 1 世紀初頭の暦年代を示した。いずれも、弥生時代中期に相当する。なお、試料 No.1 と 2 は最終形成年輪が残っていなかった。木材の場合、最終形成年輪部分を測定すると枯死もしくは伐採年代が得られるが、内側の年輪を測定すると、最終形成年輪から内側であるほど古い年代が得られる (古木効果)。今回の試料はいずれも古木効果の影響を受けていると考えられ、実際に枯死もしくは伐採された年代は、測定結果よりも新しい年代と考えられる。

弥生時代竪穴住居跡 42 号から出土した試料 No.6 (PLD-27794) は 361 - 201cal BC (95.4%) で、紀元前 4 世紀前半～紀元前 3 世紀末の暦年代を示した。これは、弥生時代中期に相当する。試料 No.6 は最終形成年輪が残っており、実際に枯死もしくは伐採された年代は、測定結果よりも新しい年代と考えられる。

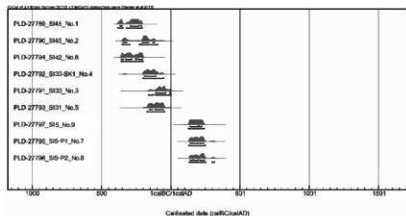
弥生時代竪穴住居跡 33 号の SK1 の試料 No.4 (PLD-27792) は 203 - 55cal BC (95.4%) で、紀元前 3 世紀末～紀元前 1 世紀中頃の暦年代を示した。これは、おおむね弥生時代中期に相当する。また、同じく弥生時代竪穴住居跡 33 号出土の試料 No.3 (PLD-27791) は 162 - 131cal BC (10.8%) および 119cal BC - 3 cal AD (84.6%) で、紀元前 2 世紀前半～紀元後 1 世紀初頭の暦年代を示した。これは、弥生時代中期に相当する。なお、試料 No.3 は炭化種実であり、測定結果は種実の結実年代を示す。試料 No.4 の炭化材は最終形成年輪が残っており、測定結

果が枯死もしくは伐採された年代を示す。

弥生時代堅穴住居跡 31 号の試料 No.5 は 172 - 46cal BC (95.4%) で、紀元前 2 世紀前半～紀元前 1 世紀中頃の暦年代を示す。これは、弥生時代中期に相当する。試料 No.5 は最終形成年輪が残っており、測定結果は枯死もしくは伐採された年代を示す。

古墳時代堅穴住居跡 5 号の試料 No.9 (PLD-27797) は 128 - 243cal AD (95.4%) で、2 世紀前半～3 世紀中頃の暦年代を示した。これは、弥生時代後期に相当する。試料 No.9 は最終形成年輪が残っており、実際に枯死もしくは伐採された年代は、測定結果よりも新しい年代と考えられる。

古墳時代堅穴住居跡 5 号の P 1 の試料 No.7 (PLD-27795) は 130 - 250cal AD (95.4%) で、2 世紀前半～3 世紀中頃の暦年代を示した。これは、弥生時代後期に相当する。同じく P 2 出土の試料 No.8 (PLD-27796) は 131 - 255cal AD (91.1%) および 300 - 318cal AD (4.3%) で、2 世紀前半～4 世紀前半の暦年代を示した。これは、弥生時代後期～古墳時代前期に相当する。なお、試料 No.7 と 8 はいずれも最終形成年輪が残っており、測定結果は枯死もしくは伐採された年代を示す。



第 361 図 マルチプロット図

第 32 表 測定試料および処理

測定番号	検体データ	試料データ	測定値
PLD-27796	検体: S31-42 試料 No. 1 測定値: 1987	種別: 炭化材 (ツバノ木) 試料の位置: 掘削不明 部位: 内側年輪部分 状態: 全	経年炭化済 種: アルカリ・酸洗済 (塩酸: 1.2%, 水酸化ナトリウム: 1.0%, 塩素: 1.2%)
	検体: S31-43 試料 No. 2 測定値: 1987	種別: 炭化材 (ツバノ木) 試料の位置: 掘削不明 部位: 内側年輪部分 状態: 全	経年炭化済 種: アルカリ・酸洗済 (塩酸: 1.2%, 水酸化ナトリウム: 1.0%, 塩素: 1.2%)
	検体: S31-23 試料 No. 3 測定値: 1227	種別: 炭化材 試料の位置: 掘削不明 部位: 内側年輪部分 状態: 全	経年炭化済 種: アルカリ・酸洗済 (塩酸: 1.2%, 水酸化ナトリウム: 1.0%, 塩素: 1.2%)
PLD-27796	検体: S31-10 試料 No. 4 測定値: 1987	種別: 炭化材 試料の位置: 掘削不明 部位: 内側年輪部分 状態: 全	経年炭化済 種: アルカリ・酸洗済 (塩酸: 1.2%, 水酸化ナトリウム: 1.0%, 塩素: 1.2%)
	検体: S31-3 試料 No. 5 測定値: 1943	種別: 炭化材 試料の位置: 掘削不明 部位: 内側年輪部分 状態: 全	経年炭化済 種: アルカリ・酸洗済 (塩酸: 1.2%, 水酸化ナトリウム: 1.0%, 塩素: 1.2%)
	検体: S31-44 試料 No. 6 測定値: 2231	種別: 炭化材 試料の位置: 掘削不明 部位: 内側年輪部分 状態: 全	経年炭化済 種: アルカリ・酸洗済 (塩酸: 1.2%, 水酸化ナトリウム: 1.0%, 塩素: 1.2%)
PLD-27796	検体: S35-71 試料 No. 7 測定値: 1	種別: 炭化材 試料の位置: 掘削不明 部位: 内側年輪部分 状態: 全	経年炭化済 種: アルカリ・酸洗済 (塩酸: 1.2%, 水酸化ナトリウム: 1.0%, 塩素: 1.2%)
	検体: S35-22 試料 No. 8 測定値: 1	種別: 炭化材 試料の位置: 掘削不明 部位: 内側年輪部分 状態: 全	経年炭化済 種: アルカリ・酸洗済 (塩酸: 1.2%, 水酸化ナトリウム: 1.0%, 塩素: 1.2%)
	検体: S35 試料 No. 9 測定値: 1	種別: 炭化材 試料の位置: 掘削不明 部位: 内側年輪部分 状態: 全	経年炭化済 種: アルカリ・酸洗済 (塩酸: 1.2%, 水酸化ナトリウム: 1.0%, 塩素: 1.2%)

なお、SD25 の炭化材については、「永吉天神段遺跡 3 第 2 地点 - 2」に記載済みのため省略する。

【引用文献】

Bronk Ramsey, C. (2009) Bayesian Analysis of Radiocarbon dates. Radiocarbon, 51(1), 337-360.

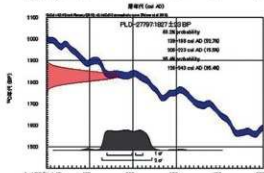
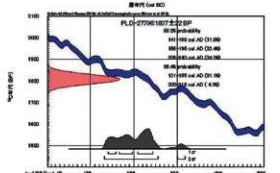
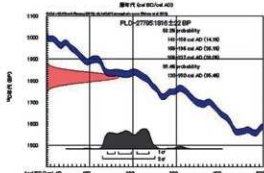
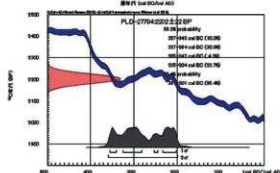
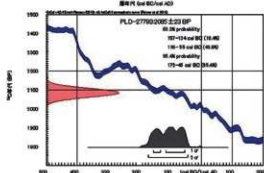
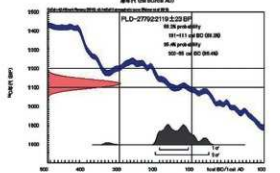
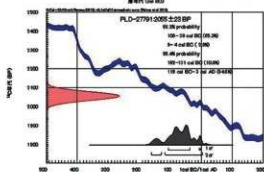
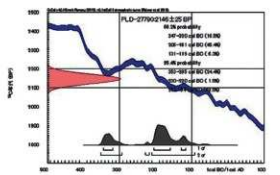
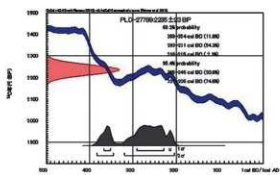
藤尾慎一郎 (2009) 弥生時代の実年代. 西本豊弘編「新弥生時代の はじまり」第 4 巻 弥生農耕のはじまりとその年代: 9-54, 雄山閣.

中村俊夫 (2000) 放射性炭素年代測定法の基礎. 日本先史時代の 14 C 年代編集委員会編「日本先史時代の 14 C 年代」: 3-20, 日本第四紀学会.

Reimer, P. J., Bard, E., Bayliss, A., Beck, J. W., Blackwell, P. G., Bronk Ramsey, C., Buck, C. E., Cheng, H., Edwards, R. L., Friedrich, M., Grootes, P. M., Guilderson, T. P., Hafidason, H., Hajdas, I., Hatte, C., Heaton, T. J., Hoffmann, D. L., Hogg, A. G., Hughen, K. A., Kaiser, K. F., Kromer, B., Manning, S. W., Niu, M., Reimer, R. W., Richards, D. A., Scott, E. M., Southon, J. R., Staff, R. A., Turney, C. S. M., and van der Plicht, J. (2013) IntCal13 and Marine13 Radiocarbon Age Calibration Curves 0-50,000 Years calBP. Radiocarbon, 55(4), 1869-1887.

第 33 表 放射性炭素年代測定および暦年代較正の結果

測定番号	±1σ	暦年較正の中央値 (calBP)	±1σ	14C 年代較正の中央値 (calBP)		14C 年代較正の ±1σ	
				1σ	2σ	1σ	2σ
PLD-27796 試料 No. 1 測定値: 1987	±1.0	233 ± 1.0	233 ± 1.0	309-294 cal BC (1.0%)	309-294 cal BC (1.0%)	309-294 cal BC (1.0%)	309-294 cal BC (1.0%)
PLD-27796 試料 No. 2 測定値: 1987	±1.0	233 ± 1.0	233 ± 1.0	309-294 cal BC (1.0%)	309-294 cal BC (1.0%)	309-294 cal BC (1.0%)	309-294 cal BC (1.0%)
PLD-27796 試料 No. 3 測定値: 1227	±1.0	2000 ± 1.0	2000 ± 1.0	199-184 cal AD (1.0%)	199-184 cal AD (1.0%)	199-184 cal AD (1.0%)	199-184 cal AD (1.0%)
PLD-27796 試料 No. 4 測定値: 1987	±1.0	233 ± 1.0	233 ± 1.0	309-294 cal BC (1.0%)	309-294 cal BC (1.0%)	309-294 cal BC (1.0%)	309-294 cal BC (1.0%)
PLD-27796 試料 No. 5 測定値: 1943	±1.0	2000 ± 1.0	2000 ± 1.0	199-184 cal AD (1.0%)	199-184 cal AD (1.0%)	199-184 cal AD (1.0%)	199-184 cal AD (1.0%)
PLD-27796 試料 No. 6 測定値: 2231	±1.0	2000 ± 1.0	2000 ± 1.0	199-184 cal AD (1.0%)	199-184 cal AD (1.0%)	199-184 cal AD (1.0%)	199-184 cal AD (1.0%)
PLD-27796 試料 No. 7 測定値: 1	±1.0	2000 ± 1.0	2000 ± 1.0	199-184 cal AD (1.0%)	199-184 cal AD (1.0%)	199-184 cal AD (1.0%)	199-184 cal AD (1.0%)
PLD-27796 試料 No. 8 測定値: 1	±1.0	2000 ± 1.0	2000 ± 1.0	199-184 cal AD (1.0%)	199-184 cal AD (1.0%)	199-184 cal AD (1.0%)	199-184 cal AD (1.0%)
PLD-27796 試料 No. 9 測定値: 1	±1.0	2000 ± 1.0	2000 ± 1.0	199-184 cal AD (1.0%)	199-184 cal AD (1.0%)	199-184 cal AD (1.0%)	199-184 cal AD (1.0%)



第 362 図 暦年較正年代

3 放射性炭素年代測定

パリオ・サーヴェイ株式会社

(1) 試料

試料は、永吉天神段遺跡から出土した土器の付着炭化物が6点である。各試料の注記は、試料番号1が20159G27 II b (第34図184)、試料番号2が18182 (第245図1323)、試料番号3が17426 (第257図1405)、試料番号4が32358 (第56図437)、試料番号5が32168 (第52図399)、試料番号6が21415 (第241図1289)とされている。

(2) 分析方法

試料の状況を観察後、塩酸(HCl)により炭酸塩等酸可溶成分を除去、水酸化ナトリウム(NaOH)により腐植酸等アルカリ可溶成分を除去、塩酸によりアルカリ処理時に生成した炭酸塩等可溶成分を除去する(酸・アルカリ・酸処理 AAA:Acid Alkali Acid)。濃度は塩酸、水酸化ナトリウム共に1 mol/Lであるが、試料が脆弱な場合や少ない場合は、アルカリの濃度を調整して試料の損耗を防ぐ(AaAと記載)。

試料の燃焼、二酸化炭素の精製、グラファイト化(鉄を触媒とし水素で還元する)はElementar社のvario ISOTOPE cubeとIonplus社のAge3を連結した自動化装置を用いる。処理後のグラファイト・鉄粉混合試料をNEC社製のハンドプレス機を用いて内径1mmの孔にプレスし、測定試料とする。

測定はタンデム加速器をベースとした¹⁴C-AMS専用装置(NEC社製)を用いて、¹⁴Cの計数、¹³C濃度(¹³C/¹²C)、¹⁴C濃度(¹⁴C/¹²C)を測定する。AMS測定時に、米国国立標準局(NIST)から提供される標準試料(HOX-II)、国際原子力機関から提供される標準試料(IAEA-C6等)、バックグラウンド試料(IAEA-C1)の測定も行う。

$\delta^{13}\text{C}$ は試料炭素の¹³C濃度(¹³C/¹²C)を測定し、基準試料からのずれを千分偏差(‰)で表したものである。放射性炭素の半減期はLIBBYの半減期5568年を使用する。また、測定年代は1950年を基点とした年代(BP)であり、誤差は標準偏差(One Sigma:68%)に相当する年代である。測定年代の表示方法は、国際学会での勧告に従う(Stuiver & Polach, 1977)。また、暦年校正用に行目まで表した値も記す。暦年校正に用いるソフトウェアは、Oxcal4.3.2 (Bronk, 2009)を用いる。校正曲線はIntcal13 (Reimer et al, 2013)を用いる。

(3) 結果

結果を第34表、第363図に示す。今回は分析試料が少なく脆弱なため、いずれも定法よりもアルカリ濃度を薄くして前処理を行っている(AaA)。このような処理によって、測定に必要な炭素量は十分回収できている。同位体補正を行った測定値は、試料番号1の20159G27 II bが2475 ± 25BP、試料番号2の18182が2425 ±

25BP、試料番号3の17426が2255 ± 25BP、試料番号4の32358が2360 ± 25BP、試料番号5の32168が2445 ± 30BP、試料番号6の21415が2260 ± 25BPである。

暦年校正は、大気中の¹⁴C濃度が一定で半減期が5568年として算出された年代値に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の¹⁴C濃度の変動、その後訂正された半減期(¹⁴Cの半減期5730 ± 40年)を校正することによって、暦年代に近づける手法である。測定誤差2σの暦年代は、試料番号1の20159G27 II bが2719~2433cal BP、試料番号2の18182が2696~2353cal BP、試料番号3の17426が2345~2158cal BP、試料番号4の32358が2461~2336cal BP、試料番号5の32168が2700~2358cal BP、試料番号6の21415が2346~2159cal BPである。

試料番号1~6では、相対的に試料番号1、2、4、5が古く、試料番号3と6が新しいが、遺物からみた時代観では、試料番号2、3、6が弥生時代中期、試料番号1、4、5が縄文時代晩期とされるので、試料番号2の値が遺物からみた時代観より年代値の方が古い。年代値と遺物からみた時代観のずれは、堆積物の擾乱による炭化物の移動や土中に埋まっている時に古い炭素や新しい炭素の吸着等によって起こると思われる。今回のような脆弱な試料に関しては、アルカリの濃度を低くして分析しているため、土壤中で汚染された炭素を十分排除できなかった可能性があり、このことが年代値のずれに影響しているのかもしれない。

【引用文献】

- Bronk RC., 2009, Bayesian analysis of radiocarbon dates. *Radiocarbon*, 51, 337-360.
- Reimer PJ, Bard E, Bayliss A, Beck JW, Blackwell PG, Bronk RC, Buck CE, Cheng H, Edwards RL, Friedrich M, Grootes PM, Guilderson TP, Hafldadson H, Hajdas I, Hatté C, Heaton TJ, Hoffmann DL, Hogg AG, Hughen KA, Kaiser KF, Kromer B, Manning SW, Niu M, Reimer RW, Richards DA, Scott EM, Southon JR, Staff RA, Turney CSM, van der Plicht J. 2013. Intcal13 and Marine13 radiocarbon age calibration curves 0-50,000 years cal BP. *Radiocarbon*, 55, 1869-1887.
- Stuiver M., & Polach AH, 1977. *Radiocarbon 1977 Discussion Reporting of ¹⁴C Date*. *Radiocarbon*, 19, 355-363.

第34表 放射性炭素年代測定・暦年校正結果

試料番号	試料名	採取地	試料重量 (g)	δ13C (‰)	放射性炭素年代測定		校正後年代 (暦年)	試料番号
					測定値 (BP)	標準差 (BP)		
20109	土壌	20109.1	1.0	-25.1	441	52	1927 ± 20	SK1 ①層
					442	50	1927 ± 20	SK1 ①層
20110	土壌	20110.1	1.0	-25.1	443	50	1927 ± 20	SK1 ①層
					444	50	1927 ± 20	SK1 ①層
10002	土壌	10002.1	1.0	-25.1	445	50	1927 ± 20	SK1 ①層
					446	50	1927 ± 20	SK1 ①層
17008	土壌	17008.1	1.0	-25.1	447	50	1927 ± 20	SK1 ①層
					448	50	1927 ± 20	SK1 ①層
30008	土壌	30008.1	1.0	-25.1	449	50	1927 ± 20	SK1 ①層
					450	50	1927 ± 20	SK1 ①層
30108	土壌	30108.1	1.0	-25.1	451	50	1927 ± 20	SK1 ①層
					452	50	1927 ± 20	SK1 ①層
21415	土壌	21415.1	1.0	-25.1	453	50	1927 ± 20	SK1 ①層
					454	50	1927 ± 20	SK1 ①層

放射性炭素年代測定は、放射性炭素年代測定研究所で行った。
 δ13C (‰) は、放射性炭素年代測定研究所で行った。
 校正後年代 (暦年) は、放射性炭素年代測定研究所で行った。
 試料番号は、放射性炭素年代測定研究所で行った。
 試料名は、放射性炭素年代測定研究所で行った。
 採取地は、放射性炭素年代測定研究所で行った。
 試料重量 (g) は、放射性炭素年代測定研究所で行った。
 δ13C (‰) は、放射性炭素年代測定研究所で行った。

第4節 種実同定

株式会社 加速器分析研究所

はじめに

本分析調査では、弥生時代と推定される遺構から出土した種実遺体の固定を実施し、当時の植物利用に関する試料を得る。

1 試料

試料は、弥生時代堅穴住居跡8号より1試料、弥生時代堅穴住居跡11号より1試料、弥生時代堅穴住居跡17号より2試料の合計4試料である(試料1~4)。土壌のフローテーションによって回収され、乾燥した状態でポリ袋やアルミホイルに収納されている。各試料の詳細は結果とともに第35表に示す。なお、これら4試料の中から各1点について放射線炭素年代測定が実施されている(年代測定報告書参照)。

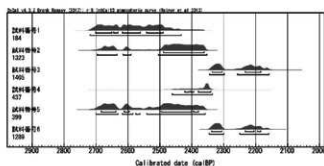
2 分析方法

試料を双眼実体顕微鏡で観察し、ピンセットを用いて同定が可能な種実遺体を抽出する。種実遺体の同定は、現生標本及び石川(1994)、中山ほか(2000)、吉崎(1992)等を参考に実施し、個数を数えて一覧表で示す。分析後は、種実遺体を分類群毎に容器に入れて保管する。

3 結果

全4試料を通じて、被子植物4分類群(草本のイネ、イネ科、カヤツリグサ属、エノキグサ)4個の種実が抽出・同定された(第35表)。以下に各試料の状況を述べる。

- ・弥生時代堅穴住居跡8号 床面北西部(試料1)
 同定が可能な種実遺体は検出されなかった。種実以外では、炭化材(最大2mm程度)、植物片、砂礫、径2cm程度の土器片などが確認された。
- ・弥生時代堅穴住居跡11号 西ベルト床着①層(試料



第363図 暦年校正結果

2)

炭化した栽培種のイネの胚乳が1個検出され、保存状態は不良である。種実以外では、炭化材(最大4mm程度)、菌類の菌核、砂礫などが確認された。

・弥生時代堅穴住居跡17号 SK1 ②層(試料3)
 炭化していない草本のイネ科の果実、カヤツリグサ属の果実、エノキグサの種子が各1個、計3個が検出された。種実以外では、炭化材(最大5mm)、砂礫などが確認された。

イネ科、カヤツリグサ属、エノキグサは、明るく開けた場所に生育する、いわゆる人里植物に属する分類群である。遺跡周辺の草地環境に由来すると考えられる。ただし、出土果実には炭化が認められず、保存状態が極めて良好であることから、後代の混入である可能性が高く、解析から除外している。

・弥生時代堅穴住居跡17号 SK1 ⑥層(試料4)
 同定が可能な種実遺体は検出されなかった。種実以外では、炭化材(最大8mm)、植物片、砂礫などが確認され、軽石類が多く含まれる。

以上の結果を踏まえ、検出された種実の形態的特徴を以下に述べる。また、炭化種実の写真を示す。

・イネ(*Oryza sativa* L.) イネ科イネ属
 胚乳は炭化しており、黒色。胚乳は長さ3.7~4.2mm、幅2.4mm、厚さ1.7mmのやや扁平な楕円形体。基部の一端には、胚が脱落した斜切形の凹部がある。表面はやや平滑で、2~3本の縦線条がある。

4 考察

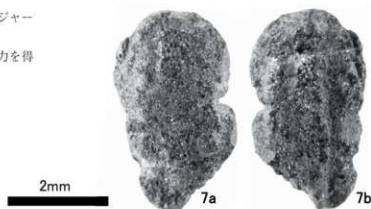
種実同定の結果、弥生時代堅穴住居跡11号西ベルト床着①層から炭化した穀物のイネが確認された。これは、周辺で栽培されていたが、近辺より持ち込まれたかは不明であるが、当時の本遺跡周辺域で利用された植物質食料と考えられ、火を受けて炭化したとみられる。

【引用文献】

- 石川茂雄, 1994, 原色日本植物種子写真図鑑, 石川茂雄図鑑刊行委員会, 328p.
- 中山至大・井之口希秀・南谷忠志, 2000, 日本植物種子図鑑, 東北大学出版会, 642p.

吉崎昌一, 1992. 古代雑穀の検出, 月刊考古学ジャーナル, №355, 2-14.

※ 本分析は, パリノ・サーヴェイ株式会社の協力を得て行った。



イネ胚乳 (弥生S11 西ベルト床層①層)

第364図 種実実体

第35表 種実同定結果

試料名	出土位置	重量	分類群	同定結果				検数	計測値(mm)			備考
				部位	状態	痕跡	高さ		幅	長さ		
1	弥生堅穴住居跡8号 床面を掘削	3.19g	-	-	-	-	-	-	-	-	-	種実確認されず炭化材(最大2mm)植物片(砂礫土器片埋20μ)
2	弥生堅穴住居跡11号 西ベルト 産量 1層	12.86g	イネ	胚乳	実形	炭化	1	4.2	2.4	1.7	イネ 状態不良炭化材(最大4mm)炭核(砂礫)	
3	弥生堅穴住居跡17号 S11 ①層	1.67g	イネ類	胚乳	実形	-	1	2.7	0.6	0.4	種実混入の可能性炭化材(最大5mm)砂礫	
			カヤ/アサガサ属	種実	炭化	-	1	1.2	0.5	0.8		
4	弥生堅穴住居跡17号 S11 ②層	2.17g	-	-	-	-	-	1.7	0.8	-	種実確認されず炭化材(最大6mm)植物片(砂礫土器片埋)	

第5節 植物珪酸体分析

株式会社 古環境研究所

1 はじめに

植物珪酸体は、植物の細胞内に珪酸(SiO₂)が蓄積したもので、植物が枯れたあともガラス質の微化石(プラント・オパール)となって土壤中に半永久的に残っている。植物珪酸体分析は、この微化石を遺跡土壌から検出して同定・定量する方法であり、イネをはじめとするイネ科栽培植物の同定および古植生・古環境の推定などに応用されている(杉山, 2000)。

永吉天神段遺跡の発掘調査では、弥生時代の住居跡が多数検出され、堅穴住居跡26号の床面では大型の石包丁が出土している。ここでは、当時の周辺の植生や環境および農耕に関する情報を得る目的で、植物珪酸体分析を行った。

2 試料

分析試料は、弥生住居跡22号・26号・27号・28号の床面や中央土坑などから採取された11点、F-44地点の土層断面から採取された8点および堅穴住居跡26号から出土した大型石包丁の計20点である。試料採取箇所を分析結果図に示す。

3 分析方法

(1) 土壌試料

植物珪酸体の抽出と定量は、ガラスビーズ法(藤原, 1976)を用いて、次の手順で行った。

- 1) 試料を105℃で24時間乾燥(絶乾)
- 2) 試料約1gに対し、直径約40μmのガラスビーズ

を約0.02g添加(0.1mgの精度で秤量)

- 3) 電気炉灰化法(550℃・6時間)による脱有機物処理
- 4) 超音波水中照射(300W・42KHz・10分間)による分散
- 5) 沈底法による20μm以下の微粒子除去
- 6) 封入剤(オイキット)中に分散してプレパレート作成
- 7) 検鏡・計数

同定は、400倍の偏光顕微鏡下で、おもにイネ科植物の機動細胞に由来する植物珪酸体を対象として行った。計数は、ガラスビーズ個数が400以上になるまで行った。これはほぼプレパレート1枚分の精査に相当する。試料1gあたりのガラスビーズ個数に、計数された植物珪酸体とガラスビーズ個数の比率をかけて、試料1g中の植物珪酸体個数を求めた。

また、おもな分類群についてはこの値に試料の仮比重(1.0と仮定)と各植物の換算計数(機動細胞珪酸体1個あたりの植物体乾重)をかけて、単位面積で層厚1cmあたりの植物体生産量を算出した。これにより、各植物の繁茂状況や植物間の占有割合などを具体的にとられることができる(杉山, 2000)。タケ壺科については、植物体生産量の推定値から各分類群の比率を求めた。

(2) 大型石包丁

- 1) 石包丁に付着した土壌を採取(別途分析)
- 2) 石包丁を水洗洗浄
- 3) 実体顕微鏡を用いて刃部全面について観察
- 4) 超音波水中照射(300W・42KHz)により刃部を洗浄

5) 残渣について土壌試料と同様の処理を行ってプレパラート作成

6) 検鏡(定性分析)

4 分析結果

(1) 分類群

検出された植物珪酸体の分類群は以下のとおりである。これらの分類群について定量を行い、その結果を第36表および第365・366図に示した。主要な分類群について顕微鏡写真を示す。

【イネ科】

イネ、ヨシ属、キビ族型、ススキ属型(おもにススキ属)、ウシクサ族A(チガヤ属など)、ウシクサ族B(大葉)

【イネ科-タケ亜科】

メダケ節型(メダケ属メダケ節・リュウキュウチク節、ヤダケ節)、ネザサ節型(おもにメダケ属ネザサ節)、チマキザサ節型(ササ属チマキザサ節・チシマザサ節など)、ミヤコザサ節型(ササ属ミヤコザサなど)、マダケ属型(マダケ属、ホウライチク属)、未分類等

【イネ科-その他】

表皮毛起源、棒状珪酸体(おもに結合組織細胞由来)、未分類等

【樹木】

ブナ科(シイ属)、クスノキ科、マンサク科(イソノキ属)、その他

(2) 植物珪酸体の検出状況

1) F-44地点(土層断面)

下位のV a層(試料10)では、ススキ属型、ウシクサ族Aが比較的多く検出され、キビ族型、ウシクサ族B、メダケ節型、ネザサ節型、チマキザサ節型、ミヤコザサ節型なども認められた。また、樹木起源のクスノキ科、樹木(その他)なども検出された。K-Ah混のIV a層(試料8・9)では、イネ科は各分類群とも大幅に減少しているが、樹木起源のクスノキ科、樹木(その他)は大幅に増加し、ブナ科(シイ属)も出現している。Ik混層(試料7)ではススキ属型、ウシクサ族Aが増加し、III b層(試料4・5)ではメダケ節型、ネザサ節型も増加している。なお、III b層上部(試料4)では樹木起源のクスノキ科や樹木(その他)が減少している。III a層(試料3)からII b層(試料1)にかけては、メダケ節型、ネザサ節型が増加し、イネ、マダケ属型が出現している。イネの密度は、III a層(試料3)では1,400個/gと比較的低い値であるが、II b層(試料1)では3,500個/gと比較的高い値であり、稲作跡の検証や探査を行う場合の判断基準としている5,000個/g(状況により3,000個/gとする場合もある)に近い値である。なお、畑稲作(陸稲栽培)の場合は、連作障害や地力の低下を避けるために輪作を行ったり休閑期間をおく必要があるため、イネの

密度は水田跡と比較してかなり低くなり、1,000~2,000個/g程度である場合が多い(杉山, 2000)。おもな分類群の推定生産量によると、おもむねススキ属型が優勢であり、III a層やII b層ではメダケ節型やネザサ節型も多くなっている。

2) 弥生時代堅穴住居跡 28号

中央土坑(試料2)では、ススキ属型、ウシクサ族A、メダケ節型、ネザサ節型が多く検出され、イネ、キビ族型、ウシクサ族B、チマキザサ節型なども認められた。また、樹木起源のブナ科(シイ属)、クスノキ科なども検出された。土坑外(試料4)では、試料2と比較してススキ属型、メダケ節型、ネザサ節型が少なく、クスノキ科、樹木(その他)が多くなっている。イネの密度は、試料2では700個/g、試料4では600個/gといずれも低い値である。おもな分類群の推定生産量によると、試料2ではススキ属型、メダケ節型、ネザサ節型が優勢になっている。

3) 弥生時代堅穴住居跡 26号

住居跡南西部の石包丁下(試料1)と石包丁横(試料2)、南部の床面(試料4)、中央土坑の埋土(試料7~9)では、ススキ属型、ウシクサ族A、メダケ節型、ネザサ節型が多く検出され、キビ族型、ウシクサ族B、チマキザサ節型なども認められた。また、樹木起源のクスノキ科なども検出された。植物珪酸体組成や密度は、各採取箇所ととくに大きな差異は認められなかった。おもな分類群の推定生産量によるとススキ属型、メダケ節型、ネザサ節型が優勢となっている。

4) 弥生時代堅穴住居跡 27号

住居跡中央部の焼土(試料10)では、ススキ属型、ウシクサ族A、メダケ節型、ネザサ節型が多く検出され、キビ族型、ウシクサ族B、チマキザサ節型なども認められた。また、樹木起源のブナ科(シイ属)、クスノキ科なども検出された。土坑外(試料5)では、試料2と比較してススキ属型、メダケ節型、ネザサ節型が少なく、樹木(その他)が多くなっている。おもな分類群の推定生産量によると、試料2ではススキ属型、メダケ節型、ネザサ節型が優勢となっている。

5) 弥生時代堅穴住居跡 22号

中央土坑(試料2)では、ススキ属型、ウシクサ族A、メダケ節型、ネザサ節型が多く検出され、キビ族型、ウシクサ族B、チマキザサ節型なども認められた。また、樹木起源のブナ科(シイ属)、クスノキ科なども検出された。土坑外(試料5)では、試料2と比較してススキ属型、メダケ節型、ネザサ節型が少なく、樹木(その他)が多くなっている。おもな分類群の推定生産量によると、試料2ではススキ属型、メダケ節型、ネザサ節型が優勢となっている。

5 考察

(1) F-44 地点 (土層断面)

鬼界アカホヤ火山灰 (K-Ah, 約 7,300 年前) 直下の V a 層の堆積当時は、ススキ属やウシクサ族 (チガヤ属など) を主体として、キビ族、メダケ属 (メダケ節やネザサ節) なども生息する日当たりの良い草原的な環境であったと考えられ、遺跡周辺にはクスノキ科などの樹木 (照葉樹) が分布していたと推定される。

その後、鬼界アカホヤ火山灰 (K-Ah, 約 7,300 年前) の堆積によって、当時の植生は一時的に大きな影響を受けたと考えられるが、K-Ah 混の IV a 層の時期にはクスノキ科をはじめシイ属なども生育する森林植生 (照葉樹林) が分布拡大したと推定される。鬼界アカホヤ噴火に伴う幸屋火砕流が及ばなかった鹿児島中部以北では、鬼界アカホヤ火山灰の直上で照葉樹林が分布拡大する傾向が認められる (杉山, 2002)。このことの原因として、テフラ降灰が生態系の秩序を攪乱することによって生態的順位交代が誘発され (辻, 1993)、結果的に照葉樹林の分布拡大が促進された可能性が考えられる。また、照葉樹林の分布拡大には、年平均気温が現在よりも約 2℃ 前後高かったとされる当時の温暖湿潤な気候環境も影響したと考えられる。

池田湖テフラ (IK, 約 6,400 年前) 混の III b 層では、ススキ属やウシクサ族 (チガヤ属など) を主体としてキビ族、メダケ属 (メダケ節やネザサ節) なども生育する草原植生に移行したと考えられ、同層上部ではクスノキ科などの照葉樹林は減少したと推定される。また、III a 層ではメダケ属 (メダケ節やネザサ節) が増加したと考えられる。これらのイネ科植物は日当たりの悪い林床では生育が困難であり、ススキ属やチガヤ属の草原が維持されるためには定期的な刈り取りや火入れ (焼き払い) が必要である (堀田, 1991, 近藤, 1995)。このことから、当時は火入れなど人間による植生干渉が行われていた可能性が考えられる。また、このような植生環境下で土壌中に多量の有機物が供給され、炭素含量の高い黒色土壌 (黒ボク土) が形成されたと推定される (杉山ほか, 2002)。

III a 層から II b 層 (弥生時代) にかけては、イネが輸出されることから、調査地点もしくはその周辺で稲作が行われていた可能性が考えられる。遺跡の立地や周辺の植生から、ここで行われていた稲作は稲作の系統 (陸稲) であったと推定される。なお、調査地点は集落域に近接していることから、何らかの形で利用された稲葉に由来する可能性も考えられる。稲葉の利用としては、建物の屋根材や壁材、敷物、履物、俵、縄など多様な用途が想定される。

また、III a 層から II b 層にかけては、周辺でメダケ属が見られるようになったと考えられる。タケ肥料のうちメダケ属にはメダケやモウソウチクなど有用なものが多

く、建築材や生活用具、食用などとしての利用価値が高い。

(2) 弥生時代竪穴住居跡 22 号・26 号・27 号・28 号

弥生時代の住居跡における分析結果は、F-44 地点 (土層断面) の III a 層や II b 層 (弥生時代) の分析結果と類似しており、特に大きな特徴は認められなかった。当時の調査区周辺は、ススキ属やウシクサ族 (チガヤ属など)、メダケ属 (メダケ節やネザサ節) を主体としてキビ族なども生育する日当たりの良い草原的な環境であったと考えられ、遺跡周辺にはクスノキ科などの照葉樹林が分布していたと推定される。また、当時は周辺で稲作が行われていたと考えられ、そこから何らかの形で一部の住居内にイネの植物珪酸体が混入した (持ち込まれた) と推定される。稲葉の利用としては、建物の屋根材や壁材、敷物、履物、俵、縄など多様な用途が想定される。

(3) 竪穴住居跡 26 号出土の大型石包丁 (第 147 図 904)

石包丁の刃部の実体顕微鏡観察では、石包丁の長軸に直行もしくは斜行する微細な傷跡 (研磨痕や使用痕など) が認められた。このような傷跡には、対象となった植物に由来する植物珪酸体が捕らえられている (挟まっている) 場合があることから、刃部全面について傷跡内の観察を行った。その結果、傷跡内に捕らえられていると観察に認識できる植物珪酸体は観察されなかった。なお、傷跡内に植物珪酸体が捕らえられている場合でも、露出部分が欠損したり摩擦で割れたりして植物珪酸体の確認に至らない可能性も考えられる。そこで、超音波水中照射により刃部を洗浄し、傷跡内などに捕らえられているとみられる植物珪酸体の抽出を試みた。また、比較資料として石包丁に付着した土壌についても検討を行った。

定性分析の結果、刃部の超音波洗浄後の残渣では、ススキ属型、ウシクサ族 A、メダケ節型、ネザサ節型、キビ族型、および樹木クスノキ科などが検出された。このような植物珪酸体組成は、石包丁に付着した土壌および石包丁の直下や住居跡床面の分析結果とおおむね同様であり、刃部のみに特徴的な傾向は認められなかった。なお、刃部の超音波洗浄後の残渣で検出されたススキ属型の中には、一部が欠損もしくは削れたようにみえるものが認められた (第 368 図)。このような植物珪酸体は、石包丁に付着した土壌や住居跡の土壌などでは認められないことから、石包丁の刃部のみに特徴的に付着している可能性が考えられる。

ススキの刈り取りについては、基部を石器で切断するのは困難なことから、ススキの根元の脇に丸太を添え、石器で叩き切る方法が想定されている (藤森, 2012)。このような作業過程で、植物珪酸体の一部が欠損したり、石包丁の傷跡 (研磨痕や使用痕など) に捕らえられた植物珪酸体の一部が削られた可能性が考えられる。今後、このような方法でススキの刈り取り実験を行い、今回の

ような植物珪酸体が石器に付着するかどうかを検証する必要があるが、大型石包丁の用途の一つとして、ススキの刈り取りに利用されていた可能性も想定される。

【引用文献】

近藤謙三 (1995) 日本における植物珪酸体研究とその応用。近堂祐弘教授退官記念論文集刊行会: p. 31-56.
 杉山真二・藤原宏志 (1986) 機動細胞珪酸体の形態によるタケ亜科植物の同定-古環境推定の基礎資料として-。考古学と自然科学, 19, p. 69-84.
 杉山真二 (1999) 植物珪酸体分析からみた九州南部の照葉樹林発達史。第四紀研究, 38(2), p. 109-123.
 杉山真二 (2000) 植物珪酸体(プラント・オパール)。考古学と植物学, 同成社, p. 189-213.
 杉山真二 (2001) テフラと植物珪酸体分析。月刊地球, 23, p. 645-650.
 杉山真二・渡邊真紀子・山元希里 (2002) 最終氷期

以降の九州南部における黒ボク土発達史。第四紀研究, 41(5), p. 361-373.

杉山真二 (2010) 更新世の植生と環境。旧石器時代。講座日本の考古学第1巻。青木書店, p. 156-177.

藤原宏志 (1976) プラント・オパール分析法の基礎的研究(1)-数種イネ科植物の珪酸体標本と定量分析法-。考古学と自然科学, 9, p. 15-29.

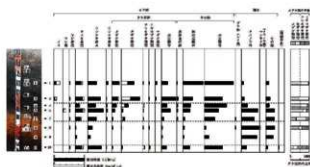
藤原宏志・杉山真二 (1984) プラント・オパール分析法の基礎研究(5)-プラント・オパール分析による水田址の探査-。考古学と自然科学, 17, p. 73-85.

藤森照信 (2012) 茅, その一。第4回建築の素。小雑誌「熱風」2012年10号。スタジオジブリ, p. 91-95.
 堀田満 (1991) 日本列島の植物。カラー自然ガイドII。保育社: p. 68-69. 1

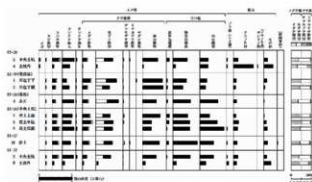
町田洋・新井房夫 (2003) 新編火山灰アトラス-日本列島とその周辺-。東京大学出版会, p. 336.

第36表 永吉天神段遺跡における植物珪酸体分析結果

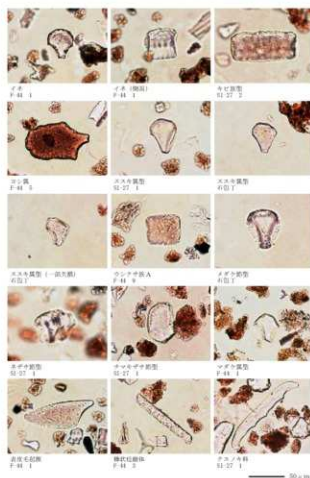
分類群	学名	検出度 (単位: ×100個/g)									F44土層検出度										
		1	2	4	7	8	9	10	2	4	7	8	9	1	2	4	7	8	9	10	
イネ科	<i>Oryza</i>																				
イネ	<i>Oryza sativa</i>																				
コシノコ	<i>Panicum</i>																				
キダシ	<i>Panicum type</i>	6	6	6	6	7	7	7	7	7	7	7	7	7	7	7	7	7	7	7	7
ススキ属	<i>Miscanthus type</i>	10	20	42	63	108	90	78	99	119	74	21	92	113	16	129	78	7	14	104	
ウツクシ属A	<i>Aeluropogon A type</i>	61	99	112	159	220	172	124	176	111	168	35	142	204	128	206	137	69	43	221	
ウツクシ属B	<i>Aeluropogon B type</i>	6	6	6	6	7	14	7	13	10	20		28	7	13	21	13				7
タケ亜科	<i>Bambusoideae</i>																				
メダコ属	<i>Phyllostachys sect. Nipponostachys</i>	122	72	90	119	130	86	99	66	6	61	14	106	99	67	43	13	7	7		
メダコ属	<i>Phyllostachys sect. Neesii</i>	232	210	304	221	267	209	251	263	16	228	36	211	219	115	38	39	7			20
ヤマノシロ属	<i>Sasa sect. Sasa etc.</i>	6	11	12	19	14	26	36	13	6	7	7	7	7	7	7	7	7	7		13
ミヤコザサ属	<i>Sasa sect. Chusubiki</i>																				20
ツダノ属	<i>Phyllostachys</i>	6																			
その他イネ科	Others	204	304	203	269	130	129	243	224	12	202	35	99	232	89	142	39	14	14	78	
粟科																					
粟	<i>Hordeum</i>	11	17	18	43	36	7	23	66	12	7	21	13	14	13						
糠状穀物	<i>Rod-shaped</i>	209	149	204	221	252	252	265	211	37	206	49	326	150	121	114	36	21	14	111	
その他穀物	Others	205	83	279	143	209	360	202	120	124	202	90	475	289	304	229	170	21	69	289	
アキノ科																					
アキノ科(イネ)	<i>Cyperoph</i>																				
アキノ科	<i>Lactuca</i>	39	29	43	32	72	56	52	66	297	61	42	38	42	94	263	209	262	249	78	
マツナギ科(イネ)	<i>Dryopteris</i>																				
その他	Others	44	17	8	6	36	50	52	53	136	40	104	43	43	47	130	131	108	119	20	
菌類																					
菌類(キノ)	<i>Sporium vesiculos</i>																				
植物群	Total	1276	1539	1473	1598	1598	1496	1559	1343	736	1340	464	1645	1483	1123	1395	922	509	519	1008	
出元: 各分類群の検出度(単位: kg of soil) 試料の検出量を1と仮定して算出																					
イネ	<i>Oryza sativa</i>										0.19	0.18				1.96	0.41				
コシノコ	<i>Panicum</i>																				0.40
ススキ属	<i>Miscanthus type</i>	0.09	0.09	0.53	0.81	0.71	1.18	0.97	1.22	0.23	0.92	0.26	1.14	1.40	0.67	1.09	0.97	0.99	0.17	1.29	
メダコ属	<i>Phyllostachys sect. Nipponostachys</i>	1.42	0.83	0.93	1.28	1.39	1.00	1.13	0.76	0.07	0.70	0.16	1.23	1.14	0.76	0.50	0.12	0.08	0.06		
メダコ属	<i>Phyllostachys sect. Neesii</i>	1.84	1.45	1.88	1.56	1.28	1.28	1.22	1.26	0.12	1.50	0.27	1.42	1.49	0.53	0.14	0.28	0.53	0.09		
ヤマノシロ属	<i>Sasa sect. Sasa etc.</i>	0.04	0.06	0.09	0.13	0.11		0.20	0.10	0.05	0.05	0.05	0.05	0.10	0.11	0.10	0.10	0.14			
ミヤコザサ属	<i>Sasa sect. Chusubiki</i>							0.02	0.02												0.02
タケ亜科の比率 (%)																					
メダコ属	<i>Phyllostachys sect. Nipponostachys</i>	47	43	34	52	52	45	44	36	30	38	42	52	43	53	67	29	43			10
メダコ属	<i>Phyllostachys sect. Neesii</i>	51	52	62	43	44	55	47	59	50	59	44	44	36	37	18	53	18	20		10
ヤマノシロ属	<i>Sasa sect. Sasa etc.</i>	1	4	3	8	4	4	6	9	20	3	14	2	10	14	18	28				52
ミヤコザサ属	<i>Sasa sect. Chusubiki</i>							1	1												11
メダコ属	<i>Miscanthus type</i>	89	96	97	94	96	100	92	94	90	97	86	97	99	96	86	92	61	26		26



第 365 図 F-44 地点における植物珪酸体分析結果



第 366 図 SI-22・SI-26・SI-27・SI-28 における植物珪酸体分析結果



第 367 図 永吉天神段遺跡の植物珪酸体（プラント・オパール）



第 368 図 石包丁（拡大写真）

第 6 節 樹種同定

パレオ・ラボ AMS 年代測定グループ
 伊藤 茂・安昭 焯・佐藤正教
 廣田正史・山形秀樹・小林絃一
 Zaur Lomtadze・Ineza Jorjoliani
 ・小林克也

1 はじめに

放射性年代測定を行った一部の試料について、樹種同定を行った。

2 試料と方法（樹種同定）

焼失住居跡である弥生時代竪穴住居跡 45 号から出土した炭化材 5 点について、樹種同定を行った。試料はい

ずれも劣化が激しく、形状の確認はできなかった。

炭化材の樹種同定では、まず試料を乾燥させ、材の横断面(木口)、接線断面(板目)、放射断面(柎目)について、カミソリと手で割断面を作製し、整形して試料台にカーボンテープで固定した。その後イオンスパックにて金蒸着を施し、走査型電子顕微鏡(日本電子(株)製JSM-5900LV)にて検鏡及び写真撮影を行った。

3 結果

樹種同定の結果、広葉樹のスダジイとクスノキ科、ツバキ属、ケンボナシ属の4分類群がみられた。ツバキ属が2点で、スダジイとクスノキ科、ケンボナシ属は各1点であった。同定の結果を第37表に示す。

次に、同定された材の特徴を記載し、第369図に走査型電子顕微鏡写真を示す。

- (1) スダジイ *Castanopsis sieboldii* (Makino) Hatus.ex T. Yamaz. et Mashiba プナ科 第369図 1a-1c (No. 1)

年輪のはじめに大型の道管が断続的に配列し、晩材部では徐々に径を減じた道管が、火災状に配列する半環孔材である。軸方向柔組織は歪な線状となる。道管は単穿孔を有する。放射組織は同性で単列となる。

スダジイは暖帯から亜熱帯に分布する常緑高木の広葉樹である。重さと強さは中庸で、やや耐朽性があるが、切削加工は困難でない。

- (2) クスノキ科 Lauraceae 第369図 2a-2c (No. 5)
中型の道管が単独ないし2~3個複合し、やや疎らに散在する散孔材である。軸方向柔組織は周環状となる。道管は単穿孔を有する。放射組織は上下端1列が直立する異性で、幅1~2列となる。

クスノキ科にはニッケイ属やタブノキ属、クロモジ属などがあり、暖帯を中心に分布する、主に常緑性の高木または低木である。

- (3) ツバキ属 *Camellia* ツバキ科 第369図 3a-3c (No. 2), 4a-4c (No. 3)

小型の道管がほぼ単独で密に散在する散孔材である。道管は10~20段程度の階段穿孔を有する。放射組織は上下端1~3列が直立する異性で、幅1~4列となる。

ツバキ属にはヤブツバキやサザンカなどがあり、ヤブツバキは本州、四国、九州の温帯に、サザンカは山

口県以南の温帯南部から亜熱帯に分布する常緑小高木の広葉樹である。材は重硬で切削加工は困難である。

- (4) ケンボナシ属 *Hovenia* クロウメモドキ科 第369図 5a-5c (No. 4)

年輪のはじめにやや小型の道管が配列し、晩材部では径を減じた道管が単独ないし2~3個複合して配列する半環孔材である。軸方向柔組織は周環状となる。道管は単穿孔を有する。放射組織は同性で、幅1~4列となる。

ケンボナシ属にはケンボナシとケンケンボナシがあり、ケンボナシは北海道から九州の温帯から暖帯に、ケンケンボナシは栃木・静岡・石川県以西の暖帯に分布する落葉高木の広葉樹である。材の性質は類似し、重さと硬さは中庸で切削加工は容易である。

4 考察

弥生時代穴住居跡45号ではツバキ属が2点、スダジイとケンボナシ属、クスノキ科が各1点みられた。SI45は焼失住居跡と考えられており、出土した炭化材はいずれも建築材と考えられている。ツバキ属は堅硬な樹種で、スダジイとクスノキ科は耐朽性が高い(伊東ほか, 2011)。また、いずれの樹種も永吉天神段遺跡周辺で生育可能な樹種であり(伊東ほか, 2011)、遺跡周辺の森林に生育していた樹種が利用されていた可能性が考えられる。

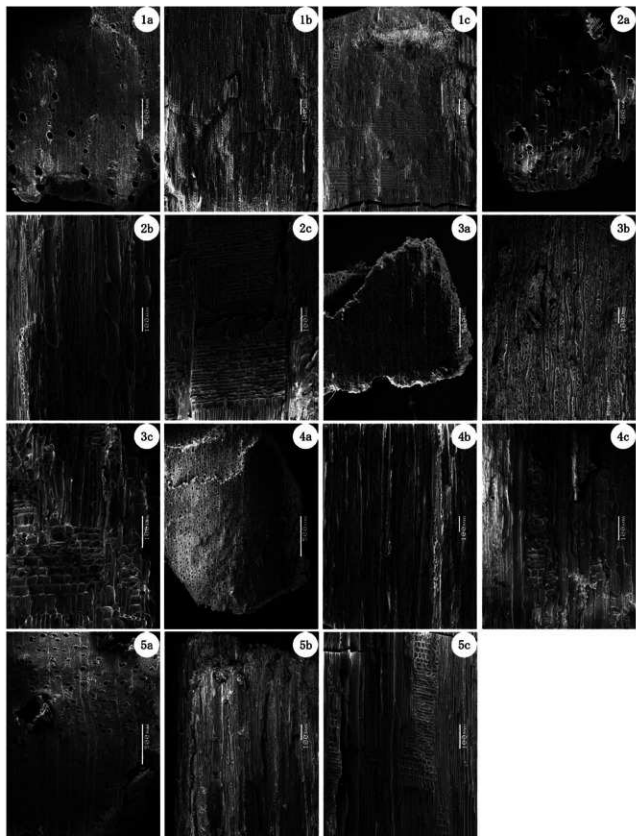
九州地方の弥生時代中期の建築材では、スダジイを含めたシイ属や、クスノキ科の一部であるクスノキが多くみられている(山口, 2012)。また、霧島市の上野原遺跡で出土した弥生時代中期の炭化した建築材は、いずれもクスノキ科であった(伊東・山田, 2012)。分析事例が少ないものの、周辺遺跡の用材傾向と概ね一致すると考えられる。

【引用文献】

- 伊東隆夫・佐野雄三・安部 久・内海泰弘・山口和穂(2011)日本有用樹木誌, 238p, 海青社。
伊東隆夫・山田昌久編(2012)木の考古学, 449p, 海青社。
山口譲治(2012)九州・沖縄(1) - 古代以前 -, 伊東隆夫・山田昌久編「木の考古学」: 300 - 311, 海青社。

第37表 永吉天神段遺跡出土炭化材の樹種同定結果

試料番号	遺物番号	出土遺構	樹種	備考	年代測定番号
1	炭化木No. 1	SI45	スダジイ	焼失住居跡出土	
2	炭化木No. 5	SI45	ツバキ属	焼失住居跡出土	
3	炭化木No. 10	SI45	ツバキ属	焼失住居跡出土	PLD-27789
4	炭化木No. 16	SI45	ケンボナシ属	焼失住居跡出土	PLD-27790
5	炭化木No. 28	SI45	クスノキ科	焼失住居跡出土	



1a-1c. スダジイ (No. 1)、2a-2c. クスノキ科 (No. 5)、3a-3c. ツバキ属 (No. 2)、4a-4c. ツバキ属 (No. 3)、5a-5c. ケンボナシ属 (No. 4)

a: 横断面、b: 接線断面、c: 放射断面

第 369 図 永吉天神段遺跡出土炭化材の走査型電子顕微鏡写真

第7節 土器圧痕調査

パリオ・サーヴェイ株式会社

1 試料

試料は、IV層より出土した縄文時代早期の土器（前平式、石坂式、桑ノ丸式など）270点、縄文時代晩期の土器49点、IIb層～IVb層より出土した弥生時代早期の突帯文土器157点、堅穴住居跡より出土した弥生時代中期の土器（山ノ口I式）712点の計1,188点である。

縄文時代早期と弥生時代早期の土器は報告書掲載済であり、図番号毎に収納ケースにまとめられ、個別に袋に入った状態である。石膏で隙間を充填した土器や復元された土器も多数含まれている。第39表で示す重量および考察での圧痕検出率は、上記の石膏や試料袋、試料札、緩衝材等を含む点を留意されたい。

2 分析方法

(1) 圧痕検出作業

圧痕検出作業は、平成29年12月に当社社員2名で7日間実施し、調査センター職員の指導を受けた。計測記録は、調査センターの協力を得た。

1) 重量記録

土器の計量は、1点毎と複数点をパンケース毎の2方法で実施する。パンケース毎計量は、パンケースの重量を差し引いて記録する。報告書未掲載の土器は番号が付されており、基本的には1点毎計量する。1点毎に計量した土器は、表の個数の欄に1と記している。報告書記載済土器は、報告書の図番号と遺物番号を記す。

2) 圧痕概査

ルーペを用いて、土器の表裏および断面の全面を観察し、圧痕を探す。圧痕は、穴の形状に着目し、内部で広がる（袋状、フラスコ状を呈す）凹みは種実圧痕の可能性が高いため、シール等を貼り目印とする。

3) 圧痕精査・クリーニング

概査で検出した圧痕を双眼実体顕微鏡で確認する。圧痕を充填する砂泥は、水と面糊筆、ブロワーを用いて、土器を壊さないように慎重に除去する。圧痕が確認されなかった土器や種実以外の圧痕と判断した土器はパンケースに戻す。種実等の圧痕の可能性のある土器は、レプリカ採取対象とする。

(2) 圧痕レプリカ採取・電子顕微鏡観察

圧痕検出作業で確認された28点32か所を対象に実施する。

1) 写真記録

土器概観を写真記録後、双眼実体顕微鏡およびマイクロスコープ（株式会社キーエンス製：VHX-1000）を用いて、圧痕部の観察・写真撮影を実施する。

2) レプリカ採取

レプリカ採取は、丑野・田川（1991）の方法に従い、離型剤は水を使用する。土器を水に十分に含浸させた

後、ブロワーを用いて圧痕内に充填した余分な水分を除去する。印象材は、シリコン樹脂（株式会社ニッシン製：JMシリコンレギュラータイプまたはインジェクションタイプ）を使用し、圧痕部に注入する。硬化後の印象材を、土器を破壊しないように細心の注意を払いながら取り出す。袋状圧痕の場合は、特に注意する。

胎土が剥落する等、土器破損の懸念が生じた場合や植物の残存が確認された場合は、調査センターと協議の上、作業を中止する。また、レプリカ採取後の圧痕周辺にシミ（シリコン樹脂の油分）が残る場合は、クロロホルム：メタノール（2：1）溶液を用いて除去する。

3) 電子顕微鏡観察・同定

圧痕シリコンレプリカを双眼実体顕微鏡やマイクロスコープで観察する。表面のゴミやホコリを可能な限り除去し、電子顕微鏡観察用に整形する。シリコンレプリカは、イオンスプッターを使用した金蒸着、またはカーボンコーターを使用したカーボン蒸着処理を施す。蒸着後のレプリカを走査型電子顕微鏡（SEM）（日本電子株式会社製：JCM5700）で観察・写真撮影、同定を実施する。

3 結果

(1) 種実圧痕検出状況

圧痕検出作業結果を第39表、圧痕レプリカ採取・電子顕微鏡観察・同定結果を第38表、圧痕写真を第370図～第373図に示す。

圧痕検出作業の結果、土器1,188点245.12kg（石膏等含む）より、28点32か所（第38表1～27）9.16kgの圧痕レプリカ採取候補が得られた。

レプリカ採取・観察の結果、11点（第38表7・9・13・14・15・18・19・24・25・27）7.49kgに種実圧痕の可能性が確認され、栽培種のイネ、アワ、落葉広葉樹のカラスザンショウ、イヌザンショウに同定された。また、6点（第38表5・6・8・17・23・26）0.50kgに種実圧痕の可能性が確認されたが、確実な同定には至らなかった。

種実の可能性が低い圧痕は、1点が昆虫類の幼虫（第38表7）、1点（第38表2）が有機物か？、4点（第38表4・10・11・16）が岩片か？、5点6か所（第38表1・3・12・21・22）が不明と判断された。

以下、種実圧痕検出状況を時期別に述べる。

○縄文時代早期

土器270点33.21kgより、レプリカ採取候補が2点0.25kg得られたが、レプリカ採取・観察の結果、確実な種実圧痕は確認されなかった。なお、第38表1は不明（第370図）、第38表2は有機物か？（第370図）と判断された。

○縄文時代晩期

土器49点2.37kgより、レプリカ採取候補は確認されなかった。

○弥生時代早期

土器 157 点 47.28kgより、レプリカ採取候補が 10 点 12 か所 0.70kg得られた。レプリカ採取・観察の結果、2 点(第 38 表 7・9)に種実圧痕が確認され、カラスザンショウの種子(第 38 表 7: 第 371 図(7))とイモザンショウの種子(第 38 表 9: 第 371 図(10))に同定された。

また、3 点(第 38 表 5・6・8) 0.16kgに種実圧痕の可能性が確認され、カラスザンショウの種子(第 38 表 8: 第 371 図(9))やサンショウの種子(第 38 表 6: 第 370 図(6))、モチノキ属の核(第 38 表 5: 第 370 図(5))に似るが、確実な同定に至らなかった。

種実の可能性が低い圧痕は、1 点(第 38 表 7)が昆虫類の幼虫(第 371 図(7)(8))、3 点(第 38 表 4・10・11)が岩片か? (第 370 図(4)、第 371 図(11)(12))、2 点 3 か所(第 38 表 3・12)が不明(第 370 図(3)、第 371 図(13))と判断された。昆虫圧痕は、上記カラスザンショウ種子圧痕に近接して確認され(第 371 図(7) - 3)、6 節と頭部が確認された。昆虫圧痕レプリカは、長さが 3.5mm、幅 1.5mm、厚さ 1.3mmを測る。未同定のため、今後の課題である。

○弥生時代中期

土器 712 点 162.26kgより、レプリカ採取候補が 15 点 18 か所 8.20kg得られた。レプリカ採取・観察の結果、8 点 11 か所 7.42kgに種実圧痕が確認され、6 点 7 か所(第 38 表 14・15・18・19・20・25)が栽培種のイネの穎(籾)(第 371 図(15)、第 372 図(16)(17)(20)(21)(22))、第 373 図(27))、1 点(第 38 表 13)が胚乳(米)(第 371 図(14))、2 点(第 38 表 24・27)がアワの穎(第 373 図(26)(29))、1 点(第 38 表 13)が栽培の可能性のあるアズキ亜属の種子(図版 41)に同定された。また、4 点(第 38 表 13・17・23・26) 1.02kgに種実圧痕の可能性が確認され、ダイズ属の種子(第 38 表 13: 第 371 図(14) - 5)やイネの種実(穎か胚乳の判別不可)(第 38 表 17・23・26: 第 372 図(19)、第 373 図(25)(28))に似るが、確実な同定には至らなかった。

なお、第 38 表 13 は土器底部の外面よりイネ胚乳圧痕とアズキ亜属種子圧痕、内面より種実(ダイズ属か?)圧痕の可能性のある計 3 か所の圧痕が確認され(第 371 図(14))特筆される。

種実の可能性が低い圧痕は、1 点(第 38 表 16)が岩片か?(第 372 図(18))、2 点(第 38 表 21・22)が不明(第 372 図(23)(24))と判断された。

(2) 種実圧痕の記載

本分析で同定された種実圧痕各分類群の形態的特徴を記す。

○カラスザンショウ (*Zanthoxylum ailanthoides* Sieb. et Zucc.) ミカン科サンショウ属

種子圧痕は土器底部断面に確認され、圧痕レプリカは

長さ 3.3mm、幅 2.8mm、厚さ 2.4mmを測る。腹面正中線上の広線形の臍が確認されないが、側面視の非対称広倒卵体の形状と種皮表面の粗く深い網目模様を確認される点を同定根拠とした(第 371 図(7))。

○イモザンショウ (*Zanthoxylum schinifolium* Sieb. et Zucc.) ミカン科サンショウ属

種子圧痕は土器底部外へ断面に確認され、圧痕レプリカは残存長 1.7mm、残存幅 2.5mm、残存厚 1.9mmを測る。非対称広倒卵体の種子長の約 1/2 を欠損する状態である。

広線形の臍は確認されないが、種皮表面の網目模様がカラスザンショウよりも細かく浅く、サンショウよりも粗い点を同定根拠とした(第 371 図(10))。

○イネ (*Oryza sativa* L.) イネ科イネ属

穎(籾)の圧痕レプリカは、長さ 6.1~7.8mm、幅 2.5~3.9mm、厚さ 0.6~2.6mmを測る。第 38 表 14(第 371 図(15))、第 38 表 15 の 2 か所(第 372 図(16)(17))、第 38 表 18(第 372 図(20))、第 38 表 25(第 373 図(27))は、特に状態が良好で、果皮表面の顆粒状突起の縦列が明瞭に残る。

一方、第 38 表 20 の土器底部に確認された圧痕は押しつぶされており、状態不良である(第 372 図(22))。

胚乳(米)の圧痕レプリカは、残存長 3.5mm、幅 3.1mm、厚さ 1.7mmを測り、下半部を欠損する状態にあった。表面がやや平滑で、縦隆条が確認される点を同定根拠とした(第 371 図(14) - 4)。

○アワ (*Setaria italica* (L.) P. Beauv.) イネ科エノコログサ属

穎(有ふ果)の圧痕レプリカは、長さ 1.6~1.7mm、幅 1.4~1.5mm、厚さ 1.3mmの半広倒卵状楕円形を呈し、ヒエよりも小型で丸い。腹面(内穎)はやや平らで、背面(外穎)は丸みがあり、腹面長辺の両端をわずかに包む。果皮表面にはアワ特有の微細な乳頭状突起の横列(Nasu. et al., 2007)が確認され、特に第 38 表 27 で顕著である(第 373 図(29))。

○アズキ亜属 (*Vigna* subgen. *Ceratotropis* (Piper) Verdc.) マメ科ササゲ属

種子の圧痕レプリカは、残存長 3.2mm、幅 3.4mm、半分厚 2.0mmを測る。直方体状楕円形の種子の 2 子葉の合わせ目から半割し、さらに縦半分に割れた端部(約 1/4 個体)とみなされる。臍や幼根、初生葉は確認されない。種皮表面は平滑で、半割面および腹面側がややくぼむ(第 371 図(14) - 6)。

4 考察

永吉天神段遺跡の土器 1,188 点 245.12kg(石膏等含む)の圧痕調査の結果、縄文時代早期の土器(前平式、石坂式、桑ノ丸式など) 270 点 33.21kgと縄文時代晩期の土器 49 点 2.37kgからは、確実な種実圧痕が確認されな

かった。植物利用に関しては今後の課題である。

弥生時代早期の突帯土器 157 点 47.28kgからは、2点0.07kgに種実圧痕が確認され、カラスザンショウの種子とイヌザンショウの種子に同定された。種実圧痕検出率は、数量が1.27%、重量が0.15%である。縄文時代早期や晩期と比べて、種実圧痕検出率が上昇する。

また、3点0.16kgに種実圧痕の可能性が確認されたが、確実な同定には至らなかった。圧痕検出率は、数量が1.91%、重量が0.34%である。

落葉高木のカラスザンショウ、低木のイヌザンショウは、遺跡周辺の森林の林縁などの明るく開けた場所に生息していた点と、これらの種子が土器製作時に偶発的または意図的に混入した可能性が考えられる。第38表9の土器底部外へ断面より種子圧痕が確認されたイヌザンショウは、薬用や油料としての利用の可能性がある。

特筆すべき事項として、第38表7の土器底部断面より種子圧痕が確認されたカラスザンショウは、さらに同断面の近接箇所より昆虫類の幼虫圧痕も確認された。真邊・小畑(2017)は、カラスザンショウの種実の遺跡出土・土器圧痕調査事例集および成分分析により、貯蔵食物を保護する防虫剤としての利用の可能性を指摘している。今回のカラスザンショウ種子圧痕と昆虫圧痕の供伴は、カラスザンショウの防虫剤としての利用の可能性を支持する検出状況と言え、今後昆虫同定が望まれる。

弥生時代中期の土器(山ノ口I式)712点162.26kgからは、8点11か所7.42kgに種実圧痕が確認され、6点7か所が栽培種のイネの穎、1点が胚乳、2点がアワの穎に、1点が栽培の可能性があるアズキ亜属の種子に同定された。種実圧痕検出率は、数量(箇所を適用)が1.54%、重量が4.57%である。弥生時代早期よりも検出率は下がりが、栽培種主体となる点で大きな変化が見られる。

また、4点1.02%に種実圧痕の可能性が確認されたが、確実な同定には至らなかった。圧痕検出率は、数量が0.56%、重量が0.63%である。

栽培種のイネ・アワや栽培の可能性があるアズキ亜属

は、当時利用された植物質食料と示唆され、これらの穀粒や豆粒が土器製作時に偶発的または意図的に混入した可能性が考えられる。

特に、第38表13では土器底部の外面にイネ胚乳圧痕とアズキ亜属種子圧痕、内面に種実(ダイズ属か?)の圧痕の可能性のある計3か所の圧痕が確認され、土器製作時に複数種の穀粒や豆粒が存在したことが特筆される。

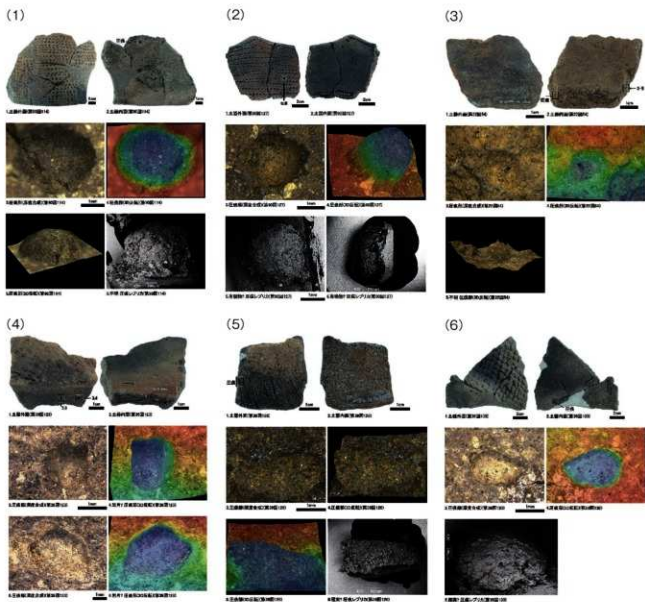
永吉天神段遺跡では、第1地点の土坑7号からイネの炭化果実(50±30BP)とササゲ属の炭化種子が同定されている(株式会社古環境研究所, 2016)。また、時代は新しいが、第2地点の中世堅穴建物1号からイネの炭化穎・胚乳(390±20BP)とマメ科(アズキ類か?)の炭化種子が同定されている(鹿児島県教育委員会・公益財団法人鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センター, 2018)。

【引用文献】

- 株式会社古環境研究所, 2016. 遺構埋土の出土炭化物における放射性炭素年代測定と種実同定. 永吉天神段遺跡第1地点-東九州自動車道(志布志IC-鹿屋串良JCT)建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書-、公益財団法人鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センター発掘調査報告書8. 鹿児島県教育委員会・公益財団法人鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センター, 108-110.
- 鹿児島県教育委員会・公益財団法人鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センター, 2018. 永吉天神段遺跡3第2地点-2 古代・中世・近世編-東九州自動車道(志布志IC-鹿屋串良JCT)建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書-、公益財団法人鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センター発掘調査報告書17, 218.
- 真邊 彩・小畑弘己, 2017. 産状と成分からみたカラスザンショウ果実の利用法. 植生史研究 第26巻第1号, 27-40.
- 丑野 毅・田川裕美, 1991. レプリカ法による土器圧痕の観察. 考古学と自然科学, 24, 13-36.

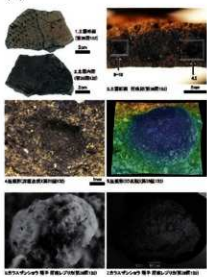
第 38 表 土器匠痕同定結果

番号	種類	器名	調査番号	重量	部位	状態	検出面	分類群	部位	形状	高さ	幅	長さ	備考	
											単位	単位	単位		
											mm	mm	mm		
1	甕文字	塚原中町窯跡0114	0.19	口縁上	→	内面	不明	群	38	13.4	5.2	2.6	セラクダシラフ子に似るが明確なし。群1群群にアフリカ産磁石目付法止		
2	甕文字	塚原中町窯跡0127	0.19	口縁	→	外面	有線状	群	20	12.4	2.0	1.0	口縁部のみ。左側部のみが明確		
3	甕文字	塚原中町窯跡0128	0.09	底部	→	外面の内面	不明	群	30	12.6	2.5	1.4	口縁部。口縁部が明確。口縁部が明確		
4	甕文字	塚原中町窯跡0123	0.07	口縁	→	外面の内面	不明	群	30	12.3	2.2	1.1	不明。口縁部が明確。口縁部が明確		
5	甕文字	塚原中町窯跡0126	0.07	口縁	→	外面	有線状	群	21	12.4	1.4	1.3	不明。口縁部が明確。口縁部が明確		
6	甕文字	塚原中町窯跡0130	0.51	口縁	→	再一面	不明	群	30	12.2	1.9	1.1	不明。口縁部が明確。口縁部が明確		
7	甕文字	塚原中町窯跡0132	0.10	口縁	→	内面	不明	群	23	13.8	2.8	1.6	不明。口縁部が明確。口縁部が明確		
8	甕文字	塚原中町窯跡0136	0.02	底部	→	外面	有線状	群	31	13.3	2.8	1.4	不明。口縁部が明確。口縁部が明確		
9	甕文字	塚原中町窯跡0138	0.02	底部	→	外面	有線状	群	34	10.5	1.5	1.1	不明。口縁部が明確。口縁部が明確		
10	甕文字	塚原中町窯跡0139	0.01	底部	→	外面	有線状	群	37	11.7	1.6	1.1	不明。口縁部が明確。口縁部が明確		
11	甕文字	塚原中町窯跡0142	0.10	口縁	→	内面	不明	群	37	13.1	1.3	1.0	不明。口縁部が明確。口縁部が明確		
12	甕文字	塚原中町窯跡0143	0.13	口縁	→	外面	有線状	群	39	12.3	→	→	不明。口縁部が明確。口縁部が明確		
13	甕文字	塚原中町窯跡0154	0.17	口縁	→	再一面	不明	群	40	11.1	1.1	1.1	不明。口縁部が明確。口縁部が明確		
14	甕文字	試料番号23	0.54	底部	→	外面	不明	群	41	13.5	2.1	1.7	下部欠損。口縁部が明確		
15	甕文字	試料番号33	1.40	→	→	内面	不明	群	42	6.3	2.8	2.2	口縁部が明確。口縁部が明確		
16	甕文字	試料番号83	1.78	→	→	外面	不明	群	43	7.8	3.3	1.8	不明。口縁部が明確。口縁部が明確		
17	甕文字	試料番号100	0.08	→	→	外面	不明	群	45	13.9	3.1	1.1	不明。口縁部が明確。口縁部が明確		
18	甕文字	試料番号141	0.32	底部	→	外面	不明	群	46	6.3	2.3	1.0	不明。口縁部が明確。口縁部が明確		
19	甕文字	試料番号159	0.72	→	→	外面	不明	群	47	6.3	2.4	1.2	不明。口縁部が明確。口縁部が明確		
20	甕文字	本報告番号002027	0.06	→	→	外面	不明	群	48	4.1	2.5	1.1	不明。口縁部が明確。口縁部が明確		
21	甕文字	本報告番号002035	0.42	底部	→	外面	不明	群	49	6.7	3.0	0.8	不明。口縁部が明確。口縁部が明確		
22	甕文字	本報告番号02061	0.18	→	→	外面	不明	群	50	9.0	1.6	→	不明。口縁部が明確。口縁部が明確		
23	甕文字	本報告番号070076	0.04	→	→	外面	不明	群	51	4.9	2.4	1.6	不明。口縁部が明確。口縁部が明確		
24	甕文字	本報告番号1100040	0.10	→	→	外面	不明	群	52	1.8	2.0	1.3	不明。口縁部が明確。口縁部が明確		
25	甕文字	本報告番号1100040	0.80	底部	→	外面	不明	群	53	1.8	1.4	1.3	不明。口縁部が明確。口縁部が明確		
26	甕文字	本報告番号1100049	1.98	→	→	外面	不明	群	54	8.8	3.1	2.0	不明。口縁部が明確。口縁部が明確		
27	甕文字	本報告番号1100050	0.08	→	→	外面	不明	群	55	1.4	2.4	1.3	不明。口縁部が明確。口縁部が明確		
28	甕文字	本報告番号06110	0.08	底部	→	外面	不明	群	56	1.7	1.3	1.3	不明。口縁部が明確。口縁部が明確		

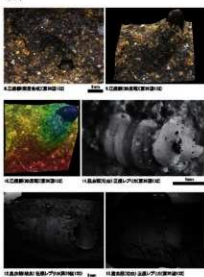


第 370 図 永吉天神段遺跡の土器匠痕 (1) ~ (6)

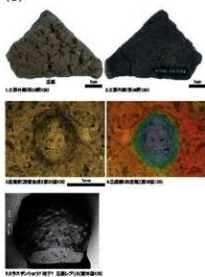
(7)



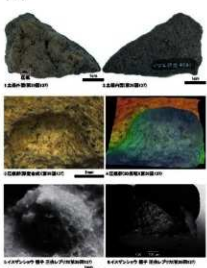
(8)



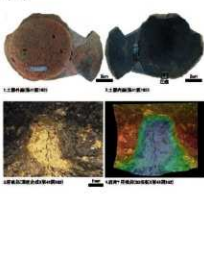
(9)



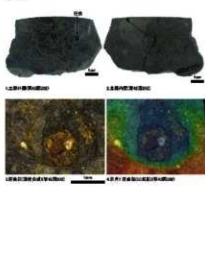
(10)



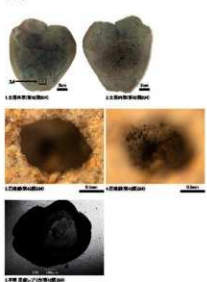
(11)



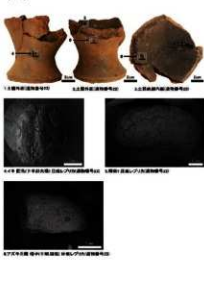
(12)



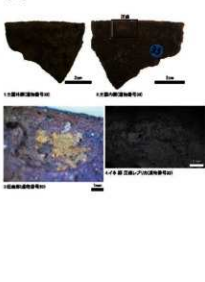
(13)



(14)



(15)



第 371 図 永吉天神段遺跡の土器圧痕 (7) ~ (15)



第 372 図 永吉天神段遺跡の土器圧痕 (16) ~ (24)

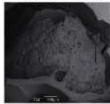
(25)



1. 2 遺物番号(調査番号) K010-02 2. 2 遺物番号(調査番号) K010-03



3. 2 遺物番号(調査番号) K010-02 4. 2 遺物番号(調査番号) K010-03



5. 2 遺物番号(調査番号) K010-02

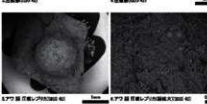
(26)



1. 2 遺物番号(調査番号) K010-02 2. 2 遺物番号(調査番号) K010-03



3. 2 遺物番号(調査番号) K010-02 4. 2 遺物番号(調査番号) K010-03



5. 2 遺物番号(調査番号) K010-02 6. 2 遺物番号(調査番号) K010-03

(27)



1. 2 遺物番号(調査番号) K010-02 2. 2 遺物番号(調査番号) K010-03



3. 2 遺物番号(調査番号) K010-02



4. 2 遺物番号(調査番号) K010-02

(28)



1. 2 遺物番号(調査番号) K010-02 2. 2 遺物番号(調査番号) K010-03

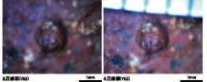


3. 2 遺物番号(調査番号) K010-02

(29)



1. 2 遺物番号(調査番号) K010-02 2. 2 遺物番号(調査番号) K010-03



3. 2 遺物番号(調査番号) K010-02 4. 2 遺物番号(調査番号) K010-03



5. 2 遺物番号(調査番号) K010-02 6. 2 遺物番号(調査番号) K010-03

第 373 図 永吉天神段遺跡の土器片痕 (25) ~ (29)

第 39 表 土器片痕調査結果

時期	遺物番号	報告書(報告書掲載番号)	調査番号	遺物番号	試料番号	パレンケース有	パレンケース無	数	備考
縄文前期	3	様式で 54 第 30、37 ~ 40 図	101 ~ 102		10.30	7.30	65	114. カラマシラツク層子に於けるが懸念なし、粘土質(セラミック)で中厚 127. 自然黒褐色、毎粒物(赤土)の可能性、履穿の可能性低いため 03M 履穿対象外 302. 履穿の可能性低いパレンケース除外せず 304. 形状、全長(約)3.2 ㎝、表面不平整、履穿の可能性なし	
縄文中期	28	第 60 図	507		1.52	3.32	37	142. 軽石等の可能性、履穿の可能性低いため 03M 履穿対象外 302. 履穿の可能性低いパレンケース除外せず 304. 形状、全長(約)3.2 ㎝、表面不平整、履穿の可能性なし	
縄文中期	28	第 60 図	535			0.06	1	イネ、玄米等に見られる日線模様	
縄文中期	31	第 72 図	363			0.42	1	イネ、玄米等の厚み(約)1.5 ㎝、表面不平整、履穿の可能性なし	
縄文中期	32	第 73 図	538			0.18	1	横凹縁、コナツク層子に於けるが懸念なし	
縄文中期	32	第 73 図	538			0.04	1		
縄文中期	44	第 124 図	780			0.10	1	イネに於ける履痕あるが懸念なし	
縄文中期	45	第 125 図	794			1.96	1	イネ、玄米等の厚み(約)1.5 ㎝、表面不平整、履穿の可能性なし	
縄文中期	46	第 125 図	796			0.40	1	コナツク層子、玄米、玄米等に見られる日線模様	
縄文中期	69	第 193 図	1136			0.08	1	イネに於ける履痕あるが懸念なし	
縄文中期	90	第 261 図	1450			0.08	1	アツク(玄米、玄米等)自由面に覆われている、背面、乳突状の痕跡(Nishi et al., 2007)	
縄文中期			23			0.34	1	23-1. イネ、玄米等の厚み(約)1.5 ㎝、表面不平整、履穿の可能性なし、履穿の可能性低いパレンケース除外せず 304. 形状、全長(約)3.2 ㎝、表面不平整、履穿の可能性なし	
縄文中期			33			1.46	1	イネ、玄米等の厚み(約)1.5 ㎝、表面不平整、履穿の可能性なし	
縄文中期			40			1.76	1	33-1. イネ、玄米等の厚み(約)1.5 ㎝、表面不平整、履穿の可能性なし	
縄文中期			241			0.32	1	イネに於ける履痕あるが懸念なし	
縄文中期			329			0.72	1	イネ、玄米等の厚み(約)1.5 ㎝、表面不平整、履穿の可能性なし	
縄文前期(2) 縄文初期	5	様式で 6 第 30、37 ~ 40 図	117 ~ 122		9.52	5.52	64	123. 2 遺物(2)、不平整、履穿、履穿の可能性低いため 03M 履穿対象外 126. 正午線履痕、マシノキ履痕に於けるが懸念なし、130. 履穿の可能性低いため 03M 履穿対象外 302. 履穿の可能性低いパレンケース除外せず 304. 形状、全長(約)3.2 ㎝、表面不平整、履穿の可能性なし、履穿の可能性低いパレンケース除外せず 304. 形状、全長(約)3.2 ㎝、表面不平整、履穿の可能性なし	
縄文前期(2) 縄文初期	3	様式で 6 第 30、37 ~ 40 図	49 ~ 60		10.24	7.04	43	34-1. 正午線、履穿の可能性低いため 03M 履穿対象外 34-2. 不平整、履穿の可能性低いため 03M 履穿対象外	

第6章 総括

第1節 縄文時代晩期の調査

1 遺構について

入佐式土器を伴う住居跡1軒と落とし穴の可能性がある土坑2基、用途不明の土坑4基が発見された。

入佐式土器期の竪穴住居跡は、直上のⅢa層が20cm程度の層厚であることを踏まえ、本来の深さは25cm以上はあったと考えられる。柱穴については、周辺に多数検出された中世の柱穴群の中から、調査中に埋土の特徴や形状、竪穴との相対的位置関係などの詳細な検討を重ねた上で抽出した。竪穴外の添柱と想定した4本の柱穴は、住居が南東に下る傾斜面上に建てられていることから、荷重等のバランスから斜面下側の2本（P6、7）がより遠い位置に配された想定している。また、この場合、基本設計に竪穴外へ添柱の空間を生業活動等に利用する計画はないことになる。

なお、残念ながら、床面の色調等の変化を含めて炉の存在を明らかにできなかった。

住居に伴う入佐式土器の中には、2、7や8のようにやや新しい要素が見受けられる資料もある。竪穴内での出土状況は既に述べたが、深鉢では1が散在しているのに対し、2、6、7はそうではない。小型の深鉢も竪穴の南東部に比較的まとまる。また、浅鉢は破片を含め竪穴の東側から出土した。

石器では、石磯、横刃形石器、磨製石斧、打製石斧が出土した。このうち、石磯以外の石器が大小1点ずつあるようにも見受けられる。

土坑6基のうち2基については、傾斜面に位置すること、周辺の遺物出土状況が希薄であることと遺構の全体的な形状（円筒形）並びに規模などの状況から落とし穴と想定した。ただし、「逆茂木痕」と想定した床面中央の小ピットについては、縦断面が蛇行することなど、検討の余地がある。

2 遺物について

土器は、入佐式土器、黒川式土器が出土している。分布状況についてみると、微視的には本文中で触れたような違いがあるもの、おおむね入佐式土器と黒川式土器ともに重複するが、黒川式土器と突帯文土器でより重複が顕著である。このことから、入佐式期と黒川式・突帯文期の間に多少の画期があるようにみえる。他方、遺物量でみると入佐式期と突帯文期が多い。遺構の分布状況も遺物量に基づく想定と相関しており、第1地点の調査成果を踏まえても、3期の変遷に関する解釈が難しい。

入佐式土器として、深鉢、浅鉢、鍋に分類した。住居内出土の小型深鉢については、包含層出土深鉢における分類・抽出はできなかった。3器種の存在及び比率は、従来の傾向に合致するといえる。そのうち、52に施文さ

れた綾杉文と円形突起は、後期末の三万田式や御領式との関係も想定できるが、胎土や焼成などの特徴から本報告では型式特定は控えた。このほか、63や66も器形の類例が少なく帰属時期等に苦慮した。鍋（67、68）は、断面形状は深鉢に類似するが、口縁部の開き具合と内面の丁寧な調整、外面下端に残る組織痕から深鉢に分類しなかった。黒川式期の組織痕土器の祖型的なものとする。

黒川式土器として、深鉢、浅鉢、まり、小型鉢、鍋、土製品に分類した。本文中でも記したとおり、分類した器種のなかでは浅鉢の点数が最も多く、深鉢を凌駕する。また、今回は、91、94、102や103の口縁部装飾や113をもとに黒川式期の浅鉢に分類しているが、近年突帯文期の浅鉢とする見解のある器形を多く含んでいる。特に、底部資料の一部（157、158）は脚台であり、突帯文期に帰属する可能性が高い。他方、132、133、136～138は、沈線で幾何学的な文様を施文しており、干河原段階と称される一群の資料との関係を想起させる資料である。他に小型鉢（167）についても、「三角形刃文」こそないものの、薄い器壁と丁寧な器面調整に加え、口縁端部の1条の沈線文は、干河原段階資料を想起させる。

第2節 弥生時代の調査

第2地点で最も内容に富む時代である。本文に従い、時期毎に総括することとした。

1 早期～前期について

本報告では、突帯文土器を弥生時代早期に位置づけた。第1地点での整理と異なる分類になったが、層的に分別できず型式学的にしか分類できない状況において、特に一定数出土している壺形土器に対し明確な型式差を設定できなかったため、本報告ではやむを得ず弥生時代早期に一括して報告することとした。

刻目突帯文土器の深鉢形土器については、従来の南部九州における編年観に沿う器形・施文の遺物が出土している。ただし、464は器形、調整、文様や胎土・焼成いづれも大変特徴的で既知の南部九州当該期資料に見当たらない。器形や調整から朝鮮系無文土器との関係を調査したが、九州内では探求できなかった。

この他、孔列土器は、第1地点よりも出土数や器形のバリエーションが多い。

また、底部に網代や植物の葉の圧痕を残す資料が複数みられた。植物の葉の圧痕については比較的状态のよい資料を鹿児島県立博物館に鑑定して頂いたところ、植物学的には断片試料とのことで種の特定まではできなかったものの、390はイラクサ科もしくはクワ科、397はキク科もしくはミズキ科との結果を得ることができた。ミズキ科を除けばいずれも森林縁のある程度開けた環境を好

む植物であることから、当時の植生は現在と大きな差異がなかったことが想定され、土器製作のために集落から離れた場所に採取に行くような状況ではなかったことも想定される。なお、上記の植物は多年生植物であるため、土器の製作時季を推定する参考には適さない。

壺形土器については、第59図に例示した一群が下原遺跡（南さつま市）との関連を伺わせる。また、外面のミガキ調整が縦位に施されている資料もわずかにみられることや、頸部に深鉢形土器と同じ技法の刻目突帯文が施されている485、胴部に三角突帯で台形モチーフを描き円形浮文を施す495～498の小形丹塗り壺など、縄文から弥生への転換期における南部九州の資料として有効と考えられる。

前期の資料は、前後の時期に比べて少ないが如意形口縁の壺形土器や重弧文や鋸歯文を施された壺形土器などが出土していることは、この地域が、早期から引き続き広域的な交流を継続させていることをうかがわせる。

2 中期について

一般的に遺構から述べるところであるが、遺物からまとめたい。

(1) 遺物について

ア 土器

第2地点から出土している土器のうち、壺形土器の中に入来Ⅱ式や山ノ口Ⅱ式とともに、口縁部が水平またはやや上方に整形するが短くおさめる形状を呈し、脚台は山ノ口Ⅱ式ほどには高く末広がりにならない一群がまとめて出土している（例えば住居跡では10号633～644（637除く）、17号740～744、25号869～876、31号934～944（938除く）、36号1033～1035、42号1078～1083、43号1084～1092、45号1111～1123など）。

この一群は、上記の特徴から、従来山ノ口Ⅰ式土器あるいは吉ヶ崎式土器とされてきた土器型式に該当すると考えられる。伴う他器種については、上記遺構からの出土量が少なかったことから、残念ながら壺形土器ほどには特徴を抽出できない。ただ、壺形土器については、口縁部の下垂は入来Ⅱ式のそれよりも長くのびるが山ノ口Ⅱ式ほどには立体的に作られず、頸部は山ノ口Ⅱ式より径がわずかに太く長さも長く整形され、胴～底部はやや山ノ口Ⅱ式に近い器形となるかと想定される（17号747と758、19号769と770等）（附図3）。

この他の土器に関しては、まず、住居内から出土した黒髪式土器があげられる。大隅半島では2例目で、壺形土器口縁部の小片である。2号住居では山ノ口Ⅱ式と同一埋土から出土しているほか、3号住居や5号住居では入来Ⅱ式および山ノ口Ⅱ式を含む埋土から出土している。口縁部の形状は、本文中の図のとおり短く、黒髪式古段階の様相が伺われる。こうした状況から、これらは山ノ口Ⅰ式に並行する可能性が想定される。

次に、二又状口縁の鉢形土器（1050、1154、1155）である。山ノ口Ⅱ式の二又状口縁壺の頸部から口縁部と形状が酷似しているが、平底を呈し、胴部の器壁は下半部にかけて厚みを増す。住居跡や周溝墓での出土状況から山ノ口Ⅱ式に伴うもので、当該期の新たな器種に設定できると考えられる。なお、上記したとおり二又状口縁壺と酷似するため、基本的には完形復元等では壺との判別は困難と考えられるが、底部付近の器壁の厚さは判別の指標にできる可能性があり、また法量が小さいものも胴部の湾曲具合などから判別できる可能性がある。

本文中「中世の土師質銅形土器を彷彿とさせる」と記した土器（1334～1340）は、包含層出土のため本報告では燻風時期の詳細な解明には至らなかった。だが、中ノ丸遺跡（鹿屋市）例などを踏まえると、少なくとも笠之原台地では煮湯具の一器種として脚台付の壺形土器とは別に一定数が製作・使用されていたと想定できる。ただし、本遺跡では住居内や集落域からは出土していない。この点は、大甕に匹敵する口径とともに系譜や用途の解釈等に関する議論の起点になると考えられる。

さらに、朝鮮系無文土器に類似した壺形土器も出土している。北部九州から有明海北部沿岸一帯にかけて確認されているものと同等ではないが、在地の壺形土器に比べ特異な口縁部形状を呈することや、法量が一回り小さいことなど、朝鮮系無文土器との関連をうかがわせる特徴を備えている。分布域も西部側に偏っていて住居跡などの集中域から離れていることも、北部九州などの事例と類似した出土状況を呈している。本県では、わずかに下原遺跡（南さつま市）や鹿児島大学構内遺跡（鹿児島市）の事例が指摘されている（片岡1999）のみであり、県内や周辺地域の様相解明が待たれる。なお、朝鮮系無文土器分布の背景として想定されている製鉄技術については、墓坑から出土した鉄鏝を除き、明確に指摘できる遺構や遺物は発見されなかった。

この他、本文中で「黒塗り壺」として紹介した、外面が黒褐色の色調を呈しミガキ調整で仕上げられた壺形土器がある。入来Ⅱ式期の住居4軒（5、6、10、25号）から1点ずつ出土しているが、どれも意図的なものとは考えにくい。土器単体では、想定される器形は入来Ⅱ式の壺形土器に類似する肩部に細沈線文を施文する例が2点あり（6号590、25号589）。他の入来Ⅱ式の壺形土器にない特徴を備えている。なお、4点とも頸部から上位の破片は住居内及び周辺に見当たらない。『黒塗り壺』は、北部九州において前期後半から晩檜墓にしばしば使用されていることで知られる土器である。本遺跡では、檜には用いられていないが土器の属性や出土状況には他の壺形土器と異なる点もあり、評価には慎重を期すべきと考える。

イ 石器

第2地点出土の当該時期の石器については、遺構出土のものを除き詳細な帰属時期の推定ができなかった。

遺構出土のものでは、入来Ⅱ式～山ノ口Ⅱ式土器期を通じて刃部のある利器よりも工具が多様にわたり出土する傾向にある。出土量については、住居検出数の差を反映して入来Ⅱ式段階が多いが、磨製石鏃（入来Ⅱ式8、山ノ口Ⅰ式1、山ノ口Ⅱ式2）と軽石加工品（入来Ⅱ式8、山ノ口Ⅰ式0、山ノ口Ⅱ式3）については、住居数の差以外の要因を反映している可能性がある。

なお、磨製石鏃については、側縁部を鋭利に研いでいない資料も製品とした。先端のみ衝撃剥離がある資料から、鋭利通性に特化したものと想定したためである。包含層からは、細分類で20種にわたる石器が出土した。東西で点数に差がみられるが、主な理由は調査面積の都合等による影響であろう。前段の住居出土石器を参考にすると、磨・敲石類については、棒状で端部のみ又は1か所程度の稜上のごく狭い範囲に敲打痕が集中するもの、砥石についても、同じく棒状で端部や稜上のみ敲打痕が集中するものや鋭く直線的な研ぎ痕が残るものは弥生時代に帰属する可能性がある。そしてこれらは、鉄関連技術の存在をうかがわせる資料かもしれない。

また、軽石加工品については、多面体状の形態をしているものや凹みが複数面にあるものなどは、例えば粗砥石や穿孔作業の受石など、実用工具としての用途を担っていた可能性を想定できるように思われる。

ウ その他の遺物

土坑墓から出土した鉄鏃は、すべて無茎鏃で薄く、中には研ぎ直されている可能性があるものもある。このような特徴は、北部九州～近畿地方以外で発見される弥生中期の鉄鏃にみられる特徴と合致する。いずれにせよ、弥生時代に帰属する例として県内初見であり、今後検討には慎重を期すべきと考える。

丁字頭土製勾玉は、山ノ口Ⅱ式段階の住居からのみ出土している。先例を踏襲できたが、入来Ⅱ式や山ノ口Ⅰ式段階の住居にないことが課題のまま残った。

(2) 遺構について

遺構の分布は、本文にもあるとおり、生活関連遺構と墓域が、それぞれ地形を利用して隔てられている。

ア 堅穴住居跡（附図2及び附表参照）

堅穴住居跡について、構造と出土遺物から整理する。全体的には、調査区内東側に偏って発見されているほか、重複例が少ない（同一住居に異なる建替想定例を除く）。重複例は、円形住居が方形住居を切る例（10号と13号、21号と22号、26号と27号）、方形住居同士の間（7号と8号、37号と38号）の5例のみである。

また、屋内炉については、可能性のある痕跡を残す住居もあったが、明確に推定できる例は確認されなかった。

円形住居については、調査区内から12軒発見されており、その内訳は、西部2軒に対し東部10軒と東部に集中する。基本的な構造はほぼ同じとみられ、堅穴中央に小土坑を設け、7～9本の柱を堅穴中心と壁間の中間地点付近に環状に配している。ただ、28号は4本柱、33号は2本柱に加え東端に用途不明の多数の小柱を伴っており、特異である。

主柱は建て替えを行った例が多い。張り出しは3軒（2、6、12号）で確認できたが、ベッド状遺構は33号にしか構築されていなかった。包含層の残存状況を踏まえると、張り出しは住居の基本構造に含まれていた可能性がある。中央土坑については、土坑壁際に小柱を設ける例と設けない例が6例ずつあり、前者の土坑を伴う住居は、44～45区列の谷を囲む区域に集中しているように見える。

円形住居からは、入来Ⅱ式～山ノ口Ⅱ式が出土しているが、床面直上から出土しているのは入来Ⅱ式～山ノ口Ⅰ式であった。33号は山ノ口Ⅱ式のみが出土した。また、33号を含む10軒が東部（うち7軒は44区列より東側）に集中しているなかで、43、45号のみが、調査区中央の小丘陵と谷を越えたD-23区とF・G-24・25区に建っている。なお、2号は埋土上層に山ノ口Ⅱ式を含む、4軒の住居（2、10、12、33号）では大甕も出土している。

石器では、磨製石鏃を出土した住居が8軒（2、6、12、21、26、33、43、45号）、軽石製品を出土した住居が4軒（15、21、26、28号）確認されたが、砥石を出土した住居は3軒（12、33、45）である。他には、石皿が21号、石庵丁が26号で出土している。

この他の遺物では、33号で土製勾玉が、44号で円盤形土製品が出土している。

方形住居については、調査区内から32軒発見されており、その内訳は西部4軒に対し東部28軒と、円形住居よりさらに東部に偏っている。基本構造は円形住居よりもパターンが多く、平面形には長方形、方形及び凹形があり、主柱は2本柱が最も多く床面に建つ例と壁際に建つ例がある。ただし27号と34号については、壁に沿って等間隔に柱が建てられており、基本構造自体が異なっていた可能性が高い。

また、東部の住居については、長軸をおおむね東西方向に設定しているが、14号から東側の住居は、特にG～L-43～55区（調査区外）にある谷を意識して長軸を設定しているように見受けられる。

住居内土坑は、9軒（不明含む）で確認されなかったが、確認できた例ではほとんどが南側に位置する壁に接して設けられていた。また、円形住居にもあった土坑長軸両端に小柱を伴う例が9軒あるが、円形住居と異なり区域が集中する傾向とは見いだせなかった。張り出し並びにベッド状遺構は、方形住居の多くで構築されてい

ることから、基本構造に含まれていたものと考えられる。

土器型式は、方形住居でも円形住居同様各時期出土しているが、床面直上から出土しているのは入来Ⅱ～山ノ口Ⅰ式が7軒に対し、山ノ口Ⅱ式が1軒あり、円形住居と傾向は類似するが同一とは言えない。また、入来Ⅱ式～山ノ口Ⅰ式を出土した住居は上記を含め21軒あるが、42、43、45号を除き東部に偏っている。これに対し、山ノ口Ⅱ式を出土した住居は上記を含め11軒あり、4号を除いて32～34区列付近にある小丘陵の東斜面に集中している。さらには、山ノ口Ⅱ式を埋土上位に含む住居が、2号、17号や19号など東部東端域で確認されるなど、円形住居と比較して分布の広がりがみられる。

石器については、13号で磨製石剣が出土しているが、磨製石剣は3軒(9、19、31号)にとどまる。軽石製品も6軒(3、13、18、30、31、44号)と少ない。だが、紙石を伴う住居は9軒、敲石についても2軒あり、円形住居の傾向と異なる。

この他、41号で土製勾玉が出土している。

以上をまとめると、入来Ⅱ式土器のみが出土する住居跡は20軒、山ノ口Ⅰ式土器のみが出土する住居跡は4軒(7、9、20、31号)、山ノ口Ⅱ式土器のみが出土する住居跡は11軒のほか、入来Ⅱ式土器と山ノ口Ⅰ式土器が出土する住居跡5軒(3、10、11、16、19号)、山ノ口Ⅰ式土器と山ノ口Ⅱ式土器は17号の1軒、山ノ口Ⅱ式土器と入来Ⅱ式土器が出土する住居跡は3軒(2、30、44号)となる。線を引いたようにはいかないが、G～L-43～55区(調査区外)にある谷を開みつも、40～43区列の地形変化域を境に東側に入来Ⅱ式を出土する住居が集中し、西側は山ノ口Ⅱ式を出土する住居群がまとまるようである。そして、入来Ⅱ式段階の3軒(42、43、45号)と山ノ口Ⅱ式段階の1軒(44号)は、30～32区列の谷を隔て西側に建っているという共通点も確認される。

イ 土坑

調査区全体で50基発見された。内訳は、東部に11基、西部に39基と偏りがみられるが、西部の谷部周辺を除き、東西どちらも住居跡など他の遺構の分布域内で検出される傾向にあった。

東部では、D～F-48～50区(6基)とJ～K-37、38区(5基)の2区域にわかれる。形状については、1号や5号が他と異なる程度で、どちらの区域も特筆すべき点は見当たらなかったが、底面長軸で規模を比較すると、平均値は前者が0.95m(部分検出の4号を除く)に対し後者は1.18mとなり、規模にはやや違いが認められる。土器は、埋土中の混在例のみだが、前者が入来Ⅱ式、後者が山ノ口Ⅱ式であった。

西部では、帰属についての解釈が難しい12および13号の他に、谷部(5基)とG～J-25、26区(9基)及びD～F-23～25区(23基)の3区域にわかれる。

形状については、平面が楕円形を呈するものがほとんどで、さらに底面の片隅にピットを伴う例が27基/32基と顕著な特徴を示している。特に西端の集中区域は21基/23基に及ぶ。東部と同様に底面長軸の平均値で規模を比較すると、谷部は0.6m、G～J-25、26区は0.89m、D～F-23～25区は0.97mとなり、谷部が東西合わせて最も規模が小さいこと、西部の集中域2か所に若干ながら差異があることがわかる。なお、こちらは13号および36号の埋土から山ノ口Ⅱ式と考えられる小片が出土した他は遺物がなかった。

ウ 周溝墓

東部に3基、西部に2基発見された。周溝の底面外端および底面幅の平均値で規模を比較してみると、1号は4.2(推定)×3.8m(平均底幅13cm)、2号は平均底幅12cm、3号は6.1×5.7m(平均底幅52cm)、4号は8.6×8.2m(平均底幅104cm)、5号は4.15×3.9m(平均底幅20cm)となり、4号が最も大きい。主体部は4号でしか確認できなかったが北部九州の箱式石棺墓にも類似しており、これまでに県内で発見された弥生土坑墓の代表例に匹敵する規模である。

他方、遺構内で供献行為の痕跡と想定できるような遺物出土状況を示したのは3号(山ノ口Ⅱ式)並びに4号(入来Ⅱ式)の2基のみと少なく、他の3基は土器片が埋土中から出土しているにすぎない。この出土状況の相違については、周溝の規模の違いと相関している可能性が考えられる。

分布状況については、入来Ⅱ式を出土する西部の4、5号は住居の分布中心域と地形を隔てているが、1号では同じ尾根の違う斜面、2、3号については、住居の近隣と、時期が下るにつれてより住居の分布中心域近くで構築されるようになっている。

なお、3号や5号は方形を呈しているようにも見えるが、残存状況の問題や角部の状況が不明瞭であることなどから、本報告では平面形による詳細な分別は控えた。

エ 土坑墓

本文でも記したとおり、西部丘陵の後線上に15基、丘陵北西緩斜面に5基と、2か所にわかれて発見された。なかでも横口式土坑墓は、どちらのグループでも検出されているが(前者5基:5、6、10、14、15号 後者1基:18号)、県内では京ノ峯遺跡(志布志市)、高吉B遺跡での発見以来の事例となつた。

後線に沿ってまとまる前者の15基は、その北端(傾斜上端)に周溝墓4号が併存する。特に1、2号は、主体部の構造が周溝墓4号と類似すること、大甕や壺などが集中する箇所が近辺に一定の間隔をおいて4か所存在することから、どちらかが周溝を伴っていたことも想定される(この場合、土器集中箇所は供献と仮定)。また、個々の土坑墓は、長軸を後線の方位(分布域の長軸)と異な

る略東西方向に向けており、一定の計画性がうかがえる(周溝墓4号主体部の長軸方位も同じ)。

個々の土坑墓は、形状が段掘り構造となるものや上記した横口式をとるものなど、平面形・断面形ともにさほど統一性がみられない。長軸の平均値と比較してみると、段掘り構造の墓(1~3号)は2.3m、横口式の墓は1.3m、それ以外は1.7mで、横口式が最も小さい。

一方、北西緩斜面上の5基は、稜線から1.5mほど下った辺りにまどまり、その南西端(傾斜下側)に周溝墓5号が併存する。こちらのグループは、分布域の長軸と個々の土坑墓の長軸の方向がほぼ北東-南西方向に揃っている(土坑墓の長軸が周溝墓5号に向いている)点が、稜線上のグループと異なる計画性の存在を窺わせる。なお、19号と20号は非常に近接して掘られており、2基に固有の規制等が存在したかのようである。

個々の土坑墓の形状は、18号が横口式であるほか、平面形はほぼ同じである。規模は、19、20号が2.24m、18号が1.28m、16、17号が1.5mの平均値を示し、やはり横口式が最も小さい。

副葬品は、どちらのグループでも明確に想定できる出土状況を示した墓坑はなく、わずかに稜線上の7、9号並びに斜面上の19、20号から鎌や菅玉が散在した状態で発見されたのみであった。特に、鉄鏃並びに石鏃については、本遺跡の出土状況では、副葬品以外に戦闘(戦争?)又は別の宗教的行為など、用途に関して想定できる複数の可能性を絞り込むことができなかった。これら以外では埋土中に入来Ⅱ式土器の小片が出土した例のみだが、この状況は、周溝墓4、5号と共通する点であり、墓域全体の帰属時期を想定する上でわずかながら参考になろう。また、上記した1、2号近辺の土器集中には山ノ口Ⅱ式の甕形土器と二重口縁の壺形土器が含まれていること、さらにその直近で須玖式系の広口壺(1200)がまどまって出土していることは、順度はさておきこの墓域が入来Ⅱ式から山ノ口Ⅱ式段階まで継続していた可能性を示すと考えられる。

なお、土坑墓のうち床面に小穴を設ける7号と、上記した横口式および底面片隅にピットを設ける土坑については、福岡平野から筑後平野にかけて類似例があるようだ。

オ まとめ

○山ノ口Ⅰ式と考えられる土器が、器種組成等未解明の部分もあるが遺構を伴って一定数出土した。

○入来Ⅱ式から山ノ口Ⅱ式の時期にかけて営まれた集落の変遷を確認できた。

○当該期の住居について、前例を追認するとともに、これらが入来Ⅱ式段階まで遡ることを新たに確認できた。

○円形住居と方形住居の1時期の組み合わせや円形住居の機能の詳細については、今後の検討課題である。

○周溝墓並びに土坑墓は、各土器型式段階を通して構築

されたと考えられる。周溝墓については、段階を経るにつれて、集落近くにも構築される。

○弥生時代中期の大隅半島に複数形態の墓坑が存在し、さらに、それらが一定の規制等に基づき墓域まで構成している可能性を確認できた。

○集落と墓域は、各土器型式段階を通して、地形を利用して隔てられていたと考えられる。

○既知の遺跡でも、根柢や谷を隔てた近隣に当該集落の墓域が存在していることが想定される。

○そうした景観の中での、大隅半島と薩摩半島、さらに九州他地域との交流の詳細説明が今後の課題である。

※調査中に注目された、墓域で発見された住居や孤立柱建物跡の性格については、追認しようとしたが、一時的な使用と考えられる葬送儀礼関係施設が他の通常の住居と同様の遺存状況を示すことに対する解釈ができなかったこと等から、追認せず慎重に扱うこととした。

第3節 古墳時代の調査

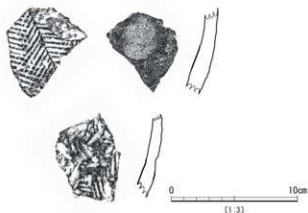
1 遺構について

竪穴住居跡が5軒、土坑が10基発見された。各住居は、土坑を伴うものを含め全体として散在した状態である。また、1号以外、張り出しを伴う構造の住居だけ出土している。県内で発見された花卉形住居の多くは集落の一部として存在する場合が多く、本遺跡のような状況を呈する例は少ない。花卉形住居については、周辺の住居との相対的な関係において検討される場合が多いが、本遺跡の場合、同構造のみが出土している点を除けば、各住居が併存もしくは地点を大きく変えながら短期間(1型式期間)で建て替えと廃棄を繰り返していたこととなる。これは、成川式土器前半期の集落形態に通じる特徴である。また、わずかながら砥石や敲石などの工具類が出土している点も従来例を追認するものと言える。

2 遺物について

甕形土器を見る限りでは、成川式土器前半期に位置づけられる型式が出土しているが、布留系の高坏(1887)、小形精製壺(1930)に加え、異形九底壺(1977-1981)や鉢(2046)など成川式土器の器種構成にない土器も出土している。なかには宮崎平野部との関連をうかがわせるものもあり、類例の増加が期待される。

最後に、異例を承知でタタキを有する硬質の土師器2点を紹介したい。いずれも甕と考えられるが小片のため詳細は不明である(次頁掲載)。上はG-25区②から、下はE-20区Ⅱ層から出土した。色調は、上が鈍い黄褐色(外面)と褐色(内面)で、下が淡黄色(外面)と黄灰色(内面)で断面内部が浅黄色である。最大の特徴は外面のタタキで、近畿地方で庄内式期にのみ見られるという「矢羽根状タタキ」と類似している。内面には略円形の当て具痕があり、ナダられている。



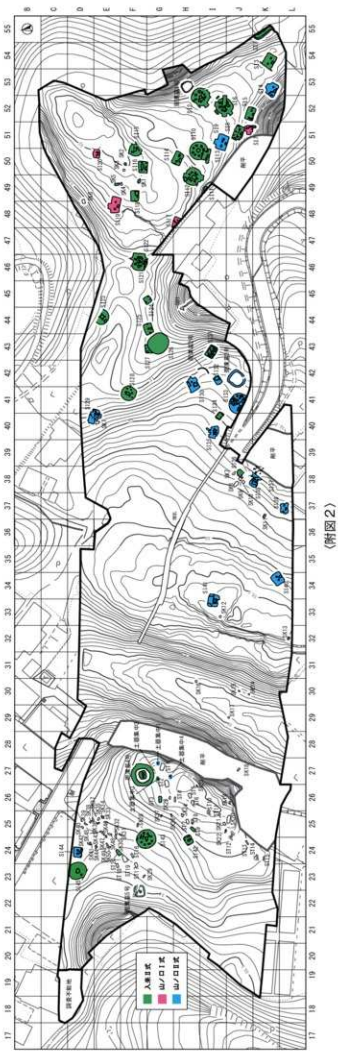
〔附図1〕

〔参考文献〕

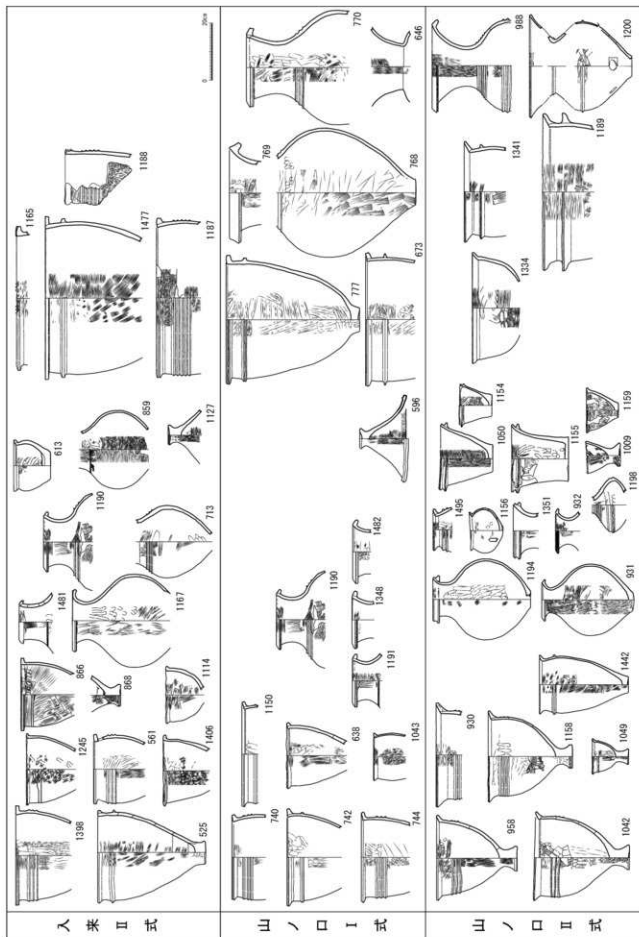
- 1992 『鹿児島県下の弥生土器』鹿児島県考古学会
 1993 藤尾慎一郎『南九州の夾帯文土器』『鹿児島考古』第27号
 鹿児島県考古学会
 1996 藤田等『9墓地3.土壙墓』『弥生文化の研究』8 雄山閣
 1997 堂込孝人『南九州縄文晩期土器の再検討』『鹿児島考古』
 第31号 鹿児島県考古学会
 1997 中園聡『九州南部地域弥生土器編年』『人類学研究』9
 人類学研究会
 1998 中塚浩太郎『南部九州弥生時代竪穴住居の分類』
 『人類学研究』10 人類学研究会
 1999 片岡安二『弥生時代 渡来人と土器・青銅器』雄山閣出版
 1999 本田道輝『松木圃〇式土器、その後』『鹿児島考古』
 第33号 鹿児島県考古学会
 2001 松永幸寿『宮崎平野部における弥生時代後期中～古墳時代
 中期の土器編年』『宮崎考古』第17号 宮崎考古学会
 2004a 宮地聡一郎『瀬日突帯文土器圏の成立(上)』『考古学雑誌』
 88-1 日本考古学会
 2004b 宮地聡一郎『瀬日突帯文土器圏の成立(下)』『考古学雑誌』
 88-2 日本考古学会
 2015 西谷彰『鹿児島県における弥生時代住居跡研究の現状と課題』
 『鹿児島考古』第45号 鹿児島県考古学会

〔報告書〕

- 1989 『井手間遺跡』『松山町埋蔵文化財発掘調査報告書』(3)
 1989 『中ノ丸遺跡』『鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書』(48)
 1993 『京ノ峯遺跡』『松山町埋蔵文化財発掘調査』(7)
 1985 『王子遺跡』『鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書』(34)
 1996 『北籠遺跡』『鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書』(21)
 2007 『堂園遺跡A地点』『鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査
 報告書』(108)
 2011 『下鶴遺跡』『鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書』
 (163)
 2009 『須家西遺跡』『鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告
 書』(141)
 2014 『高吉B遺跡』『鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告
 書』(180)
 2016 『田原道ノ上遺跡』1『公益財団法人鹿児島県文化振興財団埋
 蔵文化財調査センター発掘調査報告書』(5)



〔附図2〕



(附圖 3)

(附表) 住居特徴一覧表

No.	平面形	床面積 (㎡)	張出	ベッド	柱	土坑	廻廊	母音溝	建 替	土 器	他 遺 物
1	長方形	(12.30)	—	—	有	不明	有	有	不明	大甕Ⅱ	磁石
2	円形	34.19	1	無	礎状	中央	有	不明	有	大甕Ⅱ 小形大甕 山ノ口Ⅱ 黒髪(上)	骨鏃 骨斧 打斧 棒磁石 磁石
3	長方形	(17.33)	—	—	二本柱	南端	無	無	無	大甕Ⅱ 山ノ口Ⅰ下 黒髪(上)	磁石
4	長方形	11.7	1	2	二本柱	南端	有	有	無	山ノ口Ⅱ	磁石 円石 石皿
5	長方形	11.79	不明	1	二・多柱	南端	1	有	無	大甕Ⅱ 黒髪 黒髪鍬	磁石
6	円形	34.19	5	無	礎状	中央	不明	(有)	有	大甕Ⅱ	骨鏃 磁石
7	長方形(不明)	7.0	2	無	二・多柱	南端	有	有	無	山ノ口Ⅰ 蓋	棒磁石
8	長方形	13.12	1	無	二本柱	南端之基	有	不明	無	大甕Ⅱ 鉢 蓋	磁石
9	長方形	19.44	1	1	二本柱	南端	有	不明	有	山ノ口Ⅰ 蓋	骨鏃 打斧 棒磁石
10	円形	29.79	不明	無	礎状	中央(小柱)	有	不明	無	大甕Ⅱ 山ノ口Ⅰ 小形大甕 蓋	打斧 磁石
11	長方形?	(2.40)	不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明	大甕Ⅱ 山ノ口Ⅰ	
12	円形	28.36	2	無	礎状	中央 北端	有	不明	有	大甕Ⅱ 小形大甕	打鏃 骨鏃 磁石
13	方形(不明) 4号偏平?	13.25	1?	2?	二本柱	南端(小柱)	有	不明	不明	大甕Ⅱ	骨鏃石皿 黒磁石 磁石
14	長方形	14.41	不明	無	二本柱	南端	有	不明	有	大甕Ⅰ 大甕Ⅱ	黒磁石 台石
15	円形	16.97	不明	無	礎状	中央	有	有	不明	大甕Ⅱ 黒髪刀鏃	磁石
16	長方形	13.53	不明	無	二本柱	南端	有	不明	無	大甕Ⅱ 山ノ口Ⅰ 蓋	骨斧 黒磁石
17	長方形?	(11.2)	不明	不明	二本柱?	不明	有	不明	無	山ノ口Ⅰ 山ノ口Ⅱ	骨・磁石 骨斧
18	長方形 b	10.5	不明	無	二本柱	南端(小柱)	有	有	無	大甕Ⅱ	打鏃 磁石 磁石 骨斧
19	長方形	17.38	1	3	二本柱	南端(小柱)	有	無	無	山ノ口Ⅰ 大甕・大甕 山ノ口Ⅱ 薬鉢 広口器	骨鏃 磁石 黒磁石
20	長方形	7.22	不明	無	二本柱	南端(小柱)	有	無	無	山ノ口Ⅰ	
21	円形	28.36	不明	無	礎状	中央(小柱)	有	有	22号を切る	大甕Ⅱ	石皿 骨鏃 磁石 磁石 磁石
22	長方形	25.44	1	2?	二本柱	南端(小柱)	有	不明	23号を切る	蓋	棒磁石
23	円形	22.26	不明	不明	四本柱	中央 西端	有	有	無	大甕Ⅱ?	
24	方形	5.52	不明	3	二本柱	西端	無	無	無	大甕Ⅱ	
25	長方形 b	10.17	不明	2	二本柱	中央 南端	有	無	無	大甕Ⅱ	黄銅石器 磁石
26	円形	38.9	不明	無	礎状	中央(小柱)	有	有	有	大甕Ⅱ 鉢	骨鏃 石皿了 磁石 棒磁石 打斧
27	方形 c	(6.26)	不明	不明	六本柱?	西北端	無	無	無	大甕Ⅱ 磁鉢	
28	円形	21.22	不明	無	二本柱・多柱	中央	無	無	不明	大甕Ⅱ	打鏃 磁石 磁石
29	長方形(不明)	15.75	2	無	不特定	無	無	無	無	山ノ口Ⅱ	石皿
30	長方形	13.33	2	2	二本柱	無	有	無	無	山ノ口Ⅱ 大甕Ⅱ 平行洗滌文 器	磁石
31	長方形	12.18	不明	無	二本柱・壁柱	西南端(小柱)	有	無隙穴	有	大甕Ⅱ	骨鏃 磁石
32	長方形 b	5.40	不明	無	二本柱	南端(小柱)	有	無	無	山ノ口Ⅱ? 高坪	
33	円形	40.24	不明	3	礎状・多柱	中央(小柱)	有	有	有	山ノ口Ⅱ 小甕 大甕 黄銅鉢	土製勾玉 骨鏃 打斧 棒磁石磁石石皿磁石
34	長方形 c	4.5	不明	無	八本柱	無	無	無	無人為形	大甕Ⅱ	
35	長方形	7.8	1	2	二本柱	無	一部	無	有	山ノ口Ⅱ?	
36	長方形	(5.16)	不明	不明	二本柱	不明	有	不明	無	大甕Ⅱ	
37	不明	(2.52)	2?	不明	不特定	不明	不明	不明	不明	山ノ口Ⅱ	磁石
38	長方形	2.72	2	無	不特定	西端	有	無	不明	山ノ口Ⅱ 小型甕	
39	長方形	9.46	3?	1?	二本柱?	南端(小柱)?	不明	無	有	山ノ口Ⅱ	
40	長方形	14.31	不明	無	二本柱	南端	部分	有	無	山ノ口Ⅱ 黄銅鉢	磁石 藥房型石器
41	円形	15.84	不明	2	二本柱	無	有	無	有	山ノ口Ⅱ	土製勾玉 黒磁石 磁石
42	方形	8.61	不明	無	一本柱・多柱	南端	無(壁化面)	有	無	大甕Ⅱ	
43	円形	33.78	不明	無	礎状	中央(小柱)	有	無	有	大甕Ⅱ	骨鏃 円盤形土製品
44	長方形	11.2	不明	無	二本柱	南端(小柱)	有	有	無	山ノ口Ⅱ 大甕Ⅱ	打鏃 磁石 磁石
45	円形	32.15	不明	無	礎状	中央(小柱)	有	有	有	大甕Ⅱ 蓋	黄銅木村 骨鏃 磁石 石皿

※長方形 b：二本柱が壁に接している。

※方形 c：柱が壁沿いに建てられている。

※遺物の強調は、床面から出土したものを指す。

公益財団法人鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センター発掘調査報告書(27)
東九州自動車道(志布志IC～鹿屋串良JCT)建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

永吉天神段遺跡5

第2地点-3

第2分冊

発行年月 2020年2月
編集・発行 鹿児島県教育委員会
公益財団法人鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センター
〒899-4318 鹿児島県霧島市国分上野原縄文の森2番1号
TEL 0995-70-0574 FAX 0995-70-0576

印刷所 株式会社トライ社
〒892-0834 鹿児島市南林寺町12-6
TEL 099-226-0815 FAX 099-225-7933

